

広島市立大学

Hiroshima City University

ファカルティ・レポート

2018年度 - 2019年度

目 次

目次	i
I 国際学部	1
青木 信之	2
アリフ, ヌルハイザル・アザム	5
飯島 典子	7
板谷 大世	9
井手吉 成佳	11
井上 泰浩	12
今江 秀和	14
岩井 千秋	16
ト部 匡司	18
ヴェール, ウルリケ	20
太田 育子	22
大場 静枝	24
大庭 千恵子	26
柿木 伸之	28
カーソン, ルーク	31
金谷 信子	33
城多 努	35
金 栄鎬	36
倉科 一希	38
ゴーマン, マイケル	40
斎藤 祥平	42
城市 真理子	44
高久 賢也	47
高橋 広雅	49
田川 玄	51
武田 悠	53
田浪 亜央江	55
寺井 里沙	57
寺田 英子	58
原 雅樹	61
藤原 優美	63
古澤 嘉朗	64
目黒 紀夫	66
山口 えり	68
山口 光明	70
山根 史博	72
湯浅 正恵	74
横山 知幸	76
吉江 貴文	78
吉田 晴彦	79
李 在鎬	80
李 玲	82
渡辺 智恵	84

II 情報科学研究科	86
青山 正人	87
厚海 慶太	89
池田 徹志	91
石田 賢治	93
石光 俊介	96
市原 英行	99
稲木 雅人	101
井上 伸二	103
井上 智生	105
井上 博之	107
岩垣 剛	109
岩城 敏	111
岩田 一貴	114
岩根 典之	116
内田 智之	118
大田 知行	120
岡本 勝	122
岡山 友昭	124
小野 貴彦	127
小畑 博靖	129
角田 良明	133
梶山 朋子	136
神尾 武司	138
上土井 陽子	140
川端 英之	143
川本 佳代	145
釘宮 章光	147
串田 淳一	151
窪田 昌史	154
黒木 進	156
黒澤 義明	158
桑田 精一	160
香田 次郎	162
河野 英太郎	165
小寄 貴弘	168
小作 敏晴	170
児島 彰	172
小林 真	175
齋藤 徹	178
齋藤 夏雄	180
齊藤 充行	182
佐藤 康臣	187
式田 光宏	189
島 和之	195
新 浩一	197
鈴木 祐介	200
関根 光弘	202
双紙 正和	203
高井 博之	205
高野 知佐	207
鷹野 優	210
高橋 賢	212
高橋 雄三	214
高濱 徹行	217

竹澤 寿幸	220	福島 勝	269
田中 公一	222	福田 浩士	271
田中 輝雄	226	藤坂 尚登	273
田中 宏和	228	藤原 久志	275
谷川 一哉	231	藤原 真	277
田村 慶一	233	舟阪 淳一	279
辻 勝弘	235	古川 亮	281
常盤 達司	237	前田 香織	284
中田 明夫	239	増谷 佳孝	287
中野 靖久	241	松原 行宏	289
中山 仁史	243	満上 育久	291
永山 忍	245	三村 和史	295
西 正博	250	宮崎 大輔	297
長谷川 義大	252	宮原 哲浩	299
八方 直久	254	村田 佳洋	301
馬場 雅志	256	目良 和也	302
原 章	259	森 康真	304
百武 弘登	262	李 仕剛	306
廣門 正行	263	若林 真一	308
弘中 哲夫	265	脇田 航	310
樋脇 治	267		
III 芸術学部		312	
青木 伸介	313	今村 雅弘	324
荒木 亨子	314	ウォーゼン, チャールズ	326
石黒 賢一郎	312	鰐澤 達夫	328
石松 紀子	319	大塚 智嗣	329
伊東 敏光	321	笠原 浩	331

倉内 啓	333	古堅 太郎	351
古賀 くらら	335	前川 義春	353
志水 児王	337	前田 力	356
田中 圭介	339	丸橋 光生	358
釣谷 幸輝	340	南 昌伸	360
永見 文人	342	森永 昌司	362
中村 圭	344	吉田 幸弘	364
野田 睦美	346	藁谷 実	366
藤江 竜太郎	350		
IV 広島平和研究所		368	
大芝 亮	369	徐 顕芬	384
沖村 理史	371	孫 賢鎮	385
ガネサン, ナラヤナン	373	竹本 真希子	386
河上 暁弘	376	永井 均	388
吉川 元	378	河 昴珍	390
佐藤 哲夫	380	水本 和実	392
ジェイコブズ, ロバート	382		
V 附属施設		394	
松本 良徳 (国際交流推進センター)	395	三上 賢治 (社会連携センター)	398
國本 善平 (社会連携センター)	396	山咲 博昭 (企画室)	399
島筒 博章 (社会連携センター)	397		

※本ファカルティ・レポートには、2020年4月1日時点で在籍中の教員（同日付着任の教員及び同日時点で休職中の教員等は除く）を掲載しています。

国際学部

氏名	青木 信之
職位	教授
研究分野	外国語教育、教科教育学
研究キーワード	文章産出プロセス、コンピュータによる外国語教育

2018年度は、理事長・学長としての最後の年度であったが、第二期中期計画の大きな項目については概ね達成できた。また、2017年度の実績評価においても、法人評価委員会から高い評価をいただいたことから、教職員の方々のお力をお借りしながら、なんとか自分の役目は果たせたのではないかと考えている。2019年度については、理事長・学長職で過去6年間離れていた教育・研究に、2020年度から復帰するに当たってのキャッチアップ及び準備に努めた。

【教育活動】

長期研修期間であった2019年度も、「市大塾」や「CALL 英語集中」「eラーニング英語」などについては担当してきたが、2020年度は「英語科教育法」や「コミュニケーション技法論」といった専門担当科目に加え、3年生「専門演習」、4年生「卒論演習」また大学院「英語教育論」においても、有り難いことにそれぞれ指導生をもつこととなった。コロナウイルス感染対策のため、現在、これらすべてをオンラインで行う準備をしているが、単に受け身になるのではなく、新しい自分らしい授業をみつけてみたいと思っている。

【研究活動】

一種のリハビリ期間であった2019年度においては、学会発表2回、シンポジウム開催1回、論文投稿3回を行ったが、長い役職によるブランクのせいか、1本しか発刊とはならなかった。コロナウイルス感染対策のため、今年度の学会等は国内外ともに未定であるが、今年度は特に著書の執筆に注力したいと考えている。

1. 青木信之・渡辺智恵, 英語 eラーニングにおける学習行動と学習管理, 水声社, 2019, 11-25, 共著
2. 青木信之・池上真人・渡辺智恵, 並べ替え学習ソフトによる帰納的文法学習, 松山大学総合研究所『言語文化研究』, Vol. 39, No. 1, pp. 23-42, 2019
3. 研究発表, 青木信之・渡辺智恵, 社会人を対象とした英語 eラーニング講座における学習完了者と非完了者の違いを探る, 日本生涯教育学会第40回大会, 2019年11月
4. 研究発表, 青木信之・渡辺智恵・池上真人, 大学英語共通教育期間を通じた eラーニングの効果 —TOEIC と学習履歴から—, 全国英語教育学会第45回弘前研究大会, 2019年8月
5. 研究発表, 青木信之・鈴木繁夫・渡辺智恵・池上真人・松原緑・榎田一路・寺嶋健史・汪曙東・高橋英也・阪上辰也・江村健介, 共通教育期間を通じた英語力の維持・向上に向けて (その2) —長期休暇中の英語学習の実態と eラーニング活用の可能性—, FLEAT 7 外国語教育メディア学会 (LET) 第59回全国研究大会, 2019年8月

6. 研究発表, 青木信之・渡辺智恵, 社会人英語 eラーニング講座におけるコミュニティについて ―掲示板書き込みの分析から―, 日本生涯教育学会第 39 回大会, 2018 年 12 月
7. 研究発表, 青木信之・鈴木繁夫・渡辺智恵・池上真人・松原緑・榎田一路・寺嶋健史・汪曙東・高橋英也・阪上辰也・江村健介, 共通教育期間を通じた英語力の維持・向上に向けて ―長期休暇中の英語学習の実態と eラーニング活用の可能性―, 外国語教育メディア学会 (LET) 第 58 回全国研究大会, 2018 年 8 月
8. 研究発表, 青木信之・渡辺智恵・池上真人, 並べ替え学習ソフトによる帰納的文法学習 ―小学校英語学習者を対象に―, 第 18 回小学校英語教育学会 (長崎大会), 2018 年 7 月

【社会活動】

2018 年度は理事長・学長として、様々な外部組織における理事や評議員を務めたが、その間も、社会貢献として、広島市の社会人を対象とした「市大英語 eラーニング」というネットワーク授業を年 3 回行ってきた。これについては、2019 年度も実施し、多くの市民の方々に受講していただいたが、2020 年度についてはコロナウイルス感染対策のため、これまでのサテライトキャンパス受講ではなく、自宅受講を可能にする方向で検討してみたいと考えている。

2019 年 11 月-	2019 広島市立大学地域貢献事業発表会
2019 年 9 月-2019 年 12 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2019 年度第 3 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2019 年 9 月-	広島市立大学産学連携研究発表会 2019
2019 年 7 月-2019 年 9 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2019 年度第 2 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2019 年 5 月-2019 年 7 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2019 年度第 1 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2018 年 11 月-	2018 広島市立大学地域貢献事業発表会
2018 年 9 月-2018 年 12 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2018 年度第 3 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2018 年 9 月-	広島市立大学産学連携研究発表会 2018
2018 年 7 月-2018 年 9 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2018 年度第 2 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2018 年 5 月-2018 年 8 月	「市大英語 eラーニング」講座 (2018 年度第 1 期), 広島市立大学、(財) 広島市未来都市創造財団
2008 年 4 月-	広島市産業振興センター運営委員会
2005 年-	European Association for Computer-Assisted Language Learning
2004 年-	The Asia Association of Computer-Assisted Language Learning
2004 年-	The Pacific Association for Computer Assisted Language Learning

2003 年-	中国地区英語教育学会, 会計監査
1994 年-	外国語教育メディア学会
1994 年-	アメリカ応用言語学会
1988 年-	中国地区英語教育学会
1988 年-	全国英語教育学会

氏名	アリフ, ヌルハイザル・アザム
職位	准教授
研究分野	商学、経営学
研究キーワード	ダイバーシティ・マネジメント、ハラール・ビジネス、国際ビジネス、多国籍企業

2018～2019年度の全体的な業務及び研究活動の達成は満足できるレベルである。ただ改善できる点は多々ある。2019年度末のコロナウイルスの感染拡大により予定された研究の活動に影響された部分がある。

【教育活動】

多国籍企業論 1 & 2 (学部) : 動画やケーススタディーの利用することによって学生の理解がより深くなると考える。ただ理論的な内容に関しては少し改善しなければならないことがある。

英語応用演習 IV : 学生の授業への参加意欲を少し欠けているので次年度から新アプローチを取り入れる必要がある。

発展演習 II : 今後の改善はアカデミックライティングの練習を強化しなければならない。

専門演習 : 後期から卒論テーマの内容を紹介する必要があると思う。

卒論演習 : 本年度の学生 3 名のうち 2 名の学生の論文が特色のある論文として選ばれた。今後はより論文の書き方を徹底的に指導する。

2019 年度	多国籍企業論 I、多国籍企業論 I、英語応用演習 IV、国際ビジネス入門、多国籍企業論 II、International Business、多国籍企業論 II
2018 年度	多国籍企業論 I、多国籍企業論 I、英語応用演習 IV、国際ビジネス入門、多国籍企業論 II、International Business、多国籍企業論 II

【研究活動】

2019 年度の研究はコロナウイルス感染拡大の影響で 3 月の海外調査を中止することになった。

2018 年度の研究の続きとなり 2019 年度に著書に投稿できた。既存のデータを今後さらに分析する計画を立て、論文や著書などで取り上げる。

1. 広島市立大学国際学部国際ビジネス研究フォーラム, 国際ビジネスの現実と地平, 文真堂, 2020, 共著
2. ヌルハイザル アザム アリフ, 理論とケースで学ぶ国際ビジネス 第4版, 同文館, 2018, 共著
3. Ratnaria Wahid, Khaliza Saidin & Nurhaizal Azam Arif, A Clog on the Right to Quality Education through OER: A Case of Japan and Malaysia, Journal of International Studies, Vol.14, pp.151-168, 2018
4. Presentation, Nurhaizal Azam Arif, Does Diversity Pays? Lessons From Japanese Halal Industry, 国際ビジネス研究学会第25回全国大会, 2018年11月

5. 研究発表, 国際ビジネス研究学会, Business Case for diversity: 日本食レストラン祭のハラールおもてなし, 国際ビジネス研究学会第13回中四国部会, 2018年5月

【社会活動】

2018年度に続きハラール産業への支援を一段成長させ、より活発な貢献ができた。

2020年2月	広島市立大学国際学部連続公開講座, 広島市立大学国際学部
2019年12月	高校生のための広島市立大学サテライト講座, 広島市立大学
2019年1月-2019年12月	ハラール監修
2018年5月-	Food Diversity Adviser
2017年7月-	Food Diversity Japan (Halal Media Japan) Network
2006年4月-	国際ビジネス研究学会

氏名	飯島 典子
職位	准教授
研究分野	東洋史
研究キーワード	華南近代史、華僑論

共著者の間で長年の計画だった客家の概説書が出版できたことは一つの成果だった。出版社がなかなか決まらず、また出版企画の説明にも腐心したがアマゾンでも好意的な書評があったことで安堵している。

博論指導に関しては更に効率化できる余地がある。メールの他、自宅でのスカイプも活用してより詳細且つ迅速な指導が出来るようになったが、更に効率化を考えたい。

【教育活動】

博士後期院生の博論指導が去年度一番の比重を占めた。

全ての資料をネット閲覧、大学の相互貸借で閲覧出来るわけではなく、県外に出て閲覧する必要があったが、もう少し県外での資料閲覧を勧められたと考えている。コロナの影響で各図書館でもダウンロード出来る資料が増えているようだが、夏には尚且つ現物を閲覧する必要がある文献をまとめて閲覧するよう助言する。

2019年度	中国国際関係史Ⅰ・Ⅱ、中国文化論Ⅰ・Ⅱ、世界の文学（オムニバス）、国際研究入門（オムニバス）、中国語Ⅰ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ
2018年度	中国国際関係史Ⅰ・Ⅱ、中国文化論Ⅰ・Ⅱ、世界の文学（オムニバス）、中国語Ⅰ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

共著「華南鉞山を巡る人々―錫、タングステンを中心に」が国立民族博物館から出版される見通しとなった。

『客家―歴史・文化・イメージ』現代書館（2019年）の中国語訳打診が台湾の南天書局からあり、翻訳出版が決定した。

1. 飯島典子 河合洋尚 小林宏至, 客家―歴史・文化・イメージ, 現代書館, 2019, 共著
2. 華南鉞山開発を巡る日中の攻防―第二次世界大戦前夜の錫・タングステン開発を中心として, 『華南研究』第4号 2018年12月, 2018
3. 研究発表, 雲南を目指した閩粵贛人―客家を名乗らない客家語圏出身者, 国際学術シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象」, 国立民族学博物館, 2018年12月

【社会活動】

理事を務める日本国際客家文化協会を通して共著『客家―歴史・文化・イメージ』現代書館（2019年）を紹介した。

2019年11月30日	カレッジタウン大塚市民講座「関羽と関帝廟:なぜ三国志の関羽が華僑の守り神となったのか」
2006年4月-	アジア政経学会
2005年4月-	日中人文社会学会
2003年4月-	日本華僑華人学会
1999年6月-	東方学会

氏名	板谷 大世
職位	准教授
研究分野	地域研究(東南アジア)、比較政治学、シンガポール研究、政治学
研究キーワード	海峡植民地、政党制、シンガポール、人民行動党、東南アジア、政治体制、民主化、一党制、開発政治体制

最初に、教育活動、研究活動、社会活動、そして大学運営活動の四つの活動に関して概括して述べる。教育活動においては専門分野に関連する講義・演習だけでなく、初年次教育の演習も担当した。研究活動においては研究資料の収集・分析を行い、自身の研究に関する考察を深めた。社会活動に関しては、国際学部が主催する公開講座の講師を務めた。大学運営活動に関しては、デスクワークを始めとする各種の業務に従事した。

【教育活動】

学部と大学院で講義を担当した。学部教育では三つの分野の講義を主として担当した。それらは①初年次教育、②全学共通科目、そして③専門科目である。初年次教育としては「3学部合同基礎演習」、「基礎演習」、および「国際研究入門」を担当した。3学部合同基礎演習は、2018年度より本学で初めて導入された初年次生向けの演習科目である。全学共通科目としては「政治学」を担当した。専門科目では、講義形式の授業として「東南アジア研究」、「国際研究入門(オムニバス科目)」、それから「開発政治論Ⅰ・Ⅱ」を担当し、演習(ゼミ)形式の授業として「専門演習Ⅰ・Ⅱ」と「卒論演習Ⅰ・Ⅱ」、そして「卒業論文」を担当した。大学院教育においては「東南アジア政治論Ⅰ・Ⅱ」の講義を、博士課程の院生(外国人留学生)と修士課程の院生(日本人社会人)に行った。前者に対しては昼間に開講し、後者に対しては夜間開講の形で実施した。

2019年度	3学部合同基礎演習、基礎演習、政治学、東南アジア研究、国際研究入門、開発政治論Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文、東南アジア政治論Ⅰ・Ⅱ
2018年度	3学部合同基礎演習、基礎演習、政治学、東南アジア研究、国際研究入門、開発政治論Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文、東南アジア政治論Ⅱ、

【研究活動】

現在の研究テーマはシンガポールの政治体制の分析である。具体的には内政自治権獲得後、一貫して事実上の1党支配が続いているシンガポールの政治体制が、なぜこれほど安定しているのかを明らかにすることである。近年特に力を入れている研究テーマは、現在の政権政党つまり人民行動党は政権獲得した時点において、非常に強い政治基盤に立脚していたのではないかという点を明らかにすることである。

【社会活動】

社会活動としては、公益財団法人広島平和文化センター主催の国際フェスタ 2018(国際交流・協

力の日イベント)事業に国際学部が提供した講座の講師を務めた。北朝鮮と米国の歴史上初となる首脳会談の開催場所としてシンガポールが選ばれた背景を、北朝鮮、米国、そしてシンガポールの政治体制を比較することから推考し、アメリカが北朝鮮に約束したといわれる(政治)体制保証の背景を、強権的体制の下で高度な経済成長を達成したシンガポールの経験から解説した。高校生に対する学外での模擬講義には日程の都合で出掛けることはできなかったが、本学で開催されているライブキャンパスにて「政治学」の授業を高校生に公開した。また、国内ジャーナル、および海外ジャーナルの査読を担当した。

2018年11月	国際学部公開講座「朝鮮半島を知る-核問題・安全保障・国づくり-」， 広島市立大学国際学部
----------	--

氏名	井手吉 成佳
職位	准教授
研究分野	会計学
研究キーワード	原価計算

学外の周辺地域において活動する機会を多く得ることができた。その結果として、理論だけでなく実践についても一定の成果があったものとする。これからも理論と実践の融合を目指していきたい。

【教育活動】

地域課題演習のような講義において周辺地域で活動する学生の支援を行ったことに加えて、演習においても実店舗での調査を行うなど、地域内での課題研究に取り組む学生の支援を行った。

2019年度	会計学Ⅱ、会計学Ⅰ、国際会計論、地域課題演習
2018年度	会計学Ⅱ、会計学Ⅰ、国際会計論、地域課題演習

【研究活動】

周辺地域における社会的企業のマネジメントに関する研究を行った。当該研究プロジェクトでは、メルコ学術振興財団から研究助成を受けて生産ロスに着目したバリューチェーンを構築する企業の調査・研究を行った。

1. 井手吉 成佳；八島 雄士；金 宰煜；細野 賢治；佐藤 幹（2020.3）「地域産物を素材とする多様な製品の開発が食品ロス低減に及ぼす影響：（株）島ごころのケーススタディ」『マネジメント研究』

【社会活動】

教育活動や研究活動において、周辺地域における課題に取り組む機会が多かったことから、その際に得られた知見や気づきを協力関係者に公開するなど、教育・研究の成果を社会に提供した。

2019年度	広島城北高等学校での模擬講義
2019年度	ピースナイター2019
2018年度	ピースキャンドル2018

氏名	井上 泰浩
職位	教授
研究分野	マスメディア学、情報操作と原爆理解、ジャーナリズム、国際関係学（メディアと外交、パブリック・ディプロマシー）、情報通信 ソーシャルメディア
研究キーワード	マスメディア、メディアの影響、情報通信、インターネット、パブリック・ディプロマシー、国際コミュニケーション、メディアと国際関係・外交、グローバル・メディア、ジャーナリズム、社会調査、ソーシャルメディア、情報操作 プロパガンダ、原爆神話と情報操作、アメリカ大統領演説

原爆は世界でどのように理解されているかについて研究を続けている。2020年は原爆75周年であり、西洋諸国では25の倍数が大きな節目となる。そのため、これまでの原爆国際報道研究を基にしてさらにすすめる。

【教育活動】

テレビや新聞に代表されるマスメディアであるが、SNSの人気と影響力が増すにつれ、特に若い世代にとってはSNSの方がはるかに利用され影響力も大きい。専門科目の授業ではこうした新しい流れを取り入れている。また、2014年から始めたハワイ大学での短期留学はさらに充実した内容になるよう取り組んでいる

2018-2019年度	マスメディア論、メディアリテラシー、ハワイ大学短期語学留学
-------------	-------------------------------

【研究活動】

アメリカでは原爆投下が正当化どころか賞賛・神格化されている背景と情報操作について『アメリカの原爆神話と情報操作 「広島」を歪めたNYタイムズ記者とハーヴァード学長』（2018年、朝日新聞出版）を出版した。

1. 井上泰浩, アメリカの原爆神話と情報操作 「広島」を歪めたNYタイムズ記者とハーヴァード学長, 朝日新聞出版, 2018/6, 単著
2. 井上泰浩, 世界最大・最悪の嘘「原爆神話」 大学教授、新聞記者の二人の民間人が生み出したものだった, AERA dot. 2018/8/6, 単著
3. 井上泰浩, 「今を読む」 ローマ教皇の広島演説 核兵器断罪 世界に届いたか, 中国新聞, pp.6, 2019/12/21

【社会活動】

自分の研究成果を、研究論文や著作だけではなく、公開講座などで広く伝えた。

2020年3月10日	Pomona College (California, the US) lecture via the Internet. "Infodemic and the understandings of Hiroshima"
------------	---

2019年2月19日	Pomona College (California, the US) lecture via the Internet. “More than a Matter of Perspective: How the US, Japan, and the World Understand Hiroshima and the Atomic Bomb”
2019年2月16日	平和のためのヒロシマ通訳者グループ (HIP) 講演会 (広島国際会議場) 「アメリカの原爆神話」
2019年1月10日	Luther College (Iowa, the US) study tour lecture (広島国際会議場) “International Perspectives of Atomic Bombing in Hiroshima: Savior or Massacre?”
2018年12月15日	ヒロシマ・ピースフォーラム (広島平和資料館) 「原爆投下をめぐる日米の報道と意識の違い」
2018年8月6日	TBS ラジオ 荻上チキ・Session-22 「原爆投下を正当化～アメリカの原爆神話はいかに作られ、広められたのか？」
2015年6月-現在	財団法人 情報通信学会 評議員

氏名	今江 秀和
職位	准教授
研究分野	臨床心理学
研究キーワード	学生相談、精神分析的な心理療法

学生相談は大学の教育活動の1つです。悩みや問題を抱えた学生への対応が中心となりますが、相談室を訪れない学生に対する心の成長、発達の援助も大きな役割の1つです。そうした考えに基づき、授業でも、学生の成長、発達に役立つような内容を取りあげるよう心がけています。また、学生相談に、精神分析をどのように生かしていくかを研究のテーマの1つとしています。精神分析は人間理解の方法です。必ずしも精神分析的な技法が適さない学生であっても、学生を理解するときには精神分析的な視点が重要だと考えています。学生相談という教育活動を通して、学生の心の成長、発達の援助ができればと考えています。

【教育活動】

「心の健康・身体の健康」では、心と身体の健康に関する知識を身につけ、これからの長い人生を健康に生きていくために自己管理できる人材を育てることを目標にしています。「心理学」では、心理学の基礎的な内容について、身近な例をあげながら、講義しています。「教育相談論」「教育心理学」は教職科目です。教師になったときに、生徒に寄り添うこと、自分の気持ちにオープンであることの必要性や、発達など生徒を理解する際に必要となる知識について伝えていければと考えています。すべての受講生が教師になるわけではないと思いますが、授業で取りあげる事柄は、日常生活においても役に立つ部分があるのではないかと思います。

2019年度	教育相談論、心の健康・身体の健康、心理学、教育相談論、教育心理学
2018年度	教育相談論、心の健康・身体の健康、心理学、教育相談論、教育心理学

【研究活動】

研究活動では、学生相談の意義や機能、大学組織を視野に入れた学生相談のあり方といった大きなテーマ、さまざまな問題を抱える学生への対応といった個別的なテーマについて、学会発表や論文等の執筆を行ってきました。現在の関心は加害者となった学生への対応についてです。多くの研究において、精神分析的な観点を取り入れて考察しています。

1. 川畑直人監修・京都精神分析心理療法研究所編，対人関係精神分析の心理臨床 わが国における訓練と実践の軌跡，誠信書房，2019，共編者
2. 今江秀和・西正博・山咲博昭・長山哲也，ピア・サポート活動における学生の成長支援-広島市立大学「いちピア」の立ち上げ期を事例に-，第26回大学教育研究フォーラム発表論文集，pp.148-，2020
3. 横井公一、今江秀和，第8回大会 全体会「関係性をめぐって」討論記録，精神分析的な心理療法フォーラム，Vol.7，pp.47-57，2019

4. 今江秀和、横井公一，第8回大会 全体会「関係性をめぐって」企画趣旨，精神分析的な心理療法フォーラム，Vol. 7，pp. 2-3，2019
5. 研究発表，今江秀和・西正博・山咲博昭・長山哲也，ピア・サポート活動における学生の成長支援-広島市立大学「いちピア」の立ち上げ期を事例に-，大学教育研究フォーラム，2020年3月
6. その他，藤山直樹、妙木浩之、岡野憲一郎、富樫公一、吾妻壮、横井公一、今江秀和，関係性をめぐって，日本精神分析的な心理療法フォーラム第8回大会，2019年7月
7. その他，武藤誠、宮田智基、中西和紀、広瀬隆、今江秀和、松本寿弥，精神分析的な心理療法入門-さまざまな学派の共通点と相違点-，日本精神分析的な心理療法フォーラム第8回大会，2019年7月
8. パネリスト，鈴木健一、伊藤未青、野原一徳、今江秀和、松本寿弥、山岡亜里紗，学生生活サイクルと発達-関係論的視点から-，日本精神分析的な心理療法フォーラム第8回大会，2019年7月

【社会活動】

2019年度より日本学生相談学会の理事を務めています。2016年から中国四国地区幹事を務める全国学生相談研究会議では、2018年に第51回全国学生相談研究会議の実行委員長として、企画・運営を行いました。2012年から理事を務める日本精神分析的な心理療法フォーラムでは、2018年度にはワークショップ委員長を務め、2019年度には第8回大会大会長として年次大会の企画・運営を行いました。

2019年11月	第57回全国学生相談研修会 分科会講師
2019年7月	日本精神分析的な心理療法フォーラム，日本精神分析的な心理療法フォーラム第8回大会大会長
2019年5月-	日本学生相談学会，理事
2016年4月-	全国学生相談研究会議，中国四国地区幹事
2013年9月-	日本精神分析学会
2012年4月-	日本精神分析的な心理療法フォーラム
2012年4月-	日本精神分析的な心理療法フォーラム，理事
2003年4月-	日本学生相談学会
2001年4月-	日本心理臨床学会

氏名	岩井 千秋
職位	教授
研究分野	応用言語学
研究キーワード	コミュニケーション方略、パフォーマンス、伝達能力、語用論

1994年の本学開学からのメンバーで、二十数年間にわたり、本学で教育、研究に従事して参りました。専門は応用言語学、とくに外国語の学習や使用をテーマに研究をしてきました。学内運営では、国際学部の学部長・研究科長、副学長・理事などを務めてきました。

【教育活動】

学部、大学院の教育に従事し、学部では約100名の学生に卒論指導を行いました。大学院では博士前期と博士後期で主指導として7か国の学生を指導し、十数名が修士号を、7名が博士号を取得しました。

2018年度	言語コミュニケーション研究入門A、応用言語論Ⅰ・Ⅱ、英文構成法Ⅰ・Ⅱ、3年生専門演習Ⅰ・Ⅱ（応用言語論）、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、応用言語論Ⅰ・Ⅱ（大学院博士前期課程）、特別講義A,B、特別演習Ⅰ・Ⅱ、国際社会研究演習Ⅲ・Ⅳ（応用言語論）（大学院博士後期課程）
2019年度	

【研究活動】

外国語学習者が学習言語を使う際に用いる様々な方略（コミュニケーション方略）を主テーマに研究してきました。また最近は、言語教育政策の問題にも関心を寄せつつあり、英語で英語を教えることを求める文科省の指針について、研究を進めています。

1. 岩井千秋（編著）（2020）. 第11回 Oral Presentation and Performance (OPP)研究会活動成果報告書. 大学英語教育学会中国・四国支部, 全57頁.
2. 岩井千秋（2019）. 『英語の授業は英語で』のその後—乏しい変化に潜在する問題を問う— 広島市立大学国際学部編著（叢書）『複数の「感覚・言語・文化」のインターフェース』水声社, pp. 27-43.
3. 岩井千秋（2019）. 「高等学校指導要領に謳われた『英語の授業は英語で』の結果と影響, そして課題」『大学英語教育学会関西支部紀要』, No. 21, pp. 1-22.
4. 岩井千秋（編著）（2019）. 第10回 Oral Presentation and Performance (OPP)研究会活動成果報告書. 大学英語教育学会中国・四国支部, 全49頁.
5. Iwai, C. (2019). “Failure of the ‘Teaching English in English (TEE)’ Policy and Requisites for its Success.” The 28th Malaysian English Language Teaching Association (MELTA) International Conference, 招待講演.
6. Iwai, C. (2019). “English Education Reforms: Top-down or Bottom-up?” 4th International Conference on Language and Education, 招待講演.

7. 岩井千秋 (2018). 「Oral Presentation & Performance (OPP) の取組みと教育効果—英語のスピーキング能力を伸ばすための指導の方向性—」, *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, Vol. Vol. 3, pp.61-74.
8. 岩井千秋, 他. (2018). 「Oral Presentation & Performance (OPP)のイベントを通じた協働学習活動とその教育効果の理論化」『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』, 13号, 1-18.
9. 岩井千秋 (編著) (2018). 第9回 Oral Presentation and Performance (OPP)研究会活動成果報告書. 大学英語教育学会中国・四国支部, 全93頁.
10. Iwai, C. 他 (2018). “Assessing the Impact of the Teaching English in English (TEE) Policy on University English Learners.” 57th JACET Annual International Convention.
11. 岩井千秋. (2018). 「高等学校指導要領に謳われた『英語の授業は英語で (TEE policy)』の結果と影響, そして疑問と課題」大学英語教育学会関西支部, 招待講演.
12. Iwai, C. (2018). A Qualitative Examination of Learners’ Preference for English Classes Taught in English (TEE).” 16th AsiaTEFL.

【社会活動】

学会関係では、大学英語教育学会理事、同学会の中国・四国支部長を務めています。また同学会の紀要を含め、5つの紀要等の論文審査を担当しています。また、英語のスピーチコンテスト審査員など、自分の専門関係を中心に協力しています。

2019年6月-現在に至る	大学英語教育学会 (JACET) 第60回記念大会準備特別委員会委員長
2018年12月-現在に至る	JAAL in JACET Proceedings 論文査読担当
2018年4月-現在に至る	大学英語教育学会 (JACET) 褒章・学術出版物選考副委員長
2018年4月-現在に至る	大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部紀要編集委員長
2017年10月-現在に至る	Association of Language Teachers in Southeast Asia, 紀要論文審査
2017年10月-現在に至る	中国地区英語教育学会, 紀要論文審委員
2017年6月-現在に至る	大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部長
2016年11月-2019年3月	大学英語教育学会 (JACET) 実態調査委員会, 実態調査委員
2015年6月-現在に至る	大学英語教育学会 (JACET) 理事
2012年9月-現在に至る	西日本言語学会, 副運営委員長
2000年4月-現在に至る	全国語学教育学会 (JALT), The Language Teacher 論文審査委員
1986年4月-現在に至る	日本英語検定協会 (英検) 面接委員
2019年10月	広島工業大学スピーチコンテスト・デネブ杯審査委員
2008年9月-現在に至る	高円宮杯全国中学校英語弁論大会広島県大会審査員

氏名	卜部 匡司
職位	教授
研究分野	比較国際教育学、持続可能な開発のための教育
研究キーワード	ドイツ、教育評価、グローバル学習

教育活動では、教職課程（のうち教職に関する）科目を担当しているため、国際学部・情報科学部・芸術学部の学生たちに対して、授業だけでなく教育実習や教員免許取得のための指導助言を行っています。研究活動では、ドイツの教育評価制度研究と持続可能な開発のための教育（ESD）を中心に、ドイツをはじめヨーロッパや環太平洋地域の研究者たちとの国際共同研究を実施し、その成果を国内外の学会や学術雑誌などで発表しています。社会活動では、ユネスコスクールに加盟する学校を中心に教員や生徒を対象とした講演などに出向き、国際学部が加盟する「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）」の担当者として学校でのESDを支援しています。

【教育活動】

教育活動では、教職課程の全学共通科目をはじめ、比較国際教育学に関連する科目を担当しています。教職課程では、通常の授業のみならず、教員採用試験の対策や模擬授業の準備など、さまざまな学生指導も行い、広島市教育委員会主催の「大学生による学校支援活動」参加大学の担当者による協議会に出席するなど、教育委員会や市内各学校とも連携しながら学生を指導しています。さらに、ドイツ南部のヴァインガルテン教育大学との共同授業を2017年度から実施し、ドイツと本学の学生がグループを編成して、日独で同時刻（日本では毎週火曜5限／ドイツでは毎週火曜1限）にオンライン上で講義（ウェビナー）を実施するという試みにも取り組んでいます。

2019年度	教師論、教育実習Ⅰ・Ⅱ、学校インターンシップ
2018年度	教師論、特別活動論、教育実習Ⅰ・Ⅱ、教職特講、学校インターンシップ、教職実践演習、国際教育論、ドイツ社会論、専門演習Ⅰ・Ⅱ（国際教育論）、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文、比較国際教育学、ESD（持続可能な開発のための教育）論、国際社会研究演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（比較国際教育学）

【研究活動】

研究活動では、科研費採択テーマ「二分岐型から三分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容」をはじめ、ドイツの研究者たちとの共同研究に取り組んでいます。また、2019年度は、学外長期研修としてバンベルク大学（ドイツ）客員教授に就任し、「Society 5.0」時代におけるESDのあり方をテーマに、ESDをめぐる指導法についての国際共同研究に取り組みました。その一環として、オウル大学（フィンランド）およびプロテスタント人文社会科学大学（ルワンダ）での学術研究交流にも参加し、国際的な研究ネットワークの構築に向けた研究討議を実施しました。

1. 佐々木司、熊井将太, やさしく学ぶ教育原理, ミネルヴァ書房, 2018, 分担執筆
2. 卜部匡司, 総合的な学習の時間における探究活動に関する一考察, 教育学研究紀要 (CD-ROM版), Vol.64, pp.322-327, 2018
3. Urabe, Masashi, Kleines Auslandsstudium zu Hause: Chancen und Grenzen des digitalen Lernens am Fall des japanisch-deutschen Online-Seminars "Global Medial", Zeitschrift für internationale Bildungsforschung und Entwicklungspädagogik (ZEP), Vol. 41, No. 3, pp.27-30, 2018
4. 研究発表, 卜部匡司, 総合的な学習の時間における探究活動に関する一考察, 中国四国教育学会 (第70回大会), 2018年11月
5. 研究発表, 卜部匡司, キャリア教育におけるESDの可能性, 日本ESD学会 (第1回大会), 2018年8月
6. Presentation, Zeinz, Horst/Urabe, Masashi, Teachers' implicit theories, their use of certain methods in lessons and their job satisfaction. a comparison between a western country (Germany) and an eastern country (Japan), World Educational Research Association 2018 World Congress in Cape Town, 2018年8月
7. 研究発表, 卜部匡司, 日独学生の協働によるグローバル学習の試み, 日本比較教育学会 (第54回大会), 2018年6月
8. Presentation, Urabe, Masashi, Psychological and Pedagogical Aspects in Ongoing Digital Transformation, International Conference organized by European Japan Experts Association (EJEA) and Institute for Security and Development Policy (ISDP) on Integration and Disintegration in the Japanese Vision of Society 5.0: A Model for an Open Society in Europe?, 2018年4月

【社会活動】

社会活動では、広島市内の小学校で学校協力者会議委員を10年以上も務めており、学識経験者として学校への指導助言を行っています。2017年度から本学国際学部が「ユネスコスクール大学間支援ネットワーク (ASPUnivNet)」および「広島大学ユネスココンソーシアム (2016-2018年度)」に加盟し、2019年度からもその後継事業である「広島SDGsコンソーシアム」に加盟しています。それと並行して、広島市内の学校のユネスコスクールへの加盟申請支援 (例：広島市立戸山小・中学校、広島市立広島商業高等学校など) にも努めてきました。さらに、広島県立安古市高等学校に本学学生を派遣し、「総合的な学習の時間」の取り組みを支援しました。

2018年-2019年	広島県立安古市高等学校特別非常勤講師 (パネルディスカッション講評)
2007年-	広島市立本川小学校学校協力者会議委員
2005年-	広島市立上安小学校学校協力者会議委員

氏名	ヴェール, ウルリケ
職位	教授
研究分野	近現代日本のジェンダー史・女性史
研究キーワード	ジェンダー史、近代史、国境・国家を横断する歴史、フェミニズム、国家とジェンダー、植民地主義、「慰安婦」問題、ナショナリズム、反原発運動、平和運動、ドイツ、日本

2018～2019年度の2年間は、引き続き大学運営と教育に多くの時間とエネルギーを注いだ。国際交流の推進と教育改革の交差点にある「日本語以外の言語で教える科目」の新設、また、それらを実際に留学生の増加に連携させるのにかなりの労力を費やした。もう一つ新たに国際交流関係で遂行したプロジェクトは、マレーシアへの学生短期派遣プログラムの新設である。自分が担当する専門科目と語学科目の再編・改革も手間がかかったが、一層楽しく勉強している学生の姿を見て報いられた。公開講座や市民との連携プロジェクトによっても、研究者、教育者としての自分の存在意義を確認できたが、実際に研究調査をし、論文を執筆できる時間は例年よりも減少してしまい、この状況の改善を願うばかりである。

【教育活動】

教育においては、ジェンダーとセクシュアリティに関する学生の人権意識の育成、女らしさ・男らしさ、同性愛・異性愛が文化的・社会的につくられたカテゴリーであり、それらが歴史を通じて変わり、また再生産されるものであるという認識を学生に持ってもらいたいと思っている。また、物事を「国境横断的」に考え、「国民」や「民族」の自然性を疑う能力、更に実際に様々な背景の人たちとコミュニケーションが取れる能力を学生が持てる様に試みている。そのための取り組みの一例として、国際学部における「日本語以外の言語で教えられる科目」を増加させ、それらのシラバスをまとめた冊子を作成することで、欧米の協定校からの留学生が増えて、また留学生と正規生と一緒に学ぶことへの機会を広げることに成功した。私自身の新設授業では、日本を含めて4カ国の出身者が日本社会とジェンダーについて英語で学び、活発に議論することができた。

2019年度	ジェンダーとセクシュアリティ、多文化共生入門、Japanese Studies i、Japanese Studies ii、ジェンダー論 I、ジェンダー論 II、ドイツ語 III、ドイツ語 IV、専門演習 I、専門演習 II、卒論演習 I、卒論演習 II、卒業論文
2018年度	ジェンダーとセクシュアリティ、多文化共生入門、Modern Japanese Studies、ジェンダー論 I、ジェンダー論 II、ドイツ語 III、ドイツ語 IV、専門演習 I、専門演習 II、卒論演習 I、卒論演習 II、卒業論文、特別演習 II、特別講義 B

【研究活動】

引き続き、戦後・現代日本（特に1970年代後半～1980年代）におけるフェミニズムと女性の社会運動を研究対象としながら、10年ほど前から集中的に取り組んでいた、幕末・明治期の頃の日独関係をジェンダーとコロニアリズムの視点から再考する研究を振り返り、発展させた。大学運営と教育関連の仕事に追われ、前者を十分に進め、発表するには至らなかったが、後者の研究は一つの論文にまとめ、ドイツの査読付き学術雑誌に掲載することができた。具体的には、1873年に東京で創立されたドイツ東亜博物学民俗学協会初期の組織史と学問的言説を以上の観点により分析し、ジェンダーとエスニシティが複合的に作用したとはいえ、組織や研究動向において「西洋・東洋」の上下よりも、人種を超えた強力なホモソーシャルとそれに伴う「男・女」の上下が決定的な意味をもったことを論じた。

1. Ulrike Wöhr, Der deutsche "Mann der Wissenschaft" in der "Sackgasse unseres Planeten": Die Anfänge der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) als Konstruktionsprozess normativer Männlichkeit, *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (NOAG) 191-195, pp.37-67, 2020
2. Ulrike Wöhr, [Review] Japanese Feminist Debates: A Century of Contention on Sex, Love, and Labor. By Ayako Kano. University Hawai'i Press, 2016. 332 pages, *Monumenta Nipponica* 73(2), pp.307-314, 2018

【社会活動】

研究者として得てきた知識や具体的な研究成果を社会に還元するために、報告期間中に2つの公開講座を行った。2018年度の県大・市大連携講座では「言語とジェンダーの多様な世界」について、2019年度の国際学部公開講座では「近代国民国家『日本』の形成と近代的なジェンダー・システムの構築との関係」について公開講義した。また、2018年度の授業の一環で行い、市民にも公開した性暴力・人身売買についての講演会兼映画上映会を主催し、多くの人が参加して下さった。2019年は、研究者、学生、一般市民からなるグループで、2015年の「第2回ジェンダー・フォーラム in 広島」のフォローアップとなる「第2回ジェンダー・フォーラム in 広島」を企画し始めた。広島市の多文化共生促進の取り組みへの貢献として、2011年から委員、2015年から座長を務めている広島市多文化共生市民会議にも引き続き携わった。

2020年3月-	広島市多文化共生市民会議 座長
2019年11月	公開講座 「世界の中の『日本/Japan』」
2018年10月	県大・市大公開講座 「言語を通じて世界を知る」
2018年10月	公開イベント アルバレ＝ステイリ氏監督作品上映会・講演会
2017年9月-2019年9月	広島市多文化共生市民会議 座長

氏名	太田 育子
職位	教授
研究分野	国際法、国際人権法
研究キーワード	国際人権法、主権機能の変質、ケア労働、児童の権利条約、防災教育、グリーフケア、自己決定権、レジリエンス、子どもの権利

人道性とは生老病死の受容であろう。人道性を欠く政治目的の実現は、私人の間であれ国家の間であれ紛争の連鎖を伴う。その見地から、老病死を含む人権（尊厳）の在り方を、手術入院・在宅介護など日常の実践をも踏まえ、総体的に考察している。

【教育活動】

国内外の時事問題を対象とする分野のため、平均して講義および英語応用演習には1コマあたり（毎回の資料作成を含み）4時間、基礎・発展・専門演習では1コマあたり1時間、卒論演習では1名あたり（添削や文献選択を含み）1時間を準備に費やしている。脳力・能力・関心の幅のある受講生全員のレベルアップをいかに図るかが、クラス構成が変わる毎期の課題であり、欧米の講義法や最新の心理学・脳科学の知見に目配りし、毎回の受講票感想を精査しつつ、試行錯誤を繰り返している。

提供する講義・演習に共通する目的は、受講生が、学修効率を上げる基盤となるセルフ・エスティーム（自尊感情）を向上し、それにより発想力と柔軟性を高め、講義等終了後も自律的に学修を続けていけることである。手法として、「自己決定モード」な行動様式の動画などを視聴・理解しながら、抽象的な知識の具体化により知識を定着させ、他方で、1コマ内でランダムな題材に触れることにより、抽象的な知識（共通する法則）を自ら発見し、複合的な側面を有する現実問題の構成要素を分類しつつ（論点はなにか？）、保有する知識を適用し（どれを使うか？）、応用力を培う。

2019年度	【前期】国際法 I、国際人権法、英語応用演習 IV、卒業論文指導 I、専門演習 I、院/博士前期・国際法 I、院/博士前期・学術研究の進め方（兼任）、【後期】国際法 II、日本社会と人権、基礎演習、発展演習 II、専門演習 II、卒業論文指導 II、院/博士前期・国際法 II
2018年度	【前期】国際法 I、国際人権法 I、英語応用演習 IV、卒業論文指導 I、専門演習 I、院/博士前期・国際法 I、Hiroshima & Peace（兼任）、【後期】国際法 II、国際人権法 II、基礎演習、発展演習 II、専門演習 II、卒業論文指導 II、院/博士前期・国際法 II

【研究活動】

2018年9月に4度目の入院手術を行ったのち2019年5月に帯状疱疹を発症し顔面疼痛が半年続き、教務・その他学内業務・社会貢献業務を優先した結果、研究活動のペースダウンとなった。この体験をも糧として、ひきつづき老病死を含む人権（尊厳）の在り方を総体的に考察している。

その際、ナラティブという手法により、個々人の存在の全体的な提示と非批判的な受容が可能

になれば、権利行使の基盤にある尊厳の涵養に役立つとの仮説に立つ。ケアに基づくキュア（治療）、すなわち生老病死の受容がナラティブ手法によってもたらされ得るならば、自他の尊厳回復に基づく社会正義の具現化も、ナラティブ手法により可能になるのではないかとの展望を持ち、19年1月と5月には医療従事者対象のACP（アドバンス・ケア・プランニング）とELC（エンドオブライフ・ケア）の実習講座に参加し、19年2-3月に広島市文化財団主催事業での市民参加者との共同プレゼン作成にも取り組み、11月には広島市役所でのポスター発表を行うなど、医療従事者と一般市民（非医療従事者）双方との意見交換も行いつつ、実践的に研究を進めている。

1. 研究発表，太田育子，いまから始める！超高齢化社会で「佳く死ぬ」ための老病死の受容，広島市立大学の地域貢献事業発表会，2019年11月
2. 研究発表，太田育子，若いうちから準備しないとたぶん上手に死ねない件、その後いかがですか？——老病死の受容への展望と課題——，第43回日本死の臨床研究会年次大会（セッション 死の臨床を支える文化），2019年11月

【社会活動】

2018-2019年度の社会活動は、以下のとおりである。

2019年7月	高校出前講座，広島県立安芸府中高等学校
2018年6月	高校出前講座，広島県廿日市西高等学校
2018年2月-	広島県，広島県都市計画審議会委員
2014年12月-	広島県，広島県私立学校審議会委員
2013年4月-2018年11月	広島県，広島県情報公開・個人情報保護審査会委員
2009年11月-	国際人権法学会
1986年5月-	国際法学会
1986年5月-	世界法学会

氏名	大場 静枝
職位	准教授
研究分野	ヨーロッパ文学
研究キーワード	フランス文学、ブルターニュ文学、地域文化論、ブルターニュ地方、言語政策、少数言語文化

2018年度及び2019年度は、研究活動、教育活動、社会活動のいずれにおいても一定の成果を収めることができた。教育活動では、継続してオルレアン大学短期語学留学の実施・引率、フランスの協定大学からの教育実習生の受入を行った。また本学学生のフランス語力の向上のため、仏検や DELF/DALF 受験対策補習授業を行った。研究活動では、2019年度に新規採択された科研費研究を中心に行った。国際交流の業務についても、継続的に提携校を訪問し提携校との関係の強化に貢献した。その結果、オルレアン大学から本学への交換留学生の数を増加させた。またレンヌ第2大学に対しては、2019年度は学部国際交流委員長と提携校を訪問し、インターンシップ付きの大学院生の受入の要請を受け、その検討を開始した。また、JASSO の海外留学支援制度（協定派遣）に申請し、複数のプログラムが採択された。社会活動としては、特に学会活動に力を入れた。

【教育活動】

今期も引き続きフランス語教育に力を入れた。継続してオルレアン大学短期語学留学の実施・引率を行った。同短期語学留学では、オルレアン大学の学生やオルレアン市民との交流を活発化させ、オルレアン大学からの本学への交換学生の増加につなげた。フランス人教育実習生の受入については、2018年度はレンヌ第2大学から、2019年度はオルレアン大学から、それぞれ1名ずつ大学院修士課程の2年生を受け入れ、日本人学生に初級フランス語を教えるという観点から授業計画、教材や課題の作成、日本人学習者にとっての課題（発音と記述）、和製教材の特徴等について指導を行った。検定試験の受験対策については、年に2回、5週間にわたり仏検や DELF/DALF の受験対策補習授業を行い、補習授業出席者の9割を合格に導いた。また、フランスへの派遣学生を増やすため、JASSO の海外留学支援制度（協定派遣）に応募し、オルレアン大学短期語学留学プログラム及び長期派遣プログラムに採択された。

2019年度	フランス文学・文化論 I、フランスの文学と文化、フランス語 III、Études de la société française、フランス語 I (国際)、卒論演習 I、専門演習 I、フランス語 I (情報・芸術)、フランス文学・文化論 II、フランス語 IV、フランス文化論、卒論演習 II、専門演習 II、フランス語 IV、世界の文学 (オムニバス)、言語コミュニケーション研究入門 A (オムニバス)
2018年度	フランス文学・文化論 I、フランスの文学と文化、フランス語 III、Études de la société française、フランス語 I (国際)、卒論演習 I、専門演習 I、フランス語 I (情報・芸術)、フランス文学・文化論 II、フランス語 IV、フランス文化論、卒論演習 II、専門演習 II、フランス語 IV

【研究活動】

2018年度はこの1年間を新たな研究活動の準備期間として位置づけ、フランスでのフィールドワークや科研費の申請等を行った。2019年度は新たに採択された科研費の研究課題「フランス・ブルターニュ地方における近現代の文芸運動とナショナリズム」(研究代表、基盤研究(C))の研究を開始した。具体的には、民衆の詩歌と民族ナショナリズムの関係を考察したうえで、民謡集『バルザス=ブレイス』がブルターニュ地方の民族運動に与えた影響について研究した。また、2018年度は「少数言語による文学」に関する国際シンポジウム(レンヌ第2大学主催)に参加し、ブルターニュ文学研究者たちと研究交流を行う一方、国内のケルト学研究者とともに『ケルト歴史文化辞典』(近刊予定)の翻訳作業に従事した。

1. 『日本18世紀学会年報』(「アントワヌ・リルティ『セレブの誕生—「著名人」の出現と近代社会』の書評」)、日本18世紀学会、2019、その他
2. 『複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス—境界面での変化と創造に関する新しい見方』(「フランス・ブルターニュ地方の言語政策」)、水声社、2019、pp. 61-78、共著
3. 『東川町 椅子 コレクション3』(「マリー・アントワネットの椅子」)、かまくら春秋社、2018、分担執筆

【社会活動】

今期は学会活動を中心に社会活動を行った。2017年度より日本フランス語フランス文学会において学会誌『フランス語フランス文学研究』の編集委員を務めており、年2回の研究大会において研究発表の聴取と評価、提出論文の査読等の業務を担当した。さらに、2018年度からは同学会が刊行しているフランス語雑誌 *Littera* の編集委員を兼務し、フランス語論文の校閲に従事している。加えて2019年度からは、同学会の18世紀部会の世話人を務めている。その一方で、2019年4月に同学会の中・四国支部会の大会実行委員兼支部機関誌編集委員に就任し、同年12月に香川大学での支部大会の開催に尽力し、総会の議長も務めた。フランスのレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ学会では、2019年度より機関誌 *Études rétiviennes* の査読委員を務めている。

2019年4月-	日本フランス語フランス文学会 中・四国支部会、大会実行委員兼支部機関誌編集委員
2019年1月-	Société Réatif de la Bretonne, Comité de lecture
2018年10月-	県立広島大学×広島市立大学 連携公開講座「言語を通じて世界を知る」
2018年4月-	日本フランス語フランス文学会、18世紀部会世話人
2017年4月-	日本フランス語フランス文学会、編集委員会
2014年8月-	日本ケルト学会
2005年5月-	日本フランス語フランス文学会
2003年6月-	日本18世紀学会
2003年6月-	International Society for Eighteenth-Century Studies
2002年7月-	Société Réatif de la Bretonne

氏名	大庭 千恵子
職位	教授
研究分野	国際関係史、東欧地域研究
研究キーワード	国民国家と多民族社会、EU 加盟候補国、旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国（北マケドニア共和国）、旧ユーゴスラヴィア紛争、マケドニア問題

2018～19年度は、国際学部長・国際学研究科長として、教育課程改革および入試改革を統括した。

国際学部の新たなコンセプトとしては、多面的思考力（人文社会分野の体系的学修）、言語運用能力、地域・世界で行動する力の3つを連動させることを掲げた。これに基づき、2019年度入学生より、従来の5つのプログラムを核とした専門科目に加え、専門基礎科目やプログラム共通科目を整備し、新たにアクティブ科目（国際交流系科目、インターンシップ系科目、演習など）を設定し、学生一人ひとりが「CARPability」（Creativity, Action with collaborative skills, Reflectiveness, Planning ability for the next step）を培うカリキュラムとした。

大学院改革は、従来の研究者養成にくわえ、文系実務者養成およびスキルアップに対応できることを基本方針として、カリキュラムや入試制度を全面的に見直した。

これらの改革を2020～2021年度の新学部長・研究科長体制へ引き継ぎ、さらに発展させていくための基盤づくりをした2年間であった。

【教育活動】

2018～19年度は、学部・大学院の専門科目において、激動するヨーロッパ情勢に着目しつつ講義を展開した。具体的には英国のEU離脱交渉のゆくえや、国境を超える人々の動きと連動した諸課題である。

2018年度の各演習では、移民による欧州各国の政策変化と、地域を基礎単位とした社会経済イノベーションの関連について、2019年度の各演習では難民問題と多文化教育の国際比較を通じて、欧州各国の現状と課題について議論した。

大学院講義においては、ヨーロッパ情勢およびEUをめぐる現状のほか、受講者の修士論文テーマと連動させ、2018年度は北欧諸国における女性の社会参画について、2019年度は英国のEU離脱交渉と福祉政策について、講義を展開した。

2019年度	専門演習 I、ヨーロッパ政治論、卒論演習 I、ヨーロッパ国際関係史 I、ヨーロッパ国際関係史 II、専門演習 II、卒論演習 II
2018年度	専門演習 I、卒論演習 I、ヨーロッパ国際関係史 I、卒論演習 II、ヨーロッパ国際関係史 II、専門演習 II

【研究活動】

2018～2019年度は、科研費基盤研究（C）「EU加盟候補国における『国民国家』変容—旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国」（課題番号：18K11782）による研究活動を中心に行った。

ユーゴスラヴィア解体後に独立したものの、国名における「マケドニア」名称をめぐる隣国ギリシャとの国名争議を抱えていた「旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国（FYROM）」は、国名ゆえにEUやNATOなどのユーロ・アトランティック構造への加盟交渉自体が開始されないというジレンマに陥っていた。しかし、2015年からの政治危機をEUや米国の仲介により乗り切り、2017年に成立した新政権の下、2018年6月には国名変更に関わるギリシャとの歴史的合意に達し、2019年1月に憲法改正を行って「北マケドニア共和国」として国際社会に認知されることとなった。

これを踏まえて2018～19年度の研究は、（1）冷戦終結後のEUと「西バルカン」諸国との関係を包括的に総括しつつ、「北マケドニア共和国」の置かれた状況を整理、（2）「北マケドニア共和国」の国名変更にいたる経緯を現地情報に依拠しつつ整理し、論文を執筆という2点に焦点をあてて実施した。

1. 大庭千恵子「国名改称の歴史的意義—南東欧地域における「マケドニア」名称」『歴史学研究』Vol.986, pp.26-37, 2019.

【社会活動】

2018～19年度は、日本国際政治学会や日本EU学会等の研究大会への出席のほか、国際学部長・国際学研究科長として、学部教育などに関する広報活動を高校および受験生向けに複数回実施し、また公立大学協会人文部会会議などに参加した。

2018年-2019年	公立大学協会人文部会出席
-------------	--------------

氏名	柿木 伸之
職位	教授
研究分野	哲学、美学・芸術諸学
研究キーワード	哲学、美学

20世紀のドイツ語圏を専門領域に、哲学と美学を研究している。近年は、ヴァルター・ベンヤミンの思想についての研究を足がかりに、言語と歴史を問う研究を繰り広げている。2018年度から19年度にかけては、ベンヤミンの生涯を20世紀の歴史のなかに位置づけながら彼の問いを掘り下げる研究に力を注いだ。その成果として、2019年秋には『ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評』を岩波新書の一冊として上梓した。教育活動においては、歴史的な現在を見通しつつ、他者との共生を自身の課題として認識する契機を学生にもたらすような講義や演習を行なっている。地域の文化活動にも協力するほか、さまざまな媒体で芸術に関する評論も展開している。

【教育活動】

専門科目の「共生の哲学」をはじめとする担当科目をつうじて、歴史認識を踏まえながら現代の世界を見通しつつ、他者とともに生きることを自身の課題として捉える契機を、学生に与えようと努めている。また、「多文化共生入門」のコーディネーターとして、複数の文化的背景を持つ者の共存をその前提から学生に考えさせる講義を編成している。「人間論A」では、今人間とは何かという問いを思想史の理解をつうじて深める契機を、全研究科の大学院生に与えようと努めている。2018年度から19年度にかけては、社会のマイノリティの生きざまを理解し、それをめぐる問題を、文学的な表現から、あるいは最近の社会的事象から明らかにする卒業論文を指導した。

2019年度	共生の哲学 I、社会文化思想史 II、多文化共生入門、卒論演習 I、世界の文学、人間論 A、平和と人権 A、共生の哲学 II、社会文化思想史 I、卒論演習 II、哲学 B、卒業論文
2018年度	多文化共生入門、共生の哲学 I、社会文化思想史 II、専門演習 I、卒論演習 I、世界の文学、平和と人権 A、人間論 A、共生の哲学 II、社会文化思想史 I、専門演習 II、卒論演習 II、哲学 B、卒業論文

【研究活動】

2018年度から19年度にかけては、ベンヤミンの著作の批判版などに取り組みながら、あるいは彼の生涯と思想を歴史的な脈に位置づけながら、彼が向き合った問いを掘り下げる研究に力を注いだ。2018年7月に『思想』誌に掲載された論文は、ベンヤミンの歴史哲学に関する研究のその時点での成果を示すものである。同年10月に刊行された共著書『忘却の記憶 広島』に収録された論文は、この研究が被爆の記憶の継承の可能性を問うことに結びつきうることを示している。そうしたベンヤミンの思想についての研究は、著書『ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評』に結実した。美学の研究にもとづいて芸術の可能性を問う評論も、雑誌などに寄稿している。

1. 柿木伸之, ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評, 岩波書店, 2019, 全 262 頁, 単著
2. 東琢磨、仙波希望、川本隆史 (編), 『忘却の記憶 広島』, 月曜社, 2018, 共著
3. 柿木伸之, 抗う言葉を分かち合う——芸術と批評の関係をめぐって, 群像, Vol. 75, No. 4, pp. 342-351, 2020
4. 柿木伸之, 魂の岸辺を開く響き、幻視する魂の歌——能の精神からの新たなオペラとしての細川俊夫《松風》によせて, Hiroshima Happy New Ear Opera IV 細川俊夫《松風》公演プログラム, pp. 6-6, 2020
5. 柿木伸之, 戦争と被爆の記憶が刻まれた建物をアジア各地域と連帯する文化拠点に, 週刊金曜日, No. 1268, pp. 45-45, 2020
6. 柿木伸之, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 4 回プログラム・ノート, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 4 回プログラム, Vol. 1, No. 4, pp. 4-6, 2020
7. 柿木伸之, メディアを創る言葉へ——ベンヤミンとアドルノの書の死後の生によせて, B 面の岩波新書, pp. 0-0, 2019
8. 柿木伸之, 生存の文化の拠点としての「倉庫」の再生のために, 被服支廠保存・活用キャンペーン note, pp. 0-0, 2019
9. 柿木伸之, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 3 回プログラム・ノート, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 3 回プログラム, No. 3, pp. 4-6, 2019
10. 柿木伸之, エルネスト・ブロッホとその音楽のユダヤ的要素, NHK 交響楽団ウェブサイト Spotlight, pp. 0-0, 2019
11. 柿木伸之, 30 回目の武生国際音楽祭に参加して, Mercure des Arts, No. 2019 年 10 月, pp. 4-6, 2019
12. 柿木伸之, 記憶の多島海へ——呉夏枝のほぐす芸術によせて, 「呉夏枝 手にたくす、糸へたくす」展カタログ, pp. 58-65, 2019
13. 柿木伸之, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 2 回プログラム・ノート, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 2 回プログラム, Vol. 1, No. 2, pp. 4-6, 2019
14. 柿木伸之, 岩崎稔氏の基調講演印象記, 社会文学通信, No. 111, pp. 8-9, 2019
15. 柿木伸之, 「人間」を問う特異な歌芝居 (ジングシュピール) ——モーツァルトの《魔笛》によせて, ひろしまオペラルネッサンス 2019 年度公演モーツァルト《魔笛》プログラム, pp. 6-6, 2019
16. 柿木伸之, 初夏のドイツへの旅より——ベルリンとブラウンシュヴァイクで接した公演を心に刻む, Mercure des Arts, Vol. 5, No. 6, pp. 0-0, 2019
17. 柿木伸之, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 1 回プログラム・ノート, 広島交響楽団ディスカバリー・シリーズ Hosokawa×Beethoven 第 1 回プログラム, No. 1, pp. 4-6, 2019
18. 柿木伸之, 閥を開く声——青木涼子の謡の展開によせて, 東京文化会館「現代音楽と能〜

- くちづけ」プログラム, pp. 17-18, 2019
19. 柿木伸之, 手つきと身ぶり——広島で『月夜釜合戦』を『山谷——やられたらやりかえせ』とともに観て, 批評新聞 CALDRONS, No. 2, pp. 1-2, 2019
 20. 柿木伸之, 天使の変貌——ベンヤミンにおける言語と歴史をめぐる思考の像, 『ナマール』, No. 23, pp. 31-46, 2018
 21. 柿木伸之, 魂の息吹が交響する場を開く作品の予感 ——2018 年度国際交流基金賞受賞記念イベント「越境する魂の邂逅」における文学と音楽の共鳴に接して, ウェブ・マガジン『をちこち』, No. 2018 年 12 月, pp. 1-1, 2018
 22. 柿木伸之, 殿敷侃: 逆流の生まれるところ, 美術ひろしま 30, Vol. 30, pp. 48-49, 2018
 23. 柿木伸之, 戦いの後に生きる人間のオペラの創造——モーツァルトの《イドメネオ》によせて, ひろしまオペラルネッサンス 2018 年度公演《イドメネオ》プログラム, pp. 6-6, 2018
 24. 柿木伸之, 記憶に刻む「7 月 26 日」, 中国新聞, No. 2018 年 8 月 11 日, pp. 6-6, 2018
 25. 柿木伸之, 抑圧された者たちの伝統とは何か——ベンヤミンの歴史哲学における歴史の構成と伝統, 思想, Vol. 1131, No. 2018 年 7 月, pp. 6-24, 2018
 26. 特別講演・招待講演, 柿木伸之, 天使の変貌——ベンヤミンにおける言語と歴史, 神戸・ユダヤ文化研究会 2018 年度第 2 回文化講座, 2018 年 9 月
 27. 柿木伸之, Hiroshima Happy New Ear Opera IV 細川俊夫《松風》公演字幕監修, JMS アステールプラザ中ホール, 2020 年 2 月

【社会活動】

広島芸術学会委員、ひろしまオペラ・音楽推進委員会委員として、広島における芸術の発展に微力を尽くしている。とくに同推進委員会が主催するオペラ公演や演奏会には、プログラムへの解説の寄稿などによって協力している。2020 年 2 月に開催された細川俊夫のオペラ《松風》の広島初演に際しては、トーク・セッションの司会を務めたほか、字幕の監修にも携わった。2018 年には、国際交流基金を受賞した細川俊夫と多和田葉子の対談の司会も担当した。2018 年秋には、神戸・ユダヤ文化研究会の文化講座で、同年と翌年の秋には、武生国際音楽祭の国際作曲ワークショップで講演を行なった。2018 年には広島市文化財団の『美術ひろしま』にも寄稿した。

2014 年 8 月-	広島芸術学会, 委員
2007 年 12 月-	広島芸術学会
2007 年 4 月-	ひろしまオペラ・音楽推進委員会委員
2014 年-	日本独文学会
2000 年-	美学会
1998 年-	日本哲学会
1998 年-	実存思想協会
1996 年-	日本現象学会
1993 年-	上智大学哲学会

氏名	カーソン, ルーク
職位	准教授
研究分野	教育学、教育心理学、英語学
研究キーワード	Learning Psychology, Metacognition, Education, Cross-cultural psychology and communication

With regard to teaching at HCU, I teach all of my courses in English. This is designed to improve not only the English language ability of HCU Faculty of International Studies but also to increase their readiness for participation in the increasingly global society. Focusing on thinking, behaviour and communication in cross-cultural settings, I am seeking to prepare students for a more multi-cultural future.

Through my research, I am focused on the development of abilities that will allow individuals to realise potential, irrespective of academic discipline or interest. I am also examining the impact of culture on this issue and on effective learning.

【教育活動】

My teaching can be divided into two areas – English medium instruction and English language teaching. The central themes of the English medium courses are cross-cultural understanding and potential-raising, while the English language courses are communication focused.

2019年度	Cross-cultural language and communication I, English Discussion and Debate I, Cross-cultural psychology seminar I, Cross-cultural communication and psychology I, Hiroshima and Peace Preliminary English Training, Cross-cultural psychology thesis writing seminar I, Cross-cultural communication and psychology II, Cross-cultural language and communication II, English Discussion and Debate II, Cross-cultural psychology seminar II, Cross-cultural psychology thesis writing seminar II, Introduction to Language and Communication
2018年度	Cross-cultural language and communication I, English Discussion and Debate I, Cross-cultural psychology seminar I, Cross-cultural communication and psychology I, Hiroshima and Peace Preliminary English Training, Cross-cultural psychology thesis writing seminar II, Cross-cultural communication and psychology II, Cross-cultural language and communication II, English Discussion and Debate II, Cross-cultural psychology seminar II, Cross-cultural psychology thesis writing seminar I

【研究活動】

My research is focused at the intersection of education, culture and learning, with a specific focus on higher order learning skills, such as metacognition. Most recently, I am moving my research into the areas of

- adaptability
- creativity and innovation
- decision-making
- agency in the globalised environment

1. Luke Carson, Culturally influenced education in an interconnected world: The case of Japan, adaptability and education. In 複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス：境界面での変化と創造に関する新しい見方, 水声社, 2019, Contributing author
2. Invited talk, Luke Carson, Keynote Speech: Stepping Back, Stepping Out and Moving Forward – Self Access Learning Centres as drivers of future focused education, The Japan Association for Self-Access Learning, 2019年11月
3. Presentation, Luke Carson, Keynote speech: Culturally Learned Values and the Interconnected World – The Case of Japan and Adaptability, International Institute of Social and Economic Sciences, 39th International Academic Conference, 2018年6月

【社会活動】

I have been involved in sharing my discipline knowledge with the public in Hiroshima through public lectures, high school lectures and kindergarten activities. Some of my university committee works also involved me with the Hiroshima community and the international community.

2014年-2019年	Hiroshima and Peace Committee member
-------------	--------------------------------------

氏名	金谷 信子
職位	教授
研究分野	社会福祉学、財政・公共経済
研究キーワード	非営利組織、非営利経済、公共政策、社会福祉、公民パートナーシップ、ソーシャル・キャピタル、市民社会

教育活動、研究活動、社会活動の各々について、一定の責任が果たせるよう取り組んできたと考えている。成果についての自己評価は容易ではないが、いずれの活動においても誠心誠意努めることには意を用いている。今後も努力を続けていきたい。

【教育活動】

学部においては、従前から担当している共通教育科目と専門科目として下記の科目を担当した。学生の意欲向上のために調査などの課題を複数回出すことにしているが、期待以上の内容があることが嬉しい。2年間で9名の卒論指導を行った。地域活性化関係などでの力作が含まれる。また大学院では1名の修論指導を行った。

2019年度	NPO論（オムニバス・コーディネーター）、非営利組織論Ⅰ・Ⅱ、地域再生論（オムニバス・コーディネーター）、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習、非営利組織論Ⅰ・Ⅱ（大学院）
2018年度	NPO論（オムニバス・コーディネーター）、非営利組織論Ⅰ・Ⅱ、地域再生論（オムニバス・コーディネーター）、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習、非営利組織論Ⅰ（大学院）

【研究活動】

近年の主要テーマである介護保険事業所の非営利事業者と営利事業者のパフォーマンスの比較研究を引き続き進めてきた。またコミュニティ政策や社会的企業家に関する研究など幅広い分野の研究にも取り組んできた。

1. 著書『国際ビジネスの現実と地平』 文眞堂, 2020, 189-216, 共著
2. 著書『ソーシャル・キャピタルと市民社会・政治：幸福・信頼を高めるガバナンスの構築は可能か』 ミネルヴァ書房, 2019, 共著
3. 論文「介護保険サービス市場における効率性とサービスの質：事業規模と事業範囲の拡大を中心に」『社会政策』 Vol. 11, No. 2, pp. 15-25, 2019, 単著
4. 書評「鳥越皓之編『原発災害と地元コミュニティ：福島県川内村奮闘記』（東信堂, 2018年）」『コミュニティ政策』 Vol. 17, pp. 163-167, 2019, 単著
5. 論文「コミュニティは失われた楽園か — “地域コミュニティ”の実態と政策の再考—」『コミュニティ政策』 Vol. 17, pp. 67-86, 2019, 単著
6. 論文「介護保険サービス市場における経営主体別事業者のパフォーマンス：一質の相違とク

リームスキミングに関する分析—』『ノンプロフィットレビュー』Vol.18, No.1, pp.1-13, 2018, 単著

7. Presentation, The dilemma of civil society in the elderly care service market in Japan, 7th CIRIEC International Research Conference on Social Economy, 2019年6月, 単独
8. 研究発表「介護保険サービス市場化のジレンマ：効率性と質・公平性の観点から」 社会政策学会中四国部会, 2018年11月, 単独
9. 研究発表「宝塚歌劇のタレントマネジメント—100年の伝統と革新—」しごと能力研究学会 第1回部会・研究会報告, 2018年7月, 単独

【社会活動】

地方自治体や地域団体などからの協力依頼には、可能な限り対応するようにしており、社会活動に努めてきた。また学会の運営にも協力した。

2019年7月-2019年11月	広島市市民局指定管理者指定審議会, 委員
2019年6月-	日本NPO学会年次大会・研究報告「非営利法人」モデレーター
2019年2月	地域活動における男女共同参画セミナー, 広島市
2018年11月-	広島県情報公開・個人情報保護審査会委員
2018年2月-2018年7月	「社会政策」査読者
2018年1月-	コミュニティ政策学会編集委員
2017年7月-2019年3月	広島県指定管理者選定委員会自然公園部会委員
2015年8月-2020年7月	大竹市総合戦略会議, 委員長
2018年-2019年4月	「ノンプロフィット・レビュー」査読者
2009年7月-2019年2月	広島市文化振興財団・文化活動助成審査会委員
2014年6月-	ひろしまNPOセンター, 理事
2013年7月-	公益財団法人コミュニティ未来創造基金ひろしま理事

氏名	城多 努
職位	准教授
研究分野	公会計
研究キーワード	公会計、政府の経営学、高等教育機関の財政・財務

コロナウイルス禍により、これまでの教育・研究の在り方を大きく見直さなければならない事態に直面している。これまでの教育・研究および社会貢献の水準を落とすことなく、より質の向上を図るべく、努力する。

【教育活動】

教育活動は、例年通り順調に実行している。しかしながらコロナウイルス禍による教育環境の激変は、教員・学生双方に大きな負担となっている。学生の負担をできるだけ抑え、かつ教育的効果が上がるように、新常态における教育活動への工夫を重ねてゆく。

2019年度	財務管理論Ⅰ、Ⅱ、公会計論、国際ビジネス入門、NPO論、国際研究入門、企業インターンシップ、専門演習Ⅰ、Ⅱ、卒論演習Ⅰ、Ⅱ、基礎演習、公会計論ⅠⅡ（院）
2018年度	財務管理論Ⅰ、Ⅱ、公会計論、国際ビジネス入門、NPO論、企業インターンシップ、専門演習Ⅰ、Ⅱ、卒論演習Ⅰ、Ⅱ、三学部合同基礎演習、発展演習Ⅱ、公会計論ⅠⅡ（院）

【研究活動】

教育活動は、これまでは情報の収集や分析がメインであったが、コロナウイルス禍により、これまでとは異なる研究への取り組みが必要となっている現状に鑑み、研究成果の公表に軸足を移しつつ、柔軟な姿勢で研究活動を継続してゆく。

1. 国際ビジネスの現実と地平，第8章：地域を見る公会計，文眞堂，2020，分担執筆

【社会活動】

社会活動については、これまでのネットワークを生かしつつ、より社会への働きかけを重視して継続してゆくものとする。コロナウイルス禍から新常态へ移行しつつある社会への貢献を念頭に置き、社会活動を推進してゆきたい。

2006年10月-	早稲田大学 パブリック・サービス研究所における調査研究
2005年10月-	国立大学の財務概要編集
2005年10月-	国立大学経営ハンドブック編集
2005年10月-	国立大学経営ハンドブック編集 独立行政法人 国立大学財務・経営センター 編集委員
2005年10月-	国立大学の財務概要編集 独立行政法人 国立大学財務・経営センター 編集委員

氏名	金 栄鎬
職位	教授
研究分野	政治学、国際関係論、地域研究（現代韓国朝鮮研究）
研究キーワード	ナショナリズム、現代韓国・朝鮮、対外政策

学部運営等にかかる労力と時間が予想以上に多く、本来の研究・教育活動が不本意であった。

【教育活動】

履修条件とカリキュラムの改訂および一部クォーター制導入に対応する教育活動を実施した。

2019 年度	国際関係史（朝鮮半島）I、国際関係史（朝鮮半島）II、比較政治学、東北アジア政治論 i、東北アジア政治論 ii、ハングル III、専門演習 I、専門演習 II、卒論演習 I、卒論演習 II、東北アジア政治論 I、東北アジア政治論 II
2018 年度	国際関係史（朝鮮半島）I、国際関係史（朝鮮半島）II、比較政治学、東北アジア政治論 i、東北アジア政治論 ii、ハングル III、専門演習 I、専門演習 II、卒論演習 I、卒論演習 II、東北アジア政治論 I、東北アジア政治論 II

【研究活動】

比較研究と対外政策研究の成果を一部ながら公刊することができた。

1. 研究発表，金栄鎬，徴用工判決後の日韓関係，韓国学研究会 第 32 回研究発表会，2019 年 12 月
2. 金栄鎬，北朝鮮人権問題への国際社会と韓国のアプローチの考察：安全保障と人権改善のジレンマをめぐって，広島国際研究，Vol. 25，pp. 1-16，2019
3. 金栄鎬，日韓関係における安全保障と歴史問題：同盟のジレンマと移行期正義の視点から，広島国際研究，Vol. 24，pp. 1-24，2018
4. 金栄鎬，李美淑著『「日韓連帯運動」の時代：1970-80 年代のトランスナショナルな公共圏とメディア』東京大学出版会、2018 年，現代韓国朝鮮研究，No. 18，pp. 84-87，2018
5. 研究発表，金栄鎬，朝鮮半島の非核化と平和体制について，韓国学研究会 第 30 回研究発表会，2018 年 12 月
6. シンポジウム，金大中・小渕宣言から 20 年：韓日関係の過去と未来、広島韓国フォーラム、2018 年 9 月

【社会活動】

学部公開講座、特別講義、公開研究フォーラム、学外委員活動などで一定の貢献ができた。

2018 年 11 月	広島市立大学国際学部公開講座 「朝鮮半島を知る 核問題・安全
-------------	--------------------------------

	保障・国づくり」，広島市立大学国際学部
2017年7月-現在	韓国・民主平和統一諮問会議第18期・第19期海外諮問委員
2016年10月-現在	現代韓国朝鮮学会理事

氏名	倉科 一希
職位	准教授
研究分野	国際関係史、アメリカ外交史
研究キーワード	米欧関係史、冷戦史

2018・19年度は、目に見える成果は決して多くないものの、将来に向けた情報収集や意見交換などを行った時期であった。教育・研究対象である国際関係が大きく変化する時期であったが、とくに教育面ではその変化を取り入れた。学生の関心を引き立てる内容刷新を実施できたと判断している。

【教育活動】

担当した講義には現在のアメリカ政治や国際関係に関わるものが多く、近年の変化を取り入れて学生の関心に応えることが必要となる。インターネット上の動画資料を利用したり、新たな問題を歴史的な枠組みに取り入れることによって、学生が直面する問題の理解を深化させることに努めた。一年生向けの専門科目および全学共通科目を担当したこともあり、とくに初年度の学生が取得・理解すべき方法や情報の提供を心がけた。

2019年度	現代史 A、三学部合同基礎演習、国際関係史入門、国際関係史（アメリカ）I、国際関係史（アメリカ）II、アメリカ政治論 i、アメリカ政治論 ii、英語応用演習 IV
2018年度	現代史 A、国際関係史（アメリカ）I、国際関係史入門、国際関係史入門、英語応用演習 IV、国際関係史（アメリカ）II、アメリカ政治論 i、アメリカ政治論 ii

【研究活動】

2018年度に複数の科研プロジェクトに参加できたこともあり、研究に必須の海外公文書館における史料調査を活発に行うことができた。その結果として取得した一次史料の分析を進め、今後の研究発表に向けた準備を行っている。

共編者として『現代アメリカ政治外交史』に参加し、アイゼンハワー期に関する第2章に加え、現在の問題を検討した終章を作成した。担当箇所の執筆作業および、専門領域を異にする執筆者の編集作業を通じて、アメリカ政治外交史に関する理解を深めることができた。

【社会活動】

所属する学会で複数の委員会業務に参加した。2018・19年度はとくにアメリカ学会で国際委員会に参加し、American Studies Association との提携を担当した。この作業を通じて、ASA 年次大会に参加すると共に、ASA の招聘研究者との交流を深めた。

また、国際安全保障学会ではプログラム委員会に参加し、研究大会において部会の企画・運営に関与した。この作業を通じて、現在の安全保障研究に関する知見を深めた。

2018年6月-2020年6月	日本国際政治学会 国際交流委員会
2018年1月-2020年12月	国際安全保障学会 理事
2016年6月-2019年5月	日本アメリカ学会 国際委員会
2015年9月-2018年9月	日本アメリカ史学会 編集委員
2012年-	日本政治学会
2010年12月-	日本安全保障学会
2004年1月-	日本アメリカ史学会
2002年7月-	日本アメリカ学会
1996年5月-	日本国際政治学会

氏名	ゴーマン, マイケル
職位	教授
研究分野	英米・英語圏文学
研究キーワード	American Modernism, Asian American Literature, World War I, Rural American Culture

My scholarly activities in 2018-2019 focused primarily on the cosmopolitan and transnational nature of North American rural life and culture. This interest has led me to explore the work of Willa Cather (1873-1947), an American writer raised in the rural Midwest. Much of my recent scholarship has focused on the representation of non-Western (non-European) characters, customs, and history in Willa Cather's fiction. My interest in transnational/cosmopolitan explorations of rural American civilization has also prompted me to explore the representation of global climate change and the environmental crisis in literature and in the broader American cultural sphere.

【教育活動】

The suitability of my courses for International Studies faculty students is shaped primarily by two factors: the international/cosmopolitan/multicultural content and the use of English as the medium of instruction. Aside from two academic writing courses, all of my classes focus on literature or culture. Nevertheless, they all help students improve their English ability through speaking, writing, and critical thinking.

2019年度	アメリカ文化論 I、専門演習 I、卒論演習 I、American Literature and Culture I、英米文学特講 I、英文作法 I、American Literature and Culture II、英文作法 II、アメリカ文化論 II、専門演習 II、卒論演習 II、英米文学特講 II
2018年度	アメリカ文化論 I、専門演習 I、卒論演習 I、American Literature and Culture I、英米文学特講 I、英文作法 I、American Literature and Culture II、英文作法 II、アメリカ文化論 II、専門演習 II、卒論演習 II、英米文学特講 II

【研究活動】

My research and publications over the last few years have focused mostly on the representation of multiculturalism, imperialism, and the environmental crisis. For instance, two recent articles (“Willa Cather, Cultural Imperialism, and ‘The Coming Man’” and “Where Pagodas Rise on Every Hill”) both explore Willa Cather's interest in and representation of Chinese immigrants and America's involvement in Asia at the dawn of the 20th Century. The environmental aspect of my recent scholarship is represented by “Climates of Violence, Spirits

of Resistance,” in which I explore the collateral damage of climate change, especially its impact on human trafficking.

1. “Where Pagodas Rise on Every Hill: Romance as Resistance in ‘A Son of the Celestial’ .” *Cather Studies, Volume 13: Willa Cather’s Pittsburgh* (2021): 6889 words [in press]. (査読あり)
2. “Climates of Violence, Spirits of Resistance: Chang-rae Lee’s On Such a Full Sea and Louise Erdrich’s Future Home of the Living God” (「気候の暴力、抵抗の精神--チャンネ・リー『その満潮の海に』とルイーザ・アードリック『生ける神の未来の家』」『トランスパシフィック・エコクリティシズム』彩流社、2017年、pp. 127-142). (査読あり)
3. “Willa Cather, Cultural Imperialism, and ‘The Coming Man’ ” (『複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス』、水声社、2019年、pp. 97-110). (査読あり)

【社会活動】

I am an active member of several scholarly organizations. Beyond this, I routinely share knowledge with members of the Hiroshima Community through public lectures, volunteer courses, and other forums.

2020年1月	The 5th HPI Public Lecture Series in English
2019年8月	Combined Hiroshima Schools English Lesson
2019年-	American Studies Association
2018年1月	The 3rd HPI Public Lecture Series in English
2012年-	中四国アメリカ学会 (理事会)
2012年-	日本アメリカ文学会
2012年-	原爆文学会
2010年-	エコクリティシズム研究会 (理事会)
2006年-	Western Literature Association

氏名	斎藤 祥平
職位	講師
研究分野	地域研究、思想史
研究キーワード	ロシア近現代史、ロシア思想史、亡命ロシア人

教育活動、研究活動、社会活動に共通するのは、ロシア地域研究という専門分野との関連で活動を行ってきたことである。とりわけロシアと他地域（ヨーロッパ、アジアなど）との関係を意識してきたことが特徴である。大学運営に関しては、2018・2019年度については研究交流委員会において公開講座に関連する業務に、国際交流委員会において国際交流や留学関連業務に携わった。

【教育活動】

全学共通系科目として、ロシア語 I、II、III という第二外国語科目を担当し、学生の基礎的な語学力の向上に努めた。国際学部専門教育科目としてロシア研究、国際関係史（ロシア）I、国際関係史（ロシア）II といった講義形式の科目を担当したほか、ゼミナール形式の基礎演習、発展演習 I、専門演習 I、II、卒論演習 I、II を通じて研究手法やレポート・論文執筆の個別指導を行った。そのほか、オムニバス形式の講義として、国際研究入門や世界の文学、博士課程前期課程の科目としてロシア国際関係史 I、II を担当した。

2019年度	基礎演習、発展演習 I、専門演習 I、専門演習 II、卒論演習 I、卒論演習 II、世界の文学、国際関係史（ロシア）I、国際関係史（ロシア）II、ロシア研究、ロシア語 I、ロシア語 II、ロシア語 III、ロシア国際関係史 I、ロシア国際関係史 II
2018年度	専門演習 I、専門演習 II、発展演習 I、基礎演習、ロシア語 I、ロシア語 II、ロシア語 III、国際関係史（ロシア）I、国際関係史（ロシア）II、ロシア研究、国際研究特講 I（モスクワ大学短期特別研修）、国際研究入門

【研究活動】

『ロシア文化事典』において項目「ロシアとヨーロッパ」を担当し、学術論文としては日本語論文 1 本、外国語論文 1 本を刊行した。

Николай Трубецкой и его этнографическое видение национальных меньшинств в Российской империи и за ее пределами (1905–1913 гг.). Форум новейшей восточноевропейской истории и культуры. 2019. 1-2. С. 51-67 では亡命ロシア人の思想家として知られるトルベツコイの思想に関して、亡命前の帝政ロシア期における民族学研究に着目し、その前史を明らかにした。そのほか、The Association for Asian Studies 2019 Annual Conference（アメリカ、デンバー）において研究発表を行った。

1. 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編，ロシア文化事典，丸善出版，2019，分担執筆

2. Николай Трубецкой и его этнографическое видение национальных меньшинств в Российской империи и за ее пределами (1905–1913 гг.), Форум новейшей восточноевропейской истории и культуры, No. 1-2, pp. 51-67, 2019
3. ゴーレン・ウルバンスキーとの共著, 帝国のあいだで、スクリーンの上で：中露国境河川流域におけるロシア・コサック, 境界研究, No. 8, pp. 117-140, 2018
4. Eurasianism Exploited: Japanese Legitimation of “Manchukuo” and Russian Resistance, The Association for Asian Studies 2019 Annual Conference, 2019年3月

【社会活動】

県立広島大学・広島市立大学連携公開講座「言語を通じて世界を知る」において講師を担当した（10月25日「戦間期における亡命ロシア人：言語・ネットワーク・創造力」）。広島県立皆実高校にて模擬授業を担当した（7月11日）。様々な方と交流する貴重な機会となった。

2019年10月	「言語を通じて世界を知る」，広島市立大学社会連携センター
2019年7月	模擬授業（広島県立皆実高校）

氏名	城市 真理子
職位	准教授
研究分野	美術史
研究キーワード	室町水墨画、肖像画、詩画軸、中世仏画

教育活動ではアクティブ・ラーニングを行い（見学、発表など）、演習のみならず人数の多い講義も含め実施できた。また、芸術学研究科芸術理論専攻から本学初の県立博物館の学芸員（近世絵画担当）を輩出できたことは感慨深い。また、本学術資料館の購入に関わった作品3件について、院生・研究員を指導して紀要に紹介文を書かせた（共同執筆）。社会活動では、これまでの三原市中心の公的活動のみならず、県レベルでの博物館行政や文化財保護・振興に関わる活動が増えた。研究活動は三原市佛通寺調査等、広島地域の中世・近世美術という従来からの研究テーマを継続している。また、山口県立美術館での新出の雪舟作品などを調査し、室町水墨画の研究を継続している。今年も、年度末の春休みに執筆する予定が、新型コロナウイルス感染症対策等で遅れていることが心残りである。

【教育活動】

どの科目にもアクティブ・ラーニングの要素があった。国際学部・芸術学部の美術史の講義は、70名前後が受講した。展覧会見学・ワークシート作成をさせた。学部生の演習では、桃山時代の『等伯画説』を読解しながら、担当学生がレジュメを作成し発表した。芸術学研究科の美術史特講では学生の研究発表を組み込み、美術展示の見学を行った。大学院演習（芸術理論）では、『日本美術図解事典』を用いた演習および「松崎縁起絵巻」の分析を行い、文献のリサーチ・文献の読解を指導。また、文化財調査に同行させ、美術資料の取り扱い、鑑識方法等の直接指導を行い、研究者・学芸員の実践的教育を行った。芸術理論専攻の院生は、昨年に引き続き、公立機関の学芸員として就職し、高度専門職の育成が2年連続で達成できた。

芸術学研究科院生の制作の修士・博士の論文執筆の指導では1名について博論提出・学位取得となった。博士前期の院生は論文に関して全員合格となった。

2019年度	美術史（日本）Ⅰ、美術史（日本）Ⅱ、日本美術史Ⅰ、日本美術史Ⅱ、日本美術史、博物館資料論、専門演習、美術史特講（日本）A、美術史特講（日本）B、造形総合演習、領域横断、特別造形総合演習、博物館実習、日本美術史特講、芸術学研究Ⅰ、芸術学研究Ⅱ
2018年度	美術史（日本）Ⅰ、美術史（日本）Ⅱ、美術史特講（日本）A、美術史特講（日本）B、博物館資料論、造形総合演習、領域横断、特別造形総合演習、博物館実習、日本美術史、日本美術史特講、芸術学研究Ⅰ、芸術学研究Ⅱ

【研究活動】

論文執筆では、室町～桃山時代の肖像画研究／佛通寺伝来の文化財の研究は論文執筆中（発表予定）。室町水墨画と明代絵画に関する研究／松崎天神縁起絵巻研究／中世仏画に関する研究は、

継続中である。

1. 城市真理子 森田美樹 河野ななみ 安東慶子「広島市立大学所蔵 役行者図、伝狩野松栄筆人物花鳥図3幅対、源氏物語絵色紙」(仮題) 広島市立大学 芸術学部芸術学研究科紀要 24号, 2020(刊行予定)
2. 大通禪師(愚中周及)像—極めて稀な頂相—(再録), 佛通, 迎春号, 2020
3. 広島に息づく近世の名品 大通禪師(愚中周及)像—極めて稀な頂相—, Grande ひろしま, No. 26, pp. 6-7, 2019
4. 城市真理子 田村美智子, 特定研究「広島県および周辺地域における文化財(古美術品)の基礎的調査および研究」の報告の一環として 一長澤蘆雪筆「宮島八景図」について—, 広島市立大学 芸術学部 芸術学研究科 紀要, No. 21, pp. 70-82, 2018
5. 広島に息づく近世の名品 新出の小早川隆景像, Grande ひろしま, No. 21, pp. 4-5, 2018

【社会活動】

- ・講演(三原市 米山寺 2019年4月)
- ・美術公募展審査員(頼山陽資料館 2020年1月)
- ・一般誌等での文化財に関する紹介文の執筆(グランドひろしま 2019年秋号)

学外委員・学会委員としては、広島芸術学会大会(8月)を担当した。

- ・広島県博物館協議会委員
- ・広島県文化財保護委員会
- ・三原市企画展覧会運営協議会委員
- ・佛通寺調査委員会委員

2019年4月-	小早川隆景像について, 米山寺
2019年2月-	雲谷等顔襖絵について, 佛通寺
2018年9月-	広島大学公開講座「芸術と老年 Arts and Aging」, 広島大学総合科学部
2017年9月-	模擬授業, 呉宮原高校
2017年9月-	広島大学公開講座「芸術と老年 Arts and Aging」, 広島大学総合科学部
2017年6月-	頼山陽史跡資料館, 南画精華展審査委員
2016年-	広島芸術学会 委員
2016年10月-	若冲を楽しむ, 中国新聞文化センター・ちゅーぴーカレッジ
2016年9月-	広島大学公開講座「芸術と老年 Arts and Aging」, 広島大学総合科学部
2016年7月-	県立広島大学・広島市立大学連携講座, 県立広島大学・広島市立大学
2016年7月-	広島芸術学会, 広島芸術学会委員

2015年5月-	毛利家の国宝・至宝展連続講座, ひろしま美術館
2014年-	近世広島美術研究会
2013年-	三原市教育委員会, 佛通寺文化財調査委員会
2013年9月-	三原市佛通寺文化財等調査委員会
2012年7月-	広島芸術学会
2012年5月-	知のトライアスロン, 広島市立大学
2003年4月-	待兼山芸術学会
2000年12月-	歴史美術史懇話会
1989年4月-	美術史学会
1989年4月-	九州芸術学会

氏名	高久 賢也
職位	准教授
研究分野	国際金融論・国際マクロ経済学
研究キーワード	開放経済、国際資本フロー、マクロ経済政策

当該年度においても、国際金融および国際マクロ経済学の専門性を活かして、教育活動、研究活動および社会活動に取り組んだ。講義においては、学生が理解しやすいように新聞記事や統計データなどを多く取り入れ、丁寧な説明を心掛けたが、学生の主体性を引き出すという面で引き続き課題が残る結果となった。研究活動については、科研費の研究テーマを着実に進めた。社会活動としては、高校での模擬授業を行った。

【教育活動】

当該年度は、講義科目として、金融論、国際金融論Ⅰ、および国際金融論Ⅱを主に担当した。また、基礎演習、発展演習、専門演習、卒論演習といった演習科目も担当し、卒論指導も行った。加えて、オムニバス科目である国際ビジネス入門においては、主に国際学部の1年生を対象として、金融の基礎に関する講義を3回分担当した。地域課題演習の副担当教員として、学生の引率も行った。

2019年度	国際金融論Ⅰ、卒論演習Ⅰ、発展演習Ⅰ、国際ビジネス入門、国際金融論Ⅱ、金融論、卒論演習Ⅱ、地域課題演習、卒業論文
2018年度	国際金融論Ⅰ、発展演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、地域課題演習、国際ビジネス入門、金融論、基礎演習、専門演習Ⅱ

【研究活動】

当該年度においては、主に科研費の研究課題「新興国における国際資本フローと資本規制の有効性に関する理論的研究」の着実な実施を念頭に置いて研究活動を行った。研究成果は下記のとおりである。

1. Shigeto Kitano, Kenya Takaku, Capital Controls, Macroprudential Regulation, and the Bank Balance Sheet Channel, *Journal of Macroeconomics*, Vol. 63, pp. 1-21, 2020
2. Shigeto Kitano, Kenya Takaku, Capital Controls, Monetary Policy, and Balance Sheets in a Small Open Economy, *Economic Inquiry*, Vol. 56, No. 2, pp. 859-874, 2018
3. Presentation, Gains from Policy Cooperation in Capital Controls and Financial Market Incompleteness, 日本金融学会 2019年度春季大会, 2019年5月
4. Presentation, Capital Controls, Macroprudential Regulation, and the Bank Balance Sheet Channel, 第2回神戸DSGEワークショップ, 2019年2月
5. 研究発表, 近年の新興国における資本規制政策の実際, 日本金融学会 2018年度秋季大会, 2018年10月
6. Presentation, Recent Development in the Adoption of Capital Controls in Emerging

【社会活動】

2019 年 9 月に広島国際学院高等学校にて模擬授業を行った。今後もこうした取り組みを継続していきたい。

2018 年 2 月-	American Economic Association
2011 年 5 月-	日本経済学会
2009 年 10 月-	日本国際経済学会
2008 年 10 月-	日本金融学会

氏名	高橋 広雅
職位	教授
研究分野	経済成長論、財政・公共経済、行動経済学
研究キーワード	経済成長論、財政学、行動経済学

教育活動については、2019年度から卒論発表会が始まったため2019年度からはプレゼンテーション指導の比重をこれまでよりも増やした。研究活動については、経済実験と理論研究を同時に進めている。大学運営に関しては、国際学部入試委員長として学部入試改革、大学院入試改革に取り組んだ。

【教育活動】

経済学、マクロ経済学、経済政策論と経済系の授業を担当した。国際学部生は経済志望がそれほど多くないため、学生が興味を持ちやすいように身近な例を取り上げたり簡単な経済実験を実施したりして学生の意欲を高めるよう務めた。

2019年度	経済政策論 I、経済学、マクロ経済学 I、マクロ経済学 II、卒業論文、卒論演習 1、卒論演習 2、専門演習 2、専門演習 1
2018年度	経済政策論 I、経済学、マクロ経済学 I、経済政策論 II、卒業論文、3学部合同基礎演習、卒論演習 1、卒論演習 2、専門演習 2、専門演習 1

【研究活動】

査読付き論文 3 本を公表した。その内 1 本は国際誌である。また 5 回の学会発表を行った。まだ論文にまとまっていない経済実験を実施した。

1. 国際ビジネスの現実と地平：地域からの眺望，文眞堂，2020，共著
2. Takahashi, H., Shen, J., & Ogawa, K., Gender-specific reference-dependent preferences in the experimental trust game, *Evolutionary and Institutional Economics Review*, Vol.17, No.1, pp.25-38, 2020
3. 鈴木明宏・高橋広雅・竹本亨，地方財政の効率性改善と財政格差縮小のトレードオフ：地方交付税制度における財政格差解消の機会費用の推計，*山形大学紀要（社会科学編）*，Vol.50, No.1, pp.1-22, 2019
4. 鈴木明宏・高橋広雅・竹本亨，金融教育と行動バイアスが金融行動と金融トラブルへの巻き込まれやすさに与える影響：金融リテラシー調査データを利用した分析，*山形大学紀要（社会科学編）*，Vol.49, No.1, pp.1-13, 2018
5. 研究発表，学歴・金融教育・行動バイアスが金融リテラシーに与える影響－「金融リテラシー調査（2016年）」を利用した分析，東北経済学会 第73回大会，2019年8月
6. 研究発表，小刻みな税率引き上げが消費に与える影響：くじ消費実験による分析，日本経済学会 2019年度春季大会，2019年6月

7. 研究発表, 学歴・金融教育・金融リテラシーが行動バイアスに与える影響—「金融リテラシー調査 (2016 年)」を利用した分析—, 第 67 回数理社会学会大会, 2019 年 3 月
8. 研究発表, 高橋広雅, Joint Borrowing Limit Game, 日本経済学会 2018 年度秋季大会, 2018 年 9 月

【社会活動】

中四国商経学会の理事を務めた。

氏名	田川 玄
職位	教授
研究分野	文化人類学・民俗学、地域研究
研究キーワード	開発、アフリカ、エチオピア、オロモ、ボラナ、牧畜民、ナショナリズム、社会変化、周縁社会と近代国家、人間と動物、老人、進化、性と結婚

2018年度は教育活動・研究活動・社会活動の三つの領域において個々の独立した活動を推進したが、2019年度においては、それらの三つの活動のなかで関連したテーマを連携させることができた。

【教育活動】

この二年間の教育における大きな成果として、2018年度に指導した学生が卒論グランプリ最優秀賞を受賞したことを挙げるができる。2019年度は、研究活動と社会活動を関連させた授業を試み、「比較文化論 II」では学内研修での研究成果の教育への還元として、新しいテーマの授業を組み立てた。「アフリカ研究 I」では、アフリカを舞台とする映画鑑賞だけでなく、国際学部公開講座への参加にもとづく課題を課した。

2019年度	比較文化論 II、アフリカ研究 I、専門演習 II、アフリカ文化人類学 II、文化人類学
2018年度	比較文化論 I、多文化共生入門、異文化間交渉論、学術研究の進め方、専門演習 I、アフリカ文化人類学 I、平和と人権 A、アフリカ文化人類学 I、卒論演習 II、卒論演習 II、比較文化論 II、文化人類学、アフリカ文化人類学 II、アフリカ研究 I、卒業論文

【研究活動】

二年間にわたりひとつの科研プロジェクトの代表者であり、同時にふたつの科研のプロジェクトの分担者として研究に携わってきた。2019年度の前期において、学内研修において国内研究に加えて約3か月の海外調査に従事することができ、これまでの研究のあり方を俯瞰して捉えることができた。

1. 研究発表, 田川 玄, 無形文化遺産の担い手とは誰か? : エチオピアのガダ体系を事例として, 第28回日本ナイル・エチオピア学会学術大会, 2019年4月
2. 研究発表, 文化翻訳としての無形文化遺産—エチオピアのガダ体系を事例として, 第27回日本ナイル・エチオピア学会学術大会, 2018年4月
3. その他, 「深刻さを増す民族対立」『広島とアフリカ』中国新聞(セレクト) 2019年12月8日

【社会活動】

所属学会に関係した社会活動としては、2018年度にはノーベル平和賞に関係したドキュメンタ

リー映画の公開上映会に携わった。また、2019年度は国際学部公開講座において難民を主人公としたドキュメンタリー映画の解説を行った。大塚公民館の国際理解講座ではエチオピアを紹介する講演を行い、学内研修の研究成果を地域社会へ還元した。

2020年2月	「異なる文化が出会う場所で ソマリア、マレーシア、広島での試み」 UNHCR WILL2LIVE Cinema パートナーズ上映会「イージー・レススノー児童婚を逃れて」, 広島市立大学国際学部
2019年12月	大塚公民館 国際理解講座「エチオピアを知っていますか」
2019年7月	エチオピア連邦民主共和国オロミア州ヤベロ市において地元コミュニティラジオ局の番組にゲスト出演。Oromia Broadcasting Network による大学建設現場の取材にてインタビュー。
2019年4月-	日本ナイル・エチオピア学会会長
2018年1月-	ドキュメンタリー映画上映会「難民・移民として生きる」, 日本アフリカ学会中国四国支部・広島市立大学国際学部
2015年5月-2020年5月	日本アフリカ学会評議員
2015年5月-2020年5月	日本アフリカ学会, 評議員
2011年6月-2019年3月	日本アフリカ学会中国四国支部長
2011年6月-2019年3月	日本アフリカ学会, 中国四国支部支部長
2009年4月-2019年4月	日本ナイル・エチオピア学会, 評議員
2009年4月-2019年4月	日本ナイル・エチオピア学会評議員
1999年8月-	日本ナイル・エチオピア学会
1998年2月-	日本アフリカ学会
1993年4月-	日本文化人類学会

氏名	武田 悠
職位	講師
研究分野	国際関係論
研究キーワード	原子力、主要国首脳会議、日本政治外交史、日米関係史

3つの分野のいずれにおいても、日本政治や日本外交に関する理解の促進を目指して活動を行った。科研費を継続的に獲得して新たなテーマを探し、そのテーマについての研究成果を教育活動、社会活動に活かすことを心がけた。

【教育活動】

全学共通科目及び2年生対象の科目においては基本的な日本政治、日本外交の構図についての概念や知識の定着を目指し、3年生以降の科目及び演習では自らの知識を使うための読解、文章作成などの能力の定着を目指した。講義科目では感想・質問への回答を、演習ではグループ学習を重視して学生の理解度を測ることを心がけた。

2019年度	国際関係史（日本）I、日本政治論、国際関係史（日本）II、現代史B、基礎演習、発展演習II、専門演習I・II、卒論演習I・II
2018年度	国際関係史（日本）I、日本政治論、国際関係史（日本）II、現代史B、基礎演習、発展演習I、専門演習I

【研究活動】

これまでに蓄積してきた成果も基にしつつ、継続的に取り組んできた日本の原子力平和利用と核不拡散についての入門書をまとめた。また科研費を活用し、一時中断していたG7サミットにおける日本外交についての史料収集を進め、英語論文を完成させ投稿の準備を整えた。加えて原子力平和利用に関する新たなテーマとして核物質の国際管理を取り上げ、予備的な報告を国際学会において行うと共に、20年度より本格的に研究を開始する準備を進めている。

1. 日本の原子力外交 - 資源小国70年の苦闘, 中央公論新社, 2018, 単著
2. 対米武器技術供与の起源と日米摩擦, 防衛学研究, No. 60, pp. 59-75, 2019
3. Presentation, Japan on the Fault line: Confrontation between Nuclear suppliers and N+N States at the International Nuclear Fuel Cycle Evaluation, 1977-1980, The Neutrals and the Bomb, 2019年12月
4. 研究発表, 経済サミットにおける政治問題の協議と日本外交, 戦後外交史研究会, 2019年9月
5. 特別講演・招待講演, 日本の原子力外交-資源小国70年の苦闘, 第8回YGN若手勉強会, 2018年7月

【社会活動】

外部からの要請には基本的に応じることとし、電気新聞、朝日新聞等への取材協力、高陽高校

及び美鈴が丘高校での模擬授業、広島平和記念資料館での英語講義等を実施した。また笹川平和財団では政策提言を行い、国際安全保障学会では書評委員として重要な書籍の紹介に努めている。

2018年12月	広島平和記念資料館，講演「Japanese Diplomacy before and after the Atomic Bombings」
2018年9月-2019年7月	笹川平和財団，新たな原子力・核不拡散に関するイニシアチブ研究会 委員
2018年1月-	国際安全保障学会，書評委員

ほか新聞取材への対応など4件

氏名	田浪 亜央江
職位	准教授
研究分野	地域研究
研究キーワード	文化政策、パフォーマンス・アート、イギリス委任統治、中東、パレスチナ、移動、歓待

本学に着任して3年が過ぎた。前回このコメントを書いたのは着任一年目で、学部運営業務・教育活動における負担の程度は今から振り返るとひじょうに軽度であったのだと分かる。この2年間は、教務委員・HIROSHIMA and PEACE 委員をはじめとする業務負担が増え、研究活動とのバランスをどのように取っていくのかがつねに課題であった。

【教育活動】

とりわけ卒論演習はやりがいを感じさせる。2018年度に指導を担当した学生の一人が卒論グラプリで優秀賞を得たこと、2019年度に担当した学生が、およそ提出が不可能と思われた状態から提出にこぎつけるまでの日々の流れはドラマティックでさえあった。他方でアラビア語や中東アラブ地域研究関係の講義履修生は多いとは言えず、減少傾向にある。指導する学生数は多くはないが、そのぶん細かな対応が必要となる場面も多く、エネルギーの配分が課題である。

2019年度	エスニシティと宗教 I、中東アラブ研究 I、多文化共生入門、エスニシティと宗教 II、中東アラブ研究 II、卒業論文演習
2018年度	中東アラブ研究 I、エスニシティと宗教 I、3学部合同演習、学術研究の進め方、中東アラブ研究 II、エスニシティと宗教 II、卒業論文演習、専門演習

【研究活動】

この2年間は、科研の研究課題であるパレスチナのパフォーマンス・アートに関する研究にもっとも力を注いだ。長期の休みをフィールドワークに充てると、帰国してまとめる時間が十分とれないうちに新学期が始まってしまうことも多かったが、何とか冊子のかたちで成果をまとめることが出来、ほっとしている。一方でイギリス委任統治下パレスチナにおける「移動」と「歓待」に関する研究は、成果をまとめるのにさらに時間を要することが見込まれる。コロナウイルス感染症対策上しばらくフィールドワークが困難だと思われる状況の中、文献資料中心で進められる本研究に軸足を戻したい。

1. 田浪亜央江, パレスチナ社会における歓待のジレンマ—オスマン末期を舞台としたテキストを手がかりに, アジア太平洋レビュー 2019, No. 16, pp. 46-61, 2020
2. 中東における占領と復興—イスラエル建国とイラク、そして日本, 歴史評論, pp. 46-61, 2019
3. 田浪亜央江, 委任統治期パレスチナにおけるワタンの発見—「ハリール・サカーキーニー日記」に見る〈旅〉, 中東現代文学論集—ワタンとは何か, pp. 226-240, 2019

4. 田浪亜央江, モニュメント・証言・歴史 ナクバとヒロシマ, 現代思想, pp.114-126, 2018
5. 文部科学省科学研究費成果報告書「パレスチナ文化の現在地 抵抗するパフォーマンスアート」, 2020年3月
6. パレスチナに学ぶ⑧, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
7. パレスチナに学ぶ⑦, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
8. パレスチナに学ぶ⑥, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
9. パレスチナに学ぶ⑤, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
10. パレスチナに学ぶ④, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
11. パレスチナに学ぶ③, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
12. パレスチナに学ぶ②, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
13. パレスチナに学ぶ①, 「中国新聞」文化欄, 2018年8月
14. イラン・パペ著『パレスチナの民族浄化 イスラエル建国の暴力』の共訳, 2017年11月-

【社会活動】

2018年度は大学の公開講座講師や東京都写真美術館、広島市映像文化ライブラリーでの講師をつとめ、中東地域に関する知見、とりわけ文化や映画に関して市民社会に向けて一定の成果還元を行うことができた。アラビア語や中東アラブ地域研究関係の講義履修生の減少傾向を鑑みると、広く市民一般向けにというよりも高校への出前講義などが必要だということは自覚され、今後の課題としたい。

2019年3月	広島市映像文化ライブラリー「カーキ色の記憶」上映アフタートーク
2019年2月	東京都写真美術館「ウロボロス」上映アフタートーク
2019年2月	広島市立大学国際学部連続公開講座「難民問題と交錯する視線」
2018年12月	歴史における危機と復興の諸相
2018年5月-	日本平和学会
2018年4月	殺戮と破壊のシリアー今、エイハム・アハマドが奏でる希望の灯

氏名	寺井 里沙
職位	講師
研究分野	国際取引法、国際私法
研究キーワード	国際裁判管轄、準拠法、会社の従属法、契約責任、契約条項

2018年、2019年は、研究活動として、Brexitが国際取引に与える影響について研究しました。ドイツにはイギリス擬似外国会社（イギリスを設立地としながら、ドイツに本拠を有する会社）が数多く存在しますが、Brexitにより、ドイツ法上、イギリス擬似外国会社の社員（出資者）は無限責任社員となる可能性があります。これを回避するためにはどのような法解釈が可能か研究しました。また、EU加盟国においては契約に関する抵触法（国際契約にいずれの国の法を適用すべきか定める法）がローマI規則として統一されています。しかし、Brexitにより、イギリスで訴訟が提起された場合、ローマI規則はEU法としては適用されなくなります。それでは、Brexit後に、イギリスはどのような抵触法ルールで国際契約に関する紛争を処理することになるのでしょうか。これらに関する研究は、学術的意義はもちろん、欧州において事業展開する日系企業にとっても実務的な意義があります。

【教育活動】

講義としては「国際ビジネス法務Ⅰ」「国際ビジネス法務Ⅱ」「International Commerce」を担当しています。理論を示しつつも、最新の時事問題も紹介し、国際取引における契約の種類、決済手段、資金調達の手段について講義しています。国際取引というと味気ない印象を持つ人も多いですが、社会貢献活動においても資金調達の仕方などを工夫することでより継続的に規模の大きい結果を出すことができます。そのような意味で様々な分野と連携し、世界を広げることができる興味深い領域です。

2019年度	国際ビジネス法務Ⅰ、国際ビジネス法務Ⅱ、International Commerce
2018年度	国際ビジネス法務Ⅰ、国際ビジネス法務Ⅱ

【研究活動】

国際取引法、国際私法について研究しています。最近では、イギリスのEU離脱（Brexit）が国際取引に与える影響について以下のような研究を行っています。

1. 「Brexitと契約債務に関する国際私法」『広島市立大学国際学部叢書第10巻』90頁以下（2020）
2. 「Brexitに伴うイギリス擬似外国会社の従属法の変更」法学新報 124(9・10), 287頁以下（2018）

【社会活動】

2018年度においては、広島県立呉宮原高校において自動運転と法に関する模擬授業を行った。2019年度においては、マレーシアの実業家団体に日本のコンビニの24時間営業に関する労働法上、独占禁止法上の問題について講義を行った。

氏名	寺田 英子
職位	教授
研究分野	交通経済学、経済政策、商学
研究キーワード	交通経済学、公共交通、バス市場の制度分析、アクセシビリティ、地域交通計画、中山間地の公共交通、敬老乗車証、乗合タクシー、イングランドの地方部、港湾管理、港湾計画、港湾整備、ロジスティクス、港湾物流、港湾運営会社、国際戦略港湾、民営化、国際拠点港湾、マリーナ、放置艇

大学教員は、研究と教育を担当します。これらはどこかでつながっていて、研究によって得られた情報を教育に織り込み、サービス水準の向上を目指すのが大学教員の理想的な姿ではないかと思えます。私の場合は、これらに加え、大学運営の様々な業務にも研究調査で得た知識、技能や情報を活かすことができないかと模索しています。

研究については、公共政策の中身というよりは、制度をつくるにあたっての意思決定の仕組みや経済的な誘因（人々を動かす仕掛け）に関心を持っています。

教育については、インターネットと共存する時代の情報検索を意識して、できるだけ偏りの無い（は本当に難しいことですが）情報収集を目指して学生を指導しています。

【教育活動】

国際学部の教育では、教科書の基礎知識と最近の経済ニュースの解説を組み合わせ、できるだけ社会問題へ受講者の関心が広がるようにと意識しています。経済学を学ぶ出発点はおそらく個人と国家、個人と地域社会の関係を意識することなので、日本社会が直面している経済の変化に焦点をあてて講義を行なうようにしています。

大学院の教育では、社会人の大学院生を担当する機会が増えましたが、教育指導は学部生と比べて格段に難しいです。私自身が現実の政策に関心を持つタイプなので、事例研究を中心とした研究方法を教えると同時に、履修者がプレゼンテーションと論文執筆をできるだけ楽しめるように指導したいと考えています。

2019年度	財政学 I / II、英語応用演習 IV、3学部合同基礎演習、発展演習 I、交通論、学術研究の進め方、都市経済学 I / II
2018年度	財政学 I / II、英語応用演習 IV、3学部合同基礎演習、基礎演習、交通論、地域再生論、卒論演習 I / II、卒業論文

【研究活動】

私の専門分野である公共選択論について、特に現実の政策に関心がある研究者の場合は、分析を行なうときの予測に特徴がみられます。例えば、官僚組織によって生じる公共財の過大な供給や、大都市や小都市の行政サービスの有効性（費用対効果が高い行政組織の仕組み等）とか、政府が政策を実施することにより、国民から期待されている結果に反するような事態が起こることに注目します。そのような視点のもと、最近10年間は以下の3点が研究内容です。

1. イングランドの地方部における公共交通と社会的包摂の研究

2. 公共交通のアクセシビリティに関する日本とイングランドの比較研究
3. 国際拠点港湾のターミナル・オペレーター为民営化に関する研究

1. 飯塚秋成/寺田英子, インタビュー: 社会状況の変化や新たな課題に対応する「強い物流」を目指して, 運輸と経済, Vol. 79, No. 9, pp. 4-7, 2019.
2. 黒山良洋 (日水物流(株))・寺田一薫 (東京海洋大学)・寺田英子 (広島市立大学), 離島居住者のアクセシビリティと離島航路政策に関する研究ー長崎県および鹿児島県における定量分析ー, 海運経済研究, Vol. 52, pp. 41-50, 2018.
3. 寺田英子, 「国際拠点港湾の港湾運営会社に関する事例研究」, 海運経済研究, No. 52, pp. 1-10, 2018.
4. 日本海運経済学会賞 (論文の部), 日本海運経済学会, 2019年10月26日受賞.

【社会活動】

今後も、地域社会のニーズに応えられる大学教育サービスと研究活動を続けていきたいと考えています。急速に衰えていく日本の社会で、政府から地方自治体への政策決定権と財源の移譲が進めば、(特に後者が重い課題ですが) 財政運営に関する情報公開・説明責任がいっそう重要となるはずで、政策の事前説明と事後評価にあたりデータ解析・問題解決・政策決定の一貫した分析作業と取りまとめ、納税者への説明が必要となります。私もそのような作業に関わりつつ、研究作業とバランスをとりながら地域社会に貢献できればうれしいです。

2020年4月-2022年3月	弓削商船高等専門学校運営諮問会議委員
2019年10月-2021年10月	日本海運経済学会, 理事、編集委員
2019年10月-2021年10月	日本交通学会, 評議員
2019年7月-2021年7月	広島県総合計画審議会委員
2019年3月-2021年3月	中国地方整備局事業評価監視委員会委員
2019年1月-2020年12月	呉市公共事業評価委員
2017年10月-2019年10月	日本交通学会, 評議員
2017年9月-2019年8月	広島県海域利用審査会委員
2017年9月-2019年8月	広島県港湾振興課, 広島県海域利用審査会委員
2017年6月-2019年3月	国土交通省中国地方整備局, 中国地方整備局事業評価監視委員会
2017年4月-2019年3月	中国地方整備局事業評価監視委員会委員
2016年12月-2018年12月	広島県港湾振興課, 広島県広島港地方港湾審議会委員
2016年12月-2018年12月	広島県地方港湾審議会委員
2016年6月-2018年	公益事業学会, 評議員
2015年10月-	日本海運経済学会, 理事、編集委員、国際交流委員
2013年10月-	日本交通学会, 評議員
2013年10月-	日本海運経済学会, 評議員、編集委員

2004年-	応用地域学会
2002年-	公益事業学会
2002年-	The International Association of Maritime Economics
1999年9月-	バスネット研究会 (BUSNET - FORUM)
1999年9月-	バスネット研究会, バスネット研究会 (BUSNET - FORUM) 設立発起人
1998年-	中四国商経学会
1994年-	日本財政学会
1984年-	日本交通学会
1984年-	日本海運経済学会

氏名	原 雅樹
職位	講師
研究分野	英米・英語圏文学
研究キーワード	トマス・ハーディ、金融、倫理、小説

2018年度4月に着任した。着任して最初のこの2年間で、諸活動の土台を形成するために、まず教育活動と研究活動に重点を置いて取り組んできた。教育活動では、専門であるイギリス文学・文化に関連する授業を中心に担当した。主担当のすべての授業でアクティヴ・ラーニングの要素を取り入れることで、受講者の能動的に学習する姿勢を涵養することができた。研究活動では、科研費研究課題である「トマス・ハーディの小説における賭博表象の倫理的な意義に関する研究」に取り組み、学術調査、学会発表、論文投稿というかたちで成果を残すことができた。

【教育活動】

着任1年目は、専門であるイギリス文学・文化関連の講義と「発展演習ⅠⅠ」を担当した。2年目は、それらに加え、「基礎演習」、「国際研究入門」、「世界の文学」、「言語・コミュニケーション研究入門」といった授業も担当した。いずれも入門系の授業であるが、専門分野をうまく活かした内容にすることができた。また2年目からは「専門演習」も担当した。専門的な内容について、レベルを落とさず、かつ興味がわくように授業を行うことに重点を置いて取り組んできた。

2019年度	イギリスの文学と文化Ⅰ、イギリス文化論Ⅰ、英米文学概論Ⅰ、国際研究入門、世界の文学、専門演習Ⅰ、イギリスの文学と文化ⅠⅠ、イギリス文化論ⅠⅠ、英米文学概論ⅠⅠ、発展演習ⅠⅠ、言語・コミュニケーション研究入門、基礎演習、専門演習ⅠⅠ
2018年度	イギリス文化論Ⅰ、イギリスの文学と文化Ⅰ、英米文学概論Ⅰ、イギリスの文学と文化ⅠⅠ、イギリス文化論ⅠⅠ、英米文学概論ⅠⅠ、発展演習ⅠⅠ

【研究活動】

着任と同時期に採択が決まった科研費研究課題、「トマス・ハーディの小説における賭博表象の倫理的な意義に関する研究」に主に取り組んできた。2019年度には、12月に査読論文を一本投稿した。これについては査読結果が出ており、内容を若干修正した後、2020年度に出版される予定である。研究を進めるうちに、新たな発見があった。それは、金融資本主義と小説との関連性という視点の獲得である。このテーマの研究は近年注目を集めている。本研究では、ここにさらに倫理という観点を付け加えることができた。

1. 原雅樹, 書かれた大地へ——トマス・ハーディの『帰郷』における帰郷の二つのかたち, 『ハーディ研究』, No. 44, 2018
2. 研究発表, 「負けない賭けをする」——トマス・ハーディの悲観主義と倫理学, 日本英文学会関西支部第14回大会, 2019年12月

3. 研究発表, 『熱のない人』と賭博熱, 日本ハーディ協会第61回大会, 2018年10月

【社会活動】

着任して2年間は、教育・研究・大学運営に慣れ、諸活動の土台を形成することに注力した。そのため、社会活動としては、所属学会で会員として活動することが主になった。だが、この2年間で、研究・教育に真剣に取り組んだ結果、模擬授業や公開講座をするための準備が整った。今後は依頼があれば積極的に引き受けたい。文学という分野は一見とつきにくいようだが、実は非常に身近で興味深いものである。社会活動でそのことを伝えていきたいと思う。

氏名	藤原 優美
職位	講師
研究分野	日本語教育、言語学、外国語教育
研究キーワード	日本語と中国語の比較

2018年4月に着任して、教育活動と研究活動においては主に、中国語教育や日本語と中国語の対照研究に関する活動を行ってきた。とりわけ西南大学からの中国語教育実習生の受入や指導もした。社会活動に関しては、日中親善協会が主催するイベントへ参加する際の中国人留学生の引率や、国際学部研究交流委員会において公開講座、国際交流委員会において国際交流や留学関連業務に携わった。

【教育活動】

全学共通科目として、中国語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを担当し、学生の中国語習得および中国語力の向上に努めた。国際学部専門科目として、言語比較論Ⅰ・Ⅱを担当し、言語学の基礎知識を教えながら、日本語と中国語や日本語と英語の対照研究も学生に紹介していた。その他、発展演習Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文演習Ⅰ・Ⅱでは、研究手法、レポートや論文執筆の指導も行なった。オムニバス形式の講義として、言語・コミュニケーション研究入門も担当した。

2019年度	中国語Ⅰ、中国語Ⅱ、中国語Ⅲ、言語比較論Ⅰ・Ⅱ、発展演習Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文、海外短期語学留学（西南）
2018年度	中国語Ⅰ、中国語Ⅱ、中国語Ⅲ、言語比較論Ⅰ・Ⅱ、発展演習Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、言語・コミュニケーション研究入門ⅠA、国際交流演習

【研究活動】

主に日本語と中国語の対照研究を行い、国内外の学会で研究成果を発表した。

1. 成都方言の「児化」に関する一考察，広島国際研究，Vol. 25，pp. 61-70，2019
2. Presentation，初級汉语教育実習指導中提高学生语言运用及跨文化交际能力的个例分析，The Fifth International Forum on Linguistics and Chinese Education，2019年10月
3. Presentation，日语母语学习者“的”的偏误分析及教学对策，第十一届亚太地区国际汉语教学学会年会，2019年8月
4. 关于成都话中“儿化”现象的考察，日本中国語学会第68回全国大会，2018年11月

【社会活動】

広島県立高陽高等学校にて模擬授業を担当した。

日中親善協会が主催する年2回のイベントに本学の中国人留学生を引率して参加した。

2019年11月8日	北陸大学にて国際学研究科進学説明会
2019年9月26日	広島県立高陽高等学校にて模擬授業
2018年11月16日	北陸大学にて国際学研究科進学説明会を実施

氏名	古澤 嘉朗
職位	准教授
研究分野	国際関係論
研究キーワード	紛争解決論、グローバリゼーション、平和構築論、サブサハラ・アフリカ、紛争後社会の警察改革（支援）、紛争後社会の記憶と和解

研究面では①科研費・基盤研究（B）「紛争後の国家建設と治安部門改革：リベラルな価値導入の理念的妥当性と実現への条件」（分担者、2016-18年度）を無事に終え、②科研費・基盤研究（C）「平和構築の力学と国家に関する研究：サブサハラ・アフリカの事例に着目して」（代表者、2019-22年度）を始めた。基盤研究（C）を更に発展させるべく、英国ブラッドフォード大学との共同研究も始めた。教育面で特筆すべき点としては、主査として学部生計9人の卒論指導を行い（2018年度5人、2019年度4人）、その内の1人が2019年度に「特色ある卒論」（主催：国際学部）に選出された。大学院博士後期課程の大学院生1人の副査も担当している。2019年特別教員表彰受賞。

【教育活動】

（1）学部と大学院の講義を担当した以外に、学部3-4年生対象の演習の一環として香川大学法学部（2018・19年度）と合同ゼミを実施した。

（2）学部派遣インターンシッププログラム（通称：ルワンダ NGO インターンシップ）を立ち上げ、2020年度から正式に開始することとなった。

（3）全学オープンキャンパス・ワーキンググループ委員を2年間務めた（2018-19年度）。

（4）2020年3月に教員特別表彰を受賞。

2019年度	国際研究入門、紛争解決論 I・II、International Politics i・ii、HIROSHIMA & PEACE、英語応用演習 IV、発展演習 I、3学部合同基礎演習、専門演習 I・II、卒論演習 I・II、卒業論文、国際社会研究演習（紛争解決論）
2018年度	国際研究入門、紛争解決論 I・II、International Politics i・ii、HIROSHIMA & PEACE、英語応用演習 IV、発展演習 II、専門演習 I・II、卒論演習 I・II、卒業論文、国際社会研究演習（紛争解決論）

【研究活動】

（1）2018年12月、人間の安全保障学会・2018年度年次研究大会を責任者として広島国際会議場と広島市立大学にて開催した。100人弱の学会会員が参加した。研究大会の成果を学会誌特集号 Peacebuilding and Human Security として2020年3月に公刊した。

(2) 2018-19年度：著書2点、論文2本、口頭報告2回、その他の出版物4点

(3) その他、日本平和学会2018年度秋季研究大会・アフリカ分科会にて討論者（於：龍谷大学、2018年10月28日）、日本国際政治学会2018年度研究大会・平和研究分科会にて司会（於：大宮ソニックシティ）を務めた。

1. Yoshiaki Furuzawa, "Peacebuilding and Human Security," Special Edition of *Journal of Human Security Studies* Vol. 1, 人間の安全保障学会, 2020, 編者
2. 落合雄彦編, 『アフリカ安全保障入門』, 晃洋書房, 2019, 分担執筆
3. 藤重博美・上杉勇司・古澤嘉朗編, 『ハイブリッドな国家建設：自由主義と現地重視の狭間で』, ナカニシヤ出版, 2019, 共編者
4. 国際開発学会編, 『国際開発学辞典』, 丸善出版, 2018, 分担執筆
5. 古澤嘉朗, 平和構築と法の多元性—法執行活動に着目して, 『国際政治』特集「体制移行と暴力—世界秩序の行方」, No. 194, pp. 111-124, 日本国際政治学会, 2018
6. Yoshiaki Furuzawa, Chiefdom Police Training in Sierra Leone (2008-2015)— An Opportunity for a More Context-Based Security Sector Reform? *Journal of Peacebuilding and Development*, Vol. 13, No. 2, pp. 106-110, 2018

他4件

【社会活動】

(1) 地域との連携を意識し、広島県主催の高校生対象事業「ひろしまジュニア国際フォーラム」(2018・19年度8月)、また公益財団法人ひろしま国際センター主催の「広島平和研修」にファシリテーターとして関わった(2018年8・10・11月、2019年8月)。

(2) 国連難民高等弁務官駐日事務所 (UNHCR) とのこれまでの関係を発展させるべく、難民映画祭パートナー映画上映会を学部の公開講座として開催できるように調整した。初年度にあたる2019年1月26日には広島市まちづくり市民交流プラザにて、映画「アイ・アム・ロヒンギャ」の解説を担当した。

(3) 2018・19年度に人間の安全保障学会理事(非常勤)を務め、2020年2月からは日本平和学会アフリカ分科会・共同責任者(非常勤)を務めている。

2020年1月-現在	日本平和学会, アフリカ分科会共同責任者(非常勤)
2019年1月	広島市立大学国際学部公開講座・UNHCR 難民映画祭学校パートナー上映会「アイ・アム・ロヒンギャ」(主催:国際学部 後援:国連UNHCR協会・UNHCR駐日事務所・広島市 於:広島市まちづくり市民交流プラザ 担当:解説)
2018年4月-2020年3月	人間の安全保障学会, 理事(非常勤)

他8件

氏名	目黒 紀夫
職位	准教授
研究分野	環境社会学、アフリカ地域研究、開発社会学
研究キーワード	アフリカ、環境保全、開発援助、牧畜民、マサイ、ケニア、野生動物保全、観光、伝統文化

新しい職場に徐々に慣れてくる中で、教育活動と研究活動のバランスをいかに取るか試行錯誤を行ってきた。いまだ至らない点が多いとは思いますが、教育活動に関しては一定の成果が現れてきているように感じるので、経験を積み重ねながらさらなる改善を試みつつ、その一方で研究活動についてこれまで以上の成果を出せるように精進していきたい。

【教育活動】

少人数の大学・学部で一人ひとりの学生に細かく対応できるからこそ、それぞれの個性に合わせた指導をどこまでやれるのか、それが期待するほどの成果につながっているのかを見極めることに腐心してきた。結果として積極的にフィールドワークに赴くゼミ生が増え、「特色ある論文」に選出されたり学術雑誌に投稿できるほどの水準の卒業論文が書かれたのは誇るべき成果だと考える。こうした特色をいかに継承していくかが今後の課題である。

2019年度	地球環境論、国際研究入門、国際開発学、開発プロジェクト論、NPO論、アフリカ研究Ⅱ-i、アフリカ研究Ⅱ-ii、3学部合同基礎演習、発展演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、卒論演習Ⅰ、African Societies and Development、Hiroshima and Peace、国際社会研究演習（国際開発論）Ⅱ、環境社会学、専門演習Ⅱ、卒論演習Ⅱ、国際社会研究演習（国際開発論）Ⅲ
2018年度	地球環境論、国際開発論Ⅰ、専門演習Ⅰ、アフリカ研究Ⅱ、国際研究入門、開発プロジェクト論、NPO論、卒論演習Ⅰ、発展演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、国際開発論Ⅱ、卒論演習Ⅱ、基礎演習、地域再生論、国際社会研究演習（国際開発論）Ⅰ

【研究活動】

代表および分担者を務める科研を計画通りに進める形で研究活動は行ってきた。その結果、日本語では論文と書籍、英語では論文を公表することができたので順調に研究を進めることができたと考える。分担者を務める大規模科研の最終成果物（シリーズ物の英文論集）に関して編者を務めることになっているので、この大役をこなしつつ研究をさらに発展させる筋道を考えていきたい。

1. 太田至・曾我亨・北村光二・内藤直樹・杉山祐子・湖中真哉・波佐間逸博・河合香吏・佐川徹・川口博子・中村香子・孫暁剛・泉直亮・楠和樹・稲角暢・羽淵一代・関根悠里・作道信介・白石壮一郎・庄司航・松隈俊佑、『アフリカ・サバンナ塾—遊牧民の生き方に学ぶ』，昭和堂，2019，263-281頁，分担執筆

2. MEGURO, Toshio, The unchanged and unrepresented culture of respect in Maasai Society, African Study Monographs, Vol. 40, No. 2-3, pp. 93-108, 2019
3. Toshio Meguro, Neoliberal Tourism Development: The Case of 'Tourism Conservation Enterprises' in Kenya's Maasailand, Global-e, Vol. 11, No. 40, pp. 93-108, 2018
4. 研究発表, 目黒紀夫, イベント化する野生動物保全における「スペクタクル」の表象—ケニア南部、マサイ・オリンピックの事例研究, 環境社会学会第 60 回大会, 2019 年 12 月
5. Panel discussion, Toshio Meguro, Sport for Development and Conservation? (Un)changing Modernity and Authenticity of Maasai Olympics, Kenya-Japan Collaboration Workshop on Sport Research, 2019 年 8 月
6. 研究発表, 目黒紀夫, マサイ・オリンピックに関する環境社会学のフィールド調査, 日本スポーツ人類学会 2019 年度第 2 回スポじんサロン, 2019 年 7 月
7. 研究発表, 目黒紀夫, 第 4 回マサイ・オリンピック: 変わったものと変わらないもの, 日本アフリカ学会第 56 回学術大会, 2019 年 5 月
8. Presentation, Toshio Meguro, Misrepresentation and Appropriation of Cultural "Innovation" by Neoliberal Conservation Alliance: The Case of the Maasai Olympics, International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity, 2019 年 1 月

【社会活動】

NPO 法人での活動を継続しつつ、公開講座での講師なども務めた。現在、個人 HP の開設に向けて用意を進めているところであり、それが開設されたならばインターネットを通じた情報発信にも力を入れていくつもりである。

2019 年-	アフリカ学会, 第 58 回大会実行委員事務局長
2019 年-	ナイルエチオピア学会, 運営委員
2019 年-	ヒトと動物の関係学会, 評議員
2019 年 8 月	第 24 回広島県国際理解教育研究大会, 広島県国際理解教育研究協議会
2012 年 6 月-	特定非営利活動法人アフリック・アフリカ理事/事務局長
2008 年-	アフリック・アフリカ, 事務局員

氏名	山口 えり
職位	准教授
研究分野	日本史
研究キーワード	信仰、日本文化、日本古代、災因論、史料英訳

専門領域は「日本古代史」であり、歴史の表から隠れてしまった日本の文化や思想の蓄積が、いかにして現在まで形成されてきたのかを明らかにしたいと考えている。その方法として、災害が起きたときに人々がどのように対応したのか、これまで個別に検討されてきた、神祇信仰・仏教・陰陽道の三つの信仰形態の儀礼の行われ方に着目して、研究を行っている。

国際学部において、主として前近代の日本文化を担当する立場から、海外への日本研究の発信にもこれまで以上に注力しており、その成果は本学の講義に生かしている。加えて、2018年4月の着任以降は、広島県の歴史文化についても研究を行っている。

大学運営については、広報委員・学生委員・編集委員を務めた。オープンキャンパスやホームカミングデーへの参加を通し、着任ほどなくして本学について知るよい機会を得られた。

【教育活動】

学部の講義については、クラス規模に応じた授業形式を取り入れつつ、学生の興味関心、理解度に合わせた授業を行うようにしている。その年の日本文化に大きく関わるトピック（例えば2019年は即位に関わる事象）を取り上げ、伝統的とされるあり方について問い直しを行った。また、授業を通じ、『延喜式』研究の海外への発信に参加し、国際的視野からみた日本文化研究の一端を学生にも経験してもらっている。なお、演習では、将来を見据え、文章力・プレゼン力の向上に力を入れている。

大学院（前期課程）では全学共通科目のほか、専門科目も担当した。修論のテーマに合わせた古典籍・古文書読解を重視している。

2019年度	日本文化史Ⅰ、日本文化史Ⅱ、日本研究、発展演習Ⅰ、発展演習Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、世界の文学、日本論（院）、日本文化論Ⅰ（院）
2018年度	日本文化史Ⅰ、日本文化史Ⅱ、日本研究、発展演習Ⅰ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、日本文化論Ⅰ（院）

【研究活動】

今期の最も大きな研究成果は、著書『古代国家の祈雨儀礼と災害認識』の出版である（令和元年度科研・研究成果公開促進費）。本書は博士学位論文（2018年2月授与）を基にしたものであり、現時点での主業績である。

学外の共同研究では、前近代日本史史料、特に10世紀初頭の法制史料である『延喜式』の英訳を継続的に行っている。

また、着任以来、廿日市市原神社の神楽・文書研究をはじめ広島の歴史研究に携わっている。学内特色研究費「地酒が秘める文化的価値の評価とマーケティング・オプションの効果検証」（代表：山根史博准教授、研究分担者：李玲准教授）における広島の地酒の研究成果は、日本文化史

I の講義で開陳している。

1. 山口えり『古代国家の祈雨儀礼と災害認識』，塙書房，2020，単著
2. 山口えり「The Power of Englishiki —『延喜式』の国際発信」，歴史系総合誌『歴博』219号，2020，単著
3. 山口えり「海外における『延喜式』の研究状況－『延喜式』の翻訳書を中心に」，『国立歴史民俗博物館研究報告』218号，pp. 329-352，2019，単著
4. 山口えり「塩川哲朗著『古代の祭祀構造と伊勢神宮』」，『史学雑誌』128-8号，pp. 77-78，2019，単著
5. 研究発表，「日本古代の陰陽道と「理運」」，第9回陰陽道史研究会，2019年9月
6. 研究発表，「延喜太政官式 翻訳上の諸問題」，「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」英訳ワークショップ，2019年6月・3月
7. 研究発表，「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」プロジェクトの紹介－『延喜式』の翻訳をいかに進めていくか－」，東京大学史料編纂所一般共同研究「日本史用語グロッサリーの蓄積と改良にむけて」研究会，2018年12月
8. 研究発表，『延喜式』の英訳に関する現状と課題，「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」研究集会，2018年9月

【社会活動】

2018年4月に広島に着任以来、地域団体からの協力依頼には可能な限り対応している。2019年は令和改元・大嘗祭、浅野氏広島入城四百年などの行事もあり、貢献できることも多かったと思う。日本古代史分野の研究の海外発展のため、史料・論文の日英・英日翻訳にも従事した。以下に主な活動を示す。

2019年12月	論文翻訳：ブライアン・ロウ「古代寺院のネットワークと人々」 『古代寺院』岩波書店、2019年
2019年11月17日	公開講座「令和改元と大嘗祭」
2019年9月7日	講演「三碑から知る河内の近代」
2019年4月～	広島市文化財団文化活動助成事業審査委員会 委員
2018年12月4日	講演「古代国家をつくった稲の祭り」
2018年5月2日	「河内地区について」(藤の木小学校2年生へのミニ講座)

氏名	山口 光明
職位	教授
研究分野	健康心理学、運動心理学
研究キーワード	健康心理学（健康づくり、まちづくり）、運動心理学（スポーツ、健康づくり）

教育・研究・社会貢献の一貫したテーマとして、「SETOUCHI の島の創造的イノベーション」を掲げています。瀬戸内のすぐれた観光資源を VR（バーチャルリアリティー）の技術を用い、その魅力を発信することで地域のブランディングを目指しています。

そのプロセスにおいて、水産海洋技術センター（呉市）からの技術相談に応えながら、水中撮影やバーチャルリアリティー（図 1）の技術を高める事が必要不可欠であり、国際学部だけでなく情報科学部の教員と共同で取り組んでいます。



図 1 バーチャルリアリティーのイメージ

また、学生の地域に出る力を伸ばすために、ボートのライドシェア（相乗り）の実証実験に取り組むピージーシステム社と江田島市産業企画課と情報の共有をしつつ、瀬戸内の地域づくりに繋がる活動的なプロジェクトとして展開できればと考えています。

【教育活動】

地域社会の健康づくりやまちづくりについて学生達と一緒に取り組んでいます。その際、客観的なデータの収集と分析のために地域課題分析システム（RESAS：リーサス）を活用し、学生達の関心にあったデータ（人口、まちづくり、産業、医療・介護、就職など）が入手できるようにしています。また、専門演習（地域実践演習）、卒論演習においては、学生がゼミ室において本を通した学びだけに終わらないように、大学の外の団体や研究機関（ピージーシステム、江田島市産業企画課、水産海洋技術センター）と情報の共有をしながら、地域の活性化について共に考える機会を設けるようにしています。

2019 年度	健康心理学、専門演習、卒論演習
---------	-----------------

【研究活動】

ボートのライドシェア（相乗り）事業については、ピージーシステム社と瀬戸の島をボートで結ぶ実証実験を実際に行いながら、実用化に向けた課題と改善方法を探ります。

合わせて行うトレイル（山歩き）に来たくなるような江田島の魅力的なポイントを全天球カメラで撮影し、その画像データをストリートビューに投稿することで、若者たちの視点から見た瀬戸の海の魅力を広く発信する研究活動を開始します。

海の魅力として、江田島にはボートやシーカヤックといった海のアクティビティの拠点が複数あり、その情報の発信にも水中撮影の技術も活用しながら積極的に関わっていくつもりです。

【社会活動】

「SETOUCHI の島の創造的イノベーション」というテーマのもと、急速に「過疎化」と「高齢化」が進む瀬戸内の島において、①島を訪問する人の流れを促す事と ②海辺で快適に暮らす空間を設置することによって、瀬戸内の島の賑わいを創り出すことを目的とします。

人の流れは、システム開発のピージーシステム社（広島市）が進めようとしている「ボートのライドシェア（相乗り）事業」（図2）と広島市、呉市、江田島市、廿日市市をトレッキングで巡る「広島湾岸トレイル」（図3）とを繋げることで新しい人の流れを創り出したい。

合わせて、海辺に小さくて快適な空間としてのモバイルハウスを広島市立大学と武蔵野美術大学とMUJI とが共同で開発し、江田島や大崎下島などの瀬戸内で島を訪れる人たちに実際に使ってもらいながら完成度を上げていく。将来的には災害時にも使えるモバイルハウスも検討したい。

日本経済新聞

朝刊・夕刊 ストーリー Myニュース 日経会社情報 人財

トップ 速報 経済・金融 政治 ビジネス マーケット テクノロジー 国際 オピニオン スポーツ

海上のライドシェア、商用化へ瀬戸内海で実証開始

2019/6/24 6:00

保存 共有 印刷 共有 ツイート その他



ピージーシステムは海上のライドシェア事業に乗り出す

図2 ボートのライドシェアのイメージ

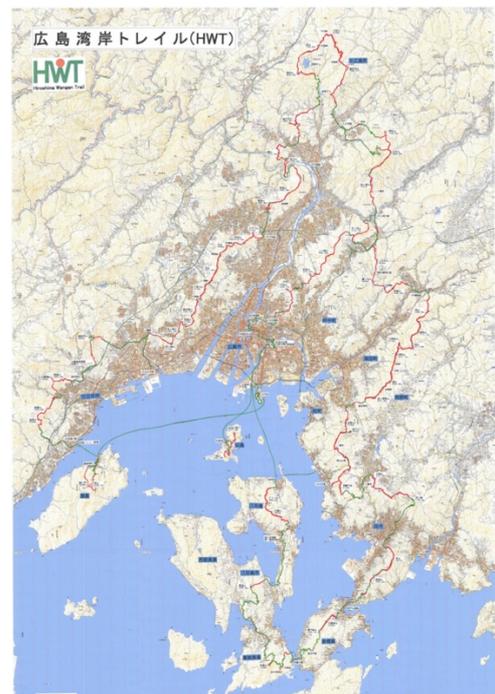


図3 広島湾岸トレイルのコース

氏名	山根 史博
職位	准教授
研究分野	経済政策、環境政策・環境社会システム
研究キーワード	環境経済評価、不確実性認知、生態系サービス、食品安全、原子力災害

◆研究活動は「経済学の理論をベースに、統計調査・分析を用いて社会問題の原因やメカニズムを実証的に解明することで、具体的な改善策の提言に繋げること」であり、その知識やスキルを学生に教授し、市民向け講座などで社会への普及を図っている。教育・研究・社会活動へのエフォートの比率はおよそ4：5：1。

◆大学運営に関しては、国際学部の教務委員と入試委員を務めた。

【教育活動】

◆従来から担当しているミクロ経済学と基本統計学に加え、2019年度にデータ分析入門を新設。この講義では、統計学の一般的な教科書の内容ではなく、統計リテラシーの重要性、データ分析の射程の広さや多様性を扱ったほか、Excelを使った分析演習も行った。

◆専門演習では、学習効果が薄いことから従来の輪読を止め、ゼミ生個別に卒論のテーマ決め（発案、文献レビュー、研究の意義についての議論）を指導した。

◆卒論演習では、喫煙行動、地域創生、SNSの利用実態などをテーマとする11名の卒論指導を行った。

2019年度	基本統計学 II-i、基本統計学 II-ii、ミクロ経済学 II、3学部合同基礎演習、卒論演習 I、専門演習 I、ミクロ経済学 I、基本統計学 I、データ分析入門、卒論演習 II、専門演習 II、発展演習 II、地域再生論、卒業論文
2018年度	ミクロ経済学 II、専門演習 I、地域課題演習、卒論演習 I、基本統計学 II-ii、基本統計学 II-i、ミクロ経済学 I、地域再生論、卒論演習 II、学術研究のための基礎統計、発展演習 II、専門演習 II、基本統計学 I、卒業論文

【研究活動】

◆2011年以降、原子力災害に関する研究（「福島第一原発周辺の資産価値変動」、「低線量被曝による健康リスクや原発事故の再発リスクに対する人々の認知と不安のメカニズム」）に取り組んでおり、現在も継続中である。

◆2016年度から環境省環境研究総合推進費プロジェクト S-15 に参画することになり、自然科学の専門家と連携しながら、国内の自然資本・生態系サービスの社会・経済的価値の評価、並びにそれらを持続的に利用・保全するためのガバナンスの解明に取り組んでいる。2018・2019年度にはweb調査を実施し、「地域住民としてのアイデンティティ効用と地域固有生態系サービスとの関係」、「地域の自然環境保全への態度に対する regret の作用」に関する分析を行った。

◆その他、ゼミ生や他の教員（山口えり准教授、李玲講師）と共同で「しまなみ海道の観光需

要調査」や「地酒・郷土食の文化的価値に関する研究」に取り組んだ。

1. 山根史博, 不確実性認知・意思決定に関する実証研究の動向, 農業経済研究, Vol.90, No.2, pp.144-162, 2018
2. K. Matsushita, K. Taki, F. Yamane and K. Asano, Shadow Value of Ecosystem Resilience in Complex Natural Land as a Wild Pollinator Habitat, American Journal of Agricultural Economics, Vol.100, No.3, pp.42-45, 2018
3. 研究発表, 山根史博, 地域住民としてのアイデンティティ効用と地域固有の生態系サービスとの関係, 日本公共政策学会第22回研究大会, 2018年6月

【社会活動】

◆所属学会の編集委員を務めた。

◆行政職員を対象に統計リテラシーや統計調査に関する講義を行った。

2019年1月	政策形成における統計の利活用 【広島市役所職員研修】
2018年4月-2020年3月	農村計画学会編集委員
2018年1月-	政策形成における統計の利活用 【広島市役所職員研修】, 広島市役所
2017年10月-	なぜ万人が統計学を知るべきなのか? 【高校生のための広島市役所サテライト講座】, 柳井市、広島市立大学
2017年4月-	日本原子力学会編集委員

氏名	湯浅 正恵
職位	教授
研究分野	社会学
研究キーワード	社会秩序、制度、政治的なもの、アイデンティティ、社会運動

2018・19年度は、過去10年間の仕事を総括する著書の構想と準備が中心の仕事となり、教育と大学業務以外の学会発表や他の仕事は必要最小限にとどめた。2019年後期は、執筆時間を確保するために半年の長期研修を取得した。しかしながら前期からの委員会業務と卒業論文、修士論文の指導をしながらの執筆となり、また3月からはコロナ感染症対策のための新年度準備などに時間を費やし、著作を完成することはできず、2020年度の脱稿を目指している。

【教育活動】

2019年度は長期研修のため担当講義が少なくなっている。それ以外は特に大幅な変更はないが、国際社会論は2019年前期に講義内容を一新し、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故の日本社会への影響をテーマとし、過去10年間の研究内容を講義することとした。これまで単発的に、国際研究入門やHIROSHIMA and PEACEなどで講義してきた内容を15コマの講義とし、執筆中の著作の内容を含めながら学生とともに思考を深めるプロセスを楽しむことができた。講義と課題、課題を使った講義内でのディスカッションなどを効果的につなげ、学生の主体的な学びがさらに深まるよう工夫を重ねていきたいと考えている。

2019年度	国際社会論 I、社会学、現代社会論 I、Hiroshima and Peace、国際研究入門、卒論演習
2018年度	社会学、国際研究入門、国際社会論 I、Hiroshima and Peace、3学合同基礎演習、現代社会論 I、英語応用演習 IV、労働と社会、現代社会論 II、国際社会論 II、専門演習、卒論演習

【研究活動】

「黒い雨」問題に関する意見書を執筆することで、2018年までの原発事故における低線量被ばくの政治についての研究を、戦後の国際関係の中での日本と広島というフレームワークで考えるようになった。それにより著作の構成も大きく変更することとなったが、新たなフレームワークでの研究に手ごたえを感じている。著作に注力したため、2年間の研究業績は少ないが、日本平和学会では継続して報告し、自らの研究の方向性を確認する良い機会となった。

1. 研究発表、「多様性と対話をめぐる行政、市民、アーティスト」、日本平和学会2019秋季研究集会、2019年11月
2. 研究発表、「「黒い雨」被爆者の認定を阻む「科学的・合理的な根拠」」、日本平和学会大会2019年度春季研究大会、2019年6月
3. 湯浅正恵、傍観者の判断—ハンナ・アーレントの政治思想から考える、日本社会学会大会、2018年9月

4. Invited talk, Masae YUASA, Life of Iwai Islanders- A good way to fight against the global nuclear totalitarianism, German-Japanese Peace Forum 2018, 2018年9月
5. その他, 日本平和学会春季大会部会「核兵器禁止条約と市民社会の役割」討論, 日本平和学会 2018年度春季大会, 2018年6月

【社会活動】

広島「黒い雨」裁判のため意見書を執筆した。過去数年の研究に基づく二つの意見書は、その後の研究活動を方向付ける重要な仕事となった。恒例となっている国際基督教大学のロータリー平和センターの学生への広島長崎講座の提供は、2019年度（2020年3月）はコロナ感染拡大で中止となり大変残念だった。また日本平和学会では理事と複数の委員に任命され、これまで以上の貢献が求められることとなった。

2020年1月-	日本平和学会中国・四国地区研究会代表
2020年1月-	日本平和学会学会賞選考委員
2020年1月-	日本平和学会理事
2019年11月-	日本平和学会「平和と芸術」分科会責任者
2019年8月	広島「黒い雨」裁判意見書『『黒い雨』による内部被曝』
2019年8月	広島「黒い雨」裁判意見書『『黒い雨』被爆者の認定を阻む『科学的・合理的な根拠』を考える』
2019年3月	A Thought on Hiroshima Heart: For Political Judgement between an unsettled past and alternative future, Hiroshima - Nagasaki Peace Study Course for ICU Rotary Peace Center

氏名	横山 知幸
職位	教授
研究分野	外国語教育
研究キーワード	翻訳研究

教育活動に関しては、これまで蓄積してきたことを基に、学生の状況に応じて、着実に内容をアップデートしている。研究活動に関しては、従来から行っているコンピュータを用いた数値分析をもう少し発展させるとともに、英文和訳や英日翻訳に関する最も基礎的な側面に関する質的・理論的な議論も行っている。社会貢献の比重が小さいが、必要とされ依頼されたことなどはきちんと行っている。大学運営に関しては、教職課程委員会や入試関係業務等を誠実にしている。

【教育活動】

例年通り、学部や大学院の翻訳関係や英語教育関係の授業を行っている。大学院の論文指導関係の業務も行っている。オンライン授業の導入は急務であるが、以前から独自の授業用サーバを研究室に設置し、XOOPS系のコミュニティサイトを用いて、学生に作業を行わせるようなタイプの授業を行っている。学生の理解の把握や説明のための情報提示の利便性の向上を考えている。このサーバの書き込みを見れば、学生の理解の変遷がある程度わかるので、それに応じて説明内容を毎年少しずつ更新している。また、英語教育関係の授業では、教職課程の再認定に伴って、内容がある程度変わったので、時代に応じた教育内容に調整している。

2019年度	教科教育法（英語）A、翻訳論Ⅰ・Ⅱ、英文法論、言語・コミュニケーション研究入門 B、英語読解法Ⅰ・Ⅱ、3学部合同基礎演習、発展演習Ⅰ、卒業論文、卒論演習Ⅰ・Ⅱ
2018年度	教科教育法（英語）A、翻訳論Ⅰ・Ⅱ、英文法論、英語読解法Ⅰ・Ⅱ、3学部合同基礎演習、発展演習Ⅰ、専門演習Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

共著書の1章として下の単著論文を書いた。英文和訳の基本構造を理解するために重要となる明治期のリーダーの「独案内（ひとりあんない）」と呼ばれる書物から、多くの実例を示しながら、特に「情報構造」という視点を新たに加え、英文和訳の基本構造を質的な面と数値的な面の両方から議論している。

1. 英文和訳と英日翻訳における「語順の問題」の基本構造——数量的視点と情報構造の視点、複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス：境界面での変化と創造に関する新しい見方（広島市立大学国際学部叢書9 第三章），Vol.9, pp.45-59, 2019

【社会活動】

社会活動の比重は少ないが、必要や依頼に応じた貢献などを行っている。

1994年5月-	四国英語教育学会
1987年10月-	大学英語教育学会
1984年4月-	全国英語教育学会
1984年4月-	中国地区英語教育学会
1984年4月-	中国四国教育学会

氏名	吉江 貴文
職位	准教授
研究分野	文化人類学・民俗学、地域研究
研究キーワード	文化人類学、ラテンアメリカ地域研究、文書研究

各年度の「教員活動における年度計画」の内容に即して、ある程度計画通り遂行することが出来た。

【教育活動】

これまでに蓄積した研究・教育成果を漸進的に授業計画、資料作成等に反映させ、講義内容の改善に努めることができた。

2019年度	発展演習Ⅰ、スペイン語Ⅰ、比較民族学Ⅰ、ラテンアメリカ研究Ⅰ、卒論演習Ⅰ、発展演習Ⅱ、卒論演習Ⅱ、スペイン語Ⅱ、比較民族学Ⅱ、ラテンアメリカ研究Ⅱ
2018年度	発展演習Ⅰ、スペイン語Ⅰ、比較民族学Ⅰ、ラテンアメリカ研究Ⅰ、専門演習Ⅰ、発展演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、スペイン語Ⅱ、比較民族学Ⅱ、ラテンアメリカ研究Ⅱ

【研究活動】

科学研究費補助金・基盤研究（B）「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」を研究代表者として運営・実施することに努め、ある程度計画通りに遂行することが出来た。

1. 吉江貴文，国立民族学博物館論集 5 近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク，悠書館，2019，編者
2. 研究発表，吉江貴文，植民地都市ラパスにおける公証人の文書作成術と公証人マニュアルの影響，日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会，2019年6月
3. 研究発表，吉江貴文，『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』の目的と概要，日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会，2019年6月

【社会活動】

社会連携センターの公開講座の実施や、国立民族学博物館共同研究成果論集『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』の出版を通して、研究成果の社会還元を努めることが出来た。

氏名	吉田 晴彦
職位	教授
研究分野	国際関係論
研究キーワード	国際協力、平和研究、国際関係論

この二年間は、ほぼ計画通りの成果をあげることができた。例年ボランティアとして実施してきた卒業記念写真撮影も、2019年度はコロナウイルス問題で中止をやむなくされるかと思っただが、教務委員会及び事務局の方々のご尽力で、無事実施することができて感謝している。

【教育活動】

この二年間、ある科目の授業アンケートの結果が大きく変動した。内容そのものはそれほど変わらないので、受講生との相性問題があるものと推察される。できるだけそうした変動がなくなるよう尽力したい。

2019年度	国際関係論、国際協力論Ⅰ、専門演習Ⅰ、平和研究Ⅰ、国際協力論Ⅰ(大学院)、平和と人権B、平和研究入門、平和研究Ⅱ、国際協力論Ⅱ、国際協力論Ⅱ(大学院)、平和研究Ⅱ、修士論文
2018年度	国際関係論、三学部合同基礎演習、国際協力論Ⅰ、平和学概論、専門演習Ⅰ、特別演習Ⅳ、国際協力論Ⅰ、平和と人権B、平和研究入門、国際協力論Ⅱ、国際協力論Ⅱ、平和研究Ⅱ、修士論文、卒業論文

【研究活動】

近年重要度が高まっていると思われるグローバルジャスティスの議論について研究を進めてきた。今後数年間はこの議論について研究を行い、一定の成果を出せるように尽力したい。

1. 戸田真紀子、三上貴教、勝間靖編，改訂版 国際社会を学ぶ，晃洋書房，2019，pp.133-145，共著
2. 中村都編，新版 国際関係論へのファーストステップ，法律文化社，2017，pp.21-28，p.29，pp.114-121，p.211，共著
3. 広島平和研究所，平和と安全保障を考える事典，法律文化社，2016，共編
4. 広島市立大学国際学部 国際政治・平和フォーラム編，世界の眺めかた一理論と地域から見る国際関係，千倉書房，2014，pp.38-60，共著
5. 三上貴教編，映画で学ぶ国際関係，法律文化社，2013，pp.186-189，共著

【社会活動】

この4年間あまり、(株)広島東洋カーブと本学の関係維持に尽力してきた。また、可能な範囲で模擬講義の実施にも協力してきた。

今年度は研究交流委員として、公開講座への取り組みに注力する予定である。

2019年5月8日-8月6日	ピースナイター2019
2018年7月5日-8月6日	ピースキャンドル2018

氏名	李 在鎬
職位	教授
研究分野	経営学
研究キーワード	中間財メーカー視点の成長戦略、グローバル・サプライ・チェーン論

教育活動・研究活動・社会活動を積極的に展開する中で、専門分野である国際経営論及び経営戦略論をさらに深めることができた。一方で、2019年4月からは語学センター長に就任してからは、管理職業務へのエフォートを拡大している。

【教育活動】

担当科目の学部の国際経営論Ⅰ・Ⅱ、経営戦略論の2年間の授業アンケートの総合的満足度の得点が全学平均以上であることから、一定の成果があったと思われる。また修士課程1名、博士後期OD(D5)過程1名を指導し、うち修士(号)を1名輩出した。

2019年度	国際経営論Ⅰ、経営戦略論、卒論演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、国際研究入門(分担)、企業インターンシップ(分担)、国際経営論Ⅰ(院)、国際経営論Ⅱ、専門演習Ⅱ、卒業論文、卒論演習Ⅱ、国際経営論Ⅱ(院)
2018年度	国際経営論Ⅰ、経営戦略論、卒論演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、国際研究入門(分担)、企業インターンシップ(分担)、発展演習Ⅰ、国際経営論Ⅰ(院)、特別演習Ⅰ(院)、特別演習A(院)、特別講義B、特別演習Ⅱ(院)、国際経営論Ⅱ、専門演習Ⅱ(国際経営論)、卒業論文、卒論演習Ⅱ、国際経営論Ⅱ(院)

【研究活動】

著章(叢書:分担執筆、共同編集)1冊、査読付き論文3本(内、国内紀要論文2本、海外ジャーナル論文1本)、MISC2本の成果があった。科学研基盤(C)代表(2020/04/01-2023/03/31)が採択されたことで、科研費(代表)を途切れなく受給し続けている。

1. 李在鎬, 李玲, 劉婷, 梁丹, 寺井里沙, 高橋広雅, 鈴木明宏, 竹本亨, 井手吉成佳, 城多努, Nurhaizal Azam Arif, 金谷信子, 大東和武司, 国際ビジネスの現実と地平: 地域からの眺望(広島市立大学国際学部叢書第10号), 文眞堂, 2020, 1-27, 分担執筆
2. 李 在鎬, 世界標準化と現地適応化のバランスとトヨタ生産システムトヨタブラジルの事例一, 一般社団法人日本生産管理学会第51回全国大会予稿(別府大学)3月14・15日, pp.92-93, 2020
3. Lee, Jaeho and Minoru Hirano, How can instability of international joint venture business be controlled? - A case study of a Korea-Japan joint venture company of automotive stamping die-, 広島国際研究, Vol.第25, pp.17-27, 2019
4. Jaeho Lee, Growth strategy from the suppliers' viewpoint: a case study of Denso

- and Hitachi Automotive Systems, International Journal of Automotive Technology and Management, Vol. 18, No. 4, pp. 371-383, 2018
5. 李在鎬・平野実, 中間財と産業財の複合事業企業の国際合弁事業における成功要因についてー自動車用プレス金型企業の事例ー, 国際ビジネス研究学会第 25 回全国大会『報告要旨』, pp. 1-4, 2018 年 11 月
 6. 研究発表, 李在鎬, ブラジル自動車産業の特異性とトヨタ自動車の現地適応, 中四国商経学会第 60 回全国大会 (下関市立大学), 2019 年 12 月
 7. 李在鎬, 株式会社制度の歴史と日本企業, 広島市立大学国際学部公開講座ー世界の中の「日本/JAPAN」企業論・ジェンダー論・伝統文化論ー (広島国際会議場), 2019 年 11 月
 8. 李 在鎬, グリーンシフト移行期における現代自動車グループの生き残りのための戦略 (日本語と中国語の通訳付き), 新エネ車及び関連産業に関するセミナー (中国恵州市人民政府工業和信息化局主催), 2019 年 8 月
 9. Presentation, Lee, Jaeho and Minoru Hirano, How can you make your international joint venture business durable - A case of the Japanese B2B firm's joint ventures in Korea and China, 15th International Conference of IFEAMA (Kyoto University), 2019 年 6 月
 10. Invited talk, Lee, Jaeho, Japanese Production System, Malaysia DMT Study Tour (Hiroshima City University), 2019 年 5 月
 11. 研究発表, 李在鎬・平野実, 中間財と産業財の複合事業企業の国際合弁事業における成功要因についてー自動車用プレス金型企業の事例ー, 国際ビジネス研究学会第 25 回全国大会 (早稲田大学早稲田キャンパス), 2018 年 11 月
 12. Presentation, Rapid Transformation in the Norway New Car Market and Japanese Car Makers' Sales Strategy, 26th Gerpisa International Colloquium 2018: Who drives the change? New and traditional players in the global automotive sector (Universidade de São Paulo, Brasil), 2018 年 6 月

【社会活動】

社会活動としては、アイセック広島委員会理事顧問 (SRB 講師兼) として助言を行ったり、日本生産管理学会中国四国部会の幹事、国際ビジネス研究学会中四国部会の幹事を務めている。また、2019 年度のオープンキャンパスで模擬講義を行った。また、2019 年 5 月に本学部開催の Malaysia DMT Study Tour で講演を行った。

2019 年 8 月、及び 11 月	外部面接・英語面接 (アイセック広島委員会理事顧問)
2019 年 6 月	アイセック広島委員会理事顧問会
2019 年 2 月	アイセック Stake Holders Party 2019
2018 年 10 月	アイセック広島委員会 45 周年記念式典
2018 年 6 月	アイセック広島委員会理事顧問会
2018 年 5 月、及び 6 月	外部面接・英語面接 (アイセック広島委員会理事顧問)

氏名	李 玲
職位	准教授
研究分野	商学
研究キーワード	国際マーケティング, グローバル・ブランド研究, 国際的消費者行動研究

教育活動においては、多面的な視点で物事を捉えることの重要性を常に学生に伝え、学生の分析力や課題発見力の養成に役立つような教育を心掛ける。研究活動は、教育との整合性を保ちながら社会の実務にも役立つように取り組んできた。また、社会活動に関しては、主に研究成果の発信を促進する学会の研究会の運営に携わってきた。

【教育活動】

学部の教育において、双方向の授業による学習内容の理解を深めさせるために、定期的に課題調査をさせ、調査結果を発表させるような授業をデザインしてみた。学生間の相互学習ができたという点が評価されたと同時に、学生が理解できていないポイントをつかむことができ、学生の指導にも役立った。卒業論文指導において、ここ2年、計13名の学部生を指導してきた。そのなかには、卒業論文として優秀卒論や特色のある卒論に輝いたもの、また、卒業式において、総代として謝辞を述べる学生や、学部を代表して卒業証書を受領する学生がいた。

また、大学院指導において、ここ2年は計3名の院生の修士論文を指導してきた。いずれも無事に修士号を取得できた。その他、研究生の指導、修士論文の副指導、博士論文の予備審査委員も担当してきた。

2019年度	企業インターンシップ、経営学、国際ビジネス入門、マーケティング論 I・II、専門演習 I・II、卒論演習 I・II、卒業論文、マーケティング論 I・II (大学院)、特別演習 I・II、特別講義 A・B
2018年度	企業インターンシップ、経営学、国際ビジネス入門、マーケティング論 I・II、専門演習 I・II、卒論演習 I・II、卒業論文、マーケティング論 I・II (大学院)、特別演習 I・II、特別講義 A・B、学術研究の進め方、地域再生論

【研究活動】

ここ2年の研究活動は、グローバル・ブランド研究と国産品意識というテーマを中心に取り組んできた。グローバル・ブランド研究に関しては、これまでの国内外の研究をレビューするという形で進んできた。そして、そのレビューは新たな研究課題の発見につながった。グローバル・ブランド関連の研究成果として、学会発表2篇、論文発表1篇を実現した。

また、国産品意識の研究に関しては、日本をはじめとする先進国において爆買い行動、コト消費行動を引き起こす中国人消費者を対象にしている。ここでいう国産品意識は中国人の中国産品に対する意識に限定している。それゆえに、中国人の独特な思考回路や消費行動の理解に役立つ研究として位置づけられる。研究成果には、学会発表1篇、論文発表1篇があった。

その他、ブランド・ポジショニングに関する研究成果も刊行した。また、特色研究費を活用し

て、ゼミ生や院生と共同で、西条酒祭りに関するフィールドワークも実施した。

1. 広島市立大学国際学部 国際ビジネス研究フォーラム編, 国際ビジネスの現実と地平：地域からの眺望, 文真堂, 2020, 共著
2. 中国人消費者の国産品意識が国際ブランド消費に与える影響, 広島国際研究, Vol. 25, pp. 29-44, 2019
3. グローバル・ブランディング研究の回顧と展望 ―消費者行動の視点から―, 『広島国際研究』, Vol. 第 24 巻, pp. 29-44, 2018
4. 消費者行動研究におけるグローバル・ブランド研究のサーベイ, 日本商業学会 第 68 回全国研究大会 報告論集, pp. 64-67, 2018
5. 研究発表, 国産品意識が国際ブランド消費への影響に関する実証研究
～中国人消費者の日中ブランド消費を中心に～, 国際ビジネス研究学会第 14 回中四国部会, 2019 年 5 月
6. 研究発表, ブランドのグローバルネスとローカル・アイコンネス概念に関する考察, 多国籍企業学会 第 55 回西部部会例会, 2018 年 9 月
7. 研究発表, 消費者行動研究におけるグローバル・ブランド研究のサーベイ, 日本商業学会 第 68 回全国研究大会, 2018 年 5 月

【社会活動】

社会活動においては、国際ビジネス研究学会中四国部会の幹事を引き続き担当し、新たに、国際ビジネス研究学会の学会賞委員会の幹事と、日本貿易学会の理事ならびに同学会の広島部会の運営を担当することとなった。

その他、学会研究会のコメンテーターや、研究紀要の査読なども務めた。

2019 年 5 月-	日本貿易学会, 理事
2019 年 4 月-	国際ビジネス研究学会, 学会賞委員会 幹事
2016 年 4 月-	国際ビジネス研究学会, 中四国部会 幹事

氏名	渡辺 智恵
職位	教授
研究分野	英語教育学
研究キーワード	コンピュータを利用した英語教育／学習

2018年度は、語学センター長および国際交流担当副理事としての職務を果たしつつ、教育活動、研究活動、社会活動、大学運営のすべてにおいて、比較的バランスよく取り組めたと自己評価している。2018年度広島市立大学教員表彰（社会貢献）を受けた。2019年度は、理事・副学長（教育・研究担当）および国際交流担当副理事を拝命したため、全体業務における大学運営の比重が非常に大きくなったが、教育活動、研究活動、社会活動もこれまでと同レベルで取り組んだ。

【教育活動】

学部レベルの教育活動については、2018年度と2019年度は「CALL 英語集中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、「eラーニング英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、「通訳技法論Ⅰ・Ⅱ」、「言語コミュニケーション研究入門」、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」、「卒論演習Ⅰ・Ⅱ」を担当し、これら授業の履修者数は、前・後期合わせて各年度約1,600名であった。それに加え、2018年度は「言語コミュニケーション研究入門」、2019年度は「3学部合同基礎演習」と「地域課題演習」の科目責任者も担当した。学部卒業論文の指導教員として、2018年度は4名、2019年度は7名を指導した。加えて、「英語応用演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」のコーディネーターとして、非常勤講師との連絡調整、シラバスの作成、テキストの発注等を行った。大学院レベルの教育活動としては、「通訳論Ⅰ・Ⅱ」を担当するとともに、2018年度は修士論文の主旨導教員として1名を指導した。

また課外の教育活動として、2018年度と2019年度の夏期休暇中と春季休暇中にそれぞれ1ヶ月のeラーニングによる英語学習プログラムを計4回実施し、授業外での学習機会を提供した。

2019年度	CALL 英語集中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、eラーニング英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、通訳技法論Ⅰ・Ⅱ、3学部合同基礎演習、地域課題演習、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、通訳論Ⅰ・Ⅱ、
2018年度	CALL 英語集中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、eラーニング英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、通訳技法論Ⅰ・Ⅱ、言語コミュニケーション研究入門、専門演習Ⅰ・Ⅱ、卒論演習Ⅰ・Ⅱ、通訳論Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

2016年に採択された科学研究費（挑戦的萌芽研究）「英語eラーニングでの自律的学習促進ツールとしての学習履歴データの活用に関する研究」の研究代表者として、また2017年度に採択された科学研究費（基盤研究（B））「共通教育期間を通じた英語力向上のための多様な大学環境でのeラーニングマネジメント」の研究分担者として、大学生、小学生、社会人を対象にしたeラーニングを活用した英語教育に関する研究に取り組んだ。国内学会での研究発表5件、国際学会での研究発表1件、論文発表2件を行った。

1. 論文発表：渡辺智恵、青木信之「英語 e ラーニングにおける学習行動と学習管理」『複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス』pp. 11-25, 水声社, 2019 年
2. 論文発表：池上真人、青木信之、渡辺智恵「並べ替え学習ソフトによる帰納的文法学習」『言語文化研究（松山大学総合研究所）』Vol. 39, No. 1, pp. 23-42, 2019 年
3. 研究発表：青木信之、渡辺智恵「社会人を対象とした英語 e-ラーニング講座における学習完了者と非完了者の違いを探る」日本生涯教育学会第 40 回大会, 2019 年 11 月
4. 研究発表：青木信之、渡辺智恵、池上真人「大学共通教育期間を通じた e ラーニングの効果--TOEIC と学習履歴から--」全国英語教育学会第 45 回弘前研究大会, 2019 年 8 月
5. 研究発表：青木信之、鈴木繁夫、渡辺智恵、池上真人、松原緑、榎田一路、寺嶋健史、汪曙東、高橋英也、阪上辰也、江村健介「共通教育期間を通じた英語力の維持・向上に向けて（その 2）--長期休暇中の英語学習の実態と e ラーニング活用の可能性--」FLEAT 7 (International Conference on Foreign Language Education and Technology), 2019 年 8 月
6. 研究発表：青木信之、渡辺智恵「社会人英語 e ラーニング講座におけるコミュニティについて--掲示板書き込みの分析から--」日本生涯教育学会第 39 回大会, 2018 年 12 月
7. 研究発表：青木信之、鈴木繁夫、渡辺智恵、池上真人、松原緑、榎田一路、寺嶋健史、汪曙東、高橋英也、阪上辰也、江村健介「共通教育期間を通じた英語力の維持・向上に向けて--長期休暇中の英語学習の実態と e ラーニング活用の可能性--」外国語教育メディア学会 (LET) 第 58 回全国研究大会, 2018 年 8 月
8. 研究発表：青木信之、渡辺智恵、池上真人「並べ替え学習ソフトによる帰納的文法学習--小学校英語学習者を対象に--」第 18 回小学校英語教育学会（長崎大会）, 2018 年 7 月

【社会活動】

2002 年から継続して取り組んでいる市民対象の英語 e ラーニング講座「市大英語 e ラーニング講座」を 2018 年度、2019 年度ともに 3 回ずつ計 6 回開催し、受講者数は 2018 年度が 101 名、2019 年度が 111 名であった。また両年度ともに、「広島市立大学地域貢献事業発表会」と「広島市立大学産学連携研究発表会」に「市民の英語力向上のための研究と実践」というテーマで出展した。

2019 年 11 月 18 日	2019 広島市立大学の地域貢献事業発表会
2019 年 9 月-2019 年 12 月	市大英語 e ラーニング講座（2019 年度第 3 期）
2019 年 9 月 20 日	広島市立大学産学連携研究発表会 2019
2019 年 7 月-2019 年 10 月	市大英語 e ラーニング講座（2019 年度第 2 期）
2019 年 5 月-2019 年 8 月	市大英語 e ラーニング講座（2019 年度第 1 期）
2018 年 11 月 28 日	2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会
2018 年 9 月-2018 年 12 月	市大英語 e ラーニング講座（平成 30 年度第 3 期）
2018 年 9 月 21 日	広島市立大学産学連携研究発表会 2018
2018 年 7 月-2018 年 10 月	市大英語 e ラーニング講座（平成 30 年度第 2 期）
2018 年 5 月-2018 年 8 月	市大英語 e ラーニング講座（平成 30 年度第 1 期）

情報科学研究科

氏名	青山 正人
職位	准教授
研究分野	医用システム、知能情報学
研究キーワード	医用画像診断支援、コンピュータ支援診断、医用画像処理、動画画像解析、パターン認識

教育活動（講義・演習・実験）では、可能な限り学生自身が主体的に取り組むことができるような内容とすることを心がけて取り組んだ。研究活動としてではなく、社会活動への広がりをも目指すものとして、学外研究者と連携して構成したチームの一員として、JSTの大学発新産業創出プログラムである SCORE から START への展開に参画することが出来た。別の視点の社会活動として、演習や研究で高校生と接する機会が得られた時には、継続的に本学に興味を持ってもらえるように心がけて実施した。また、自分ができる学内委員等は断らずに担当し、発言等は、常に大局観を見失うことのない立ち位置で行うように心がけた。

【教育活動】

講義・演習・実験科目として8科目を担当（分担含む）した。そのうち、特に1年生前期科目である解析学Ⅰ演習は、入学後最初に受講する必修科目の一つであること、比較的苦手とする学生が多いように見受けられることから、より丁寧に行うようにした。二人体制で隔週で解答用紙をチェックして多くの学生が弱点とするところを指摘するとともに傾向を見極め、補足説明を加えたりすることで、事後学習に役立ててもらえるように実施した。その他の科目についても、可能な限り演習を取り入れ、双方向のコミュニケーションが可能となる方法で実施することにより、知識の定着に繋がるように心がけた。

2019年度、 2018年度	解析学Ⅰ演習、デジタル信号処理、医用画像診断支援特論、医用生体画像計測、医用情報科学概論、外書講読演習Ⅱ、医用情報科学実験Ⅰ、医用プログラミング
-------------------	--

【研究活動】

コンピュータ支援診断、医用画像処理に関する研究を行っている。主に、医用画像工学研究室に配属された学生への教育を通して研究活動を行った。一方、医用画像とも関わりが深い画像処理関連の研究を通して、研究成果の社会還元を目指して学外研究者とチームを組んで獲得した資金に関する研究にも取り組んだ。

国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)

大学発新産業創出プログラム

【SCORE】小さなAIで実現する食品スーパーの仕入れ最適化（その他参画者）

【START】組合せ爆発を計算可能な小さなAI「fineOptimAI（ファインオプティマイ）」の事業化（主たる共同研究開発者）

1. 《論文》目良和也，青山正人，黒澤義明，竹澤寿幸，発話内容と口調の関係に基づく発話者の嗜好情報推定，知能と情報（日本知能情報ファジィ学会誌），Vol. 31, No. 5, pp. 816-825, 2019
2. 《研究発表》濱田尚瞳，青山正人，V-Net を用いた前立腺領域抽出における入力画像サイズの検討，令和元年度（第 70 回）電気・情報関連学会中国支部連合大会，2019 年 10 月
3. 《研究発表》前元菜摘，上原由香里，秋山祐輝，健山智子，松本慎平，青山正人，輝度値と形状情報を用いた膝軟骨の構造解析と医用画像読影教育支援システムの開発，第 44 回教育システム情報学会全国大会，2019 年 9 月

【社会活動】

2018 年度には、ライブキャンパスでの模擬授業、本学の取り組みである「高校生による情報科学自由研究」に自主テーマで参加してくれた高校生グループを担当できるという貴重な機会が得られた。自由研究では成果発表の場であるライブキャンパスでのポスター発表で最優秀賞に選ばれるなど、大変興味を持って取り組んでもらえたと思える点は良かった。高大連携/接続の重要性が増す中、一定の貢献を果たすことはできたのではないかと。学会関係では、研究専門委員会の専門委員や英文論文誌の編集委員、ワークショップの実行委員を担当することを通して、学会運営の一助となることができたと思われる。

2018 年-	電子情報通信学会，情報・システムソサイエティ英文論文誌編集委員
2018 年 10 月	ライブキャンパス 体験型模擬授業：アルゴリズムによるアルゴリズム体感演習
2018 年 7 月-2018 年 10 月	高校生による情報科学自由研究 オリジナルテーマ「爪認証は可能か？」担当
2018 年 4 月-2018 年 12 月	精密工学会画像応用技術専門委員会，ビジョン技術の実利用ワークショップ ViEW2018 プログラム委員
2017 年 3 月-	電子情報通信学会，情報・システムソサイエティ常任査読委員
2016 年 8 月-2018 年 8 月	高校生による情報科学自由研究 MRI で撮ってみよう
2013 年 5 月-	電子情報通信学会，医用画像研究専門委員会，専門委員
2005 年-	日本放射線技術学会、会員
1993 年 4 月-	情報処理学会、会員
1991 年 3 月-	電子情報通信学会、会員

氏名	厚海 慶太
職位	助教
研究分野	システム工学、知能機械学・機械システム、計測工学、制御・システム工学、科学教育、生体医工学・生体材料学
研究キーワード	計測制御工学、機能的電気刺激、センサ・アクチュエータ

教育活動は個々の学生の志向や理解度に応じた柔軟な対応を心掛け、メカトロニクスに関連した自作「おもちゃ」を使いながら、当該分野に対する興味・関心の惹起や基礎知識の習得を目指している。この方針は学生実験をはじめとした科目に留まらず、対象者の特性に応じ適宜アレンジを加えながら社会活動へも応用している。より具体的には、小中学生などを対象とした科学技術の正しい理解や「ものづくり」の楽しさなどの啓発を図るべく、独自の工夫を凝らした電子工作教材の開発を継続している。大学運営においては、チューター業務ほか学生支援に参画している。

【教育活動】

学生実験の運営および教材開発に主体的に取り組んでおり、環境整備や教材の改良なども継続的に実施している。また、本学芸術学部／研究科に所属する学生からの依頼に応じ、アドバイザー教員として個々の作品に固有の電気・機械要素の開発や製作への助言を年に1～2件程度行っている。

2019年度	システム工学実験 I、情報科学基礎実験 β 2
2018年度	システム工学実験 I、情報科学基礎実験 β 2

【研究活動】

大阪大学大学院基礎工学研究科との共同研究に特に注力し、ヒト前腕の機能的電気刺激や感覚惹起などを目的としたインタフェースの研究開発、および、医工連携による新しい手術補助・トレーニング器具の開発にも参画している。

1. 厚海慶太, 永井美和, 谷口和弘, 松居和寛, 西川敦, 平衡点仮説に基づく機能的電気刺激を用いた等尺性条件下におけるヒト手指関節運動モデルの検討, 生体医工学, Vol. 56, No. 5, 2018
2. Presentation, Miwa Nagai, Keita Atsumi, Kazuhiro Taniguchi, Kazuhiro Matsui, Hiroaki Hirai and Atsushi Nishikawa, Modeling of metacarpophalangeal joint movement using functional electrical stimulation by controlling the equilibrium-point, IEEE EMBC2019, Berlin, July 23-27, 2019年7月

【社会活動】

地域の科学館で開催される小中学生向け教室の講師、および、中学生ロボコンの審査員などを担当している。

2018年-	乗り物テクノ教室 電子工作講座 講師
2018年-	創造アイデアロボットコンテスト(中学生ロボコン) 広島県大会審査員
2018年-	科学教室講師, 広島市こども文化科学館

氏名	池田 徹志
職位	講師
研究分野	ヒューマンインターフェース・インタラクション、知能ロボティクス、知能情報学
研究キーワード	知能ロボティクス、センサフュージョン、ヒューマンインターフェース、パターン認識

学生が情報科学やロボティクスの分野の勉強や研究を通じて、技術者としての基礎的な能力を身につけ、社会に貢献する人材となることを目指して活動を進めている。教育活動では、ロボティクスや数学系の科目を中心に担当し、講義中に例題の演習を多く取り入れ、学生の理解を深めるとともに、理解度を把握して講義を進める設計を進めた。研究活動では、我々の日常生活をサポートする知能ロボットの研究を進め、学生と進めてきた研究成果を多くの国際会議で発表することができた。社会活動では、研究成果を広島市民のみならず企業の方に発表する活動を行った。高校生や社会人向けの教育にも新たに関わり、継続して進めたいと考えている。

【教育活動】

担当講義では、ロボティクスに関する専門科目の講義や、基礎となる数学系の講義および演習を担当している。専門科目では直感的な説明に加えて大学で学んだ数学による理解の重要性を強調し、数学系科目では専門科目での数学の活用を紹介するなど、学ぶ教科のつながりに気づかせることを意識している。また特にこの2年間は、講義中に学生が例題を解く時間を設け、問題に取り組んだ直後に解説を行うことにより、理解を深めるような設計を試み、学生からも好評であった。研究室においては、日常的な議論の中で、自分の意見を論理的に説明できる能力の向上を目指し、論文執筆や学会発表を通じて、分かりやすく説明する能力を高める指導を行っている。

2019年度	解析学 I、解析学 I 演習、最適化手法、知能ロボティクス特論、システム工学実験 II
2018年度	ロボティクス I、解析学 I、解析学 I 演習、情報基礎数学、知能ロボティクス特論

【研究活動】

日常生活の中でロボットなどの自動システムが快適に人と共存することを目指し、人を理解して行動する知能ロボットの研究を進めている。はじめに、(株) SUBARU、(株) 国際電気通信基礎技術研究所、聖マリアンナ医科大との共同研究により、2016年度から採択された科研費を活用して、自動運転が普及したときにドライバーが感じる不安や不快を評価する研究を進めた。ドライバーに自動運転の状況を分かりやすく伝える事により、快適な自動運転を実現する研究を行った。次に、大阪教育大との共同研究により、オフィスなどでサービスを提供する移動ロボットが、周囲の人に不安を与えずに移動するために、人のように顔向きを使ってこれからの行動を自然に伝える研究を行った。また、プロジェクタによる投影を用いて人を案内するロボットを提案し、人とロボットの相互作用の分野で新しいインタフェースの有効性を示す研究を行った。

1. Presentation, Aki Tamai, Tetsushi Ikeda, Satoshi Iwaki, A Method for Guiding a Person Combining Robot Movement and Projection, Proc. IEEE/RSJ Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems (IROS), pp. 1265-1270, 2019年11月
 2. Presentation, Yuki Ishii, Tetsushi Ikeda, Toru Kobayashi, Yumiko O. Kato, Akira Utsumi, Isamu Nagasawa, Satoshi Iwaki, Investigation of the driver's seat that displays future vehicle motion, Proc. IEEE Int. Conf. on Robot & Human Interactive Communication (RO-MAN), pp. 148-153, 2019年10月
 3. Presentation, Shohei Yamashita, Tetsushi Ikeda, Kazuhiko Shinozawa, Satoshi Iwaki, Evaluation of Robots that Signals a Pedestrian Using Face Orientation, Proc. IEEE Int. Conf. on Robot & Human Interactive Communication (RO-MAN), pp. 1163-1170, 2019年10月
 4. Presentation, Aki Tamai, Tetsushi Ikeda, Satoshi Iwaki, Behavior Analysis of a Person Guided by a Projection Robot, Proc. SICE Annual Conference 2019, pp. 990-992, 2019年9月
 5. Presentation, Toru Kobayashi, Tetsushi Ikeda, Yumiko O. Kato, Akira Utsumi, Isamu Nagasawa, Satoshi Iwaki, Evaluation of Mental Stress in Automated Following Driving, Proc. Int. Conf. on Robotics and Automation Engineering (ICRAE 2018), 2018年11月
- 他 16 件

【社会活動】

高校生による科学的な思考力・表現力の育成を図るため、広島県科学セミナーに参加し発表の評価を担当した。また、大学における社会人の学び直し事業 enPiT-proに参加した。研究活動の成果を広島市民の方と共有するための展示発表を継続的に行っている。産学連携研究発表会では、主に広島市の企業の方を中心に上記の研究内容を展示し、広島市役所で行われた地域貢献事業発表会では、市民の方を対象にした研究展示と発表を行った。また、広島市立大オープンキャンパスにおいても、研究展示と発表を行った。

2019年	広島県科学セミナー採点補助員
2018年, 2019年11月	広島市立大学地域貢献事業発表会 出展
2018年, 2019年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 出展
2018年, 2019年8月	オープンキャンパスにおける研究室公開

氏名	石田 賢治
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、システム工学、計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	情報通信工学、システム工学、情報システム学

誰にどこを指摘されても良いような行動を心がけています。教育活動、研究活動、社会活動、2019年度から大学執行部に参加している大学運営についても同様です。教育活動においては、学生諸君に対して、ゼミや講義時間中に集中することを要請しています。また、講義中に定期的な問掛けや質問を行い、双方向で能動的な講義を心がけています。また、評価に関して、正直者が馬鹿を見ることがないような評価を行いますと講義中に伝え実践しています。研究活動の一貫したテーマとして、ネットワーク制御アルゴリズムに注目しています。

【教育活動】

以下の講義を担当しています。専門である情報ネットワークの世界では、最良と思われた技術がすぐに陳腐化し、古い時代の技術が別のかたちで再び脚光を浴びることがよくあります。このような現象は技術の輪廻転生と捉えることができます。つまり、情報ネットワーク技術の発展を時間的な流れと共に理解することが極めて重要です。学生諸君が各種技術とその変遷を時間的な流れの中に位置づけて理解できるように心がけて講義しています。研究室の学生指導に関しては、各学生のもつ能力を引き出すことに留意しています。

2019年度	情報ネットワーク特論、情報ネットワーク、分散システム、ネットワークプロトコル、3学部合同基礎演習、コンピュータ基礎
2018年度	情報ネットワーク特論、情報ネットワーク、分散システム、ネットワークプロトコル、3学部合同基礎演習、コンピュータ基礎

【研究活動】

研究室の構成員等と共に、想定外の事象への対処を目指すアシュアランスネットワーク技術や無線 LAN のようなベストエフォートネットワークにおける通信品質保証技術等の研究を進めています。2020年3月には、研究室構成員の先生、修了大学院生と共に電子情報通信学会 第26回情報ネットワーク研究賞を頂きました。最近の主要な成果は以下の通りです。

1. 石田 賢治 (著), 小林 真也 (著), 佐藤 文明 (著), 中條直也 (著), 寺島 美昭 (著), 南角 茂樹 (著), 宮内 直人 (著), 山口 弘純 (著), 山下 昭裕 (著), 水野 忠則 (著, 監修), 分散システム (未来へつなぐデジタルシリーズ 31) 第2版, 共立出版, 2019, 共著.
2. Yoshiki Miura, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, A Media Access Control Method based on Capture Effect considering Throughput Fairness among WLAN Systems, Proc. The 8th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences (KJCCS2020), 3pages, 2020.

3. Junichi Funasaka, Hiroyasu Obata, and Kenji Ishida, Number of TCP Connections to Saturate Bandwidth of Wireless Networks, Proc. The 12th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking (ICMU2019), 6pages, 2019.
4. Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, Modeling of Transmission Rate Based on Experimental Evaluation on Multi-Rate Wireless LAN for Safe and Secure Life, Proc. IEEE International Symposium on Circuits and Systems (ISCAS2019), 5pages, 2019.
5. Yosuke Izumikawa, Yoshiki Miura, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, Tutomu Murase, and Kenji Ishida, A Media Access Control Using Capture Effect for Bi-Directional Flows over Densely placed WLANs, Proc. 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications (NOLTA2018), pp.456-459, 2018.
6. Ryo Tsurumi, Mayu Morita, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, Throughput Control Method between Different TCP variants based on SP-MAC over WLAN, Proc. IEEE International Conference on Consumer Electronics - Taiwan (ICCE-TW), 2 pages, 2018.
7. 家平 和輝, 井上 博之, 石田 賢治, 特定のCANメッセージを送信するECUに対するバスオフ攻撃を利用したなりすまし攻撃, 情報処理学会論文誌コンシューマ・デバイス&システム (CDS) , Vol.8, No.2, pp.1-12, 2018.
8. 寺岡 良章, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, “無線 LAN のアクセスポイントにおけるスループット保証を目指した TCP 受信ウィンドウ制御方式”, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol. J101-B, No.2, pp.70-79, 2018.
9. 電子情報通信学会 第26回情報ネットワーク研究賞, 2020.

【社会活動】

海外の社会活動として、IEEE等の通信分野の複数国際会議のTPCを務めています。国内の各種独立行政法人等の各種委員も務めており、社会へ貢献しつつあります。2018年度より、電子情報通信学会情報ネットワーク(IN)研究会の副委員長を務めています。IN研究会は、電子情報通信学会通信ソサイエティ内で活発に活動している研究会の一つです。また、中国地域においては、平成30年度(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会を実行委員長として、他の実行委員と共に無事に開催しました。本学関係として、リエゾンフェスタ、市役所での広島市立大学地域貢献事業発表会、オープンキャンパス等に毎年継続して出展しています。

2018年6月-2020年6月	電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会 副委員長
2018年4月-2019年12月	The IEEE Global Communication Conference (IEEE GLOBECOM 2019) NGNI Technical Program Committee
2018年4月-2019年12月	The IEEE Global Communication Conference (IEEE GLOBECOM 2019) CQRM Technical Program Committee
2018年4月-2019年6月	The IEEE International Conference on Communications (ICC 2019) NGN Technical Program Committee
2018年4月-2019年6月	The IEEE International Conference on Communications (ICC 2019) CQRM Technical Program Committee

2017年12月-2018年11月	平成30年(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会 実行委員会 委員長
2017年4月-2019年4月	公益財団法人 広島市産業振興センター 評議員
2017年4月-2018年12月	The IEEE Global Communication Conference (IEEE GLOBECOM 2018) CQRM Technical Program Committee
2017年4月-2018年12月	The IEEE Global Communication Conference (IEEE GLOBECOM 2018) NGNI Technical Program Committee
2017年4月-2018年6月	The IEEE International Conference on Communications (ICC 2018) NGN Technical Program Committee
2017年4月-2018年6月	The IEEE International Conference on Communications (ICC 2018) CQRM Technical Program Committee
2007年4月-	独立行政法人日本学術振興会 光ネットワークシステム技術171委員会 運営委員
1989年10月-	電子情報通信学会 論文誌編集委員会 査読委員
1986年5月-	Association for Computing Machinery (ACM)会員
1984年4月-	The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc. (IEEE)会員
1983年9月-	情報処理学会 会員
1983年9月-	電子情報通信学会 会員

氏名	石光 俊介
職位	教授
研究分野	機械力学・制御、制御工学、通信・ネットワーク工学、船舶海洋工学、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	音響工学、サウンドデザイン、アクティブノイズコントロール、時間周波数解析

大学の存在意義を発揮するには何よりもまず優れた研究を行うことがすべての基本である。新しい時代の進展に対応しうる優れた人材の育成も、産業界に対する大学ならではの貢献も、すべては優れた研究が行われていてこそ、はじめて可能となる。一隅を照らす者、是宝也ともいう。専門分野を磨きつつそれを活かした教育、社会貢献に邁進してきた。

【教育活動】

①サウンドデザイン研究室の教育目標に沿った教育を実践した。

②機械力学、人間工学、音響システム工学、音響システム特論の科目を学生が興味を抱くように創意工夫をはかった。デモンストレーションの他、著名な研究者やエンジニアを招いて講義に参加して頂き議論を行った。

③講義においてできるだけ体験型のデモンストレーションを用意し、学問を体感できるように準備をした。音や映像の他、演習もそれを通じて学生が授業に参加できるように工夫した。

数値目標として、研究室学生が少なくとも1年に1件は全国大会などでの発表を実施することとしたが、全員が1件以上の発表を行ったほか、毎年数件の優秀発表賞を学会から受賞した。また、専攻長として、大学院生の相談にのる時間を設け、就職や進路について相談を受けた。

2019年度	人間工学、機械力学、音響システム特論、音響システム工学、特別演習 I, II, III, IV、情報科学講究
2018年度	人間工学、音響システム工学、音響システム特論、機械力学、特別演習 I, II, III, IV、情報科学講究

【研究活動】

①サウンドデザイン研究室のビジョンに沿った先導的・独創的な研究の推進を行った。

②聴感印象の信号解析、心理実験両面による客観的評価法の開発を行い、テーマを様々な方向に発展させた。

③受託研究などにより福祉機器、医療機器開発、適応騒音制御およびその客観的評価について研究推進した。特に、動物音響における研究事業では非常に高い評価を受けた。

数値目標として最低1編の出版を目標としたが、年間6編および9編の論文が採択された。また、内1件は論文賞を受賞した。外部資金は毎年4件以上の受託研究と1件の農林水産省からの研究助成事業を受けた。

1. 石光俊介, サウンドデザイン論, 機械の研究, 養賢堂, 2020, 単著

2. 石光俊介、佐藤秀紀, 人間工学の基礎, 養賢堂, 2018, 共著
3. Yibing Cheng, Kenta Narusawa, Satoshi Iijima, Masashi Nakayama, Shunsuke Ishimitsu, Aiko Ishida, Osamu Mikami, Development of an Early Detection System for Respiratory Diseases in Pigs, International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences (IJBSCHS), Vol.24, No.2, pp.65-73, 2019 他14件
4. Presentation, Kohei Kabashima, Shunsuke Ishimitsu, Masashi Nakayama, Shohei Komatsu, Kazutaka Kasai, Kaori Ishii, Satoshi Horihata, Construction of Pharyngeal Tonsil Hypertrophy Detection System with Anti-formant on Optimal, The 2019 International Workshop on Electronics, Information and Communication (IWEIC2019), 2019年11月 他81件
5. 教員顕彰(教育及び研究), 広島市立大学, 2020
6. グローバル人材育成貢献賞, 広島市立大学情報科学研究科, 2020
7. Best Paper Award, ICIC International, 2019
8. 教員顕彰(教育及び研究), 広島市立大学, 2019
9. グローバル人材育成貢献賞, 広島市立大学情報科学研究科, 2019
10. 20th IEEE HISS 優秀研究賞, IEEE 広島支部, 2018
11. 20th IEEE HISS 優秀プレゼンテーション賞, IEEE 広島支部, 2018 3件
12. 20th IEEE 優秀研究室展示賞, IEEE 広島支部, 2018

【社会活動】

①最先端技術を産業界や地域の発展・活性化のために積極的に還元した。特に地元企業を優先して受託研究を受け入れた。

②産学連携を強化し、受託研究や研究助成などを通じて最先端技術を産業界や地域などに還元することに努力した。

③メーカ、国立研究所や他大学との共同研究を推進し、そこでのニーズに基づいた研究課題を遂行した。

また、国際会議への参加やハノファー専科大やドイツの自動車メーカーとも技術交流を行うとともに学生にも参加させ、グローバル人材育成を通じた社会活動も行った。

2020年1月	テックデザイン講習会 「サウンドデザインの基礎と音質の評価手法」, 株式会社テックデザイン
2019年11月	サウンドデザインとその評価, ブリュエル・ケアー・ジャパン
2019年11月-	地域貢献事業発表会 2019
2019年10月-	ライブキャンパス「音響システム工学」授業公開
2019年9月	2019年度 SSDS/JMAC 技術講演会 「音質とは」, 日本モーダル解析協議会(JMAC)
2019年9月-	広島市立大学産学連携研究発表会 2019

2019年9月-	大島商船高等専門学校地域連携交流会総会(大晃機械工業)における講演
2019年8月-	オープンキャンパス 2019 ミニ講義「情報科学部で人工知能やサウンドデザインを学ぼう！」
2019年8月-	オープンキャンパスにおける研究室公開
2019年7月-	令和元年度中高大連携公開講座「大学で何を学ぶか」出前授業(庄原格致高校)
2019年7月-	パナソニック技術講演会「音質とは何か」, パナソニックアドバンステクノロジー株式会社
2019年7月	サウンドデザインとその評価, 一般社団法人日本機械学会
2019年4月-	ICICIC2019, 14th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2019) Program & Steering Committee Member
2018年11月-	サウンドデザインとその評価, ビューエルアンドケアー
2018年11月-	地域貢献事業発表会 2018
2018年10月-	ライブキャンパス「音響システム工学」授業公開
2018年9月-	広島市立大学産学連携研究発表会 2018
2018年8月-	中等教育学校放送部 番組制作への協力
2018年8月-	オープンキャンパスにおける研究室公開
2018年7月-	平成30年度中高大連携公開講座「大学で何を学ぶか」出前授業(三次高校)
2018年6月-	個々の好みに適応する音質制御システムの検討, 技術情報協会
2018年4月-2019年3月	The 13th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2018), Chairperson, Program committee member
2018年4月-2019年3月	ICSV25 local committee chairman
2018年4月-2019年3月	ICICIC2018, 13th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2018) Program & Steering Committee Member
2018年4月-2019年3月	ICSV25, 25th International Congress on Sound and Vibration (ICSV25) local committee chairman
2018年4月-2018年7月	日本学術振興会, 特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査委員、国際事業委員会書面審査委員、書面評価員

氏名	市原 英行
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、計算機システム、計算科学
研究キーワード	DFT、組込自己テスト、テスト生成、テスト容易化設計、デジタル回路の設計とテスト、フォールトトレランス、ディペンダブルコンピューティング、再構成デバイス、テストエコノミクス、テスト圧縮、ストカスティックコンピューティング、Approximate Computing、フェンシング競技支援システム

教育活動・研究活動・社会活動に対して、「できる範囲内で来るものは拒まず」の精神で活動を行っている。特に教育活動と研究活動は大学教員の本分であると考え、優先的に活動している。研究活動は、ストカスティックコンピューティング、ディペンダブルコンピューティング、デジタル回路の設計とテスト、フェンシング競技支援、で精力的に行っており、この2年間では、特にストカスティックコンピューティング、デジタル回路の設計とテストに関する研究で一定の成果を得ることができた。教育活動は、質の良い授業や演習を行うことはもちろんのこと、研究活動を学生と行うことが重要と考えている。社会活動では、高校生向けの模擬授業、一般社会人向けの実践セミナーを行った。研究学会などの各種委員も務めている。大学運営では教務委員として新カリキュラムの調整を行った。

【教育活動】

座学であるデータ構造とアルゴリズム II、システム LSI 設計では、演習をできるだけ行うことで、学生が理解しやすいように努めた。情報工学科 3 年生向けの情報工学実験 I・II や LSI 設計演習では、学生が自ら解決方法を調べ、最後にコンテストなどを行うアクティブラーニングを実践した。大学院向けの回路設計自動化特論は、ゼミ形式で行っており、学生には深い理解を求めている。自主プロジェクト演習のアドバイザは 2018 年に務めた。研究室では 2 年間で、修士学生 2 名、学部学生 8 名の研究指導を行った。指導学生の 1 名はディペンダブルコンピューティング (DC) 研究会 第 6 回研究会若手優秀講演賞を受賞した。また、2 名の指導学生がそれぞれ 2018 年度優秀卒業論文賞・卒業論文プレゼンテーション賞、2019 年度優秀卒業論文賞を受賞した。

2019 年度	データ構造とアルゴリズム II、情報工学実験 I、LSI 設計演習、システム LSI 設計、情報工学実験 II、回路設計自動化特論
2018 年度	データ構造とアルゴリズム II、情報工学実験 I、システム LSI 設計、情報工学実験 II、回路設計自動化特論

【研究活動】

ストカスティックコンピューティングに関する研究を中心に行っている。これは 2019 年度から 2021 年度まで科研費基盤研究(c)「ストカスティックコンピューティング回路のための高位合成手法に関する研究」として助成を受けている。ストカスティックコンピューティング以外の研究テーマとして、テスト容易化設計、自律再構成可能耐故障システム、サイバーフィジカルシステム、フェンシング競技支援システムの研究も行ってきた。この 2 年間で、国際会議に 4 件、国内

研究会に8件の発表を行った。また、これとは別に2018、2019年にはストカスティックコンピューティングに関する招待講演も行った。主なものを以下に示す。

1. H. Ichihara et al., State Encoding with Stochastic Numbers for Transient Fault Tolerant Linear Finite State Machines, IEEE Proc. of International Symposium on Defect and Fault Tolerance in VLSI and Nanotechnology Systems, 2019
2. T. Iwagaki et al., An empirical approach to RTL scan path design focusing on structural interpretation in logic synthesis, Proc. 3rd IEEE International Test Conference in Asia, 2019
3. 可児冬弥, 瀬戸信明, 市原英行, 岩垣剛, 井上智生, ストカスティックコンピューティングにおけるシグモイド関数実装法に関する考察, FTC研究会, 2020年1月
4. 市原英行, 前田有希, 福田基, 岩垣剛, 井上智生, 線形有限状態機械に基づくストカスティック回路の耐過渡故障設計について, 機能集積情報システム研究会, 2019年10月
5. Invited talk, Hideyuki Ichihara, Benefits and Challenges of Stochastic Computing Circuits, International Forum on Advanced Technologies 2019, 2019年3月
6. 前田有希, 市原英行, 岩垣剛, 井上智生, 耐過渡故障を指向した線形有限状態機械のストカスティック数による状態符号化, DC研究会, 2019年2月
7. 招待講演, 市原英行, ストカスティックコンピューティング回路の利点と課題, ソサイエティ大会, 2018年9月

【社会活動】

ローカルでの社会活動としては、社会人向けの enPiT-pro 演習「画像処理を用いた自律走行演習及び自動車サイバーセキュリティ演習～自律走行演習編～」の講師、高校生向けの模擬授業、GSC ステップステージセミナー、情報科学自由研究などを行った。一方、グローバルな社会活動としては、電子情報通信学会ディペンダブルコンピューティング研究会専門委員、和文誌 D 編集委員、機能集積情報システム (FIIS) 研究会副委員長、国際会議 IEEE International Test Conference in Asia プログラム委員、国際会議 IEEE Asian Test Symposium2021 実行委員、国際ワークショップ IEEE WRTL 運営委員、WRTL2021 実行委員、各学会査読委員として研究に関するボランティア活動を行った。主なものを以下に挙げる。

2019年9月	模擬授業 (安芸南高校)
2019年4月-2022年3月	WRTL 2021 Program Chair
2017年8月-2019年12月	International Test Conference in Asia 2019 Program Chair
2017年6月-	機能集積情報システム研究会幹事及び副委員長
2018年6月-2022年	電子情報通信学会和文論文誌 D 編集委員
2017年6月-2020年	ディペンダブルコンピューティング研究会専門委員

氏名	稲木 雅人
職位	講師
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	VLSI 設計自動化

教育活動において、本期間では講師として、アクティブラーニングに該当する実験・演習科目に加え、講義科目も受け持った。講義科目としては大学院の授業である回路設計自動化特論の分担に加え、新たに学部2年生の授業である論理設計も受け持った。研究活動では、VLSI・LSI 設計自動化の分野において特に下流工程であるモジュール配置のフロアプラン、配置・配線設計、マスクパターン設計についての研究に加え、さらに下流のマスクパターン検証の研究を行った。社会活動としては主として国内会議幹事として学術活動に貢献し、また高校生への体験授業により学外における教育活動に貢献した。

【教育活動】

情報科学基礎実験 α -I (A) では、情報化社会の基盤である電子回路（論理回路）の設計および実装の基礎を、様々な回路が実現できるブレッドボードと、近年広く使用されているマイクロチップであるFPGAを用いて、簡単な回路を設計実装することを通じて習得させた。並行して実施される論理設計では、講義を通じて論理回路の基礎的な設計手法を習得させた。大学院の授業である回路設計自動化特論では外書講読に基づき最新技術を学生自らに説明させることで、英文技術文書対応能力、最新の知識と説明能力の両方を習得させた。その他演習科目では学生自ら演習課題に取り組むことにより内容の深い理解を目指した。

2019年度	情報科学基礎実験 α -I (A)、論理回路、テクニカルコミュニケーション、回路設計自動化特論
2018年度	情報科学基礎実験 α -I (A)、情報活用基礎、テクニカルコミュニケーション、回路設計自動化特論

【研究活動】

本期間では、高度な微細化が進展するLSI設計製造において、回路パターンのLSIへの転写に用いる露光光の回折により生じる製造不良の発生しやすい箇所であるホットスポットを、製造前に設計データ中から発見するホットスポット検知手法についての研究を主として行った。過去のLSI製造により収集されたホットスポットのライブラリの存在、および機械学習に基づく検知を前提として、ホットスポットパターンの特徴をよく捉える特徴量を提案し、国際会議にて発表した。さらに追加実験、追加提案を行い、複数の国内研究会にて発表を行った。

1. 片岡 岳, 稲木雅人, 永山 忍, 若林真一, “リソグラフィホットスポット検出用既存訓練データの修正による訓練データの追加生成”, 電子情報通信学会 技術報告, vol.119, no.443, VLD2019-107, pp.77-82, 2020年3月

2. 片岡 岳, 稲木雅人, 永山 忍, 若林真一, “配線幅および配線間距離を考慮した特徴量によるリソグラフィホットスポット検出”, 電子情報通信学会 技術報告, vol.119, no.282, VLD2019-51, pp.185-190, 2019年11月
3. 片岡 岳, 稲木雅人, 永山 忍, 若林真一, “最適ハイパーパラメータ下での機械学習に基づくリソグラフィホットスポット検出手法の比較検討”, 電子情報通信学会 技術報告, vol.118, no.334, VLD2018-71, pp.215-220, 2018年12月
4. Gaku Kataoka, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, Novel Feature Vectors Considering Distances between Wires for Lithography Hotspot Detection, DSD2018 (The 21st Euromicro Digital System Design), vol.21, pp.85-90, 2018年8月

【社会活動】

本期間では回路設計についての主要な国内会議である『回路とシステムワークショップ』の広報出版担当幹事としてワークショップの準備および当日業務、学会ソサイエティ紙に掲載する報告の作成を行った。また関連する論文誌特集号である電子情報通信学会英文論文誌 A『回路とシステム』小特集号の編集幹事を務め、特集号企画、論文募集、編集会議進行、採否判定、特集号の紙面の編集などを行い、学会活動に貢献した。また出張授業として、広島県立祇園北高校および広島市立沼田高校の生徒らに対し、パズル問題を通して現代社会を支える LSI とその設計を学ぶ『論理パズル演習』を、2時限を2回の計4時限行った。

2019年6月-2020年9月	ISPD 2020 (The 29 th International Symposium on Physical Design), Technical Program Committee
2019年6月-2019年10月	SASIMI 2019 (The 22 nd Workshop on Synthesis And System Integration of Mixed Information technologies), Technical Program Committee
2018年12月	美鈴が丘高校体験授業 論理パズル演習
2018年10月	祇園北高校体験授業 論理パズル演習
2018年4月-2019年8月	電子情報通信学会 英文論文誌A SoC設計手法小特集号編集幹事
2018年4月-2018年6月	電子情報通信学会 和文論文誌A 回路とシステム小特集号編集幹事
2017年9月-2018年9月	電子情報通信学会 第31回 回路とシステムワークショップ 出版広報担当幹事
2017年8月-2018年7月	電子情報通信学会 回路とシステムワークショップ幹事団出版広報担当幹事
2008年-	情報処理学会
2008年-	電気電子学会 (IEEE)
2000年-	電子情報通信学会

氏名	井上 伸二
職位	助教
研究分野	計算機システム・ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	ネットワーク ソフトウェア、マルチエージェント、高度情報交通システム、センサネットワーク

近年は高度情報交通システム、特に自動運転技術の1つである自動車の隊列走行の動的な形成・修正に関する研究を中心に行なっている。それともう1つ MANET における輻輳制御についても研究を行なっている。いずれの研究も状態が時々刻々と変動するシステムであり、その変動にどのように追従し、システムをより良い状態へと近づけていくのか、その手法についての研究を進めている。

教育分野では、主にプログラミングを中心に担当している。コンピュータシステムはネットワークと連携し複雑化してきているが、基本となるアルゴリズムの習得は大切である。データを処理するときどんな考え方で処理しているのかもっと効率的な方法はないか、そのような思考ができるような学生を育てたいと思う。

【教育活動】

この10年近くプログラミングに関する授業・演習を主に担当してきた。この間学生が使うデバイスは PC からスマホへと変わっていった。それに合わせて情報系の学生でもプログラムの中身を何かのブラックボックスのように捉えている人も多い。デバイスの中身、CPU、メモリなど意識しアルゴリズムがどのようにデータを処理していくのかを理解してもらえようような授業・演習を提供していきたい。

そして今年から国際学部向けの情報活用基礎を担当することとなった。こちらでは国際学部で必要となるであろう情報処理について実際に利用される場面を想定し授業を行ないたい。

2019年度	プログラミング1演習、3学部合同基礎演習、ネットワークソフトウェア特論、プログラミング2演習、プログラミング3、プログラミング3演習
2018年度	ネットワークソフトウェア特論、3学部合同基礎演習、プログラミング1演習、プログラミング3演習、プログラミング2演習、プログラミング3

【研究活動】

近年は車両の自動走行システムの一形態であるコンボイ（隊列）走行システムについて研究してきた。隊列を形成する車両を予め決めておき、それらの車両を一か所に集めてコンボイ走行をすることは技術的にはほぼ可能になった。目的地が同じである複数の車両でコンボイ走行をすると、渋滞が軽減し燃費が向上し運転手の負担が軽くなるという利点が生まれる。

現在私が取り組んでいるのは、すでに走行している複数の車両が車車間通信を行ない、それぞれの目的地について何らかの条件を満たす場合にコンボイを動的に形成しコンボイ走行を実現さ

れる手順を構築することである。さらにはコンボイだけではなく車車間通信によって情報を共有した車両の群れで交通の流れをスムーズにすることを旨とする。

1. Kazuki Uyama, Shinji Inoue, and Yoshiaki Kakuda, A dynamic system for forming convoys consisting of connected vehicles, Proc. 2019 IEEE Intl Conf on Dependable, Autonomic and Secure Computing, at the 18th International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN 2019), pp.677-680, 2019
2. Hiroyuki Toyota, Shinji Inoue and Yoshiaki Kakuda, A proposal and evaluation of mobility model which derives various node mobility scenarios, Proc. 2018 IEEE SmartWorld at the Seventeenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2018), pp.1623-1627, 2018

【社会活動】

電子情報通信学会の情報ネットワーク研究専門委員会の委員を拝命し、情報ネットワーク研究会の運営や電子情報通信学会の全国大会・ソサイエティ大会のサポートを行なっている。

2011年4月-	電子情報通信学会 通信ソサイエティ 情報ネットワーク研究 専門委員会 専門委員
2008年3月-	電子情報通信学会 通信ソサイエティ 論文査読委員

氏名	井上 智生
職位	教授
研究分野	計算機システム
研究キーワード	コンピュータの設計とテスト、計算機支援設計、高信頼性設計、ストカスティック・コンピューティング、ディペンダブル・コンピューティング、サイバー・フィジカル・システム

副理事（入学試験・就職担当（2018年度）、入学試験担当（2019年度））、キャリアセンター長（2018年度）として大学全体の運営に携わり、入試改革を中心とする高大接続改革を実施した。新しい入試制度は2020年度から実施される。低学年からのキャリア教育の導入・実施を行った。担当授業ではアクティブラーニングの要素を積極的に取り入れ、受講生の主体的な学びを実現している。卒業研究・修士課程の指導では自身の研究活動との両立を図り、学生が筆頭者の国際会議発表等を行っている。広島県教育委員会等との連携を図り、高校生の学びの支援、高大連携にも取り組んでいる。

【教育活動】

受講生の主体性を引き出す授業に取り組んでいる。例えば「CADシステム（情報工学科3年）」では、ターム制2時間連続開講の特性を生かし、演習や学生同士の議論の時間を増やすことで、主体的で深い学びを導いている。また、1年次全学共通系科目「キャリアデザイン i・ii」や「3学部合同基礎演習」では、グループ討論等を多く取り入れながら、他者と協働する力を身につけさせている。地域の企業・団体から講師を招くことで、大学での学びが社会・将来につながる意識を持たせるよう、学生を指導している。情報科学部のカリキュラム改革にも取り組み、新たな情報化社会を創造できる人材の育成に努めている。

2019年度	3学部合同基礎演習、キャリアデザイン i、キャリアデザイン ii、離散数学、グラフと最適化、CADシステム、計算機支援設計特論
2018年度	3学部合同基礎演習、キャリアサポートベーシック、離散数学、グラフと最適化、CADシステム、計算機支援設計特論

【研究活動】

コンピュータシステムの設計最適化手法、特にディペンダビリティ（信頼性、安全性など）を指向した計算機支援設計（CAD）技術に関する研究に取り組んでいる。2018-2019年度では、主に（1）確率的計算手法「ストカスティック・コンピューティング」による高信頼・高精度ハードウェアの設計法、（2）フェールオペレーショナル（故障があっても可能な限り継続する）システムの設計法、（3）大規模集積回路（LSI）のテスト容易化設計法、に関する研究に取り組んだ。（3）については、一部を民間企業との共同研究として取り組んでいる。

【社会活動】

学外では、（1）研究分野関連、（2）地域の高等学校との連携・支援、（3）民間企業との人材育

成、等で活動している。(1) として、国際会議運営委員会、国内研究会の専門委員会の委員を複数担当している。(2) としては、広島県教育委員会や他大学と連携して、高校生の探究活動を支援している。また、広島県内の高校の経営や教育に関する支援、指導・助言をさせていただいている。(3) としては、中国経済連合会人材育成部会を通じて、地域企業と連携した人材育成に取り組むほか、半導体技術者検定委員会を通じて半導体関連の技術者育成に協力している。

2019 年	International Test Conference in Asia (ITC-Asia) Steering Committee, Member
2018 年, 2019 年	International Test Conference in Asia (ITC-Asia) 2019 Organizing Committee, General Co-Chair
2018 年, 2019 年	電子情報通信学会 シニア会員
2018 年, 2019 年	情報処理学会 正会員
2018 年, 2019 年	一般社団法人パワーデバイス・イネーブリング協会 半導体技術者検定 2 級検定課題検討委員会、3 級検定改定委員会
2018 年, 2019 年	広島大学 GSC (グローバルサイエンスキャンパス) 広島コンソーシアム会議
2018 年, 2019 年	中国経済連合会 人材育成専門部会 分科会 1
2019 年	広島県立安西高等学校 学校運営協議会 会長
2019 年	広島県立祇園北高等学校 理数研究校運営指導委員会
2019 年	広島県 WWL コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会

氏名	井上 博之
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学
研究キーワード	組込みセキュリティ、広域分散環境

通信・ネットワーク工学における組込みセキュリティや広域分散環境に関する研究開発を行っている。

教育活動は大学の学生実験にアクティブラーニングを取り入れコンピュータとネットワークの仕組みを直感的に理解できるような実習を実施した。研究活動は組込みセキュリティのテーマにて、特に自動車の情報セキュリティで第一人者の何名かとして名前が出るようになっている。社会活動としては、情報セキュリティ分野での講演やセミナー講師、広島市における高大連携講座、全国的な若手・学生向け情報セキュリティ講座やイベントの実行委員などを行っている。

【教育活動】

コンピュータシステムおよびネットワークを中心とした授業を実施した。情報工学実験 I では代表教員を務め、実験でのアクティブラーニングの積極的な活用を行った。具体的には、以下のような授業を担当した。他に、卒業研究指導や修士論文研究指導もある。

2019 年度	コンピュータ基礎、オペレーティングシステム、情報工学実験 I、情報工学実験 II、テクニカル・リーディング演習（分担）、情報通信方法特論
2018 年度	コンピュータ基礎、オペレーティングシステム、情報工学実験 I、情報工学実験 II、テクニカル・リーディング演習（分担）、情報通信方法特論

【研究活動】

情報セキュリティ関係、特に広域ネットワークにつながる自動車（コネクティッドカー）の情報セキュリティに関する研究開発を行った。成果はグループのメンバでの論文として発表している。

主なものを以下に示す。

1. S. Ohira, A. K. Desta, I. Arai, H. Inoue, and K. Fujikawa, “Normal and Malicious Sliding Windows Similarity Analysis Method for Fast and Accurate IDS against DoS Attacks on In-vehicle Networks,” IEEE Access, vol. 8, pp. 42422-42435, Feb. 2020. (DOI: 10.1109/ACCESS.2020.2975893)
2. 上村孔明, 井上博之, 大平修慈, 石田賢治, “車載 LAN メッセージの出現頻度と変化量を利用したリアルタイムデータ圧縮方式,” 情報処理学会、マルチメディア、分散、協調とモバイル (DICOM2019) シンポジウム論文集, pp. 1-8, July 2019.
3. 大平修慈, 井上博之, 新井イスマイル, 藤川和利, “車載 LAN へ侵入するマルウェアの証拠保全を行うカーネル上のフォレンジック機構”, 情報処理学会論文誌, vol. 60, no. 3, pp. 791-802, Mar. 2019.
4. 石長篤人, 井上博之, 石田賢治, “車載ネットワークにおける CAN プロトコルの特性を利用し

- た送信元 ECU 識別方式,” 2019 年 暗号と情報セキュリティシンポジウム (SCIS2019), pp. 1-8, Jan. 2019.
5. 井上博之, “車載ネットワークセキュリティへの機械学習の適用,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会, PN/NS/IN 研究会共催企画シンポジウム BI-4-1, Sep. 2018.
 6. 家平和輝, 井上博之, 石田賢治, “特定の CAN メッセージを送信する ECU に対するバスオフ攻撃を利用したなりすまし攻撃”, 情報処理学会論文誌: コンシューマ・デバイス&システム, vol. 8, no. 2, pp. 1-12, May 2018.
 7. 鈴木陵馬, 金森健人, 家平和輝, 井上博之, 石田賢治, “車載 LAN における異なる種類のデータフィールド値の関係に基づく異常検知方式,” マルチメディア、分散、協調とモバイル (DICOM02018)シンポジウム, pp. 879-884, July 2018.
 8. K. Iehira, H. Inoue, K. Ishida, “Spoofing Attack Using Bus-off Attacks against a Specific ECU of the CAN Bus,” Proceedings of IEEE Consumer Communications & Networking Conference (CCNC2018), pp. 208-211, Jan. 2018.

【社会活動】

社会活動では情報セキュリティ関係の委員や顧問を行っており、何度か広島市での教育イベントを誘致および運用している。学会の委員、国際会議の実行委員、広島情報産業協会の IoT ハンズオン講座や市立工業高等での講義などを実施した。

主なものを以下に示す。

- ・情報通信研究機構 (NICT) ナショナルサイバートレーニングセンター SecHack365 実行委員会 実行委員
- ・情報処理推進機構 (IPA) セキュリティ・キャンプ 講師
- ・セキュリティコンテスト SECCON 実行委員会 実行委員
- ・ET ロボコン中四国地区大会 実行委員
- ・広島 HiBiS インターネットセキュリティ部会 顧問
- ・Program Committee, Escar Asia 2018, 2019
- ・Technical Program Committee (TPC), The 5th IEEE International Workshop on BIOT2018
- ・Invited Expert in the Embedded Systems WG, TCG

氏名	岩垣 剛
職位	助教
研究分野	計算機システム
研究キーワード	テスト容易化設計、高位合成、テスト生成、非同期式回路、ディペンダブルコンピューティング、デジタルシステムの設計とテスト、ストカスティックコンピューティング

教育活動・研究活動を中心に、地域社会等に情報科学や研究成果をわかりやすく伝えるための活動や、学会活動を通じて学術面から社会に貢献することも重要だと考え、それらのバランスを意識して大学教員としての活動を行っている。教育活動においては、いわゆるアクティブラーニングを取り入れることを念頭におき、学生が主体的に学ぶ場を提供することを目指している。また、研究活動においては、自身の興味と自由な発想に基づく研究を大切にしつつ、社会のニーズにも応える研究をしたいと考えている。大学における教育と研究は車の両輪であるため、それぞれを独立に考えず、相乗効果が得られるように工夫したい。

【教育活動】

担当講義においては、実験や演習を通じて、学生がその背景にある専門知識や技術を理解・習得したり、他の教科とのつながりや社会での応用例を意識したりできるような教材作りと指導を心がけている。また、学生の自主性・積極性をうまく引き出すような課題設定にも気を配っている。所属研究室においては、輪講や研究ミーティング、学会発表等を通じて、学生のアカデミックスキルや専門性を向上させることを目指すとともに、アプリケーション開発やハードウェア設計等の演習課題を通じて、学外コンテスト等への応募を奨励し、学生のキャリア形成にもつなげたいと考えている。

2019年度	計算機支援設計特論、プログラミング I 演習、情報科学基礎実験 $\alpha-1$ (A)、プログラミング II 演習
2018年度	プログラミング I 演習、計算機支援設計特論、プログラミング II 演習、情報科学基礎実験 $\alpha-1$ (A)

【研究活動】

2018年度・2019年度も、ディペンダブルコンピューティングを軸として、大規模集積回路(LSI)の信頼性向上に主眼を置いた研究を行っている。具体的には、日本学術振興会(科研費)の支援の下、非同期式LSIを対象としたフィールドでの信頼性向上や確率的演算を取り入れた設計法の考察を進めている。また、2017年10月から2019年9月の期間においては、システムオンチップに適用可能なテスト容易化設計技術に関する共同研究を行い、ニーズ指向の研究にも挑戦している。具体的には、テスト容易化設計(スキャン設計)に伴うオーバーヘッド(面積、遅延、電力等)が大きいという課題に対して、レジスタ転送レベルからアプローチし、手法の実用化を目指している。

1. Hideyuki Ichihara, Yuki Maeda, Tsuyoshi Iwagaki and Tomoo Inoue, State encoding with stochastic numbers for transient fault tolerant linear finite state machines, Proc. 32nd IEEE Symposium on Defect and Fault Tolerance in VLSI and Nanotechnology Systems (DFT '19), pp.1-6, 2019
2. Tsuyoshi Iwagaki, Sho Yuasa, Ichihara and Tomoo Inoue, An empirical approach to RTL scan path design focusing on structural interpretation in logic synthesis, Proc. 3rd IEEE International Test Conference in Asia (ITC-Asia '19), pp.55-60, 2019
3. Sho Yuasa, Tsuyoshi Iwagaki, Hideyuki Ichihara and Tomoo Inoue, Effective utilization of register-transfer paths based on enhancing multiplexer functions in RTL scan design, Digest of Papers 19th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing (WRTL '18), pp.1-6, 2018
4. 研究発表, 可児 冬弥, 瀬戸 信明, 市原 英行, 岩垣 剛, 井上 智生, ストカスティックコンピューティングにおけるシグモイド関数実装法に関する考察, FTC 研究会, 2020年1月 (ほか5件)

【社会活動】

社会活動においては、オープンキャンパス等の機会を活用して、高校生や地域住民に研究成果を広く知ってもらい、いわゆる「アウトリーチ活動」を重要視している。特に、本学の「高校生による情報科学自由研究」等のイベントを実施する際には、高校で学ぶ知識（数学や物理等）の大切さや情報科学の楽しさ、情報科学が社会をどう支えているかを参加者に伝えたいと考えている。また、学会活動においては、学会の委員の依頼や査読の依頼があれば積極的に受け入れ、こうした活動を積み重ねることで、学术界の発展にも寄与したいと考えている。

2019年9月	産学連携研究発表会 2019
2019年8月	オープンキャンパス 2019 研究室紹介
2018年-	30th IEEE Asian Test Symposium (ATS 2021) Publicity Chair
2018年	平成30年度 電気・情報関係学会中国支部連合大会 実行委員
2018年	33rd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC) TPC member
2018年8月	オープンキャンパス 2018 研究室紹介
2018年8月	ひろしまコンピュータサイエンス塾
2018年5月-	電子情報通信学会 VLSI 設計技術研究会 専門委員
2016年4月-2020年3月	システムとLSIの設計技術研究会運営委員
2016年4月-2020年3月	DA シンポジウム実行委員

氏名	岩城 敏
職位	教授
研究分野	ロボティクス
研究キーワード	ロボティクス、モーションメディア、コンプライアンス、力制御、テレオペレーション

2018-2019年度は、教育活動・研究活動・社会活動それぞれに一定の貢献実績があったと自己評価している。特に2018年度前期、情報科学部教授としては初めて学外長期研修（ミュンヘン工科大学）に挑戦し、本学部の国際交流を推進すると共に、本研究室と Prof. Lueth 率いる MiMed (Institute of Micro Technology and Medical Device Technology) との共同研究を進めた。これら海外活動の総合的な結果として、2018年度グローバル人材育成貢献賞、2019年度教員表彰（ハノーバー専科大学との Double master degree program の立ち上げ）を受けた。

【教育活動】

情報基礎数学は本学部生が常識的に習得すべき基礎的内容なので、確実に身に付けられるよう演習中心に授業を進めた。ロボティクスⅠ・ロボティクスⅡでは、ロボットの重要性と魅力を訴えることで強く動機づけを行い、運動学・動力学を中心に、ビデオ・実機を用いて基礎技術を分かり易く習得させた。ロボティクス特論では、国際会議発表を模擬した授業を展開することで、基礎的英語力を鍛えると共に、学生のテーマに応じた研究活動に直結するような実践的指導を行った。全ての科目の授業評価は本学部の平均をほぼ上回っており、それぞれ価値のある授業を提供できたと考える。

2019年度	ロボティクスⅠ・Ⅱ、ロボティクス特論、情報基礎数学
2018年度	ロボティクスⅡ、ロボティクス特論

【研究活動】

介護ロボット指示インタフェースとしての実世界クリッカー、および非接触物体操作技術として Air Jet Manipulation を主たる研究テーマとしており、下記リストのような成果を上げた。また、実世界クリッカーは、2018年4月科研に二期連続で採択され現在継続中。

1. Nobukado Abe, Kazuki Yoshinaga, Satoshi Iwaki, Naoki Tsuchihashi, Tetsushi Ikeda, Toshiharu Kosaku, Takeshi Takaki, An Experimental Study for the Contactless Manipulation of Single Object in Vertical Plane Using Multiple Air Jets, Informatics in Control, Automation and Robotics, Vol.613, pp.318-327, 2019
2. Yoshinaga, Iwaki, et.al., “A spatial motion control to transfer an object between a pair of air jet”, Proc. of International Conference on Informatics in Control, Automation and Robotics (ICINCO2018) 2018/07/29

3. Abe, Iwaki, et.al., “Pitching and Catching of an Object Between a Pair of Air Jet”, Proc. of 15th INTERNATIONAL CONFERENCE ON INFORMATICS IN CONTROL, AUTOMATION AND ROBOTICS (ICINCO2018), 2018/07/29
4. Shimizu, Iwaki, et.al., “A dancing robot controlled by a guitar sound”, Proc. of 11th International Conference on Human System Interaction (HSI 2018), 2018/07/04
5. Presentation, Aki Tamai, Tetsushi Ikeda, Satoshi Iwaki, A Method for Guiding a Person Combining Robot Movement and Projection, IEEE/RSJ Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems (IROS), pp. 1265-1270, 2019年11月
6. Presentation, Shohei Yamashita, Tetsushi Ikeda, Kazuhiko Shinozawa, Satoshi Iwaki, Evaluation of Robots that Signals a Pedestrian Using Face Orientation, IEEE Int. Conf. on Robot & Human Interactive Communication (RO-MAN), pp. 1163-1170, 2019年10月
7. Presentation, Yuki Ishii, Tetsushi Ikeda, Toru Kobayashi, Yumiko O. Kato, Akira Utsumi, Isamu Nagasawa, Satoshi Iwaki, Investigation of the driver’s seat that displays future vehicle motion, IEEE Int. Conf. on Robot & Human Interactive Communication (RO-MAN), pp. 148-153, 2019年10月
8. Presentation, Ishihata, Iwaki, et. al., Teaching Method for Robot’s Gripper Posture with a Laser Sensor on a Pan-Tilt Actuator: A Method for Specifying Posture Feature Curves and Posture Feature Point, IEEE Int. Conf. on Robot & Human Interactive Communication (RO-MAN), pp. 480-485, 2019年10月
9. Presentation, Aki Tamai, Tetsushi Ikeda, Satoshi Iwaki, Behavior Analysis of a Person Guided by a Projection Robot, SICE Annual Conference 2019, pp. 990-992, 2019年9月
10. Presentation, Kotani, Iwaki, et.al., Multiple DOF platform with multiple air jets, Int. Conf. on Informatics in Control, Automation and Robotics, 2019年7月
11. Presentation, Toru Kobayashi, Tetsushi Ikeda, Yumiko O. Kato, Akira Utsumi, Isamu Nagasawa, Satoshi Iwaki, Evaluation of Mental Stress in Automated Following Driving, 3rd International Conference on Robotics and Automation Engineering, 2018年11月
12. Presentation, Yoshinaga, Iwaki, Tsutiihashi, Abe, Ikeda, Kosaku, Takaki, A spatial motion control to transfer an object between a pair of air jet, International Conference on Informatics in Control, Automation and Robotics (ICINCO2018), 2018年7月
13. Presentation, Nobukado ABE, Satoshi IWAKI, Kazuki YOSHINAGA, Naoki TSUCHIHASHI, Tetsushi IKEDA, Toshiharu KOSAKU, Takeshi TAKAKI, Pitching and Catching of an Object Between a Pair of Air Jet, 15th INTERNATIONAL CONFERENCE ON INFORMATICS IN CONTROL, AUTOMATION AND ROBOTICS, 2018年7月

14. Presentation, Hayato Shimizu, Satoshi Iwaki, Tetsushi Ikeda, Shohei Sakata, Hayato Yoshida, A dancing robot controlled by a guitar sound, 11th International Conference on Human System Interaction HSI 2018, 2018年7月
15. 特許出願 物体保持装置及び保持方法 2019-084127, 2019/04/25
16. 教員表彰 (大学運営) , 広島市立大学, 2020
17. グローバル人材育成貢献賞, 広島市立大学情報科学研究科, 2019

【社会活動】

下記に示すように、本学主催の公開講座や、広島県・市・文科省主催の講演に積極的に協力した。

2019年9月24日	ヘルケア・医療福祉機器技術研究交流会講演
2019年4月-	文部科学省「Society5.0に対応した高度技術人材育成事業」 enPiT-Pro「ロボットの運動学と動力学」講師
2018年11月, 2019年11月	地域貢献事業発表会
2018年9月, 2019年9月	産学連携研究発表会

氏名	岩田 一貴
職位	准教授
研究分野	知能情報学、統計科学
研究キーワード	機械学習、パターン認識、情報理論

一年間のトータルで考えたときに、教育活動、研究活動、社会貢献、大学運営（学内委員会など）のバランスがうまく取れるように意識して活動してきた。最近2年間は大学情報ネットワークシステム機種更新（HUNET2019）の教育関連ワーキンググループのリーダー兼学部演習室機種仕様策定委員会委員長として、大学運営に関わる時間が当初想定していたよりも増えてしまったが、更新したシステムは無事に稼働し、その貢献は2019年度教員表彰（大学運営）として評価された。研究活動は忙しい間もコツコツと継続しており、今後2年間を目途にその成果を国際的な学術雑誌にまとめて出版したいと考えている。また、学生の研究指導についても、学会での研究発表を目標にさせて、引き続き積極的に支援していくつもりである。

【教育活動】

担当する授業では、毎回演習を兼ねたアンケートを実施し、わからなかった箇所を受講生に申告させ、申告が多かった箇所を次の授業の冒頭で説明するようにしている。また、授業スライドと配布資料には、教科書との対応を明記し、受講生が後で自習してもわかるように丁寧に作成している。授業アンケートによると、これらの工夫はとても評価が高いようなので、今後も継続して行っていくつもりである。なお、2年間で担当した授業名は次のとおりである。

2019年度	確率統計、パターン認識特論、最適化理論、情報科学基礎実験β
2018年度	確率統計、パターン認識特論、最適化理論、情報科学基礎実験β、離散数学

【研究活動】

パターン認識、学習理論分野で研究活動してきた。国際的な雑誌論文に毎年一編は論文を出版できることを目標に、その他の活動（教育活動、社会活動、大学運営）にかかる時間をうまくやりくりして、研究に集中する時間をなるべく確保してきた。大学院生への研究指導については、個々の学生の関心や到達度に応じて、柔軟に対応することを心がけてきた。積極的に学会で研究発表させることも、研究指導において心がけてきたことの一つである。なお、2年間で発表した雑誌論文、国際会議予稿、および大学院生が受賞した学会発表は次のとおりである。

1. Kazuya Ose, Kazunori Iwata, and Nobuo Suematsu, Sampling Shape Contours Using Optimization over a Geometric Graph, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E102-D, No. 12, pp. 2547-2556, 2019
2. Kazunori Iwata, Shape Clustering as a Type of Procrustes Analysis, Proceedings of

- the 25th International Conference on Neural Information Processing, LNCS 11304, pp. 218–227, Dec. 2018.
3. Hiroki Yamamoto, Kazunori Iwata, Nobuo Suematsu, and Kazushi Mimura, A Shape Matching Method Considering Computational Feasibility, Proceedings of the 2018 International Conference on Signal Processing and Machine Learning, pp. 115–119, Nov. 2018.
 4. Minori Ihara, Kazunori Iwata, Nobuo Suematsu, and Kazushi Mimura, Typical Performance of Sparse Signal Recovery from a Linear Measurement with Large Coherence, Proceedings of the 2018 International Symposium on Information Theory and Its Applications, pp. 427–431, Oct. 2018.
 5. 井原 みのり, 岩田 一貴, 三村 和史, コヒーレンスを持つ観測によるスパース推定量の正則化項の大きさの影響, No. B1-25, 第 21 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム論文集, 2019 年 11 月, HISS 最優秀プレゼンテーション賞.
 6. 山本 大貴, 岩田 一貴, 末松 伸朗, 三村 和史, 追加コスト関数を用いた形状間の対応付けの拡張, No. R18-21-0, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会講演論文集, 2018 年 10 月, 連合大会奨励賞.
 7. 井原 みのり, 岩田 一貴, 末松 伸朗, 三村 和史, 大きなコヒーレンスを持つ観測によるスパース推定の性能評価, No. R18-17-01, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会講演論文集, 2018 年 10 月, 連合大会奨励賞.

【社会活動】

広島県の高校生を対象とした研究活動支援に重点を置いて活動してきた。2018 年度はグローバルサイエンスキャンパス (GSC) 広島における指導教員として、広島市内の高校生に合計 22 回の研究指導を行った。主に休日を利用し、大学の研究室で研究指導をした。さらに、広島県科学セミナーに係る指導助言者として、数学分野で研究発表を行った県内の高校生にコメントや評価を直接伝えてきた。このことにより、高校生の科学に対する関心や好奇心を高める役割を担ってきた。2 年間の主な活動履歴は次のとおりである。

2020 年 2 月	令和元年度広島県科学オリンピック開催事業第 4 回広島県科学セミナーに係る指導助言者
2020 年 1 月-2020 年 10 月	SPML 2020, Technical Committee Member
2019 年 3 月-2019 年 11 月	SPML 2019, Technical Committee Member
2019 年 2 月	平成 30 年度広島県科学オリンピック開催事業第 4 回広島県科学セミナーに係る指導助言者
2018 年 7 月-2018 年 11 月	SPML 2018, Technical Committee Member and Session Chair
2018 年 3 月-2018 年 12 月	グローバルサイエンスキャンパス広島における指導教員

氏名	岩根 典之
職位	准教授
研究分野	教育工学、感性情報学・ソフトコンピューティング、知能情報学、学習科学
研究キーワード	再利用、オントロジ、セマンティックウェブ、学習システムユーザインタフェース、学習システム、ヴァーチャルリアリティ

新しいことにチャレンジするという自らの方針に基づいて教育、研究、社会貢献に関する活動をしてきた。十分な成果にはつながらなかったが、全体的にバランスよく取り組めたと考える。教育活動は非常勤講師や緊急対応科目など含めて 10 科目程度担当するなど幅を広げることができた。研究活動については、まず、アクティビティを示すことが重要という考えで取り組んだ。また、社会貢献についても依頼はすべて引き受けることができた。今後、さらに地域や関連分野の教育研究に還元できるよう新しいことにも積極的に挑戦していきたい。

【教育活動】

地域課題演習については継続して担当し、事業最終年度は 1 テーマの主担当を受け持つとともに 1 テーマを協力させてもらった。新規科目も含めて引き続き、新しい試みを試しながら授業を改善していくとともに教育研究の幅を広げていきたい。また、他大学の非常勤講師として情報社会関連の授業を担当した経験を本学の科目に反映できた。引き続き、本学の担当授業に還元するとともに新しいことにも挑戦していくつもりである。

2019 年度	コンパイラ、知能工学実験 I、情報科学概論、教科教育法（情報）II、オペレーティングシステム、学習システム特論、情報社会論、地域課題演習
2018 年度	地域課題演習、知能工学実験 I、コンパイラ、教科教育法（情報）II、学習システム特論、情報科学概論、オペレーティングシステム

【研究活動】

教育工学や学習科学関係の学会および国際会議を中心に成果を発表した。申請した科研費を獲得できなかったのが全体的に外部発表件数はこれまでより少なくなったが、例年、参加している国際会議、全国大会、研究会は継続的に参加発表できた。この 2 年間で 9 件の第一著者としての執筆口頭発表をしているので個人のアクティビティを示す最低限の件数ではある。しかし、全国大会レベルの発表が多いので研究会やジャーナルペーパーとしてまとめられるよう研究を進展させていく必要がある。また、外部研究費獲得に努めるとともに多様な分野の研究者と共同研究をするなどして引き続き新規テーマの発掘に取り組む必要がある。

1. Noriyuki Iwane, Mitsuaki Yamaguchi, Towards Making Regional Issues of Marine Resources a Teaching and Learning Material, ACM IMCOM2020, The 14th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, 2020

2. Noriyuki Iwane, Chunming Gao, Makoto Yoshida, Hajime Kishida, Preliminary Study of Haptic Media for Future Digital Textbooks, ACM IMCOM2019, The 13th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, 2019
3. Presentation, Noriyuki Iwane, Towards Making Regional Issues of Marine Resources a Teaching and Learning Material, ACM IMCOM2020, The 14th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, 2020年1月
4. 研究発表, 岩根典之, 山口光明, 広島湾の水産資源調査の効率化について, 第24回日本知能情報ファジィ学会中国・四国支部大会, 2019年12月
5. 研究発表, 岩根典之, 山口光明, 水産資源の教材化による地域課題への取り組み, 教育システム情報学会中国支部研究発表会, 2019年10月
6. 研究発表, 岩根典之, カキ筏垂下における水産資源の観察学習支援について, 教育システム情報学会第44全国大会(JSiSE2019), 2019年9月
7. 研究発表, 岩根典之, 高橋健一, 文系学部を対象とした情報教育の試みについて, 情報処理学会第81回全国大会, 2019年3月
8. 研究発表, 岩根典之, 山口光明, 広島湾の水産資源に関する仮想学習環境の構築に向けて, 第23回日本知能情報ファジィ学会中国・四国支部大会, 2018年12月
9. 研究発表, 岩根典之, 組立ブロックを用いた学生実験の学習教材の見直しと評価, 日本教育工学会第34回全国大会, 2018年9月
10. 研究発表, 中野美登里, 主体的な「操作」を指向したメンタルローテーション課題のためのAR型学習支援システムと評価, 教育システム情報学会第42回全国大会(JSiSE2018), 2018年9月
11. 研究発表, 岩根典之, 山口光明, カキの食害を学習するためのPBL教材について, 教育システム情報学会第42回全国大会(JSiSE2018), 2018年9月
12. 研究発表, 岩根典之, 山口光明, 広島湾の水産資源における課題の学習教材について, 教育システム情報学会中国支部研究発表会, 2018年7月

【社会活動】

外部から依頼があれば基本的にすべて引き受けるという方針で社会貢献に努めてきた。委員会も日程が重ならず旅費が確保できたものは出席するようにした。地域課題演習などでつながりができた外部機関と協力関係を築いたり、積極的にフィールドワークに参観して地域の方たちと交流しながら情報交換したり社会活動できた。今後は活動が成果につながるようさらに社会貢献できるよう努力するつもりである。

氏名	内田 智之
職位	准教授
研究分野	情報学基礎、アルゴリズム、数理情報学、知能情報学、計算科学、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	グラフアルゴリズム、データマイニング (グラフマイニング)、計算論的学習理論、グラフ文法

2018年度・2019年度は、教育活動・研究活動・社会活動等にバランスよく積極的に取り組むことができた。教育においては、担当する講義以外にも大学院博士前期課程4名、学部4年生9名の教育指導を行い、修士論文・卒業論文を提出させることができた。研究活動においては、6編の雑誌論文と3編の国際会議論文の公表および15編の国内研究発表を行った。社会活動等では、国際会議のProgram Committeeや広島井口高等学校学校関係者評価委員長などを積極的に務めた。

【教育活動】

2018年度に大学院博士前期課程1名、2018年度・2019年度を通して大学院博士前期課程1名に対して教育研究指導を行い十分に評価される修士論文を提出させた。また、2019年度に大学院博士前期課程2名に対し教育研究指導を行なった。2018年度に学部4年生4名、2019年度に学部4年生5名に対し教育研究指導を行い、十分評価できる卒業論文を提出させた。また、2018年度・2019年度は、以下の講義を担当した。

2019年度	計数量理論特論、計算論、線形代数学 II、グラフ理論概論、基礎実験 $\beta-1$
2018年度	計数量理論特論、計算論、線形代数学 II、グラフ理論概論、基礎実験 $\beta-1$

【研究活動】

2018年度・2019年度は、主に「グラフ文法圧縮データからの省メモリ高速グラフマイニング手法の開発」、「グラフ言語に関する効率的な機械学習アルゴリズムの開発」、「論理的思考力の向上を目指した学習支援システムの開発」及び「失語症リハビリテーション支援のための言語聴覚訓練プラン作成アプリの開発」について研究を行った。研究活動成果として、以下の6編の雑誌論文と3編の国際会議論文の公表および15編の国内研究発表を行った。

1. S. Matsumoto, T. Uchida, T. Shoudai, Y. Suzuki, and T. Miyahara, An Efficient Learning Algorithm for Regular Pattern Languages Using One Positive Example and a Linear Number of Membership Queries, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E103-D, No. 3, pp.526-539, 2020
2. Y. Suzuki, T. Miyahara, T. Shoudai, T. Uchida, S. Matsumoto, and T. Kuboyama, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Height-constrained Variables for Trees, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and Its Applications, Vol.12, No. 3, pp.78-88, 2019

3. F. Tokuhara, S. Okinaga, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Kuboyama, and T. Uchida, Using Label Information in a Genetic Programming Based Method for Acquiring Block Preserving Outerplanar Graph Patterns with Wildcards, Proc. IWCI2019, IEEE, pp.95-100, 2019
4. S. Matsumoto, T. Uchida, T. Shoudai, Y. Suzuki, and T. Miyahara, Exact Learning of Regular Pattern Languages from One Positive Example Using a Linear Number of Membership Queries, Proc. IMECS2019, pp.204-209, 2019
5. T. Uchida, S. Matsumoto, T. Shoudai, Y. Suzuki, and T. Miyahara, Exact Learning of Primitive Formal Systems Defining Labeled Ordered Tree Languages via Queries, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E102-D, No.3, pp.470-482, 2019
6. Y. Yamagata, F. Tokuhara, Y. Inaba, K. Muratani, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Uchida, and T. Kuboyama, Evolutionary Learning of Multiple TTSP Graph Structured Patterns from Positive and Negative TTSP Graph Data: Its Graph Pattern Display System and Performance Evaluation, Proc. IES2018, pp.120-127, 2018
7. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, and T. Uchida, Acquisition of Characteristic Sets of Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by a Two-stage Evolutionary Learning Method for Graph Pattern Sets, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol.7, No.3/4, pp.270-288, 2018
8. T. Shoudai, T. Miyaara, T. Uchida, S. Matsumoto, and Y. Suzuki, An Efficient Pattern Matching Algorithm for Unordered Term Tree Patterns of Bounded Dimension, IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E101-A, No.9, pp.1344-1354, 2018
9. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, and T. Uchida, Aggregative Context-Aware Fitness Functions based on Feature Selection for Evolutionary Learning of Characteristic Graph Patterns, Vietnam Journal of Computer Science, pp.229-239, 2018

【社会活動】

2018年度・2019年度は、以下の委員・活動を積極的に行った。また、広島工業大学の非常勤講師として「線形代数A」と「線形代数B」を担当した。2018年度・2019年度にオープンキャンパス・ライブキャンパスを、2019年度に高校生による情報科学自由研究指導を行なった。

2018年4月-2019年10月	国際会議 DEEP-ML の Program Committee
2018年4月-2019年10月	国際会議 ILP の Program Committee
2016年6月-2019年3月	国際会議 ICMLC の Technical Committee
2015年6月-2019年3月	広島県立広島井口高等学校学校関係者評価委員長及学校運営協議会会長
2012年4月-2019年10月	国際会議 ICMLA の Program Committee

氏名	大田 知行
職位	准教授
研究分野	情報通信工学、計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	無線マルチホップネットワーク、ネットワークソフトウェア

研究活動では、モバイル端末の持つ近距離無線通信装置で構成される無線マルチホップネットワーク向けネットワークソフトウェアの研究を行っている。社会活動として、電子情報通信学会英文論文誌の編集委員を務め、投稿される論文の編集業務を行っている。教育活動では、Androidプログラミングやネットワークを活用したソフトウェア開発について、学部生向けに授業・演習を担当している。また、公開講座等を通じて、高校生向けにもプログラミングによってアニメーションなどを作成できる Processing を用いた演習を実施した。

【教育活動】

プログラミング III では Android プログラミング技術の基礎を教えている。身近に使用しているスマートフォン向けアプリケーションの開発技術を習得することにより、今後さらにいろいろなデバイスで使用される Android OS 向けプログラミングの理解を深めることができる。また、アプリケーションを二人体制で開発することにより、小規模なチームでの開発演習を行っている。ネットワークソフトウェア演習では、ネットワークを活用したソフトウェアを開発するために必要となるプログラミング技術の基本を C 言語で学ぶことにより、クライアントサーバー型ネットワークシステムのプログラミング技術の基礎を習得できる。

2019 年度	情報工学実験 I、プログラミング I 演習、プログラミング I、ネットワークソフトウェア演習、情報工学実験 II、プログラミング III、モバイルネットワーク特論、情報科学講究 IV
2018 年度	プログラミング III、プログラミング II、プログラミング II 演習、ネットワークソフトウェア演習、情報工学実験 II、モバイルネットワーク特論、情報科学講究 II

【研究活動】

無線マルチホップネットワークを用いた情報収集配信手法を効率的に行うための通信プロトコルに関する研究を行っている。現在、多くのモバイル端末は 4G/LTE 等のモバイルコアネットワークへの接続に加え、WiFi/Bluetooth 等の近距離無線通信装置を持つ。これらの近距離無線通信装置を用いてモバイル端末間で無線マルチホップネットワークを構成し、各端末が集めた情報を比較的ローカルな地域において交換することが可能である。さらに、これらの技術を評価するためにネットワークシミュレータを用いている。ネットワークシミュレータと実機を連携させることにより、プロトコルのみでなく、アプリケーションとしての評価ができるシステムの開発も行っている。

1. S. Murakami, T. Ohta, J. Dunkel, and Y. Kakuda, Simulation of evacuation route guidance considering evacuation situation changes in MANET-based building evacuation system, Proc. Seventh International Symposium on Computing and Networking Workshops (CANDARW), pp.59-62, 2019
2. R. Mukai, T. Ohta, and Y. Kakuda, Development of a network status visualizing system for wireless multihop networks, Proc. Seventh International Symposium on Computing and Networking Workshops (CANDARW), pp.55-58, 2019
3. S. Murakami, T. Ohta, J. Dunkel, and Y. Kakuda, Evaluation framework using simulator and mobile device for developing evacuation route guidance in MANET-based building evacuation system, Proc. 2019 IEEE Intl Conf on Dependable, Autonomic and Secure Computing, Intl Conf on Pervasive Intelligence and Computing, Intl Conf on Cloud and Big Data Computing, Intl Conf on Cyber Science and Technology Congress, pp. 667-671, 2019
4. T. Ohta, M. Nishi, T. Terami, and Y. Kakuda, Information dissemination using MANET for disaster evacuation support, IEICE Transactions on Communications (Special Section on Sensing, Wireless Networking, Data Collection, Analysis and Processing Technologies for Ambient Intelligence with Internet of Things), Vol.vol.E102-B, No.no.4, pp.670-678, 2019
5. T. Ohta, and J. Dunkel, Simulation of evacuation route guidance in MANET-based building evacuation system, Proc. of the 12th EAI International Conference on Performance Evaluation Methodologies and Tools (VALUETOOLS 2019), pp. 195-196, 2019

計 19 件

【社会活動】

学会活動として、電子情報通信学会英文論文誌 B の編集委員を務めており、投稿された英文論文の編集作業を務めている。また、センサネットワークとモバイルインテリジェンス研究会では専門委員を務め、研究会や論文誌特集号の補助を行っている。公開講座では、高校生向けに Processing プログラミング入門の演習を行い、簡単なプログラムで動作するアニメーションを作成し、プログラミングに対する興味を持ってもらえるような演習を実施している。

2019 年 11 月-2020 年 12 月	電子情報通信学会「Special Section on IoT Sensor Networks and Mobile Intelligence」英文論文誌小特集編集委員会
2019 年 4 月-2021 年 6 月	電子情報通信学会センサネットワークとモバイルインテリジェンス研究専門委員会
2019 年 10 月	広島県立祇園北高等学校体験授業
2019 年 4 月-2019 年 11 月	12th International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON'19) プログラム委員長
2017 年 6 月-2021 年 5 月	電子情報通信学会英文論文誌 B 編集委員

氏名	岡本 勝
職位	講師
研究分野	知能情報学、統計科学、教育工学
研究キーワード	ニューラルネットワーク、Bayesian Net、統計科学、学習システム、知識工学、知能工学、ヒューマンインタフェース、拡張現実、教育工学、ヘッドマウントディスプレイ、没入感

教育活動では情報科学部 1 年生が大学で情報教育を行う上で必須となる知識技術の習得および 3 年生の専門科目を中心に行った。また大学院向け講義も担当した。研究活動では拡張現実感を用いた学習支援を中心として研究を行い、特に化学学習分野における拡張現実感の応用可能性を示した。同様にバーチャルリアリティ技術とヘッドマウントディスプレイ装置を用いた理科学習などの可能性も検討した。

【教育活動】

知識工学特論では大学院生向けに ICT を活用した教育活動の歴史や社会インフラとの関連性に関する講義や近年発表された論文を中心とした現状及び将来的な可能性について学習を行い、受講学生の発表をもとにしたディスカッションなども行った。情報活用基礎では情報科学部 1 年生向けに本学で学ぶ上で必要となる知識の習得を行える授業設計を行った。知能工学実験 I では、人工知能に関する技術をもとにして自律的にオセロを行えるプログラム実装を指導し、情報セキュリティでは最新トピックを中心として、近年の情報セキュリティに関する知識習得を行える授業設計を行い実施した。

2019 年度	知識工学特論、情報活用基礎、情報セキュリティ、知能工学実験 I
2018 年度	知識工学特論、情報活用基礎、情報セキュリティ、知能工学実験 I

【研究活動】

研究活動では「拡張現実感」「バーチャルリアリティ」「学習支援」を中心テーマとして活動した。特に拡張現実感技術を用いた学習支援を主として実施した。対象となる中高生年代での普及率が最も高い ICT インフラといえるモバイル端末、特にスマートフォンを活用したヘッドマウントディスプレイ型デバイスを用いた学習支援システムの実現などを行い、一定の学習効果があることを確認し、論文として公開した。また、バーチャルリアリティ技術とヘッドマウントディスプレイを活用した理科学習支援手法も開発し、実現可能性を示した。

1. 松原行宏、河野貴範、岡本勝, 疑似力覚提示機能を用いた滑車学習支援システム, 日本教育工学論文誌, Vol. 43, No. Suppl., pp. 89-92, 2020
2. 岡本勝、石村司、松原行宏, ヘッドマウントディスプレイと拡張現実感技術を用いた無機化学学習支援システムの開発, 教育システム情報学会誌, Vol. 35, No. 4, pp. 312-321, 2018

【社会活動】

オープンキャンパスなど大学の内容を外部に発信する活動に参加した。

2009年8月-	オープンキャンパス
2018年-2019年	教育システム情報学会和文論文誌編集委員
2018年-2019年	人工知能学会先進的学習科学と工学研究会(ALST)幹事
2018年-	人工知能学会先進的学習科学と工学研究会(ALST)専門委員

氏名	岡山 友昭
職位	講師
研究分野	数学基礎・応用数学、計算科学
研究キーワード	数値解析、変数変換型数値計算法

教育活動・研究活動・社会活動いずれも精力的に行った。講義や演習に加え、卒論生や修論生の研究指導にも力を入れており、学会発表・論文発表をさせることを基本として指導をした。研究は学生や他大の先生との共著の論文に加え、単著の論文も何本か主要論文誌に掲載された。社会活動においては学会論文誌の編集委員副委員長を務め、またオープンキャンパスや高校での模擬授業などのアウトリーチにも貢献した。学内委員会活動も精力的に行った。

【教育活動】

解析学 I と解析学 II においては、新たに執筆した教科書をもとに内容を厳選して講義を行った。線形代数学 I および同演習では、4 限と 5 限で連続したコマであることを生かし、例えば 4 限の講義で少し時間があれば 5 限の演習の解説を前倒しして行うなど、柔軟に双方の時間を使うようにした。数値計算法では一コマの中で講義と演習をセットで行うことで内容が定着しやすいように工夫している。その他の講義でも受講生の興味を引く題材を選んだり、理解が深まるよう噛み砕いた説明をしたりと様々な工夫を試みている。

2019 年度	外書講読演習 II、解析学 I、解析学 I 演習、数値計算法、数理科学特論 B、解析学 II、外書講読演習 I
2018 年度	外書講読演習 II、線形代数学 I、線形代数学 I 演習、数値計算法、解析学 I、外書講読演習 I、数理科学特論 B、解析学 II

【研究活動】

研究のテーマは高性能数値計算法の開発とその数学的解析であり、2017 年度から引き続き科研費の助成を受けて研究を進めている。通常の有界区間における数値計算法に加え、半無限区間や全無限区間における数値計算法に対しても計算法の開発や数学的解析を行った。いずれの研究においても、サンプリング数の増加につれ誤差が指数関数的に減少する（＝高性能である）ことを示している。また単に近似結果を出力するだけでなく、その結果がどの程度正しいかまで検証する「精度保証付き数値計算法」を念頭に研究を進めている。

1. Tomoaki OKAYAMA and Chisei KUROGI, Improvement of selection formulas of mesh size and truncation numbers for the double-exponential formula, JSIAM Letters, Vol.12, pp.13-16, 2020
2. Ryota HARA and Tomoaki OKAYAMA, Error analyses of Sinc-Nyström methods for initial value problems, Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, Vol.10, No.4, pp.465-484, 2019

3. Tomoaki OKAYAMA and Ryota HAMADA, Modified SE-Sinc approximation with boundary treatment over the semi-infinite interval and its error bound, JSIAM Letters, Vol.11, pp.5-7, 2019
4. Ken'ichiro TANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Masaaki SUGIHARA, An optimal approximation formula for functions with singularities, Journal of Approximation Theory, Vol.234, pp.82-107, 2018
5. Naoya YAMANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Shin'ichi OISHI, Numerical algorithm for sine integral with verification, Proceedings of The 37th JSST Annual International Conference on Simulation Technology, pp.129-131, 2018
6. Ryota HARA and Tomoaki OKAYAMA, Improvement of Sinc-Nyström methods for initial value problems, Proceedings of the 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, pp.651-654, 2018
7. Tomoaki OKAYAMA, Theoretical analysis of a Sinc-Nyström method for Volterra integro-differential equations and its improvement, Applied Mathematics and Computation, Vol.324, pp.1-15, 2018
8. 研究発表, 白石朋也, 岡山友昭, 片側急減衰関数に対する SE-Sinc 関数近似の改善と理論誤差評価, 日本応用数学会 2020 年研究部会連合発表会, 2020 年 3 月
9. 研究発表, 野村友暉, 岡山友昭, 片側急減衰関数の全無限積分に対する鶴田らの SE 公式の理論誤差評価の改善, 日本応用数学会 2020 年研究部会連合発表会, 2020 年 3 月
10. Presentation, Tomoaki OKAYAMA and Shu HANADA, A modified Stenger's quadrature formula for infinite integrals of unilateral rapidly decreasing functions and its theoretical error bound, Mathematical and Computational Modelling, Approximation and Simulation 2019, 2019 年 9 月
11. 研究発表, 岡山友昭, 黒木治世, 二重指数関数型数値積分公式の理論誤差評価の改善, 日本応用数学会 2019 年度年会, 2019 年 9 月
12. 特別講演・招待講演, 岡山友昭, 変数変換型数値計算法の発展について, 数値解析談話会 2019, 2019 年 6 月
13. Presentation, Naoya YAMANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Shin'ichi OISHI, Numerical algorithm for sine integral with verification, The 37th JSST Annual International Conference on Simulation Technology, 2018 年 9 月
14. Presentation, Naoya YAMANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Shin'ichi OISHI, Verified algorithm for the sine integral, The 18th International Symposium on Scientific Computing, Computer Arithmetic, and Verified Numerical Computations, 2018 年 9 月
15. Presentation, Fuminori TATSUOKA, Tomoaki OKAYAMA, Shao-Liang ZHANG and Masaaki SUGIHARA, A note on computing the pth root of Sinc matrices, 16th International Conference of Numerical Analysis and Applied Mathematics, 2018 年 9 月
16. Presentation, Ryota HARA and Tomoaki OKAYAMA, Improvement of Sinc-Nyström methods for initial value problems, The 2018 International Symposium on Nonlinear Theory

and its Applications, 2018 年 9 月

17. Presentation, Tomoaki OKAYAMA, Yuya SHINTAKU and Eisuke KATSUURA, New conformal map for the Sinc approximation for exponentially-decaying functions over the semi-infinite interval, Numerical Analysis and Scientific Computation with Applications 2018, 2018 年 7 月
18. 研究発表, 原涼太, 岡山友昭, 微分方程式の初期値問題に対する Sinc-Nyström 法の誤差解析, 第 47 回数値解析シンポジウム, 2018 年 6 月

【社会活動】

線形代数学 I において、サイエンスライターの協力を得て講義紹介を作成した (<http://www2.info.hiroshima-cu.ac.jp/about/organization/lecture-experiment.html> に掲載)。2018 年度から日本応用数理学会論文誌の編集委員副委員長に就任し、紙媒体から電子化後の運営に携わっている。また Mac 上の研究開発環境を整えるシステム、Fink の開発者として活動を続けている。2019 年 7 月には情報分野を志す高校生に模擬授業を行い、高校で学ぶ数学がどのように関係してくるかということも踏まえて、数値計算の初歩について講義した。

2019 年 7 月	賀茂高等学校で模擬授業：コンピュータの計算解法 ～答に近づける技術～
2018 年 4 月-2020 年 3 月	日本応用数理学会, 日本応用数理学会論文誌編集委員 副委員長
2016 年 10 月-	日本数学会
2014 年 10 月-	数学教育学会
2006 年 4 月-	日本応用数理学会
2004 年 5 月-	Fink プロジェクト開発者

氏名	小野 貴彦
職位	教授
研究分野	機械力学・制御、制御工学、社会システム工学・安全システム
研究キーワード	計測、人間工学、制御、数値最適化、救急搬送、コンピュータシミュレーション、救急車、モデリング、マン・マシンシステム、生体計測、乗り心地

2018、2019年度を通じて、学部・大学院教育として、講義6科目、実験・演習4科目を担当した。研究室配属された学生10名に対して、学位論文の作成指導と学会発表の指導に当たった。研究活動としては、制御技術、最適化技術、生体モデリング技術、IoT技術を活用した救急搬送支援システムの研究開発に取り組み、学会と学術雑誌で成果を公表した。社会貢献活動としては、国内企業と共同研究開発（2社2テーマ）を実施し、シンポジウム等で成果を公表した。また、入試業務（試験監督、面接試験官など）および学部教務委員会の委員として、大学運営業務に従事した。

【教育活動】

システム工学科2年生を対象に常微分方程式、3年生を対象に最適化手法、偏微分方程式、制御工学、デジタル制御、システム工学実験Ⅰ&Ⅱ、4年生を対象に外書講読演習Ⅱと卒業研究関連科目を担当した。実験では、代表教員として全体のとりまとめを行った。大学院博士前期課程の学生に対して、システム推定学特論と自主プロジェクト演習を担当した。講義科目では、演習時間を多く設け、その場での十分な理解に努めた。演習および課題の解答例を、学内Webサイトに掲載し、復習環境を充実させた。学位論文の作成指導にも当たり、学部生7名、大学院生3名が学位取得に至った。

2019年度	外書講読演習Ⅱ、システム工学実験Ⅰ、制御工学、常微分方程式、デジタル制御、システム推定学特論、システム工学実験Ⅱ
2018年度	偏微分方程式、最適化手法、外書講読演習Ⅱ、プレゼンテーション技法、卒業研究Ⅰ、デジタル制御、システム推定学特論、システム工学実験Ⅱ、卒業研究Ⅱ、技術文書作成法、自主プロジェクト演習

【研究活動】

安心・安全かつ迅速な救急搬送サービスの実現を目指し、制御工学、数値最適化、生体モデリング等の各種技術を活用して、次世代の救急搬送支援システムの研究開発に取り組んだ。具体的なテーマは、①救急搬送のリスク評価のための慣性力による心拍変動のモデリング、②救急搬送シミュレーションのための救急車の走行モデリング、③搬送経路の最適化とカーナビゲーションへの応用、④予測調節による救急車防振架台の防振性能の向上、⑤新サイレンシステムの開発である。特に、②については、広島市で測定した救急車の走行データを使って重点的に取り組み、論文公表した。また、①は国際共同研究、⑤は企業と連携して実施した。

1. 小野 貴彦, 病院への最適経路探索のための救急車の走行モデル, 日本機械学会論文集, Vol. 85, No. 871, DOI:10.1299/transjsme.18-00308, 2019
2. 杉山 大貴, 小野 貴彦, 傷病者の症状を考慮した救急車の渋滞回避迂回路の自動選定, 日本機械学会中国四国支部第 58 期総会・講演会, 2020 年 3 月
3. 研究発表, 藤井 信吾, 小野 貴彦, 予測調節機能を有する救急車用防振装置の防振性能 (3 種類のサスペンション間の性能比較), 日本機械学会中国四国支部第 58 期総会・講演会, 2020 年 3 月
4. 研究発表, 金谷 美咲, 小野 貴彦, 救急車の加減速による下肢末梢の血圧変動の推定, 日本機械学会中国四国支部第 58 期総会・講演会, 2020 年 3 月
5. 研究発表, 武谷 穂乃香, 小野 貴彦, 近接する複数の信号機交差点通過時における救急車の走行モデルの改良, 日本機械学会中国四国支部第 58 期総会・講演会, 2020 年 3 月
6. Presentation, Taiki Sugiyama, Takahiko Ono, Optimal route finding of the ambulance using the database: Application to finding of the detour route during transportation, SICE Annual Conference 2019, 2019 年 9 月
7. 研究発表, 小野 貴彦, 新井 敦士, 林 泰臣, 井上 博喜, 竹内 将人, 交差点での救急車の認知向上のためのサイレンスピーカーの最適配置, 日本機械学会 2019 年度年次大会講演論文集, 2019 年 9 月
8. 研究発表, 杉山 大貴, 小野 貴彦, データベースを利用した救急車の経路探索の高速化, 日本機械学会中国四国支部第 57 期総会・講演会, 2019 年 3 月
9. 研究発表, 小野 貴彦, 藤井 信吾, 段差通過時の衝撃を軽減するための救急車防振架台の予測調節, 日本機械学会中国四国支部第 57 期総会・講演会, 2019 年 3 月
10. 研究発表, 新井 敦士, 小野 貴彦, 林 泰臣, 井上 博喜, 竹内 将人, FDTD 法による救急車サイレンの音響解析, 日本機械学会中国四国支部第 57 期総会・講演会, 2019 年 3 月

【社会活動】

企業と連携して、救急車の認知向上のための新サイレンシステムの研究開発に学生と共に取り組んだ。成果物である試作機は、全国救急隊員シンポジウムで公開した。広島市内の企業と共同開発した救急車運転訓練支援システムも同シンポジウムで同時公開した。この企業とは、タブレットの内蔵カメラを利用して、非接触で電子書籍のページをめくる視線インタフェースも共同で開発した。2018 年には、可部高校にて模擬授業を実施し、本学のアピールと制御工学の魅力について講義した。2019 年度末には、広島県が公募したひろしまサンドボックスの路面性状把握業務に、本学を代表とするコンソーシアムの提案業務が採択され、業務開始に尽力した。

2019 年 9 月	広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018 年 11 月	広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2010 年 4 月-	日本人間工学会
2000 年 4 月-	計測自動制御学会
1997 年 5 月-	日本機械学会

氏名	小畑 博靖
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	通信プロトコル、衛星通信、非対称ネットワーク、無線マルチホップネットワーク、QoS、無線 LAN、物理現象等の数理モデルを用いた通信制御

2018～2019 年度では、前回期間と同様に教育活動、研究活動、および、社会活動のいずれにおいてもある程度実績を積んでおり、1 つの項目だけに集中することなくまんべんなく活動したと考えられる。

【教育活動】

学部科目においては、主に、実験・演習系科目を担当し、講義資料の準備に加え、実験・演習環境の構築も他担当者と共に実施した。また、一部はターム化に対応した。大学院講義においては、座学だけでなく、提示した内容に関して学生が自ら調べ学習し発表する場を設けると共に外部講師による特別講義も実施した。

2019 年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、プログラミング II、プログラミング II 演習、ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、情報工学実験 1、情報工学実験 2、通信トラヒック特論
2018 年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、情報工学実験 1、情報工学実験 2、通信トラヒック特論

【研究活動】

2018～2019 年度では、主に無線 LAN 環境におけるスループット向上およびスループット保証を実現するメディアアクセス制御および通信モデル化について研究した。メディアアクセス制御に関する研究では、自然界の物理現象を示す数理モデルを応用した方式やキャプチャ効果と呼ばれる現象に基づく方式の検討など多くの研究成果を得た。また、他大学との共同研究も実施し、国際会議および国内研究会にて成果発表した。発表件数は 21 件であり、特に 2019 年度に発表した内容で電子情報通信学会第 26 回情報ネットワーク研究会研究賞を受賞した。

1. Yoshiki Miura, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, A Media Access Control Method based on Capture Effect considering Throughput Fairness among WLAN Systems, Proc. The 8th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences (KJCCS2020), Vol. B2, 2020
2. Junichi Funasaka, Hiroyasu Obata, and Kenji Ishida, Number of TCP Connections to Saturate Bandwidth of Wireless Networks, Proc. The 12th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking (ICMU2019), 2019
3. Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, Modeling of Transmission Rate

- Based on Experimental Evaluation on Multi-Rate Wireless LAN for Safe and Secure Life, Proc. IEEE International Symposium on Circuits and Systems (ISCAS2019), 2019
4. Yosuke Izumikawa, Yoshiki Miura, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, Tutomu Murase, and Kenji Ishida, A Media Access Control Using Capture Effect for Bi-Directional Flows over Densely placed WLANs, Proc. 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications (NOLTA2018), pp. 456-459, 2018
 5. Ryo Tsurumi, Mayu Morita, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, Throughput Control Method between Different TCP variants based on SP-MAC over WLAN, Proc. IEEE International Conference on Consumer Electronics - Taiwan (ICCE-TW), Vol.2page, pp. 456-459, 2018
 6. 研究発表, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, WLAN 密集環境におけるスループット公平性を改善する数理モデルに基づくキャプチャ効果を用いたメディアアクセス制御, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月
 7. 研究発表, 中村 一貴, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, キャプチャ効果を考慮した無線 LAN マルチホップ環境における結合振動子の同期現象に基づくメディアアクセス制御 SP-MAC のスループット特性評価, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月
 8. 研究発表, 遠藤 丈瑠, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, マルチレート伝送を考慮したアドホックネットワーク環境における伝送レート利用率とスループットの特
性評価, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月
 9. 研究発表, 小田木 良介, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, 無線 LAN 環境
における移動アクセスポイントを導入した情報配信制御の通信特性評価, 電子情報通信学
会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月
 10. 研究発表, 森田 万裕, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, AP 移動を考慮した無線 LAN 環
境におけるメディアアクセス制御 SP-MAC のスループット向上に関する検討, 電子情報通
信学会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月
 11. 研究発表, 舟阪 淳一, 小畑 博靖, 石田 賢治, IEEE802. 11g 無線 LAN におけるファイル送
信の合計スループットを最大化する並列数についての評価, 電子情報通信学会 情報ネッ
トワーク研究会, 2020 年 3 月
 12. 研究発表, 森田 万裕, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, 無線 LAN 環境下における AP
移動を考慮した結合振動子の同期現象に基づくメディアアクセス制御の特性評価, 電子情
報通信学会 2019 年ソサイエティ大会, 2019 年 9 月
 13. 研究発表, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, WLAN 間のスループット公平
性を改善するキャプチャ効果を用いたメディアアクセス制御, 電子情報通信学会 情報ネ
ットワーク研究会, 2019 年 9 月
 14. 研究発表, 舟阪 淳一, 小畑 博靖, 石田 賢治, IEEE802. 11g 無線 LAN における合計スル
ープットを最大化する TCP 接続数についての評価, 電子情報通信学会 情報ネットワ
ーク研究会, 2019 年 9 月

15. 特別講演・招待講演, 小畑 博靖, マルチレート無線 LAN 環境における通信特性の実験的評価とモデル化に関する検討, IEEE 広島支部主催講演会, 2019 年 3 月
16. 研究発表, 舟阪 淳一, 石田 賢治, 小畑 博靖, 並列 TCP 接続によるネットワークリソースの動的有効活用と安全性に関する一考察, 電子情報通信学会 2019 年総合大会, 2019 年 3 月
17. 研究発表, 河合 海人, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, 隣接チャネル干渉下におけるキャプチャ効果を考慮した無線 LAN メディアアクセス制御のスループット特性評価, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2019 年 3 月
18. 研究発表, 市場 充, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, WLAN システム間のスループット公平性を考慮したキャプチャ効果を用いた MAC 切り替え制御方式, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会, 2019 年 3 月
19. 研究発表, 三浦 圭輝, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, スループットの公平性向上を目指したキャプチャ効果を用いた無線 LAN メディアアクセス制御の改良, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2019 年 3 月
20. 特別講演・招待講演, 小畑 博靖, マルチレート無線 LAN 環境における通信特性の実験的評価とモデル化に関する検討, IEEE 広島支部主催講演会, 2019 年 3 月
21. 研究発表, 三浦 圭輝, 泉川 洋介, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, DCF 端末混在環境におけるキャプチャ効果を用いたメディアアクセス制御のスループット特性評価, 第 20 回 IEEE 広島支部 学生シンポジウム, 2018 年 11 月
22. 第 26 回 情報ネットワーク研究会研究賞, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 2020 年 3 月

【社会活動】

社会活動として、まず、大学主催の研究展示会にて研究成果についてのポスター展示を実施した。さらに、高校生向けの事業である、高校生による情報科学自由研究のテーマを提供し、実際に研究指導を実施した。また、通信技術に関する内容で高校生向け体験授業（演習）も実施した。さらに、各学会（IEEE、情報処理学会、電子情報通信学会、大学 ICT 推進協議会）において、役員・幹事としてそれぞれ運営に貢献した。

2019 年	12th International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON 2019), Technical Program committee
2019 年	The Second International Symposium on Computing and Networking (CANDAR 2019), Technical Program committee
2019 年	IEEE International Conference on Communications (ICC2020) Mobile and Wireless Networks Symposium, Technical Program committee
2019 年 11 月	広島市立大学の地域貢献事業発表会 2019, 広島市立大学
2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 広島市立大学

2019年8月	高校生による情報科学自由研究 2019, 広島市立大学
2019年5月-2021年5月	電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 幹事
2019年2月, 2020年2月	広島県科学セミナー, 審査委員
2019年1月-2020年12月	IEEE 広島支部, 理事
2018年	IEEE International Conference on Communications (ICC2019) Mobile and Wireless Networks Symposium, Technical Program committee
2018年	The Second International Symposium on Computing and Networking (CANDAR 2018), Technical Program committee
2018年	平成30年度(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 大 会実行委員会 投稿受付システム担当
2018年	平成30年度(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, プ ログラム編成委員 (情報処理学会中国支部運営委員として参加)
2018年-2019年	大学 ICT 推進協議会 高品質・セキュリティ ICT 部会, 副査
2018年12月	広島県立祇園北高等学校体験授業, 広島市立大学
2018年11月	広島市立大学の地域貢献事業発表会 2018, 広島市立大学
2018年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018, 広島市立大学
2018年8月	高校生による情報科学自由研究 2018, 広島市立大学

氏名	角田 良明
職位	教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	ネットワークソフトウェア、アドホックネットワーク

教育活動として、質問主導型の授業など、研究活動として、草の根災害情報伝搬システムなど、社会活動として、祇園北高等学校との高大連携などを推進した。また、情報科学研究科長兼情報科学部長として、イノベーション人材育成プログラム科目を含むカリキュラム改革の策定、イノベーション人材育成プログラムの検討、社会人の学び直し事業 enPiT-Pro の実施、ハノーバー専科大学とのダブルマスターディグリープログラムの協定締結、中国西南大学電子情報工学部などとの国際ワークショップの実施、大学共通テスト導入後の入学者選抜の詳細の検討、グローバル人材育成貢献賞の受賞者決定などに尽力した。

【教育活動】

2018 年度、2019 年度は、学部では、前期に 3 学部合同基礎演習、ソフトウェア工学の講義を、後期にネットワークプロトコル、プロトコル設計の講義を担当した。大学院博士前期課程では、ネットワークソフトウェア特論の講義、情報工学特別演習 I～IV の演習を担当した。大学院博士後期課程では、2018 年度には情報科学講究 I、III の講義を担当し、2019 年度には情報科学講究 III、V の講義を担当した。2018 年度は、博士後期課程 2 名、博士前期課程 3 名の学生を指導し、3 名に修士の学位を取得させた。2019 年度は、博士後期課程 2 名、博士前期課程 8 名の学生を指導し、それぞれ 1 名に博士、8 名に修士の学位を取得させた。アクティブラーニング型授業の実践として、プロトコル設計やネットワークソフトウェア特論において個々の学生に適応した質問主導型の授業を実施した。例えば、理解のきっかけとなる質問、新しい疑問を生み出す質問など、学生の理解度に応じた質問を促し、深い学びを実感させた。

2019 年度	3 学部合同基礎演習、ソフトウェア工学、ネットワークソフトウェア特論、情報工学特別演習 I～IV、情報科学講究 III・V、ネットワークプロトコル、プロトコル設計
2018 年度	3 学部合同基礎演習、ソフトウェア工学、ネットワークソフトウェア特論、情報工学特別演習 I～IV、情報科学講究 I・III、ネットワークプロトコル、プロトコル設計

【研究活動】

2017 年度から 3 年間採択された科研費を活用して、「アシュアランスネットワーク一般設計方法論に基づいた MANET システムの強化」(研究代表者) について研究を行った。また、2016 年度から 3 年間採択された総務省 SCOPE 「アシュアランスネットワーク設計原理に基づいた草の根災害情報伝搬システムの研究開発」(研究分担者) 及び 2019 年度から 1 年間採択された総務省 SCOPE 「住民の主体的な避難を支援する災害センシングネットワークの研究開発」(研究分担者) についても研究を行った。これらの研究は、アシュアランスネットワークの基礎と応用に関するもので

あり、連携させて研究を進めた。特に、SCOPE については、学内の西教授、石田教授等、学外の KDDI 総合研究所との共同研究であり、災害情報の幅広い検出のためのセンシング、災害情報の速やかな伝搬のための MANET など、高い評価の研究成果を得るとともに、安佐北区の三入公民館でデモンストレーションを実施した。

1. Hiroyuki Toyota, Shinji Inoue and Yoshiaki Kakuda, "A Proposal and Evaluation of Mobility Model which Derives Various Node Mobility Scenarios," Proc. 2018 IEEE SmartWorld, Ubiquitous Intelligence & Computing, Advanced & Trusted Computing, Scalable Computing & Communications, Cloud & Big Data Computing, Internet of People and Smart City Innovations, at the Seventeenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2018), pp.1623-1627, Guangzhou, China, October 2018.
2. Tomoyuki Ohta, Masahiro Nishi, Toshikazu Terami, and Yoshiaki Kakuda, "[INVITED PAPER] Information dissemination using MANET for disaster evacuation support," IEICE Transactions on Communications (Special Section on Sensing, Wireless Networking, Data Collection, Analysis and Processing Technologies for Ambient Intelligence with Internet of Things), vol.E102-B, no.4, pp.670-678, April 2019
3. 南 雄也, 坂 涼平, 河野英太郎, 角田良明, "Classic Bluetooth と Bluetooth Low Energy を併用した Bluetooth MANET の高速コネクション確立手法," 電子情報通信学会論文誌 B, (通信技術の更なる発展に向けた若手論文特集), vol. J102-B, no. 8, pp. 545-554, August 2019.
4. 藤田和希, 谷 隆磨, 河野英太郎, 角田良明, "セキュア分散データ転送を用いる無線センサネットワークにおける経路構築率向上のための複数ゲートウェイの配置法ならびに経路制御手法," 電子情報通信学会論文誌 B (ネットワークソフトウェア技術とその応用論文特集), vol. J102-B, no. 5, pp. 373-384, May 2019.
5. 南 雄也, 坂 涼平, 河野英太郎, 角田良明, "遅延・切断耐性を有する Bluetooth MANET の端末間接続状態に適応するデータ転送方式," 電子情報通信学会論文誌 B (ネットワークソフトウェア技術とその応用論文特集), vol. J102-B, no. 5, pp. 356-365, May 2019.
6. Ryohei Saka, Temma Ohtani, Kazuki Fujita, Eitaro Kohno, and Yoshiaki Kakuda, "On the Design, Feasibility, and Implementation of a Bluetooth MANET-based Routing Application," IEICE Communications Express, vol. X8-B, no. 12, pp. 628-633, December 2019.
7. Temma Ohtani, Eitaro Kohno, Akifumi Nomasaki, and Yoshiaki Kakuda, "An Adaptive Connection-Establishment Timeout Configuration Method for Bluetooth MANETs in Control Packet Loss Environments," International Journal of Networking and Computing, vol. 10, no. 1, pp. 25-43, January 2020.

他 10 件

【社会活動】

International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN)、International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON)、International Symposium on Computing and Networking (CANDAR)については、主催者の一人として開催に尽力し、これらの国際会議において学生に論文発表を経験させた。祇園北高等学校の評価委員会委員、学校運営協議会委員として高大連携のために貢献した。祇園北高等学校の数学科の村上教諭を本学に招聘し同校で実践している数学におけるアクティブラーニングについて講演していただくとともに、アクティブラーニングについて熱心に議論し、本学部の高大接続改革に活かした。

2018年4月-2019年3月	広島県立祇園北高等学校評価委員会
2018年12月-2019年12月	Thirteenth International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON 2019)
2018年12月-2019年12月	Seventh International Symposium on Computing and Networking ---Across Practical Development and Theoretical Research--- (CANDAR 2019)
2018年7月-2020年6月	日本学術振興会特別研究員等審査会、国際事業委員会
2018年6月-2019年6月	Eighteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN 2019)
2019年4月-2020年3月	広島県立祇園北高等学校学校運営協議会
2017年12月-2018年12月	Eleventh International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON 2018)
2017年12月-2018年12月	Sixth International Symposium on Computing and Networking ---Across Practical Development and Theoretical Research--- (CANDAR 2018)
2017年10月-2018年10月	Seventeenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN 2018)
2017年8月-2018年8月	3rd International Workshop on Emerging Dependable Computing System Technologies and Applications (EDCSTA 2018)
2017年5月-2019年4月	総務省戦略的情報通信研究開発推進事業専門評価委員会

氏名	梶山 朋子
職位	准教授
研究分野	ヒューマンインターフェース・インタラクション、感性情報学、社会システム工学、マルチメディア・データベース
研究キーワード	データベース、情報可視化、情報検索、感性情報処理、ヒューマンインタフェース

人が楽しみながら情報探索を続けられるための検索インタフェースと、人の知識や感情を視覚的に表現するための情報提示手法に関する研究に取り組んでいる。近年は、採択された科研費および共同研究費の研究課題に対し、研究を継続している。学会活動として、主に、情報検索やマルチメディアに関する ACM 国際会議や、電子情報通信学会の研究会で業務に従事した。教育活動としては、プログラミングや情報検索に関する講義を担当し、卒業研究の指導を行った。大学運営では、入試委員、オープンキャンパス WG、ハラスメント委員として活動した。志願者増加を願い、2校の高校訪問と2件の模擬授業、ライブキャンパスでの体験型模擬授業を実施した。

【教育活動】

2018年10月着任後、C言語によるプログラミングに関する講義（学部共通科目を3科目）、専門である情報検索に関する講義（知能工学科の専門科目を1科目、大学院の研究科開設科目を1科目）を担当した。理解度の把握だけではなく、現実問題に対して学生自身が考える課題を与えるなどの演習を取り入れることにより、アクティブラーニングを目指した。一方、学部生の卒業研究指導では、情報検索、情報可視化、学習支援を軸に、学生一人ひとりが興味を持って取り組めるような研究テーマを決定する手助けを行い、前向きに楽しみながら研究を進められるような環境作りを心がけた。

2019年度	プログラミングⅡ、プログラミングⅡ演習、情報科学基礎実験β、情報検索、知的情報検索特論
2018年度	プログラミングⅡ、プログラミングⅡ演習、情報科学基礎実験β

【研究活動】

人が楽しみながら情報探索を続けられるための検索インタフェースとして、小学生の発見学習を支援する植物図鑑アプリケーションの開発と評価、および、多次元属性情報に対する柔軟な検索インタフェースの実装（大学共同利用機関法人情報・システム研究機構・データサイエンス共同利用基盤施設（ROIS-DS）との共同研究）を行った。一方、人の知識や感情を視覚的に表現するための情報提示手法として、消費者の印象、ブランドイメージや商品情報を反映させた商品パッケージ画像の生成手法の提案（科研費・基盤研究（C）の採択課題）を行った。本研究の成果および教育活動での成果は、2件の学術論文誌（うち1件は筆頭著者）、3件の国際会議（うち1件は筆頭著者）、1件の国内会議で発表した。

1. Miwa Tokutake, Tomoko Kajiyama and Noritomo Ouchi. "A method for revising package

- image colors to express brand perceptions better,” Color Research and Application, Vol. 44, No. 5, pp. 798-810, October 2019.
2. Tomoko Kajiyama. “Evaluation of a method for revising colors of book cover images to reflect reader impressions,” International Journal of Culture and History, Vol. 4, No. 2, pp. 31-35, July 2018.
 3. Tomoko Kajiyama. “Evaluation of Improved Botanical Search Application for Elementary School Students,” Proc. of International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication (IMCOM 2020), 5pages, Taichung, Taiwan, January 2020.
 4. Yusuke Yasumura, Takashi Ito, Kenichi Takahashi, and Tomoko Kajiyama. “Effects on Concentration of Different E-Learner Resting Behaviors in Response to Communication Robot Actions during Break Times,” Proc. of International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication (IMCOM 2020), 5pages, Taichung, Taiwan, January 2020.
 5. Masao Nakamura, Tomoko Kajiyama and Noritomo Ouchi. “E-commerce Website Design for Expanding Knowledge and Interests of Potential Buyers,” Proc. of 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics, pp. 155-156, Osaka, Japan, October 2019.
 6. 伊藤崇, 深井光, 高橋健一, 梶山朋子, “Kinectによる顔情報を活用した学習者の状態識別,” HCG シンポジウム 2019, C-5-1, 6pages, December 2019.

【社会活動】

国内外の学会や研究会における専門委員や査読委員に加え、研究の社会実装を紹介するため、IEEE 技術講演会（IEEE Education Society, All Japan Joint Chapter (E-25)）の講演者を務めた。高大連携活動のため、グローバルサイエンスキャンパス（GSC）広島の情報分野セミナー講師とポスター発表審査員、および、広島県科学セミナーの審査員を務めた。大学の広報活動のため、中高大連携公開講座など広島県内の高校にて模擬授業や招待講演を実施した。

2019年	国際会議 ACM Multimedia Asia 2019, Program Committee Member
2019年	国際会議 ACM Multimedia 2019, Program Committee Member
2018年12月	安田女子高等学校 生徒研究発表会 女性研究者講演
2016年-	電子情報通信学会 EMM 研究会 専門委員

氏名	神尾 武司
職位	講師
研究分野	知能情報学、ソフトコンピューティング、通信工学
研究キーワード	機械学習、群知能、最適化手法、通信技術、信号処理

私の活動は研究が中心にある。研究活動で得られた知見・技術を教育活動や社会活動を通じて他者に提供し、それによって新しいアイデアや協力関係が生み出され、さらには研究活動にフィードバックされることを大いに期待している。そのため、研究活動では多くの分野の研究者が集まる学術会議に積極的に参加し、他分野との交流を図っている。そして、講義・研究指導といった教育活動を通して、学生が様々な分野の技術に興味を持ってくれるように努めている。さらに、社会活動ではオープンキャンパスなどを通じて最近の研究成果などを紹介し、本学の広報活動への寄与に努めている。

【教育活動】

コンピュータ・ネットワークの発展と普及に伴い、情報を伝達する手段である通信システムは現代の情報化社会を支える極めて重要な技術となっている。私が担当する主な講義はコンピュータの基礎に関わる科目、通信方式に関わる科目、ハードウェアに関わる科目に大別されるため、いずれの科目においても通信等の情報技術との関連性とその重要性を説きつつ、それぞれの科目に興味を持ってもらうことを第1に考えて講義を行っている。また、研究室における教育については、国内外を問わず、国際会議で発表できるレベルを目指して研究指導を行っている。

2019年度	3学部合同基礎演習、通信工学 I、情報伝送方式特論、コンピュータ基礎、外書講読演習 I・II、電子回路 I、外書講読演習 I、システム工学実験 I・II
2018年度	3学部合同基礎演習、通信工学 I、情報伝送方式特論、コンピュータ基礎、外書講読演習 I・II、電子回路 I、外書講読演習 I、システム工学実験 I・II

【研究活動】

私自身が主体となつて行った研究テーマは2つある。1つ目は「マルチエージェント強化学習に基づく多船航路探索」であり、自動船舶識別装置 (AIS) から取得される実航路から得られたニアミス航路を修正するシステムを提案した。今後の課題は海域の拡大や船舶数の増加に伴って発生する計算コストの増加を抑えることである。2つ目は「電化製品の稼働状況を考慮した電力線通信 (PLC) のパラメータ最適化」であり、PLC 評価ボードを用いて本学学生寮の伝送路特性を実測し、これに基づいて提案システムの計算機実験を行った。今後の課題は多目的最適化システムに発展させ、より柔軟な最適化を実現することである。

1. Takahiro Tomihara, Takeshi Kamio, Takahiro Tanaka, Kunihiko Mitsubori, Hisato

- Fujisaka, Comparing Q-Learning with Profit Sharing for Multi-Ship Course Problems, Proc. of IEEE Workshop on Nonlinear Circuit Networks, pp.17-20, 2019年12月
2. Takahiro Tomihara, Takeshi Kamio, Takahiro Tanaka, Kunihiro Mitsubori, Hisato Fujisaka, Modification of Near-miss Courses by Reinforcement Learning to Search Ships' Courses, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp.633-636, 2019年12月
 3. Takahiro Tomihara, Takeshi Kamio, Hisato Fujisaka, Parameter Optimization of OFDM PLC According to Measured Transmission-Line Characteristics, Proc. of Taiwan and Japan Conference on Circuits and Systems, 2019年8月
 4. Akiyoshi Yasuda, Hisato Fujisaka and Takeshi Kamio, A Bipartite Graph Consisting of Delta-Sigma Min-Max Function Nodes and Shift Register Edges for GF(2^q) LDPC Decoding, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, pp.367-370, 2018年9月
 5. Takahiro TOMIHARA, Takeshi KAMIO, Takahiro TANAKA, Kunihiro MITSUBORI, and Hisato FUJISAKA, Enhancement of Reference Course Tracking Capability in Multi-Agent Reinforcement Learning System to Search Ships' Courses, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, pp.444-447, 2018年9月

他2件

【社会活動】

基本的な社会活動としては、オープンキャンパスや産学連携発表会を通じて、最近取り組んでいる研究の紹介を実施している。これらの活動を通じて、本学の広報活動に寄与しつつ、研究成果の社会への還元を目指している。さらに、学術的な社会活動としては、所属学会からの依頼により、論文編集委員や国際会議の実行委員などを引き受けている。

2019年11月-2020年4月	電子情報通信学会 2020 NOLTA ソサイエティ大会の庶務幹事に就任
2019年8月	オープンキャンパス（研究室紹介）
2018年8月	オープンキャンパス（研究室紹介）

氏名	上土井 陽子
職位	講師
研究分野	情報セキュリティ、情報学基礎理論、マルチメディア・データベース
研究キーワード	ネットワークシステム、分散コンピューティング、データマイニング、セキュアプロトコル、プライバシー保護データ公開

2018年度、2019年度においては進路指導委員、就職・キャリア形成支援委員を担当したことから、2020年3月卒業、修了学生の就職活動支援に重点を置き、教育活動を行った。2018年度、2019年度ともに卒業研究の成果を国際会議にて発表する。社会活動としては国際会議でのプログラム委員会委員や座長を担当した。また、学会論文誌の編集委員会委員を担当した。

【教育活動】

2018年度、2019年度においては、各年度、学部については専門教育の4科目を担当し、博士前期科目として1科目を担当した。また、2018年度においては、3名の卒業研究指導を担当し、2019年度においては3名の卒業研究指導、1名の修士論文研究指導を担当した。また、修士論文の副査を担当した。2018年度10月から3月末まで進路指導委員を担当し、2019年度には就職・キャリア形成支援委員として2020年3月卒業、修了学生の就職活動支援を行った。

2019年度	オートマトンと形式言語、グラフと最適化、情報科学基礎実験 α -1、プログラミング言語特論
2018年度	オートマトンと形式言語、グラフと最適化、情報科学基礎実験 α -1、プログラミング言語特論

【研究活動】

2018年度においては、5件の国内研究会発表を行った。また、2件の特許出願を行った。2019年度においては、5件の国内研究会発表、1件の国際会議発表を行った。また、2019年度に行った研究成果が国際会議に採択され、2020年度に公開予定である。

1. Ryousuke Yamauchi, Yoko Kamidoi and Shin'ichi Wakabayashi, A protocol for preventing transaction commitment without recipient's authorization on blockchain, Proceedings of COMPSAC 2019, pp. 934-935, 2019
2. 研究発表, 山吉 勇輝, 高次元データに対する近似近傍探索手法とストリームデータに対するk-匿名化への応用, DEIM2020 (第12回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム), 2020年3月
3. 研究発表, 横山 太郎, 異種ネットワークの部分空間クラスタリング手法の高速化, 2020年電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
4. 研究発表, 榎野 卓弥, 複数回検証可能な秘密分散法の提案, SCIS2020 (2020年暗号と情報セキュリティシンポジウム), 2020年1月

5. 研究発表, 上土井 陽子, 加算結果を利用した入力変数の組合せのあいまいな推測, 電子情報通信学会コンピューテーション研究会, 2019年12月
6. 研究発表, 大杉 宗治, 西本 陸人, 加算結果を利用した3入力変数のあいまいな推測について, 第21回 IEEE 広島支部学生シンポジウム, 2019年11月
7. 研究発表, 糸谷 友里, Flexible Distance-based Hashing に基づく大規模多次元データ集合に対する近似最近傍探索手法の改良, DEIM2019 (第11回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム), 2019年3月
8. 研究発表, 上土井 陽子, 動的データのプライバシー保護再公開における精確な確率的リスク評価について, SCIS 2019 (2019年 暗号と情報セキュリティシンポジウム), 2019年1月
9. 研究発表, 山内 涼介, ブロックチェーンにおける受信者承認なしの取引成立を防ぐ方法について, SCIS 2019 (暗号と情報セキュリティシンポジウム, 2019年1月
10. 研究発表, 上土井 陽子, 線形計画法を利用したプライバシー保護再公開の安全性評価, WebDB Forum 2018 (第11回 Web とデータベースに関するフォーラム), 2018年9月
11. 研究発表, 池田 翼, 混合整数計画法を利用した車載ネットワークプロトコル FlexRay のスタティックセグメント上でのセキュリティレベル指向スケジューリング, 電子情報通信学会情報理論研究会, 2018年5月

【社会活動】

2018年度においては6件の学会、研究会における社会活動を行った。また、本学で開催された「高校生による情報科学自由研究」において、講師として2名の高校生の指導を担当した。2019年度においては6件の学会、研究会における社会活動を行った。また、本学で開催された「高校生による情報科学自由研究」において、講師として3名の高校生の指導を担当し、拡張研究の成果を2名の高校生と共に学会にて発表した。

2020年3月	DEIM2020 セッション座長
2020年3月-2021年5月	Special Section on Data Engineering and Information System Management 小特集号(英文論文誌D)編集委員会委員
2019年12月	日本データベース学会論文誌査読
2019年9月-2020年3月	IEEE, IEEE BigComp 2020 Program Committee member
2019年6月-2020年7月	電子情報通信学会, Special Section on Information and Communication System Security 小特集号(英文論文誌D)編集委員会委員
2019年5月-2020年5月	電子情報通信学会, Special Section on Data Engineering and Information System Management 小特集号(英文論文誌D)編集委員会委員
2019年3月	IEEE, IEEE BigComp 2019 Session Chair
2018年11月-2019年3月	IEEE, IEEE BigComp 2019 Program Committee member

2018年4月-2019年4月	電子情報通信学会英文論文誌 D 情報通信システムセキュリティ小特集編集委員会委員
2018年4月-2019年4月	電子情報通信学会, Special Section on Data Engineering and Information System Management 小特集号(英文論文誌 D)編集委員会委員
2017年11月-2018年6月	情報処理学会 2017年度論文賞選定ワーキンググループ委員
2017年9月-2018年11月	電子情報通信学会, 情報通信システムセキュリティ小特集号(英文論文誌 D)編集委員
2015年4月-2019年3月	情報処理学会データベースシステム研究会運営委員
2015年4月-2019年3月	情報処理学会, データベースシステム運営委員会運営委員
2014年6月-2018年5月	情報処理学会, 情報処理学会論文誌データベース(IPSJ-TOD)編集委員
2014年6月-2018年5月	情報処理学会論文誌: データベース(TOD)編集委員
2008年4月-	情報処理学会
2004年-	電子情報通信学会, 査読委員
2004年-	IEICE, Reviewer
1994年-	ACM
1991年-	電子情報通信学会
1991年-	IEEE

氏名	川端 英之
職位	講師
研究分野	ソフトウェア、計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	数値処理ソフトウェア、ソフトウェア工学、プログラミング言語処理系

2018年度および2019年度における活動は、主として「プログラミング」や「ソフトウェア開発」に関する手法提案、ツール開発、改善および教育活動であった。教育的視点では、プログラミングを通してコンピュータとは何か（出来ること・出来ないこと）についての理解を促し、研究的視点では、コンピュータの能力をフルに発揮させて活用し尽くすための手法やツール開発に取り組んだ。ソフトウェア開発の効率化やソフトウェアの品質向上への要求が高まり、プログラミング教育の重要性が声高に謳われる昨今、こういった活動はますます重要になると考えられる。

【教育活動】

講義では、学部専門科目の「コンパイラ」と「数値計算プログラミング」、大学院科目の「プログラミング言語特論」を担当。いずれにおいても、プログラミング演習を課して実践的な理解を促している（「コンパイラ」では実在のプロセッサ用の機械命令列を生成するシステムを作成、「プログラミング言語特論」では純粋関数型言語 Haskell を用いた演習を実施）。その他、学部共通の実験科目「情報科学基礎実験α（およびA）」を代表教員として担当した。

研究指導では、論文執筆や学外発表を通して、技術文書執筆ならびにプレゼンテーション技法の指導を行っている。学生による研究発表のうち5件が表彰された（2019年度情報処理学会コンピュータサイエンス領域奨励賞受賞の成果は、論文誌および学会誌の記事としてもまとめられた）。

2018・2019年度	情報科学基礎実験α、コンパイラ、数値計算プログラミング、プログラミング言語特論
-------------	---

【研究活動】

主として、(1)プログラム開発環境改善、(2)任意精度の実数計算ライブラリ開発、および、(3)定理証明支援系の可用性向上に関する研究に取り組んだ。(1)ではAPIの組合せによって実装されるアプリケーションの開発支援を支えるデータマイニング手法の研究を進めた。(2)では、Haskellで利用可能な精度保証多倍長浮動小数点演算ライブラリの性能向上（高速化・軽量化）に向けた研究を進展させた。(3)では、定理証明支援系 Coq の対話的利用と連携した証明木表示ツールを開発した。その他、Haskellにおける型クラス使用時の曖昧性除去手法に関する論文を執筆したほか、実験授業へのアクティブラーニングの導入手法に関する研究にも取り組んだ。

1. M. Hata, M. Nishimoto, K. Nishiyama, H. Kawabata and T. Hironaka, OSAIFU: A Source Code Factorizer on Android Studio, Proc. 35th IEEE International Conference on Software Maintenance and Evolution (ICSME 2019), pp.422-425, 2019
2. Y. Kondoh, M. Nishimoto, K. Nishiyama, H. Kawabata, and T. Hironaka, Efficient Searching for Essential API Member Sets based on Inclusion Relation Extraction,

- International Journal of Networked and Distributed Computing, Vol.7, No.4, pp.149-157, 2019
3. M. Nishimoto, K. Nishiyama, H. Kawabata, and T. Hironaka, SAIFU: Supporting Program Understanding by Automatic Indexing of Functionalities in Source Code, International Journal of Networked and Distributed Computing, Vol.7, No.4, pp.167-174, 2019
 4. M. Nishimoto, K. Nishiyama, H. Kawabata, and T. Hironaka, Easy-Going Development of Event-Driven Applications by Iterating a Search-Select-Superpose Loop, Journal of Information Processing, Vol.27, pp.257-267, 2019
 5. Y. Kono, H. Kawabata, and T. Hironaka, Resolving Ambiguous Types in Haskell by Checking Uniqueness of Type Variable Assignments under Type Class Constraints, Journal of Information Processing, Vol.27, pp.87-94, 2019
 6. H. Kawabata, Y. Tanaka, M. Kimura and T. Hironaka, Traf: a Graphical Proof Tree Viewer Cooperating with Coq through Proof General, Proc. 16th Asian Symposium on Programming Languages and Systems (APLAS 2018), LNCS 11275, Vol.11275, pp.157-165, 2018
 7. 西本, 川端, 弘中, アプリケーション開発支援のための協働 API 集合検索システム, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J101-D, No.8, pp.1176-1189, 2018
 8. 川端, 実数計算ライブラリ IFN の Haskell による効率的な実装, 情報処理学会第 126 回プログラミング研究発表会, 2019 年 10 月
 9. 立岡, 川端, 谷川, 弘中, 主体的な学びを促進する演習型授業の設計と評価 ~コンピュータシステムの入門的演習を例にして~, 情報処理学会第 149 回コンピュータと教育研究発表会, 2019 年 3 月

他国際会議等 5 件、国内会議等 13 件

【社会活動】

広島市立大学の教員による社会活動の一貫として、社会連携委員会事業「高校生による情報科学自由研究」の講師を務めた(テーマ:ワンボードコンピュータを用いた機械語プログラミング、および、純粋関数型言語 Haskell を用いた数式処理)。その他、海外からの訪問学生に対する研究紹介、地域貢献事業発表会での取り組み紹介、高校出張授業などを行った。

学会等における活動としては、日本ソフトウェア科学会編集委員として論文誌の編集や大会プログラム委員のほか、関連ワークショップのプログラム委員を務めた(下表参照)。

2019 年-2020 年	第 22 回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2020) プログラム委員
2019 年	日本ソフトウェア科学会第 36 回大会プログラム委員
2018 年・2019 年	日本ソフトウェア科学会論文誌編集委員

氏名	川本 佳代
職位	助教
研究分野	科学教育、教育工学、学習支援システム、ヒューマンインターフェース・インタラクション、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	CAI、eラーニング、教育評価、教育方法学、論理的思考力、リハビリテーション、教育用ロボット

これまで ICT を用いて高度な思考力の育成をめざす方法を追究してきた。2019 年度よりヒューマノイドロボットを導入し、具体的操作に基づく実践的な論理的思考力の育成方法について研究した。並行して 2019 年度より科学研究費補助金課題「キットビルド方式に基づく論理的思考力育成プログラムの開発」（基盤研究(C) 課題番号 19K03059)に取り組んだ。教育活動においては、授業にアクティブラーニングを積極的に導入した。

【教育活動】

2019 年度は学部 4 年生 1 名の教育研究指導を補佐し、卒業論文を提出させることができた。また、2018-2019 年度に教職実践演習(中等)B を担当した。この授業は 4 年後期にあり、教職免許取得関係科目の総括となる。積極的にアクティブラーニングを導入し、教師としてふさわしい知識、技術、考え方を受講生は身に着けさせた。2019 年度は外書講読演習 II を担当し、オンライン教材を使った学習と英語によるプレゼンテーションを導入し、読む・聞く・書く・話すに関する演習を行った。

2019 年度	システム工学実験 I、外書講読演習 II、教職実践演習(中等)B
2018 年度	システム工学実験 I、外書講読演習 I、教職実践演習(中等)B

【研究活動】

ヒューマノイドロボットを導入した高度な思考力の育成をめざす教育研究を行った。また、2019 年度より「キットビルド方式に基づく論理的思考力育成プログラムの開発」（科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号 19K03059)を行っている。並行して 2018-2019 年度は言語障害を持つ患者のためのリハビリテーション用システムの開発を行った。

1. 砂山 渡, 石田 純太, 川本 佳代, 西原 陽子, 類推による説明スキルの獲得支援システム, 情報処理学会論文誌, Vol. 59, No. 10, pp. 1922-1931, 2018
2. 研究発表, 田中 鈴乃, 内田 智之, 川本 佳代, 宮原 哲浩, 鈴木 祐介, グラフを用いた問題解決プロセスを導入した論理的思考力育成システム, 火の国情報シンポジウム 2020, 2020 年 3 月
3. 研究発表, 川本 佳代, 佐々木 崇大, 内田 智之, 林 雄介, 平嶋 宗, 平面図形問題を用いた論理的思考力育成支援システムの開発, 人工知能学会 第 86 回 先進的学習科学と工学研究会(SIG-ALST), 2019 年 7 月

4. 研究発表, 内田 葵, 内田 智之, 川本 佳代, 小崎 和治, 柏田 孝志, 杉原 勝宣, 宮原 哲浩, 鈴木 祐介, 失語症者のためのリハビリテーションプラン作成支援機能を有する言語聴覚訓練システムの開発, 火の国情報シンポジウム 2019, 2019 年 3 月
5. 研究発表, 川本 佳代, 平田 隆二, 秋元 健太, 内田 智之, 小崎 和治, 柏田 孝志, 杉原 勝宣, 失語症者のための言語聴覚訓練システムの開発, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018 年 10 月
6. 研究発表, 川本 佳代, 古谷 美夏, 宮脇 綾子, 内田 智之, 平嶋 宗, 林 雄介, 数学証明問題を用いた論理的思考力育成システムの開発, 2018 年度人工知能学会全国大会 (第 32 回), 2018 年 6 月

【社会活動】

地方独立行政法人広島市立病院機構広島市立リハビリテーション病院と共同研究を行い、失語症者を対象にしたリハビリテーション用システムを開発した。このシステムは開発中ではあるが、実際に患者のリハビリテーションに使用されており、完成した暁には一般公開する予定である。また、広島県物理教育研究推進会幹事をした。

2003 年 5 月-	広島県物理教育研究推進会幹事
-------------	----------------

氏名	釘宮 章光
職位	准教授
研究分野	分析化学、生物分子化学、生物機能・バイオプロセス、生体関連化学
研究キーワード	分子認識化学・バイオセンシング・分析化学・アミノ酸・予防医学・生体計測・環境計測

教育活動・研究活動・社会活動の全般において、化学とバイオテクノロジーをベースに情報科学への興味を掻き立てるような活動を行っていると考えている。大学生、高校生から小学生にこれら分野への興味をもってもらうために、身近な事例を取り上げたりすることで講義資料も工夫して進めている。

また研究については地元企業と協力して装置の実用化を目指すなど、私のこれまでの経験を生かして産学連携にも力を入れている。具体的な成果も出つつあるので、引き続き研究にも力を注ぎたい。

【教育活動】

化学・バイオテクノロジーから情報科学まで広い範囲にわたって教育を行っている。情報科学部の学生に化学やバイオテクノロジーに興味をもってもらえるよう、身近な話題も取り入れて理解しやすいよう工夫した。

「広島産業と技術」の授業については学生の興味を引くような企業、事業を行っている企業の方に講演を行っていただき、学生からも好評を得ている。広島のことについて学べるだけでなく、社会人になっても役に立つ内容に仕立てており、今後も工夫を重ねて充実した内容にしたい。

2019年度	医用情報科学、生物情報処理特論（大学院）、化学、広島産業と技術、化学実験、バイオ情報学特論（大学院）、生物工学、情報科学基礎実験、情報科学序説、外書講読Ⅱ
2018年度	医用情報科学、生物情報処理特論（大学院）、化学、広島産業と技術、化学実験、バイオ情報学特論（大学院）、生物工学、情報科学基礎実験

【研究活動】

現在企業と共同で研究を進めている病気の診断に用いるアミノ酸計測用のバイオセンサーの開発について、私が筆頭著者として論文発表、国内・国外での学会発表などを積極的に行った。招待講演などの依頼も受けて講演を行った。また企業と共同で国内・国外特許出願も行った。このように研究活動を活発に行っており、現在はプロトタイプを作製する段階に入り、開発は着々と進んでいる。本研究の実用化に向けて、さらに研究を進めていきたいと思う。

1. Hiroko X. Kondo, Ryo Kiribayashi, Daisuke Kuroda, Jiro Kohda, Akimitsu Kugimiya, Yasuhisa Nakano, Kouhei Tsumoto, Yu Takano, Effects of a remote mutation from the

- contact paratope on the structure of CDR-H3 in the anti-HIV neutralizing antibody PG16, Scientific Report, Vol.9, 2019
2. Tomoko Nakatsuka, Hideyuki Aoki, Mikiko Kida, Akimitsu Kugimiya, Development of a new measurement method for L-histidine and L-tyrosine using pyrophosphate amplification reaction of histidyl- and tyrosyl-tRNA synthetase from *Escherichia coli*, Bioscience Biotechnology and Biochemistry, Vol.83, pp.1616-1623, 2018
 3. 研究発表, 釘宮章光・小川遼・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, マイクロ分析デバイスをを用いるトリプトファン計測法の開発, 日本化学会 第100春季年会, 2020年3月
 4. 研究発表, 釘宮章光・大内雅人・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, 酵素反応を用いるトリプトファンおよび関連アミノ酸の計測法の開発, 日本トリプトファン研究会 第39回学術集会, 2019年12月
 5. 産学官連携事業, 釘宮章光, 病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発, 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 2019年11月
 6. 産学官連携事業, 鷹野優・中野靖久・釘宮章光・香田次郎・齋藤徹, 分子から個体までを対象に理論と実験の両面から医療に貢献する, 2019 広島市立大学地域貢献事業発表会, 2019年11月
 7. 産学官連携事業, 釘宮章光, 病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発, 広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 2019年10月
 8. 産学官連携事業, 鷹野優・中野靖久・釘宮章光・香田次郎・齋藤徹, 分子から個体までを対象に理論と実験の両面から医療に貢献する, 広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 2019年9月
 9. Presentation, Akimitsu Kugimiya, Akane Fujikawa, Toru Saito, Jiro Kohda, Yasuhisa Nakano, Yu Takano, Microfluidic paper-based analytical devices for histidine, XXI Mendeleev Congress on General and Applied Chemistry, 2019年9月
 10. 研究発表, 釘宮章光・大内雅人・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, 酵素反応を用いるトリプトファン計測法の開発, 第13回バイオ関連化学シンポジウム, 2019年9月
 11. 研究発表, 釘宮章光・藤川茜・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, グルコース濃度の計測用ペーパー分析デバイスの開発, 第32回バイオメディカル分析科学シンポジウム, 2019年8月
 12. 研究発表, 中柄朋子・青木秀之・喜田幹子・佐藤大祐・山田健太・釘宮章光, 大腸菌由来アミノアシル tRNA 合成酵素のピロリン酸増幅反応を用いた新規な L-ヒスチジン及び L-チロシンの測定法, 日本農芸化学会 2019 年度大会, 2019年3月
 13. 研究発表, 釘宮章光・藤川茜・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, ペーパー分析デバイスをを用いるヒスチジン濃度計測のための条件検討, 日本化学会 第99春季年会, 2019年3月
 14. 産学官連携事業, 鷹野優・中野靖久・釘宮章光・香田次郎・齋藤徹, 分子から個体までを対象に理論と実験の両面から医療に貢献する, 広島市立大学産学連携研究発表会 2018, 2018年

15. 産学官連携事業，鷹野優・中野靖久・釘宮章光・香田次郎・齋藤徹，分子から個体までを対象に理論と実験の両面から医療に貢献する，2018 広島市立大学地域貢献事業発表会，2018 年
16. 研究発表，田邊直己・桐林遼・近藤寛子・黒田大祐・齋藤徹・香田次郎・釘宮章光・中野靖久・津本浩平・鷹野優，分子動力学シミュレーションを用いた抗 HIV 中和抗体 PG9 と PG16 の CDR-H3 についての構造揺らぎの比較，第 56 回日本生物物理学会年会(岡山)，2018 年
17. 特別講演・招待講演，釘宮章光，病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発，県民・市民のための技術講演会・見学会 2018，2018 年 12 月
18. 特別講演・招待講演，釘宮章光，ヘルスケア分野への応用を目指したアミノ酸計測装置の開発，マッチングフォーラム，2018 年 11 月
19. 産学官連携事業，釘宮章光，病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発，広島市立大学産学連携研究発表会 2018，2018 年 10 月
20. 研究発表，釘宮章光・藤川茜・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優，ペーパー分析デバイスを用いるアミノ酸の計測，日本分析化学会 第 67 年会（宮城），2018 年 9 月
21. 特別講演・招待講演，釘宮章光，ヘルスケア分野への応用を目指したアミノ酸計測装置の開発，平成 30 年度 第 1 回ヘルスケア・医療福祉機器技術研究交流会「ヘルスケア分野のビジネス動向・将来展望と中国地域の研究シーズ・ニーズ」，2018 年 7 月
22. 特別講演・招待講演，釘宮章光，病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発，第 67 回中国四国産学連携化学フォーラム（広島），2018 年 4 月

【社会活動】

小学生向けのボランティアの理科教室である「くらりか」を年に 3 回程度開催している。子供の理科離れを防ぐことを目的としており、理科に興味をもってもらえるよう、単に工作で終わるだけでなく、原理などについても詳しく説明し、理解してもらえていると思う。

今後も、小学生から高校生まで科学あるいは本学に興味をもってもらえるような活動を続けたいと思う。

2018 年 9 月-	フルオラス科学研究会，第 11 回フルオラス科学研究会実行委員
2017 年 7 月-	安芸高等学校 「大学研究」 インターンシップ
2015 年 12 月-	美鈴が丘高校 研究室見学
2015 年 11 月-	Sciforschen 社、(USA)，"Journal of Bioanalytical Techniques" 編集委員
2015 年 10 月-	平成 27 年度 広島市立大学情報科学部公開講座，広島市立大学社会連携センター
2015 年 3 月-	日本化学会，日本化学会 代表正会員
2014 年 4 月-	くらりか（蔵前理科教室ふしぎ不思議）

2012年11月-	新アミノ酸分析研究会
2011年4月-	日本ケミカルバイオロジー学会
2004年7月-	日本分析化学会
1996年10月-	日本化学会 バイオテクノロジー部会
1995年1月-	日本化学会

氏名	串田 淳一
職位	准教授
研究分野	知能情報学
研究キーワード	進化計算、最適化、対戦型ゲーム

2018年度、2019年度はこれまでの研究・教育活動に加え、社会活動をより積極的に行った。グローバルサイエンスキャンパス広島やレギオにおける活動を通して、高校生に対する研究の体験やプログラミングの指導を行うことができた。また研究・教育活動においても、専門としている生物の進化や群知能に基づく最適化アルゴリズムの開発・応用を行い、論文投稿やコンペティションにおける受賞など一定の成果を得ることができた。今後もこれらの活動をバランスよく行い、各活動で得られた経験を活かして地域や社会に広く貢献していきたい。

【教育活動】

2018年度、2019年度は、学部では線形代数1演習、論理回路、情報科学基礎実験β-1、大学院博士課程前期では機械学習特論を担当した。これらの授業では、講義スライドだけではなく、補助教材としてシミュレータ、サンプルコードなどを準備し、予習・復習を効率的に行うことができるように工夫をしている。また、研究室所属学生に対しては計算知能技術に関する研究指導を行い、プログラミングや論文執筆およびプレゼンテーション能力が身につくよう努めた。

2019年度	線形代数1演習、論理回路、機械学習特論、eラーニング英語II、情報科学基礎実験β-1
2018年度	論理回路、線形代数1演習、機械学習特論、eラーニング英語IV、情報科学基礎実験β-1

【研究活動】

進化計算手法の探索効率の向上や適応領域の拡張などの研究を進めている。主なテーマは、複数の解を一度の探索で同時に発見するための手法の開発、制約付き最適化のための進化計算手法の提案などである。進化計算に関する国際会議 GECCO2018 のコンペティション(Competition on Niching Methods for Multimodal Optimization)では、提出したグラフに基づく種分化を導入したアルゴリズムが1位となった。また、国内のシンポジウムで開催された進化計算コンペティション2019(単目的部門)では、提出した実問題を対象とした制約付き最適化手法が最優秀賞となった。

1. Jun-ichi Kushida, Akira Hara, Tetsuyuki Takahama, Generation of Adversarial Examples Using Adaptive Differential Evolution, International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), Vol.16, No.1, pp.405-414, 2020
2. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, ε制約法とパレート的アプローチを用いた Differential

- Evolution による複数車両の同時最適化, 進化計算学会論文誌, Vol.10, No.1, pp.2-11, 2019
3. Jun-ichi Kushida, Akira Hara, Tetsuyuki Takahama, Performance Enhancement of Differential Evolution by DIRECT Algorithm, International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), Vol.15, No.2, pp.607-616, 2019
 4. Yudai Kuwahata, Jun-ichi Kushida, Satoshi Ono, A Preliminary Study on Adaptive Evolution Control Using Rank Correlation for Surrogate-assisted Evolutionary Computation, International Journal of Software Innovation (IJSI), Vol.6, No.4, pp.59-72, 2018
 5. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, ϵ 制約 Differential Evolution を用いた Adversarial Examples の生成, 進化計算シンポジウム 2019, 2019 年 12 月
 6. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, Differential Evolution を用いた Adversarial Examples の生成に関する基礎的検討, 第 15 回進化計算学会研究会, 2019 年 3 月
 7. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, ϵ 制約法とパレートのアプローチを用いた Differential Evolution による制約付き最適化, 進化計算シンポジウム 2018, 2018 年 12 月
 8. Akira Hara, Jun-Ichi Kushida, Ryota Takemoto, Tetsuyuki Takahama, Artificial Bee Colony Programming Using Semantic Control Crossover, 2018 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), 2018 年 10 月
 9. Jun-ichi Kushida, Akira Hara, Tetsuyuki Takahama, Cartesian Genetic Programming with Module Mutation for Symbolic Regression, IEEE-SMC 2018 (IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics), 2018 年 10 月
 10. 進化計算コンペティション 2019 単目的部門最優秀賞, 進化計算学会, 2019
 11. Competition on Niching Methods for Multimodal Optimization Winner, GECCO 2018, 2018

【社会活動】

所属する進化計算学会や IEEE SMC Hiroshima Chapter などが開催する各種講演会・研究会行事の運営におけるサポートを行い、研究活動の活発化に努めた。科学技術人材を育成することを目的としたグローバルサイエンスキャンパス(GSC)広島においては、セミナー講師を務めた。また、ジャンプステージの指導教員として、高校生 1 名の研究指導を行った。レギオにおける取組として、情報オリンピック予選突破を目指すためのプログラミング講習会の講師を務めた。

2019 年 11 月	広島市立大学の地域貢献事業発表会でのパネル展示 ・車両設計問題のための最適化アルゴリズムの開発 ・情報オリンピック「レギオ」講習会
2019 年 9 月	GSC セミナー
2019 年 8 月	レギオ講習会 (初級編)
2019 年 4 月-2019 年 8 月	グローバルサイエンスキャンパス広島における指導教員

2019年1月-	IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (Treasurer)
2018年10月	GSC セミナー
2018年10月	模擬授業 (比治山女子高校)
2018年8月	レギオ講習会 (初級編)
2018年4月-	SICE システム・情報部門コンピューターショナル・インテリジェ ンス部会 部会運営委員

他8件

氏名	窪田 昌史
職位	助教
研究分野	計算機システム・ネットワーク、ソフトウェア
研究キーワード	システムソフトウェア、Graphics Processing Unit (GPU)、並列処理、コンパイラ、ハイパフォーマンスコンピューティング、Field-Programmable Gate Array (FPGA)

スーパーコンピュータやGPU, FPGAなどの計算機システムにおける並列処理の研究を行っている。特に、並列処理におけるプログラミング言語のコンパイラなどのシステムソフトウェアの開発や、並列化によるアプリケーションプログラムの高速化などを主な研究テーマとしている。

【教育活動】

情報工学科3年生向けの情報工学実験 I, II では、組込みシステムやスマートフォン、タブレット向けのプログラミングに重点を置き、カリキュラムの作成を分担している。情報科学部1年生向けの情報活用基礎では、文書作成技術とそれに必要なIT機器の活用法の指導を行っている。扱う内容は大学在学中のみならず社会に出てからも必要とされる事項を精選している。大学院生を対象としたコンピュータアーキテクチャ特論では、コンピュータのプロセッサの設計を通して、プロセッサのアーキテクチャの理解が深まるように工夫している。

2019年度	情報活用基礎、情報工学実験 I、情報工学実験 II、e-ラーニング英語 III
2018年度	情報活用基礎、情報工学実験 I、情報工学実験 II、e-ラーニング英語 IV、コンピュータシステム特論

【研究活動】

グラフ探索処理、電子回路シミュレータ、物性物理における結晶構造解析などのアプリケーションを、GPU や再構成可能ハードウェア (FPGA) などのアクセラレータ向けに高速化手法する研究を行っている。また、高精度浮動小数点演算器を使用する処理をFPGA上に実現し、汎用CPU上での処理よりも高速化する研究も進めている。

1. 窪田 昌史, 松下 智裕, 八方 直久, 蛍光 X 線ホログラムからの原子像再生の並列化, 情報研報, 2018-MPS-118, No. 36, pp.1-6, 2018.
2. Keigo Teramoto, Atsushi Kubota and Tetsuo Hironaka, Trial Implementation of Large-Scale Graph Analysis with Breadth-First Search using FPGA with Multiport and Multibank Memory, Proc. ITC-CSCC2018, pp.1-4, 2018.
3. Kazuki Hiramoto, Atsushi Kubota, Tetsuo Hironaka, Satoshi Nakamura and Masato Andoh, FPGA Implementation of High-Performance SPICE Simulator for Small-Scale Electronic Circuits, Proc. ITC-CSCC2018, pp.1-4, 2018.
4. 原 智裕, 窪田 昌史, 松下 智裕, 八方 直久, 弘中 哲夫, 蛍光 X 線ホログラムからの3次元原子像再生の GPU 実装, 信学技報, CPSY2018-25, Vol.118, No.165, pp.187-192,

- 2018.
5. 平本 和樹, 児島 彰, 窪田 昌史, 弘中 哲夫, 中村 諭, 安藤 真人, 電子回路基板の開発を対象とした低周波数回路の事前評価ツールの FPGA 実装, 信学技報, RECONF2018-24, Vol. 118, No. 215, pp. 29-34, 2018.
 6. 山下 裕司, 窪田 昌史, 谷川 一哉, 弘中 哲夫, FPGA の配置配線結果を使用した MPLD の配置配線ツールの検討, 信学技報, RECONF2018-30, Vol. 118, No. 215, pp. 61-66, 2018.
 7. 藤石 秀仁, 鎌田 時生, 弘中 哲夫, 谷川 一哉, 窪田 昌史, 細粒度再構成可能デバイス MPLD におけるディープラーニングを用いた論理素子配置の良し悪し判定, 信学技報, VLD2018-48, Vol. 118, No. 334, pp. 71-76, 2018.
 8. 谷川 一哉, 石崎 大智, 窪田 昌史, 弘中 哲夫, ステンシル計算を対象としたメモリアクセスを最適化するラインバッファ自動挿入手法の検討, 信学技報, RECONF2019-3, Vol. 119, No. 18, pp. 11-16, 2019.
 9. 鎌田 時生, 窪田 昌史, 谷川 一哉, 弘中 哲夫, コスト関数にニューラルネットワークを導入した論理素子配置アルゴリズムの検討, 信学技報, RECONF2019-23, Vol. 119, No. 208, pp. 13-18, 2019.
 10. Atsushi Kubota, Tomohiro Matsushita and Naohisa Happo, Parallelization of Atomic Image Reconstruction from X-ray Fluorescence Holograms with XscalableMP, 第7回 XscalableMP ワークショップ, 2019.
 11. Atsushi Kubota, Tomohiro Hara, Tomohiro Matsushita, Naohisa Happo and Tetsuo Hironaka, Acceleration of Atomic Image Reconstruction from X-ray Fluorescence Holograms on Multiple Platforms, Materials Research Meeting, 2019.

【社会活動】

電子情報通信学会 CPSY 研究会専門委員として学会の活動に貢献している。また、中高生向けのプログラミング講習会である情報オリンピックレギオ講習会の開催、社会人向け enPiT-Pro「並列処理」講師、小中学生向け KDDI 理科実験教室講師などを通して、コンピュータ科学分野の普及に努めている。

2015年6月-2021年5月	電子情報通信学会, コンピュータシステム研究専門委員会専門委員
2015年4月-2019年3月	情報処理学会, プログラミング研究会運営委員
2013年8月-	電子情報通信学会

氏名	黒木 進
職位	准教授
研究分野	知能情報学、メディア情報学・データベース
研究キーワード	マルチメディアデータベース

位置や時刻のデータベースとその検索アルゴリズムや索引、データマイニングとその応用について研究しました。同時にこれらに関する講義科目を学部と大学院で担当しました。データサイエンスにかかわるものとして学問的貢献と教育の両面で貢献できるよう 2020 年度以降も活動していこうと思います。

また、新しい研究テーマの発掘も行いました。個人の活動にフォーカスした分析対象として人間の身体動作に注目しました。このテーマについての研究を進めるとともに、これ以外にも新奇性のあるテーマの発掘を続けたいと思います。

【教育活動】

情報科学部 2 年生を対象とする科目「データ構造とアルゴリズム II」、情報科学部知能工学科 3 年生を対象とする科目「データマイニング」、「知能工学実験 II」、情報科学部情報工学科 3 年生を対象とする科目「データベース」、大学院情報科学研究科知能工学専攻を対象とする科目「マルチメディアデータベース特論」を担当しました。学部生を対象とする非実験科目においては、問題演習と解説を授業時間に行うアクティブラーニング要素を取り入れた形式で行いました。

また、知能工学科 4 年生の卒業研究を担当し、人間の身体動作、例えばダンスやスポーツのフォームの分析に関するテーマで指導しました。

2019 年度	データベース、データ構造とアルゴリズム II、データマイニング、知能工学実験 II、マルチメディアデータベース特論
2018 年度	データマイニング、データ構造とアルゴリズム II、データベース、マルチメディアデータベース特論、知能工学実験 II

【研究活動】

2018 年度と 2019 年度は主に 2 つの研究テーマについて取り組みました。

ひとつは位置や時刻に関するデータの収集、整理、検索と分析に関する研究です。例えば SNS ユーザの投稿を収集し、投稿に付随した位置や時刻からいつどこで投稿しているかを分析し、その後の投稿行動の予測を行うものです。

もうひとつは人間の身体動作の分析に関する研究です。ダンスやスポーツのフォームなどモデルとなる身体動作と被験者の身体動作の比較を行い、動きのタイミングや身体の各部位の位置関係の適切さの評価法について研究しました。

2020 年度以降も引き続きこれらの研究を行いたいと思います。

【社会活動】

本学が主催する産学連携研究発表会に 2018、2019 年度、地域貢献事業発表会に 2018 年度参加

し、所属研究室の研究成果についてポスター発表を行いました。SNS における投稿につけられた位置や時刻の情報に関するデータマイニングや SNS ユーザの属性推定などビッグデータ解析の実施例を示しました。

2020 年度以降も引き続き発表会への参加・発表を続ける予定です。

2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 広島市立大学、広島市
2018 年 12 月	2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学 社会連携センター
2018 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018 ～AI(人工知能)とビッグデータでできること～, 広島市立大学、広島市
2013 年 4 月-	人工知能学会
2002 年 5 月-	日本データベース学会
2000 年 4 月-	電子情報通信学会
1991 年 4 月-	ACM
1991 年 4 月-	IEEE Computer Society
1990 年 5 月-	情報処理学会

氏名	黒澤 義明
職位	助教
研究分野	知能情報学
研究キーワード	深層学習、ディープラーニング、印象抽出、情報推薦、ファッションアイテム、アパレルアイテム、ブラインド音源分離、声質変換

ここ数年で、自身の教育内容や研究内容が深層学習のアルゴリズム/フレームワークの習得に費やされるようになってきた。深層学習は現在のトレンドであり、世の中でも技術を習得した技術者が求められている、そうした点で、情報科学研究科の学生や院生に対しては、最新のスキルを持つ技術者の育成に貢献してきたと考えている。

また、他学部の学生に対しても、3学部合同基礎演習でAIの利点について議論する場所を提供し、現在の技術を紹介する役割を果たせたと考えている。一方、スマホでAI技術が身近になる反面、個人情報が収集される等の弊害も紹介できたと考えている。これからも、日々の進化に遅れないよう技術を習得し、スキルやモラルについて、さまざまな伝達をしようと考えている。

【教育活動】

知能情報工学科3年生向けの実験演習では、近年のトレンドとなっている深層学習を実験に取り入れることで、社会に還元可能な技術者の育成を目指している。深層学習のフレームワークも日々進化しており、最新の動向を取り入れつつ、わかりやすい教材を用意することに力を注いだ。学部横断の3学部合同演習では、AIの光と闇に焦点を当て、現在の技術が持つ問題点に気づいてもらえるよう、題材や討論の機会を与えるように取り組んだ。研究室でも、学部生や大学院生に対する深層学習アルゴリズムの指導だけではなく、GPUやフレームワークの使い方といった最新の技術の習得/教育にも貢献できたと考えている。

2019年度	知能工学実験 I、3学部合同基礎演習、プログラミング演習、地域実践演習
2018年度	知能工学実験 I、3学部合同基礎演習、プログラミング演習、地域実践演習

【研究活動】

研究活動として、これまでに取り組んできたアパレルアイテムの言語情報/画像情報のそれぞれから深層学習を用いて情報を変換/抽出して情報を整理した後に推薦する研究を行ってきた。それに加え、新たに人間の音声に対する深層学習～スペクトログラムを用いたブラインド音源分離、声質変換～についても取り組みを始めた。他にない大きな意義としては、画像に対するのと同様に、音声に対しても同じアルゴリズムで解くことを目標としている点である。

現状では、画像と音声を2次元化した情報の相違点（画像認識に使われる画像とスペクトログラム化した音声情報の相違）について検討しており、同様の特徴を強調し、異なる特徴を如何に吸収するか検討を加えている。

1. 発話内容と口調の関係に基づく発話者の嗜好情報推定, 知能と情報, 2019
2. Correlation Analysis between Subjectively Annotated Emotions and Objectively Annotated Emotions, International MultiConfernece of Engineers and Computer Scientists 2019 (IMECS 2019), 2019
3. 研究発表, 深層学習を用いたアパレルアイテム平置き画像から着装状態への変換, 人工知能学会全国大会, 2019
4. 研究発表, 和泉沙織, 黒澤義明, 目良和也, 竹澤寿幸, 深層学習正解ラベルとしてのアパレルアイテム名利用とその有効性の検討, 言語処理学会年次大会, 2018年
5. 受賞: IMECS 2019 Merit Award, 2019

【社会活動】

所属研究室で毎年参加を行っているオープンキャンパスの出展に際し、音声認識技術や深層学習技術を紹介することで、社会貢献を行ったと考えている。また、広島市立大学産学連携研究発表会にも2018年、2019年と連続して出展を行うことで、研究や授業で得た技術や知見を社会に提供するよう努めた。ただ、紹介内容がアパレルについての研究であり、参加者の方にはあまり興味を持っていただけないように感じられた。深層学習のアルゴリズムの解説に重点をおくなど、プレゼンテーションに工夫をしていこうと考えている。

2019年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019
2019年8月	オープンキャンパス
2018年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018
2018年8月	オープンキャンパス

氏名	桑田 精一
職位	准教授
研究分野	数理物理、数学基礎・応用数学
研究キーワード	量子情報理論、量子通信

教育・研究・社会活動に関して、バランスの良い貢献を行うことができた。

【教育活動】

ポスト・コロナ時代における Web を利用した教材の充実を図ることの重要性を認識するようになった。

2019 年度	物理学概論、基礎物理学、解析学 I 演習、情報伝送方式特論、物理学実験、システム工学実験、情報科学序説、情報科学基礎実験 α
2018 年度	物理学概論、解析学 I 演習、情報伝送方式特論、基礎物理学、物理学実験、システム工学実験、情報科学序説、情報科学基礎実験 α

【研究活動】

D-Wave マシンをはじめとする新しいテクノロジーに特化した研究の契機を得るようになった。

1. S. Kuwata, K. Kawaguchi, Sampling theorem based Fourier-Legendre transform, Int. J. Appl. Comput. math., Vol.6, pp.89-, 2020
2. S. Kuwata, D. Takehisa, Metastable states of graphene Dirac fermion in potential barrier, IOP Conf. Ser.: Mater. Sci. Eng., Vol.634, pp.012004-, 2019
3. S. Kuwata, T. Yajima, Quaternion-based generalization of conformal maps, J. Phys. Conf. Series, Vol.1194, pp.012064-, 2019
4. 研究発表, 桑田精一, 調和振動子レゾルベントを用いたヒルベルト変換, 日本物理学会第 75 回年次大会, 2020 年 3 月
5. 研究発表, 桑田精一, ヒルベルト変換と集積点・集積円定理, 日本物理学会 2019 年秋季大会, 2019 年 9 月
6. Presentation, S. Kuwata, Metastable states of graphene Dirac fermion in potential barrier, Graphene and Novel Nanomaterials (GNN 2019), 2019 年 7 月
7. 研究発表, 桑田精一, (1+1)次元ディラック方程式における線形ポテンシャル, 日本物理学会第 74 回年次大会, 2019 年 3 月
8. 研究発表, 桑田精一, 非可換ボゾン化における分数フーリエ変換, 日本物理学会 2018 年秋季大会, 2018 年 9 月
9. Presentation, S. Kuwata, T. Yajima, Quaternion-based generalization of conformal maps, 32nd International Symposium on Group Theoretical Methods in Physics, 2018 年 7 月

【社会活動】

高校における模擬授業を通して、高校生の興味対象について垣間見ることができた。

2019年10月-	模擬授業
1989年4月-	日本物理学会

氏名	香田 次郎
職位	講師
研究分野	生物機能・バイオプロセス、リサイクル工学
研究キーワード	タンパク質、酵素、バイオリクター、植物工場、バイオディーゼル燃料、水耕栽培

教育面では講義内容の見直しを行うとともに、e-ラーニングシステムの活用やグループディスカッションの導入など、アクティブラーニングの導入にも取り組んだ。研究面では LED 植物工場に関するテーマとタンパク質溶液の濁りを客観的かつ定量的に判別する装置作製に関するテーマを卒業研究で実施した。社会活動については、他大学の非常勤講師、オープンキャンパスなどの広報活動、学会支部の運営、広島市の環境影響評価に従事した。大学運営としては、ひろしまコンピュータサイエンス塾実行委員として企画運営に、衛生管理者として薬品の保管状況調査の実施、法令で義務付けられている局所排気装置の定期自主点検および作業環境測定の実施調整、学内の巡視、大学構内全面禁煙化への対応、働き方改革に対応するため勤務状況等報告書の改訂など、学内の安全衛生に係る業務に従事した。

【教育活動】

2018、2019 年度は単独担当の講義を 4 科目、オムニバス形式の講義を 1 科目、実験・演習科目を 3 科目担当した。いずれの講義も講義内容の見直しを行うとともに、e-ラーニングシステムの活用やグループディスカッションの導入など、アクティブラーニングの導入にも取り組んだ。

2019 年度	生物学概論、分子生物学、生物情報処理特論、外書講読演習 I、医用情報科学実験 I、基礎生化学、生物学、情報科学基礎実験 α
2018 年度	生物情報処理特論、外書講読演習 I、医用情報科学実験 I、分子生物学、生物学概論、基礎生化学、生物学、情報科学基礎実験 α

【研究活動】

2018 年度、2019 年度ともに、LED 植物工場に関する卒業研究の追実験を行い、現在、これらの結果を学術雑誌に投稿するため論文を執筆中である。また、タンパク質溶液の濁りを客観的かつ定量的に判別する装置作製に関するテーマについて、2019 年度の卒業論文の結果を取りまとめて、学会発表する予定で準備を進めている。

1. Hiroko X. Kondo, Ryo Kiribayashi, Daisuke Kuroda, Jiro Kohda, Akimitsu Kugimiya, Yasuhisa Nakano, Kohei Tsumoto and Yu Takano, Effects of a remote mutation from the contact paratope on the structure of CDR-H3 in an anti-HIV neutralizing antibody PG16, Scientific Reports, Vol.9, pp.19840-, 2019
2. Presentation, Naoki Tanabe, Ryo Kiribayashi, Hiroko X. Kondo, Daisuke Kuroda, Toru Saito, Jiro Kohda, Akimitsu Kugimiya, Yasuhisa Nakano, Kouhei Tsumoto, Yu Takano,

Molecular dynamics study of structural fluctuations in CDR-H3 of anti-HIV antibodies PG9 and PG16, MRM2019 Yokohama Symposia, 2019年12月

3. 研究発表, 近藤寛子・桐林遼・黒田大祐・齋藤徹・香田次郎・釘宮章光・中野靖久・津本浩平・鷹野優, 分子動力学シミュレーションによる抗 HIV 抗体 PG16 の CDR-H3 の変異における中和能への影響の解析, 日本コンピュータ化学会 2019 春季年会, 2019 年 6 月
4. Presentation, Naoki Tanabe, Ryo Kiribayashi, Hiroko X. Kondo, Daisuke Kuroda, Toru Saito, Jiro Kohda, Akimitsu Kugimiya, Yasuhisa Nakano, Kohei Tsumoto, Yu Takano, Molecular dynamics study of structural fluctuations in CDR-H3 of anti-HIV antibodies PG9 and PG16, The 59th Sanibel Symposium, 2019 年 2 月
5. 特別講演・招待講演, 香田次郎, バイオディーゼル廃棄物の処理, リサイクル, 廃棄物資源循環学会中国・四国支部 2018 年度セミナー, 2018 年 11 月
6. Presentation, 田邊直己, 桐林遼, 近藤寛子, 黒田大祐, 齋藤徹, 香田次郎, 釘宮章光, 中野靖久, 鷹野優, Molecular dynamics study of structural changes in CDR-H3 of anti-HIV antibodies PG9 and PG16, 第 56 回日本生物物理学会年会, 2018 年 9 月

【社会活動】

2018 年度、2019 年度ともに広島工業大学環境学部において『環境基礎化学』の非常勤講師として従事した。2018 年度、2019 年度ともに、オープンキャンパスでは研究室と医用情報科学実験で出展し、広島市立大学地域貢献事業発表会と広島市立大学産学連携研究発表会には研究室と個人の研究テーマで出展した。また、廃棄物資源循環学会中国・四国支部幹事として、見学会や講演会の企画・運営、支部奨励賞の選考、2018 年度同支部セミナーの講師として従事した。2019 年 5 月より広島市環境影響評価審査会委員として、(仮称) 新交通西風新都線建設事業および南工場建替事業に係る環境影響評価実施計画書の審議に従事した。

2019 年 11 月	2019 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 広島市立大学
2019 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス, 広島市立大学
2019 年 5 月-2021 年 5 月	広島市環境局環境保全課, 広島市環境影響評価審査会委員
2018 年 12 月	県民・市民のための技術講演会・見学会 2018, 蔵前工業会 広島県支部
2018 年 11 月	廃棄物資源循環学会中国・四国支部 2018 年度セミナー, 廃棄物資源循環学会中国・四国支部
2018 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018, 広島市立大学
2018 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス, 広島市立大学
2017 年 5 月-2021 年 5 月	廃棄物資源循環学会 中国・四国支部 理事 (兼幹事)
2015 年 3 月-	日本農芸化学会
2014 年 8 月-	日本食品工学会
2008 年 4 月-	廃棄物資源循環学会

2006年11月-	近赤外研究会
1998年6月-	日本生物工学会
1997年4月-	化学工学会

氏名	河野 英太郎
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	ネットワークソフトウェア、TCP/IP、インターネット、Network Software、ネットワークセキュリティ

2018、2019年度は研究キーワードに挙げた分野の一部、ならびにアドホックネットワークの通信方式の分野について、学術論文の採択や公開などの成果を上げている。また、少しずつ学内運営に関する役割が重くなっていることに加え、以前から継続している在学生チュータの役割がある。社会活動についても近隣の高校などの組織との関わりに加え、国際会議のプログラム委員の仕事や座長に加え、プログラム委員長等の役割を負うことも増えてきている。

【教育活動】

2018、2019年度は新生に向けて実施している「情報活用基礎(国際)」「情報活用基礎(情報)」や情報工学科3年向けの「ネットワークソフトウェア演習」に加え、「テクニカル・コミュニケーション演習」という理工系の英語技能に関する講義を3年生全員に対してまとめて行うというミッションが加わっており、毎年対応に苦慮しながら実施している。さらに大学院博士前期課程向けの「モバイルネットワーク特論」についても継続して行っている。また、学部4年生の卒業研究、大学院博士前期課程学生の修士論文の指導に加え、博士後期課程学生の指導も担当しており、博士の学位取得までたどりつけている。

2019年度	情報活用基礎(情報 JKL クラス)、情報活用基礎(国際学部後半クラス)、テクニカル・コミュニケーション演習、ネットワークソフトウェア演習、モバイルネットワーク特論、eラーニング英語Ⅱ
2018年度	情報活用基礎、テクニカル・コミュニケーション演習、ネットワークソフトウェア演習、モバイルネットワーク特論、eラーニング英語Ⅱ

【研究活動】

2018、2019年度は定常的に行っている国際会議での論文投稿と発表や学術雑誌への論文投稿と掲載などを通じた研究内容の公開に加え、関連した学術研究に関して申請していた特許が2件成立するなど一定の成果を得ている。また、2018年に発生した平成30年7月豪雨など近年の災害に対する研究成果の貢献なども求められている部分があり、どのように関わるべきかについて考えることが多くなった。

1. Temma OHTANI, Eitaro KOHNO, Akifumi NOMASAKI, and Yoshiaki KAKUDA, An Adaptive Connection-Establishment Timeout Conguration Method for Bluetooth MANETs in Control Packet Loss Environments, International Journal of Networking and Computing, Vol.10, No.1, pp.25-43, 2020

2. Ryohei Saka, Temma Ohtani, Kazuki Fujita, Eitaro Kohno, and Yoshiaki Kakuda, On the Design, Feasibility, and Implementation of a Bluetooth MANET-based Routing Application, IEICE Communication Express, Vol. X8-B, No. 12, pp.628-633, 2019
3. Kazuki Fujita, Eitaro Kohno and Yoshiaki Kakuda, On the Secure Dispersed Data Transfer-Oriented Path Construction Method for Different ID Trees in WSNs, Proc. the Seventh International Symposium on Computing and Networking Workshops (CANDARW2019), twelveth International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON2019), pp.8-13, 2019
4. Yuya Minami, Ryohei Saka, Eitaro Kohno and Yoshiaki Kakuda, On the Effect of BLE Beacons on Fast Bluetooth Connection Establishment Scheme, Proc. the Seventh International Symposium on Computing and Networking Workshops (CANDARW2019), twelveth International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON2019), pp.28-32, 2019
5. 南 雄也, 坂 涼平, 河野英太郎, 角田良明, Classic Bluetooth と Bluetooth Low Energy を併用した Bluetooth MANET の高速コネクション確立手法, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol. J102-B, No. 8, pp. 545-554, 2019
6. 藤田和希, 谷 隆磨, 河野英太郎, 角田良明, セキュア分散データ転送を用いる無線センサネットワークにおける経路構築率向上のための複数ゲートウェイの配置法ならびに経路制御手法, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol. J102-B, No. 5, pp. 373-384, 2019
7. 南 雄也, 坂 涼平, 河野英太郎, 角田良明, 遅延・切断耐性を有する Bluetooth MANET の端末間接続状態に適応するデータ転送方式, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol. J102-B, No. 5, pp. 356-365, 2019
8. Temma Ohtani, Eitaro Kohno, and Yoshiaki Kakuda, On Relationship between Timeout and Latency of Connection Re-establishment for Control PacketLoss Scenario in Bluetooth MANETs, Proc. 2018 Sixth International Symposium on Computing and Networking Workshops (CANDARW), at the 11th International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON), pp.42-46, 2018
9. Yuya Minami, Nobuhiro Kajikawa, Ryohei Saka, Yuma Nakao, Eitaro Kohno and Yoshiaki Kakuda, Arbitration-based Deadlock Mitigation Mechanism for Fast Connection Establishment in Autonomous Self-organized Bluetooth MANETs, Proc. 2018 IEEE SmartWorld/SCALCOM/UIC/ATC/CBDCCom/IOP/SCI, at ADSN2018, pp.1611-1616, 2018

【社会活動】

2018、2019 年度は継続的に行っている国際会議のプログラム委員などを引き受けているが、時間が有限な中でどのように時間を配分して関わっていくかについて考えることが多くなっている。

2020 年 3 月-2020 年 11 月	The Eighth International Symposium on Computing and Networking (CANDAR' 20)
2019 年 5 月-2019 年 11 月	The Seventh International Symposium on Computing and

	Networking (CANDAR' 19), プログラム委員
2019年2月-2019年8月	The Eighteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2019)
2018年4月-2018年11月	The Eleventh International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON' 18),
2018年3月-2018年10月	The Seventeenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2018)
2012年5月-	電子情報通信学会 アシユアランスシステム研究会 幹事
2012年5月-	電子情報通信学会 ディペンダブルコンピューティング研究会 専門委員
2009年1月-	The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc. (IEEE)
2003年-	広島市役所 庁内 LAN 管理アドバイザー
1996年4月-	情報処理学会
1990年4月-	電子情報通信学会

氏名	小寄 貴弘
職位	准教授
研究分野	機械力学・制御
研究キーワード	制御工学、メカトロニクス、パワーアシスト

今後発展が期待されている人間・ロボット共生分野に寄与できる技術者・研究者を育成することを念頭に、教育活動では、学生が基礎的知識・技能を修得できることを重視しつつ、専門的知識の伝授に偏ることなく、修得した知識・技能を活用して課題を解決できる能力も養うことができる学修指導となるように努めた。一方、研究活動では、メカトロニクス研究室の一員として、将来的には実社会に還元し、貢献できるような、主として人を支援するためのメカトロニクス関連技術に関する研究・開発を推進した。また、それを通して得られた研究成果を社会に対して公表する活動も行った。

【教育活動】

学部生に対しては、情報活用基礎において、情報機器操作の基本的技能と情報倫理・情報セキュリティ等に関する基礎知識を、システム工学科人間・ロボット共生コースの基盤を成す専門科目であるメカトロニクス I では、メカトロニクスの要素技術やシステム化を修得できるように努めた。大学院生に対しては、インテリジェント制御特論にて、メカトロニクスシステムを高性能化するための制御理論を講義した。講義においても、記述式演習の他にコンピュータを用いた演習等を一部導入することにより、理論の理解を促進できるようにするとともに、学修した理論を活用して課題解決する能力の育成にも配慮した。

2019 年度	情報活用基礎、インテリジェント制御特論、メカトロニクス I、システム工学実験 II
2018 年度	システム工学実験 I、情報活用基礎、インテリジェント制御特論、システム工学実験 II、メカトロニクス I

【研究活動】

少子高齢化が進行し、労働力人口が減少する近年、人による作業を支援したり、代替したりすることができる高度なメカトロニクスシステムの研究・開発が必要とされている。メカトロニクスシステムを駆動するための、空気や水の圧力を利用したフルードパワーアクチュエータは、高い安全性を備えており、特に人との相互作用を伴う装置等に適する。そこで、フルードパワーアクチュエータで駆動されるウェアラブルパワーアシスト装置の開発、その制御システムの開発、および関連技術としてモデリング技術やセンシング技術等の研究を推進してきた。研究を遂行する中で得られた成果は、随時学会等で発表を行った。

1. Takahiro Kosaki and Shigang Li, A Water-Hydraulic Upper-Limb Assistive Exoskeleton System with Displacement Estimation, Journal of Robotics and Mechatronics, Vol. 32, No. 1, pp. 149-156, 2020

2. Le Wang, Yuhao Shan, Shigang Li, and Takahiro Kosaki, Estimating Pose of Omnidirectional Camera by Convolutional Neural Network, IEEE Global Conference on Consumer Electronics, pp.149-156, 2019
3. Yuta Kawahara, Takahiro Kosaki, and Shigang Li, Control of a Water-Hydraulic Artificial Muscle Actuator Using a Hysteresis Model Based on Least Squares Support Vector Machines, Proc. of the SICE Annual Conference, pp.1020-1023, 2019
4. Anna Tochiki, Takahiro Kosaki, and Shigang Li, Classification of Elbow Motion Based on Mechanomyogram Signals Using Discriminant Analysis Approaches, Proc. of the SICE Annual Conference, pp.689-694, 2019
5. Shigang Li, Xiaowei Wang, and Takahiro Kosaki, Computation of Homography between a Spherical Image and a Perspective Image, Proc. of the 14th IEEE International Conference on Automation Science and Engineering, pp.689-694, 2018
6. 杉野詠一, 小寄貴弘, 高橋雄三, 李仕剛, 重心移動を考慮した空気圧駆動式下肢用パワーアシスト装置の制御, 日本機械学会論文集, Vol.84, No.862, pp.689-694, 2018
7. Takahiro Kosaki, Anna Tochiki, Shigang Li, Rihito Kanazawa, Torque Estimation of Elbow Joint Using a Mechanomyogram Signal Based Biomechanical Model, Proc. of 12th France-Japan and 10th Europe-Asia Congress on Mechatronics, pp.254-259, 2018
8. Shoji Matsuo, Shigang Li, Jianfeng Li, Ikuhisa Mitsugami, and Takahiro Kosaki, Auto-estimation of Relative Orientation Between a Roof-Mounted Spherical Camera and a Vehicle Based on Full-View SLAM, Proc. of 2018 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics, pp.254-259, 2018

他 10 件

【社会活動】

産学連携研究発表会、市役所での地域貢献事業発表といった、特に地域社会に研究成果を公表する定例行事に出展し、研究活動についての理解を求めた。また、オープンキャンパスへの出展、高校での模擬授業も行った。特に、2019年度は、社会人を対象とした教育プログラム enPiT、海外学術交流協定校の中国西南大学と共同開催した IWEIC2019 に協力した。

2019年11月	IWEIC2019
2019年7月	高校模擬授業
2019年4月-	enPiT
2018年	学生安全技術デザインコンペティション参加

氏名	小作 敏晴
職位	助教
研究分野	流体工学、機械力学・制御
研究キーワード	流体機械、メカトロニクス

教育活動としては、主に演習・実験科目の授業を担当している。その多くが必修科目で、特に情報科学部の全学科の2年生と学生実験で接するため、レポートの評価については常に公平性を保ち、再提出が必要な学生の指導については担当教員間で情報を共有し、学生が合格点に達するよう細心の注意を払い、時間をかけて対応している。研究活動としては、エネルギー変換、特に自然エネルギーの有効利用に関心があり、それらに関するテーマが中心となっている。また、メカトロニクス、制御理論、深層学習の応用研究も行っている。社会活動については、該当期間内に大きな活動はないが、今後機会があれば積極的に参加する所存である。

【教育活動】

「3学部合同基礎演習」では、学部の異なる学生が受講するという特性を活かすべく、グループ発表、討論などを通して、学生の主体的行動力の向上に努めた。「情報科学基礎実験」では、一変量データの整理および統計的推測の理解を目的として、試料の質量測定、乱数生成、計算機による標準実験を担当した。「システム工学実験 I, II」では、移動ロボットによるハードウェア・ソフトウェア実験の中で、キーボードによる遠隔操作を実現するプロセス間通信プログラムの実験を担当した。「外書講読演習 I」では、メカトロニクスに関する英語論文の和訳、図表の説明を通して、学生の技術英語読解力およびメカトロニクスの基礎の習得に努めた。

2019 年度	システム工学実験 I、3学部合同基礎演習、メカトロニクス II、地域課題演習、システム工学実験 II、外書講読演習 I、情報科学基礎実験 β
2018 年度	システム工学実験 I、メカトロニクス II、3学部合同基礎演習、システム工学実験 II、外書講読演習 I、情報科学基礎実験 β

【研究活動】

「エネルギー変換」に関する研究として、「垂直軸形可変ピッチ風車」と呼んでいる風力タービンの研究開発を行っている。実験用の風車を設計・製作し、風洞実験を実施した結果、提案風車が高効率であることを実証した。また、スーパーコンピュータによるシミュレーションを実施し、数値解析的に検証した。これらの成果を論文としてまとめ公表した。今後、実用化に向けて、実験および数値解析の両面から研究開発を進めていく所存である。また、「空気噴流による物体操作」の共同研究では、流体工学に関する技術支援を行っている。さらに、「メカトロニクス」関連研究として、倒立振り子ロボットを利用した非線形制御の研究を行い、一定の成果を得た。

1. 小作敏晴, 加瀬篤志, 川口清司, 電動式可変ピッチ機構を有する小型垂直軸風車の二次元非定常流れ解析, ターボ機械, Vol. 47, No. 4, pp. 238-249, 2019

2. 小作敏晴, 厚海慶太, 加瀬篤志, 川口清司, 電動式可変ピッチ機構による小型垂直軸風車の高効率化に関する実験的研究, ターボ機械, Vol. 46, No. 6, pp. 328-358, 2018

【社会活動】

現在、公表できる活動歴はないが、今後機会があれば積極的に活動する所存である。

2018年4月-	ターボ機械協会
2009年8月-	計測自動制御学会
2008年3月-	IEEE
1998年6月-	日本フルードパワーシステム学会
1990年6月-	日本機械学会

氏名	児島 彰
職位	助教
研究分野	計算機システム、高性能計算、ソフトウェア
研究キーワード	コンパイラ、OS、システムソフトウェア、計算機アーキテクチャ、リコンフィギュラブルシステム

実際に動作するもののシステム開発をすることを活動のテーマとして、研究活動、教育活動、社会活動を行っている。ハードウェアとソフトウェアの協調動作するシステム開発に興味があり、特に再構成デバイス FPGA を使ったシステムや組み込みシステムの研究・開発を中心に活動を行っている。最近では機械学習による物体検出技術を導入したドローンや自動運転の組み込みシステムの研究・開発を行っている。これらの組み込みシステムの性能向上には、FPGA によるハードウェア回路で実現する並列化技術を用いている。FPGA の設計技術の向上のために FPGA 設計コンテストなどにも積極的に参加している。

【教育活動】

授業としては、情報工学実験 I・II、基礎実験 α 、コンピュータ・アーキテクチャ I を担当している。

情報工学実験 I・II では、担当者で取り決めた組み込みシステムとネットワークの教育カリキュラムに対応した。実験に使用するロボットカーのハードウェアの開発を担当した。実験の実施にあたっては、日々、学生が故障させるロボットカーの修理・メンテナンスを行っている。

基礎実験 α では、2019 年度までは、論理回路の設計・実装を主に担当してきた。

コンピュータアーキテクチャ I では、CAD を使用したハードウェア記述言語による論理回路設計と、シミュレータを使ったアセンブリプログラミングを含む授業を実施している。

2019 年度	基礎実験 α 、情報工学実験 I、情報工学実験 II、コンピュータアーキテクチャ I
2018 年度	基礎実験 α 、情報工学実験 I、情報工学実験 II、コンピュータアーキテクチャ I

【研究活動】

ハードウェアの論理回路情報に変更可能な再構成デバイス FPGA を使ったシステムを中心に研究活動を行っている。FPGA を使った回路シミュレータの共同研究に参加し、C 言語でハードウェア設計が可能な高位合成ツールを使った設計の導入を主導し、実時間シミュレータの開発を行っている。

機械学習による物体検出技術を使ったシステムの研究も行っている。ドローンの自動操縦と物体検出技術を組み合わせた人搜索システムを研究・開発している。自動運転用の物体検出技術を FPGA を用いた組み込みシステムとし実現する研究も行っている。実際に動作するロボットカーを設計・開発し、国際学会の HEART2019 と FPT2019 での FPGA 設計コンテストに参加して準優勝を受賞した。

1. Akira Kojima, Yuya Osawa, Design and Implementation of Autonomous Driving Robot Car using SoC FPGA, 2019 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT), pp.441-444, 2019.
2. Akira Kojima, Yohei Nose, Implementation of Autonomous FPGA Robot Car, Proc. 2019 International Symposium on Highly-Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies, 2019.
3. 平本 和樹, 児島 彰, 窪田 昌史, 弘中 哲夫, 中村 諭, バイポーラトランジスタとダイオードを含む電子回路に対応したアナログインサーキットエミュレーションシステムの FPGA 実装および評価, 第 21 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム(HISS), pp.144-147, 2019.
4. 平本 和樹, 植田 悠暉, 児島 彰, 弘中 哲夫, 高位合成を用いたリアルタイムアナログ信号処理のための FPGA フレームワークの実装, 第 70 回 電気・情報関連学会中国支部連合大会, Vol.R19-25-01-01, 2019.
5. Ryota Miyauchi, Akira Kojima, Hideyuki Kawabata, and Tetsuo Hironaka, A Study of a Parallel Architecture for Accelerating Batch-Learning Self-Organizing Map by using Dedicated Hardware, 2019 34th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC), pp.104-107, 2019.
6. Yohei Nose, Akira Kojima, Hideyuki Kawabata, and Tetsuo Hironaka, A Study on a Lane Keeping System using CNN for Online Learning of Steering Control from Real Time Images, 2019 34th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC), pp.499-502, 2019.
7. Akira Kojima, Yohei Nose, Development of an Autonomous Driving Robot Car using FPGA, 2018 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT), pp.411-414, 2018.
8. 児島彰, 能勢陽平, FPGA を用いた自動運転ロボットカーの開発, 第 8 回相磯秀夫杯 FPGA デザインコンテスト 論文集, No.1, 2018.
9. 平本 和樹, 児島 彰, 窪田 昌史, 弘中 哲夫, 中村 諭, 安藤 真人, 電子回路基板の開発を対象とした低周波数回路の事前評価ツールの FPGA 実装, 信学技報 RECONF2018-24, Vol.118, No.215, pp.29-34, 2018.
10. Kazuki Hiramoto, Akira Kojima, Atsushi Kubota, Tetsuo Hironaka, Satoshi Nakamura, Masato Andoh, FPGA Implementation of High-Performance SPICE Simulator for Small-Scale Electronic Circuits, Proc. of the 33rd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2018), pp.317-320, 2018.
11. Presentation, Kazuki Hiramoto, Akira Kojima, Atsushi Kubota, Tetsuo Hironaka, Satoshi Nakamura, FPGA Implementation of Real-Time Analog In-Circuit Emulation System for Electronic Circuit Boards, The International Conference for High Performance Computing, Networking, Storage and Analysis (SC19), Nov. 2019.

12. FPT' 19 FPGA Design Competition 2nd Place, The 2019 International Conference on Field-Programmable Technology, 2019.
13. HERAT2019 FPGA Design Competition 2nd Place, The 2019 International Symposium on Highly-Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies, 2019.
14. FPT' 18 FPGA Design Competition 2nd Place, The 2018 International Conference on Field-Programmable Technology, 2018.
15. 第8回 相磯秀夫杯 FPGA デザインコンテスト 2位, 電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会, 2018.

【社会活動】

高校生を対象とした夏休みの期間に自由研究の指導を行ってきた。これまでは、「ネットワーク対応の組み込みマイコンをプログラミングしてみよう (IoT プログラミング入門)」というテーマで実施した。

社会人向けの講座である、enPiT-everi (社会人リカレント教育プログラム) で、「画像処理を用いた自律走行演習」の担当をした。リアルタイム画像処理による自動運転を独自設計のロボットカーを使って実施した。講座で使用するロボットカーには、SoC FPGA を搭載したものを独自に設計した。

大学外では、広島市ハング・パラグライディング連盟 (広島市スポーツ協会加盟団体) の理事を務めている。競技委員長として競技大会を開催した。また、風向風速計サーバの開発・設置・メンテナンスを行っている。

2003年2月-	風向風速計サーバの設計、設置、維持管理
2000年-	広島市ハンググライディング連盟 理事

氏名	小林 真
職位	助教
研究分野	情報ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	無線ネットワーク

私は、2019年4月にモニタリングネットワーク研究室の助教として着任した。着任以来、教育活動、研究活動、社会活動に従事してきた。大学教員としても初めての年であったため、手探り状態ではあったが、常に一所懸命取り組んだ。さらに、取り組みながら、改善していくことにも努めた。教育活動では、講義・研究室の中で学生との双方向のコミュニケーションの時間を用意する事に努めた。この中で特に、研究活動においては主に無線ネットワークの高度化に関する研究に従事した。社会活動として、広島市立大学が主催する学外発表に複数参加するとともに、学外セミナー講師などに従事した。

【教育活動】

テクニカル・コミュニケーション演習、テクニカル・リーディング演習、地域実践演習、情報工学実験 II を担当した。これらの科目は演習・実験形式の科目である事から、学生と直接やりとりする機会が多い。やりとりの中で、学生の質問に対して真摯に答えるとともに、学生の理解状況を把握するように努めた。具体的に、テクニカル・コミュニケーション演習やテクニカル・リーディング演習では、学生が英語への抵抗感が無くなるような工夫を行った。地域実践演習では、学生達が主体的に取り組めるように工夫した。その結果として、地域実践演習で取り組んだ成果を、学生達が大学説明会においてポスター発表を行った。

2019年度	テクニカル・コミュニケーション演習、地域実践演習、テクニカル・リーディング演習、情報工学実験 II
--------	---

【研究活動】

おもに、科研費研究課題に関連する無線ネットワークおよび電磁波に関する研究に従事した。具体的には、無線センサネットワークの高信頼化を目的とした送信スケジュール制御、送受信基地局制御、地中での電波伝搬に関する研究に取り組んだ。研究成果は外部公開を行った。具体的には、国内学会・国際会議において、学生や私が第一著者・発表者として公表した。さらに、研究室で取り組んでいる土砂災害モニタリングネットワークおよび災害通知システムに関する研究、オーロラ画像と地磁気の関係に関する研究にも従事した。

1. Chien-Hao Lee, Makoto Kobayashi, Hangu-Yu Wei, Shunsuke Saruwatari, and Takashi Watanabe, Adaptive Resource Allocation for ICIC in Downlink NOMA Systems, Proceedings of IEEE 90th Vehicular Technology Conference (IEEE VTC'19-Fall), pp. 1-6, 2019
2. 研究発表, 杉原 聖信, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 山内 正敏, 2 地点観測データを用いたオーロラ活動と地磁気変動との比較, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月

3. 研究発表, 秦 昂平, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 電波観測システムの高信頼化に関する基礎検討, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
4. 研究発表, 増長 遥, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 電波環境におけるVHF帯ノイズと湿度の関係の基礎調査, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
5. 研究発表, 堀田 禎之介, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 920MHz帯無線を用いたヒト室内移動経路推定手法の基礎検討, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
6. 研究発表, 岡本 真美, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 920MHz帯電波を用いた土壌水分量の推定手法の基礎検討, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
7. 研究発表, 徳本 敬祐, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, スマートフォン連携型の土砂災害関連情報TV通知システムの開発, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
8. 研究発表, 出原 聡, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 土砂災害前兆検知のためのLPWA送信スケジュールの基礎検討, 電子情報通信学会総合大会, 2020年3月
9. 研究発表, 臼井 拓也, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 土砂災害センシングネットワークのための山間地における920MHz帯電波伝搬特性の評価, 電子情報通信学会安全・安心な生活とICT(ICTSSL)研究会, 2020年1月
10. 研究発表, Makoto Kobayashi, Koichi Shin, Masahiro Nishi, Development of Monitoring Techniques in the Grass-root Landslide Disaster Information Distribution System, AGU Fall Meeting 2019, 2019年12月
11. 研究発表, Kiyonobu, Sugihara, Makoto Kobayashi, Koichi Shin, Masahiro Nishi, Time-varying Feature Quantities of Aurora Activities by Image Analysis based on HLS Values, AGU Fall Meeting 2019, 2019年12月
12. 小林 真, 猿渡 俊介, 実習・GNU Radioで始めるSDR入門, CQエレクトロニクス・セミナー, 2019年8月
13. 研究発表, 川崎 慈英, 小林 真, 猿渡 俊介, 渡辺 尚, NOMAを用いたBackscatter通信型センサネットワークの検討, マルチメディア, 分散協調とモバイルシンポジウム 2019 (DICO'19), 2019年7月
14. 研究発表, Lu Yu-jun, 小林 真, 藤橋 卓也, 猿渡 俊介, 渡辺 尚, ミリ波帯における360度映像伝送に関する検討, マルチメディア, 分散協調とモバイルシンポジウム 2019 (DICO'19), 2019年7月
15. 情報処理学会 マルチメディア・分散・協調とモバイル(DICOM2019)シンポジウム 優秀論文賞, 2019

【社会活動】

広島市立大学値域貢献事業発表会、産学連携研究発表会、オープンキャンパスにモニタリングネットワーク研究室の一員として参加した。学生が主体的に発表する事を促して、学外の方に研究室の取り組みが分かるように努めた。さらに、国内学会・海外学会からの査読の依頼や、座長の依頼は、2019年度は全て引き受けた。またCQ出版で行われたセミナーの講師に従事した。

2019年-	AGU
--------	-----

2015 年-	電子情報通信学会
2014 年-	IEEE
2012 年-	情報処理学会

氏名	齋藤 徹
職位	講師
研究分野	バイオ情報学、計算化学、生物無機化学
研究キーワード	金属酵素、酸化反応、強相関電子系、半経験的分子軌道法、多階層シミュレーション

2018、2019年度は研究に最も力点を置いた活動を行い、教育活動、社会活動と続く。研究については【研究活動】で述べるように、国際共同研究の開拓も含め首尾よく進めることができた。

【教育活動】の研究指導では、直接指導していた学生が2019年度の優秀卒業論文賞を受賞し、大きな励みとなった。2019年度から講師に昇任し、教育活動（特に講義）に注力した。【社会活動】については、これまでと同様、オープンキャンパスや地域貢献事業発表に参加した。高校への模擬授業、ハンズオンチュートリアル、公開講座の講師も率先して引き受けるなど、積極的に取り組んだ。

【教育活動】

研究に関する教育では、論理的な文章を書く能力、およびわかりやすく伝える能力を伸ばすことに注力した。2019年度に直接指導した4年生2名が十分な成果をあげたため、学会発表の機会を提供した。担当する講義、演習においては、出席の徹底と授業外学習の定着を図った。外書講読演習では、英作文やディクテーションを含む小テストを毎回実施した。量子力学では、課題の解説を丁寧に行ったほか、授業中でも気兼ねなく質問できる雰囲気作りに努めた。大学院生向けの生物情報処理特論では、医用情報科学の柱となる自然科学の最先端の研究内容を紹介し、広い視野を涵養することに努めた。

2019年度	e-ラーニング英語 I、量子・統計力学、外書講読演習 I、生物情報処理特論、情報活用基礎、地域課題演習、医用情報科学実験 II、外書講読演習 II、物理・化学実験
2018年度	情報活用基礎、外書講読演習 I、e-ラーニング英語 I、生物情報処理特論、医用情報科学実験 II、外書講読演習 II、物理・化学実験

【研究活動】

医薬品開発における時間と費用の削減を目指し、2016年度から開発を行っている高速計算手法を薬物代謝（酸化）部位予測に適用した。また以前より開発を行ってきた高精度計算手法と高速計算手法を組み合わせることで、比較的サイズの大きな分子を高精度かつ効率良く計算できることを示した。研究成果は学術論文誌、国内外の学会（招待講演）で発表し、好評を得た。2019年度から量子古典ハイブリッド分子動力学計算を用いて、金属酵素のような巨大かつ複雑な系の化学反応や金属含有抗がん剤の研究にも着手している。これらの計算技術を積極的に宣伝することで、国内外の共同研究先を増やすことに成功した。

1. T. Saito*, H. Kambara, Y. Takano, Quantitative Assessment of Reparameterized PM6 (rPM6) for Hydrogen Abstraction Reactions, *Molecular Physics*, 2019
2. T. Saito*, Y. Takano, Singlet-Triplet Energy Gaps in Binuclear Copper Complexes and Organic Diradicals by Approximate Spin Projected Spin-unrestricted Coupled Cluster Method, *Chemistry Letters*, Vol. 48, pp.1441-1444, 2019
3. T. Saito*, M. Fujiwara, Y. Takano, Quantitative Assessment of rPM6 for Fluorine- and Chlorine-Containing Metal Complexes: Comparison with Experimental, First-Principles, and Other Semiempirical Results, *Molecules*, Vol. 23, pp. 3332-1-3332-17, 2018
4. T. Saito*, Y. Takano, Transition State Search Using rPM6: Iron- and Manganese-catalyzed Oxidation Reactions as a Test Case, *Bulletin of the Chemical Society of Japan*, Vol. 91, pp. 1377-1389, 2018
5. Y. Morimoto*, T. Saito, et al. A Bis(μ -oxido)dinickel(III) Complex with a Triplet Ground State, *Angewandte Chemie International Edition*, Vol. 57, pp. 7640-7643, 2018
6. T. Saito*, Y. Takano, rPM6 Parameters for Phosphorous and Sulfur Containing Open-Shell Molecules, *Molecular Physics*, Vol. 116, pp. 602-610, 2018
7. Invited talk, Semiempirical Quantum Chemical Calculations on Quasi-Degenerate Systems, Symposium on Electronic Structure and Dynamics of Complex Systems, 2019年4月
8. 特別講演・招待講演, 計算化学による金属酵素と生体模倣触媒の研究, 2018年度日本生物物理学会北海道支部例会, 2019年3月
9. Invited talk, Applications of rPM6 to Catalytic Oxidation Reactions, International Congress on Pure & Applied Chemistry Langkawi, 2018年10月

他 20 件

【社会活動】

ひろしま医工学スクールのハンズオンチュートリアル「コンピュータで薬を設計してみよう」の主講師を務めた(受講生: 高校生2名、大学生5名)。広島県立広島皆実高等学校の理系の高校2年生に自然科学と情報科学とを融合させた研究の基礎から実例までを講義した(受講生20名)。市民向けの公開講座において、「コンピュータによる医薬品、工業原料の設計」という題目で講演を行った(参加者17名)。「最先端の研究の話を知ることができて良かった」など満足度が90%を超える好評を得た。

2019年11月	情報科学部公開講座 講演会「コンピュータによる医薬品、工業原料の設計」
2019年7月	模擬授業「コンピュータをつかった化学実験」広島皆実高等学校
2019年3月	ひろしま医工学スクール ハンズオンチュートリアル「コンピュータで薬を設計してみよう」主講師

他 4 件

氏名	齋藤 夏雄
職位	准教授
研究分野	代数幾何学
研究キーワード	代数多様体、正標数

本学に務める教員として、専門とする数学を通して本学および社会にどのような貢献ができるかということを常に意識して諸活動を行いたいと考えている。数学は情報科学分野における基礎となるものであり、ひいては理学・工学、さらには人間のさまざまな社会的活動の土台をなすものである。自身がそうした学問で人間社会の維持・発展に寄与できる立場にあることを自覚し、身につけた知見を教育活動や研究活動を通じて社会に還元することを、基本的な活動テーマとしたい。活動に当たって中心となるのは教育と研究であるが、それだけにとどまらず、学内運営や社会活動についても積極的に関わっていかなければいけないと考えている。

【教育活動】

直近2年間においては、1年生向け講義である「解析学 I」および「同演習」、「線形代数学 I」および「同演習」、「線形代数学 II」を担当したほか、教職科目である「教科教育法（数学） I」および「同 II」、さらに大学院生向け講義として「知能数理特論 B」を受け持った。「知能数理特論 B」においては、楕円曲線に関する基礎的な理論、さらにその応用である楕円曲線暗号の仕組みなどについて解説した。講義にあたっては独りよがりで一方向的な授業に陥らないよう、レポート提出などを通じて学生の反応や理解度を把握するよう努めるほか、1年生向け科目の演習では答案の採点や問題解説において学生一人一人に合わせた指導をするよう心がけた。

2019 年度	線形代数学 I、解析学 I、線形代数学 I 演習、解析学 I 演習、教科教育法（数学） I、知能数理特論 B、線形代数学 II、教科教育法（数学） II
2018 年度	線形代数学 I、解析学 I、線形代数学 I 演習、解析学 I 演習、教科教育法（数学） I、知能数理特論 B、線形代数学 II、教科教育法（数学） II

【研究活動】

代数多様体についての研究を続けている。研究の大きな目的は、正標数の代数的閉体上定義された代数多様体について、特に正標数独特の性質や構造を持った多様体を分類し特徴づけることで、複素数体上の代数幾何学との相違を幾何的側面から明らかにすることである。代数幾何学における重要な多様体であるファノ多様体に対して正標数特有の病的現象を持ったものを抽出する大域的研究と、低標数における特異点の特殊な構造を調べる局所的研究を並行して行っている。この数年、大域的研究としては F 分裂性と呼ばれる性質を持たないデル・ペッツォ曲面の特徴付けについて調べ、次数 2 および 1 の曲面に対して進展を得ることができた。また局所的研究として、有理二重点の変形空間の研究も行い、その構造を解析した。

1. 齋藤 夏雄, F 分裂しない del Pezzo 曲面について, 「射影多様体の幾何とその周辺 2019」報告集, 2020

2. 研究発表, F 分裂しない del Pezzo 曲面とその自己同型群, 第 7 回代数幾何学研究集会—宇部—, 2020 年 1 月
3. 研究発表, F 分裂しない del Pezzo 曲面の探究, 研究集会「ファノ多様体及び関連する代数幾何学」, 2019 年 11 月
4. 研究発表, F 分裂しない del Pezzo 曲面について, 研究集会「射影多様体の幾何とその周辺 2019」, 2019 年 11 月
5. Presentation, Fano varieties in positive characteristic and their F-splittings, Hakodate workshop on arithmetic geometry, 2018 年 12 月

【社会活動】

2018 年度は、日本評論社発行の雑誌「数学セミナー」誌上において連載記事を担当した。これはその前年度から 2 年にわたって執筆したものである。連載は 2018 年度で終了したが、2 年間の内容をまとめた単行本を発行することになり、現在準備を進めている。

2014 年 9 月-	数学教育学会
2002 年-	日本数学会

氏名	齊藤 充行
職位	助教
研究分野	制御工学、制御・システム工学
研究キーワード	制御理論、モデルベース制御、自動運転、観測誤差、モデル化誤差、車両モデル、最適制御

教育に関しては、2018年度は学生自身で考える力の育成とプレゼンテーション能力の向上を目標に掲げて研究指導をおこないました。2019年度は、2018年度の目標に加えて大学院生の英語力向上も目標に掲げて研究指導をおこないました。研究に関しては、2018年度と2019年度とも、学術雑誌と国際会議論文を合わせて、1編以上の投稿を数値目標に研究に取り組みました。2018年度は、新規性に重点を置いて研究活動をおこない、3編の論文投稿をおこない1編が採択されました。2019年度は、より実用的な観点から研究活動をおこない、1件の国際会議発表と3編の論文投稿をおこないました。社会活動については、これまでと同様、大学イベントへの参加、学生ボランティアのアドバイザー等、目標に掲げ、これまで通りの活動ができたと思います。

【教育活動】

2018年度は大学院生3名、卒論生3名に対して研究指導をおこないました。2018年度は学生自身で考える力とプレゼンテーション能力向上を目指して、週2回のゼミの内1回をこれまで通りの研究報告ゼミ、もう1回のゼミを研究相談ゼミに変え、学生自身でわからないことを明確にできるように工夫しました。さらに月1回の研究発表をおこない、プレゼンテーション法を学習する機会を増やしました。その結果学会で2件の賞を受賞することができました。また新しい試みとしてSSTDC（学生安全技術デザインコンペティション）の日本予選に出場し、自動運転車両の衝突被害軽減傾斜シートを提案しました。私の専門分野を超えるテーマでしたので、ほかの研究室の先生方にも沢山の意見を聞きながら学生と一緒に研究遂行とスケールモデルの制作をおこないました。初出場ながら決勝に進出し、優秀賞をいただくことができました。2019年度は大学院生4名、卒論生1名に対して研究指導をおこないました。2019年度は、2018年度に学生の国際会議発表がおこなえていなかったため、週1回の英語プレゼンテーションゼミを追加し、英語力向上を目指しました。その成果として1件の国際会議発表と3件の国内学会英語セッションで研究発表をおこなうことができました。2019年度もSSTDCの日本予選に出場し、昨年度ネックとなっていたスケールモデルの制作に早い時期から取りかかり昨年度以上の評価をいただきましたが、予選敗退となりました。

講義では、1年生対象のプログラミングⅠ演習では、学生からの質問に対し、その回答をするのではなく、教科書のどの部分にヒントが書かれているのかを指導するように心がけました。2017年度から、3年生対象の外書講読演習Ⅰと大学院生対象のシステム推定学特論で制御基礎だけではなく自動車制御技術でどのように応用されているかなど実応用例を紹介しながら講義をおこなうように授業を改善し、2018年度と2019年度もそのことを継続しました。

2019年度	プログラミングⅠ演習（A～Cクラス）、外書講読演習Ⅱ（知的制御シス
--------	-----------------------------------

	テム研究室)、システム推定学特論、外書講読演習 I、システム工学実験 II、技術文書作成法、卒業研究 I・II
2018 年度	プログラミング I 演習 (A~C クラス)、外書講読演習 II (知的制御システム研究室)、システム推定学特論、外書講読演習 I、システム工学実験 II、技術文書作成法、地域課題演習、卒業研究 I・II

【研究活動】

毎年数値目標として、学術雑誌と国際会議論文を合わせて、1 編以上の投稿を目標とし、学術雑誌で投稿論文が採択されるように取り組んでおります。2018 年度は、修論テーマとして、新規性に重点を置いて様々な雑音にロバストな最適制御系の設計法と車両にかかる様々な非線形特性を前輪舵角のズレとして表現し、そのズレをニューラルネットワークで推定する方法についての研究指導および研究活動をおこないました。その結果として、私が第 1 著者の論文を制御関連学会に 1 編投稿し、学生ファーストの論文を自動車関連学会に 1 編投稿、私が第 2 著者の論文を電気関連学会に 1 編投稿することができました。投稿論文のうち私が第 2 著者の論文 1 編が掲載されました。2019 年度は、2018 年度に採択されなかった論文で指摘されていた、実用的観点に重点をおき、例題の見直し、シミュレーション環境（特に車両制御と自動運転に対して）を見直し研究活動をおこないました。結果として、学生ファーストの国際会議発表を 1 件、私が第 1 著者の論文を制御関連学会に 2 編投稿し、学生ファーストの論文を電気関連学会共通英語論文誌に 1 編投稿することができました。2020 年度は、学術雑誌 1 編以上の採択を数値目標に取り組みたいと思います。

1. 小林康秀・齊藤充行・網本勇樹・脇田航, SNR 変動を考慮したパラメータが連続的に変動するシステムの予測法, 電気学会論文誌 C, Vol. 138, No. 9, pp. 1075-1081, 2018
2. 研究発表, 山内陽平 吉田博一 齊藤充行, 道路形状や走行状況の変動に応じた車両モデルの提案, 計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 2019, 2019 年 11 月
3. 研究発表, 小林雅人 齊藤充行, 状態観測雑音を考慮した確率的 LQ 問題の可解条件, 計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 2019, 2019 年 11 月
4. 研究発表, 丸橋悠人 齊藤充行, 出力フィードバック制御における観測雑音の影響評価の自動操舵制御への適用, 計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 2019, 2019 年 11 月
5. Presentation, Yamauchi, Yohei/ Saito, Mitsuyuki/ Ono, Takahiko, Adaptive Identification Method of Vehicle Modeling According to the Fluctuation of Road and Running Situation in Autonomous Driving, SICE Annual Conference 2019, 2019 年 9 月
6. Presentation, Takumi Haida, Mitsuyuki Saito, Takahiko Ono, Solvability Condition of Stochastic Output Feedback Control of Evaluating Output Power and Control Input, 2019 Annual Conference of Electronics, Information and Systems Society, IEE of Japan, 2019 年 9 月

7. Presentation, Yohei Yamauchi, Mitsuyuki Saito, Takahiko Ono, Car model corresponding to longitudinal direction center of gravity position error of linear single-track model on slope, 2019 Annual Conference of Electronics, Information and Systems Society, IEE of Japan, 2019年9月
8. Presentation, Yuto Maruhashi, Mitsuyuki Saito, Takahiko Ono, Solvability Condition of Output Feedback of Assuming State-Observation Noise and Evaluating Only the Output Signal, 2019 Annual Conference of Electronics, Information and Systems Society, IEE of Japan, 2019年9月
9. 研究発表, 小林雅人(院生)・齊藤充行・小野貴彦, ループリック評価に基づいた学生による授業評価アンケートの提案, 第48回日本産業技術教育学会中国支部大会, 2019年6月
10. 研究発表, 三浦大輝, 齊藤充行, 脇田航, 小林康秀, ニューラルネットワークを用いたモデル化誤差推定車両モデルの推定精度の向上, 第27回計測自動制御学会中国支部学術講演会, 2018年12月
11. 研究発表, 三浦大輝・齊藤充行・脇田航・小林康秀, モデル化誤差を考慮した車両モデルの提案, 平成30年度(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018年10月
12. 研究発表, 灰田拓未・齊藤充行・脇田航・小林康秀, 出力量を評価する確率的出力フィードバック制御の可解条件, 平成30年度(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018年10月
13. 研究発表, 灰田拓未・齊藤充行・脇田航・小林康秀, 出力量と操作量を評価する出力フィードバック制御の可解条件, 平成30年電気学会産業応用部門大会, 2018年8月
14. 研究発表, 三浦大輝・齊藤充行・脇田航・小林康秀, 車両重心点位置のズレを考慮した車両モデルの提案, 平成30年電気学会産業応用部門大会, 2018年8月

【社会活動】

2018年度は、オープンキャンパスで高校生を対象に私の研究グループが取り組んでいます。雨や雪などの視界が悪く滑りやすい路面状況における運転支援システムと自動運転システムについて研究紹介をおこない、実際にドライビングシミュレータで体験してもらいました。産学連携研究発表会ではモデル化誤差をリアルタイムに補正できる車両モデルや車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システムなど自動車関連のテーマ5件の研究紹介をおこないました。地域貢献事業発表会では、様々な外乱にロバストな最適制御系の設計法や道路形状や走行状況に応じた車両モデルのリアルタイムモデリング法、車載センサの一部が故障した場合の自動運転システムの提案の3件の研究紹介をおこないました。2019年度は、オープンキャンパスで2018年度と同様に我々の取り組んでいる研究紹介とドライビングシミュレータを使った体験をおこない、さらにロボットカーを使った実演もおこないました。祇園北高校研究体験ではオープンキャンパスの内容に加えて、最近第3次ブームになっている玩具のミニ四駆にAIを搭載したAIミニ四駆を使った実演もおこないました。産学連携研究発表会では自動運転に関する研究テーマ3件の研究紹介、地域貢献事業発表会では2018年度のテーマに車両情報を推定する方法を加えた4件の研究紹介をおこないました。それ以外には、2018年度に2007年から続けております学生ボランティア

のパソコン相談室の運営や広報、受講者への指導方法等のアドバイザーをおこないました。学外活動としましては、2018年度と2019年度に自動車メーカーやその関連企業のフレッシュマンを対象に毎年開催されております自動車工学基礎講座でセンサ故障等が原因で車両情報の一部が観測できない場合の車両の制御方法に関する研究展示をおこないました。

2019年11月	「道路形状や走行状況の変動に応じた車両モデルの適応同定法」 広島市立大学の地域貢献事業発表会 2019, 広島市立大学
2019年11月	「自動運転時のパラメータ誤差にも対応できるフィルタの設計法」 広島市立大学の地域貢献事業発表会 2019, 広島市立大学
2019年11月	「出力量と操作量を評価する最適出力フィードバック制御系の設計法」 広島市立大学の地域貢献事業発表会 2019, 広島市立大学
2019年11月	「車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システム」 広島市立大学の地域貢献事業発表会 2019, 広島市立大学
2019年9月	「道路形状や走行状況の変動に応じた車両走行モデルの適応同定法」 広島市立大学産学連携研究発表会 2019～ITの力で未来を切り拓く～, 広島市立大学社会連携センター
2019年9月	「車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システム」 広島市立大学産学連携研究発表会 2019～ITの力で未来を切り拓く～, 広島市立大学社会連携センター
2019年9月	「様々な雑音にロバストな最適出力フィードバック制御系の設計」 広島市立大学産学連携研究発表会 2019～ITの力で未来を切り拓く～, 広島市立大学社会連携センター
2019年8月	オープンキャンパス 2019 (研究紹介)
2019年7月	「センサ故障等が原因で車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システム」 自動車工学基礎講座 2019, (公財)ひろしま産業振興機構カーテクノロジー革新センター
2018年11月	「モデル化誤差を考慮した車両モデルの提案」 2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018年11月	「様々な雑音にロバストな最適出力フィードバック制御系の設計」 2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018年11月	「車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システム」 2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018年9月	「自動カウンターステア制御によるスピン回避システム」 広島市立大学産学連携研究発表会 2018～AI (人工知能) とビッグデータ でできること～, 広島市立大学、広島市
2018年9月	「車両情報の一部が観測できない場合の自動運転システム」 広島市立大学産学連携研究発表会 2018～AI (人工知能) とビッグデー

	タでできること～, 広島市立大学、 広島市
2018年9月	「モデル化誤差を考慮した車両モデルの提案」広島市立大学産学連携研究発表会 2018～AI (人工知能) とビッグデータでできること～, 広島市立大学、 広島市
2018年9月	「後続車両の発進に影響を与えない新しいエコドライブ法」広島市立大学産学連携研究発表会 2018～AI (人工知能) とビッグデータでできること～, 広島市立大学、 広島市
2018年9月	「様々な雑音にロバストな最適出力フィードバック制御系の設計」広島市立大学産学連携研究発表会 2018～AI (人工知能) とビッグデータでできること～, 広島市立大学、 広島市
2018年8月	オープンキャンパス 2018 (研究紹介)
2018年7月	「車載センサの一部が故障した場合のオートパイロットシステム」自動車基礎学講座 2018[広島県の自動車産業を支える技術と研究], (公財) ひろしま産業振興機構カーテクノロジー革新センター

氏名	佐藤 康臣
職位	助教
研究分野	分散協調システム、ソフトウェア
研究キーワード	インターネットコンピューティング

教育活動・研究活動・社会活動の3点に通底する自己の活動テーマとしては、モノづくり、特にコンピュータプログラムの作成ということになる。教育においては、学生に自分が作成したコンピュータプログラムが動作したときの感動を味わってもらいたいと考えている。研究活動においては、理論のみならず、それをプログラムで実際に動かすことで、その効果を実証したいと考えている。社会活動においても、プログラミングやソフトウェア関連の活動を行ってきた。

現在、最も力を入れているのは教育活動である。

【教育活動】

「企業活動とプロジェクトマネジメント」は広島修道大学と結んだ遠隔講義であり、外部講師による講義がメインである。私の役割としては、遠隔講義器材の操作、アンケート票（質問票）による学生と講師のやりとりの仲介などである。

「組込みソフトウェア実装特別演習」「製品企画プロジェクト特論演習」では、Erlang 言語で作成されたプレーキシミュレータを題材に、Erlang 言語によるプログラミングを指導している。

「情報科学基礎実験β-2」では、C言語により回帰分析プログラムを作成させることにより、回帰分析の原理を学習させている。

「システム工学実験」では、Java言語によりロボット操作のためのGUIを作成させることにより、GUIについて学習させている。

卒論指導については、毎年、学部4年生2名に対して「情報推薦」を研究テーマとして指導している。

2019年度	企業活動とプロジェクトマネジメント、システム工学実験、組込みソフトウェア実装特別演習、製品企画プロジェクト特論演習、情報科学基礎実験β-2
2018年度	システム工学実験、企業活動とプロジェクトマネジメント、組込みソフトウェア実装特別演習、製品企画プロジェクト特論演習、情報科学基礎実験β-2

【研究活動】

情報推薦システムに関する研究を行っており、2018年度は(1)「ポスターから得られる印象を考慮した映画推薦システムの提案」、(2)「ユーザの状況に応じた楽曲推薦を目的としたソーシャルデータ分析方法の提案」、2019年度は(3)「評価値と印象を考慮した映画推薦システムの提案」、(4)「類似アーティストとボルダ得点に基づくグループに対する楽曲推薦アルゴリズムの提案」を行った。このうち、(3)(4)についてはプロトタイプシステムを作成している。

これらの研究とも対外発表には至っていないが、今後の実験データの収集により、対外発表が

可能となると考えている。

【社会活動】

2019年度は「enPiT-everi 社会人リカレント教育プログラム」の「関数型言語 Erlang を用いた組込みソフトウェア開発演習」の講師を勤める予定であったが、受講者がおらず、実施できなかった。

1989年-	IEEE
1987年-	情報処理学会
1987年-	電子情報通信学会

氏名	式田 光宏
職位	教授
研究分野	ナノマイクロシステム、医用システム
研究キーワード	MEMS デバイス応用、MEMS (Micro-Electro-Mechanical Systems)、MEMS 医用応用

学際的な教育研究を推進することを目指し、学部教育においては、情報、工学、自然科学における基礎学問を講義した。また、卒論学生および博士前期課程学生に対しては、MEMS 工学を基盤技術とし、これに名古屋大学医学系研究科における動物実験、民間企業との共同研究を加え、分野を超えた教育研究を実施した。研究活動については、国際的な学術雑誌への論文投稿及び国際会議での発表を通じて、研究成果を国際社会に発信した。更に、IET、Elsevier に MDPI を加えた三つの学術洋雑誌にてエディタとして活動するとともに TPC として国際会議に加わった。また国内においては、電気学会、日本機械学会、日本生体医工学会、電子情報通信学会などでの学会活動を通じて社会に貢献した。

【教育活動】

カリキュラム改訂に伴う新たな担当科目（2018 年度後期開講科目：機械工学）を開講した。また、講義理解度の向上を目指して講義内容の一部を改善し、その結果、良好なアンケート結果を得た。研究室配属の学生に対しては、卒業・修士・博士論文研究を通して、研究開発に対する方法論を指導した。具体的には、MEMS 工学を基盤技術とした実験研究を軸とし、これに名古屋大学医学系研究科における動物実験、民間企業との共同研究とを織り交ぜ、分野を超えた教育研究を実施した。また学部学生に対しては国内学会、博士前期課程学生に対しては、国際会議および国内学会などへの参加を通じて、物事を俯瞰的に捉える教育をした。

2019 年度	力学、制御工学、機械工学、バイオメカニクス、医用マイクロ工学
2018 年度	力学、制御工学、機械工学、バイオメカニクス、医用マイクロ工学

【研究活動】

MEMS 技術を基盤としそれを医用へと応用展開した。具体的には、(1)呼吸器系に対する生体情報極限計測技術、(2)マイクロニードルを応用した次世代経皮吸収剤技術、(3)MEMS 技術を用いた集積化フレキシブルセンサシステムに関する研究開発を推進した。また戦略的基盤技術高度化支援事業において、民間企業、名古屋大学医学系研究科と共同で、呼吸情報に基づいたマルチバイタルサイン計測技術開発に取り組み、その実用化を目指した。なお、本事業については 2020 年度に名古屋大学にて臨床実験を実施する予定になっている。得られた研究成果については、国際的学術論文誌：8 編、国際会議論文：16 編、国内学会：22 件、講演：4 件、著書：1 件にて、国内外に向けて広く発信した。

1. ドラッグデリバリーシステムーバイオ医薬品創成に向けた組織、細胞内核送達技術の開発ー，

- シーエムシー出版, 2018, 分担執筆
2. Y. Hasegawa, Y. Yasuda, K. Taniguchi, M. Shikida, Fabrication method with high-density, high-height microneedle using microindentation method for drug delivery system, *Microsystem Technologies*, Vol.26, No.8, pp.765-773, 2019
 3. Y. Maeda, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Energy-less respiration monitoring device based on thermo-sensitive film, *Microsystem Technologies*, Vol.26, No.5, pp.489-497, 2019
 4. T. Fujinori, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Body temperature measurement based on breathing airflow for continuously monitoring patient body condition in disaster, *Microsystem Technologies*, Vol.25, No.2, pp.4313-4321, 2019
 5. 光成勇樹, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 口元気流計測による乳幼児の呼吸心拍一括評価を目指した気管内挿管チューブ実装型流量センサシステムに関する研究, *電気学会論文誌 E (センサ・マイクロマシン部門誌)*, Vol.139, No.7, pp.186-194, 2019
 6. A. Kato, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, A micro-machined flow sensor formed on copper on polyimide substrate and its application to respiration measurement, *Japanese Journal of Applied Physics*, Vol.58, No.SDDL07, pp.186-194, 2019
 7. Y. Hasegawa, Y. Mitsunari, H. Kawaoka, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Analysis of measurement conditions for detecting change in vital signs with catheter flow sensor, *Journal of Micromechanics and Microengineering*, Vol.28, pp.105015 (12pp)-, 2018
 8. C. Okihara, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Development of tube flow sensor by using film transfer technology and its application to in-situ breathing and surface image evaluation in airways, *Microsystem Technologies*, Vol.24, No.8, pp.3417-3424, 2018
 9. Y. Hasegawa, H. Kawaoka, Y. Mitsunari, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Catheter type thermal flow sensor with small footprint for measuring breathing function, *Microsystem Technologies*, Vol.24, No.8, pp.3455-3465, 2018
 10. 若原拓海, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 銅箔製熱式フレキシブル流量センサの開発, 令和2年電気学会全国大会, 2020年3月
 11. 臼井達也, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 触覚センサ付き細径ガイドプローブの開発, 令和2年電気学会全国大会, 2020年3月
 12. H. Noma, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Development of stent flow sensor device evaluating breathing property at airway in experimental animal under free move condition, *IEEE Micro Electro Mechanical Systems Conference*, 2020年1月
 13. 瀧川流成, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 銅張積層板を用いた

- 流路構造一体型 MEMS 流量センサの開発, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
14. 坂本瑞生, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 分離機能の向上を目指した四角錐先端分離型マイクロニードルの開発, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 15. 川本祐士, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 熱式 MEMS 流量センサの呼吸計測応用に関する研究, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 16. 野間颯斗, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 実験動物における気道内流量計測を目的としたステント型流量センサの開発, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 17. 前田佳史, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 経気管支的に呼吸および光学画像計測を可能とするカテーテルセンサシステムに関する研究, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 18. 下平千尋, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 点滴システムへの応用を目指したマイクロ流量センサの開発, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 19. 加藤絢美, 藤網伊織, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, フレキシブル基板上での MEMS 流量センサと信号処理回路との一体化に関する研究, 第 36 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2019 年 11 月
 20. Y. Kawamoto, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Shikida, Development of thermal flow sensor for respiration measurement, 32nd International Microprocesses and Nanotechnology Conference, 2019 年 10 月
 21. H. Yoshida, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Development of breathing monitoring system for artificial ventilator in animal experiment, 32nd International Microprocesses and Nanotechnology Conference, 2019 年 10 月
 22. 式田光宏, MEMS マイクロニードル作製を巡る一考察, 第 1 回「メディショナルナノテク研究会」, 2019 年 9 月
 23. LEE SEUNGHYEON, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, 呼吸にもとづいた生体情報計測技術の開発, 生体医工学シンポジウム 2019, 2019 年 9 月
 24. 吉田誉, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, MEMS 技術を用いた動物用人工呼吸器計測評価システムの開発, 生体医工学シンポジウム 2019, 2019 年 9 月
 25. H. Noma, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Flow sensor and stent integration for evaluating in-situ breathing property at airway in experimental animal, 45th International Conference on Micro & Nano Engineering, 2019 年 9 月
 26. C. Shimohira, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida,

- Thermal flow sensor operated under 40 degrees Celsius for controlling small dosing rate in drip infusion system, 45th International Conference on Micro & Nano Engineering, 2019年9月
27. A. Kato, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, A thermal flow sensor and its signal processing circuit integration onto flexible copper on polyimide substrate, 45th International Conference on Micro & Nano Engineering, 2019年9月
 28. 式田光宏, 医薬分野におけるマイクロデバイス技術, 講演会(香川大学微細構造デバイス統合研究センター(主催)), 2019年7月
 29. M. Sakamoto, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Shikida, Four-sided tip-separable micro-needle device with large barb formed by anisotropic wet etching for transdermal drug delivery system, 20th International Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems, 2019年6月
 30. R. Takigawa, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Integration of MEMS flow sensor, electrical wiring, and tube structure onto copper on polyimide substrate, 20th International Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems, 2019年6月
 31. Y. Maeda, C. Okihara, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Micro-machined catheter flow sensor systemization for in-situ breathing and optical imaging measurements in bronchus region in lung system, 20th International Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems, 2019年6月
 32. 吉田誉, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, 動物実験用人工呼吸器計測評価システムの開発, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 33. 瀧川流成, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, 流路構造付きMEMS流量センサの開発, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 34. 下平千尋, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, 点滴投与量計測用マイクロ流量センサの開発, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 35. 坂本瑞生, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 先端部分離性の向上を目的とした四角錐先端分離型マイクロニードル, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 36. 芹澤彩夏, 谷口和弘, 長谷川義大, 式田光宏, 眼球運動トレーニング支援装置の開発, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 37. 野間颯斗, 長谷川義大, 谷口和弘, 式田光宏, 松島充代子, 川部勤, 気道内留置可能なステント型流量センサの開発, 平成31年電気学会全国大会, 2019年3月
 38. A. Kato, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Micro-machined flow sensor formed on copper on polyimide substrate and its respiration measurement application, 31st International Microprocesses and Nanotechnology Conference, 2018年11月

39. 式田光宏, MEMS 技術で作製する医用デバイスの応用事例～マイクロニードルを用いた次世代経皮吸収製剤技術の開発～, 平成 30 年度 第 3 回ヘルスケア・医療福祉機器技術研究交流会, 2018 年 11 月
40. Y. Mitsunari, S. Watanabe, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Development of three layered tube type flow sensor for human respiration measurement, 31st International Microprocesses and Nanotechnology Conference, 2018 年 11 月
41. 前田佳史, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 感温フィルムを用いた簡易的呼吸検知デバイスの開発, 第 35 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2018 年 10 月
42. 藤範知弘, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 呼吸と体温の両計測が可能な MEMS 流量センサの開発, 第 35 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2018 年 10 月
43. 光成勇樹, 長谷川義大, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 乳幼児の呼吸心拍一括計測を目指した気管挿管チューブ実装型 MEMS 流量センサシステムに関する研究, 第 35 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2018 年 10 月
44. 長谷川義大, 安田優花, 谷口和弘, 式田光宏, マイクロインデンテーション法を用いた高密度マイクロニードル作製手法の開発, 第 35 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2018 年 10 月
45. 加藤絢美, 長谷川義大, 谷口和弘, 松島充代子, 川部勤, 式田光宏, 銅張積層板を用いた温度補償機能搭載型 MEMS 呼吸センサの開発, 第 35 回「センサ・マイクロマシンと応用システム」シンポジウム, 2018 年 10 月
46. 式田光宏, MEMS によるマイクロ医療デバイスの高機能化, 第 1 回「メディシヨナルナノテク研究会」, 2018 年 7 月
47. T. Fujinori, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Integration of temperature sensor onto MEMS flow sensor for detecting both breathing and body temperature information, Tech. Dig. of Asia-Pacific Conference on Transducers and Micro-Nano Technology, 2018 年 6 月
48. Y. Hasegawa, Y. Yasuda, K. Taniguchi, M. Shikida, Metal plastic forming by mechanical Si structure indentation for producing metal mold master applied for high density needle fabrication, Tech. Dig. of Asia-Pacific Conference on Transducers and Micro-Nano Technology, 2018 年 6 月
49. Y. Maeda, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Breathing monitoring by energy-less respiration sensor based on thermo-sensitive film, Tech. Dig. of Asia-Pacific Conference on Transducers and Micro-Nano Technology, 2018 年 6 月
50. A. Kato, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Shikida, Integration of temperature compensation sensor with flexible flow sensor based on Cu on polyimide substrate,

Tech. Dig. of Asia-Pacific Conference on Transducers and Micro-Nano Technology, 2018年6月

51. Y. Mitsunari, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, MEMS flow sensor integration into tracheal tube device and its application to respiration and heartbeat signal detection in infant, Tech. Dig. of Asia-Pacific Conference on Transducers and Micro-Nano Technology, 2018年6月

【社会活動】

IET (Journal on Micro & Nano Technology)、Elsevier (Sensors and Actuators A)、MDPI (Sensors) の三つの学術洋雑誌にてエディタとして活動するとともに、TPC (Technical Program Committee) として国際会議 (IEEE Sensors) に加わった。また、国内学会においては、電気学会 (センサ・マイクロマシンと応用システムシンポジウム 論文委員)、日本機械学会 (マイクロ・ナノ工学部門運営委員、学術誌 (マイクロ・ナノ工学) アソシエイトエディタなど)、日本生体医工学会、電子情報通信学会などの学会活動を通じて社会に貢献した。

2019年-	Topic Editor for Sensors and Actuators A, Elsevier
2019年	Technical Program Committee representing the Asia/Oceania region of the IEEE Sensors 2019 conference
2018年-	Editorial Board Members on Sensors, MDPI
2018年	Technical Program Committee representing the Asia/Oceania region of the IEEE Sensors 2018 conference
2017年-2019年	日本機械学会, マイクロ・ナノ工学部門 運営委員
2015年-	日本機械学会, Mechanical Engineering Letters 編修委員会委員
2014年-	日本機械学会, Mechanical Engineering Journal 編修委員会委員
2014年-	日本生体医工学会, 中国四国支部 評議員
2013年-	日本機械学会, 学術誌 (マイクロ・ナノ工学) アソシエイトエディタ
2011年-2018年	Associate Editor for the Micromechanics Section of Sensors and Actuators A, Elsevier
2007年-	電子情報通信学会, ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員
2006年-	Editorial Board Member on IEE Letters Journal on Micro & Nano Technology, IET
2005年-	電気学会, センサ・マイクロマシンと応用システムシンポジウム論文委員

氏名	島 和之
職位	准教授
研究分野	ソフトウェア工学
研究キーワード	ソフトウェア信頼性、耐故障システム、P2P 型システム、関数型プログラミング

ソフトウェア工学の専門知識を活かし、プログラミングに関する教育や研究を行った。また、社会活動としては、高校生による情報科学自由研究、および、ソフトウェアサイエンス研究会幹事を担当した。

【教育活動】

プログラミング I と同演習では C 言語によるプログラミングを教えた。オブジェクト指向技術では UML による設計、Java による実装を教えた。ソフトウェア工学概論では、開発モデル、形式仕様記述言語、データ抽象化、テスト、信頼性評価手法を教えた。

2019 年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、ソフトウェア工学概論、オブジェクト指向技術
2018 年度	プログラミング I、データ構造とアルゴリズム II、プログラミング I 演習、ソフトウェア工学概論、オブジェクト指向技術

【研究活動】

関数型プログラミング言語を提案し、それによる非決定性計算を実現し、従来言語 Scheme との比較を行った。さらに、提案言語の Web 実行環境を構築し、処理系をインストールすることなく関数型プログラミングを学ぶための環境を実現した。

1. 小島 渚, 島 和之, 中田 明夫, “Concurrent Execution Semantics of the Functional Programming Language in Continuation Passing Style Based on the Actor Model,” 信学技報, vol. 118, no. 137, SS2018-14, KBSE2018-24, pp. 161-166, 2018 年 7 月.
2. 井原 唯, 小島 渚, 島 和之, “継続渡しスタイルの関数型プログラミング言語における分散処理の記述,” 信学技報, vol. 118, no. 230, SS2018-21, DC2018-22, pp. 19-24, 2018 年 10 月.
3. 井原 唯, 小島 渚, 島 和之, “継続渡しスタイルの関数型プログラミング言語における非同期処理の実装,” 信学技報, vol. 118, no. 471, SS2018-81, pp. 175-180, 2019 年 3 月.
4. 小島 渚, 橋本 知江美, 島 和之, “継続渡しスタイルの関数型プログラミング学習のための Web 実行環境の設計,” 信学技報, vol. 119, no. 112, SS2019-3, KBSE2019-13, pp. 53-58, 2019 年 7 月.
5. 横本 勇希, 小島 渚, 島 和之, “四天王問題の一般化と継続渡しスタイルの関数型言語

における非決定性計算による解法プログラム,” 信学技報, vol. 119, no. 246, SS2019-18, DC2019-46, pp. 31-36, 2019年10月.

6. 橋本 知江美, 小島 渚, 島 和之, “継続渡しスタイルの関数型プログラミング学習のためのWeb実行環境,” 信学技報, vol. 119, no. 362, MSS2019-50, SS2019-34, pp. 55-60, 2020年1月.

7. 小島 渚, 横本 勇希, 島 和之, “継続渡しスタイルの関数型言語における非決定性プログラム,” 信学技報, vol. 119, no. 451, SS2019-55, pp. 87-92, 2020年3月.

【社会活動】

高校生による情報科学自由研究のオリジナルテーマを担当し、深層学習によって雨量から川の水位を予測する手法の研究に協力した。また、ソフトウェアサイエンス研究会の幹事として、年4回の研究会の担当、および、会計を担当した。

2018年4月-	電子情報通信学会, ソフトウェアサイエンス研究専門委員会幹事
----------	--------------------------------

氏名	新 浩一
職位	講師
研究分野	超高層物理学、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	電波伝搬、電磁波、無線通信システム、ネットワーク

2018年度～2019年度にかけては、【教育活動】および【研究活動】を中心として活動をおこなった。【教育活動】では、学生に考えや疑問に思ふ内容に気を配ることを念頭に指導を行った。【研究活動】では、継続して行なっている電波伝搬の研究を継続・発展させるとともに、新たにオーロラ画像の解析や、土砂災害危険地域情報に関する研究では機械学習による技術を取り入れてきた。【社会貢献】については、オープンキャンパスや大学見学の場で、取り組んでいる研究内容の外部公開を行った。

【教育活動】

担当した各講義科目において、利用する講義資料や学生からの質問に対し丁寧に回答することを心がけた。特に「線形代数学Ⅰ演習」「情報工学実験Ⅰ」「情報工学実験Ⅱ」では、その講義形態から学生と直接質疑応答をおこなう機会が多く、学生がどのような点に疑問を持っているのかについてよく把握することができ、随時説明等に反映を行なった。「デジタル信号処理」は2018年度より担当することとなり、新たに作成することとなった講義資料では、学生がイメージを持ちやすいように応用面を多く含めるよう作成にあたった。

2019年度	確率統計、線形代数学Ⅰ演習、情報工学実験Ⅰ、情報工学実験Ⅱ、通信工学特論、デジタル信号処理
2018年度	確率統計、線形代数学Ⅰ演習、情報工学実験Ⅰ、通信工学特論、情報工学実験Ⅱ、デジタル信号処理

【研究活動】

2018年度～2019年度については、主として放送波および電磁波の伝搬に関する研究、電波の利活用に関する研究、災害対策のための研究、オーロラ画像の解析に関する研究について研究活動を行ってきた。放送波および電磁波の伝搬に関する研究では、山間部に設置するセンサの情報伝送に利用する電波の伝搬に関して実測による検討を行なった。災害対策のための研究では、カメラ等のセンサを用いたモニタリングのみならず、機械学習を用いた環境状態の判定に関する研究を進めた。研究成果は自身や学生により国際会議等で公開を行った。

1. 白井 拓也, 小林 真, 新 浩一, 西 正博, 土砂災害センシングネットワークのための山間地における 920MHz 帯電波伝搬特性の評価, 信学技報 ICTSSL2019-54, 119(401), pp.115-120, 2020.
2. Haruka Kodama, Shigeru Fujimura, Koichi Shin, Masahiro Nishi, Development of Landslide Disaster-Related IoT System for Elderly People, Proc. of The

- international workshop on electronics, information and communication (IWEIC 2019), 2019.
3. Koichi Shin, Haruka Kodama, Masahiro Nishi, Development of Local Landslide Danger-Related Information Notification System on TV Set for Early Evacuation, Proc. of 2019 IEEE Intl Conf on Dependable, Autonomic and Secure Computing, Intl Conf on Pervasive Intelligence and Computing, Intl Conf on Cloud and Big Data Computing, Intl Conf on Cyber Science and Technology Congress (DASC/PiCom/CBDCCom/CyberSciTech), pp.672-676, 2019.
 4. Masahiro Nishi, Haruki Kozato, Yusuke Ota, Koichi Shin, Development of Disaster Monitoring Techniques in the Grass-root Information Distribution System for Detecting Landslide Dangers, Proc. of International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN 2018), pp.1599-1604, 2018.
 5. Yoshihiro Matsuda, Koichi Shin, and Masahiro Nishi, Development of Point-to-Multipoint Type Human Detection System using 920 MHz Band, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2018), pp.595-596, 2018.
 6. Koki Kanekura, Koichi Shin, and Masahiro Nishi, 3-year Observations on Overreach Propagation from Korea to Japan in V-Low Band, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2018), pp.869-870, 2018.
 7. Kiyonobu Sugihara, Makoto Kobayashi, Koichi Shin, Masahiro Nishi, Time-varying Feature Quantities of Aurora Activities by Image Analysis based on HLS Values, American Geophysical Union, Fall meeting 2019, 2019.
 8. Makoto Kobayashi, Koichi Shin, Masahiro Nishi, Development of Monitoring Techniques in the Grass-root Landslide Disaster Information Distribution System, American Geophysical Union, Fall meeting 2019, 2019.
 9. 小里 春来, 新 浩一, 西 正博, 土砂災害被害軽減を目的としたセンシングシステムの開発における各種センサの評価, 信学技報 ICTSSL2018-12, ASN2018-12, 2018.
 10. 太田 裕亮, 新 浩一, 西 正博, 深層学習を用いた画像処理による土砂災害危険度自動判定手法の検討, 信学技報 ICTSSL2018-12, ASN2018-12, 2018.

【社会活動】

社会活動については、広島市立大学主催の産学連携研究発表会研究紹介や地域貢献事業発表会研究紹介を通じて一般の方々や市職員に対し研究紹介を行なった。またオープンキャンパスをとおし主に高校生に情報科学技術を伝えるといった活動を行った。2019年3月には広島市三入公民館にてSCOPE公開実験として、広島市三入地区の住民の方々に実験に参加して頂くと共に、研究成果の紹介を行なった。さらに電子情報通信学会中国支部 庶務幹事を通じて社会活動を行った。

2019年11月	広島市立大学 地域貢献事業発表会 研究紹介
2019年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 研究紹介

2019年8月	広島市立大学 オープンキャンパス 研究紹介
2019年3月	広島市三入公民館にて SCOPE 公開実験
2018年-2019年	電子情報通信学会 中国支部 庶務幹事
2018年11月	広島市立大学 地域貢献事業発表会 研究紹介
2018年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 研究紹介
2018年8月	広島市立大学 オープンキャンパス 研究紹介

氏名	鈴木 祐介
職位	助教
研究分野	知能情報学、情報学基礎
研究キーワード	機械学習、グラフマイニング、データマイニング

教育活動では、おもに情報リテラシーやプログラミングに関する講義を担当した。研究活動においては「多様な付加情報を活用したグラフ構造データに対する高性能グラフマイニング手法の開発」というテーマで研究を行い、木構造パターンに対するグラフマイニングアルゴリズムの開発を行った。社会活動としては、オープンキャンパス、ライブキャンパスで研究室の活動紹介や「高校生による情報科学自由研究」での研究指導を行った。

【教育活動】

教育では、2018年度、2019年度前期はプログラミング I 演習、3学部合同基礎演習、情報活用基礎の3科目を担当した。後期は知能工学実験 II の1科目を担当した。研究指導では2018年度と2019年度は研究室の学部4年生2名に対し研究指導補佐を行った。

2019年度	プログラミング I 演習、3学部合同基礎演習、情報活用基礎、知能工学実験 II
2018年度	プログラミング I 演習、3学部合同基礎演習、情報活用基礎、知能工学実験 II

【研究活動】

「多様な付加情報を活用したグラフ構造データに対する高性能グラフマイニング手法の開発」という研究テーマで、グラフマイニングアルゴリズム及び機械学習アルゴリズムの研究、開発を行った。項木パターンやタグ木パターンに対するグラフマイニングアルゴリズムの開発や、文字列パターンやグラフ文法に対する学習可能性の考察などの研究を行い、これらの研究結果について、学術雑誌への発表や研究発表を行った。

1. S. Matsumoto, T. Uchida, T. Shoudai, Y. Suzuki, T. Miyahara, An Efficient Learning Algorithm for Regular Pattern Languages Using One Positive Example and a Linear Number of Membership Queries, IEICE Transactions on Information and Systems, E103-D, Issue 3, pp.526-539, 2020
2. Y. Suzuki, T. Miyahara, T. Shoudai, T. Uchida, S. Matsumoto, T. Kuboyama, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Height-Constrained Variables for Trees, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and Its Applications, Vol.12, No.3, pp.78-88, 2019
3. T. Uchida, S. Matsumoto, T. Shoudai, Y. Suzuki, T. Miyahara, Exact Learning of Primitive Formal Systems Defining Labeled Ordered Tree Languages via Queries,

- IEICE Transactions on Information and Systems, E102-D, Issue 3, pp.470-482, 2019
4. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, T. Uchida, Acquisition of Characteristic Sets of Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by a Two-Stage Evolutionary Learning Method for Graph Pattern Sets, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol.7, No.3/4, pp.270-288, 2018
 5. T. Shoudai, T. Miyahara, T. Uchida, S. Matsumoto, Y. Suzuki, An Efficient Pattern Matching Algorithm for Unordered Term Tree Patterns of Bounded Dimension, IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, E101-A, No.9, pp.1344-1354, 2018
 6. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, T. Uchida, Aggregative context-aware fitness functions based on feature selection for evolutionary learning of characteristic graph patterns, Vietnam Journal of Computer Science, Vol.5, Issue 3-4, pp.229-239, 2018
 7. F. Tokuhara, S. Okinaga, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Kuboyama, T. Uchida, Using Label Information in a Genetic Programming Based Method for Acquiring Block Preserving Outerplanar Graph Patterns with Wildcards, 2019 IEEE 11th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, 2019年11月
 8. S. Matsumoto, T. Uchida, T. Shoudai, Y. Suzuki, T. Miyahara, Exact Learning of Regular Pattern Languages from One Positive Example Using a Linear Number of Membership Queries, The International MultiConference of Engineers and Computer Scientists 2019, 2019年3月
 9. Y. Yamagata, F. Tokuhara, Y. Inaba, K. Muratani, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Uchida, T. Kuboyama, Evolutionary Learning of Multiple TTSP Graph Structured Patterns from Positive and Negative TTSP Graph Data: Its Graph Pattern Display System and Performance Evaluation, IES 2018, The 22nd Asia Pacific Symposium on Intelligent and Evolutionary Systems, 2018年12月

【社会活動】

2018年度、2019年度のオープンキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。また2018年度、2019年度のライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。2019年度の「高校生による情報科学自由研究」において高校生2名に研究指導を行った。

氏名	関根 光弘
職位	准教授
研究分野	位相幾何学
研究キーワード	4次元の結び目理論、力学系理論とその応用

私が、本学に貢献する際の主たる目標は、学生の数学の学力を向上させる事にあると思っています。とくに、今年度はオンライン授業に対する準備等で例年以上に負荷が増えています。これを機に、教育の質のさらなる向上を目指すよう取り組んでいきます。

【教育活動】

1年生の「線形代数学」の代表教員であるため、シラバスの設定や演習、定期試験等の問題作成などに携わっています。4クラス同時に試験を行い評価を行うために、同僚教員と協力しつつ取り組んでいます。また、2年次、3年次では、高校数学教員免許取得のための講義を担当しているため、数学の専門性のみならず、数学教育の側面についても意識をしつつ講義をしています。大学院では、「力学系とその数理生物学への応用」というテーマで講義を担当しています。

2019年度	知能数理特論A、線形代数学I、線形代数学I 演習、幾何学概論、知能数理特論B、離散数学、線形代数学II、教科教育法(数学)II、教科教育法(数学)I
2018年度	解析学I 演習、教科教育法(数学)I、線形代数学I、線形代数学I 演習、幾何学概論、教科教育法(数学)II、線形代数学II、離散数学、知能数理特論B

【研究活動】

私が研究の主要なテーマとしているのは、大雑把に言うところ「幾何学」です。中でも、トポロジー(位相幾何学)と力学系の理論に関して取り組んで来ました。学生の指导向けには、現在の所主に「数理生物学」をテーマに取り上げています。これは、学生に興味を持ってもらいやすく、また数学が単に問題集の問題を解くためだけにあり、現在はその発展が止まっているというような誤った認識を改めさせたいと思っています。自分の専門に対するこれまでの蓄積を生かし、セミナーを通して新しい知見を得るように取り組んでいきます。

1. 田中輝雄, 関根光弘, 齋藤夏雄, 岡山友昭, 廣門正行, 百武弘登, 教員養成系学部をもたない大学での数学科教育法の授業の実践例について, 数学教育学会 2019年度秋季例会予稿集, pp. 99-101, 2019

【社会活動】

大学以外での社会的な活動については、現在のところあまり注力していません。ただし、過去の卒業生で高校の教員として活躍する者とは、連絡を取っている場合もありますので、学内外での行事等で近況を直接聞く事もあります。現在の高校生の様子や、大学での学びとの連携という意味では何かお役に立てる場面があるかもしれません。

氏名	双紙 正和
職位	准教授
研究分野	セキュリティ、ソフトウェア、計算機システム・ネットワーク、情報学基礎
研究キーワード	セキュリティ、認証、暗号、IoT、実装、ネットワーク

体調を壊して入院したため、この2年間は満足できる研究活動を行えなかった。特に、科研費研究は予定通り実施したものの、論文発表が不十分だった。それでも様々な知見を蓄積することができ、今後の研究に大きく寄与すると期待している。教育活動については、ほぼ満足できるような実施ができたと考えている。特に、情報理論については、板書からスライドに移行した結果、講義内容がより安定した。また情報セキュリティ概論では、講義内容を絞り、説明を詳しくした。社会活動については、特に学会活動を中心に実施した。より具体的には、国際会議のプログラム委員や、論文誌の査読が活動の主だったものである。

【教育活動】

ほぼ満足できるような実施ができたと考えている。「データ構造とアルゴリズム II」については、例年とほぼ同様の実施となり、満足できる講義となった。特に、情報理論については、板書からスライドに移行した結果、講義内容がより安定した。内容をもう少し追加するか、あるいは証明をさらに詳しくするか等、講義内容についてさらに検討していきたい。情報セキュリティ概論では、講義内容が学生には難しすぎ、また多すぎるという可能性があった。そこで講義内容を絞り、説明を詳しくした。講義内容については、引き続き検討していきたい。「企業活動とプロジェクトマネジメント」は、大学では扱われないトピックであるが重要で、有意義だった。

2019年度	データ構造とアルゴリズム II、企業活動とプロジェクトマネジメント、情報セキュリティ概論、技術文書作成法、情報理論、暗号と情報セキュリティ特論、外書購読演習 II、システム工学実験
2018年度	情報セキュリティ概論、情報理論、暗号と情報セキュリティ特論、外書購読演習 II

【研究活動】

2018年は体調を壊して入院してしまい、その回復のためにこの2年間は満足できる研究活動を行えなかった。特に、One-way Cross Networks (科研費基盤C研究) に関する研究は予定通り実施したものの、論文発表が不十分だった。それでも様々な知見を蓄積することができ、今後の研究に大きく寄与すると期待している。さらに、2020年度は科研費基盤C研究が最終年度なので、研究を総括し、新たな科研費研究を申請する。また、IP トレースバック、複数秘密分散法、ハッシュ連鎖構成法については、十分な研究成果を達成できたので、国際会議や論文誌にすみやかに論文を提出する。

1. 平井晨太, 双紙正和, ハッシュチェーンアグリゲーションを用いた認証方式の拡張, 信学技報 ICSS2019-97, Vol. 119, No. 437, pp. 213-218, 2020

2. 平井晨太, 双紙正和, ハッシュチェーン計算によるモデル化, コンピュータセキュリティシンポジウム 2019 論文集 (CSS 2019), pp. 1231-1235, 2019
3. 双紙正和, ホワイトボックス暗号の改良について, 信学技報, ICSS2018-72, Vol. 118, No. 486, pp. 25-27, 2019
4. 平井晨太, 双紙正和, ハッシュチェーン計算モデルによる認証, 信学技報 ICSS2018-84, Vol. 118, No. 486, pp. 149-153, 2019
5. 平井晨太, 双紙正和, IoT 認証のためのハッシュチェーンアグリゲーションの改良, 暗号と情報セキュリティシンポジウム SCIS2019, pp. 149-153, 2019

【社会活動】

社会活動については、特に学会活動を中心に実施した。より具体的には、国際会議のプログラム委員や、論文誌の査読が活動の主だったものである。さらに、学生とともに、広島県警サイバー防犯ボランティアに従事した。

2019 年	SERVICE COMPUTATION 2019, The Eleventh International Conferences on Advanced Service Computing, program committee member
2019 年	EMERGING 2019, The Eleventh International Conference on Emerging Network Intelligence, Program Committee member
2018 年	電子情報通信学会英文論文誌「暗号と情報セキュリティ小特集 (2019 年)」 編集委員 (2018 年)
2018 年	SERVICE COMPUTATION 2018, The Tenth International Conferences on Advanced Service Computing, program committee member
2018 年	EMERGING 2018, The Tenth International Conference on Emerging Network Intelligence, Steering Committee member
2014 年-	HISEC (広島インターネット・セキュリティ対策推進協議会) アドバイザー
2013 年-	広島県警サイバー防犯ボランティア
2011 年 4 月-	Editorial board of Journal of Internet Services and Information Security
2011 年 4 月-	電子情報通信学会英文 D 編集委員
2010 年 10 月-	電子情報通信学会
2008 年 4 月-	情報通信システムセキュリティ時限研究会, 専門委員
2005 年 4 月-	情報処理学会コンピュータセキュリティ研究運営委員会, 運営委員
1998 年 3 月-	情報処理学会

氏名	高井 博之
職位	助教
研究分野	無線通信方式、移動無線通信システム、ロボティクス、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	無線通信方式・機器、ロボット工学、計算機網

移動ロボット相互通信用の空間分割光通信システムの研究開発と、enPiT-Pro ラボ演習「サービロボット向け実験用移動台車の開発実習」、三学部合同基礎演習（一年生前期）を軸に、2018年度・2019年度は、研究・教育・社会貢献をバランスよく負担することを心掛けて活動した。2018年度末に実施した enPiT-Pro プレラボ演習では、北九州市立大と4日間のTV会議システムを用いたオンライン実習を行い、遠隔実習の可能性と課題を知る事ができた。また、enPiT-Pro ラボ演習実習用機材の見直しと実習内容の確認、テキスト改訂を行った。

【教育活動】

2018年度から担当している三学部合同基礎演習（一年生前期）では、学生が主体的に取り組むことができ、知のトライアスロン（知トラ）事業やCOC+事業と円滑に連携できる討論テーマとして、「広島地域の観光」を取り上げ討論させた。2018年度は大久野島、2019年度は尾道を取り上げた。課題としてその地域に関する書籍や映画のリストを作成させ、このリストにある書籍を読み・映画を観ることで知トラ事業との連携を試みた。約半数の学生はこれらをもとに知トラに投稿していた。学生がより積極的に知トラ事業にも取り組むことができるように課題を設定したい。

2019年度	システム工学実験（3年生）（第3章パート）、情報基礎（1年生）（副担当）、3学合同基礎演習（1年生）、外書講読演習I（3年生）（パート担当）
2018年度	システム工学実験（3年生）（第3章パート）、情報基礎（1年生）（副担当）、3学合同基礎演習（1年生）、外書講読演習II（4年生）（ロボティクス）、外書講読演習I（3年生）（パート担当）

【研究活動】

移動ロボット相互の指向性通信、光入射角センサを受信機に用いる空間分割光通信システムの開発に取り組んでいる。光量調整機能付き光送信回路は開発完了、光入射角の検出誤差が大きかった光入射角検出受信回路について改良型の設計を完了し機能確認を行っている。また、光データ送受信符号化復号回路を実装する System on Chip (SOC) について開発環境を整備し、機材等の準備を完了した。指摘されていた通信システムとしての定量評価の不足について、M 系列符号を用いた評価用光符号化復号回路を光データ送受信 SOC に置き換えて実装し開発時間の短縮を図る。早期に完了し、実験に取り掛かる。

【社会活動】

高校生の夏休み自由研究「作ってチャレンジ！ ロボットサッカー」を例年、福島准教授と協力して実施している。また、enPiT-Pro ラボ演習「サービスロボット向け実験用移動台車の開発実習」を提供している。2018年度末のプレラボ演習の第1回から第4回は、北九州市立大とテレビ会議システムを用いた二元オンライン実習を行った。enPiT-Pro ラボ演習に用いていた機材が相次いで製造中止となり、その都度機材の見直しと実習内容の整合確認、テキストの改訂が必要となったが、機材の高性能化に伴い実習内容の充実とともに、新たな考案を得た。enPiT-Pro ラボ演習の内容をもとに学生実験や研究へ応用し、教育研究の充実を図る。

2018年1月-	enPiT-everi：“地域産業の競争力強化を図る人工知能とロボット技術を駆使したIoT技術の社会実装を推進する実践的人材育成コースの開発・実施” 「オープンソース・ソフトウェアを用いたサービスロボット向け実験用台車の開発」， 文部科学省「Society5.0に対応した高度技術人材育成事業」 enPiT-Pro 北九州市立大学・九州工業大学・熊本大学・宮崎大学・広島市立大学
2007年8月-	高校生の夏休み自由研究：作ってチャレンジ！ロボットサッカー， 広島市立大学

氏名	高野 知佐
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学
研究キーワード	ネットワーク性能評価、通信トラヒック分析、トラヒック制御、自律分散制御、社会ネットワーク分析

教育活動・研究活動・社会活動の全てにおいて、主体的・積極的に行った。結果、研究活動として、Information Network Research Award of IEICE（電子情報通信学会 第26情報ネットワーク研究賞受賞）を2件、指導学生の受賞（下記、参照）を3件、また広島市立大学から2019年度教員表彰（研究及び社会貢献）を頂いた。

【教育活動】

ネットワーク設計・演習：学生の質問にできるだけ対応し、全ての学生に授業内容を理解してもらうように努める。また、授業内容の範囲外の課題に対しても問題提起につながる、学生の興味を引くような授業を行いたい。

線形代数学演習：できるだけ学生の質問に対応し、全ての学生に内容を理解してもらうように努める。

データ構造とアルゴリズムⅠ：授業中、学生が理解しているか適宜確認し、理解度が低い場合は繰り返し丁寧な説明を加える。

通信トラヒック特論：待ち行列理論とその応用について講義、重要な概念については何度も繰り返し説明し、理解してもらうよう努める。

2019年度	ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、データ構造とアルゴリズムⅠ、eラーニング英語Ⅳ、通信トラヒック特論
2018年度	ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、データ構造とアルゴリズムⅠ、eラーニング英語Ⅳ、通信トラヒック特論

【研究活動】

これまでと同様に大学内および他大学との連携を図り、研究を進める。具体的な研究内容は以下のとおり

- ・ネットワーク分析で得られた理論的システムを情報ネットワークの課題に利用するため、実用・運用モデルを検討する。
- ・大規模複雑ネットワークの生成モデルやTwitterのようなSNSの実データを用いた解析やそのモデル化を検討する。
- ・無線LAN環境の通信性能を向上させるアルゴリズムの提案と実証実験を行う。

1. Naoki Hirakura, **Chisa Takano** and Masaki Aida, “Method for efficiently orthogonalizing the eigenvectors of the Laplacian matrix to estimate social

- network structure,” Nonlinear Theory and its Applications, IEICE (NOLTA), (Special Section on Fundamentals and Applications of Complex Communications and Multimedia Functions), vol. 11, no. 1, pp. 60-67, January 2020.
2. Takahiro Kubo, **Chisa Takano** and Masaki Aida, “New model of flaming phenomena in on-line social networks caused by degenerated oscillation modes,” IEICE Transactions on Communications, vol. E102-B, no. 8, pp. 1579-1589, August 2019.
 3. Satoshi Furutani, **Chisa Takano** and Masaki Aida, “Network resonance method: Estimating network structure from the resonance of oscillation dynamics,” IEICE Transactions on Communications, vol. E102-B, no. 4, pp. 799-809, April 2019.
 4. Yoshiki Miura, Hiroyasu Obata, **Chisa Takano**, and Kenji Ishida, “A Media Access Control Method based on Capture Effect considering Throughput Fairness among WLAN Systems,” Proc. The 8th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences (KJCCS2020), B2, 3pages, January 2020. (Best Student Paper Award)
 5. Naoki Hirakura, **Chisa Takano** and Masaki Aida, “Efficient orthogonalizing the eigenvectors of the Laplacian matrix to estimate social network structure,” The 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications (NOLTA 2018), Tarragona, Spain, September 2-6, 2018. (Student Paper Award)
 6. Kaoru Ogaki, **Chisa Takano** and Kaori Maeda, “A Proposal of a routing method based on cost calculation method considering multiple metrics and its evaluation using OpenFlow networks,” IEICE IA2019 - Workshop on Internet Architecture and Applications 2019, Poster Session, Nov. 14-15, 2019. (**Award for Students Studies by Technical Committee Internet Architecture**)
 7. 三浦 圭輝, 小畑 博靖, **高野 知佐**, 石田 賢治, “WLAN 間のスループット公平性を改善するキャプチャ効果を用いたメディアアクセス制御,” 信学技報, IN2019-25, September 2019. (**Information Network Research Award of IEICE (第 26 情報ネットワーク研究賞受賞)**)
 8. 会田 雅樹, **高野 知佐**, 小蔵 正輝, “ユーザダイナミクスの基礎方程式とオンライン社会ネットワークの構造について,” 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会, 信学技報 IN2019-21, vol. 119, no. 158, pp. 37-42, 2019 年 8 月 2 日 (北海道斜里郡・KIKI 知床 ナチュラルリゾート). (**第 26 情報ネットワーク研究賞受賞**)
 9. 招待講演, **高野 知佐**, 会田 雅樹, “振動モデルを利用したオンライン社会ネットワークにおけるユーザダイナミクスの理解,” 電子情報通信学会 コミュニケーションクオリティ研究会, 信学技報 CQ2019-22, vol. 119, no. 61, pp. 55-55, 2019 年 5 月 30 日 (広島市立大学 サテライトキャンパス). 他 34 件

【社会活動】

IEEE 国際会議および電子情報通信学会運営における補佐を積極的に行い、情報通信に関する研究活動の活発化に寄与した。

<p>2018年4月-2019年3月</p>	<p>IEEE 広島支部 庶務幹事, IEEE 広島支部 理事, 電子情報通信学会 NOLTA ソサイエティ運営委員, 電子情報通信学会 複雑コミュニケーションサイエンス研究会 幹事, 科学研究費委員会専門委員, 広島市安全なまちづくり推進協議会委員 (現議長), 電子情報通信学会 ネットワーク科学研究会 専門委員, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会 専門委員, 電子情報通信学会 小特集号 編集幹事 (NOLTA 小特集号), 文部科学省科学技術人材育成補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ メンバー機関, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部 連合大会 実行委員, 電子情報通信学会 査読委員, IEEE Seventh International Symposium on Computing and Networking (CANDAR'19) workshop ASON PC, IEEE 14th International Conference on P2P, Parallel, Grid, Cloud and Internet Computing(30GCIC) 2019 TPC, 7th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences(KJCCS)2020 Finance Co-Chairs, 11th International Conference on Intelligent Networking and Collaborative Systems(INCOS) 2019 TPC, 8th Japan-Korea Joint Workshop on Complex Communication Sciences(JKCCS)2019 General Co-Secretaries, IEEE 6th International Symposium on Computing and Networking (CANDAR) workshop ASON PC</p>
------------------------	--

氏名	鷹野 優
職位	教授
研究分野	生物物理学、計算生命科学、計算化学
研究キーワード	分子シミュレーション、分子動力学シミュレーション、量子化学、タンパク質

21世紀の社会が抱える多種多様な課題を解決し人類の未来をきりひろくするには、自然科学や情報科学などの広い分野の知識をもとに科学技術を発展させることが必要である。「生きる」のに不可欠な役割を果たすタンパク質がはたらく姿をコンピュータでシミュレーションして「見る」ことでタンパク質のはたらきに何が必要かを理解し、その仕組みを利用した物質設計につなげることを研究の目標としている。また、情報科学を自然科学へ応用できるよう、化学・物理学・生物学などの自然科学の教育を遂行し、「自ら調べ、考え、それを説明できる、能動的な人材の育成」にはげみたい。

【教育活動】

2018、2019年度は、化学・物理学・生物学などの自然科学の授業を担当した。授業に使うスライドは穴埋め形式にして授業に集中するようにした。さらにスライドを用いる場合は、すぐに結果を見せるのではなく、思考過程が追えるように段階的に結果にたどり着くよう工夫した。授業後には宿題を出し、次の授業で詳細な解説を行うことで学習内容の定着を図れるよう工夫した。また、授業資料や演習問題の詳細な解説を web 上に掲載することで、自主的に事後学習ができるようにした。その結果、後期に関しては平均以上の評価を得ることができた。

2019年度	基礎化学、量子・統計力学、医用情報科学概論、バイオ情報学特論、バイオインフォマティクス、外書講読演習 II
2018年度	量子・統計力学、医用情報科学概論、基礎化学、バイオ情報学特論、外書講読演習 II、バイオインフォマティクス

【研究活動】

2018、2019年度はコンピュータシミュレーションを用いて、生命現象を担っているタンパク質の機能発現機構の解明を行なった。また、それに必要な方法の開発を進めた。特に、金属タンパク質の構造と機能の関係や抗体の構造の安定性について明らかにした。これらの成果について、論文を11報出版し、国際学会発表を11件（うち招待講演2件）、国内学会発表を32件（うち招待講演3件）行なった。また、これらの成果発表により、2018、2019年度の大学の教員表彰を受けた。

- Hiroko X. Kondo, Ryo Kiribayashi, Daisuke Kuroda, Jiro Kohda, Akimitsu Kugimiya, Yasuhisa Nakano, Kouhei Tsumoto, Yu Takano, Effects of a remote mutation from the contact paratope on the structure of CDR-H3 in an anti-HIV neutralizing antibody PG16, Scientific Reports, Vol.9, pp.19840-, 2019

2. Hiroko X. Kondo, Ayumi Kusaka, Colin K. Kitakawa, Jinta Onari, Shusuke Yamanaka, Haruki Nakamura, Yu Takano, Hydrogen bond energies in α -helical peptides revealed by precise DFT calculations and molecular tailoring approach, Journal of Computational Chemistry, Vol.40, No.23, pp.2043-2052, 2019
3. Masayo Iwaki, Kohei Takeshita, Hiroko X. Kondo, Kengo Kinoshita, Yasushi Okamura, Yu Takano, Atsushi Nakagawa, Hideki Kandori, Zn²⁺-Binding to the Voltage-Gated Proton Channel Hv1/VSOP, Journal of Physical Chemistry B, Vol.122, No.39, pp.9076-9080, 2018
4. Invited talk, Yu Takano, Hiroko X. Kondo, Ayumi Kusaka, Shusuke Yamanaka, Haruki Nakamura, Hydrogen bond donors and acceptors are generally depolarized in α -helices as revealed by a negative fragmentation approach, International Congress on Pure & Applied Chemistry Yangon (ICPAC Yangon) 2019, 2019年8月
5. 広島市立大学平成29年度教員表彰, 広島市立大学, 2018
6. 広島市立大学平成28年度教員表彰, 広島市立大学, 2017

他 50 件

【社会活動】

2018、2019年度は、研究のキーワードであるタンパク質、分子シミュレーションに関してセミナーや出張講義、アウトリーチ活動を行なった。サイエンスアゴラでは、日本蛋白質構造データバンク (PDBj) とともに、タンパク質を「見る」「さわる」「つくる」「使う」といった体験を通して、タンパク質の「かたち」が生命と健康にとって重要であることを実感してもらう展示を行なった。また、広島県科学セミナーの指導助言者として高校生の理科教育・情報教育に協力した。

2020年1月-2021年12月	日本生物物理学会, 分野別専門委員
2019年12月	高校生のための広島市立大学サテライト講座, 広島市立大学
2019年10月	広島県立廿日市高等学校 令和元年度1学年対象大学ナビゲーションセミナー, 広島県立廿日市高等学校
2019年2月	広島県科学セミナー
2019年1月-2020年12月	日本生物物理学会, 分野別専門委員
2018年11月	平成30年度広島市立大学情報科学部公開講座講演会, 広島市立大学
2018年11月	サイエンスアゴラ, 国立研究開発法人科学技術振興機構
2018年10月	3年次 総合的な学習の時間 (POPURA II) 「プロフェッショナル講演会」(広島観音高等学校), 広島観音高等学校
2018年9月	大阪大学蛋白質研究所セミナー「生体分子内情報伝達機構の新展開」

他 4 件

氏名	高橋 賢
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、計測工学
研究キーワード	長距離無線通信、コグニティブ無線、レーダ、衛星測位、無線信号検出

私自身は、無線通信やレーダなどに興味を持ち、実験や計算機シミュレーションを行っています。無線通信は、スマートフォンなどでも馴染みですが、ここでは自由空間でのデータ伝達そのものを指します。これまでに、アンテナ設計方法、電波の伝わり方の解析方法、ミリ波電波による車両間通信方法、データを高速無線伝送するための信号処理方法、微弱な電波をキャッチする方法の研究に取り組んできました。実践および理論の両面での研究教育を行いながら、成果を挙げてゆきたいと考えています。教育活動に関しては、質の良い授業や実習を行うことはもちろんのこと、学生とともに自らも研究活動を行うことが重要であると考えています。グローバル人材育成として、国際会議や地域貢献に学生を参加させています。

【教育活動】

毎週の授業で実施している出席票の課題を通して、学生の皆さんが誤りやすい課題を見つけ出し、コメントするなどの工夫を行っています。また、学生が興味を持つようなトピックを選ぶことで、学習に対するモチベーションを高めています。この2年間で実施した授業科目は次の通りです。

2019年度	情報基礎数学、通信方式、情報理論、集積回路・集積化デバイス、情報通信システム特論、自主プロジェクト演習
2018年度	情報基礎数学、通信方式、情報理論、集積回路・集積化デバイス、情報通信システム特論

【研究活動】

この2年間では、(1)無線信号検出技術、(2)衛星測位技術、および(3)長距離無線通信技術の3テーマを軸にして研究を行いました。無線信号検出技術については、地田デジタルテレビ電波に含まれる緊急信号をその内容に立ち入ることなく判定する信号処理方法を提案しました。衛星測位技術では、日本の内閣府が運営する測位衛星「みちびき」の信号受信機の電池充電回数を減らす方法や、センチメートルオーダーで自らの位置を知る方法を研究しました。また、長距離無線通信技術では、電波の干渉を確率的に事前評価する方法を提案しました。主要成果は次の通りです。

1. 高橋 賢, 小さなデータを低消費電力でより遠くまで届ける LPWA, 電子情報通信学会総合大会, CI-5-6, March 2020.
2. 高橋 賢, ISDB-T テレビ受信機における複数 TMCC フレーム観測に基づく自動起動信号の検出, 映像情報メディア学会誌, Vol. 73, No. 6, pp. 1168-1171, 2019

3. Satoshi Takahashi, Transmission power control of terrestrial pseudolite signal for global navigation satellite systems, IEICE Communication Express (ComEX), Vol. 8, No. 8, pp. 335-340, Aug. 2019
4. 特別講演・招待講演, 高橋 賢, [招待講演] 電波を用いた位置計測の特性, 電子情報通信学会技術研究報告, CQ2019-23, 2019年5月
5. Satoshi Takahashi, A method of determining broadcaster advised emergency wake-up signal for ISDB-T digital television receivers, Journal of Telecommunications and Information Technology (JTIT), Vol. 2019, No. 1, pp. 103-112, March 2019
6. Satoshi Takahashi, Mutual information analysis of broadcaster advised emergency automatic wake-up signals with intermittent reception, IEICE Information and Communication Technology Forum (IEICE ICTF 2018), pp. 1-5, Graz, Austria, July 2018

ほか 11 件

【社会活動】

グローバル社会活動としては、IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers) が主催する国際会議の Technical Program Committee など務めています。国内での社会活動としては、電子情報通信学会や映像情報メディア学会の学術専門委員や運営委員を務めています。一方、本学関係の社会活動としては、リエゾンフェスタ、地域貢献事業発表会、産学連携発表会などに継続して出展しています。

2018 年度, 2019 年度	Japan-Africa Conference on Electronics, Communications, and Computers (JAC-ECC 2019), Technical program committee (TPC) member
2018 年度, 2019 年度	IEEE International Conference on Communications (ICC) on Communication, Technical program committee (TPC) member
2018 年度, 2019 年度	Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2019), Reviewer

ほか 19 件

氏名	高橋 雄三
職位	助教
研究分野	認知科学、デザイン学、衛生学・公衆衛生学、実験心理学、経営学、ヒューマンインターフェース・インタラクション、社会システム工学・安全システム
研究キーワード	人間工学、産業衛生学、産業保健人間工学、生理心理工学

教育・研究機関の構成員として、教育活動と研究活動のバランスを重視した活動を展開している。特に教育と研究の橋渡し段階における学生の活動を重視し、学部生の積極的な研究大会などでの研究発表を奨励する指導スタイルを確立している。また研究分野も情報科学領域に留まることなく、公立大学のミッションである地域貢献に繋がる安心・安全・健康・協働に関わる研究テーマを積極的に展開し、地域の暮らしの安心・安全・健康の確保、地域社会の活性化に繋がる研究の展開を心懸けている。また自分のキャリアを生かし、昨今の学生気質の変化に対応した個別ケースの対応にも注力している。可能な限り、学生ファーストの視点を進取した行動を心懸けている。

【教育活動】

1年生：3学部合同基礎演習、2年生：情報科学基礎実験β-2、3年生：システム工学実験Ⅰ・Ⅱ、外書講読Ⅰ、4年生：卒業研究Ⅰ・Ⅱの指導を行っている。研究指導学部4年生が2018年度は第47回人類働態学会東日本地方会にて「優秀発表賞」を、人類働態学会西日本地方会第43回大会にて「若手優秀発表賞」を、2019年度は人類働態学会西日本地方会第44回大会にて「若手優秀発表賞」を受賞した。また学部全学年において講義・演習・実験を担当することができ、学生の成長と併せた教育機会を持つことができた。また「3学部合同基礎演習」の実施に関しては、2018年度は情報科学部副代表として、2019年度は情報科学部代表として当該講義の円滑的・効果的な実施に取り組んでいる。

2019年度	3学部合同基礎演習、情報科学基礎実験β-2（前期）、システム工学実験Ⅰ、システム工学実験Ⅱ、情報科学基礎実験β-2（後期）、外書講読Ⅰ
2018年度	3学部合同基礎演習、情報科学基礎実験β-2（前期）、システム工学実験Ⅰ、情報科学基礎実験β-2（後期）、システム工学実験Ⅱ、外書講読Ⅰ

【研究活動】

モニタリング・エラー抑制インターフェースと眼と手の協応関係に関する研究と、仮現運動が誘発する視空間の歪みを抑制する対策に関する研究（ともにJSPS科研費支援テーマ）を中心に、サーバント・リーダーシップと協調的フォロワーシップに関する研究、予見音を用いた生活道路の安全対策研究、サウンドスケープの定量化に関する研究など、人間工学を中心とした領域の研究を広範囲で実施している。その成果は学会発表を重ねることで深化させることを心がけ、2020年度以降順次、査読付国際会議録・ジャーナル論文への昇華を進めている。さらに研究成果は学生への研究教育にフィードバックすると共に講演活動やシンポジウム開催など様々な機会を通じ

て公表している。

1. 高橋雄三：高齢者の労働安全衛生－なにを、どのように支援すべきか－，感性工学，18巻1号，pp.24-29，2020
2. Yuzo Takahashi, Momoko Hayata, Estimate of Metacognitive state using Eye-Hand Coordination during Monitoring error in VDT Work, Proceedings of the 14th International Conference on Industrial Management, pp.58-64, 2018
3. Yuzo Takahashi, Development of Intention Inference Algorithm Based on EMG Signals at Judging Directional of Arrow Cues, Proceedings of the 20th Congress of the International Ergonomics Association(IEA2018), pp.405-412, 2018
4. 研究発表，鈴木諒，高橋雄三，応答曲面法を用いたチームのフォーメーション重心推定の試み，人類働態学会西日本地方会第44回大会，2019年12月
5. 研究発表，高橋雄三，独立成分分析を用いた重心動揺に含まれる視覚性立ち直り反射成分抽出の試み，第48回人類働態学東日本地方会，2019年11月
6. 研究発表，鈴木諒・高橋雄三，チーム行動の幾何学的特徴を用いた協調行動ダイナミクスの定量的検討，産業保健人間工学会第24回大会，2019年10月
7. 研究発表，高橋雄三，知覚される仮現運動の運動方向が線分の長さの知覚精度に及ぼす影響，第54回人類働態学会全国大会，2019年6月
8. 研究発表，高橋雄三・原浩樹，チーム行動における協調行動ダイナミクスの定量的評価手法の検討，日本人間工学会第60回全国大会，2019年6月
9. 研究発表，北村颯馬・高橋雄三，交通参加者の不安全行動を考慮した交差点サウンドスケープの基礎的検討，第27回日本人間工学会システム大会，2019年3月
10. 研究発表，原浩樹，高橋雄三，チームスポーツにおける選手相互の協調行動ダイナミクスの定量的検討，第43回人類働態学会西日本地方会，2018年12月
11. 研究発表，北村颯馬，高橋雄三，バイノーラル録音された交差点サウンドスケープにおける予見情報の周波数特性，第43回人類働態学会西日本地方会，2018年12月
12. 研究発表，北村颯馬，高橋雄三，交通コンフリクト状態を未然に防ぐ予見音の特徴解析，第47回人類働態学東日本地方会，2018年11月
13. 研究発表，原浩樹，高橋雄三，チームスポーツにおける協調的フォロワーシップ行動モデルの検討，第47回人類働態学東日本地方会，2018年11月
14. 研究発表，高橋雄三，立位姿勢維持精度に影響を及ぼす視運動性体反射成分同定の試み，産業保健人間工学会第23回大会，2018年10月
15. 研究発表，高橋雄三・小川紗知，チームスポーツにおける協調的フォロワーシップ行動の定量的評価の試み，第53回人類働態学会全国大会，2018年6月
16. 研究発表，安達勇樹・高橋雄三，危険回避行動を促すバイノーラル予見音解析手法の検討，日本人間工学会第59回大会，2018年6月

【社会活動】

自身の研究フィールドの COE である国際人間工学連合の Affiliated Society である人類働態学会の理事や産業医・産業看護師・産業保健師の活動領域における人間工学を研究・実践する産業保健人間工学会の理事、国際会議のプログラム委員など、学術団体での活動に力を入れている。また、地域医療を支える看護師養成課程において看護人間工学を講義するだけでなく、企業との共同研究などに結びつく講演活動などの活動も展開している。

2019年5月-2021年10月	産業保健人間工学会 理事
2020年1月-2021年9月	15th International Conference on Industrial Management プログラム委員
2018年6月-2018年12月	第43回人類働態学会西日本地方会 大会長
2018年7月-2018年8月	平成30年度広島市立大学情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」, 広島市立大学社会連携センター
2018年6月-2020年6月	人類働態学会 第25期理事
2018年1月-2018年9月	14th International Conference on Industrial Management プログラム委員
2017年7月-2019年5月	日本経営工学会論文誌 第34期編集委員
2016年6月-2018年6月	人類働態学会 第24期理事

氏名	高濱 徹行
職位	教授
研究分野	計算知能、進化的計算、最適化
研究キーワード	ナチュラル・コンピューティング、進化的アルゴリズム、最適化アルゴリズム

進化的アルゴリズムを代表とする、複数の探索点を用いて最適解を探索する集団的最適化アルゴリズムの設計・改良と最適化アルゴリズムの応用を中心的なテーマとして研究・教育活動を行った。研究活動では、科研費のテーマである「高次元多峰性問題における山谷構造と分布タイプ推定を利用した効率的な集団的最適化」に関する研究を行った。教育活動では、大学院生向けに集団的最適化手法を用いたファジィ推論ルールの教師あり学習手法の教育を、卒研生向けに計算知能分野の教育・研究を、学部生向けにニューラルネットワーク、概念学習、ベイズ学習など基本的な機械学習手法の教育と数理的最適化に関する教育を行った。

【教育活動】

大学院生向けの機械学習特論では、人間が得意とする曖昧な概念を体系的に取り扱うためにファジィ集合・ファジィ推論などを、集団的最適化手法として遺伝的アルゴリズム・差分進化などを、機械学習手法としてファジィ推論ルールの教師あり学習手法の教育を共同で行った。3年生向けの機械学習では、基本的な機械学習手法として、ニューラルネットワーク・概念学習・決定木の学習・ベイズ学習・競合学習などを教育した。2年生向けの数理計画法では、実問題の定式化からはじめ、線形計画問題・ネットワーク計画問題とその解法を中心に、非線形計画問題への導入教育を行った。1年生向けのデータ構造とアルゴリズム I では、プログラミングのために必須となるアルゴリズムとデータ構造に関する教育を行った。

2019 年度	機械学習特論、数理計画法、機械学習、データ構造とアルゴリズム I
2018 年度	機械学習特論、数理計画法、データ構造とアルゴリズム I、機械学習、情報科学序説

【研究活動】

最適解の探索が非常に困難である高次元多峰性問題を効率的かつ安定的に解くための研究を進めており、主な研究成果は次の通りである。①粒子群最適化において、変数間依存関係の高い最適化問題を効率的に解くために、斜交座標に基づく速度更新式・突然変異・動的スケールリングを提案した。②差分進化において、変数間依存関係の高い最適化問題を効率的に解くために、相関行列を利用して遺伝子をグループ化し、グループ毎に交叉を行うグループ交叉を提案した。③実問題に多い制約付き最適化問題を解くための代表的手法であるペナルティ法において、ペナルティ係数を適応的に調整する EPC (Equivalent Penalty Coefficient) 法を提案した。EPC 法では、集団的最適化手法において親と子と比較する際に、親と子の拡張目的関数値が一致するペナルティ係数の集合をソートし、90% ランクに相当する値をペナルティ係数として用いる。EPC 法を差分進化と粒子群最適化に適用し、有効性を示した。

図書

1. Setsuko Sakai and Tetsuyuki Takahama, "A Study on a Directional Mutation Operation for an Adaptive Differential Evolution", in Current Researches for Applied Economics, Information Systems, Mathematics and OR, Kyushu University Press, 2020, Co-author
2. Setsuko Sakai and Tetsuyuki Takahama, "A Study on an Equivalent Penalty Coefficient Value for Adaptive Control of the Penalty Coefficient in Constrained Optimization by Differential Evolution", in Advanced Studies in Economic Sciences: Information Systems, Economics and OR, Kyushu University Press, 2019, Co-author
論文・国際会議
3. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, ϵ 制約法とパレートのアプローチを用いた Differential Evolution による複数車両の同時最適化, 進化計算学会論文誌, Vol.10, No.1, pp.2-11, 2020
4. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, Constrained Optimization by Improved Particle Swarm Optimization with the Equivalent Penalty Coefficient Method, Proc. of the 3rd International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics (SWARM2019), pp.266-273, 2019
5. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, Tetsuyuki Takahama, Time Series Prediction Using Deterministic Geometric Semantic Genetic Programming, Proc. of 2019 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC2019), pp.1945-1949, 2019
6. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, An Equivalent Penalty Coefficient Method: An Adaptive Penalty Approach for Population-Based Constrained Optimization, Proc. of 2019 IEEE Congress on Evolutionary Computation (CEC2019), pp.1621-1628, 2019
7. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, A New Binomial Crossover Considering Correlation Among Decision Variables for Adaptive Differential Evolution, Proc. of Joint 10th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 19th International Symposium on Advanced Intelligent Systems (SCIS&ISIS2018), pp.467-473, 2018
8. T.Takahama, S.Sakai, The Velocity Updating Rule According to an Oblique Coordinate System with Mutation and Dynamic Scaling for Particle Swarm Optimization, Artificial Life and Robotics, Vol.23, No.4, pp.618-627, 2018
9. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, Grouping of Genes According to Correlation Coefficients and Grouping-Based Crossover for Adaptive Differential Evolution, The 50th ISICIE International Symposium on Stochastic Systems Theory and Its Applications (SSS'18), extended abstract, pp.618-627, 2018

研究報告

10. 阪井節子, 高濱徹行, 集団的降下法に対するペナルティ係数の適応的調整法の提案, 数理

解析研究所講究録 2126, pp. 53-62, 2019

11. 阪井節子, 高濱徹行, 変数間依存性を解消する変換を導入したブレンド交叉の提案, 数理解析研究所講究録 2078, pp. 65-72, 2018

研究発表

12. 高濱徹行, 阪井節子, 失敗情報を利用する適応的差分進化アルゴリズム, 第30回ソフトウェアサイエンス・ワークショップ, 2020年3月
13. 阪井節子, 高濱徹行, 相関係数を用いた遺伝子のグループ化に基づくグループ交叉を導入した適応的差分進化, 京都大学数理解析研究所共同研究(公開型)「不確実・不確定性の下における数理的意味決定の理論と応用」, 2019年11月
14. 阪井節子, 高濱徹行, 集団的降下法に対するペナルティ係数の適応的調整法の提案, 京都大学数理解析研究所共同研究(公開型)「不確実性の下での意味決定の数理とその周辺」, 2018年11月
15. 高濱徹行, 阪井節子, 差分進化における相関係数に基づく遺伝子のグループ化とグループ単位の交叉の提案, 情報処理学会 第120回数理解析モデル化と問題解決研究会, 2018年9月受賞
16. Best Paper Award, The 3rd International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics, 2019

【社会活動】

情報科学部の社会活動として、高校生が夏休みを利用して情報科学部で研究活動を体験する「高校生による情報科学自由研究」と、情報科学研究科の教員が専門分野に関する講演会を行う「情報科学部公開講座」を毎年開催している。2019年度社会連携委員長として、これらの活動の企画・実施に協力した。

	所属学会
1999年5月－現在	IEEE
1995年10月－現在	電子情報通信学会
1994年1月－現在	言語処理学会
1986年10月－現在	人工知能学会
1985年4月－現在	情報処理学会

氏名	竹澤 寿幸
職位	教授
研究分野	知能情報学、知覚情報処理・知能ロボティクス
研究キーワード	音声言語情報処理、自然言語処理

知識基盤社会におけるさまざまな形態のコミュニケーションに対応する知識情報処理において極めて重要な役割を担う、言語と音声に関する情報処理技術の基礎から応用までの幅広い教育・研究活動を行う。実際に動いて役に立つシステムを構築したり、大規模なコーパスを用いた現実の課題に取り組みせたりすることで、社会の役に立つ人材に育つよう教育を行う。特に優秀な学生に対しては、言語と音声を組み合わせたフロンティア領域を開拓するよう研究指導を行う。研究成果は論文や学会・国際会議等で広く発表し、企業との共同研究ないし受託研究等の産学連携に結び付け、地域や社会に貢献する。

【教育活動】

大学院博士前期課程の科目「音声言語情報処理特論」で、音声認識・対話・翻訳技術を講義し、実際に言語モデルを構築して、音声認識システムを動作させる課題を課している。

学部では知能工学科の科目「数値解析」と「自然言語処理」を担当している。「自然言語処理」では、形態素解析、構文解析、意味解析等の基礎技術を講義し、後半では音声認識と機械翻訳の話題を扱っている。

2019年度	音声言語情報処理特論、技術英語演習 II、数値解析、自然言語処理、地域実践演習
2018年度	音声言語情報処理特論、地域実践演習、技術英語 II、数値解析、自然言語処理、地域課題演習

【研究活動】

平成 25 年度文部科学省の事業である COI STREAM の下で科学技術振興機構 (JST) が実施する COI プログラムに採択された「精神的価値が成長する感性イノベーション拠点」に参画し、音声対話や表情からの感性情報の獲得と利用に関する研究を推進している。その他、企業との共同研究や受託研究も進める。

1. Naoki Shibata, Hiroto Shinoda, Hidetsugu Nanba, Aya Ishino, and Toshiyuki Takezawa, Classification and Visualization of Travel Blog Entries Based on Types of Tourism, ENTER2020 International eTourism Conference
The 27th Annual Conference Organized by IFITT, pp.1-6, 2020
2. 目良和也、青山正人、黒澤義明、竹澤寿幸、発話内容と口調の関係に基づく発話者の嗜好情報推定, 知能と情報 (日本知能情報ファジィ学会誌), Vol. 31, No. 5, pp. 816-825, 2019
3. Shota Saitou, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Correlation

Analysis between Subjectively Annotated Emotions and Objectively Annotated Emotions, The International MultiConference of Engineers and Computer Scientists 2019 (IMECS 2019), pp.816-825, 2019

4. Shumpei Iinuma, Hidetsugu Nanba, and Toshiyuki Takezawa, Investigating the effectiveness of computer-produced summaries obtained from multiple travel blog entries, Information Technologies & Tourism, pp.1-21, 2018
5. Tatsuhiro Sakai, Keiichi Tamura, Hajime Kitakami, and Toshiyuki Takezawa, Density-based Multimodal Spatial Clustering using Pre-trained Deep Network for Extracting Local Topics, Proceedings of the Fifth International ACM SIGMOD Workshop on Managing and Mining Enriched Geo-Spatial Data, pp.7-12, 2018
6. 酒井達弘、田村慶一、北上始、竹澤寿幸, 最小外接矩形とセルの再帰分割を用いたセルベースのDBSCANの高速化, 電子情報通信学会和文論文誌D「データ工学と情報マネジメント特集」, Vol. J101-D, No. 4, pp.7-12, 2018
7. Certificate of Merit for The 2019 IAENG International Conference on Computer Science, IMECS 2019, 2019

ほか 20 件

【社会活動】

専門性を生かした学術活動のみならず、地域から依頼された社会貢献活動を引き受け、産学連携、地域貢献を推進する。

2019年10月-2020年5月	the Scientific Committee for the LREC 2020 (the 12th International Conference on Language Resources and Evaluation)
2019年6月-2019年10月	PyCon mini Hiroshima 2019, 実行委員
2019年4月-2021年3月	公益財団法人ひろしま産業振興機構経営委員会, 委員
2018年10月-2020年9月	広島市立図書館協議会委員 (副委員長)
2018年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018 ～AI(人工知能)とビッグデータでできること～, 公立大学法人 広島市立大学、広島市
2018年9月-2020年8月	広島産学公連携 MICE 推進協議会, 委員
2018年7月-2020年6月	公益財団法人広島市みどり生きもの協会, 評議員
2018年1月-2019年3月	広島リサーチコンプレックス推進協議会, 幹事

ほか 21 件

氏名	田中 公一
職位	教授
研究分野	電子・電気材料工学、素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理
研究キーワード	半導体光物性、量子井戸、シリコン微粒子、宇宙線

教育活動においては学部生、大学院生に最先端の実験機器を紹介し、英語でコミュニケーションがとれるよう国際共同研究にも参加させた。研究活動においては、宇宙線データを解析することになり、責任が重くなった。社会活動において論文の査読や高校生の研究指導などを行った。以上、各分野について概ね目標を達成できたと考える。

【教育活動】

学部4年生、大学院生の研究指導を行い、宇宙線観測実験のために東京大学宇宙線研究所明野観測所に年3回程度、また2019年にはインド国タミルナドゥ州ウーティ市にある宇宙線観測施設GRAPES-3に研究のため派遣した。英語を必要とするインドグループとの定例会議に学生を出席させた。その結果、学部4年生には国内会議で発表させ、卒業論文としてまとめさせた。大学院生については、国際シンポジウムにて口頭発表する指導を行うことができた。

2019年度	物理学概論、地球環境論、情報物性特論I、物理学、物理化学実験、情報科学基礎実験α
2018年度	物理学概論、地球環境論、情報物性特論I、物理学、物理化学実験、情報科学基礎実験α

【研究活動】

宇宙線観測実験のために東京大学宇宙線研究所明野観測所に年数回程度、国際共同研究を行うインド国の宇宙線観測施設GRAPES-3に行き、宇宙線観測を行った。また、多量の宇宙線データの処理プログラムの作成に携わった。さらに、多重量子井戸に関する研究において国際会議で発表を行った。

1. K. Tanaka, M. Fujiwara, N. Happo and S. Takahashi, Eigen-State Energies in Asymmetric double Quantum Wells Lattice-Matched to InP, Proceedings of 19th International Conference on Numerical Simulation of Optoelectronic Devices, pp. 35-36, 2019
2. Koichi Tanaka(筆頭), Kanami Okamoto, Photoluminescence Spectroscopy of Si:SiO₂ Films Fabricated by Radio Frequency Sputtering, Key Engineering Materials, Vol. 790, pp. 37-42, 2018
3. R. U. Abbasi, M. Abe, T. Abu-Zayyad, M. Allen, R. Azuma, E. Barcikowski, J. W. Belz, D. R. Bergman, S. A. Blake, R. Cady, B. G. Cheon, J. Chiba, M. Chikawa, A. Di Matteo, T. Fujii, K. Fujita, M. Fukushima, G. Furlich, T. Goto, W. Hanlon, M.

- Hayashi, Y. Hayashi, N. Hayashida, K. Hibino, K. Honda, D. Ikeda, N. Inoue, T. Ishii, R. Ishimori, H. Ito, D. Ivanov, H. M. Jeong, S. Jeong, C. C. H. Jui, K. Kadota, F. Kakimoto, O. Kalashev, K. Kasahara, H. Kawai, S. Kawakami, S. Kawana, K. Kawata, E. Kido, H. B. Kim, J. H. Kim, J. H. Kim, S. Kishigami, S. Kitamura, Y. Kitamura, V. Kuzmin, M. Kuznetsov, Y. J. Kwon, K. H. Lee, B. Lubsandorzhiev, J. P. Lundquist, K. Machida, K. Martens, T. Matsuyama, J. N. Matthews, R. Mayta, M. Minamino, K. Mukai, I. Myers, K. Nagasawa, S. Nagataki, R. Nakamura, T. Nakamura, T. Nonaka, A. Nozato, H. Oda, S. Ogio, J. Ogura, M. Ohnishi, H. Ohoka, T. Okuda, Y. Omura, M. Ono, R. Onogi, A. Oshima, S. Ozawa, I. H. Park, M. S. Pshirkov, D. C. Rodriguez, G. Rubtsov, D. Ryu, H. Sagawa, R. Sahara, K. Saito, Y. Saito, N. Sakaki, N. Sakurai, L. M. Scott, T. Seki, K. Sekino, P. D. Shah, F. Shibata, T. Shibata, H. Shimodaira, B. K. Shin, H. S. Shin, J. D. Smith, P. Sokolsky, B. T. Stokes, S. R. Stratton, T. A. Stroman, T. Suzawa, Y. Takagi, Y. Takahashi, M. Takamura, R. Takeishi, A. Taketa, M. Takita, Y. Tameda, H. Tanaka, K. Tanaka, M. Tanaka, S. B. Thomas, G. B. Thomson, P. Tinyakov, I. Tkachev, H. Tokuno, T. Tomida, S. Troitsky, Y. Tsunesada, K. Tsutsumi, Y. Uchihori, S. Udo, F. Urban, T. Wong, M. Yamamoto, R. Yamane, H. Yamaoka, K. Yamazaki, J. Yang, K. Yashiro, Y. Yoneda, S. Yoshida, H. Yoshii, Y. Zhezher, and Z. Zundel, Evidence of Intermediate-scale Energy Spectrum Anisotropy of Cosmic Rays $E \geq 10^{19.2}$ eV with the Telescope Array Surface Detector, *The Astrophysical Journal*, Vol.862, No.2, pp.91-, 2018
4. Koichi Tanaka, M. Fujiwara, N. Happo, S. Takahashi, Minibands of eigen-state energies of $\text{In}_{0.53}\text{Ga}_{0.47}\text{As}$ multi-quantum wells lattice-matched to InP, *Optical and Quantum Electronics*, Vol.50, No.8, pp.301-1-301-8, 2018
 5. R. U. Abbasi, M. Abe, T. Abu-Zayyad, M. Allen, R. Azuma, E. Barcikowski, J. W. Belz, D. R. Bergman, S. A. Blake, R. Cady, B. G. Cheon, J. Chiba, M. Chikawa, A. di Matteo, T. Fujii, K. Fujita, M. Fukushima, G. Furlich, T. Goto, W. Hanlon, M. Hayashi, Y. Hayashi, N. Hayashida, K. Hibino, K. Honda, D. Ikeda, N. Inoue, T. Ishii, R. Ishimori, H. Ito, D. Ivanov, H. M. Jeong, S. M. Jeong, C. C. H. Jui, K. Kadota, F. Kakimoto, O. Kalashev, K. Kasahara, H. Kawai, S. Kawakami, S. Kawana, K. Kawata, E. Kido, H. B. Kim, J. H. Kim, J. H. Kim, S. Kishigami, S. Kitamura, Y. Kitamura, V. Kuzmin, M. Kuznetsov, Y. J. Kwon, K. H. Lee, B. Lubsandorzhiev, J. P. Lundquist, K. Machida, K. Martens, T. Matsuyama, J. N. Matthews, R. Mayta, M. Minamino, K. Mukai, I. Myers, K. Nagasawa, S. Nagataki, R. Nakamura, T. Nakamura, T. Nonaka, H. Oda, S. Ogio, J. Ogura, M. Ohnishi, H. Ohoka, T. Okuda, Y. Omura, M. Ono, R. Onogi, A. Oshima, S. Ozawa, I. H. Park, M. S. Pshirkov, D. C. Rodriguez, G. Rubtsov, D. Ryu, H. Sagawa, R. Sahara, K. Saito, Y. Saito, N. Sakaki, N. Sakurai, L. M. Scott, T. Seki, K. Sekino, P. D. Shah, F. Shibata, T.

- Shibata, H. Shimodaira, B. K. Shin, H. S. Shin, J. D. Smith, P. Sokolsky, B. T. Stokes, S. R. Stratton, T. A. Stroman, T. Suzawa, Y. Takagi, Y. Takahashi, M. Takamura, M. Takeda, R. Takeishi, A. Taketa, M. Takita, Y. Tameda, H. Tanaka, K. Tanaka, M. Tanaka, S. B. Thomas, G. B. Thomson, P. Tinyakov, I. Tkachev, H. Tokuno, T. Tomida, S. Troitsky, Y. Tsunesada, K. Tsutsumi, Y. Uchihori, S. Udo, F. Urban, T. Wong, M. Yamamoto, R. Yamane, H. Yamaoka, K. Yamazaki, J. Yang, K. Yashiro, Y. Yoneda, S. Yoshida, H. Yoshii, Y. Zhezher, Z. Zundel, Depth of Ultra High Energy Cosmic Ray Induced Air Shower Maxima Measured by the Telescope Array Black Rock and Long Ridge FADC Fluorescence Detectors and Surface Array in Hybrid Mode, The Astrophysical Journal, Vol. 858, No. 2, pp. 76-, 2018
6. 研究発表, 浅羽孝典, 日比野欣也, 堀田直己, 片寄祐作, 加藤千尋, 加藤勢, 川田和正, 小島浩司, Mayta R., Miranda P., 三井嘉子, 宗像一起, 中村佳昭, 西澤正己, 荻尾彰一, 大西宗博, 大嶋晃敏, Raljevich M., Rivera H., 齋藤敏治, 塔隆志, 佐古崇志, 佐々木琢朗, 千石由佳子, 柴田祥一, 塩見昌司, Subieta M., 田島典夫, 瀧田正人, 多米田裕一郎, 田中公一, Ticona R., 土屋晴文, 常定芳基, 有働慈治, 若松海帆, 八木沢夏穂, ALPACA 実験 8 : ALPACA の性能評価と ALPAQUITA 進捗状況 3, 日本物理学会 第 73 回年次大会 (2018 年), 2018 年 9 月
 7. 研究発表, 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 小島浩司, 柴田祥一, 高丸尚教, 田中公一, 田中秀樹, 中村亨, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 森下伊佐夫, P. K Mohanty, S. K Gupta, S. C. Tonwar, S. R Dugad, GRAPES-3 実験における新ミュオン検出器の建設の現状について, 日本物理学会 2018 年秋季大会, 2018 年 9 月
 8. 研究発表, 小島浩司, 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 山崎勝也, 柴田祥一, 森下伊三男, 高丸尚教, 中村亨, 田中公一, 鈴木建司, S. C. Tonwar, S. K. Gupta, P. K. Mohanty, S. K. Duggad, 大面積高精度 muon 望遠鏡による方位別宇宙線強度変動の研究 (21), 日本物理学会 2018 年秋季大会, 2018 年 9 月
 9. 研究発表, 田中公一, 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 小島浩司, 柴田祥一, 高丸尚教, 田中秀樹, 中村亨, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 森下伊佐夫, P. K Mohanty, S. K Gupta, S. C. Tonwar, S. R Dugad, GRAPES-3 実験における大型 NaI 検出器の導入について, 日本物理学会 2018 年秋季大会, 2018 年 9 月
 10. 研究発表, 野中敏幸, 池田大輔, 石井孝明, 石森理愛, 伊藤裕貴, 井上直也 D, 稲富大地, 今岡慧, 岩倉広和, 上濱孝文, 内堀幸夫, 有働慈治, 大岡秀行, 大嶋晃敏, 大西宗博, 大野木瞭太, 荻尾彰一, 奥田剛司, 奥悠弥, 小倉潤, 小澤俊介, 織田浩行, 小野勝臣, 尾村勇吾, 垣本史雄, 笠原克昌, 笠見沙織, 門多顕司, 亀井啓太, 河合秀幸, 川上三郎, 川田和正, 川名進吾, 岸上翔一, 北村星爾, 北村雄基, 木戸英治, 小西翔吾, 斉藤公紀, 齋藤保典, 榎直人, 佐川宏行, 佐久間康二, 櫻井信之, さこ隆志, 佐原涼介, 芝田達伸, 下平英明, 申興秀, 須澤拓光, 関皓月, 関野幸市, 高木芳紀, 高橋優一, 高村茉衣, 瀧田正人, 武石隆治, 武多昭道, 竹田成宏, 田中公一, 田中秀樹, 田中真伸, 田上裕太, 多米田裕一郎, 千川道幸, 千葉順成, 辻本まい, 堤一樹, 常定芳基, 得能久生, 富田孝

幸, 中井慧, 長滝重博, 中村亨, 中村凌, 西本義樹, 野里明香, 林幹樹, 林嘉夫, 林田直明, 日比野欣也, 福島正己, 藤井俊博, 藤田慧太郎, 藤原亮太, 本田建, 松平知也, 松山利夫, K. Martens, 屋代健太, 山岡広, 山崎勝也, 山本真周, 吉井尚, 吉田滋, 和知慎吾, R. U. Abbasi, T. Abu-Zayyad, M. Allen, R. Anderson, E. Barcikowski, J. W. Belz, D. R. Bergman, S. A. Blake, R. Cady, M. J. Chae, B. G. Cheon, W. R. Cho, W. Hanlon, D. Ivanov, C. C. H. Jui, O. Kalashev, H. B. Kim, J. H. Kim, J. H. Kim, V. Kuzmin, Y. J. Kwon, J. Lan, S. I. Lim, J. P. Lundquist, J. N. Matthews, I. Myers, I. H. Park, M. S. Pshirkov, D. C. Rodriguez, G. Rubtsov, D. Ryu, L. M. Scott, P. D. Shah, B. K. Shin, J. D. Smith, P. Sokolsky, R. W. Springer, B. T. Stokes, S. R. Stratton, W, T. A. Stroman, S. B. Thomas, G. B. Thomson, P. Tinyakov, Z, I. Tkachev, S. Troitsky, F. Urban, G. Vasiloff, T. Wong, J. Yang, R. Zollinger, Z. Zundel, TA 実験 315 : TA 実験 全体報告, 日本物理学会 第 73 回年次大会 (2018 年), 2018 年 9 月

【社会活動】

インド国の大学院生の博士論文の査読を行った。高校生のための広島県科学セミナーに審査員として参加した。産学連携研究発表会や地域貢献事業発表会へ出展した。

2020 年 2 月	平成 29 年度広島県科学セミナー, 広島県教育委員会
2019 年 11 月	2019 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019 ～IT の力で未来を切り拓～, 公立大学法人 広島市立大学、広島市
2019 年 1 月	平成 29 年度広島県科学セミナー, 広島県教育委員会
2018 年 11 月	平成 30 年度広島市立大学情報科学部公開講座
2018 年 11 月	2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018 ～AI II((人工知能))とビッグデータでできること～, 公立大学法人 広島市立大学、広島市
2001 年 1 月-	電子情報通信学会
1991 年 9 月-	応用物理学会
1985 年 10 月-	日本物理学会

氏名	田中 輝雄
職位	教授
研究分野	計画数学、確率論、確率過程論、数学教育
研究キーワード	集合値確率過程、最適停止問題、バンディット問題、確率制御問題、確率過程、動的計画法、数理計画法、マルコフ決定過程、階層化意思決定法、探索理論、スポーツ最適化、数学教育、確率微分方程式

数学に関する教育活動、研究活動、大学運営および社会貢献を中心に行った。教育活動では、教職に関する「教科教育法（数学）I, II」および「数理科学特論 A」を通して数学基礎力、数学指導力の向上に努めた。数学内容学の研究活動では、最適停止問題、確率制御問題およびマルコフ決定過程の研究に取り組んだ。また、数学教育の研究活動では、数学科教育法に関する研究に取り組み、数学教育学会にて研究成果の発表を行った。大学運営では、推薦入学者に対する数学の入学前指導ワーキンググループ委員、広報委員会委員、教職課程委員会委員等を務めた。社会貢献では、高等学校「授業研究」教科数学において指導講師を務めた。

【教育活動】

「教科教育法（数学）I, II」では、高校数学科解析学分野を担当するために必要な基本的知識、よい授業を実践できる能力を修得させることを目標にした。高校数学科解析学分野に関する授業の目標、あり方、展開の仕方、構成方法、指導方法等について教授に努め、さらに指導案の作成、および模擬授業の実施や観察を通して、実際の授業構成や授業展開に必要な技能の教授に努めた。「数理科学特論 A」では、ブラウン運動と確率微分方程式の基礎と応用に関する知識を修得させることを目標にした。決定論的現象と非決定論的現象の違い、常微分方程式と確率微分方程式の違いを意識させながら、乱数、確率微分方程式の基礎、数値計算法等について教授に努めた。

2019 年度	数理科学特論 A、教科教育法（数学）I、教科教育法（数学）II
2018 年度	教科教育法（数学）I、数理科学特論 A、教科教育法（数学）II

【研究活動】

数学教育、最適停止問題、確率制御問題、マルコフ決定過程の研究に取り組んだ。数学教育では、「教員養成系学部をもたない大学での数学科教育法の授業の実践例について」と題して数学教育学会で発表を行った。最適停止問題では、多次元時間変数を持つ確率過程に対して制約条件付き最適停止問題の定式化を与え、ラグランジェ双対理論を展開し最適停止時刻の特徴付けを行った。確率制御問題では、分数型評価基準の最適化問題の定式化を与え、最適制御を求めるアルゴリズムと最適値の特徴付けを行った。マルコフ決定過程では、制約条件付き max 分数型評価基準の最適化問題の定式化を与え、ラグランジェ双対理論を展開し最適政策の特徴付けを行った。

1. 田中輝雄, 関根光弘, 齋藤夏雄, 岡山友昭, 廣門正行, 百武弘登, 教員養成系学部をもたない大学での数学科教育法の授業の実践例について, 数学教育学会 2019 年度秋季例会予稿集, pp. 99-101, 2019

【社会活動】

社会活動では、数学が関連する活動として、令和元年度に学校法人広陵学園広陵高等学校「授業研究」教科数学において指導講師を務めた。今後は、高校への模擬授業や公開講座等の高大接続の取り組み等で数学を通して貢献できる取り組みを、機会が許すならば担当する。高校生の数学への関心を高めることができる機会ととらえ、さらに本学のアピールに貢献する。

2019年10月	学校法人広陵学園広陵高等学校 令和元年度「授業研究」教科数学 指導講師
2013年3月-	日本オペレーションズ・リサーチ学会
2012年1月-	Informs/Applied probability Society
2008年1月-	Mathematical Optimization Society
2005年4月-	数学教育学会
2005年4月-	日本数学教育学会
1995年1月-	Bernoulli Society for Mathematical Statistics and Probability
1991年1月-	Institute of Mathematical Statistics
1990年4月-	日本数学会

氏名	田中 宏和
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、生体医工学・生体材料学、電子デバイス・電子機器
研究キーワード	無線通信システム、誤り訂正符号化技術、情報理論、マルチメディアシステム

教育・研究・社会活動の3点とも比較的バランス良く配分できた。研究活動におけるテーマと社会活動で主に貢献している国際標準化活動をリンクさせることで、両方のバランスを旨く取ることができた。更に国際標準化活動を通じて得られる各国の技術開発状況や世界の技術動向を教育（主に大学院講義等）の中にも取り入れて情報提供することで、教育への貢献をした。

【教育活動】

できるだけ、企業活動動向や世界の技術動向等、世の中の動きを取り入れた講義を心がけている。、大学院講義、学部講義、卒論研究・修論研究等で幅広く実施する。

2019年度	医用情報通信特論、情報ネットワーク、医用情報ネットワーク
2018年度	3 学部合同基礎演習、医用情報通信特論、情報ネットワーク、医用情報ネットワーク、情報と企業

【研究活動】

上記の通り、研究活動と社会活動をリンクさせることで研究テーマを選んできた。各種国際標準化活動等を通じて技術提案できる内容を研究することで、実践的な研究活動を行うことが出来た。

1. 田中宏和, 高齢化社会対応 e-health および AAL の技術動向および標準化動向, 2018 年電子情報通信学会総合大会, 2018
2. Mizuki Arita, Takumi Horikawa, Yasutaka Hatakeyama, and Hirokazu Tanaka, A note on Stress Estimation Based on Salivary Amylase Activity and Heart Rate Variability Analysis, 2018 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA 2018), Vol. RS, No. 10, pp. 109-112, 2018
3. Kento Takabayashi, Hirokazu Tanaka and Katsumi Sakakibara, Integrated Performance Evaluation of the Smart Body Area Networks Physical Layer for Future Medical and Healthcare IoT, Sensors, Vol. Vol. 19, No. 1, 30, pp. 1-21, 2018
4. 有田瑞紀・山中仁昭・田中宏和, 複数の BAN が存在する環境を想定した SmartBAN の干渉回避手法に関する一考察, 信学技報 SIS2018-22, Vol. vol. 118, No. 346, pp. 7-12, 2018
5. 中村晃輔・有田瑞紀・山中仁昭・田中宏和, UAV を用いた長距離海上無線通信システムの伝送距離延長に関する一検討, 信学技報 SIS2018-21, Vol. vol. 118, No. 346, pp. 1-6, 2018

6. Kento Takabayashi, Hirokazu Tanaka, Chika Sugimoto, Katsumi Sakakibara and Ryuji Kohno, Performance Evaluation of a Quality of Service Control Scheme in Multi-Hop WBAN Based on IEEE 802.15.6, Sensors, Vol.18, No.11, pp.1-20, 2018
7. Mizuki Arita, Takahumi Takada, Yasutaka Hatakeyama and Hirokazu Tanaka, A Note on Switching Process of the SmartBAN Data Channel for Multi-Body Area Network, Proc.on 2018 International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (ISPACS), Vol.WM1B, No.3, pp.31-36, 2018
8. Kento Takabayashi, Hirokazu Tanaka and Katsumi Sakakibara, Evaluation of Preamble Detection in ETSI SmartBAN PHY, BodyNets 2018, Oulu, pp.31-36, 2018
9. Hirokazu Tanaka, Yasutaka Hatakeyama, Tatsuya Komori, Satomi Saho and Nobuo Shiode, Evaluation of PWT Based Blood Pressure Fluctuation using Body Area Network, Proc. on the 40th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC' 18), pp.31-36, 2018
10. Shigenobu Minami, Hirokazu Tanaka and Tsutomu Miyamoto, An Edge Base PHR Platform "miParu" Using Secure SD Card, Proc. on The 40th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC' 18), pp.31-36, 2018
11. Kento Takabayashi, Hirokazu Takaka and Katsumi Sakakibara, Performance Evaluation of Error Control Scheme in ETSI SmartBAN PHY, Proc. on IEEE Global IoT Summit, pp.31-36, 2018

【社会活動】

社会貢献は主に学会活動と国際標準化活動（及びその関連委員会活動）の2つであった。学会活動としては、電子情報通信学会の研究専門委員会委員長等で主に活動を行い、国際標準化活動としては議長・副議長を務めることを通じて社会貢献した。関連する国内委員会では、各種国内委員会活動を通じて議長・主査・専門委員として貢献した。

2017年-2018年	電子情報通信学会, 2018 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA) General Co-Chair
2016年-	電子情報通信学会, スマートインフォメディアシステム研究専門委員会 委員長
2016年12月-	実践情報科学セミナー, 広島市立大学
2016年6月-	電子情報通信学会 スマートインフォメディアシステム研究専門委員会 委員長
2016年6月-	電子情報通信学会, スマートインフォメディアシステム研究専門委員会 委員長
2015年8月-	AAL 国内対応委員会 委員
2015年8月-	日本規格協会, AAL 国内対応委員会
2015年3月-	国際電気標準会議 (IEC) Systems Committee Active Assisted

	Living (Syc.AAL) WG1 議長
2014 年-	電子情報通信学会, ヘルスケア医療情報通信技術研究専門委員会 委員
2013 年 6 月-	電子情報通信学会 ヘルスケア・医療情報通信研究専門委員会 専門委員
2013 年 5 月-	欧州電気通信標準化機構 (ETSI) Technical Committee (TC) Smart BAN 副議長
2003 年 6 月-	電子情報通信学会 ワイドバンドシステム研究専門委員会 専門委員
2002 年-	電子情報通信学会, ワイドバンドシステム研究専門委員会 委員
2000 年-	電子情報通信学会, 査読委員
1992 年-	IEEE
1991 年-	電子情報通信学会

氏名	谷川 一哉
職位	講師
研究分野	リコンフィギャラブルシステム
研究キーワード	高位合成、高速化、リコンフィギャラブルデバイス

私の教育・研究活動の方針として、常に自分自身をアップデートする事を心がけている。教育活動では、学生の変化に対応した教育方法を導入した。具体的には、最近の学生は本をあまり読まず、動画により情報を得る傾向にある。そこで、講義や演習の解説には、内容解説を動画に録画し、学生が好きなきに見られる環境を提供した。また、研究活動では、使える新しい技術は出来るだけ取り入れるように、情報収集とトライをしている。具体的には、ハードウェア開発には HDL ではなく高位合成を使用するようになり、設計時間を短縮し、アーキテクチャの検討に時間をかけることが出来るようになった。

【教育活動】

コンピュータアーキテクチャⅡの講義において、講義内容を動画で作成し、講義日以降に学生が視聴できるような環境を構築した。これにより病気などにより講義に参加できなかった学生も講義を受けることができ、また1度聞いただけでは理解出来なかった内容を何度も聞くことで理解を深めたりする環境を構築することが出来た。また大学院の講義のシステムレベル設計検証特論では全員発表&コメントする形ではなく、演習時間中に個人ごとにコメントをする形にした。このような形にすることで、細かい内容に関する指摘もしやすくなり、各自の学習の質が向上したと考えられる。

2019年度	システムレベル設計検証特論、コンピュータアーキテクチャⅡ、地域課題演習、情報科学基礎実験
2018年度	システムレベル設計検証特論、コンピュータアーキテクチャⅡ、地域課題演習、情報科学基礎実験

【研究活動】

主な研究活動としては、1) 特定のアプリケーションの高速化の研究、2) 低コストな回路デバイスのソフトウェアに関する研究の2つを行った。1つ目の研究では、画像処理などで多く使われるステンシル計算を高速に実行するためのハードウェアの研究を行った。本研究では外部メモリへのアクセスを少なくなるようなアーキテクチャを検討した。2つ目の研究では、低コストに利用できる回路デバイスを本研究室で開発しているが、その回路デバイスの性能を最大限に活かすには、回路デバイスの特性を考慮した回路設計が必要になる。そこで、その回路設計をニューラルネットワークを用いて学習し、より性能の良い回路設計を自動で行えるような研究を行った。

1. 鎌田 時生, 窪田 昌史, 谷川 一哉, 弘中 哲夫, , コスト関数にニューラルネットワークを導入した論理素子配置アルゴリズムの検討, 信学技報, Vol.119, No.208,

- pp. RECONF2019-23, pp. 13-18, 2019
2. 谷川一哉, 石崎大智, 窪田昌史, 弘中哲夫, , ステンシル計算を対象としたメモリアクセスを最適化するラインバッファ自動挿入手法の検討, 信学技報, Vol. 119, No. 18, pp. RECONF2019-3, pp. 11-16, 2019
 3. 立岡 陽理, 川端 英之, 谷川 一哉, 弘中 哲夫, , 主体的な学びを促進する演習型授業の設計と評価 ~コンピュータシステムの入門的演習を例にして~, 情報処理学会研究報告, , Vol. 2019-CE-149, No. 2, pp. 1-10, 2019
 4. 藤石 秀仁, 鎌田 時生, 弘中 哲夫, 谷川 一哉, 窪田 昌史, , 細粒度再構成可能デバイス MPLD におけるディープラーニングを用いた論理素子配置の良し悪し判定, 信学技報, Vol. 118, No. 334, pp. VLD2018-48, pp. 71-76, 2018
 5. 山下裕司, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, FPGA の配置配線結果を使用した MPLD の配置配線ツールの検討, 信学技報, Vol. 118, No. 215, pp. RECONF2018-30, pp. 61-66, 2018

【社会活動】

電子情報通信学会のリコンフィギャラブルシステム研究専門委員会の幹事として、専門委員会の会計とデザインガイアという研究発表会の開催を主に担当している。デザインガイアは複数の研究会が合同で研究発表を行う研究発表会であり、そのプログラム調整や招待講演者の選出、会場の受付などを担当した。さらに、2018年度には廿日市高校、沼田高校、2019年度には祇園北高校の模擬授業を担当し、情報科学に関する入門的な内容を説明した。

2019年10月-2021年8月	電子情報通信学会 多値論理と VLSI コンピューティング コンピューティング コンピューティング コンピューティング 特集号 編集委員
2019年9月-2020年12月	電子情報通信学会 Parallel, Distributed, and Reconfigurable Computing, and Networking 特集号 編集委員
2019年6月-2023年6月	電子情報通信学会 英文論文誌 D 編集委員
2016年6月-2020年5月	電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 幹事
2018年3月-2018年10月	中国支部連合大会実行委員会 プログラム編成委員
2018年2月-2019年6月	Publicity Co-chair(International Symposium on Highly Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies, HEART2019)
2018年2月-2019年5月	電子情報通信学会 特集号 編集委員
2017年11月-2018年12月	Finance co-chairs(The 2018 International Conference on Field-Programmable Technology)

氏名	田村 慶一
職位	教授
研究分野	メディア情報学・データベース、ウェブ情報学・サービス情報学
研究キーワード	データベース、Webマイニング、ソーシャルメディアマイニング、並列処理、時系列データ、発見的探索手法、深層学習、IoT

2018年度と2019年度の活動の総括として、教育活動については、講義・実験の新教材作成、また、研究開発を通し、研究室配属の学生の指導を重点的に行った。研究活動については、科学研究費・基盤研究(C)「実世界情報分析のための時空間データマイニングに関する研究」と時系列データ分析を中心に活動を実施した。社会活動はIEEE SMC Hiroshima Chapterの役員と同Chapterの主催する研究会や国際ワークショップの運営、各種プログラム委員を通じた査読活動と、学内イベントによるアウトリーチ活動を行った。大学運営では、主なものとして2018年度と2019年度において学部・研究科教務委員を担当し、学科のカリキュラム改定などの取りまとめを行った。

【教育活動】

大学院講義の「知識ベース特論」、学部講義の「データベース」「プログラミングⅢとプログラミングⅢ演習」について、教材の充実と説明等を工夫し、講義アンケートにおいては、科目平均以上の評価を受けることができた。また、知能工学実験Ⅰ・メディア学習実験の教材の改定や実験実施内容の見直しなどを行った。学生指導については、学部生7名、博士前期課程1名の卒論・修論指導と博士後期課程1名の指導を行った。指導を行った学生については、学外発表6件の奨励賞や論文賞を受賞した。

2019年度	データベース、知識ベース特論、3学部合同基礎演習、プログラミングⅢ演習、プログラミングⅢ、知能工学実験Ⅰ
2018年度	データベース、知識ベース特論、プログラミングⅢ演習、知能工学実験Ⅰ、プログラミングⅢ

【研究活動】

「ビッグデータ分析とその応用」を中心に、ソーシャルメディア上のデータ分析、時系列データ分析に関する研究を行った。科学研究費・基盤研究(C)「実世界情報分析のための時空間データマイニングに関する研究」では、個人研究としてソーシャルメディア上のデータを対象とした社会情報分析に係る研究開発を実施した。また、時系列データ分析については、データ分析に関する共同研究を中心に研究を実施した。研究成果として、学術論文4件(1件採択決定済)、国際会議発表5件、研究会発表19件を出すことができた。特に、密度の基づくクラスタリングと時系列データの分類手法はビッグデータ分析に必要となるデータマイニングの基盤技術であり、様々な応用分野への展開が期待できる。

1. 橋田修一, 田村慶一, Multi-Channel MHLF を用いた時系列データの分類手法, 情報処理学会論文誌 数理モデルとその応用(TOM), Vol.採択済み, 2020
2. Keiichi Tamura, Akitada Omagari, and Shuichi Hashida, Novel Defense Method against Audio Adversarial Example for Speech-to-Text Transcription Neural Networks, Proceedings of 2019 IEEE 11th International Workshop on Computational Intelligence & Applications (IWCI/A), pp.115-120, 2019
3. Shuichi Hashida, Keiichi Tamura, Multi-Channel MHLF: LSTM-FCN using MACD-Histogram with Multi-Channel Input for Time Series Classification, Proceedings of 2019 IEEE 11th International Workshop on Computational Intelligence & Applications (IWCI/A), pp.67-72, 2019

4. Shuichi Hashida, Keiichi Tamura, MACD-Histogram-based Fully Convolutional Neural Networks for Classifying Time Series, The 2019 6th International Conference on Control, Decision and Information Technologies (CODIT'19) (CoDIT 2019), pp.1049-1054, 2019
5. Shuichi Hashida, Keiichi Tamura, and Tatsuhiro Sakai, Classifying Tweets using Convolutional Neural Networks with Multi-Channel Distributed Representation, IAENG International Journal of Computer Science, Vol.46, No.1, pp.68-75, 2019
6. Keiichi Tamura, Takumi Ichimura, Time Series Classification using MACD-Histogram-based Recurrence Plot, International Journal of Computational Intelligence Studies (IJCIStudies), Vol.7, No.3, pp.192-213, 2018
7. Shuichi Hashida, Keiichi Tamura, Tatsuhiro Sakai, Classifying Sightseeing Tweets using Convolutional Neural Networks with Multi-Channel Distributed Representation, Proceedings of the 2018 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC2018), pp.178-183, 2018
8. Tatsuhiro Sakai, Keiichi Tamura, Hajime Kitakami, and Toshiyuki Takezawa, Density-based Multimodal Spatial Clustering using Pre-trained Deep Network for Extracting Local Topics, Proceedings of the Fifth International ACM SIGMOD Workshop on Managing and Mining Enriched Geo-Spatial Data, pp.7-12, 2018
9. 酒井達弘, 田村 慶一, 北上始, 竹澤寿幸, 最小外接矩形とセルの再帰分割を用いたセルベースのDBSCANの高速化, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J101-D, No. 4, pp.690-701, 2018

その他、研究会発表 19 件、講演・講習会講師 6 件、受賞 2 件

【社会活動】

学会活動として、IEEE SMC Hiroshima Chapter 庶務幹事 (2018 年)、Vice Chair (2019 年) を務め、若手研究会 (2019 年度実行委員長)、IEEE IWCI2019 (Program Co-Chair) を開催し、その企画と運営を担当した。また、IEEE SMC Hiroshima Chapter の活発な活動が認められ、IEEE SMC ソサエティより IEEE SMCS Outstanding Chapter Award を受賞した。公開講座・即戦力となる人工知能人材育成のためのプログラミング講座～基礎編～ (2018 年、県立広島大学) での講習会講師、GSC 広島・ステップステージ第五回セミナー (情報分野) 講師などを通して、社会人・高校生向けの講演や演習を務めた。また、オープンキャンパス (2018 年度と 2019 年度)、広島市立大学地域貢献事業発表会 (2018 年度と 2019 年度)、産学連携研究発表会 (2018 年度) への出展を行った。主な委員の一覧を次に示す。

2019 年 2 月-2019 年 11 月	The 11th International Workshop on Computational Intelligence & Applications (IWCI2019) Program Co-Chair
2019 年 1 月-2019 年 7 月	2019 IEEE SMC Hiroshima Chapter 若手研究会 実行委員長
2019 年 1 月-2020 年 12 月	IEEE SMC Hiroshima Chapter の役員 (Vice Chair)
2018 年 9 月-2019 年 3 月	広島リサーチコンプレックス推進協議会, 幹事会・要件検討 WG
2017 年 1 月-2018 年 12 月	IEEE SMC Hiroshima Chapter の役員 (Secretary)

氏名	辻 勝弘
職位	助教
研究分野	電子デバイス・電子機器
研究キーワード	半導体デバイス、集積回路、デバイスモデリング、デバイスシミュレーション、パラメータ抽出

教育活動は、3年次以下の演習・実験を担当し、パワーポイント、基礎実験専用のWebページ等を用いて教育を行い、シラバスの目的は概ね達成できたものとする。またここ2年間で4名の学生に対して卒業研究・論文の指導を行った。内容としては、いずれも卒業研究に適切な出来であったと考える。研究活動においては昨年度から新しくナノデバイスのRTN (Random Telegraph Noise)の測定と評価を始めた。またこれまでの論文等により学位を取得するための活動を始めた。社会活動としては、長年にわたってオープンキャンパス等に参加し研究活動の紹介を行っている。これは今後も継続して行っていく予定である。

【教育活動】

ここ2年間では、下記の表に示される演習・実験に携わって、学部学生に対して教育を行っている。特に物理学概論では、パワーポイントを活用して解説を行うと同時に、学生にはあらかじめA4・1枚に複数の問題を書いた用紙を配布し、講義時間中に解説を基に回答してもらうという方式を取っている。また基礎実験では1週間前から予習を促す掲示を行うと同時に宿題を課し、実験開始までに提出してもらい、実験開始と同時にTAに採点を依頼し、実験時間中に返却を行っている。さらに専用のWebページを開設し、学生にはいつでもアクセス可能にし、実験の進行、レポートの書き方、考察問題の考え方等に役立つようにしている。eラーニング英語IVでは、実習時間中の静粛性と集中できる環境づくりに努め、学生の英語力が向上するようにしている。

2019年度	物理学概論、情報活用基礎、システム工学実験Ⅰ・Ⅱ、外書講読演習Ⅰ・Ⅱ、eラーニング英語Ⅳ、情報科学基礎実験α-2、卒業研究Ⅰ・Ⅱ
2018年度	物理学概論、情報活用基礎、システム工学実験Ⅰ・Ⅱ、外書講読演習Ⅰ・Ⅱ、eラーニング英語Ⅳ、情報科学基礎実験α-2、卒業研究Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

2006年4月から2011年3月までNEDO出資の半導体MIRAIプロジェクトに参加した。近年はそこで学んだ学術的な知識とノウハウを基に研究を行っている。特にCharge-Based Capacitance Measurement (CBCM)というサブフェムトファラッド(fF)オーダーまで測定可能な容量測定手法を用い、容量特性からMOSFETのモデリングに重要なパラメータ(例えば、しきい値電圧及びそのばらつき、実効チャネル長等)の抽出を行い、解析を行っている。また昨年度は新しい試みとして、微細MOSFETのRTN (Random Telegraph Noise)の測定と評価、3Dシミュレータを用いた冶金学的チャネル長のhaloドーズ量依存性の解析と評価に関する研究を行った。今後はさらにデバイス・プロセスシミュレータ、回路シミュレータを用いて複合的に解析・評価を行うことや、新しい測定回路の開発、超高速通信向けのトランジスタの解析等を行う予定である。

1. Katsuhiro Tsuji, Kazuo Terada and Hisato Fujisaka, "Study on effective MOSFET channel length extracted from gate capacitance," Japanese J. Appl. Phys., Vol. 57, pp. 016601-1-016601-7, 2018.

【社会活動】

長年にわたって、オープンキャンパスに参加し、研究活動の紹介を行っている。近年は、「ナノ集積回路の特性測定」と題して ICT を支える代表的なトランジスタである MOSFET の特性ばらつきの測定方法、測定結果、ばらつきの解析結果等を公開している。今後もオープンキャンパス等に積極的に参加し、社会に対して、研究公開を行っていく考えである。

2019 年度	オープンキャンパス研究室紹介
2018 年度	オープンキャンパス研究室紹介
1996 年 9 月-	応用物理学会
1995 年 8 月-	電子情報通信学会

氏名	常盤 達司
職位	講 師
研究分野	生体医工学
研究キーワード	てんかん、生体信号計測、脳波、凍結治療、随意運動、運動準備電位、補足運動野、事象関連電位

教育活動では、講義資料の拡充を図り、講義・実験形態も対話形式を一部盛り込むなど工夫した。また、2017年度末に採択された enPiT-Pro 事業にて、社会人向け講義を担当し、講義に必要な資料作りや実験内容の策定を行った。

研究活動では、「低侵襲脳外科治療への応用を目指した凍結プローブの開発」や「高齢者に多発している ふらつき に関連した脳情報処理に関する研究」、「生体信号の取得や解析に関する研究」をテーマに活動を行った。また、学内の学部間共同研究として、芸術学部教員、事務職員と連携して光に関連した作品を作成し、5-Days こども文化科学館などで展示活動を行った。

社会活動では、2018年4月から2年間、一般財団法人電子情報通信学会中国支部の学生会顧問兼 支部委員を務め、中国地方の他大学の教員、学生との連携を図り、学生会主催のイベント「フレッシュ IT あわ〜ど」を補佐した。

【教育活動】

集中講義を含めると、2018年度には8科目の講義・実験を担当し、2019年度には7科目の講義・実験を担当した。特に、2019年度には「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成(enPiT)」の一環で、「生体信号の計測と解析の基礎」というテーマの講義(全4日間12コマ、社会人向け)を担当した。講義に必要なであった実習環境の構築、講義資料を作成した。

担当科目の詳細は以下の通り

2019年度	eラーニング英語Ⅳ、医用情報科学概論(分担)、脳情報工学特論(夏期集中)、外書講読Ⅱ(分担)、生体計測工学特論(大学院)、医用情報科学実験Ⅱ(分担)、プログラミングⅡ演習、医用プログラミング(後期講義)、enPiT 講義(社会人向け)
2018年度	eラーニング英語Ⅲ、医用情報科学概論(分担)、脳情報工学特論(夏期集中)、外書講読Ⅱ(分担)、生体計測工学特論(大学院)、医用情報科学実験Ⅱ(分担)、プログラミングⅡ演習、医用プログラミング(春期集中)、

【研究活動】

2018年度、2019年度の2年間で、上記研究テーマに関して学術雑誌2報、国際会議3件、国内会議6件、講演会2件の研究活動を行った。学術研究賞を1件受賞した。指導学生の学内外の受賞は6件であった。研究費補助金として、科研費(若手研究(B)、2017年度~2019年度、17K13019)の助成を受けた。

学部間共同研究として、社会連携センタープロジェクト(2018年度、代表)の助成を受け、芸術学部、情報科学部、事務局の若手教職員とともに、光の作品「Lights」を作成し学内外で作品

展示した。

主な研究活動業績は次の通り

1. 学術雑誌：T. Tokiwa *et al.*, A Palm-Sized Cryoprobe System with a Built-in Thermocouple and Its Application in an Animal Model of Epilepsy, IEEE Transactions on Biomedical Engineering, Vol.66, No.11, pp.3168-3175, 2019.
2. 学術雑誌：T. Tokiwa *et al.*, Detailed spectral profile analysis of electrocorticograms during freezing against penicillin-induced epileptiform discharges in the anesthetized rat, Epilepsy Research, Vol.143, pp.27-32, 2018
3. 国際会議：Presentation, T. Tokiwa *et al.*, Detailed Spectral Profile Analysis of Penicillin G-Induced Epileptiform Discharges During Freezing in Anesthetized Rats, AES (American Epilepsy Society) Annual Meeting 2018, 2018年12月
4. 学内共同研究による作品展示：中村圭, 常盤達司, 厚海慶太, 長山哲也, "Lights," 現代の造形—Life & Art—「光—身近に潜む科学とアート—」, 東広島市立美術館, 2017年-
5. 学術研究賞：第45回日本低温医学会総会 Gold Medal (Nikolai N. Korpan Award), 第45回日本低温医学会総会, 2018

【社会活動】

2018年4月から2年間、一般財団法人電子情報通信学会中国支部の学生会顧問 兼 支部委員を務め、中国地方の他大学の教員、学生との連携を図り、学生会の円滑な運営を心がけた。さらに、学生会顧問として、学生主催のイベント「フレッシュ IT あわ〜ど 2018」および「フレッシュ IT あわ〜ど 2019」の開催を補助した。

広島地域の企業向けイベント「第3回ヘルスケア・医療福祉機器技術研究交流会（2019年11月）にて「てんかん外科治療への応用を目指した配線レス熱電対内蔵凍結プローブの開発」と題して研究内容を紹介した。

先の「研究活動」にて報告した学内共同研究にて製作した作品 Light2019 を、青少年のための科学の祭典、第25回広島大会（2019年10月、5-Days こども文化科学館）に出展し、学内連携の成果を多くの青少年に公開した。

2018年4月-2020年3月	一般社団法人 電子情報通信学会 中国支部 学生会顧問 兼 支部委員
2012年4月-	日本生体医工学会
2012年4月-	日本神経回路学会
2008年4月-	IEEE
2006年5月-	日本ロボット学会

氏名	中田 明夫
職位	教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、ソフトウェア、通信・ネットワーク工学、情報学基礎
研究キーワード	リアルタイムシステム、組込みシステム、分散システム、設計検証、設計最適化、形式的手法、モデル検査

教育活動としては、学部授業「オートマトンと形式言語」「リアルタイムシステム」、および、大学院博士前期課程授業「組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論」を担当し、それらの授業においては、講義と演習を短いサイクルで交互に繰り返すアクティブラーニングによる授業を実施しており、若干の課題は存在するが一定の教育効果を挙げていると評価している。研究活動としては、2018年度に指導する博士前期課程学生と共著で、IEEE Computer Society 協賛の査読付き国際会議に採択され、当該学生を口頭発表させた。その後、発表内容をさらに発展させ、国内研究会で口頭発表し、研究奨励賞を受賞した。社会活動としては、電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会の委員長を2018年度から2年間務め、当該研究会の運営に協力した。また、電子情報通信学会和文論文誌Dの編集委員を1年間、同論文誌の学生論文特集号の編集幹事を1年間それぞれ務め、学会論文誌の編集活動に貢献した。その他、電子情報通信学会常任査読委員、情報処理学会シニア査読委員として、論文査読に協力を行っている。

【教育活動】

学部授業「オートマトンと形式言語」「リアルタイムシステム」については2018年度、2019年度とも大きな問題なく実施できていると評価している。大学院博士前期課程授業「組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論」については、情報科学の専門性が強い授業であるため、制御工学など、情報科学以外を専攻する他の研究室所属の学生にはハードルが高い授業となっていると考えられるため、今後そのような学生に対してわかりやすい授業に改善していく必要がある。

2019年度	オートマトンと形式言語、組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論、リアルタイムシステム、製品企画プロジェクト特別演習、地域実践演習
2018年度	組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論、データ構造とアルゴリズム II、オートマトンと形式言語、リアルタイムシステム、製品企画プロジェクト特別演習、地域実践演習

【研究活動】

2018年度にM1学生1名がIEEE Computer Society 協賛の国際会議「TASE 2018 (Int. Conf. on Theoretical Aspects of Software Engineering)」(採択率：フルペーパーのみ30%程度、ショートペーパー含め40%程度)にショートペーパー採択され、中国の広州市にて当該学生が英語により発表を行った。また、その際に受けた質疑応答の内容を論文内容の改善に生かすことができた。

改善した論文内容は 2019 年 3 月開催の電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会にて当該学生と共著で発表し、研究奨励賞を受賞することができた。しかし、2019 年度に同研究会での発表内容を改訂し、国際会議および国際論文誌に投稿したがいずれも不採録となったため、査読コメントを参考にして内容をさらに改訂し、国際論文誌に再投稿する必要がある。

1. 町頭優輝, 中田明夫, 余裕時間の考慮によりマルチプロセッサリアルタイムシステムのヒープメモリ消費量を削減する改良 LLF スケジューリング, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2018, No. 55, pp. 19-24, 2019
2. Yuki Machigashira, Akio Nakata, An improved LLF scheduling for reducing maximum heap memory consumption by considering laxity time, Proceedings of 2018 the 12th International Symposium on Theoretical Aspects of Software Engineering (TASE 2018), pp. 144-149, 2018

【社会活動】

2018 年度には、電子情報通信学会和文論文誌 D 編集委員として 7 件程度の投稿論文を担当し、当該論文誌の編集業務に貢献した。

2019 年度には、電子情報通信学会和文論文誌 D 学生論文特集号編集幹事の一員として、当該特集号の編集作業を分担し、特に問題なく着実に業務を遂行できたと考える。

2018 年度から 2019 年度にかけて、電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会の研究専門委員長として、計 7 回の国内研究会を特に大きな問題なく運営することができた。しかし、最後の主催研究会である 2020 年 3 月研究会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学会の方針により中止することになった。

2018 年 6 月-2020 年 5 月	(社) 電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 研究専門委員会 委員長
2017 年 6 月-	(社) 情報処理学会 論文誌シニア査読委員
2016 年 6 月-2018 年 5 月	(社) 電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 研究専門委員会 副委員長
2015 年 6 月-2019 年 5 月	(社) 電子情報通信学会 和文論文誌 D 編集委員会 編集委員
2012 年 5 月-	電子情報通信学会
2009 年 1 月-	IEEE
2005 年 11 月-	(社) 電子情報通信学会 ソサイエティ論文誌編集委員会 常任査読委員
1996 年 4 月-	情報処理学会

氏名	中野 靖久
職位	准教授
研究分野	視覚情報処理
研究キーワード	視覚情報処理

本大学で研究・教育活動を行うにあたって、研究ではヒトの視覚特性の理解と、これを色覚検査、医用照明、高齢化社会に向けてのカラーデザインや照明環境などに応用するための研究を続けている。教育では、情報系の科目に力を入れて取り組んでいる。研究において、マイコンを用いた実験装置の制御や実験プログラムの作成などを行うことが多く、その経験が教育にも活かされていると思う。「医用情報科学実験 II」ではこれらの知識を活用し、「遠隔医療システム」の構築をテーマにしたカリキュラムを自ら提案して指導している。大学運営ではここ 8 年ほど「ひろしまコンピュータサイエンス塾」に関わり、実行委員会の委員長を務めたり、講座を担当したりすることで早期情報教育に取り組んでいる。また、入試関連の大学運営にも力を入れている。

【教育活動】

「情報活用基礎」では芸術学部の学生向けに、コンピュータやネットワークの仕組みを解説したり、オフィスや画像作成アプリの使い方を指導したり、掲示板やホームページ作成によりネットワークのマナーを教えたりすることができた。「プログラミング III」、「医用情報科学実験 II」では医用情報科学科の学生に対して、計算のアルゴリズム、C++の使い方、組み込み/ネットワーク/GUI プログラミングなどを教えることにより、より高度な情報教育に取り組んでいる。「外書購読演習 II」では、隔年で視覚や医療に関する英語雑誌のニュース記事を読むことで、英語と専門知識を同時に学んでもらう取り組みを行っている。「視覚情報学特論」は大学院の講義で、視覚に関連したテーマを勉強してプレゼンさせ、皆でディスカッションする講義形式により、学生が自ら考える力を引き出すよう心がけている。

2019 年度	情報活用基礎、医用情報科学概論 (分担)、医用情報科学実験 II (分担)、プログラミング III、視覚情報学特論
2018 年度	情報活用基礎、医用情報科学概論 (分担)、医用情報科学実験 II (分担)、外書購読演習 II (分担)、プログラミング III、視覚情報学特論

【研究活動】

1. 「色覚検査のための任意スペクトル・任意パターン刺激呈示装置の開発」や 2. 「手術に適したスペクトルを持つ LED 照明の設計手法の確立」などのテーマで学生とともに研究を進めている。1 のテーマでは、回路作製および光学系作製を行い、赤、緑、青の 3 原色に加えて任意の単色光を混合して任意のパターンを呈示できる視覚刺激装置を作製し、加齢による水晶体光学濃度変化の測定を行うことができた。今後は、この装置をさらにいろいろな色覚に関わる特性の測定に応用しようと考えている。2 のテーマでは 7～8 色の LED を用いて被写体を撮影し、被写体の分光反射率を推定する撮影システムを作成して研究を行っている。今後この装置を使って、手術や診断に適した照明や高齢化社会に向けての照明環境の提案に向けて研究を進めていく。また、

この装置を化学分析における呈色反応の測定に応用する研究も、化学系の研究者との共同研究として進めている。

【社会活動】

社会活動ではここ8年ほど「ひろしまコンピュータサイエンス塾」の講座を担当したり、実行委員として塾の運営に携わったりしてきた。「ひろしまコンピュータサイエンス塾」では早期情報教育に力を入れており、優秀な人材を見出し、早い段階から情報教育を行うことで、将来情報の分野で活躍する人材の育成を目指している。2019年度からはKDDI財団の協賛を受けて「理科実験教室」を開催しており、2020年度は私が実行委員長を務めて準備を進めている。ここで私自身、新たなプログラミング教育の提案をしていきたいと考えている。他に、照明学会の関連で「照明基礎講座」の受講修了生の最終レポートの採点・添削指導なども行っており、学会の活性化や人材育成に努めている。

2012年4月-	ひろしまコンピュータサイエンス塾 実行委員会 委員
2016年5月-	照明基礎講座レポート採点・講評

氏名	中山 仁史
職位	講師
研究分野	ヒューマンインターフェース・インタラクション、知覚情報処理、知能情報学
研究キーワード	音声、骨伝導、音声認識、音声信号処理、歌声、組込みシステム

ヒトや動物などから得られる膨大なビックデータを活用するために、音声や体表などの音響データを解析対象とした研究を取組んできた。当該年度においてはヒトや動物などの生体情報の活用に関する基礎研究を実施し、各所望タスクを実現するための識別やパラメータ性能を示すことができた。

【教育活動】

実験実習でのレポート指導において具体的なケーススタディを明示して、レポートの書き方に関する改善を指導した。しかし、スマホの普及にともなうデジタルカメラの手軽さなどにより、回路作成などを行わずに手を抜いたレポートが散見されるようになってきた。そこで、レポートの書き方や問題の変化を鑑みながら、変化していく状況や傾向に応じた研究指導や講義・実験の実施を心掛けた。

2019年度	情報活用基礎、電気電子計測、システム工学実験 I、外書購読演習 I、認識システム特論
2018年度	情報活用基礎、電気電子計測、システム工学実験 I、外書購読演習 I

【研究活動】

音声や骨伝導をはじめとする音や振動伝搬に関する研究を行ってきたが、基礎とともに応用としての具体的なアウトカムを示す研究や発明が課題であると感じた。また、社会情勢やニーズに従った新たな研究に取り組むことも課題であると考えた。そのため、基礎研究とともに変化するニーズに応じた応用研究としての課題やテーマを積極的に掘り起こす必要があるといえる。

1. Yuka Ochiai, Kimiko Yamashita, Kaori Ishii, Masashi Nakayama, Shunsuke Ishimitsu, Satoshi Hoihata and Kazutaka Kasai, "Discrimination of Low-set Tongue Using Zero-crossing Rates and Mel Frequency Cepstrum Coefficients for Quantification of Pronunciation Speech", International Journal of Oral-Medical Sciences, Volume 18, Issue 3-4, pp.199-203, March 2020.
2. Yibing Cheng, Kenta Narusawa, Satoshi Iijima, Masashi Nakayama, Shunsuke Ishimitsu, Aiko Ishida and Osamu Mikami, "Development of an Early Detection System for Respiratory Diseases in Pigs", International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences (IJBSCHS), Volume24, Number 2, pp.65-73, December 2019.

3. Kouhei Komatsu, Masashi Nakayama, Kouhei Kabashima, Kaori Ishii, Shunsuke Ishimitsu, Satoshi Horihata and Kazutaka Kasai, "Noninvasive Examination of The Adenoids Using Acoustic Analysis", International Journal of Oral-Medical Sciences, Volume 18, Issue 1, pp.36-44, June 2019.
4. Masashi Nakayama, Shunsuke Ishimitsu, Kimiko Yamashita, Kaori Ishii, Kazutaka Kasai and Satoshi Horihata, "Tongue habit discrimination system using acoustical feature for oral habits improvement", Electronics and Communications in Japan, ecj.12079, 7 pages, August 2018.
5. Kimiko Yamashita, Masashi Nakayama, Kaori Ishii, Shinichi Negishi, Katshiko Saitoh, Shunsuke Ishimitsu, Satoshi Horihata and Kazutaka Kasai, "Evaluation of Tongue Function after MFT Using Zero-crossing and MFCC", International Journal of Oral-Medical Sciences, Volume 17, Issue 1, pp.1-8, June 2018.
6. Satoshi Iijima, Shunsuke Ishimitsu and Masashi Nakayama, Influence of the Lombard Effect, Fletcher Effect and Band-Emphasized Auditory Feedback on Singing Voice, Part B: Applications, ICIC Express Letters (ICIC-ELB), Vol.9, No.4, pp.331-338, 2018.

【社会活動】

先の研究活動と関連して日々社会情勢が変化しているため、企業・社会ニーズに呼応した研究テーマの課題設定も必要である。そこで、大学等で開催される交流等に加えて、企業などからのニーズを拾い、改善するような研究・活動ができるように改善した。今後も同様の視線での活動を継続する所存である。

2018年1月-2019年12月	Associate editor, the Innovative Computing Information and Control-Express Letters (ICIC-EL)
2007年3月-	IEEE
2005年1月-	電子情報通信学会
2003年1月-	日本音響学会

氏名	永山 忍
職位	教授
研究分野	情報学基礎
研究キーワード	決定グラフを用いた正規表現マッチング、設計自動化ツール、多値決定グラフを用いた多状態システムの解析・診断法、論理シミュレータの開発、決定グラフの最適化、ソフトウェア合成、数値計算回路の合成法、計算機設計支援ツール、機械学習に基づくネットワーク侵入検知ハードウェアの開発、インデックス生成関数の設計自動化ツールの開発

2018年度に情報工学専攻 専攻長に就任、2019年度に情報科学部入試委員長に就任したため、大学運営（入試業務）の比重が重たくなかったが、その他の活動についても怠りなく行った。特に社会貢献活動では、2017年度末に採択された enPiT-Pro 事業を通じて、社会人のリカレント教育カリキュラムの本格的な開発に取り組み、地元企業への ICT の普及（スマートファクトリー化の推進）に取り組んだ。また、2019年度の上半期には学内長期研修を取得し、研究活動に専念する時間を確保した結果、新たな研究テーマに着手できただけでなく、これまでのテーマについても深い研究を行うことができ、国際会議にて最優秀論文賞を受賞した。

【教育活動】

2018年度における主な工夫点は、「LSI 設計演習」で PBL を導入し、学生が LSI 開発の企画から設計までを他の学生と協働しながら主体的に学べる教材を開発したことである。

2019年度は、新たに担当した「論理設計」と「論理回路・システム特論」の教材開発を行った。資料を電子化し、予習・復習がしやすい環境を整えただけでなく、課題も授業中に行う最低限の課題と自主的にチャレンジしてもらい発展課題を用意することで自主学習を促した。それにより、試験で難易度の高い問題を出したにもかかわらず、多くの学生があっさりクリアし、予想以上の学習効果が確認できた。

研究室の学生指導では、プロジェクト管理システム「Trello」を活用し、学生が研究の上ですべきことの整理やその進捗を管理したことにより、卒業研究と修士研究の達成度を可視化した。

2019年度	システムレベル設計検証特論、論理回路・システム特論、離散数学、論理設計、論理設計演習
2018年度	情報工学実験 I、LSI 設計演習、論理回路、システムレベル設計検証特論、コンピュータシステム特論、離散数学

【研究活動】

2018年度は、「車載ネットワークセキュリティのための専用ハードウェアの開発」に関する研究を中心に東北大学と共同で行い、本学学生とともに研究成果を国際会議や論文誌で発表した。特に関連研究の成果として国際会議で発表した「論理最適化アルゴリズム」に関する論文は最優秀論文賞を受賞した。

2019年度は、発展させた内容を新たな科研費研究課題として実施し、機械学習「ランダムフォ

レスト」を導入したセキュリティシステムの開発に着手した。また上半期に取得した学内長期研修中に研究の幅を広げ、開発の基礎となる理論研究にも着手できた。研究室学生の指導として進めた研究で得た成果は研究会にて発表した。

1. 池田 翼, 永山 忍, 稲木 雅人, 若林 真一, Isolation Forest による異常検知の効率化に関する検討, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol.119, No. 443, pp. VLD2019-125, 179-184, 2020
2. 稲木 雅人, 片岡 岳, 永山 忍, 若林 真一, リソグラフィホットスポット検出のための画像スペクトルに基づく特徴量についての一検討, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 119, No. 443, pp. VLD2019-108, 83-88, 2020
3. 片岡 岳, 稲木 雅人, 永山 忍, 若林 真一, リソグラフィホットスポット検出用既存訓練データの修正による訓練データの追加生成, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 119, No. 443, pp. VLD2019-107, 77-82, 2020
4. 福原 浩人, 永山 忍, 稲木 雅人, 若林 真一, EVBDD に基づく初等関数回路の設計検証, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 119, No. 443, pp. VLD2019-96, 13-18, 2020
5. 常定 京一郎, 永山 忍, 稲木 雅人, 若林 真一, インデックス生成関数の行シフト分解における分解可能性判定法, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 119, No. 443, pp. VLD2019-94, 1-6, 2020
6. 永山 忍, 常定京一郎, 稲木雅人, 若林真一, 行シフト分解に基づくインデックス生成関数の同値類について, 電子情報通信学会 多値論理とその応用研究会 技術研究報告, Vol. MVL-33, No. 1, pp. 24-29, 2020
7. 片岡 岳, 稲木 雅人, 永山 忍, 若林 真一, 配線幅および配線間距離を考慮した特徴量によるリソグラフィホットスポット検出, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 119, No. 282, pp. VLD2019-51, 185-190, 2019
8. 池田翼, 永山忍, 稲木雅人, 若林真一, Isolation Forest の多値化に関する検討, 多値論理研究会 多値論理研究ノート, Vol. 42, pp.No. 12, 1-8, 2019
9. 常定京一郎, 永山忍, 稲木雅人, 若林真一, インデックス生成関数の行シフト分解における分解可能性について, 多値論理研究会 多値論理研究ノート, Vol. 42, pp.No. 13, 1-6, 2019
10. Shinobu Nagayama, Tsutomu Sasao, Jon T. Butler, A Dynamic Programming Based Method for Optimum Linear Decomposition of Index Generation Functions, IEEE International Symposium on Multiple-Valued Logic, pp.144-149, 2019
11. 糸谷 友里, 森 啓輔, 若林 真一, 永山 忍, 稲木 雅人, 上土井 陽子, Flexible Distance-based Hashing に基づく大規模多次元データ集合に対する近似最近傍探索手法の改良, 第 11 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム, Vol. A7, No. 1, pp. 144-149, 2019
12. Toshitaka Ito, Yuri Itotani, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama and Masato Inagi, A Nearest Neighbor Search Engine Using Distance-based Hashing,

- International Conference on Field Programmable Technology, pp.153-160, 2018
13. 片岡 岳, 稲木 雅人, 永山 忍, 若林 真一, 最適ハイパーパラメータ下での機械学習に基づくリソグラフィホットスポット検出手法の比較検討, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol.118, No.334, pp.VLD2018-71, 215-220, 2018
 14. 湯浅 佑介, 永山 忍, 稲木 雅人, 若林 真一, モンテカルロ木探索とギブスサンプリング法を用いたモチーフ抽出問題のハイブリッド解法, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol.118, No.334, pp.VLD2018-61, 149-154, 2018
 15. Shinobu Nagayama, Tsutomu Sasao, Jon T. Butler, An exact optimization method using ZDDs for linear decomposition of symmetric index generation functions, International Federation of Computational Logic Journal of Logic and Their Applications, Vol.5, No.9, pp.1849-1866, 2018
 16. 湯浅佑介, 永山忍, 稲木雅人, 若林真一, モチーフ抽出問題におけるモンテカルロ木探索に基づく良質な初期解の生成手法の提案, 多値論理研究会 多値論理研究ノート, Vol.41, pp.No. 2, 1-6, 2018
 17. Yuri Itotani, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, An Approximate Nearest Neighbor Search Algorithm Using Distance-based Hashing, International Conference on Database and Expert Systems Applications, pp.203-213, 2018
 18. Gaku Kataoka, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, Novel Feature Vectors Considering Distances between Wires for Lithography Hotspot Detection, EUROMICRO Conference on Digital System Design Architectures, Methods, and Tools, pp.85-90, 2018
 19. Shinobu Nagayama, Tsutomu Sasao, Jon T. Butler, An Exact Optimization Method Using ZDDs for Linear Decomposition of Index Generation Functions, IEEE International Symposium on Multiple-Valued Logic, pp.144-149, 2018
 20. 研究発表, 永山, 行シフト分解に基づくインデックス生成関数の同値類について, 第33回 多値論理とその応用研究会, 2020年1月
 21. 特別講演・招待講演, 永山忍, 次世代自動車の開発を陰で支える情報科学技術, 明治大学 特別講義, 2019年9月
 22. Presentation, Shinobu Nagayama, A Dynamic Programming Based Method for Optimum Linear Decomposition of Index Generation Functions, IEEE International Symposium on Multiple-Valued Logic, 2019年5月
 23. 特別講演・招待講演, 永山忍, 良く似たデータを素早く探せ!
- 類似・近似データ探索の高速化について -, 明治大学 特別講義, 2019年4月
 24. パネリスト, 永山, スマートファクトリー実現スキル基礎講座の紹介
- スマート化技術、知る前と知った後 -, 広島発!産学官金コラボセミナー
~スマートファクトリーへの第一歩~, 2019年3月
 25. 特別講演・招待講演, 永山忍, 次世代自動車の開発を陰で支える情報科学技術, 明治大学

特別講義, 2018年9月

26. Presentation, Shinobu Nagayama, An Exact Optimization Method Using ZDDs for Linear Decomposition of Index Generation Functions, IEEE International Symposium on Multiple-Valued Logic, 2018年5月
27. 2019年度特別教員表彰, 2020
28. 2019年度教員表彰(大学運営と社会貢献に対して), 2020
29. Outstanding Contributed Paper Award, 48th IEEE ISMVL, 2019
30. 平成30年度教員表彰(大学運営と社会貢献に対して), 2019
31. 平成30年度 電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 貢献賞, 2018

【社会活動】

2018/2019年度は、研究会の開催担当幹事や国際会議での広報担当幹事および出版担当幹事など学会運営での貢献に加え、ひろしま産業振興機構と共同で社会人のリカレント教育(学び直し)カリキュラムを開発し、地元企業へのICT普及に向け活動した。2017年度に採択された文科省事業 enPiT-Pro で開発した社会人向けカリキュラムを基に地元製造業向けの基礎プログラムを開発し、市民向けに公開した。基礎プログラムの紹介を目的としたスマートファクトリー入門講演会やプログラム受講後のフォローアップ演習会も実施した。また、関連して、地元製造業のスマートファクトリー化の相談や社会人向けの教材開発の相談にも対応した。

2019年12月	スマートファクトリー推進マネージャー養成基礎講座, ひろしま産業振興機構
2019年11月	沼田高校模擬授業, 沼田高校
2019年7月	広島中等教育学校模擬授業, 広島中等教育学校
2019年4月-2023年3月	情報処理学会, 論文誌 TSLDM 副編集委員長
2019年4月-2020年3月	沼田高等学校 学校協力者会議評価部会, 協力者会議評価部会委員
2019年3月-2021年3月	ASPDAC2021, Organizing Committee Member (Publication Chair)
2018年9月-2020年9月	多値論理研究会, 会計監事
2018年9月-2020年5月	第50回 IEEE 多値論理国際会議, Publication Chair, Publicity Chair
2018年7月	安芸府中高校模擬授業, 安芸府中高校
2018年5月-2019年5月	第49回 IEEE 多値論理国際会議, Publication Chair, Publicity Chair, Program Committee
2018年4月-2020年7月	Editorial Board for Journal on Multiple-Valued Logic
2018年4月-2019年3月	沼田高等学校 学校協力者会議評価部会, 協力者会議評価部会委員
2018年3月-2021年3月	SASIMI 2021, Finance Chair

2018年3月-2019年10月	電気・情報関連学会中国支部第69回連合大会，特別講演・懇親会幹事
2018年1月-2019年12月	IEEE 多値論理技術委員，セクレタリ/ウェブ担当
2017年12月-2019年7月	電子情報通信学会，英論文誌A編集委員
2017年11月-2018年12月	電子情報通信学会デザインガイア 2018，ローカルアレンジメント
2017年5月-2018年5月	第48回 IEEE 多値論理国際会議，プログラム委員
2017年5月-2018年5月	LSI とシステムのワークショップ，実行委員
2017年5月-2018年5月	第31回 回路とシステム軽井沢ワークショップ 実行副委員長
2017年3月-2019年3月	ASPDAC2019， Organizing Committee Member (Publication Chair)
2016年12月-2018年12月	IEEE ICFPT2018， Organizing Committee Member (Publication Chair)
2016年12月-2018年7月	電子情報通信学会，英論文誌A編集委員
2016年5月-2018年5月	ESS システムと信号処理サブソサイエティ，会計幹事
2016年5月-2018年5月	VLSI 設計技術研究専門委員会，幹事
2015年10月-2018年9月	多値論理研究会 技術担当幹事
2014年5月-2018年5月	リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 委員
2008年-	ACM
2006年-	情報処理学会
2006年-	多値論理研究会
2002年-	電子情報通信学会
2002年-	IEEE

氏名	西 正博
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、地球電磁気
研究キーワード	無線システム、電波伝搬、通信放送協調、地震電磁気、オーロラ電波、ネットワーク、ヒト検知、災害モニタリング

2018年度から2019年度までの間、情報工学専攻の教授として、またモニタリングネットワーク研究室の研究室長として、責任感を持ち教育研究活動を行ってきた。2019年度からは研究室に新たに教員が加わり、よりきめ細かに教育研究指導を充実させることができた。また2018年度では学生担当副理事、2019年度では学生支援担当副理事およびキャリアセンター長を務めた。2018年には広島市においても土砂災害が発生し、学生担当副理事として災害ボランティアを支援するのみならず、地域に貢献する土砂災害のモニタリングの研究開発を推進できた。2019年度では、キャリアセンター長として学生の就職支援を行うとともに、学生支援担当副理事として、国際学生寮さくらの運営およびピアサポート制度の本格実施と大学運営の業務も精力的に実施した。

【教育活動】

2018年度から新たに3学部合同基礎演習が始まり、学部が異なる新入生が、知のトライアスロンにも取り組ませながら、コミュニケーション能力育成を心掛けた。情報活用基礎では国際学部の新入生に対して、情報リテラシーを指導し、インターネットを利用することの危険性を伝え、トラブルに巻き込まれないよう注意を促した。また地域実践演習という専門科目において、実際に学生を地域に連れ出し、地域の課題を解決させる実践的な演習を行い、土砂災害のモニタリング手法の検証やモニタリングシステムの構築を行った。2019年度からはキャリアセンター長としてキャリアサポートベーシックなどの講義も担当し、学生の就職支援を実施した。専門科目のワイヤレスネットワークや大学院の通信工学特論では、無線通信システムを実現する重要な技術について講義・討論を行い、今後需要が高まる無線技術を知った技術者を育てることを心掛けた。

2019年度	3学部合同基礎演習、情報活用基礎（国際）、ワイヤレスネットワーク、通信工学特論、地域実践演習、キャリアサポートベーシック
2018年度	3学部合同基礎演習、情報活用基礎（国際）、ワイヤレスネットワーク、通信工学特論、地域実践演習

【研究活動】

総務省のSCOPE地域ICT振興型受託研究を研究代表者として2016年度より実施しており、2018年度は最終年度であった。情報工学専攻ネットワークコースの3研究室とKDDI総合研究所との共同研究を進めることができ、主に、土砂災害のモニタリングシステムの構築、Bluetooth MANEを利用した情報配信技術の開発、テレビを利用した高齢者への情報提示システムの実現できた。安佐北区の三入地区の住民の方の協力を得ながら公開実験も実施し、地域に貢献する研究開発に取り組んだ。2019年度にはSCOPE社会展開指向型の受託研究に採択され、研究代表者として継続して研究開発を実施した。この取り組みからは1名の社会人ドクターが学位を取得できた。

また他の研究テーマとして、スウェーデン国立物理研究所との共同研究にて、オーロラの観測システム運用および画像解析を実施しており、2019年度には本研究室の大学院の学生をスウェーデンに派遣し、オーロラと地磁気との関連性の解明を進めることができた。2年間で論文誌1件、国際会議発表7件、国内学会発表17件の成果を上げることができた。

1. Tomoyuki OHTA, Masahiro NISHI, Toshikazu TERAMI, and Yoshiaki KAKUDA, Information Dissemination Using MANET for Disaster Evacuation Support, IEICE TRANS. COMMUN., Vol. E102-B, No. 4, pp. 670-678, 2018
2. Koichi Shin, Haruka Kodama, and Masahiro Nishi, Development of Local Landslide Danger-Related Information Notification System on TV Set for Early Evacuation, Proc. of ADSN2019, pp. 672-676, 2019
3. Kiyonobu Sugihara, Makoto Kobayashi, Koichi Shin and Masahiro Nishi, Time Varying Feature Quantities of Aurora Activities by Image Analysis Based on HLS Values, AGU Fall Meeting 2019, pp. 672-676, 2019

国際会議他 5 件

4. 研究発表, 臼井拓也, 小林真, 新浩一, 西正博, 土砂災害センシングネットワークのための山間地における 920MHz 帯電波伝搬特性の評価, 信学技報 ICTSSL2019-54, 2020 年 1 月
5. 研究発表, 太田裕亮, 新浩一, 西正博, 深層学習を用いた画像処理による土砂災害危険度自動判定手法の検討, 信学技報 ICTSSL2018-12, ASN2018-12, 2018 年 5 月
6. 研究発表, 小里春来, 新浩一, 西正博, 土砂災害被害軽減を目的としたセンシングシステムの開発における各種センサの評価, 信学技報 ICTSSL2018-12, ASN2018-12, 2018 年 5 月

研究発表他 14 件

【社会活動】

2018年度には、広島市で発生した土砂災害において、大学から派遣した災害ボランティアの引率などで貢献した。また、広島市立大学で開催された第69回電気・情報関連学会中国支部連合大会の実行委員会に副実行委員長として取り組み、学会開催に貢献した。SCOPEにおける地域住民を対象とした公開実験や講演会なども実施した。2019年度には、可部公民館での研究展示や情報処理学会中国支部での特別講演会にて発表した。また総務省中国総合通信局の「臨時災害放送局の高度利用の調査検討会」の座長を務め様々な形で社会貢献を行った。その他、論文誌編集委員や支部庶務幹事など、学会活動にも貢献した。

2019年4月-2021年3月	総務省中国総合通信局調査検討会座長
2019年3月	SCOPE 公開実験、広島市立大学・KDDI 総合研究所・三入公民館
2018年10月-	電子情報通信学会 AP 研特集号編集委員
2018年4月-2018年10月	平成30年(第69回)電気・情報関連学会中国支部連合大会実行委員会副委員長
2016年5月-2018年5月	電子情報通信学会中国支部庶務幹事
2015年6月-	総務省中国総合通信局放送部会幹事

氏名	長谷川 義大
職位	講師
研究分野	ナノマイクロシステム
研究キーワード	MEMS センサ、MEMS (Micro-Electrical-Mechanical Systems)

自身の研究活動を通じて、教育や社会貢献を実施するとの理念のもと、教育活動、研究活動、社会活動をそれぞれ十分に実施した。具体的には、教育活動の一環として学生への研究指導を丁寧に行った結果、研究は想定通りに進展し、学生の研究発表を通じた教育および社会発信に繋がった。大学運営は、学科としてのチューター業務、2018年度は図書委員、2018-2019年度は広報委員、ホームページ運営検討WGとして学部及び学科の広報活動に注力した。

【教育活動】

2018-2019年度は、学部授業として、2年生の情報科学基礎実験、地域課題演習を担当した。また学科の授業として、3年生の機械工学、医用情報科学実験Ⅰ、外書講読演習Ⅰ・Ⅱ、2年生の医用情報科学概論を担当した。また、2019年度は、2020年度に内容を刷新する情報科学基礎実験の立上げ、新たに担当する3学部合同基礎演習の準備も行った。研究室の博士前期課程、学部学生への研究指導を行った。授業や研究ともに学生と十分にコミュニケーションを取り、学生の躓いている箇所を即座に発見し指導できるように心掛けている。

2019年度	医用情報科学概論、機械工学、外書講読演習Ⅰ、地域課題演習、医用情報科学実験Ⅰ、外書講読演習Ⅱ、情報科学基礎実験α
2018年度	医用情報科学概論、外書講読演習Ⅰ、機械工学、医用情報科学実験Ⅰ、地域課題演習、外書講読演習Ⅱ、情報科学基礎実験α

【研究活動】

2018-2019年度は、これまでに整備した研究設備を駆使して、社会に役立つマイクロ医用デバイスの開発を進めた。具体的には、ヒトの呼吸機能の計測解明を目指したMEMS熱式流量センサデバイスの開発や、体内への簡便な薬液投与方法を提供する経皮マイクロニードルの開発を行った。更に、気体用流量センサ技術を液体用に展開し、点滴流量計測用の流量センサの開発も行った。上記研究活動に関連して、2018-2019年度で6件の論文発表、16件の国際会議発表、22件の国内学会発表、2件の特許出願、1件の著書執筆を行い、1件受賞をした。

1. ドラッグデリバリーシステム-バイオ医薬品創成に向けた組織、細胞内、核内送達技術の開発-, CMC 出版, 2018, 共著
2. Y. Hasegawa, Y. Yasuda, K. Taniguchi, M. Shikida, Fabrication method with high-density, high-height microneedle using microindentation method for drug delivery system, *Microsystem Technologies*, 2019
3. 光成 勇樹, 長谷川 義大, 谷口 和弘, 松島 充代子, 川部 勤, 式田 光宏, 口元気流計測による乳幼児の呼吸心拍一括評価を目指した気管内挿管チューブ実装型流量センサシステ

- ムに関する研究, 電気学会論文誌 E, Vol.139, No. 7, pp.186-194, 2019
4. A. Kato, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, A micro-machined flow sensor formed on copper on a polyimide substrate and its application to respiration measurement, Japanese Journal of Applied Physics, pp.186-194, 2019
 5. Y. Maeda, Y. Hasegawa, K. Taniguchi, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Energy-less respiration monitoring device using thermo-sensitive film, Microsystem Technologies, pp.186-194, 2019
 6. T. Fujinori, Y. Hasegawa, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Body temperature measurement based on breathing airflow for continuous monitoring of patient body condition during large scale disasters, Microsystem Technologies, pp.186-194, 2019
 7. Y. Hasegawa, Y. Mitsunari, H. Kawaoka, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Analysis of measurement conditions for detecting change in vital signs with catheter flow sensor, Journal of Micromechanics and Micro-engineering, pp.186-194, 2018
 8. グローバル人材育成賞, 広島市立大学情報科学研究科, 2019

他 40 件

【社会活動】

研究成果を地域社会に発信し、交流することを目的として、産学連携研究発表会、地域貢献事業発表会への出展を継続して行っている。また 2019 年度は新たにイノベーションジャパン・大学見本市への出展も行った。他にも、広島地域の高校を対象とした研究室見学や、オープンキャンパスでの研究紹介も継続して参加させて頂いている。これらを通じて、教育研究活動の社会への発信を行った。また、研究分野の国際会議のプログラム委員を 2015 年度から継続して行っており、2019 年度は同国際会議が広島で開催されたことから、同会議運営委員として尽力した。これら学会活動を通じて学術分野の発展に努めている。

2018, 2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会
2019 年 8 月	イノベーションジャパン・大学見本市
2018, 2019 年 8 月	オープンキャンパス研究室紹介
2018, 2019 年	International Microprocesses and Nanotechnology Conference Technical Program Committee
2019 年	32nd International Microprocesses and Nanotechnology Conference Steering Committee Member
2019 年 3 月	ひろしま医工学スクール
2018 年, 2019 年	研究室見学 (祇園北高校)
2018 年 12 月	蔵前工業会 講演会 見学会, 蔵前工業会
2018 年 9 月	ハサヌディン大学 (インドネシア) 学生学部見学
2018 年 4 月-11 月	IEEE Sensors2018 Conference Technical Program Committee

氏名	八方 直久
職位	准教授
研究分野	ナノ構造物理、物性Ⅰ、結晶工学、量子ビーム科学、薄膜・表面界面物性、物性Ⅱ
研究キーワード	半導体物理、原子分解能ホログラフィー

5年目（最終年度）と終了後の1年間、科研費・新学術領域研究「3D活性サイト科学」計画班の分担者として活動し、研究業績は目標以上に達成することができたと自負する。実験などの出張が更に多くなり、授業を行うことに大変苦慮したが欠講することはなく、最低限の教育業務を全うできた。委員会などの学内業務も、出張を避けて日程調整していただいたため、概ね出席し、最低限の貢献ができたと思う。以上、各分野について、概ね目標を達成できたと考える。

【教育活動】

学部4年生、大学院生に研究指導し、蛍光X線ホログラフィー実験による様々な物質の構造解析や、その実験のために測定装置の整備を行い、卒業論文、修士論文としてまとめさせた。大学院生については、国際シンポジウムにて口頭発表する指導を行うことができた。

2019年度	物理学概論、基礎物理学、電子物性、物理化学実験、情報物性特論Ⅱ、基礎実験α
2018年度	物理学概論、基礎物理学、テクニカルリーディング演習、電子物性、物理化学実験、情報物性特論Ⅱ、基礎実験α

【研究活動】

太陽電池材料、半導体材料、熱電材料、超伝導体、シンチレーター材料、生体試料などの局所結晶構造解析について研究し、16件の論文（査読付）が掲載され、27件の学会発表を行った。

1. Kei Hayashi, Wataru Saito, Kazuya Sugimoto, Kenji Ohoyama, Kouichi Hayashi, Naohisa Happo, Masahide Harada, Kenichi Oikawa, Yasuhiro Inamura, Yuzuru Miyazaki, Preparation, thermoelectric properties, and crystal structure of boron-doped Mg₂Si single crystals, AIP Advances, Vol.10, pp.035115-1-7, 2020
2. 八方直久, 仙波伸也, 松下智裕, 細川伸也, 林好一, 松井文彦, 大門寛, 光電子ホログラフィー法による強磁性半導体 Ge_{0.6}Mn_{0.4}Te の原子構造解析, SPring-8/SACLA 利用研究成果集, Vol.8, No.1, pp.5-9, 2020
3. K. Kimura, K. Yamamoto, K. Hayashi, S. Tsutsui, N. Happo, S. Yamazoe, H. Miyazaki, S. Nakagami, J. R. Stellhorn, S. Hosokawa, T. Matsushita, H. Tajiri, A. K. R. Ang, Y. Nishino, Local structure and atomic dynamics in Fe₂VAl Heusler-type thermoelectric material: The effect of heavy element doping, Physical Review B, Vol.101, pp.024302-1-10, 2020

4. Kazutaka Kudo, Satoshi Ioka, Naohisa Happo, Hiromi Ota, Yoshihiro Ebisu, Koji Kimura, Takuma Hada, Takumi Kimura, Hiroo Tajiri, Shinya Hosokawa, Kouichi Hayashi, and Minoru Nohara, Impact of Local Atomic Fluctuations on Superconductivity of Pr-Substituted CaFe_2As_2 Studied by X-ray Fluorescence Holography, Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 88, pp.063704-1-5, 2019
5. 細川伸也, 林 好一, 木村耕治, 八方直久, 松下智裕, 蛍光 X 線ホログラフィーによる 3 次元原子イメージ研究の進展, 表面と真空, Vol.61, No.12, pp.784-789, 2018
6. Naohisa Happo, Takuma Hada, Atsushi Kubota, Yoshihiro Ebisu, Shinya Hosokawa, Koji Kimura, Hiroo Tajiri, Tomohiro Matsushita, Kouichi Hayashi, Improvement of graphite crystal analyzer for light elements on X-ray fluorescence holography measurement, Japanese Journal of Applied Physics, Vol.57, No. 5, pp.058006-1-3, 2018
7. Tomohiro Matsushita, Takayuki Muro, Fumihiko Matsui, Naohisa Happo, Shinya Hosokawa, Kenji Ohoyama, Ayana Sato-Tomita, Yuji C. Sasaki, Kouichi Hayashi, Principle and Reconstruction Algorithm for Atomic-Resolution Holography, Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 87, No. 6, pp.061002-1-11, 2018
8. 研究発表, 八方直久, 窪田昌史, 松下智裕, 細川伸也, 木村耕治, 林好一, Yang Xiaofan, 江口律子, 後藤秀徳, 久保園芳博, 蛍光 X 線ホログラフィーによるグラファイト層間化合物超伝導体 $(\text{Ca}, \text{K})\text{C}_8$ の局所電子配列, 第 33 回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム (JSR2020), 2020 年 1 月
9. Presentation, Naohisa HAPPO, Atsushi KUBOTA, Tomohiro MATSUSHITA, Shinya HOSOKAWA, Koji KIMURA, Kouichi HAYASHI, Modification of graphite energy analyzer for light elements on X-ray fluorescence holography, Materials Research Meeting (MRM2019), 2019 年 12 月
10. 研究発表, 八方直久, 窪田昌史, 松下智裕, 細川伸也, 木村耕治, 林好一, Yang Xiaofan, 江口律子, 後藤秀徳, 久保園芳博, 蛍光 X 線ホログラフィーによるグラファイトインターカレーション化合物 $(\text{K}, \text{Ca})\text{C}_8$ の局所原子配列, 日本物理学会 2019 秋季大会, 2019 年 9 月

【社会活動】

産学連携発表会などに 2 件を出展した。

2006 年-	日本放射光学会
1996 年-	応用物理学会
1992 年-	日本物理学会

氏名	馬場 雅志
職位	講師
研究分野	計算機科学、知能情報学、知覚情報処理・知能ロボティクス
研究キーワード	コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョン

教育活動、研究活動、社会活動については、後述のとおりである。

学内運営については、チューター、就職・キャリア形成支援委員、広報委員、学部ホームページ運営ワーキンググループで活動した。

【教育活動】

学部の講義科目として「プログラミング I」、「プログラミング I 演習」、「コンピュータグラフィックス I」、「知能工学実験 II」を担当、大学院の講義科目として「コンピュータグラフィックス特論」を担当した。これ以外にも、全学共通科目の「平和と人権 A」の 1 回分を担当した。また、大学院生の自主プロジェクト演習においては、アドバイザーとして指導を行った。

研究室配属学生への研究指導については、ゼミや英語輪講、外部発表の練習指導などを行った。

2019 年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、平和と人権 A、コンピュータグラフィックス I、コンピュータグラフィックス特論、知能工学実験 2
2018 年度	平和と人権 A、コンピュータグラフィックス 1、コンピュータグラフィックス特論、知能工学実験 2

【研究活動】

現在、広島大学と呉市（大和ミュージアム）との共同研究として、水中画像の色調補正の研究を行っている。これは、2017 年度から 2019 年度までの 3 年間、受託研究として実施してきた。2019 年度からは、3 年間の研究課題として科学研究費助成金の基盤研究（C）に採択されており、着実に成果をあげている。

このほかにも、コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョンに関する研究を行い、複数の外部発表を行っている。

1. Ryo Furukawa, Daisuke Miyazaki, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Hiroshi Kawasaki, Robust structured light system against subsurface scattering effects achieved by CNN-based pattern detection and decoding algorithm, Computer Vision, ECCV 2018 Workshops, pp.372-386, 2018
2. 古川亮, 内藤雅仁, 溝森将輝, 宮崎大輔, 馬場雅志, 日浦慎作, 佐野村洋次, 田中信治, 川崎洋, アクティブステレオ法による 3 次元内視鏡のための HDR 画像生成と投光器位置の自己校正, 電子情報通信学会誌 和文 D, Vol. J101-D, No. 8, pp.1150-1164, 2018
3. 研究発表, 戸田義孝, 馬場雅志, 古川亮, 宮崎大輔, 多視点合成画像のための自然な陰影づけ, 画像電子学会 ビジュアルコンピューティング研究会 VCWS 2019, 2019 年 12 月

4. Presentation, Yoshiaki Yamamoto, Kouhei Omote, Kazufumi Kaneda, Toru Tamaki, Bisser Raychev and Masashi Baba, Physically Based Color Restoration of Underwater Images Considering Scattering and Absorption, IIEEEJ International Conference on Image Electronics and Visual Computing, 2019年8月
5. Presentation, Asato Maekawa, Masashi Baba, Ryo Furukawa and Daisuke Miyazaki, Estimation of Luminance Distribution Around the Sun Based on Analytical Sky Model, IIEEEJ International Conference on Image Electronics and Visual Computing, 2019年8月
6. Presentation, Mihiro Ono, Masashi Baba, Ryo Furukawa and Daisuke Miyazaki, Filling Small Spots and Changing the Line Thickness of the Line Drawing by FCN, IIEEEJ International Conference on Image Electronics and Visual Computing, 2019年8月
7. 研究発表, 古川亮, 内藤雅仁, 宮崎大輔, 馬場雅志, 日浦慎作, 岡志郎, 田中信治, 川崎洋, 3次元内視鏡における ambient 光源にロバストな投影パターン特徴抽出, 画像の認識・理解シンポジウム, 2019年7月
8. 研究発表, 小野美宙, 馬場雅志, 古川亮, 宮崎大輔, FCN による線画への立体感付与, Visual Computing 2019, 2019年6月
9. 研究発表, 前川亜里, 馬場雅志, 古川亮, 宮崎大輔, 解析的スカイモデルに基づく太陽周辺の輝度分布の推定, Visual Computing 2019, 2019年6月
10. 研究発表, 戸田義孝, 山本弥大, 橋本修平, 馬場雅志, 古川亮, 宮崎大輔, 水中画像色補正のための奥行画像の作成, Visual Computing 2019, 2019年6月
11. 研究発表, 古川亮, 内藤雅仁, 溝森将輝, 馬場雅志, 宮崎大輔, 日浦慎作, 岡志郎, 田中信治, 川崎洋, CNN による特徴抽出と複数フレームの形状統合による広範囲かつ高精度な3次元内視鏡システム, 電子情報通信学会, 医用画像研究会, MI2018-88, pp. 115-120, 2019
12. 研究発表, 戸田義孝, 馬場雅志, 古川亮, 宮崎大輔, 日浦慎作, FFD を用いた多視点合成レンダリングのための UI の検討, 画像電子学会 ビジュアルコンピューティング研究会 VCWS 2018, 2018年12月
13. 研究発表, 山本弥大, 古川亮, 宮崎大輔, 馬場雅志, 日浦慎作, 太陽の方向と実物の見えの解析に基づく重畳 CG の色味補正, 第23回日本バーチャルリアリティ学会大会, 13D-1, 2018年9月
14. Presentation, Masahito Naito, Ryo Furukawa, Masashi Okitomo, Daisuke Miyazaki, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Yoji Sanomura, Shinji Tanaka, and Hiroshi Kawasaki, Grid-pattern feature detection technique using U-Nets for 3D endoscope, 第21回画像の認識・理解シンポジウム, 2018年8月
15. 研究発表, 溝森将輝, 内藤雅仁, 古川亮, 馬場雅志, 宮崎大輔, 日浦慎作, 川崎洋, 能動ステレオ法のためのパターン検出における CNN による複数特徴の同時抽出, 第21回画像の認識・理解シンポジウム, 2018年8月
16. 研究発表, 山本拓弥, 掛谷大登, 馬場雅志, 日浦慎作, 3次元人体姿勢推定によるスポーツトレーニング支援, Visual Computing 2018, 2018年6月

【社会活動】

講演会や講習会に関しては、高校生を対象とした公開講座である「高校生による情報科学自由研究」において、ほぼ毎年研究テーマを出して講師を担当している。

社会貢献活動について、2019年度は、地域から要望をきき学生の社会貢献プロジェクトとして、「西風新都新春ロードレース」においてICタグを利用した時間計測の自動化を行った。従来、手動でストップウォッチによって計測していたのをICタグによって自動化したが、計測の成功率がまだあまり高くないので、引き続き改良を行う予定である。

学会活動については、画像電子学会の幹事と芸術科学会の論文委員を勤めている。また、2019年は、画像電子学会のワークショップを現地担当として松山で開催した。現在、情報処理学会、電子情報通信学会、画像電子学会、日本バーチャルリアリティ学会の各会員である。

2019年5月-2019年8月	「IEVC2019」プログラム委員、表彰委員
2018年7月-2018年9月	高校生による情報科学自由研究（CGに挑戦！）、広島市立大学
2017年11月-	芸術科学会論文誌編集委員
2009年6月-	画像電子学会「Visual Computing 研究会」幹事
2004年-	画像電子学会
2000年-	電子情報通信学会
1991年-	情報処理学会

氏名	原 章
職位	准教授
研究分野	知能情報学、ソフトコンピューティング
研究キーワード	進化計算論、群知能、マルチエージェントシステム

2018年度および2019年度については、新規担当科目や自主プロジェクト演習を含む教育活動、自身の研究活動、および、地域の高校生を対象とした研究指導や地域や学会の委員会活動を含む社会活動に比重を置き活動した。教育・研究・社会活動のそれぞれについて、授業評価、研究発表業績、運営委員としての主催会議の成功など、一定の成果を得ることができた。

【教育活動】

2019年度の「自主プロジェクト演習」では、4件のプロジェクトのアドバイザーを務めた。学生の自主的な取り組みをサポートできた。特に、「観光サイクリスト行動情報データの解析手法」に関する研究では、外部の関係組織からも高め高い評価を得た。

また、研究室所属学生に対して計算知能技術に関する研究指導を行い、学生が筆頭著者の発表として、2018年度は論文誌1編、国内研究会1件、2019年度は論文誌投稿中1編、国際会議2件、国内研究会1件（Young Researcher Award 受賞）の成果を得た。

また、担当講義を通じて情報科学部および情報科学研究科所属学生の能力向上を図った。特に、「情報活用基礎」、「ソフトウェア工学概説」では、授業アンケートにおいて高い評価を得ることができた。

2019年度	知能工学実験 I、推論方式特論、情報活用基礎、技術英語演習 I、ソフトウェア工学概説、地域課題演習、自主プロジェクト演習
2018年度	知能工学実験 I、推論方式特論、情報活用基礎、技術英語演習 I、ソフトウェア工学概説

【研究活動】

進化計算の分野において、木構造プログラムの意味に基づく新たな遺伝操作を提案し、遺伝的プログラミング手法の探索効率を改善した。得られた成果は国際会議等で発表を行い、アピールすることができた。

また、研究室配属学生の研究指導において、制約付き最適化、群知能、集団学習、マルチエージェントシミュレーションなどの各分野において成果をあげた。特に、制約付き最適化に関する研究では、国際会議 GECCO2019 におけるコンペティションにおいて優秀な成績を収めた。

1. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, ϵ 制約法とパレートのアプローチを用いた Differential Evolution による複数車両の同時最適化, 進化計算学会論文誌, Vol. 10, No. 1, pp. 607-616, 2020
2. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, and Tetsuyuki Takahama, Time Series Prediction Using

- Deterministic Geometric Semantic Genetic Programming, 2019 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (IEEE SMC2019), pp.1945-1949, 2019
3. 河内武志, 串田淳一, 原章, 高濱徹行, 目的関数と制約のバランスを考慮した帝王的ペナルティ法の提案, 2019 IEEE SMC Hiroshima Chapter 若手研究会講演論文集, pp.9-16, 2019 (IEEE SMC Hiroshima Chapter Young Researcher Award 受賞)
 4. Takeshi Kawachi, Jun-ichi Kushida, Akira Hara, and Tetsuyuki Takahama, L-SHADE with an Adaptive Penalty Method of Balancing the Objective Value and the Constraint Violation, Proc. Of the Companion of the 2019 Genetic and Evolutionary Computation Conference, pp.5-6, 2019
 5. 原章, 串田淳一, 高濱徹行, Deterministic Geometric Semantic Genetic Programming による時系列予測, スマートシステムと制御技術シンポジウム 2019, 電気学会制御研究会研究資料, CT-19-002, pp.5-9, 2019
 6. Shin Kamada, Takumi Ichimura, Akira Hara, and Kenneth J. Mackin, Adaptive Structure Learning Method of Deep Belief Network using Neuron Generation-Annihilation and Layer Generation, Neural Computing and Applications, pp.1-15, 2018
 7. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, Ryota Takemoto, and Tetsuyuki Takahama, Artificial Bee Colony Programming Using Semantic Control Crossover, 2018 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (IEEE SMC2018), pp.189-194, 2018

【社会活動】

2018年度、2019年度は、地域の高校生に向けて本学情報科学部主催「高校生による情報科学自由研究」のテーマ提供を行った。特に、2019年度については、受講した学生がポスター発表会において最優秀賞を受賞し、本学および情報科学への興味や理解を深めることに貢献できた。

また、2018年度においては、広島リサーチコンプレックス推進協議会幹事会・要件検討WG委員を務め、広島地域の産学官連携の枠組み作りに貢献した。

その他、2018年度は、学会広島支部組織 IEEE SMC Hiroshima Chapter のChairを務め、研究会や学術講演会などの企画、運営を行い、成功を収めることができた。2017-2018年度の委員活動が評価され、2019年度には、IEEE SMC Hiroshima Chapter Contribution Awardを受賞した。

2020年2月	IEEE SMC Hiroshima Chapter Contribution Award 受賞
2019年1月-	IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (監事)
2018年9月-2019年3月	広島リサーチコンプレックス推進協議会幹事会・要件検討WG委員
2017年10月-	制御工学および機械学習の相互強化とその応用展開調査専門委員会
2017年4月-2019年3月	都市マルチエージェント・シミュレーション統合手法検討協同研究委員会

2017年1月-2018年12月

IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (Chair)

氏名	百武 弘登
職位	教授
研究分野	数学基礎・応用数学
研究キーワード	多変量統計解析、数理統計学

着任初年度で、順調になじんだ。

【教育活動】

講義ノート作成、卒研指導と順調であった。

2019年度	線形代数学 I、線形代数学 I 演習、解析学 I 演習、線形代数学 II
--------	--------------------------------------

【研究活動】

学術誌 SUT J. Math. に論文が掲載された。

1. Y. Shuto and H. Hyakutake, Confidence regions for regression parameter in measurement error model, SUT Journal of Mathematics, Vol.55, No.1, pp.1-9, 2019

【社会活動】

公開講座において講演をした。

2019年11月	情報科学部公開講座「講演会」講師
----------	------------------

氏名	廣門 正行
職位	准教授
研究分野	代数幾何学
研究キーワード	代数多様体、特異点理論、グレブナー基底

教員としての主な活動として、以下の a、b、c が挙げられます。

a. 教育活動：情報科学部 1 年生対象の「解析学 I」、「解析学 I 演習」、およびシステム工学科 2 年生向けの「応用幾何学」の講義を中心に、システム工学科 4 年生の卒業研究指導、大学院生対象の講義等を行っています。

b. 研究活動：専門は代数幾何学です。近年では特異点理論、グレブナー基底を手法として用いた研究を主に行うとともに、数学教育分野における活動を併せて進めています。

c. 社会活動：教育実習訪問、推薦入学者に対する入学前指導、ジャーナルの査読等を通じ、社会貢献活動に繋げることが課題です。

比重としては、現在 a が最も重く、次に b、c と続きます。以下、より具体的に述べます。

【教育活動】

情報科学部 18～年生対象の「解析学 I」、「解析学 I 演習」、およびシステム工学科 2 年生対象の「応用幾何学」の講義を中心に教育活動を行っています。「解析学 I」、「解析学 I 演習」は情報科学部 1 年生の必修科目であり、受講者数の面でかなりの規模となります。これ等数学基礎科目の講義を行うにあたり、学生が不公平感を抱かないよう留意するとともに、「試験前の俄か勉強」に陥らないよう努めています。

2019 年度	解析学 I、解析学 I 演習、解析学 II、外書購読演習 I、数理科学特論 B、応用幾何学、教科教育法(数学)
2018 年度	解析学 I、解析学 I 演習、外書購読演習 I、応用幾何学、数理科学特論 B、解析学 II、教科教育法(数学)

【研究活動】

現在、専門分野である代数幾何学における研究活動に加え、数学教育分野での活動を行っています。前者は広い意味では「代数多様体の分類理論」に属するのですが、近年は特異点理論と呼ばれる局所的な方面からの研究を進めています。以下 2)、3) の結果が最近得られたのですが、これ等の内容を踏まえ更に内容を進展させることが現在の目標です。

後者の数学教育分野に関する活動については、本学の「解析学 I」にて用いる教科書執筆、数学教育学会における研究・発表活動(共著)等を中心に進めています。

1. Masayuki Hirokado, Further evaluation of Wahl vanishing theorems for surface singularities in characteristic p , Michigan Mathematical Journal, Vol.68, No.3, pp. 621-636, 2019

2. Masayuki Hirokado, Canonical singularities of dimension three in characteristic 2 which do not follow Reid's rules, *Kyoto Journal of Mathematics*, Vol.59, No.4, pp.747-768, 2019
3. 田中輝雄, 関根光弘, 齋藤夏雄, 岡山友昭, 廣門正行, 百武弘登, 「教員養成系学部をもたない大学での数学科教育法の授業の実践例について」, 数学教育学会 2019年度秋季例会予稿集, pp.99-101, 2019
4. Invited talk, Masayuki Hirokado, On non-taut rational triple points in positive characteristic, *Algebraic geometry in positive characteristic and related topics*, 2018年12月, 於 東京大学大学院 数理科学研究科

【社会活動】

規模の大きな社会活動は行っておりません。現在活動中の、教育実習訪問指導、推薦入学者に対する入学前指導、ジャーナルの査読等を通じて、より規模の大きな社会貢献活動に繋がればと思っております。

2014年9月-	数学教育学会
2006年8月-	American Mathematical Society
2000年4月-	日本数学会

氏名	弘中 哲夫
職位	教授
研究分野	リコンフィギャラブルシステムズ、コンピュータアーキテクチャ、ソフトウェア工学、計算機システム
研究キーワード	リコンフィギャラブル コンピューティング、再構成可能コンピュータ、マルチプロセッサ、並列処理、VLSI アーキテクチャ、コンピュータアーキテクチャ

本年度の取り組みとして、教育活動では学生が講義科目への理解度を能動的に深めるようにすることを基本テーマとして教育の改善に取り組んだ他、研究活動ではハードウェアやソフトウェア開発の生産性を高める技術実現を目的に研究に取り組んだ。また、学生のキャリア教育として学生が自分の将来計画を見据えて教育研究に取り組めるようにキャリア教育を実施した。

【教育活動】

学部の講義として3学部合同基礎演習、電気回路、コンピュータアーキテクチャ I、電子回路を担当した。この中で特に電気回路とコンピュータアーキテクチャ I においてアクティブラーニングを取り入れた。電気回路では受講意欲や学習効果を高めるためにグループ学習を組み入れて相互に教え合う体制を実現している。コンピュータアーキテクチャ I では講義の始めに予習状況を小テストで確認し、講義中は主に疑問を解決する場、演習を通じて理解を深める場とした。大学院教育ではコンピュータアーキテクチャ特論の 15 回の授業で自らコンピュータを設計することでコンピュータアーキテクチャへの理解と興味を深めている。

2019 年度	ひろしま論、3 学部合同基礎演習、電気回路、コンピュータアーキテクチャ特論、コンピュータアーキテクチャ I、電子回路
2018 年度	ひろしま論、コンピュータアーキテクチャ特論、電気回路、3 学部合同基礎演習、コンピュータアーキテクチャ I

【研究活動】

研究テーマとしてハードウェア分野とソフトウェア分野の両分野を研究している。特にハードウェア分野では新たなリコンフィギャラブルシステムの研究開発として細粒度リコンフィギャラブルデバイスの実現に取り組んでいる。また、ハードウェアソフトウェア融合分野ではリコンフィギャラブル技術を用いた電子回路シミュレータの高速化に取り組み、実際にアプリケーションを視野に入れた研究も行っている。その他、ソフトウェア分野ではプログラミングの生産性を向上させるためのプログラミング支援技術に取り組んだ。

1. Masashi Nishimoto, Keiji Nishiyama, Hideyuki Kawabata, Tetsuo Hironaka, SAIFU: Supporting Program Understanding by Automatic Indexing of Functionalities in Source Code, International Journal of Networked and Distributed Computing, Vol.7, No.4, pp.167-174, 2019

2. Ryota Miyauchi, Akira Kojima, Hideyuki Kawabata, and Tetsuo Hironaka, A Study of a Parallel Architecture for Accelerating Batch-Learning Self-Organizing Map by using Dedicated Hardware, 2019 34th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC), pp.1-4, 2019
3. Masashi Nishimoto, Keiji Nishiyama, Hideyuki Kawabata, Tetsuo Hironaka, Easy-Going Development of Event-Driven Applications by Iterating a Search-Select-Superpose Loop, Journal of Information Processing, Vol.27, pp.257-267, 2019
4. Yuya Kono, Hideyuki Kawabata, and Tetsuo Hironaka, Resolving Ambiguous Types in Haskell by Checking Uniqueness of Type Variable Assignments under Type Class Constraints, Journal of Information Processing, Vol.27, pp.87-94, 2019
5. 西本 匡志, 川端 英之, 弘中 哲夫, アプリケーション開発支援のための協働 API 集合検索システム, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J101-D, No. 8, pp. 1176-1189, 2018
6. Kazuki Hiramoto, Akira Kojima, Atsushi Kubota, Tetsuo Hironaka, Satoshi Nakamura, Masato Andoh, FPGA Implementation of High-Performance SPICE Simulator for Small-Scale Electronic Circuits, Proc. of the 33rd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2018), pp.317-320, 2018

【社会活動】

学会活動として、電子情報通信学会のリコンフィギャラブルシステム研究会の運営、電子デバイス・回路・照明・システム関連教育・研究ワークショップの運営に参加している。また、大学運営にかかわる社会活動としては、中国地方で単位互換を主導している教育ネットワーク中国の運営委員としての活動も行った。この他に、自らの専門性を用いた社会活動として高等裁判所、地方裁判所所属の専門委員としての活動も行った。

2016年10月-2020年9月	東京高等裁判所, 東京地方裁判所および大阪地方裁判所所属 専門委員
2018年6月-2019年6月	ソサイエティ論文誌編集委員会査読委員
2018年3月-2018年12月	Advisory Committee member of the 2018 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT'18)
2018年3月-2018年12月	The 2018 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT'18), Advisory Committee
2017年6月-2018年6月	ソサイエティ論文誌編集委員会査読委員
2017年5月-2019年5月	電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 専門委員

氏名	樋脇 治
職位	教授
研究分野	医用生体工学・生体材料学、神経科学一般、生体生命情報学
研究キーワード	脳機能計測、非侵襲計測、生体磁気

非侵襲的脳機能計測についての革新的技術の研究開発を新奇に立ち上げた。この技術は、従来の技術では達成することのできなかつた高時間分解能と高空間分解能を両立させた非侵襲的脳機能計測を実現する画期的なものであり、現在、この研究シーズを社会に還元するべく、事業化・製品化を目指した応用研究の展開や企業との共同研究を推進している。

【教育活動】

学部の講義科目として、「電気電子計測」「電気磁気学」「生体情報工学」の科目を担当している。これらの講義科目では、演習問題を適宜行わせることにより、受講生が着実に講義内容を理解できるようにしている。大学院の講義科目として「生体情報学特論」を担当している。この科目では、視聴覚教材を利用し、脳や神経の機能について理解を深めるとともに、受講生にプレゼンテーションを行わせることにより、自分の考えをまとめるスキルや発表技術を習得できるようにしている。

2019年度	電気電子計測、電気磁気学、生体情報工学、プレゼンテーション技法、技術文書作成法、医用情報科学概論、外書講読Ⅱ、生体情報学特論
2018年度	電気電子計測、電気磁気学、生体情報工学、プレゼンテーション技法、技術文書作成法、医用情報科学概論、外書講読Ⅱ、生体情報学特論

【研究活動】

これまで行なってきた脳神経系を中心とした生体の非侵襲的計測技術について洋書のチャプターとしてまとめている。また、近赤外光を用いた非侵襲計測技術についてサルを用いた動物実験を広島大学と共同で行ない、新たな高精度脳機能計測法を展開した。さらに、この研究を磁気を用いた高精度脳機能計測技術に発展させた。この研究シーズを社会還元すべく、事業化・製品化を指向した応用研究の展開や企業との共同研究を進めている。

1. Osamu Hiwaki, Hideki Miyaguchi, “Noninvasive measurement of dynamic brain signals using light penetrating the brain”, PloS One, 13(1), e0192095 (2018)
2. Osamu Hiwaki, “Noninvasive measurement technique for dynamic brain signals by magnetic field penetrating the brain”, 第41回日本神経科学大会, 2P-379 (2018)
3. Osamu Hiwaki, “Novel Technique for Noninvasive Measurement of Dynamic Brain Signals Using Static Magnetic Fields Passing through the Brain”, The 9th International IEEE/EMBS Conference on Neural Engineering (San Francisco, USA), FrP0.132 (2019)

4. Osamu Hiwaki, “Novel Technique for Noninvasive Measurement of Brain Function Using Static Magnetic Field across the Cerebral Cortex” 第42回日本神経科学大会, 10-08a1-3 (2019)

【社会活動】

学会や財団法人の委員や評議員を務めるとともに、企業に対する技術指導等を行なっている。地域の小中高校生を対象とした科学技術普及活動にも積極的に参加している。研究活動で得られた知的財産を社会還元するために特許権利を企業に譲渡したり、科学技術振興機構の大学等知財基盤強化支援事業の支援を生かし、知的財産を国際的に展開したりする活動を行なっている。

2018年6月-	日本生体磁気学会 評議員
2017年4月-2020年3月	ETロボコン中四国地区実行委員
2009年11月-	日本生体医工学会中国四国支部 評議員
2017年1月-2018年12月	IEEE EMB West Japan Chapter Vice Chairman
1997年4月-	(財)大阪科学技術センター 電磁界調査研究委員会 委員・幹事

氏名	福島 勝
職位	准教授
研究分野	レーザー分光
研究キーワード	量子力学, 化学物理

学生に近い立ち位置で、教育取り組み、学内運営に寄与・協力するとともに、国際的に先進・先端的な研究活動に取り組んでいる。

【教育活動】

物理・化学実験、基礎実験など、学生と身近に触れる実習授業が滞りなく進むよう、取り組んでいる。

国際・芸術学部の文系学生に、化学という理系の授業が前向きに取り組んでもらえるよう、取り組んでいる。

大学院授業（アナログ素子・回路特論、H29 より開講）は、受講生の研究テーマにも沿うよう、シラバスの範囲内で柔軟に取り組んでいる。

2019 年度	外書購読演習Ⅱ、システム工学実験、化学概論、外書購読演習Ⅰ、物理・化学実験、アナログ素子・回路特論、情報科学基礎実験 α -2(D)
2018 年度	外書購読演習Ⅱ、システム工学実験、外書購読演習Ⅰ、アナログ素子・回路特論、物理・化学実験、化学概論、情報科学基礎実験 α -2(D)

【研究活動】

現在取り組んでいる窒素酸化物やケイ素化合物の研究は、米国の研究者と論争中、および、ポーランドの研究者からかなり複雑な分子システムで興味深いとのコメントを得るなど、量子力学的に先進的な研究活動を進めている。

1. 研究発表, 福島 勝, 含金属ラジカルのジェット分光複雑な振動準位の動的挙動, 日本化学会 第 100 春季年会, 2020 年 3 月
2. 研究発表, 福島 勝, 屈曲 3 原子分子の振動波動関数 一 2D 調和振動による展開一, 第 20 回分子分光研究会, 2020 年 3 月
3. 研究発表, 福島 勝, NO₃ の分散ケイ光分光 一面外振動準位の観測一, 第 20 回分子分光研究会, 2020 年 3 月
4. 研究発表, 福島 勝, 石渡 孝, SiOSi の 1 Π _u 電子励起状態, 第 13 回分子科学討論会 2019 名古屋, 2019 年 9 月
5. Presentation, Masaru Fukushima and Takashi Ishiwata, Rotational perturbation in the excited 1 Π _u electronic state of SiOSi, The 26th Colloquium on High Resolution Molecular Spectroscopy, 2019 年 8 月
6. Presentation, Masaru Fukushima and Takashi Ishiwata, The ν_4 vibronic structure

- of the $N03 \times 2A2'$ system, The 26th Colloquium on High Resolution Molecular Spectroscopy, 2019年8月
7. Presentation, Masaru Fukushima and Takashi Ishiwata, LIF spectroscopy of linear SiOSi, 74th International Symposium on Molecular Spectroscopy, 2019年6月
 8. Presentation, Masaru Fukushima, Vibronic structure of the $N03 \times 2A2'$ system, 74th International Symposium on Molecular Spectroscopy, 2019年6月
 9. Presentation, Ibuki Nakamura, Hisato Fujisaka, and Masaru Fukushima, Investigation of the energy levels of quantum dots simulated with a well potential: Investigation of the external electric field effect, 35th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, 2019年6月
 10. Presentation, Masaru Fukushima and Takashi Ishiwata, Rotational perturbation in the excited $1P_u$ electronic state of SiOSi, 35th Symposium on Chemical Kinetics and Dynamics, 2019年6月

【社会活動】

分光学会・中国四国支部代議員、および、分子分光研究会・運営委員として、学会や研究会の運営に積極的に取り組んでいる。

2019年8月	高校生による情報科学自由研究 「作ってチャレンジロボットサッカー」
2019年7月	未来科学者 「海水電池をつくろう！」
2016年-	日本分光学会, 代議員
2016年4月-	日本分光学会 中国・四国支部 代議員
2000年3月-	分子分光研究会 運営委員

氏名	福田 浩士
職位	准教授
研究分野	生体生命情報学、医用生体工学・生体材料学、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	生体情報工学、計算論的神経科学、脳情報工学、生体医工学、ブレイン-コンピュータ・インタフェース

全般として積極的に評価・改善を行うことでより良い結果が得られている。
 教育活動では研究室所属の学生の研究発表において受賞させることができた。
 研究活動では複数の医学系大学と医工連携の共同研究が立ち上がり、成果が出始めている。
 社会活動では主に大学のオープンキャンパスで学科や研究室の魅力を発信した。

【教育活動】

研究室所属の学生に対して研究指導を行い6件の学会発表を行なわせ、そのうち2件が受賞した。

学部生・学科生の教育では、医用情報科学実験 I、プログラミング II、電気回路、アナログ信号処理等を担当し、丁寧で分かりやすい講義を学生に提供するように心がけており、授業アンケートでは学生からもわかりやすいという回答を得ている。また、前年度の反省点をふまえた講義資料等の改善を毎年度行うことで質の向上を図ったことも学生からの評価の高さにつながったと考える。

2019 年度	生体システム工学特論、脳情報工学特論、医用情報科学実験 I、電気回路、医用情報科学概論、医用情報科学実験 II、プログラミング II、プログラミング II 演習、アナログ信号処理
2018 年度	生体システム工学特論、脳情報工学特論、医用情報科学実験 I、電気回路、医用情報科学概論、医用情報科学実験 II、プログラミング II、プログラミング II 演習、アナログ信号処理

【研究活動】

医工連携の研究テーマを重点的に実施した。

県立広島大学、広島大学、広島都市学園大学と共同で「認知症予防プログラムによるまちづくりに関する研究」を実施し、高齢者を対象としてダーツ投擲運動計測システムの開発、運動データの解析を担当した。

森ノ宮医療大学と共同で「パーキンソン病患者の運動遂行機能評価に関する研究」を実施し、運動計測システムの開発、運動データ解析を担当した。

1. Masafumi Kunishige, Hiroshi Fukuda, Tadayuki Iida, Nami Kawabata, Chinami Ishizuki, Hideki Miyaguchi, Spatial navigation ability and gaze switching in older

- drivers: A driving simulator study, Hong Kong Journal of Occupational Therapy, 2019
2. 國重 雅史, 石附 智奈美, 飯田 忠行, 川畑なみ, 福田 浩士, 橋本 弘子, 原田 俊英, 宮口 英樹, 地域在住高齢者を対象としたアミューズメントと有酸素運動を併用した認知症予防プログラムの効果～12 ヶ月間の介入による検討～, 日本認知症予防学科誌, Vol.8, No.1, pp.21-28, 2018
 3. 研究発表, 福田 浩士, 高齢者を対象とした運動計測と解析における課題, 電子情報通信学会総合大会 2020, 2020 年 3 月
 4. 研究発表, 長谷弘美, 常盤達司, 福田浩士, 工田昌也, ホワイトノイズが重心動揺軽減に与える効果に関する研究, 電子情報通信学会総合大会 2020, 2020 年 3 月
 5. 研究発表, 神原真貴, 福田浩士, 脳電位計測と反応時間計測を用いた注意状態の定量評価に関する研究, 電子情報通信学会 2019 年総合大会, 2019 年 3 月
 6. 研究発表, 深町侑加, 福田浩士, 簡易脳波計による注意状態推定に関する研究開発, 電子情報通信学会 2019 年総合大会, 2019 年 3 月
 7. 研究発表, 西山拓也, 福田浩士, Trail Making Test における探索時間計測システムの開発, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018 年 10 月
 8. 研究発表, 深町侑加, 福田浩士, 簡易脳波計を用いた注意状態評価システムの開発, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018 年 10 月
 9. 研究発表, 神原真貴, 福田浩士, “脳電位から定量化した注意状態と反応時間の関係”, 平成 30 年度 (第 69 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2018 年 10 月
 10. 平成 30 年度 電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞, 電子情報通信学会中国支部, 2018

【社会活動】

大学のオープンキャンパスでは学科の学生実験である医用情報科学実験を出展し、高校生に対して学科の魅力などを発信した。また、研究室の学生に研究テーマに関する出展を行わせることで研究について発信した。

2018 年 1 月-2019 年 12 月	電子情報通信学会査読委員
2009 年 4 月-	Society for Neuroscience
2008 年-	日本生体医工学会
2008 年-	IEEE
2006 年-	International Neural Network Society
2006 年-	日本神経回路学会
2006 年-	日本ロボット学会
1997 年-	電子情報通信学会

氏名	藤坂 尚登
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、電子デバイス・電子機器
研究キーワード	信号処理ハードウェア、非線形回路解析、量子効果デバイス応用回路

教育と研究においては、学生が思考を怠らないこと、創造性を養うこと、即戦力と未来を開拓する力の両方を養成することの3点を目標に掲げている。

学部3年生までは、受講者に常に質問を投げかける、演習に多くの時間を割くなど、思考することを怠らない授業を心掛けた。研究室に配属された学部4年生や大学院生は、創造性豊かな技術者・研究者に成長するよう、基盤としての物理学から、エレクトロニクス、通信・情報理論、信号・情報処理アルゴリズム、数値解析法など、広い知識を吸収し活用することが必要な研究テーマに取組んだ。また、研究室配属学生には実践的な現在の技術と未来に必要な可能性のある知識の両方を習得できるよう、実習や研究の機会を与えた。

【教育活動】

通信方式と電子回路およびそれらに関連する数学科目を担当している。電子回路Ⅱでは、集積回路構成法に焦点を当て、自らの回路設計を回路シミュレータにより評価できる現実感を味わえる演習を実施した。通信工学の授業でも同様に、数値シミュレーションやソフトウェア無線システムを用いた実演を交え、現代の無線デジタル通信の物理層に関する基礎知識を提供した。偏微分方程式では、無線通信媒体である電磁波の伝搬、能動回路素子におけるキャリアの拡散に関する基礎的物理現象の方程式による記述とその解法の説明に、感覚的に理解できるよう可視化技術を用いた。非線形回路論では、視覚的な解説と学生自らが数値解析を行う多くの課題を通して、非線形システムの解析法、非線形現象応用技術、カオス理論を体得できる授業を行った。

2019年度	電子回路Ⅱ、通信工学Ⅱ、偏微分方程式、非線形回路特論
2018年度	電気回路、電子回路Ⅱ、通信工学Ⅱ、非線形回路特論

【研究活動】

量子力学現象を応用した通信・信号処理ハードウェアに関する研究を柱として活動している。CMOS集積回路の微細化が限界を迎えつつある今日、メゾスコピックな物理系に生じる量子力学現象を積極的に利用したデバイスとその応用回路に関する研究は非常に重要である。私は、汎用コンピューティングではなく、情報化社会のもう一方の基盤である通信とその信号処理に特化した量子現象応用回路に関する研究を推進した。また、非線形数学分野の理論を基に高精度かつ効率的に、加えて従来のシミュレータとの統合を考慮して、量子デバイス・回路の解析を行う研究も同時に進めた。

研究を通じたグローバル人材育成の一環として、学生には研究成果を国内学会だけでなく国際会議の場で発表することを勧め、指導している大学院生は博士前期課程在籍中に少なくとも1件、多ければ5件程度を国際会議で発表した。

1. S. Hayakawa, N. Hirami, and H. Fujisaka, Representation of Electrons on Symmetric Electron-Wave Stub-Filters by Waves and Particles, Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, Vol.E10-N, No.4, 2019
2. I. Nakamura, N. Hirami, and H. Fujisaka, Representation of Electrons on Multi-Stage Coupled Electron Waveguides by Waves and Particles, Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, Vol.E10-N, No.2, 2019
3. Presentation, An Indication of Quantum Chaos Based on Stochastic Quantization, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2018年9月
4. Presentation, Enhancement of Reference Course Tracking Capability in Multi-Agent Reinforcement Learning System to Search Ships' Courses, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2018年9月
5. Presentation, A Bipartite Graph Consisting of Delta-Sigma Min-Max Function Nodes and Shift Register Edges for GF(2^q) LDPC Decoding, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2018年9月
6. Presentation, A Probabilistic Cellular Array Model of Three-Port ElectronWave Filter, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2018年9月

【社会活動】

本学を訪れる高校生には科学と技術に興味を持ってもらうべく研究を易しく紹介するとともに、日本の科学と技術のレベル維持に貢献すべく高校の数学や物理の重要性も説いた。

一方、学術的な国内集会、国際会議、論文誌編集などの学会活動にも貢献しつつ、研究集会に参加する研究者に未開の研究分野を開拓する可能性を秘めた研究事例を提供する姿勢を維持することに努めた。

2018年6月-2020年5月	IEEE Consumer Communications & Networking Conference, Technical Program Committee Member
2018年度	電子情報通信学会 NOLTA ソサイエティ運営委員
2017年-2021年	電子情報通信学会 非線形問題専門委員会顧問
2018年8月, 2019年8月	オープンキャンパス研究紹介, 広島市立大学
1999年-	IEEE(The Institute of Electrical and Electronics Engineers) 会員
1990年-	電子情報通信学会会員

氏名	藤原 久志
職位	准教授
研究分野	計測工学、生物物理学、物理化学
研究キーワード	計測・制御プログラミング、界面の物理化学、細胞動態、ナノ計測、光学顕微鏡、光干渉、高速画像記録

教育・研究および社会活動では、所属する医用情報科学科・専攻の目指すところ、すなわち「情報」「自然科学」「工学」を基礎とした医学と情報科学の融合領域における教育・研究に留意して、授業や研究、学会活動等を展開した。

教育と大学運営の双方で特筆すべき活動として、中核的に関わってきた3学部合同基礎演習が、2018年度の業務実績の「ア 全学共通教育（小項目）」で、広島市公立大学法人評価委員会よりS評価を受けることに貢献した。

さらなる大学運営への貢献としては、職員過半数代表者として、労基法その他関連諸法令において責務として規定されている事項を遂行した。また、公立大学法人広島市立大学が学生、教職員にとってより良い履修環境、就業環境であり、地域に貢献できるように努めた。

【教育活動】

「情報」「自然科学」「工学」の3分野を基礎とする医用情報科学分野で活躍できる情報技術者の育成に努めた。

授業としては、下記の表に示す講義・演習・実験科目を準備・遂行した。特に、医用情報科学実験Ⅱでは、「デジタル信号処理プログラミング」を担当し、デジタル信号の処理・解析ソフトウェア作成技術を指導した。

卒業・修了研究教育では、医用画像工学における「光学顕微鏡による計測・解析手法の開発」との位置づけで、「タンパク質溶液観測のための高速度画像記録装置の改良」、「定沈殿剤添加によるタンパク質溶液変化の定量化を目的とした画像計測法の開発」、「一定量位相顕微鏡の改良：ファントムの厚さ測定に基づく性能評価方法の開発」を指導した。

2019年度	光計測システム特論、3学部合同基礎演習、医用生体画像計測、医用情報科学実験Ⅱ、外書講読演習Ⅱ、幾何光学・波動
2018年度	光計測システム特論、医用情報科学概論、医用生体画像計測、3学部合同基礎演習、外書講読演習Ⅱ、医用情報科学実験Ⅱ、幾何光学・波動

【研究活動】

「光学顕微鏡による計測・解析手法の開発」との位置づけでは、「タンパク質結晶化条件のスクリーニング」と「定量位相顕微鏡の改良」の二つの課題を遂行した。

「タンパク質結晶化条件のスクリーニング」では、「実験システムのプロトタイプ確立」、「タンパク質溶液変化の定量化」を行った（共に学外との共同研究）。

また、「定量位相顕微鏡の改良」では、石鹼膜をファントムとした定量位相顕微鏡の測定精度評価方法の構築を進め、国際会議（The 6th International Symposium on Bioimaging）で発表（連

名)を行った。

さらに、ヨウ素分子 (イオン対状態) の電子状態について、光一光二重共鳴法で調べた結果を英文査読付き学術誌 (J. Phys. Chem. A) に発表した (連名)。

1. Shoma Hoshino, Takashi Ishiwata, Yukio Nakano, Masaru Fukushima, Hisashi Fujiwara, Mitsunori Araki, Koichi Tsukiyama, Mid-Infrared Amplified Spontaneous Emission from the $f' 0_g^+$ (1D_2) Ion-Pair State and Spectroscopic Characterization of the Shallow 0_g^+ (ab) Valence State of I_2 , J. Phys. Chem. A, No.123, pp.7590-7596, 2019
2. Presentation, Shota Ueki and Hisashi Hujiwara, Measurement Resolution of Diffraction Phase Microscopy as Investigated with Reflection Interference Microscopy, The 6th International Symposium on Bioimaging, 2019年9月
3. 研究発表, 植木 翔太, 藤原 久志, 定量位相顕微鏡の測定分解能の評価方法の開発, 第6回生命分子科学研究会, 2019年3月

【社会活動】

2019年10月24、25日に、JMS アステールプラザで開催された「日本コンピュータ化学会2019秋季年会」の年会実行委員を務めた。本学会は、計算化学、理論化学、情報化学、数理化学、コンピュータ支援化学教育、その他コンピュータ化学についての議論を行う学会である。年会実行委員として、学会のプログラム作成や特別講演の企画・遂行を行った。また、10月26日には、テーマ「科学発信!! Hiroshima」の一般公開イベントを広島市立大学サテライトキャンパスで開催し、招待講演 (大阪大学教授 栗栖 源嗣 先生)、デモ展示・演示実験・ポスター発表 を支援することで、広島県の高校生の科学教育のお手伝いを行うことができた。

2019年	日本コンピュータ化学会2019秋季年会 年会実行委員
-------	----------------------------

氏名	藤原 真
職位	講師
研究分野	ナノ材料、応用物理学一般、質量分析、N体シミュレーション
研究キーワード	多粒子シミュレーション、多体問題専用計算機、フーリエ変換（イオンサイクロトロン共鳴）質量分析、FT-ICR、ナノ材料、ポーラスシリコン、光物性

教育活動としては、新しく担当した科目の授業内容が改善された形になってきた。物理系の科目は基礎知識の十分でない学生に対してどのように教えていくのかが永遠のテーマになっている。研究活動としては、FT-ICR 質量スペクトルのリアルシミュレーションを中心に取り組み徐々に成果が出ているが、シミュレーションプログラムの高速化とスペクトル解析への応用についてさらに推し進めていきたい。社会活動としては、研究成果の社会還元、また産学連携による研究推進という観点から発表を行っている。

【教育活動】

光エレクトロニクス、情報物性特論ⅠとⅡは近年新しく担当した科目であるが、教材の選定や授業内容について改善を進めてきた結果、ようやく形になってきた。物理系の科目では物理の基礎知識が十分でない学生に対して興味をもってもらいながら物理の基礎をどのように学んでもらうのがよいか検討しながら改善を進めている。

2019年度	物理学概論、情報物性特論Ⅰ、物理学、物理化学実験、光エレクトロニクス、情報物性特論Ⅱ、情報科学基礎実験 α
2018年度	物理学概論、情報物性特論Ⅰ、光エレクトロニクス、物理学、テクニカルリーディング演習、情報物性特論Ⅱ、物理化学実験、情報科学基礎実験 α

【研究活動】

FT-ICR 質量スペクトルのリアルシミュレーションを中心に取り組んだ。GRAPE6によるシミュレーションプログラムはさらにパラメータの調整を進め 10,000 粒子によるシミュレーションをより高速に計算できるようにもっていききたい。さらに、様々な測定条件に対して計算を行い、とくにこれまで計算できなかった高磁場中における質量分析計内のイオンの挙動とスペクトルの形状の関係等についてデータをさらに蓄積し分析評価する。また、引き続き NVIDIA の GPU を搭載した PC で GPGPU を利用することにより、より高速な多粒子シミュレーションの実現を目指してプログラムの開発を行っていく。

1. 藤原真, サイクロトロン共鳴周波数シフトの多体系シミュレーション, プラズマ・核融合学会誌, Vol. 95, No. 6, pp. 272-276, 2019
2. Presentation, Makoto Fujiwara, Naohisa Happo, Satoshi Takahashi and Koichi Tanaka, Detailed analysis of ion cloud behavior for the Coulomb-interaction-induced

- effects on FT-ICR mass spectra: a many-particle simulation, The 67th Annual Conference on Mass Spectrometry, 2019年5月
3. Presentation, Makoto Fujiwara, Satoshi Takahashi, Naohisa Happo and Koichi Tanaka, Detailed analysis of temporal ion cloud distributions undergoing Coulomb interactions in FT-ICR mass spectrometry: a many-particle simulation, The 22nd International Mass Spectrometry Conference, 2018年8月
 4. Presentation, Makoto Fujiwara, Naohisa Happo, Satoshi Takahashi and Koichi Tanaka, Detailed analysis of temporal ion cloud distributions for peak coalescence phenomena in FT-ICR mass spectra: a many-particle simulation, Mass Spectrometry and Proteomics 2018, 2018年5月

【社会活動】

研究成果の社会還元、また産学連携による研究推進という観点から地域貢献事業発表会、産学連携研究発表会において発表を行った。

2019年11月	2019 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2019年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 広島市立大学
2018年11月	2018 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2018年9月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018, 広島市立大学
2002年-	The American Society for Mass Spectrometry
2002年-	日本情報処理学会
2000年-	日本感性工学会
1998年-	日本音響学会聴覚研究会資料購読会員
1997年-	日本質量分析学会
1996年-	分子シミュレーション研究会
1996年-	日本シミュレーション学会
1993年-	電子情報通信学会
1991年-	日本物理教育学会
1988年-	応用物理学会
1988年-	応用物理学会応用物理教育研究会
1988年-	日本物理学会

氏名	舟阪 淳一
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	インターネット ネットワークキャッシュ コンテンツデリバリ P2P ネットワーク、Internet、Network Cache、Contents Delivery、P2P network

教育活動については例年通りに進めているところもあるが、高校生対象のプログラミング講座（レギオ）の講師を担当したことにより、いままでとは異なる教え方にも気づくようになってきている。研究活動については学生の教育とからめながら、学外の研究者との議論を大事にして進めてきている。なお2019年2月に発行された論文が情報処理学会論文賞を受賞するなど、学外の専門家にも評価された。社会活動ではいくつかの学会大会や国際会議の運営に貢献してきており、高校生向けのプログラミング教育にも協力してきている。また論文誌の編集にもかかわってきた。

【教育活動】

以前より担当しているプログラミング I・同演習、ネットワーク設計・同演習、および情報ネットワークについてはマンネリ化しないように毎年資料を見直して実施してきた。プログラミング I・同演習で使用する教科書は第4版に更新し、2019年に上梓している。またテクニカル・リーディング演習では研究室の分担の一部を担当した。2018年度からはプログラミング II 演習の担当から外れ、プログラミング II のみの担当となったが、演習担当の先生との連携を考慮しながら説明を工夫している。大学院担当では情報通信方法特論を引き続き最新の研究動向に沿った内容とし、アクティブラーニングの試みとしてディベートの要素を継続して採用した。

2019年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、情報通信方法特論、情報ネットワーク、プログラミング II、テクニカル・リーディング演習
2018年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、情報通信方法特論、情報ネットワーク、プログラミング II、テクニカル・リーディング演習

【研究活動】

2018年度も引き続き PR-SCTP と順不同配送を用いて高速で順序逆転の少ない動画ファイルのダウンロード方式を評価し、論文誌で1件発表した。この論文は掲載号の特選論文に選ばれ、さらに年間の論文賞も受賞している。2018、2019年度も複数の経路上に複数の TCP 接続を確立してプログレッシブダウンロードの動画再生レートを向上させる技術について研究を進めた。結果として国際会議にて1件、国内研究会にて2件、国内学会大会1件の研究発表を行った。また無線 LAN 環境の帯域資源を使い切るための並列 TCP 接続の条件について研究を進め、国際会議1件、国内研究会2件、国内学会大会1件の研究発表を行った。さらには近接通信を利用したデータオフロードにおけるコンテンツ配信について新しく研究を開始し、国内研究会で1件発表した。

1. 島和之、舟阪淳一、藤原真、三村和史、河野英太郎、佐藤康臣、難波英嗣, 情報科学部学生のためのC言語の基礎 第4版, 大学教育出版, 2019, 共著
 2. Junichi Funasaka, Hiroyasu Obata, and Kenji Ishida, Number of TCP Connections to Saturate Bandwidth of Wireless Networks, Proc. 12th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking (ICMU 2019), 6 pages, Nov. 2019
 3. 武田 和也, 舟阪 淳一, PR-SCTP を用いた分割ダウンロード方式における所要時間とブロック到達順序を考慮した要求方式, 情報処理学会論文誌, Vol. 60, No. 2, pp. 469-478, Feb. 2019 (特選論文、および論文賞受賞)
 4. Junichi Funasaka, Adaptability Enhancement for Progressive Download Methods Based on Timer-Driven Requesting Schemes Using Multiple TCP Flows on Multiple Paths, Proc. 4th IEEE SmartWorld, pp. 1605-1610, Oct. 2018
- ほか研究会発表 5 件, 大会発表 2 件

【社会活動】

2018 年度には電子情報通信学会和文論文誌 B 特集号ネットワークソフトウェア技術とその応用特集号編集委員をつとめた。国際会議 ADSN2018 の Vice Program Chair、ADSN2019 の Program Chair をつとめた。また国際会議 ATC2018 では Publicity Chair、国際会議 ASON2018、ASON2019 のプログラム委員、および国際会議 IWEIC2019 の Publication Chair をつとめた。平成 30 年度電気・情報関連学会中国支部第 69 回連合大会実行委員会では投稿受付システム幹事(代表)をつとめた。2018 年 8 月 3 日、2019 年 8 月 2 日には情報オリンピック日本委員会レギオ講習会の講師をつとめた。また事業を地域貢献事業発表会で紹介した。

2019 年 8 月	レギオ講習会 (入門編), 情報オリンピック日本委員会
2018 年 8 月	レギオ講習会 (入門編), 情報オリンピック日本委員会
2013 年 4 月-	電子情報通信学会ネットワークソフトウェア研究会運営委員会 運営委員
2000 年 4 月-	電子情報通信学会臨時査読委員

氏名	古川 亮
職位	准教授
研究分野	マルチメディア・データベース
研究キーワード	画像処理、画像認識、コンピュータグラフィックス、仮想現実感

教育活動については、授業において、アクティブラーニングを取り入れることを心掛けた。研究室では、学生の意識向上のため、外部の大学とのミーティング等を実施し、学生の外部への意識向上に努めた。また、研究活動においては、2018年度から科研費基盤Aを獲得することができ、これに基づいて3次元内視鏡についての開発を進めた。2019年度には、リアルタイムで実際に動作するシステムを開発することができた。社会活動としては、2018年度には、広島コンピュータサイエンス塾を、実行委員長として実施し、2019年度には、高校生向けの公開講座である高校生自由研究で、CGツールであるblenderを利用したCGモデリングの指導を行った。

【教育活動】

2018、2019年度には、授業において、アクティブラーニングを取り入れることを心掛けた。例えば、コンピュータグラフィックスIIの講義においては、毎回受講者からの発表を行い、学生が自分でCG全般及びCGツールの使い方等についての知識について調べ、他に伝えることを推奨した。

研究室では、学生が、できるだけ学会等で発表できることを目指している。そのために、外部の大学とのミーティング等を実施し、学生の外部への意識向上に努めた。

2019年度	コンピュータグラフィックスII、線形代数学演習I、知能工学実験、コンピュータグラフィックス特論、デジタル情報処理
2018年度	コンピュータグラフィックスII、線形代数学演習I、知能工学実験、コンピュータグラフィックス特論、デジタル情報処理

【研究活動】

2018、2019年度は、科研費基盤Aを獲得することができた。そのため、これからの研究基盤の拡充に努めた。そのために、2018、2019年度ともに特任教員の獲得に努めたが、適切な人材を確保するのが難しく、最終的には2020年4月からの予定で特任教員を雇用できた。研究活動としては、3次元内視鏡についての開発を進めており、2019年度には、リアルタイムで実際に動作するシステムを開発することができた。

1. 古川 亮, 川崎 洋, 構造化光投影による3次元内視鏡の開発, 光技術コンタクト, Vol. 57, No. 2, pp. 47-52, 2019
2. 古川 亮, 内藤 雅仁, 溝森 将輝, 馬場 雅志, 宮崎 大輔, 日浦 慎作, 岡 志郎, 田中 信治, 川崎 洋, CNNによる特徴抽出と複数フレームの形状統合による広範囲かつ高精度な3次元内視鏡システム, 電子情報通信学会, 医用画像研究会, MI2018-88, pp. 115-120, 2019

3. Ryo Furukawa, Masaki Mizomori, Shinsaku Hiura, Shiro Oka, Shinji Tanaka, Hiroshi Kawasaki, Wide-Area Shape Reconstruction by 3D Endoscopic System Based on CNN Decoding, Shape Registration and Fusion, Computer Assisted Robotic Endoscopy: MICCAI 2018 workshop, pp.139-150, 2018
4. Ryo Furukawa, Daisuke Miyazaki, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Hiroshi Kawasaki, Robust structured light system against subsurface scattering effects achieved by CNN-based pattern detection and decoding algorithm, Computer Vision, ECCV 2018 Workshops, pp.372-386, 2018
5. Kazuto Ichimaru, Ryo Furukawa, Hiroshi Kawasaki, Multi-scale cnn stereo and pattern removal technique for underwater active stereo system, International Conference on 3D Vision (3DV), pp.372-386, 2018
6. Ryo Furukawa, Hiroshi Kawasaki, Grid-based oneshot scan using dot-line pattern, 3D Image Acquisition and Display: Technology, Perception and Applications: OSA imaging congress, pp.372-386, 2018
7. Ryo Furukawa, Tsukasa Tadano, Shinsaku Hiura, Hiroshi Kawasaki, Improvement of image quality by using viewpoint following in multi-layer light field display, 3D Image Acquisition and Display: Technology, Perception and Applications: OSA imaging congress, pp.372-386, 2018
8. Visentini-Scarzanella Marco, Kawasaki Hiroshi, Furukawa Ryo, Bonino Marco, Arolfo Simone, Lo Secco Giacomo, Arezzo Alberto, Menciassi Arianna, Dario Paolo, Ciuti Gastone, A structured light laser probe for gastrointestinal polyp size measurement: a preliminary comparative study, Endoscopy International Open, Vol. 6, pp.E602-E609, 2018
9. 古川 亮, 内藤 雅仁, 溝森 将輝, 宮崎 大輔, 馬場 雅志, 日浦 慎作, 佐野村 洋次, 田中 信治, 川崎 洋, アクティブステレオ法による3次元内視鏡のためのHDR画像生成と投光器位置の自己校正, 電子情報通信学会誌 和文 D, Vol. J101-D, No. 8, pp.1150-1164, 2018
10. その他, 小田昌宏, 大竹義人, 伊東隼人, 杉野貴明, 斉藤篤, 古川亮, 大西峻, 井宮淳, 森健策, MICCAI2018 参加報告, 電子情報通信学会, 医用画像研究会, MI2018-88, 2019年1月
11. Presentation, Kazuto Ichimaru, Ryo Furukawa, Hiroshi Kawasaki, Underwater accurate shape reconstruction using CNNs, 第21回画像の認識・理解シンポジウム, 2018年8月
12. Presentation, Masahito Naito, Ryo Furukawa, Masashi Okitomo, Daisuke Miyazaki, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Yoji Sanomura, Shinji Tanaka, and Hiroshi Kawasaki, Grid-pattern feature detection technique using U-Nets for 3D endoscope, 第21回画像の認識・理解シンポジウム, 2018年8月
13. 研究発表, 溝森 将輝, 内藤 雅仁, 古川 亮, 馬場 雅志, 宮崎 大輔, 日浦 慎作, 川崎 洋, 能動ステレオ法のためのパターン検出におけるCNNによる複数特徴の同時抽出, 第

21 回 画像の認識・理解シンポジウム, 2018 年 8 月

【社会活動】

2018 年度には、広島コンピュータサイエンス塾を、実行委員長として実施した。内容は、レゴマインドストームを利用したプログラミング及び制御の実習である。古川の作業内容は、企画への参加、参加者（塾生）に挑戦してもらったレシピの用意、広報用及びコミュニケーション用 Web ページの準備、当日の塾生への対応などである。

また、2019 年度には、高校生向けの公開講座である、高校生自由研究の講座を実施した。受講者は 2 名であった。この講座では、CG ツールである blender について、初心者用の解説を行い、その後、受講者の作品制作の方向性に応じて、必要な技術の調査等を行った。

2019 年 8 月-	高校生自由研究（CG に挑戦！）
2018 年 8 月	広島コンピュータサイエンス塾

氏名	前田 香織
職位	教授
研究分野	情報ネットワーク
研究キーワード	Network Architecture、Multimedia Communication、IPv6、Mobile Communication

教育活動、研究活動、社会貢献、学内運営をおよそ 30、30、20、20 のエフォート割合で活動した。2019 年度は情報工学専攻長として、専攻の運営も行なった。

講義におけるアクティブラーニングの採用、研究指導の過程での学生の外部発表など、教育や研究活動の中で、学生が主体的考え、動くことができるようにつとめた。

【教育活動】

学部全学共通科目として、「メディアと社会」、「情報と企業」、「3 学部合同基礎演習」を、学部専門科目として「マルチメディア通信」を、大学院研究科科目として「マルチメディア情報通信特論」を担当した。学部 1 年生から大学院 2 年生まで幅広い学年の科目を担当した。どの科目もアクティブラーニングを取り入れることを心がけた。

研究室配属学生への研究指導ではゼミや実験などを行い、外部発表も行なった。指導学生が 2018 年度は優秀卒業論文賞、2019 年度は最優秀卒業論文賞を受賞した。

2019 年度	メディアと社会、マルチメディア情報通信特論、3 学部合同基礎演習、情報と企業、マルチメディア通信
2018 年度	メディアと社会、マルチメディア情報通信特論、3 学部合同基礎演習、情報と企業、マルチメディア通信

【研究活動】

IoT 基盤を支える技術に関する研究を行った。具体的にはクラウド利用のセキュリティ、運用管理、無線 LAN の通信品質に関するものである。成果はジャーナル 3 本、国際会議 3 本、国内会議（査読有）1 本、研究会等口頭発表 10 本で発表した。これらの一部は科研費（基盤 B、基盤 C）のテーマとして実施した。研究資金としてはそれ以外に受託研究費を獲得している。

1. Tohru Kondo, Kaori Maeda, “Cloud-based Dynamic Tiled Display Adapting to Grouping by Distinction of Mobile Devices,” Proc. of 2019 Twelfth International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking (ICMU), Vol. pp.1-6, Nov. 2019
2. Yuto TANABE, Kaori MAEDA, Yasuhiro OHISHI, Reiji AIBARA, A Userland Implementation of an IP Mobility Support Function using Data Plane Development Kit, Workshop on Internet Architecture and Applications, IEICE Technical Report, Vol. IA2019-29, pp. 33-37, 2019
3. Kaoru Ogaki, Chisa Takano, Kaori Maeda, A Proposal of a routing method based on

- cost calculation method considering multiple metrics and its evaluation using OpenFlow networks, Workshop on Internet Architecture and Applications, IEICE Technical Report, Vol. IA2019-28, pp.27-32, 2019
4. 内海 祐真, 前田 香織, 大島 史也, 大石 恭弘, IP モビリティを用いたMTD の拡張と性能評価, 電子情報通信学会 コミュニケーションクオリティ研究会, 信学技報 CQ2019-21, Vol.119, No. 61, pp.49-54, 2019
 5. 東 優介, 高野 知佐, 前田 香織, 隣接ノードの次数分布を利用した Twitter ユーザのフォロー志向分析, 電子情報通信学会 コミュニケーションクオリティ研究会, 信学技報 CQ2019-16, Vol.119, No.61, pp.27-32, 2019
 6. 林健太, 加森剛徳, 前田香織, 近堂徹, 相原玲二, CP-ABE を用いた VDI の使用権限委譲機構の開発, 情報処理学会論文誌, Vol.60, No.3, pp.750-757, 2019
 7. 加森剛徳, 前田香織, 近堂徹, 相原玲二, CP-ABE による認可機構を備えたクラウドアプリケーション共有基盤の開発, 信学技法, Vol. IA2018-61, pp.750-757, 2019
 8. N. Ishikawa, Y. Ohishi and K. Maeda, Nulls in the Air: Passive and Low-Complexity QoS Estimation Method for a Large-Scale Wi-Fi Network Based on Null Function Data Frames, IEEE Access, pp.28581-28591, 2019
 9. 石川直樹, 大石恭弘, 中山奨, 前田香織, 大規模 Wi-Fi ネットワークにおけるパッシブ通信品質推定手法の実験的評価, 信学技報, Vol. IA2018-17, pp.9-14, 2018
 10. 平空也, 高野 知佐, 前田香織, 拡散型フロー制御を用いる自律分散的な DDoS 攻撃緩和システム, 情報処理学会論文誌, Vol.59, No.9, pp.1656-1665, 2018
 11. Tohru Kondo, Keita Iwasaki, Kaori Maeda, Development and Evaluation of the MEC Platform supporting the Edge Instance Mobility, Proc. of 42nd IEEE International Conference on Computer Software & Applications, pp.193-198, 2018
 12. Yoshinori Kamori, Kenta Hayashi, Kaori Maeda, Tohru Kondo, Reiji Aibara, A Secure Sharing System for Cloud Desktop Applications Migrating with Optimized User Experience, Proc. of 42nd IEEE International Conference on Computer Software & Applications, pp.947-950, 2018
 13. 大柿かほる, 高野 知佐, 前田香織, スペクトルグラフ理論による複数メトリックを考慮する経路制御コスト算出法の提案, 信学技報, Vol.118, No.6, pp.59-64, 2018
 14. 2018 年度インターネット研究会研究賞 (優秀賞), 電子情報通信学会インターネット研究会, 2019
 15. 2017 年度インターネットアーキテクチャ研究賞 (優秀賞), 電子情報通信学会インターネット研究会, 2018

【社会活動】

総務省、広島県、広島市等の機関から委嘱された審議会、協議会の委員として活動し、社会貢献を行なった。学術機関からの依頼では内閣府日本学術会議の連携会員を努めた。学会関連では研究会運営、国際会議編集委員、座長等の活動を行なった。

2019年7月-2021年7月	広島県総合計画審議会委員
2018年10月-2019年7月	Program Committee, The 44th Annual International Computer Software & Applications Conference (COMPSAC2019)
2018年2月-2020年2月	広島市総合計画審議会専門部会専門委員
2017年10月-2018年7月	Program Committee, The 42th Annual International Computer Software & Applications Conference (COMPSAC2018)
2017年10月-2023年10月	日本学術会議連携会員
2017年8月-2020年7月	電子政府推進員
2015年9月-	広島市選挙管理委員会補充員
2015年6月-2021年5月	広島県高齢者医療広域連合情報公開・個人情報保護審査会委員
2015年4月-2019年3月	情報処理学会 インターネットと運用技術研究運営委員会
2015年2月-2021年3月	広島県個人情報保護審議会委員
2014年12月-2020年3月	弓削商船高等専門学校運営諮問委員会委員
2013年7月-2021年3月	ひろしま IT 融合フォーラム 会長
2013年5月-	電子情報通信学会 インターネットアーキテクチャ研究専門委員会顧問
2009年4月-2020年3月	広島市情報政策アドバイザー・ボード委員
2005年7月-	広島地域 IPv6 推進委員委員

氏名	増谷 佳孝
職位	教授
研究分野	医用システム、生体医工学・生体材料学、放射線科学、生命・健康・医療情報学
研究キーワード	医用画像、画像解析、計算解剖学、拡散 MRI

教育・研究・社会活動についての総括としては、自らの研究の活動レベルの維持、本学の学生を中心とした周辺の学生や若手教員、研究者にもその研究テーマの魅力や社会的重要性を伝えていくことに加え、国際協力が現在の自己の活動テーマとなっている。上記のバランスの観点からは、その研究に積極的に関与できる人材としての大学院生の数が学内では少なく、学生のレベルに応じて進学を勧める必要がある。また、県内企業との協力は、研究テーマの特殊性から困難であることには変わらないが、病院・クリニック等の医療系企業を中心に検討を行なうとともに、一部で共同研究を進めている。

【教育活動】

担当講義「解析学 II」、「医用生体画像計測」、「医用情報科学概論」、「計算解剖学特論」、「医用データサイエンス」、「医用画像処理」についてアンケート結果に基づき、それぞれ更新を行っている。特に、「医用データサイエンス」および「医用画像処理」では座学に加え、15 回中 3~4 回の実習を取り入れた内容としており、継続的に工夫を重ねている。また、1 年生向けの「解析学 II」では、学習内容の社会的有用性や将来の研究活動での重要性を自分の研究テーマである画像処理を例にとり具体的に伝えるなどの工夫を行っている。また、2 変数関数の 3DCG 表示、数式を読み取りやすいスライドデザインなどの工夫を行っている。その他の講義についても最新の研究成果を取り入れるなど毎年の講義内容を更新している。

2019 年度	医用データサイエンス、医用生体画像計測、計算解剖学特論、医用画像処理、解析学 II
2018 年度	医用統計解析、生体医用画像計測、計算解剖学特論、医用情報科学概論、解析学 II、医用画像処理

【研究活動】

外部研究資金に関連する「多元計算解剖学」や「拡散 MRI」を中心とした研究を行い、積極的に学会発表を行っている。特に、拡散 MRI に関しては MRI の基礎と応用に関する国際会議のトップカンファレンスである ISMRM や医用画像解析のトップカンファレンスである MICCAI のサテライトワークショップなどに採択され、発表を行っている。また、これらに関して国内外の他大学との共同研究も積極的に行い、その成果発表を行った（原著論文：2、国内学会発表：14、国際学会発表：5）。以下の一覧は抜粋である。

また、深層学習を用いた最新の研究成果に基づく拡散 MRI 解析ソフトウェアを公開し、国内外に発信している。

1. 橋爪誠, ほか, 多元計算解剖学の基礎と臨床への応用, 誠文堂新光社, 2018, 共著
2. 増谷, Wijeratne, Introduction to Disease Progression Modelling based on Machine Learning (機械学習に基づく疾患進行モデリングについて), CREST・さががけ・AIMaP 合同シンポジウム「数学パワーが世界を変える 2020」, 東京, 2020年2月
3. Nomura, Miki, Hayashi, Hanaoka, Sato, Yoshikawa, Masutani, Abe, Novel platform for development, training, and validation of computer-assisted detection/ diagnosis software, Int J Comput Assist Radiol Surg 15(4):661-672, Apr. 2020
4. Masutani, Diffusion MRI Fiber Tractography by Flow Field Formation with Extended Physarum Solver: A Pilot Study with 2D Phantoms, MICCAI 2019 Workshop on CDMRI, Oct. 2019
5. 増谷, 石田, Demons アルゴリズムの一般化とその応用, Med Img Tech 37(4):204-210, 2019年9月
6. 福永, 堀, 増谷, 内田, 阿部, 濱崎, 佐藤, 芳士戸 坂野, Andica, 鎌形, 青木, diMaRIA NODDI と AMICO NODDI の比較: 2-shell dMRI を用いた検討, JSMRM2019, 2019年9月
7. 増谷, 拡散テンソルトラクトグラフィへの応用のためのフィザルムソルバの拡張, 応用数理学会 2019年度年会, 2019年9月
8. 内濱, 河野, 佐々木, 増谷, 拡散尖度撮像法のパラメタ推定のための生成型 Q 空間学習における最適雑音量の自動決定に向けて, JAMIT2019, 2019年7月
9. 佐々木, 増谷, 廣川, Estimation of diffusional kurtosis using deep regression neural network (DRNN): experiments with synthetic training data, JSMRM2018, 2018年9月
10. 増谷, 佐々木, Model parameter inference for diffusion MRI signal models by using deep regression neural network and its validation, JSMRM2018, 2018年9月

【社会活動】

医用画像に関連した、工学、医学および境界領域での関連学会の理事・幹事等を務めている（下表）。その一環として、日本磁気共鳴医学会ではスタディグループを主催してセミナーを開催するなど、日本全国の同分野の若手研究者向けに学ぶ機会の提供を行っている。また県内では、代表として高校生～一般向けの「ひろしま医工学スクール」を県内大学と連携して開催し好評を得ている（2019年度は中止）。その他、学会・研究会、共同研究先からの依頼を受け、2018-2019年度で5件の講演を行っている。

2019年-	日本医用画像工学会 常任幹事
2018年7月-	日本磁気共鳴医学会 理事
2017年5月-	電子情報通信学会 医用画像研究会 顧問
2009年-2019年	日本医用画像工学会 幹事

（その他の所属学会：IEEE、日本医学放射線学会、日本コンピュータ外科学会、日本生体医工学学会、日本応用数理学会）

氏名	松原 行宏
職位	教授
研究分野	知能情報学、感性情報学・ソフトコンピューティング、教育工学
研究キーワード	知識工学、知能情報学、感性工学、人工知能

学習工学研究室長として、教育活動（40）、学内運営（30）、研究活動（15）、社会活動（10）のエフォート割合で活動を行うことを目標とした。2018、2019年度は概ねバランス良く活動を展開し、一定の社会貢献ができたと考える。研究室は3名の教員で運営し、2018年度13名、2019年度17名の学生を指導した。また2カ年でジャーナル論文3件、著書0件、国際会議論文0件、研究会全国大会等論文37件を発表し、また受賞が4件である。前回（2016、2017年度）に比べてやや発表数が低下した。一方、JSTや科研、大学設置審の審査員、学会等の委員長や理事、編集委員長、公立高校の評価委員等を務め地域社会に貢献した。学内では副理事（内部質保証・IR担当）、教務副委員長等を務め組織運営の活性化を行った。

【教育活動】

学部の専門科目（学部共通科目）1科目（オートマトンと形式言語、2年次）、専門科目（知能工学科）1科目（感性情報処理、3年次）、資格取得関係科目（演習系科目、教職に関する科目）1科目（教職実践演習B、4年次）、大学院の研究科開設科目（知能工学専攻）1科目（知識工学特論、大学院1、2年次）を直近の5年以上担当している。学部2年次から大学院2年次まで各学年で科目を担当し、また共通系科目から専門科目、演習系科目まで万遍なく担当しており、バランスが取れている。また2019年度は3学部合同基礎演習も担当した。

2019年度	オートマトンと形式言語、知識工学特論、3学部合同基礎演習、感性情報処理、教職実践演習B
2018年度	知識工学特論、オートマトンと形式言語、感性情報処理、情報科学序説、教職実践演習B

【研究活動】

査読付ジャーナル論文2件、国際会議論文2件、国内研究会、全国大会、支部大会等10件を年間目標としている。過去2年間（2018年度、2019年度）の状況は以下のとおりであり、概ね目標を達成している。また受賞等も2年間で4件あり、研究室としての一定のアクティビティを達成している。

1. 松原行宏，河野貴範，岡本勝，擬似力覚提示機能を用いた滑車学習支援システム，日本教育工学会論文誌，Vol. 43，No. Suppl.，pp. 89-92，2020
2. 中野美登里，松原行宏，岡本勝，岩根典之，メンタルローテーション課題のためのAR型学習支援システム，日本感性工学会論文誌，Vol. 18，No. 3，pp. 201-208，2019
3. 岡本勝，石村司，松原行宏，ヘッドマウントディスプレイと拡張現実技術を用いた無機化学学習支援システムの開発，教育システム情報学会誌，Vol. 35，No. 4，pp. 312-321，2018

4. 研究発表, 畠中啓輔, 松原行宏, 岡本勝, 岩根典之, 慣性計測装置を用いた作業姿勢のARを用いた学習に関する研究, 電子情報通信学会 ET研究会, 2019年11月
5. 研究発表, 梶岡瑞貴, 松原行宏, 他, 一次方程式の題材を対象とした「教えることにより学ぶ」学習支援システムの検討, 教育システム情報学会第44回全国大会, 2019年9月
6. 研究発表, 西本林太郎, 岡本勝, 松原行宏, 岩根典之, HMDとトラッキングセンサーを用いたテニス練習支援システム, 2019年度人工知能学会全国大会(第33回), 2019年6月
7. 研究発表, 岡本勝, 松原行宏, HMDとトラッキングセンサーコントローラを用いた仮想環境型学習支援システム, 電子情報通信学会 ET研究会, 2019年3月
8. 研究発表, 河野貴範, 松原行宏, 岡本勝, 滑車学習支援システムにおける力覚提示機能, 擬似力覚提示機能の比較, 電子情報通信学会 ET研究会, 2018年12月
9. 研究発表, 西本林太郎, 岡本勝, 松原行宏, 岩根典之, トラッキングセンサーを用いたVR型テニス練習支援システム, 電子情報通信学会 ET研究会, 2018年11月 (ほか31件)
10. 教育システム情報学会学生研究発表会 優秀発表賞, 教育システム情報学会, 2020
11. 教育システム情報学会 第44回全国大会 大会奨励賞, 教育システム情報学会, 2019
12. 教育システム情報学会学生研究発表会 優秀発表賞, 教育システム情報学会, 2019
13. 教育システム情報学会 研究会優秀賞, 教育システム情報学会, 2018

【社会活動】

JST 審査委員、科研費審査員、大学設置審関係委員およびその他の審議機関の委員を務め地域の教育関連事業に協力した。電子情報通信学会・シニア会員および教育工学研究会（ET研究会）専門委員、論文誌特集号委員長、人工知能学会・先進的学習科学と工学研究会（SIG-ALST）・専門委員、教育システム情報学会・理事（編集委員会、総務担当）、編集委員会副委員長として学会、研究会活動を活性化した。またその他多くの学会の編集委員、査読委員、プログラム委員等を務め、社会に貢献するとともに、広島市立大学の名称を外部に広報した。一方、広島市立美鈴が丘高校の外部評価委員を務め地域の教育行政にも貢献した。

2018年9月-2021年3月	広島県立図書館 資料選定委員
2018年4月-2020年3月	IEEE Education Society, All Japan JC (E-25), Chair
2017年12月-2020年11月	科学研究費委員会 専門委員
2017年8月-2018年6月	電子情報通信学会 論文誌（教育工学）編集委員会 委員長
2015年6月-	教育システム情報学会 理事（学会誌副編集委員長，総務等） 合同英文誌 ITEL 準備委員会 委員長
2011年4月-	広島市立美鈴が丘高校 外部評価委員会 委員
1999年-	電子情報通信学会 教育工学研究専門委員会委員，査読委員
所属学会	電子情報通信学会，人工知能学会，教育システム情報学会，日本教育工学会，情報処理学会，日本感性工学会 (ほか5件)

(ほか, 6件)

氏名	満上 育久
職位	准教授
研究分野	知覚情報処理、知能情報学、ヒューマンインターフェース・インタラクション、教育工学、感性情報学
研究キーワード	コンピュータビジョン、ヒューマンインタフェース、画像処理、人工知能

着任3年度目を迎え研究室の設備・運営体制が整ってきたことから、教育・研究・社会活動にしっかり取り組めるようになった。教育については、各担当科目で前年度の反省を踏まえながら指導方法の改善を心がけた。研究については、基盤B（代表者）と基盤A（分担者）の内容を中心に活発な研究活動・成果発信活動を行った。昨年度卒業し今年度大学院に進学した学生3名が全員学会で受賞したことは、彼らへの指導が行き届いていることに加えて質の高い研究ができていることを示している。民間企業との共同研究がスタートしたことも大きな成果の1つである。

【教育活動】

学部では、「プログラミング II」・「ヒューマンインターフェース」・「システム工学実験 II」・「外書講読演習 I」、大学院では「ヒューマンコンピュータインタラクション特論」を担当した。「プログラミング II」では2019年度の代表教員を務め、他の3クラスの教員との調整をはかりながら実施した。「ヒューマンインターフェース」ではアクティブラーニングを取り入れ、学生が積極的に考え発言できる講義を行った。いずれの担当科目でも、授業アンケート等で高い評価を得た。

研究室では、日頃のミーティング等でプレゼンテーションスキルの向上を意識した指導を行った。その成果が、国内外の学会での受賞という形で表れてきている。

2019年度	システム工学特別講義、ヒューマンコンピュータインタラクション特論、プログラミング II 演習、ヒューマンインターフェース、プログラミング II、システム工学実験 I・II
2018年度	プログラミング II、ヒューマンコンピュータインタラクション特論、ヒューマンインターフェース、プログラミング II 演習、システム工学実験 I・II

【研究活動】

新研究室の本格稼働から2年目に入り、輪講や研究ミーティングなどの研究室活動が整備されてきた。大学院生の先輩ができたことで4年生へのサポート体制が充実し、細やかな指導ができるようになった。

研究内容は、基盤B（代表者）および基盤A（分担者）に採択された研究を中心に遂行し、その成果は国内外の学会で積極的に発表した（国際7件、国内10件）。昨年度学部を卒業した修士1年生3名が国内外の学会でのべ4件（国際2件、国内2件）受賞しており、その内容についても学外で高い評価を得た。教員本人も計4件（国際1件、国内3件）の招待講演を行った。また、株式会社アルテクスとの共同研究を開始した。

1. 山添大丈, 満上育久, 小川拓也, 八木康史, バランスとキネマティクスに着目した左膝関節固定時の歩行分析, 看護理工学会誌, Vol.7, pp.33-42, 2020
2. Jun'ichi Murakami, Ikuhisa Mitsugami, Gaze from Head: Gaze Estimation without Observing Eye, The 5th Asian Conference on Pattern Recognition, pp.254-267, 2020
3. Taku Matsuura, Kazuhiro Sakashita, Andrey Grushnikov, Fumio Okura, Ikuhisa Mitsugami, Yasushi Yagi, Statistical Analysis of Dual-task Gait Characteristics for Dementia Score Estimation, Scientific Reports, Vol.9, No.1, pp.19927-, 2019
4. Ruochen Liao, Yasushi Makihara, Daigo Muramatsu, Ikuhisa Mitsugami, Yasushi Yagi, Kenji Yoshiyama, Hiroaki Kazui, Masatoshi Takeda, A Video-Based Gait Disturbance Assessment Tool for Diagnosing Idiopathic Normal Pressure Hydrocephalus, IEEE Transactions on Electrical and Electronic Engineering, Vol.15, No.3, pp.19927-, 2019
5. Jun'ichi Murakami, Ikuhisa Mitsugami, Dataset of Eye-Head Coordination under VR Experiences, The International Workshop on Electronics, Information and Communication, pp.19927-, 2019
6. Takashi Morimoto, Ikuhisa Mitsugami, Integration of Body Poses Captured by Asynchronous Multiple Kinects, The International Workshop on Electronics, Information and Communication, pp.19927-, 2019
7. Asuka Kuroda, Ikuhisa Mitsugami, Gaze Distribution related to Degree of Understanding under VR-based E-learning System, The International Workshop on Electronics, Information and Communication, pp.19927-, 2019
8. Takashi Morimoto, Ikuhisa Mitsugami, Motion Capture System by Spatio-Temporal Integration of Multiple Kinects, 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics, pp.19927-, 2019
9. Jun'ichi Murakami, Ikuhisa Mitsugami, VR-based Eye and Head Motion Collection for Modeling Their Coordination, 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics, pp.19927-, 2019
10. Hirotake Yamazoe, Ikuhisa Mitsugami, Tsukasa Okada, Yasushi Yagi, Analysis of head and chest movements during walking that correspond to gaze directions, Experimental Brain Research, Vol.237, No.11, pp.3047-3058, 2019
11. Kota Aoki, Trung Thanh Ngo, Ikuhisa Mitsugami, Fumio Okura, Masataka Niwa, Yasushi Makihara, Yasushi Yagi, Hiroaki Kazui, Early Detection of Lower MMSE Scores in Elderly Based on Dual-Task Gait, IEEE Access, Vol.7, No.1, pp.40085-40094, 2019
12. Shoji Matsuo, Shigang Li, Jianfeng Li, Ikuhisa Mitsugami, Takahiro Kosaki, Auto-estimation of Relative Orientation Between a Roof-Mounted Spherical Camera and a Vehicle Based on Full-View SLAM, Proc. IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics, pp.40085-40094, 2018
13. Yui Shigeki, Fumio Okura, Ikuhisa Mitsugami, Yasushi Yagi, Estimating 3D human

- shape under clothing from a single RGB image, IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, Vol.10, No.16, pp.40085-40094, 2018
14. Jun'ichi Murakami, Takashi Morimoto, Ikuhisa Mitsugami, Gaze and Body Capture System under VR Experiences, Proc. ACM Symposium on Virtual Reality Software and Technology, pp.40085-40094, 2018
 15. Chengju Zhou, Ikuhisa Mitsugami, Fumio Okura, Kota Aoki, Yasushi Yagi, Growth Assessment of School-age Children using Dualtask Observation, ITE Transactions on Media Technology and Applications, Vol.6, No.4, pp.286-296, 2018
 16. Fumio Okura, Yui Shigeki, Ikuhisa Mitsugami, Kenichi Hayashi, Yasushi Yagi, Directional characteristics evaluation of silhouette-based gait recognition, IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, Vol.10, No.10, pp.286-296, 2018
 17. Fumio Okura, Ikuhisa Mitsugami, Masataka Niwa, Kota Aoki, Chengju Zhou, Yasushi Yagi, Automatic collection of dual-task human behavior for analysis of cognitive function, ITE Transactions on Media Technology and Applications, Vol.6, No.2, pp.138-150, 2018
 18. 特別講演・招待講演, 満上育久, コンピュータビジョン・VRを活用した注視行動分析, 電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会, 2019年10月
 19. 産学官連携事業, 満上育久, 心を推し量るための人物映像解析技術, 広島市立大学産学連携研究発表会 2019, 2019年9月
 20. Invited talk, Ikuhisa Mitsugami, Gaze from Head: Gaze Estimation without Observing Eyes, APSCIT 2019 Annual Meeting, 2019年7月
 21. Invited talk, Ikuhisa Mitsugami, (特別・招待講演) Gaze from Head: Gaze Estimation without Observing Eyes, 2018年4月
 22. FIT 奨励賞 (受賞者: 黒田明日香), 第18回情報科学技術フォーラム(FIT2019), 2019
 23. 学生顕彰 (受賞者: 黒田明日香), 広島市立大学, 2019
 24. 卒論セッション優秀賞 (受賞者: 黒田明日香), 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2019
 25. 最優秀卒業論文賞 (受賞者: 村上純一), 広島市立大学情報科学部システム工学科, 2019
 26. 奨励賞, 電子情報通信学会バイオメトリクス研究会, 2018
 27. MIRU 学生奨励賞 (受賞者: 繁木結衣), 第21回画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2018), 2018

【社会活動】

高校からの出張講義依頼には積極的に応え、今年度は計3回の出張講義を行った。広島大学が主催するグローバルサイエンスキャンパス広島のセミナー講師や、広島県科学セミナー採点員なども務め、地域高校生の育成に積極的に協力した。また、広島市立大学産学連携研究発表会、地域貢献事業発表会などの産業界や一般社会向けのイベントでも積極的に出展・講演を行い、社会への成果情報発信に努めた。

2018年-	電子情報通信学会英文論文誌編集委員
2018年-	電子情報通信学会, 英文論文誌編集委員
2018年	3D Reconstruction in the Wild 2018 (in conjunction with ECCV2018)
2018年	International Conference on Informatics, Electronics and Vision
2018年	International Conference on Informatics, Electronics and Vision, Publicity Chair
2018年	3D Reconstruction in the Wild 2018 (in conjunction with ECCV2018), Publicity Chair
2017年4月-	情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア(CVIM)研究会
2017年4月-	情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア(CVIM)研究会, 幹事
2014年-	文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術専門家ネットワーク
2013年4月-	電子情報通信学会 画像工学(IE)研究会
2013年4月-	電子情報通信学会 画像工学(IE)研究会, 専門委員
2010年4月-	電子情報通信学会
2010年4月-	電子情報通信学会, 常任査読委員

氏名	三村 和史
職位	教授
研究分野	知能情報学、情報学基礎理論
研究キーワード	情報統計力学、情報理論、符号理論、数理工学

情報理論分野や計算機科学分野の諸問題について、情報理論的手法や統計力学的手法を用いて解析的に接近し、非自明な性質を明らかにすることを目的に研究を進めている。内閣府革新的研究開発推進プログラム、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業、科研費の研究課題について研究を行った。また、情報理論に関連する電子情報通信学会において、幾つかの学会業務に従事した。教育においては、それらの基礎となる数学や、情報理論、パターン認識とその応用についての講義を担当した。

【教育活動】

情報理論や機械学習とその関連分野の概説する特論などに従事した。各講義間の関係や最近の研究成果などの説明を交えて講義で行うことによって、講義の位置づけや意義を明確にし、学習意欲を高められるよう努めた。

2019年度	パターン認識、線形代数学 I、情報理論、線形代数学 I 演習、情報基礎数学、確率的情報処理特論
2018年度	線形代数学 I、情報理論、線形代数学 I 演習、情報基礎数学、確率的情報処理特論

【研究活動】

内閣府革新的研究開発推進プログラム ImPACT、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業 CREST、科研費基盤研究 B、科研費基盤研究 B、科研費挑戦的萌芽研究の研究課題を進めた。ImPACT に関しては、情報処理の課題を実装した場合のコヒーレントイジングマシンの性能を解析的に評価して、性能を最大化する方法を議論した。CREST に関しては、形データの数理的取り扱いについて検討した。また、科研費基盤研究 B、挑戦的萌芽研究については、それぞれグループテスト、圧縮センシング、スパース重ね合わせ符号などの性能評価、および反復アルゴリズムのダンピングの性能評価法などについて解析的な評価を行った。

1. Toru Aonishi, Kazushi Mimura, Masato Okada, and Yoshihisa Yamamoto, “Statistical mechanics of CDMA multiuser detector implemented in coherent Ising machine”, *Journal of Applied Physics*, vol.124, no.23, pp.233102, Dec. 2018.
2. Toru Aonishi, Masato Okada, Kazushi Mimura, and Yoshihisa Yamamoto, “Critical memory capacity of Hopfield model implemented in coherent Ising machine”, *Journal of Applied Physics*, vol.124, no.15, pp.152129, Sep. 2018.
3. Kazushi Mimura and Jun-ichi Takeuchi, “Dynamics of Damped Approximate Message Passing Algorithms”, *Proc. of the 2019 Information Theory Workshop (ITW2019)*, Aug. 2019.

4. Kazushi Mimura (invited), “A stable iterative sparse recovery algorithm and its analysis”, APSCIT 2019 Annual Meeting, Jul. 2019.
5. Kazushi Mimura (invited), “Property of measurements in the noisy group testing scheme”, The 2019 International Conference for Leading and Young Computer Scientists (IC-LYCS 2019), Mar. 2019.

など

【社会活動】

電子情報通信学会の基礎境界ソサイエティの事業担当幹事として活動したほか、情報理論研究専門委員会の委員、英文論文誌特集号の編集委員として活動した。また、国際会議の運営については、電子情報通信学会が主催し、IEEE が technical cosponsor となっている情報理論に関する国際会議 ISITA2018 の総務として活動した他、ITW2021 の実行委員として活動している。情報理論に関する幾つかの国内会議について運営に携わった。また、電子情報通信学会の英文論文誌の編集委員や編集委員長として活動している。

2019年-2021年	The 2021 IEEE Information Theory Workshop (ITW2021) Symposium Committee member
2019年-2020年	IEICE 英文論文誌 SITA 特集号 編集委員長
2019年	第42回情報理論とその応用シンポジウム プログラム委員長
2018年-2019年	第11回シャノン理論ワークショップ 実行委員
2018年-2019年	第42回情報理論とその応用シンポジウム 実行委員
2017年-2019年	IEICE 基礎境界ソサイエティ 事業担当幹事
2017年-2018年	IEICE 英文論文誌 SITA 特集号 編集委員
2016年-2018年	The 2018 IEEE Symposium on Information Theory and its Applications (ISITA2018) General Secretary
2012年-2019年	IEICE 情報理論研究専門委員会 委員

氏名	宮崎 大輔
職位	准教授
研究分野	知覚情報処理・知能ロボティクス
研究キーワード	コンピュータビジョン

後述の通り教育活動、研究活動、社会活動をおこなった。チューター、学部の委員、学科の委員、非公開業務など、学内運営にも携わった（本学学生に対する面談、事務職員とのやり取り、教員とのやり取り、業者とのやり取り、学生とのやり取り、書類手続き、ポスター発表の審査、部屋の予約、アンケート項目の考案）。

【教育活動】

授業（実施、講義資料の作成、試験の作成および試験とレポートの採点、サンプルプログラムの作成）。情報処理学会からの依頼で教科書を執筆（参考資料の調査、プログラミングやCGソフトによる図の作成、作図、執筆、添削）。他大学の教授からの依頼で教科書を執筆（論文サーベイ、数式の検証、グラフのための数値の計算、作図、執筆、添削）。他大学の准教授からの依頼で教科書を執筆（執筆、添削）。

2019年度	コンピュータグラフィックス II, コンピュータグラフィックス I, 画像情報処理, 画像応用数学特論, 画像メディア工学特論, 知能工学実験 II
2018年度	コンピュータグラフィックス II, コンピュータグラフィックス I, 画像応用数学特論, 知能工学実験 II, 技術英語演習 I

【研究活動】

科研費申請書の執筆（研究内容と理論の考案、論文サーベイ、執筆）。学生への研究指導（内容と理論とプログラムと実験装置の説明、プログラムの一部を作成、学生のプログラムのデバッグ、論文の一部を執筆、論文や発表資料の添削）。研究内容と理論の考案と検証、その資料の作成。実験データ取得とデータ処理。論文執筆。発表資料作成。プログラミング。論文サーベイ。

1. Daisuke Miyazaki, Ryosuke Furuhashi, Shinsaku Hiura, Shape estimation of concave specular object from multiview polarization, Journal of Electronic Imaging, Vol.29, No.4, 2020
2. Daisuke Miyazaki, Yuka Onishi and Shinsaku Hiura, Color Photometric Stereo using Multi-band Camera constrained by Median Filter and Occluding Boundary, Journal of Imaging, Vol.5, No.7, pp.64-1-64-29, 2019
3. Daisuke Miyazaki, Sayaka Taomoto, and Shinsaku Hiura, Extending the visibility of dichromats using histogram equalization of hue value defined for dichromats, International Journal of Image and Graphics, Vol.19, No.3, pp.1950016-1-1950016-13, 2019

4. 研究発表, 宮崎大輔, 結城修, 床井浩平, 吉田典正, 金森由博, CG 教育のための知識の体系化, 映像表現・芸術科学フォーラム 2020, 2020 年 3 月
5. Presentation, Koumei Hamaen, Daisuke Miyazaki, Shinsaku Hiura, Multispectral Photometric Stereo Using Intrinsic Image Decomposition, The International Workshop on Frontiers of Computer Vision, 2020 年 2 月
6. 研究発表, 濱縁幸明, 宮崎大輔, 日浦慎作, 多波長カラー照度差ステレオ法へのレチネックス理論の応用, 画像の認識・理解シンポジウム, 2019 年 8 月
7. 特別講演・招待講演, 宮崎大輔, 大西優花, 日浦慎作, マルチスペクトル照度差ステレオ法による形状計測, 画像電子学会年次大会, 2019 年 6 月
8. Presentation, Shuhei Hashimoto, Daisuke Miyazaki, Shinsaku Hiura, Uncalibrated photometric stereo constrained by intrinsic reflectance image and shape from silhouette, International Conference on Machine Vision Applications, 2019 年 5 月

他 15 件

【社会活動】

論文の査読(国際会議 42 本、国内会議 3 本、英文論文誌 11 回、和文論文誌 0 回)(なお、ACCV2018、BMVC2018、ACPR2019、e-Heritage2019、3DRW2018、TPAMI は査読者・プログラム委員として名前がウェブ上で公表されている)。国内会議 MIRU2019 領域チェア(査読者の割り当て、判定会議、メタレビューの記入、座長)。英文論文誌の特集号の編集委員(JI)。座長(MIRU2019、IWEIC2019)。外部機関から依頼された非公開の業務。

2019 年 11 月	Program Committee Member, ACPR2019
2019 年 10 月	Program Committee Member, e-Heritage2019
2019 年 7 月	エリアチェア, MIRU2019
2018 年 12 月	Program Committee Member, ACCV2018
2018 年 9 月	Program Committee Member, 3DRW2018
2018 年 9 月	Program Committee Member, BMVC2018
2013 年 7 月-	画像電子学会
2011 年 4 月-	Editorial Board, International Journal of Computer Vision & Signal Processing
2009 年 5 月-	電子情報通信学会
2006 年 8 月-	ACM
2004 年 9 月-	IEEE
2002 年 10 月-	情報処理学会

他 13 件

氏名	宮原 哲浩
職位	准教授
研究分野	知能情報学、情報学基礎
研究キーワード	計算論的学習理論、帰納論理プログラミング、機械学習、知識発見、データマイニング、進化計算

2018年度、2019年度は機械学習、データマイニング、計算論的学習理論の分野を中心に研究を行った。研究室に所属する学部学生に対し研究指導を行った。2018年度、2019年度の教育活動として、前期4科目、後期1科目の授業を担当した。2018年度、2019年度の社会活動として、オープンキャンパスおよびライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。

【教育活動】

2018年度、2019年度前期は計算論、記号処理プログラミング、知能工学実験 I、推論方式特論の4科目を担当した。後期は数理論理学の1科目を担当した。2018年度は研究室に所属する学部4年生2名に対し、2019年度は研究室に所属する学部4年生3名に対し、「パターンの機械学習によるデータマイニング手法の開発」というテーマで教育研究指導を行った。

2019年度	計算論、記号処理プログラミング、知能工学実験 I、推論方式特論、数理論理学
2018年度	計算論、記号処理プログラミング、知能工学実験 I、推論方式特論、数理論理学

【研究活動】

2018年度、2019年度は機械学習、データマイニング、計算論的学習理論の分野を中心に研究を行った。特に、以下のテーマを主な研究目標とした。「強力な表現能力を持つグラフ構造パターンによるグラフ構造データからの深層知識の発見」、「グラフ構造パターン表現の高度化によるグラフ構造化深層知識の発見」、「パターンの機械学習によるデータマイニング手法の開発」。2018年度は雑誌論文4件、国際会議論文2件、研究発表6件、2019年度は雑誌論文2件、国際会議論文1件、研究発表6件の研究成果を発表した。

1. S.Matsumoto, T.Uchida, T.Shoudai, Y.Suzuki, T.Miyahara, An Efficient Learning Algorithm for Regular Pattern Languages Using One Positive Example and a Linear Number of Membership Queries, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E103.D, No.3, pp.526-539, 2020
2. Y.Suzuki, T.Miyahara, T.Shoudai, T.Uchida, S.Matsumoto, T.Kuboyama, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Height-Constrained Variables for Trees, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and Its Applications, Vol.12, No.3, pp.78-88, 2019

3. F.Tokuhara, S.Okinaga, T.Miyahara, Y.Suzuki, T.Kuboyama, T.Uchida, Using Label Information in a Genetic Programming Based Method for Acquiring Block Preserving Outerplanar Graph Patterns with Wildcards, Proc. 2019 International Workshop on Computational Intelligence and Applications (IWCIA 2019), 2019
4. S.Matsumoto, T.Uchida, T.Shoudai, Y.Suzuki, T.Miyahara, Exact Learning of Regular Pattern Languages from One Positive Example Using a Linear Number of Membership Queries, Proc. 2019 International MultiConference of Engineers and Computer Scientists, 2019
5. T.Uchida, S.Matsumoto, T.Shoudai, Y.Suzuki, T.Miyahara, Exact Learning of Primitive Formal Systems Defining Labeled Ordered Tree Languages via Queries, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E102.D, No.3, pp.470-482, 2019
6. Y.Yamagata, F.Tokuhara, Y.Inaba, K.Muratani, T.Miyahara, Y.Suzuki, T.Uchida, T.Kuboyama, Evolutionary Learning of Multiple TTSP Graph Structured Patterns from Positive and Negative TTSP Graph Data: Its Graph Pattern Display System and Performance Evaluation, Proc. 22nd Asia Pacific Symposium on Intelligent and Evolutionary Systems (IES 2018), 2018
7. F.Tokuhara, T.Miyahara, T.Kuboyama, Y.Suzuki, T.Uchida, Acquisition of Characteristic Sets of Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by a Two-Stage Evolutionary Learning Method for Graph Pattern Sets, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol.7, No.3-4, pp.270-288, 2018
8. F.Tokuhara, T.Miyahara, T.Kuboyama, Y.Suzuki, T.Uchida, Aggregative Context-Aware Fitness Functions based on Feature Selection for Evolutionary Learning of Characteristic Graph Patterns, Vietnam Journal of Computer Science, Vol.5, No.3-4, pp.229-239, 2018
9. T.Shoudai, T.Miyahara, T.Uchida, S.Matsumoto, Y.Suzuki, An Efficient Pattern Matching Algorithm for Unordered Term Tree Patterns of Bounded Dimension, IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E101.A, No.9, pp.1344-1354, 2018

【社会活動】

2018年度、2019年度にオープンキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。2018年度、2019年度にライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。2018年度に高校生による情報科学自由研究のテーマを提案した。2019年度に高校生による情報科学自由研究のテーマを実施した。

氏名	村田 佳洋
職位	准教授
研究分野	ソフトコンピューティング
研究キーワード	遺伝アルゴリズム、組合せ最適化、ナビゲーションシステム、ワイヤレスセンサネットワーク

遺伝アルゴリズムを用いた組み合わせ最適化手法の開発、ならびにナビゲーションシステム向けの経路探索研究に関する研究を行っている。この専門を生かし、学生向けには確率統計、ソフトコンピューティング、データ構造とアルゴリズム I の教育を行っている。またシステム工学実験においては、実験立案からシステム構成、パート担当、幅広く担当しており、本年度の大規模な担当者変更を学生への負担なく遂行するために各所で尽力する予定である。一方、留年生向けの指導にも力を入れている。具体的には、同級生の友人が激減することによる転落を防げるよう、忠言ならびに集合場所・機会（講義、ゼミ等）の提供に力を入れている。

【教育活動】

専門のソフトコンピューティング（遺伝的アルゴリズムを含む、自然界等にインスパイアされた計算手法の総称）を通じ、現実世界の問題への計算機を用いた取り組み方についての教育に力を入れている。特に趣味のゲーム経験を活かし、「これら学術的知見をどう現場に応用するのか」を学生に分かりやすい形で教えることに注力している。近年では、ソーシャルゲームのガチャが確率統計と関わり深く、学生の興味を引きやすい。一方、実験を通じてレポートの書き方の指導に力を入れている。具体的には、「正解」を書くものではなく、「データ」と「日本語」で「レポート」するものであることを理解させられるよう心掛けている。

2019 年度	確率統計、データ構造とアルゴリズム、ソフトコンピューティング
2018 年度	確率統計、データ構造とアルゴリズム、ソフトコンピューティング

【研究活動】

遺伝アルゴリズムを用いた組み合わせ最適化手法の開発、ならびにナビゲーションシステム向けの経路探索研究に関する研究を行っている。今後は、トラックへの荷積みやそのトラックの行程等、配車計画問題に手を広げていく予定である。成果は ITS 系 (ITSC 等) の会議、および進化アルゴリズム系 (CEC、SEAL 等) の会議で発表している。また情報処理学会論文誌や電気電子情報通信学会に投稿している。

【社会活動】

本研究室学生が参加しているサイバー防犯ボランティアに関し、ゼミ室の利用や、持ち出し可能な機器等の管理を通じて支援を行っており、今後も継続する予定である。本学のオープンキャンパスにおいても、進学希望の高校生向けに研究紹介を行っている。

2007 年-	システム制御情報学会
---------	------------

氏名	目良 和也
職位	助教
研究分野	知能情報学、感性情報学・ソフトコンピューティング、ヒューマンインターフェース・インタラクション
研究キーワード	感情情報処理、情緒、情緒計算手法、自然言語対話、好感度、音響分析

「心の通ったコミュニケーションができるコンピュータ」の実現を目指し、口調や表情などの情報からの感情推定に関する研究を行っている。講義ではプログラミングや情報処理の応用技術についての講義を担当している。研究室では自身の研究に関連する範囲の中で、学生の興味や希望を出来るだけ考慮してテーマを決め、研究指導している。また外部機関との共同研究も積極的に行っている。

【教育活動】

3学部合同基礎演習、情報科学基礎実験βを担当している。また、情報活用基礎と音声言語情報処理特論の副担当もしている。3学部合同基礎演習では本学学生が情報、国際、芸術を共に学べる環境であることを生かし、3学部混成クラスで文献調査、プレゼンテーション技法、芸術鑑賞などを行うことでお互いの長所を生かし、苦手なことは助け合いながら学んでいく講義を目指している。情報科学基礎実験βではC言語によるプログラミングの演習を担当している。情報活用基礎では、情報セキュリティやネットワークリテラシーに関する講義を主に担当している。音声言語情報処理特論では、音声認識ソフトを使った演習を担当している。

2019年度	情報科学基礎実験β、情報活用基礎、音声言語情報処理特論、3学部合同基礎演習
2018年度	情報科学基礎実験β、情報活用基礎、音声言語情報処理特論、3学部合同基礎演習

【研究活動】

研究室では、「心の通ったコミュニケーションができるコンピュータ」の実現を目指し、口調や表情などの情報からユーザの感情を推定する技術について研究している。また、感情表現の食い違いによるユーザの複雑な心情の推定および伝達手法についても研究している。2019年3月現在、COI 広島、NTTドコモ、広島大学医学部保健学科と共同研究を行っている。

1. 目良和也, 青山正人, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 発話内容と口調の関係に基づく発話者の嗜好情報推定, 知能と情報 (日本知能情報ファジィ学会誌), Vol. 31, No. 5, pp.28-37, 2019
2. Shota Saitou, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Correlation Analysis between Subjectively Annotated Emotions and Objectively Annotated Emotions, Proceedings of International MultiConfernece of Engineers and Computer

Scientists 2019 (IMECS 2019), pp.141-149, 2019 (Merit Award)

3. 見尾和哉, 石野亜耶, 目良和也, 竹澤寿幸, LSTM を用いた本心でない発話の自動検出, 2019 年度人工知能学会全国大会発表論文集, 3G4-0S-18b-01, 2019
4. 大道博文, 林柚季, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, Action Unit の組み合わせを用いた快感情抑圧表現アニメーションの生成, 2019 年度人工知能学会全国大会発表論文集, 4Rin1-14, 2019
5. 積際早紀, 黒澤義明, 目良和也, 竹澤寿幸, 深層学習を用いたアパレル平置き画像からの着装状態への変換, 2019 年度人工知能学会全国大会発表論文集, 3Rin2-21, 2019
6. 高市晃佑, 片上敬雄, 黒澤義明, 目良和也, 竹澤寿幸, 深層学習を用いた画像変換に基づく会話からの音声抽出, 2019 年度人工知能学会全国大会発表論文集, 3Rin2-31, 2019
7. 目良和也, 上村譲史, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 口調と表情遷移に基づく抑圧された負の感情の検出, 第 13 回日本感性工学会春季大会, 2018 年 3 月

【社会活動】

市民向けの研究成果発表の場として、毎年、産学連携研究発表会と広島市立大学地域貢献事業発表会に参加し、ポスター発表と実機によるデモンストレーションを行っている。また COI 広島からの依頼で、JST フェアにて研究成果を紹介している。

2019 年度	広島市立大学地域貢献事業発表会
2018 年度, 2019 年度	広島市立大学産学連携研究発表会
2018 年度, 2019 年度	オープンキャンパス
2018 年	JST フェアでのデモンストレーション
2016 年 11 月-	日本音響学会
2016 年 8 月-	知能工学実験, オープンキャンパス
2015 年 2 月-	日本知能情報ファジィ学会
2012 年 9 月-	音声情報を用いた感情分析とその応用, リエゾンフェスタ 2012
2012 年 5 月-	進路指導 (高校) 教員対象大学説明会, 広島市立大学
2011 年 10 月-	外国人生活者からの 119 番通報受付支援技術の検討とシステム試作, 市役所研究紹介展
2011 年 9 月-	情報弱者のためのコミュニケーション支援技術, リエゾンフェスタ 2011
2011 年 8 月-	人間の言葉を理解するコンピュータ, オープンキャンパス 2011
2011 年 1 月-	情報弱者のためのコミュニケーション支援技術, リエゾンフェスタ 2011
2010 年 1 月-	IEEE
2008 年 8 月-	高校生のための自由研究
2007 年 8 月-	高校生のための自由研究

氏名	森 康真
職位	助教
研究分野	メディア情報学・データベース、知能情報学
研究キーワード	知識情報処理、データマイニング、ソーシャルメディア

全体として、教育・研究を両輪として社会貢献にも取り組んでいる。教育活動については、担当授業科目について、関連する教員と連携を取りながら、引き続き授業の見直しや改善を行っていく。研究活動については、研究に興味を持つ学生と研究をより深いものにしていく。学術誌や国際会議などへの発表に向けて努力し、予算獲得につながる研究を行いたい。社会活動については、公開講座「高校生による情報科学自由研究」を中心とした活動を継続していく。機会があれば高校生以外を対象とした活動にも貢献したい。

【教育活動】

担当授業科目は以下の通り。2018年度より基礎演習から3学部合同基礎演習となったため、試行錯誤が続いている。さらなる改善が必要と考えている。情報科学基礎実験も2017年度に内容変更となったが、引き続き実施内容の改善を行った。データマイニングは主担当教員から連絡がないため、担当できない状況が続いた。プログラミング III 演習では、毎回レポートとして提出されるソースコードに対して、動作チェックを行い、学生にコメントを返している。eラーニング英語 II は学科に割り当てられているため、2019年度のみ担当した。

2019年度	3学部合同基礎演習、情報科学基礎実験β、データマイニング（演習補佐）、プログラミング III 演習、情報科学基礎実験β、eラーニング英語 II(支援教員)
2018年度	3学部合同基礎演習、データマイニング（演習補佐）、情報科学基礎実験β、情報科学基礎実験β、プログラミング III 演習

【研究活動】

知識情報処理の研究に従事しており、テキストデータからの知識発見、ソーシャルメディアと知識創造支援などの研究を行っている。研究室配属の学生と研究を行っており、指導学生数は、2018年度はB4:3/7、M1:1/2、M2:0/0、2019年度はB4:3/8、M1:1/2、M2:1/2となっている。2018年度はポスター発表1件、2019年度は口頭発表2件であった。研究費の獲得には至らなかった。研究全般についてさらなる自助努力が必要である。

1. 研究発表, 赤松 知昭, 森 康真, 田村 慶一, Leap Motion を用いた空中署名での個人認証, 2019 IEEE SMC Hiroshima Chapter 若手研究会, 2019年7月
2. 研究発表, 吉高 太志, 森 康真, 田村 慶一, ツイートの特定の単語に着目した性別推定に関する評価, 2019 IEEE SMC Hiroshima Chapter 若手研究会, 2019年7月
3. 研究発表, 吉高 太志, 田村 慶一, 森 康真, ツイートを対象としたノンパラメトリック検

定でのクラスタ細分化による属性推定, 電子情報通信学会 2019 年総合大会学生ポスターセッション, 2019 年 3 月

【社会活動】

データ工学研究室における研究の分担に基づいて、2010 年度より公開講座「高校生による情報科学自由研究」にテーマを提供している。実施テーマは、「ビッグデータの科学～ソーシャルネットワークの分析～」である。受講者数は、2018 年度 4 名、2019 年度 8 名 (3 グループに分かれて別日程で実施) であった。2019 年度は、自由研究の実施期間以外にも、高校教員と一緒に生徒らの指導を行った。広島県立広島工業高等学校の 1 年生らのグループが、令和元年度広島県科学セミナーで発表を行い、特別賞を受賞した。

2019 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2019
2019 年 8 月	オープンキャンパス 2019
2019 年 7 月-2019 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2018 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会
2018 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2018
2018 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2018 年 8 月	オープンキャンパス 2018
2007 年 1 月-	IEEE Computer Society
2004 年 4 月-	ACM
2003 年 10 月-	日本データベース学会
1994 年 10 月-	電子情報通信学会
1992 年 6 月-	情報処理学会
1992 年 6 月-	人工知能学会

氏名	李 仕剛
職位	教授
研究分野	知能ロボティクス、知覚情報処理
研究キーワード	ロボットビジョン、脳視覚情報処理、マンマシンインターフェース、車椅子ロボット

教育活動としては、2年次科目「論理回路」、3年次科目「メカトロニクスⅡ」、及び、大学院科目「ロボットビジョン特論」を担当しました。研究活動としては、主に全天周の視野をもつ球面画像の処理に関する研究、視線推定に関する研究、車の運転補助に関する研究に取り組みました。社会活動としては、主に学術交流協定校中国西南大学との学術交流活動に力を入れました。

【教育活動】

学部学生2年次科目「論理回路」、「線形代数Ⅱ」(2018年度)、3年次科目「メカトロニクスⅡ」、及び、大学院科目「ロボットビジョン特論」を担当しました。事前に時間をかけて準備を行い、わかりやすいように説明することに努めました。大学院科目に関しては、教材の作成や英語の教材の選定に力を入れました。

2019年度	論理回路、メカトロニクスⅡ、ロボットビジョン特論
2018年度	論理回路、線形代数Ⅱ、メカトロニクスⅡ、ロボットビジョン特論

【研究活動】

引き続き、主に全天周の視野をもつ球面画像の処理に関する研究、視線推定に関する研究、車の運転補助、車椅子ロボットに関する研究に取り組みました。その中で、代表者として「科学研究費助成事業(基盤研究C)」「注視情報から意図を推定する「人馬一体」型の車いすロボットの開発」の研究プロジェクトに取り組みました。また、博士後期課程の修了生が本学の学術交流協定校の中国西南大学電子情報工程学院の教員になったことをきっかけに、中国西南大学電子情報工程学院とロボットビジョンに関する国際共同研究も引き続き行いました。

1. Yuhao Shan and Shigang Li, Discrete Spherical Image Representation for CNN-Based Inclination Estimation, IEEE ACCESS, Vol. 8, No. 1, pp. 2008-2022, 2019
2. Lei Peng, Jianfeng Li, Jingxuan Shan, Qingyu Bie, Jingshu Qiao, Yuhao Shan, Tong Chen and Shigang Li, Profile Expression Recognition with Head-Mounted Spherical Camera, 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2019), pp. 2008-2022, 2019
3. Le Wang, Yuhao Shan, Shigang Li and Takahiro Kosaki, Pose Estimation from Omnidirectional Image by Convolutional Neural Network, 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2019), pp. 2008-2022, 2019
4. Lei Zhong, Changmin Bai, Jianfeng Li, Tong Chen, Shigang Li, Yiguang Liu, A Graph-

- Structured Representation with BRNN for Static-based Facial Expression Recognition, 2019 14th IEEE International Conference on Automatic Face & Gesture Recognition (FG 2019), pp.2008-2022, 2019
5. Jianfeng Li, Yuhao Shan, Shigang Li and Tong Chen, Gaze estimation using a headmounted single full-view camera, Journal of Electronic Imaging, Vol.28, No.1, pp.2008-2022, 2019
 6. Yuhao Shan and Shigang Li, Descriptor Matching for a Discrete Spherical Image with a Convolutional Neural Network, IEEE Access, pp.2008-2022, 2018
 7. Jianfeng Li, Shigang Li, Tong Chen and Yiguang Liu, A geometry-appearance based pupil detection method for near-infrared head-mounted cameras, IEEE Access, pp.2008-2022, 2018
 8. Shoji Matsuo, Shigang Li, Jianfeng Li, Ikuhisa Mitsugami and Takahiro Kosaki, Auto-estimation of Relative Orientation Between a Roof-Mounted Spherical Camera and a Vehicle Based on Spherical SLAM, IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics (ROBIO), pp.2008-2022, 2018
 9. Jianfeng Li, Xiaowei Wang and Shigang Li, Spherical-Model-Based SLAM on Full-View Images for Indoor Environments, Applied Sciences, Vol. 8, No. 11, pp.2008-2022, 2018
 10. Shigang Li, Xiaowei Wang and Takahiro Kosaki, Computation of homography between a spherical image and a perspective image, 14th IEEE International Conference on Automation Science and Engineering (CASE), pp.2008-2022, 2018

【社会活動】

主に学術交流協定校中国西南大学との学術交流活動に力を入れました。具体的には、中国西南大学電子情報工程学院の教員を招いて、本学で IWEIC2019 の Workshop を共同で開催しました。その中で、中国西南大学電子情報工程学院の教員による 4 件の招待講演、また、ドイツ・ハノーバー専科大学の教員による 1 件の招待講演がありました。本学の学生による発表が多数あり、大学のグローバル人材の育成に寄与することができました。

2017 年 3 月-	中国西南大学客員教授
2003 年 4 月-	SCOPE 専門評価委員

氏名	若林 真一
職位	教授
研究分野	集積回路の計算機援用設計、組合せ最適化アルゴリズムとその応用
研究キーワード	電子設計自動化、計算機支援設計、FPGA

2018年度は理事・副学長（企画・戦略担当）として大学運営に貢献した。2019年4月に理事長・学長に就任してからは、学内理事会、運営調整会議、理事・事務連絡会議等の会議を主宰し、大学運営を指揮している。さらに、中期計画の円滑な推進のために中長期的な視点に立った大学運営を行うと共に、第3期中期計画策定に向けて準備を進めている。2020年年初からの新型コロナウイルス感染症拡大においては、陣頭に立って大学の対応を指揮している。

情報科学研究科教授としては、情報工学専攻論理回路システム研究室（研究室長は永山忍教授）に所属し、研究室に配属された学生に対する教育と指導を研究室の他の教員と共に行っている。

【教育活動】

講義については、2018年度は4つの学部講義科目と1つの大学院科目を担当し、前年度の講義アンケートの結果等を参考にして、なるべくわかりやすい講義となるように務めた。2019年度は理事長・学長に就任したため、前期に学部専門講義1科目を担当した。

研究室における学生の研究指導については、研究室の他の教員と協働して行った。2018年度は2人の学部4年生と1人の修士2年生、2019年度は1人の学部4年生を主指導教員として卒業研究、修士論文研究を指導した。

2019年度	電子回路
2018年度	電子回路、論理回路システム特論、論理設計、論理設計演習

【研究活動】

オンラインデータに対するk-匿名化、k-匿名化専用ハードウェア、LSIマスクパターンデータに対するホットスポット検出等に関して研究を推進し、研究論文を国内外で開催された国際会議・研究会等で発表した。オンラインデータに対するk-匿名化に関する研究については科学研究費補助金基盤研究(C)（研究期間2017～2019年度）を獲得した。

1. Ryosuke Yamauchi, Yoko Kamidoi, Shin'ichi Wakabayashi, "A Protocol for Preventing Transaction Commitment without Recipient's Authorization on Blockchain," Proc. 2019 IEEE 43rd Annual Computer Software and Applications Conference (COMPSAC), pp.934-935 (2019).
2. Toshitaka Ito, Yuri Itotani, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, "A Nearest Neighbor Search Engine Using Distance-based Hashing," Proc. 2018 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT2018), pp.153-160 (2018).
3. Yuri Itotani, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, and Masato Inagi, "An

Approximate Nearest Neighbor Search Algorithm Using Distance-Based Hashing,” Proc. International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA 2018), pp. 203-213 (2018).

4. Gaku Kataoka, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, “Novel Feature Vectors Considering Distances between Wires for Lithography Hotspot Detection,” Proc. Euromicro Conference on Digital System Design (DSD2018), pp. 85-90 (2018).

【社会活動】

2018年度は理事・副学長（企画・戦略担当）として、文部科学省平成27年度大学教育再生戦略経費「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の事業推進責任者として事業の推進に努めるなど、本学の社会貢献を推進した。COC+事業は多くの成果を挙げ、2020年3月末をもって無事終了した。2018年度は理事・副学長として、2019年度は理事長・学長として、広島市が設置した各種委員会の委員等を務め、地域行政の円滑な実施に貢献した。

2019年4月～	公益財団法人広島平和文化センター評議員 公益財団法人広島市文化財団評議員 公益財団法人広島市産業振興センター評議員 公益財団法人ヒロシマ平和創造基金理事 公益財団法人ひろしん文化財団理事 公益財団法人広島観光コンベンションビューロー評議員会会長 広島シンガポール協会理事
----------	---

氏名	脇田 航
職位	講師
研究分野	ヒューマンインターフェース・インタラクション、文化財科学・博物館学、知覚情報処理、知能情報学、図書館情報学・人文社会情報学、エンタテインメント・ゲーム情報学
研究キーワード	コンピュータグラフィックス、デジタルミュージアム、バーチャルリアリティ、ハプティクス、ロコモーションインタフェース、複合現実感、知・技の伝承

教育活動としては、演習系科目では社会人基礎力を身に付けさせるよう指導し、研究指導においては、サーベイ力、プログラミング力、プレゼン力、問題解決力、論文執筆力を身に付けさせるよう指導を行った。研究活動としては、科研費（基盤B）採択、ジャーナル1件、国際会議2件、学会受賞8件、デモ展示活動32件、国際特許申請1件、電気学会研究会開催8回、見学会開催6回、電気学会C部門大会企画セッション開催1件となった。社会活動としては、2018年3月に設立した本学発第1号ベンチャー企業との共同研究および社会実装を進め、東京ゲームショウをはじめとする各種展示会や一般展示会を開催・出展し、マスメディア報道56件となった。

【教育活動】

三学部合同基礎演習においては、情報倫理やレポートの書き方だけでなく、情報科学に関するテーマ発表とディベートを通して、社会人基礎力である、前に踏み出す力、考え抜く力、チームワーク力を身に付けさせるよう指導を行った。システム工学実験においては、質問があってもすぐ答えを教えるのではなく、わからないことやその原因、問題点をヒアリングして学生自身に問題点を理解させ、解決方法を導くよう指導を行った。研究指導においては、サーベイ力、プレゼン力、問題解決力、論文執筆力を身に付けさせ、東京ゲームショウ出展に向けてプログラミング力、チームワーク力を身に付けるよう指導を行った。

2019年度	電気回路、三学部合同基礎演習、eラーニング英語Ⅰ、プレゼンテーション技法、外書講読演習Ⅱ、卒業研究Ⅰ、システム工学実験Ⅱ、技術文書作成法、卒業研究Ⅱ
2018年度	eラーニング英語Ⅰ、三学部合同基礎演習、プレゼンテーション技法、システム制御特論、卒業研究Ⅰ、外書講読演習Ⅱ、卒業研究Ⅱ、技術文書作成法、システム工学実験Ⅱ

【研究活動】

2018～2019年度においては、知・技の伝承に向けた研究開発に向けてモーションプラットフォームおよび歩行プラットフォームの開発を進めた。科研費は2018年度若手Aに引き続き2019年度基盤Bに採択され、研究成果としては、ジャーナル1件、国際会議2件（ACM VRST、受賞1件）、国内学会発表38件（受賞7件）、デモ展示活動32件、国際特許申請1件となった。また、電気学会C部門知覚情報技術委員会下に知・技の伝承と複合現実型協同研究委員会を立ち上げ、研究会

開催 8 回、見学会開催 6 回、電気学会 C 部門大会企画セッション開催 1 件となった。また、2018・2019 年度ともに教員表彰（研究部門）を受賞した。

1. Wataru Wakita, Tomoyuki Takano, and Toshiyuki Hadama, A Low-cost Motion Platform with Balance Board (Honorable Mentions (Poster & Demo) Award), ACM VRST 2018, Posters and demos, Waseda University, Tokyo, Japan, 2018 年 11 月
2. Wataru Wakita, Tomoyuki Takano, and Toshiyuki Hadama, A Low-cost Omni-directional VR Walking Platform by Thigh Supporting and Motion Estimation, ACM VRST 2018, Posters and demos, Waseda University, Tokyo, Japan, 2018 年 11 月

他 140 件

【社会活動】

学会活動としては、査読 19 件、学会座長 5 件、ワークショップ論文委員 2 件、電気学会 C 部門大会企画セッションオーガナイザ 1 件、研究会幹事 4 件、2019 年より新規国際会議専門委員、2016 年に立ち上げた電気学会協同研究委員会を 2018 年に引き継ぎ第二期委員長となった。地域貢献としては、2018 年度地域貢献事業アドバイザ、2018・2019 年度オープンキャンパスにて研究活動を一般公開、一般展示会開催 4 件、一般向け展示件数 30 件、2018・2019 年度ともに高校生向けの夏休みの自由研究の受け入れを行った。このほか、メディア報道としてテレビ報道・出演 4 件、ニュース・新聞記事掲載 52 件となった。また、2018・2019 年度ともに教員表彰（社会貢献部門）を受賞した。

2020 年 3 月	一般社団法人電気学会 C 部門知覚情報技術委員会 知覚情報研究会「複合現実型実応用および一般」担当幹事
2019 年 7 月-2019 年 8 月	広島市立大学 平成 31 年度 高校生による情報科学自由研究, 最先端 VR (Unreal Engine 4+α) でマルチ対戦ゲームを開発してみよう!
2019 年 4 月-	電気学会知覚情報技術委員会新国際会議(The International Conference on Life Mechatronics(ICLM))専門委員会委員
2019 年 3 月-2019 年 9 月	令和元年 電気学会 電子・情報・システム部門大会, 技術委員会企画セッション, TC9 知・技の伝承と複合現実型実応用オーガナイザ
2019 年 3 月	一般社団法人電気学会 C 部門 知覚情報技術委員会, 知覚情報研究会「マルチモーダル応用及び一般」担当幹事
2018 年 7 月-	一般社団法人電気学会 C 部門知覚情報技術委員会, 第二期知・技の伝承と複合現実型実応用協同研究委員会委員長
2016 年 7 月-2018 年 6 月	一般社団法人電気学会 C 部門知覚情報技術委員会, 知・技の伝承と複合現実型実応用協同研究委員会委員長

他 39 件

芸術学部

氏名	青木 伸介
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	工芸、漆芸、美術

地域資源に注目し、漆造形に纏わる素材として和紙を取り上げ、大竹市にある手すき和紙を楮の栽培から見直し、和紙と漆による造形の可能性を研究することを開始した。

【教育活動】

- ・COC+アートプロジェクト 広島仏壇プロジェクトの実施
- ・地域実践演習において広島仏壇の現場にて演習を行い、2年次の実習においてもその技術を導入した
- ・社会連携プロジェクト「地域資源と伝統技術を活用した芸術教育プログラムの構築」において、学生を対象に楮の栽培法、加工、手すき和紙の製造まで実習形式で教育に取り入れた

2019年度	造形実習ⅡA、造形実習ⅡB
2018年度	3学部合同基礎演習、形体演習Ⅰ、造形実習ⅡA、形体演習Ⅱ、工芸材料概説、卒業制作、描出演習Ⅱ、造形演習ⅡB、テーマ研究（演習）、造形計画研究Ⅰ、造形計画研究Ⅱ

【研究活動】

- ・社会連携プロジェクト「地域資源と伝統技術を活用した芸術教育プログラムの構築」の実施による和紙と漆の研究を行った
- ・第59回日本クラフト展 入選
- ・第3回躍麟会 出展
- ・パークホテル東京 c-depot abstraction Exhibition 出展

【社会活動】

- ・中国芸術系大学との交流事業（漆画芸術海外研修人材育成 2019年度国家芸術基金：中国）講師として参加
- ・社会連携プロジェクト「地域資源と伝統技術を活用した芸術教育プログラムの構築」の実施 大竹手すき和紙保存会との連携事業
- ・日本文化財漆協会理事

氏名	荒木 亨子
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作

日本画の絵具が持つ物質性や色彩を用いた絵画表現について研究を行っている。研究成果を所属学会や個展、グループ展にて発表し、研究会やギャラリートークなどの芸術普及に努めている。また制作研究および発表での成果を実技指導及びキャリア形成教育に還元し、研究活動・教育活動・社会活動の3要素を連動させて向上を図りたいと考える。

【教育活動】

2018年度、2019年度は主に学部2年生を担当。模写・デッサン・日本画制作の実技指導を行う。日本画の基礎を重視し、そこから個々の表現が発展、展開するよう努めている。大学院ではA研究室を担当。作家活動を前提とした実践的な教育を目指す。また授業以外にも日本画専攻で「制作の現場展」を開催し、作品だけでなく制作過程や作家の考えや発想などに触れる機会を設けている。

2019年度	日本画実習ⅡA、構成演習、デッサン実習Ⅱ、構成演習Ⅱ（平面）、日本画実習ⅡB、彫塑演習、材料実習（金属材料）
2018年度	構成演習、材料実習Ⅱ（金属材料）、彫塑演習、日本画実習Ⅱ、デッサン実習Ⅱ、地域実践演習

【研究活動】

日本画制作研究と研究成果の発表を所属学会（「東京春季創画展」4月開催、「創画展」10月開催）と個展、他グループ展にて行った。作品制作では、日本画画材の物質性や色彩を用いた絵画表現について研究を行っている。

1. 珠玉の小品展, 東邦アート 東京, 2019年12月
2. 第46回創画展, 東京都美術館/愛知県美術館ギャラリー/日図デザイン博物館・京都市美術館別館1階, 2019年10月-2019年12月
3. 第28回奨学生美術展, 佐藤美術館 東京都, 2019年9月-2019年11月
4. 第3回廣游会, そごう広島店本館8階 美術画廊, 2019年9月
5. 第45回東京春季創画展, 西武ギャラリー 東京都, 2019年4月
6. 春光展, 銀座スルガ台画廊 東京都, 2019年3月
7. 荒木亨子日本画展, ギャラリー和田 東京, 2018年10月
8. -On the table- 荒木亨子展, 天満屋広島八丁堀 7階アートギャラリー, 2018年4月

【社会活動】

作品発表と併せてギャラリートークを行う。作品や公募団体などより身近に感じてもらえるよ

うな機会、展覧会を企画し芸術普及を目指す。

2018年には受託研究として浅野家入城400年記念事業「浅野長晟肖像画模写」の監修、また社会連携委員として「広島市立大学筆の里工房25周年記念連携展」や「あさみなみ芸術化構想2019-安佐南区役所作品展示」に携わり地域貢献に努めた。

2019年12月	筈々会展 ギャラリートーク
2019年9月	第28回奨学生美術展 ギャラリートーク
2019年8月	第19回芸美会展 ギャラリートーク
2003年10月-	創画会

氏名	石黒 賢一郎
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	絵画 油絵 立体

美術教育は、人間の視覚や皮膚感覚など様々な感覚や意識に直接作用すべきものであり、精神と感性の均衡の取れた人間性の創造に重要な使命を持つ。社会の変化に伴い今日の美術表現はさらに複雑化しているが、美術の歴史は、常に時代の感性を取り入れながら既成の定義や概念を超越し、新しい美的感覚を創造してきた。そしてこの傾向は加速している。

教育現場における表現教育とは学問上の理論やテクニックだけではなく、人対人の「感性の交換と交流」がなければ成就しない。自主性の構築と独創性の向上を示唆することで、美術教育に必要な要素として自らの美術探求を怠らず、学生達の美術表現の指導を目指していく。

【教育活動】

主にデッサン・油絵表現に関する科目を担当している。

芸術活動は、感性をはじめ思考や構想を創造する精神活動や認識力、探求力などの資質を育成するため、人間力の向上や人間形成に強い関連をもっている。基本的学識を教示しつつ、学問上の理論を主とした専門的な学業を実践していき、社会で認識される創造性豊かな造形作家やデザイナー、教育者や新しい感性を持つ芸術作家の創出を目指す。

スペイン伝統のマンチャ技法、マンチャ技法を発展させた混合技法の指導を通しリアリズムにおけるメチエへの理解を深めることに重点におき基礎能力の向上を目指している。

2019年度	デッサン概論、創作と人間、絵画論、油絵入門、デッサン実習Ⅲ、古美術研究（演習）、卒業制作A（演習）
--------	---

【研究活動】

研究活動では常に現実をより広い視野で認識し、自分の表現能力を拡張するようにしている。キャンバスや絵の具だけを使うのではなく自分の生きている世界の様々な物を使い言葉や思想、物体を鑑賞者と共有する事をアート作品として認識することを重要視している。

2019年は3Dプリンターを導入し立体作品を制作し、平面作品とともに自身を構成する全てをリアリズム表現として包括するための研究ができた。

浜松市美術館での回顧展に近い53点の作品を展示し、展覧会終了後、作品が美術館に收藏された。

1. 2020年3月 超写実絵画の襲来ホキ美術館所蔵「Bunkamura ザ・ミュージアム」
2. 2020年2月 新収蔵品展「浜松市美術館」
3. 2020年2月 『ART FAIR PHILIPPINES 2020』Booth No.10
4. 2020年2月 『ART NAGOYA 2020』Room No. 920

5. 2019年12月 HANDS 台風19号チャリティ展「新宿高島屋」
6. 2019年12月 MATES-Year End-2019 石黒賢一郎、須田悦弘、中沢研、藤原康博「ギャラリー一小暮（東京）」
7. 2019年11月 驚愕の超写実展 ホキ美術館×MEAM ヨーロッパ近代美術館「瀬戸内市立美術館」
8. 2019年10月 ギャラリートーク「浜松市美術館」
9. 2019年10月 ART TAIPEI 2019(Taipei)
10. 2019年9月 スーパーリアルワールド展—奇跡の写実絵画— 石黒賢一郎 斉藤雅緒「浜松市美術館」
11. 2019年9月 ART FAIR ASIA FUKUOKA 2019（福岡）
12. 2019年9月 サガテレビ開局50周年記念展 ホキ美術館×ヨーロッパ近代美術館 超写実展 -リアルを超えた絵画 -「佐賀県立美術館」
13. 2019年7月 ホキ美術館展「岩手県立美術館」
14. 2019年6月 ～心ゆさぶる写実絵画～ホキ美術館名品展「山形県酒田市美術館」
15. 2019年5月 Realism Collection the third eye「GALLERY NAO（東京）」
16. 2019年5月 第24回 彩樹会「彩鳳堂画廊（東京）」
17. 2019年5月 「スペインの現代写実絵画 バルセロナ・ヨーロッパ近代美術館（MEAM）コレクション」 「ホキ美術館」
18. 2019年4月 驚異の写実 - ホキ美術館名品展「沖縄県立博物館」
19. 2019年4月 Small Collection by Gallery Suchi 2019「ホキ美術館」

【社会活動】

社会活動としては浜松市美術館での回顧展関連でギャラリートーク、ワークショップ、テレビ出演などを行った。

出身高校でのOB講和では高校生にアートの魅力を伝えることができた。

2020年1月	浜松市芸術祭第67回市展 絵画部門審査
2019年12月	石黒賢一郎と佐藤美術館主任学芸員 立島恵ギャラリートーク「浜松市美術館」
2019年11月	講演会「リアル絵画が生み出す世界観とは」 「浜松市美術館」
2019年11月	石黒賢一郎と須田悦弘氏によるギャラリートーク「浜松市美術館」
2019年11月	ワークショップ「やってみようシルバーポイント」 「浜松市美術館」
2019年11月	静岡 DaiichiTV「まるごと」出演
2019年10月	ケーブルTV「知っトク！週間こさい」出演
2019年10月	OB講和 静岡県立浜松南高校
2019年9月	スーパーリアルワールド展 ギャラリートーク「浜松市美術館」
2017年7月	BS日テレ 【ぶらぶら美術・博物館】「スペインの現代写実絵画」

	出演
--	----

氏名	石松 紀子
職位	准教授
研究分野	美術史
研究キーワード	現代美術

本学に勤務するまで、広島との関わりがなかったこともあり、広島について学び知る必要性を強く感じていたため、2018年度以降の研究や社会活動においては、基町での研究調査や広島芸術学会を通して広島に関わる活動基盤を積極的に形成してきた。そのような活動や大学での教育に傾注する一方で、専門分野として深めていきたいアジアの戦後美術については十分な研究を行うことができなかつた。これまで場当たりの目の前にある教育・研究・社会活動をこなしていた傾向があるので、今後はそれぞれの活動において計画性をもって従事していきたい。

【教育活動】

大学勤務初年度では、講義や演習を行う際にかかなり緊張を伴っていたが、この2年間では気持ちにゆとりができ、授業内容も少しずつ充実させることができた。大学院の授業では概ね20名程の学生を対象にしているため、学生一人ひとりの状況に目を配りながら、ディスカッションやグループ・ワークを進めることができるが、学部の授業では受講生が多いことから一方通行的な授業になり、講義も単調になった傾向がある。受講者数が多くとも、学生の関心を引きながら、双方向的な授業にしていく工夫が必要だが、まだそのやり方を見出しきれていない状況である。

2019年度	現代美術史Ⅰ、専門語学演習（英語）A、美術史特講（現代）A、アートマネジメント概論、専門語学演習（英語）B、美術史特講（現代）B、現代美術史Ⅱ、博物館学実習、現代美術史特講、芸術学研究Ⅰ、造形総合演習Ⅰ、造形総合演習Ⅱ、特別造形総合演習Ⅰ、特別造形総合演習Ⅱ
2018年度	現代美術史Ⅰ、専門語学演習（英語）A、美術史特講（現代）A、アートマネジメント概論、専門語学演習（英語）B、美術史特講（現代）B、現代美術史Ⅱ、博物館学実習、現代美術史特講、芸術学研究Ⅰ、造形総合演習Ⅰ、造形総合演習Ⅱ、特別造形総合演習Ⅰ、特別造形総合演習Ⅱ

【研究活動】

2018年度と2019年度ともに、本学の特色研究費を受け、広島の復興を象徴する基町について研究調査を行ってきた。この2年間では、主に新聞記事・論文・文献の収集、住民への聞き取り調査、写真アーカイブの情報整理とデータ化に終始したため、成果としての報告書等の執筆までには至らなかったが、今後の研究のための基盤づくりができた。

また、研究対象としてアジアの戦後美術についても調査を行っているが、現地調査のための研究助成金を確保できなかったこともあり、十分に研究を進めることができなかった。

1. 「「いま・ここ」の様相-「aspect/持続」展」、広島市立大学芸術学部現代映像展図録『aspect/持続』、pp. 4-6、2019年

2. カルチュラル・スタディーズ学会, 「1970-90年代アジアの現代美術における「アイデンティティ」概念の受容と変遷-福岡市美術館の「アジア美術展」を参照して」, 『年報カルチュラル・スタディーズ』, Vol. 6, pp.169-193, 2018
3. 研究発表, 1960年代から1970年代のマレーシアにおける美術と社会の関係性について, 第32回広島芸術学会, 於広島市立大学サテライトキャンパス, 2018年9月
4. リム・チェンジュ著「1930-70年代シンガポールにおける社会批評のための木版画の盛衰」(図録エッセイ)の英文和訳, 福岡アジア美術館『闇に刻む光:アジアの木版画運動 1930s-2010s』, pp.112-113, 2018年
5. フィービー・スコット著「ベトナム北部の民間版画とプロパガンダ」(図録エッセイ)の英文和訳, 福岡アジア美術館『闇に刻む光:アジアの木版画運動 1930s-2010s』, p.128, 2018年

【社会活動】

2018年度7月から広島芸術学会の事務局幹事となり、学会の運営や活動に深く関わることになる。学会事務局での仕事は初めてのこともあり、会計などの事務作業や大会・例会等の運営など慣れないことも多かったが、円滑に事務局の仕事を行うことができた。

また、基町に関する本学特色研究費の研究調査の一環として、基町での栗の染織ワークショップや、新聞記事を紹介しながら地元の歴史を紹介するトークを行い、住民の方との交流や地域社会の歴史への理解に寄与した。

2019年8月	「基町を知りたい！土曜日の先生：基町、歴史トーク」
2018年11月	「栗の渋皮でスカーフを染めて栗ご飯を作りましょう！」
2018年7月-	広島芸術学会

氏名	伊東 敏光
職位	教授
研究分野	芸術一般（彫刻）
研究キーワード	風景彫刻、風景、彫刻、造形理論、彫刻表現

伝統に根ざした彫刻表現の新たな展開を求めて教育・研究を行っている。教育ではアカデミックな造形理念と技術を体験的に習得することを基本に置き、同時に現代社会や美術の動向を敏感に察し造形化出来る豊かな感性の育成を目指す。研究では、歴史的にも作例が乏しい「風景彫刻」を研究テーマに、制作と理論の両面から風景をモチーフとした独創的な彫刻表現の確立を目指している。展覧会のプロデュースや審査を含む社会活動においても、芸術への既存の価値観に新たな視点を加えることを常に心がけている。

【教育活動】

彫刻専攻が実技の柱とする塑像、石彫、木彫、金属、ミクストメディアのうち塑像と金属を主に担当している。塑像においては人体の構造や動勢を把握し、視覚的な表現に留まらない彫刻表現を指導している。金属では、鉄の溶接、溶断、鍛造等の技術を体験的に身に付け、モチーフと素材の特性を生かした独自の造形を生み出すことを目標に授業を進めている。学部3年以上には、目まぐるしく変化する現代社会や人々の美意識を、課題制作や自由制作という素材選択型の実技を通して考えさせ、卒業制作において専門性の高い技術を基にした独創的な作品の創作につなげられるよう指導している。

2019年度	デッサン実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、実材制作実習Ⅰ、彫刻実習Ⅳ、造形応用研究Ⅰ・Ⅱ、専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、彫刻研究BⅠ・BⅡ、造形応用特別研究、創作総合研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、領域横断特別研究
2018年度	デッサン実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、実材制作実習Ⅰ、彫刻実習Ⅳ、彫刻研究BⅠ・BⅡ、創作総合研究Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

「風景彫刻」を研究テーマとし、風景をモチーフとした新たな彫刻表現の確立を目標に実制作を中心とした研究を行っている。彫刻表現は人体や動物を主なモチーフとして発展し展開して来たが、本研究では過去に作例が少なく、傑作と言われる作品がほとんど見当たらない風景をモチーフにすることで、これまであまり試みられることのなかった彫刻における遠近法や時間軸の表現方法の研究を行っている。また、対馬市や小豆島町におけるアーロプロジェクトの企画や監修を行い、アートと地域社会の連携方法と効果について実践的な研究を行っている。

1. 「彫刻の五・七・五」, 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館(沖縄県), 2019年11月
2. 「対馬アートファンタジア2019」, 対馬市巖原町各所(長崎県), 2019年8月-9月
3. 「ART BOOK/ART GOODS @Bank ART Station」, Bank ART Station(神奈川県), 2019年7月

4. 「瀬戸内国際芸術祭 201」, 香川県／小豆島, 2019年4月- 11月



＜山声洞＞ 鉄, コンクリート, 土、小豆島町神浦地区野外設置

5. 「平和大通り芸術展」, 2019年2月- 3月
6. 廿日市市市政施行30周年記念「木のまち はつかいち」, はつかいち美術ギャラリー（広島県）, 2019年2月- 3月
7. 「Cos'è l'Arte? [第2章] 空の道標べ」, gallery G、旧日本銀行広島支店（広島県）, 2019年1月
8. 三都半島アートプロジェクト2018「野生のハナ」, 香川県小豆島町, 2018年9月
9. 「対馬アートファンタジア2018」, 対馬市厳原町各所（長崎県）, 2018年8月- 9月
10. 伊東敏光展, FEI ART MUSEUM YOKOHAMA（神奈川県）, 2018年8月



＜懐妊厳島＞ W710×D200×H115cm、木（古材）

11. 「彫刻の輪郭」, 広島市立大学芸術資料館（広島県）, 2018年6月
12. 日中韓現代美術祭「三国美鑑」, サムタンアートマイン美術館（韓国 江原道旌善郡）, 2018年2月- 4月

【社会活動】

芸術学部長・研究科長として、芸術の社会的役割や意義について芸術学部全体で発信し、芸術活動を通して地域社会に貢献して行く。

個人としても、高等学校の絵画・彫刻コンクールの審査や市民美術展の審査、講座などを積極的に行い、また地域と連携したアートプロジェクトのプロデュースを通して、社会と芸術の結び付きを深めることによって、芸術家の育成や社会の活性化に繋がる芸術活動の普及に努めて行く。

2020年3月-	庭園制作〈杣七石〉広島市沼田公園
2019年11月-	第18回広島県高等学校 絵画・彫刻コンクール審査員
2019年4月-2020年3月	(香川県小豆島町) 三都半島アートプロジェクト プロデューサー
2018年12月-	作品設置 (パブリックコレクション) 広島市沼田合同庁舎 (火山館) 〈紺龍〉御影石、鉄 h315×w168×d168cm
2018年11月-	第17回広島県高等学校 絵画・彫刻コンクール審査員
2018年10月-2019年9月	一般社団法人 HAP (Hiroshima Art Platform) 理事
2018年4月-2019年3月	(香川県小豆島町) 三都半島アートプロジェクト プロデューサー
2018年4月-6月	「ハナサクモリの芸術家たち」展覧会監修 公益財団法人泉美術館 (広島県)
2018年3月-	作品設置 (パブリックコレクション) 香川県小豆島町役場本館 〈怪物と少年Ⅱ〉 鉄 h265×w210×d70cm

氏名	今村 雅弘
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作

美術・芸術活動を通して社会と関わり生活をして行く事は、生活の中で人生を豊かにし日本の文化を個々が継承して行く事だと思えます。また教養や行動力を身につけることは周囲の一時的な動向に惑わされない価値観が養われます。美術教育、自身の作品制作、社会との関わり方など、広島という環境ならではの学びがあるように思えます。一寸先に一喜一憂することなく地道に研究を続け、他者と関わる機会を大切にすること。それらの事を念頭に学生と接し大学の様々な運営に関わりたいと考えます。

【教育活動】

学部、大学院を通して伝統技法、表現の基礎教育から高度で個性のある絵画 表現を行うことが出来るよう学生に指導している。絵画制作実習、演習を行うカリキュラムの中で技法材料や、造形性に対する知識、教養を養い、粘り強く目の前の課題を完成させることでより高い芸術領域を目指す。作家育成を専攻目標の一つとすることから、平成 12 年より続く広島での展覧会「芸美会展」を企画開催している。また広島市立大学日本画専攻の修了生、大学院生を広く紹介する為に平成 28 年から関東での複数会場による大規模な展覧会「Flag of the West」を隔年で開催し、作家としての足掛かりとなるよう働きかけている。

2019 年度	構成実習Ⅱ（平面）、材料実習Ⅲ、デッサン実習Ⅲ、日本画実習Ⅲ、日本画研究Ⅰ、古美術研究（演習）、日本画研究Ⅱ
2018 年度	構成実習Ⅱ（平面）、材料実習Ⅲ、デッサン実習Ⅲ、日本画実習Ⅲ、日本画研究Ⅰ、古美術研究（演習）、日本画研究Ⅱ

【研究活動】

研究活動は、日本画の公募団体である創画会において独創性のある表現が評価され、平成 23 年創画会会員に推挙された。現在は同会運営委員として審査運営にあたり、後進の指導にあっている。研究発表は年二回の創画展出品に加え、美術画廊での個展、企画展に出品している。また大学での教育研究に繋がる企画展示にも作品を出品し、自身の研究とともに市立大学日本画専攻の研究結果を地域社会に示している。

研究内容は、抽象的な表現様式で独自の絵画世界を模索し、自身の制作における一つのテーマである“気色”“気配”を日本画の素材技法を駆使しながら日本絵画の平面性という意味合いを含めた日本画の可能性を追及している。

2019 年度					
1	2019/4	第 45 回東京春季創画展	団体展	西武池袋本店 別館 2 階＝ 西武ギャラリー	東京都

2	2019/8	芸美会展	グループ展	福屋八丁堀店	広島県
3	2019/9	廣遊会展	グループ展	広島そごう	広島県
4	2019/ 10	第46回創画展	団体展	東京都美術館	東京都
5	2019/ 11	Will+s 展 -2019-	グループ展	西武アートフォーラム	東京都
2018年度					
1	2018/4	第44回東京春季創画展	団体展	西武池袋本店 別館2階＝ 西武ギャラリー	東京都
2	2018/4	Flag of the West 2018 M 6展	グループ 展	数寄和	東京都
3	2018/4	Flag of the West 2018 miniature	グループ 展	森田画廊	東京都
4	2018/4	Flag of the West 2018 sestet	グループ 展	ナカジマアート	東京都
5	2018/10	第45回創画展	団体展	東京都美術館	東京都
6	2018/ 10	芸美会展	グループ 展	福屋八丁堀店	広島県
7	2018/ 11	今村雅弘個展	個展	森田画廊	東京都
8	2018/ 11	Will+s 展 -2018-	グループ 展	西武アートフォーラム	東京都

【社会活動】

毎年・高校生を対象としたサマースクールを実施し、美術を志す若い学生に対し大学入試を想定した実技指導を行っている。また市民を対象とした公開講座には毎年多くの受講生が集まり、日本画制作を通して美術・芸術への理解を深めて頂いている。地域貢献では地元での日本画に対する認識を深めるため、ワークショップや企画展でのギャラリートークイベント開催など、作品展示とともに美術理解の底上げに尽力している。平成28年からはNPO法人アートプラットフォームGの理事を務め、教育や研究の経験と成果を地域社会に還元している。

2011年10月-現在	一般社団法人 創画会会員
-------------	--------------

氏名	ウォーゼン, チャールズ
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻

I am interested in the art of now, and my teaching and sculpting reflects this. I want my students to find out what is happening around them and how their work might find a place in today's artworld. As no medium now dominates in art, my focus is on the mixed and contingent, the "unmonumental." In addition to teaching and artmaking, I spend much time trying to maintain and grow HCU's partnerships with universities overseas, both sending and receiving students and faculty.

【教育活動】

Along with teaching sculpture students, from freshman through doctoral candidates, I also instruct students from other areas in the Arts Faculty, as well as those from International Studies and Information Sciences. This interdisciplinary work is rewarding and offers a glimpse of the student body as a whole. And as it is key for young students to meet real-world professionals, I also actively invite artists to give lectures in the Arts Faculty.

2019年度	3学部合同基礎演習、立体造形概論、古美術研究、構成実習 II、III、彫刻実習 IIA、IIB、現代美術演習 I、II、彫刻研究BI、BII、創作総合研究 I、II、III、環境造形演習
2018年度	3学部合同基礎演習、立体造形概論、古美術研究、構成実習 II、III、彫刻実習 IIA、IIB、現代美術演習 I、II、彫刻研究BI、BII、創作総合研究 I、II、III、環境造形演習

【研究活動】

The work I showed at the 2016 Setouchi Triennale on Shodoshima was, after being relocated, unofficially part of the following exhibition in 2019. And, in addition to participating in "The Countours of Sculpture," a group show at HCU's museum, I also had a two-person show with a former student at the Hiroshima Art Center.

1. チャールズ・ウォーゼン、高瑞, キツネの蜂蜜がけマーチ, 広島芸術センター, 2018年11月
2. 前川義春、伊東敏光、チャールズ・ウォーゼン、田中圭介、七搦綾乃、土井満治、丸橋光男、友定睦、尾身大輔, 彫刻の輪郭, 広島市立大学芸術資料館, 2018年6月

【社会活動】

I gave presentations and demonstrations on 3D printing and scanning at Summer Extension Courses at HCU's Sculpture Dept. in August 2018 and 2019. For years I also have been taking

part in the Yokogawa Art Charity Festival Exhibition, held annually to support Tohoku victims of 3/11.

2019年8月	塑像を3Dスキャンとプリント, HCU彫刻専攻
2018年8月	3Dスキャン&プリントワークショップ, HCU彫刻専攻

氏名	鰐澤 達夫
職位	教授
研究分野	現代美術、アートディレクター
研究キーワード	現代美術、アートディレクション

19年度は、博士後期を受験した学生が2名で、2名とも合格した。その2名には、半年以上の作品のブラッシュアップを行なった。特に後期学生の存在は、学部生、研究生、修士学生にとっても大きく、力を入れたい。また、21年度には武漢の合美術館における大規模な個展を予定しており、今後の準備をしっかりと進めていきたい（アーティストブック、カタログレゾネ等）。

【教育活動】

特に、修士、博士の学生が、中国人留学生である為、外部での制作活動・発表活動を積極的に行なわせていきたい。また、東京・大阪で行なわれる企画展等の情報をアナウンスし、視察を行なわせたい。自身の制作活動にフィードバックさせたい。

2019年度	立体造形演習、現代美術演習、大学院修士・博士実技
2018年度	立体造形演習、現代美術演習、大学院修士・博士実技

【研究活動】

ここ3～4年間は、武漢の現代美術館での個展の準備の為、計画的に作品をためてきている。18～19年度中は、特に展覧会には参加していないが、合美術館（武漢）の為の作品制作に集中している。

【社会活動】

広島市都市デザインアドバイザー会議、アートギャラリーミヤウチの評議会等、学外社会活動において、積極的に発言している。特に、平和記念資料館前のイサム・ノグチの橋の車・歩分割道路は、細かな照明計画も含め、よく出来たと考えている。

氏名	大塚 智嗣
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	環境、美術、芸術、工芸、デザイン、造形、漆、轆轤、アート、木工、彫刻

私が本学へ就任してから15年以上経過した。当初大学構内に蒔いた小さな漆の種が今や大きな漆樹となったように、漆を通じた教育活動や研究活動、社会活動は互いにしっかりと根を築きながら繋がり始めている。今後は更に大きく実りある活動になるような研究を進める。

【教育活動】

学部では1年次の基礎演習、造形実習、2年次から4年次までの造形実習、テーマ制作、卒業制作の実技指導や材料技法概説、創作と人間を担当。大学院研究科、後期博士では造形応用研究、漆造形演習、創作総合研究、特別造形総合演習、博物館実習を担当。漆分野の技法、技術は多岐に渡り、基礎から応用、実践まで、各学年に応じた指導をおこなった。特に近年成果を上げている2年次の造形演習ⅡBで実施している漆の植栽および漆樹採取や3年次の造形実習ⅢBで実施している宮島轆轤の技術指導は全国の大学にはない独自の教育として他大学、研究機関より高い評価を得ている。

2019年度	創作と人間、造形実習1B、造形実習ⅢA、造形実習ⅢB、造形研究、造形実習ⅡA、卒業制作、造形計画研究Ⅰ、造形計画研究Ⅱ、領域横断特別研究、総合表現研究、テーマ制作、漆造形演習、創作総合研Ⅲ
2018年度	創作と人間、造形実習1B、造形実習ⅢA、造形実習ⅢB、造形研究、造形実習ⅡA、卒業制作、造形計画研究Ⅰ、造形計画研究Ⅱ、領域横断特別研究、総合表現研究、テーマ制作、漆造形演習、創作総合研Ⅲ

【研究活動】

主な研究活動としては創作を中心とした個展やグループ展を開催、その他地域に根ざした研究などを行っている。近年の活動としては、東京での個展（企画展）の開催、地元広島においては国際工芸展やCOC+による広島轆轤の技術指導と轆轤の展示を行なうとともに同時開催として講演会、シンポジウムなど企画運営を主導した。さらに中国美術系大学の講師30名への漆講義と実技指導など学術的な国際大学連携教育プログラムの参加など多岐に渡る研究を実施した。

《展覧会》

1. 2019年10月18日～12月9日、国際漆展・石川コレクション作品展（石川県立伝統産業工芸館）
2. 2019年9月20日、2019年度中国国家基金「漆絵芸術海外研修人材教育」（広島市立大学）
3. 2019年2月8日～3月24日、廿日市市制施行30周年記念事業「木のまちはつかいち」（はつかいち美術ギャラリー）
4. 2018年9月1日～9月9日、2018 Asian Lacquer Craft Exchange Research Project (Ball Room, Hotel Sofitel Angkor Phokeethra/カンボジア・シェムリアップ)

《参考書誌》

1. 刊行年 作品、論文名、著者、書、掲載誌発行所
2. 大塚智嗣「作品 甦生V」、あいづまちなかアートプロジェクト実行委員会『あいづまちなかアートプロジェクト2018会津・漆の芸術祭 2013×まちなかピナコテカ事業報告書』p. 7 (2019年2月)
3. 大塚智嗣「広島市立大学芸術学部の漆教育について」、日本文化財漆協会報『漆文化』136号、p. 22 (2019年2月)
4. 大塚智嗣「作品 甦生IV」他4点、はつかいち美術ギャラリー『廿日市市制施行30周年記念「木のまちはつかいち」図録』pp. 31-32 (2019年3月)
5. 大塚智嗣「The work Resuscitation VIII」、The Whole record Toyama-ken『INTERNATIONAL HOKURIKU KOGEI SUMMIT』p. 48 (2019年2月)
6. 大塚智嗣「魅了する轆轤のかたち-知られざる技と心-」、日本文化財漆協会報『漆文化』134号、p. 25 (2018年2月)
7. 大塚智嗣「The work Rewind 037-02」、Imago Mundi / Luciano Benetton Collection『HIROSHIMA/NAGASAKI Contemporary Japanese Artists Catalog』p. 201 (2018年)

【社会活動】

個人の研究発表と同時に地域の工芸諸職（宮島細工）やアサヒの森（株アサヒビール）、文化（弥山を守る会、日本文化財漆協会、西日本漆を守る会、木地師学会、広島漆再生プロジェクト）と連携した研究を行なっている。具体的には漆を通じた創作活動、研究活動、学会、研究会などにおいて常に発信することで様々な団体、研究機関より依頼があり活動している。なかでも長年にわたる宮島轆轤と広島産漆についての技術保存と継承問題に関わる研究は地域と密接な関わりがあり、社会活動を実行する上で大きな基盤となっている。

2019年9月20日	講演 「OTSUKA TOMOMOTSUGU URUSHI WORKS 漆と木と私」 2019年度中国国家基金「漆絵芸術海外研修人材教育」（広島市立大学）
2019年	第45回宮島特産品振興大会 審査員（審査委員長）（宮島商工会館）
2018年9月29日	講演 「広島の漆文化をつなげる」西日本の漆を守る会 in 広島県立広島大学庄原キャンパス（広島県庄原市）
2018年6月22～23日	講演 「日本の漆文化」, 「OTSUKA TOMOMOTSUGU URUSHI WORKS 漆と木と私」（中国広西芸術学院）
2018年	第44回宮島特産品振興大会 審査員（審査委員長）（宮島商工会館）

氏名	笠原 浩
職位	教授
研究分野	映像表現、アニメーション、メディアアート、デザイン学
研究キーワード	映像、メディアアート、コンピュータグラフィックス、アニメーション

デジタル機器を駆使した新しい映像表現の研究を行っている。著しい発展を遂げているデジタル映像産業において、様々なフィールドにそのコンテンツは展開されている。各種媒体の変化、そこへ供給するためのコンテンツには、適切な形式の上で拡張している。コンピュータを中心とした映像制作において、次世代を担う映像表現の研究制作を行うものである。

【教育活動】

アカデミズムを踏まえた最新の機器を使用した表現への展開をシームレスに実践するための指導を行っている。自動化されるコンテンツ制作に頼ることなく、あくまでも基本的造形性を踏まえて展開する能力を培うことが必要とされる。そこではアカデミズムと最新技術と往来しながら、造形の基本をベースとした映像教育を実践している。

2019年度	メディアと社会、創作と人間、造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習Ⅳ、造形研究（演習）、写真映像概論、3学部合同基礎演習、造形実習ⅢB、描出演習Ⅰ、造形実習ⅡB、卒業制作、描出演習Ⅱ、映像メディア造形演習、創作総合研究Ⅰ、特別造形総合演習Ⅰ
2018年度	メディアと社会、創作と人間、造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習Ⅳ、造形研究（演習）、写真映像概論、3学部合同基礎演習、造形実習ⅢB、描出演習Ⅰ、造形実習ⅡB、卒業制作、描出演習Ⅱ、映像メディア造形演習、創作総合研究Ⅰ、特別造形総合演習Ⅰ、領域横断特別研究

【研究活動】

最新機器導入に伴う、映像表現・教育のための基礎研究を行っている。地元広島の団体からの制作依頼を受け、表現研究実践の場として展開している。その多くは地上波、Webコンテンツであり、それらの制作に向け導入された機器を活用している。

1. NHK 広島放送局, 「山のラムネの物語」映像作品, 2019年8月-2020年2月
2. NHK 広島放送局, ヒバクシャからの手紙『父とのわかれ』アニメーション映像, 2018年4月-2018年8月
3. NHK 広島放送局, ヒバクシャからの手紙『文子ちゃん』アニメーション映像, 2018年4月-2018年8月
4. 広島広域公園内自動販売機ラッピングデータ制作, 2018年1月-
5. 広島広域都市圏鳥瞰図マップ, 広島市市役所より発信, 2016年10月-
6. 被爆70周年「折り鶴の碑」平和集会実行委員会, アートステージ「折り鶴」、明日へ・・・, 2015年10月-

7. (財) 広島市文化財団発行「美術ひろしま'05-06」表紙デザイン及びレイアウトデザイン, 2006年12月-
8. 第40回 織田幹生記念陸上競技大会(広島)ポスターデザイン制作, 2006年3月-
9. 多摩動物公園 新オランウータン舎 常設大型サインボードデザイン, 2005年4月-
10. 第38回 織田幹生記念陸上競技大会(広島)ポスターデザイン制作, 2004年3月-
11. (財) 広島市文化財団発行「美術ひろしま'04」表紙デザイン及びレイアウトデザイン, 2004年3月-

【社会活動】

時代に適した新提案を展開する。地元団体からの協力要請には、映像表現の実践における最新情報の提供を求める声も多く、それらには適時対応できた。

2020年1月-	広島留学生動画コンテスト
2019年8月	こども未来発見大学, リビング広島
2019年5月-	NHK 中国ブロック番組審議委員会, 番組審議委員
2019年1月-	広島留学生動画コンテスト
2017年6月-	日本アニメーション協会
2017年5月-	広島県新県美展 審査員
2009年4月-	広島国際アニメーションフェスティバル実行委員
2005年4月-	日本アニメーション学会
2002年4月-	(財) 広島市文化財団「美術ひろしま」執筆提供

氏名	倉内 啓
職位	教授
研究分野	芸術一般（美術、工芸、染織、型染）
研究キーワード	染織、染色、糊防染、型染、紅型、工芸

自己の課題は、芸術における「工芸」の意味を問いかけることであり、伝統的な手法を現代の造形表現として広く認識させることである。特に専門分野の染色において、日本では民族衣装の装飾加工技術としてさまざまな防染技法が生まれているのだが、西洋には近代まで防染による模様染めの文化がないことが大きな問題としてあげられる。西洋の理論によって構築された近代の美術概念の枠組みの中で、見落とされてしまいがちな日本人の感性やものづくりの原点を鑑み、伝統的な技法を継承しながらも現代的な造形表現の創作を通じて教育活動・研究活動・社会活動を行う。

【教育活動】

全学における共通系科目は「創作と人間」を一コマ担当しており、工芸領域の染織分野について、その成り立ちや歴史的な背景、専門的な技法等の解説をし、自己の創作のルーツを語る。デザイン工芸学科1年次における工芸基礎教育においては、繊維を使ったプリミティブな手法で造形を試みることで、造形素材としての繊維についての知識習得とその加工法を体現させる。2～3年次の染織造形分野における専門教育は、染織の基礎教育（素材、技法）について実技教育を徹底して行い、より専門性を高め、その応用として4年次の卒業制作での展開を図らせる。博士前期・後期学生については個々の研究テーマに沿った創作研究が行えるよう方向付けし、それぞれに適切な指導を行う。

2019年度	創作と人間、造形実習ⅠB、造形実習ⅡA・B、造形実習ⅢA・B、造形研究、卒業制作、造形計画研究Ⅰ・Ⅱ、領域横断特別研究、総合表現研究、テーマ制作、染織造形演習、創作総合研究Ⅲ
2018年度	創作と人間、造形実習ⅠB、造形実習ⅡA・B、造形実習ⅢA・B、造形研究、卒業制作、造形計画研究Ⅰ・Ⅱ、領域横断特別研究、総合表現研究、テーマ制作、染織造形演習、創作総合研究Ⅲ

【研究活動】

研究は主に、染色工芸の防染技法の一つである型紙を用いた糊防染による模様染の創作活動を行なっている。また、これらの作品の発表と自己の作品に由来する日本の伝統的な染織文化を広めることに重きを置いた活動も行なっている。

2018～2019年度の展覧会は延べ8回であり、創作活動の発表を行なった。創作作品は型染めによる平面作品であり、主に屏風の形態をしたものが多く、第74回 新匠工芸会展（東京都美術館、京都市美術館別館）では、型絵染二曲屏風『絶えまなく降り積もる』を出品し、審査員（美術評論家、等）に優秀と認められ「富本賞（大賞）」を受賞した。

1. 第74回 新匠工芸会展
(新匠工芸会主催), 東京都美術館、京都市立美術館別館, 2019年10月-2019年10月
2. 第22回 染・清流展 ビエンナーレ2019 (Part-1)
(清流会主催), 染・清流館 (京都市), 2019年9月-2019年10月
3. 染・清流展を顧みる Part5
(清流会主催), 染・清流館 (京都市), 2019年5月-2019年6月
4. 第31回東広島市美術展
(東広島市主催), 東広島市館 (東広島市), 2018年12月-2018年12月
5. 第73回 新匠工芸会展
(新匠工芸会主催), 東京都美術館、京都市立美術館別館, 2018年10月-2018年10月
6. きょうと現代染色アーカイヴV『旅の染景』
(清流会主催), 染・清流館 (京都市), 2018年4月-2018年5月
7. 第74回新匠工芸会展 富本賞 (大賞) 受賞, 新匠工芸会, 2019年

【社会活動】

社会的な活動としては、第31回東広島市美術展の審査 (工芸)、および招待出品。
 第73・74回 新匠工芸会展の一般公募作品の鑑査、「新匠工芸会」の運営委員長。
 本学の公開講座、デザイン工芸学科のサマースクールでの実技指導。

産官学連携関係は、COC+教育研究事業・アートプロジェクト (染織造形プロジェクト『繊維の森』) のディレクションおよび統括。ならびに、NIF・YOUNG TEXTILE 2019 (一般社団法人 日本インテリアファブリックス) の出品者推薦、およびアドバイザーを行なった。

2019年11月	NIF・YOUNG TEXTILE 2019 (一般社団法人 日本インテリアファブリックス) の出品者推薦、およびアドバイザー, 東京ビックサイト
2019年10月	第74回 新匠工芸会展 監査, 東京都美術館、京都市美術館別館
2018年10月	第73回 新匠工芸会展 監査, 東京都美術館、京都市美術館別館
2018年10月	第31回東広島市美術展 審査 (工芸)、および招待出品, 東広島市教育委員会 (東広島市美術館)
2018年10月	COC+教育研究事業・アートプロジェクト (染織造形プロジェクト『繊維の森』), 広島県安芸太田町 (MM Project)
2018年8月	芸術学部サマースクール (デザイン工芸学科) 講師, 広島市立大学芸術学部

氏名	古賀 くらら
職位	助教
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作、材料技法研究、古典絵画、画法書、原爆の図、丸木位里・俊

平成 30 年度に着任してから 2 年、広島に移住して 12 年が経過した。

これまで、在学生はもとより卒業生の支援も実施してきたが、開学から 25 年を経過した今、卒業生は各地で活動が認められ、『知』の拠点として地域との共生を目標とする大学の評価も徐々に定着してきた感がある。

今後、これまでの教育研究を礎としつつ、オンライン化やグローバル化、アクティブラーニングといった、社会の変化による需要にもより柔軟に対応することを掲げる。

【教育活動】

教育においては、創作研究並びに古典研究における指導とサポートを主に実施し、古美術研究旅行や写生旅行といった学外での活動の手配や引率も行う。また、学生生活におけるサポートも全般的に行っている。女子学生が大半を占める専攻において、女性の視点からの配慮も心掛けている。

大学院の古典研究分野においては、自身の古典技法材料の研究をもとにした指導補佐と共に、美術館等での作品調査手続きや引率といったサポート、文化財保存修復研修の宿泊引率なども行い、学生の研究環境保全に務めた。

また、学生の制作発表の機会や、美大生対象の就職のための特別講義を設けるなど、作家活動の支援並びにキャリアサポートも実施している。

2019 年度	絵画論演習
2018 年度	絵画論演習

【研究活動】

これまで、画法書を基底とした日本絵画における技法材料と絵画表現の研究と共に、日本画家として古典絵画の技法材料を現代に応用した創作活動と発表を継続してきた。伝統的日本絵画の技法材料については、画法書や古典絵画の調査を基に、創作を行う立場として再現的な研究も行なっている。また、日本画材料における原料の品質と処理に着目しつつ、現代における画材料の生産現場の動向調査も断続的に実施している。

同時に、新たな研究課題として、令和元年度より丸木位里・丸木俊 作『原爆の図』の研究を進めており、令和 2 年度からは科学研究費と特色研究費の助成を受け、『原爆の図』を主とした技法材料と絵画表現についての本格的な研究を進める。

その他、本学の平成 30 年度特色研究『日本画制作の現場Ⅳ-「創作」について、日本画の制作過程及び作家の言葉からの考察-』においては、計画から展覧会・座談会実施のための業務を遂行している。

1. 研究発表, 「日本絵画における画材料の変遷 -画法書に記載された彩色料にもとづいて-」,
2018年12月
2. 気更来会, 岡山天満屋美術画廊/岡山, 2020年2月
3. はつ春展, アートリンクギャラリー/愛知, 2019年12月-2020年1月
4. 古賀くらら 日本画展, 福井西武/福井, 2019年11月-2019年12月
5. 個展 古賀くらら 日本画展, 西武福井店/福井, 2019年11月
6. 芸美会展, 服屋八丁堀本店/広島, 2019年8月
7. 「けはい けしき しんとして」三人展, アートスペース余花庵/京都, 2019年3月
8. 気更来会, 岡山天満屋美術画廊/岡山, 2019年2月
9. 個展 古賀くらら 日本画展, 天満屋福山店美術画廊/広島, 2019年2月
10. 芸美会展, 福屋八丁堀本店, 2018年10月
11. 広島市立大学新任教員展 2018
個展「古賀くらら 色色」, 広島市立学芸術資料館, 2018年10月
12. 個展 古賀くらら 日本画展, あべのハルカス近鉄本店美術画廊/大阪, 2018年10月
13. 広島市立大学特色研究
「日本画制作の現場IV-菅原健彦展-」
(日本画研究室共同研究発表展・座談会), 広島市立学芸術資料館/小ホール, 2018年10月

【社会活動】

本学においては、中高生などを対象としたサマースクール、一般の方を対象とした公開講座を毎年実施しており、これら運営と講師も務めてきた。また、高校に赴いての授業も実施しており、令和元年度は「画材料の生産現場から -日本画材料の事例を通じて- 」という題目で模擬授業を行なった。平成30年には、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）の補助として、取材や展示のサポートも行なっている。

また、子供から社会人を対象としたワークショップを各地で開催し、その手配や講師も務め、一定の成果が得られている。その他、依頼のあった日本画に関する講演の実施や、寺社などから依頼のあった日本絵画の診断・修復に関する相談への対応も行なった。

2019年-	古典絵画の診断と修復に関する協力
2019年9月	生涯学習団体 講演会
2019年9月	広島市立大学芸術学部公開講座（日本画）
2019年8月	広島市立大学芸術学部サマースクール（日本画）
2019年7月	模擬授業（基町高校）
2018年	生涯学習団体 講演会
2018年9月	広島市立大学芸術学部公開講座（日本画）
2018年8月	日本画ワークショップ講師（新宿高島屋美術画廊）
2018年8月	広島市立大学芸術学部サマースクール（日本画）

氏名	志水 児王
職位	准教授
研究分野	芸術・現代美術
研究キーワード	芸術・現代美術、インスタレーション

美術や芸術を学ぶことで、豊かで機知に富んだ感性や多角的なものの見方ができる想像力と、社会のシステムや構造に目を向けることができる批評力、そして人間や自然をより深く考察し表現活動を続けてゆける思考力の獲得を期待したい。

【教育活動】

構成演習では平面に限らず、身の周りに存在しているものや出来事を、新しい視点で見つめ直すきっかけを作り、視点の多様性や視野の拡張を目標とする。国内外の現代作家を積極的に紹介し、古典だけではなく、実験性、現代性を実習に持ち込む事を理想とする。油絵入門では、他学科で油絵に興味のある生徒を対象に、初歩的かつ基本的な描き方、ものの見方を体験学習できる事を目的とする。彫塑演習では、平面を描く上で欠かす事のできないパースペクティブな視点や立体把握能力を高めることで、3次元を2次元へ置き換える作業へより奥行きのある見方を学習する目的がある。

2019年度	構成演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、油絵入門、塑像演習、創造と人間(オムニバス)、絵画論(オムニバス)、デッサン概論(オムニバス)、学外演習、3学部合同ゼミ
2018年度	構成演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、油絵入門、塑像演習、創造と人間(オムニバス)、絵画論(オムニバス)、デッサン概論(オムニバス)、3学部合同ゼミ、古美術研修(イタリア)

【研究活動】

芸術と科学との融合的視点を軸として、時空間上に広がる自然現象や物理現象に注目し、様々なメディアを実験的に展開させる美術作品を研究・制作。研究対象は近現代美術。

1. カタログ『瀬戸内国際芸術祭 SETOUCHI ART TRIENNALE 2019』, 2019
2. カタログ『アспект・現代映像展』, 2018
3. 個展「window」 Misa Shin Gallery 東京, 2019年6月-2019年8月
4. 瀬戸内国際芸術祭 SETOUCHI ART TRIENNALE 2019, 2019年4月-2019年11月
5. アспект・現代映像展 廿日市美術ギャラリー 広島, 2018年10月-2018年11月
6. 対馬アートファンタジア対馬町 内院 長崎県 2018, 2018年8月-2018年10月

【社会活動】

瀬戸内国際芸術祭 2019 においては、地域展開型芸術祭としての趣旨から、小豆島町との連携や開催中の会場の維持・サポートなど、神浦町地区の方々にご協力頂きながら8ヶ月間という展示期間を無事閉幕する事ができた。この芸術祭によって、1日数百人という鑑賞者が神浦町を訪れ

文化交流の場となった。

2019年9月	オープニングアーティストトーク 対馬アートファンタジア 対馬町 長崎県
2019年9月	オープニングアーティストトーク 瀬戸内国際芸術祭 SETOUCHI ART TRIENNALE 2019 小豆島町 香川県
2019年8月	油絵夏期公開講座, 広島市立大学芸術学部油絵専攻
2018年10月	オープニングアーティストトーク アスペクト・現代映像展 廿日市美術ギャラリー 広島県
2018年8月	油絵夏期公開講座, 広島市立大学芸術学部油絵専攻

氏名	田中 圭介
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻、木彫、現代美術

芸術学部教員として、作家としての研究と教員としての業務を横断的に展開し、文化的で多様性のある社会を構築する一助となるべく努めます。

【教育活動】

時代と共に変化する芸術や彫刻の意義やあり方について、学生が自身の問題としてむき合うことを期待しています。そのためには、学生が強い動機を持って芸術活動をおこない、かつこれを継続していく必要があります。教員としてこのような動機を育成する教育を図っていきます。

2019年度	彫刻論（古典研究を含む）、構成演習Ⅰ、彫刻概論、実材制作実習Ⅱ、彫刻実習Ⅰ、彫刻実習Ⅲ
2018年度	彫刻論（古典研究を含む）、構成演習Ⅰ、彫刻概論、実材制作実習Ⅱ、彫刻実習Ⅰ、彫刻実習Ⅲ

【研究活動】

これまでの研究を継続すると共に、新たな展開を模索し、表現の幅と質の向上に努めます。

1. 瀬戸内国際芸術祭 2019, 香川県小豆島神浦地区, 2019年4月-2019年11月
2. ONLY CONNECT OSAKA, CCCクリエイティブセンター大阪, 2019年2月-2019年3月
3. 刻まれた時間 もの語る存在, 東京藝術大学美術館, 2018年11月
4. 三都半島アートプロジェクト・野性のハナ, 香川県小豆島神浦地区, 2018年9月

【社会活動】

彫刻というメディアを通して、社会や文化の発展や人間そのものを肯定出来る思考育生に尽力したいと思います。

2018年11月-2020年5月	オー・レイン静岡（ホテル）作品設置
------------------	-------------------

氏名	釣谷 幸輝
職位	講師
研究分野	版画
研究キーワード	木口木版画、メゾチント

良い作品は我々の精神を豊かにし、社会をより良い方向に導いてくれると信じている。創作する喜びと、鑑賞するための感性を育むことを目的とし、主に版画制作を通じた、創造力を育てる教育を目指していきたくと考えている。とりわけオリジナリティを重視した自己表現および思考性について学生たちと考えていきたい。

【教育活動】

版画領域においては四版種すべての技法を網羅しながら、「版画制作実習Ⅰ」で凹版の代表的な技法である銅版を、制作者の健康に配慮したノン・トクシク技法で行い、「版画制作実習Ⅱ」では凸版技法のひとつであり、緻密で写実的な版表現の可能な木口木版画技法の実習を行っている。

また「油絵研究CⅠ・CⅡ」においては絵画表現で培った基礎的な造形力を元に版画を含めた表現媒体の幅広い研究の指導を行っている。

2019年度	版画制作実習Ⅰ・Ⅱ、版画制作演習、絵画論、油絵入門、油絵研究CⅠ・CⅡ、博物館実習
2018年度	版画制作実習Ⅰ・Ⅱ、版画制作演習、絵画論、油絵入門、油絵研究CⅠ・CⅡ、博物館実習

【研究活動】

研究活動としては引き続き版画家としての制作・発表活動と、メゾチント技法、木口木版画技法および、ノン・トクシク技法における技法材料の研究を行っている。主に国内外における個展、グループ展を中心に作品発表を続けており、コンクール等における受賞や海外での展覧会において、招待作家、あるいは審査員として招聘された。

1. International Mezzotint Invitational (デビッドソン・ギャラリーズ／アメリカ)、2018年
2. 『版画でつなぐ』展(招待)(東広島市立美術館／東広島市)、2018年
3. Premio Leonardo Sciascia the IX edition (Scuola Internazionale di Grafica／イタリア)(招待)、2018年
4. 第62回CWAJ現代版画展(ヒルサイドフォーラム／代官山／東京)、2018年
5. 第81回英国木口木版画協会展、(バンクサイドギャラリー他／イギリス)、2018年
6. 『Nominee and Won』(Town Hall Foyer Weißenthurm、／ドイツ)、2018年
7. 第1回『mezzotint India』展(Bihar Museum／インド)(招待)、2018年
8. 第3回JOGJA International Miniprint Biennale 2018 (Miracle Prints／インドネシア)、2018年

9. アート高雄 2018 (駁二芸術特区 / 台湾)、2018 年
10. ‘ARTiJA 01st International Art Biennial (Mostovi Balkana / クラグイエヴァツ / セルビア)、2018 年
11. International mail-art-project (“ortung VI - in the spirit of gold” / シュヴァーバッハ / ドイツ)、2019 年
12. 第 63 回 CWAJ 現代版画展 (ヒルサイドフォーラム / 代官山 / 東京)、2019 年
13. 『Blue Rocker』 (Museum of Fine Arts of Yekaterinburg / エカテリンブルグ / ロシア)、2019 年
14. 第 82 回英国木口木版画協会展, (バンクサイドギャラリー他 / イギリス)、2019 年
15. 『Kulturbunker』 (Cultural Center Cologne-Museum / ケルン / ドイツ)、2019 年
16. 第 30 回国際スモールプリント (シカゴ・プリントメーカーズ・コラボレイティブ / アメリカ) (招待)、2019 年
17. 個展 “Kulturbunker” Cultural Center Cologne Museum (ケルン / ドイツ) 2019 年
18. 個展 City Library Bonn (バート・ゴードスベルク / ボン / ドイツ) 2019 年
19. 個展 不忍画廊 (東京) 2019 年
20. 個展 ギャラリー惣 (東京) 2019 年 他

【社会活動】

本学における「社会人講座 (版画コース)」および「公開講座 (版画)」を担当し、多くの受講者にノン・トクシク技法による銅版画制作の意義や版表現の魅力などを伝えることができたと考えている。

また、海外の版画コンクールにおいて審査員を行った。

2019 年度	『第 5 回エンター・イントゥー・アート』 (“Kulturbahnhof” - Cultural center 他 / ドイツ) 審査員
2019 年度	講演会『版画の技法 イロイロ』 (広島県立美術館友の会)
2019 年度	公開講座 (版画) 「木口木版画」
2018、2019 年度	社会人講座 (版画コース)
2018 年度	公開講座 (版画) 「ノン・トクシク技法による銅版画」
2018 年度	国際コンテンポラリー・ミニプリント・カザンラク (カザンラク美術館 / ブルガリア) 審査員

氏名	永見 文人
職位	教授
研究分野	芸術一般、デザイン学、デザイン学（金属工芸・金属造形）
研究キーワード	金属造形、金属彫刻、金属工芸、鍛金・彫金・鋳金

我が国の金属工芸では、他国には類のない繊細さと高度な技術に裏づけされた優れた作品が残されている。「教育活動」においては、金属工芸の「彫金・鍛金・鋳金」の基礎技法と表現方法を指導する中で習得した技術と柔軟な思考をもとに、現代の工芸と金属造形の新たな表現と方向性を目指すことを指導の目的としている。自身の研究活動においても文化財の保護と後継者の育成にも寄与している。

【教育活動】

デザイン工芸学科金属造形分野の学部・博士前期の学生を対象とした実習及び演習教科を担当し、学部の卒業制作・博士前期の修了制作までの指導をしている。「創作と人間」では、全学対象教科として、専門の金属工芸の紹介を通じて、創作の喜びと社会における芸術の役割について講義している。「教職実践演習（中等）C」では、教職の資格修得科目として、高校美術教員の経験を生かし、将来、中学または高校の美術教員を目指す芸術学部の4年生、約30名に教育現場に立つ上での実践力を身につける教育を実施している。「博物館実習」では、学芸員資格修得希望の学生に金属工芸の立場から、作品の鑑賞方法や、保管・取扱い方法について指導している。

2019年度	造形実習ⅡA(金造造形分野)、造形実習ⅢA(金属造形分野)、造形研究(演習)(金属造形分野)、描出演習Ⅱ(金造造形分野)、造形実習ⅡB(金属造形分野)、造形実習ⅢB(金属造形分野)、卒業制作、造形実習1B、博物館実習(オムニバス)、創作と人間(オムニバス)、教職実践演習(中等)C、テーマ研究(演習)、造形計画研究1、金属造形演習、造形計画研究Ⅱ
2018年度	造形実習ⅡA(金造造形分野)、造形実習ⅢA(金属造形分野)、造形研究(演習)(金属造形分野)、描出演習Ⅱ(金造造形分野)、造形実習ⅡB(金属造形分野)、造形実習ⅢB(金属造形分野)、卒業制作、造形実習1B、博物館実習(オムニバス)、創作と人間(オムニバス)、教職実践演習(中等)C、テーマ研究(演習)、造形計画研究1、金属造形演習、造形計画研究Ⅱ

【研究活動】

公募団体展覧会の日展、現代工芸美術展を中心に出品し、日展には、26回の入選、現在会友である。現代工芸展に於いては、2006年より本会員になり、2012年の「第51回展」2019年の「第58回展」では審査委員を務める。その他、広島・山口で多数のグループ展を実施している。かつては、家族をモチーフとした作品から、女性像と生命、近年では、生命の根源を水と捉え、水の循環を雲と水をモチーフとして表現とした作品を多く発表している。金属工芸の伝統技法で作ら

れた道具類からオブジェ、クラフトまで、幅広く制作活動と研究を行なっている。

1. 永見 文人，改租第 6 回日展 出品
作品：「緑雲」（入選），東京国立新美術館，2019 年 11 月 1 日～11 月 24 日
2. 永見 文人，第 43 回日本現代工芸展中国会展 出品
作品：「春風のシンフォニー」，「水の情景」はつかいち美術ギャラリー，
2019 年 5 月 26 日～6 月 9 日
3. 永見 文人，第 58 回日本現代工芸美術展（審査委員、無監査出品）
作品：「春の情景」（無鑑査出品），東京都美術館，2018 年 4 月 18 日～4 月 24 日
4. 永見 文人，改租第 5 回日展 出品
作品：「夏雲のリフレクション」（入選），東京国立新美術館，2018 年 11 月 2 日～11 月 25 日

【社会活動】

毎年実施される「サマースクール」については、デザイン工芸学科入学を希望する受験生 50 余名を対象とした、「鉛筆素描」の実技指導と講評を中心に、受験勉強の方法等を指導している。デザイン工芸学科工芸 3 分野で 3 年に一度のサイクルで持ち回る「公開講座」では、10 名程度の一般市民を対象として金属工芸の作品制作の指導をしている。2012 年と 2015 年に実施した講座においては、広島県の伝統産業であった「広島銅蟲」の認知度を高めることと体験を兼ねた講座を企画した。また 2020 年 2 月には、広島市文化財団主催の浅野氏広島城入城 400 年記念事業として 2 日間の子ども伝統文化教室（伝統工芸体験コース）を企画、「広島銅蟲」の講師も務めた。

刀の外装には、金工・漆・染織といった本学の工芸 3 分野の技術が駆使されているが、現在は、その後継者の減少に苦勞している。本学金属造形分野は、広島県在住の「刀鍛冶」の方と協同し、2010～2014 年に「広島 KAZARU 展」を企画し、金工・漆・染織に関する公募展とワークショップを計画する事で若者層の後継者育成に努力してきた。「広島 KAZARU 展」においても「広島銅蟲」に関連する展示を企画した。2015 年 12 月と 2016 年 11 月には、新たに厳島神社重要文化財「錦包み藤巻き太刀、腰刀拵え」の復元を目的とした予備調査を広島県の刀匠と実施した。2019 年 7 月には、本学染織造形分野の教員と共に「錦包み」に焦点を置いた調査も行い、2020 年度内の復元完成を目指した共同研究を継続している。

2020 年 2 月	浅野氏広島城入城 400 年記念事業『子ども伝統文化教室（伝統工芸体験コース）：広島県の伝統工芸品「銅蟲」作りに挑戦しませんか』講師
2019 年 7 月	第 3 回厳島神社重要文化財「錦包み藤巻き太刀、腰刀拵え」調査
1987 年 11 月-	日本美術展覧会
1986 年 3 月-	日本現代工芸美術家協会

氏名	中村 圭
職位	准教授
研究分野	デザイン学
研究キーワード	基礎デザイン教育、ビジュアル・コミュニケーション・デザイン、デザインによる地域課題解決

教育活動においては、ビジュアル・コミュニケーション・デザインを中心として、ディレクション能力の向上を重視し、構想力のある人材育成に取り組んでいる。

研究活動においては、デザインが社会性の強い分野であることを踏まえて、社会活動との連動性を重視している。具体的には、地域の諸課題に対して、デザインの手法により解決や新しい提言を行うことに取り組んでいる。

【教育活動】

実習系科目と座学系科目の2系統の教育活動に取り組んでいる。

実習系科目では、専門分野である視覚造形（ビジュアルコミュニケーション・デザイン）に加えて、2016年度以前にはデザイン工芸学科1年の実習科目カリキュラム構築と主担当教員を務めた。また、専門分野では、2年生から4年生までのカリキュラム構築と指導を行った。大学院生や外国人研究生に対しては、学生個々の研究計画に合わせた指導を行った。また、実習系科目において、制作環境の充実が教育効果の大きなファクターであるため、このことについても常に改善を試みて来た。

座学系科目では、デザイン工芸概論を担当しており、実際にデザインや工芸に携わる専門家を招聘し、その仕事と今日における状況を、全学学生に対して紹介している。刀匠による真剣の紹介や、茶道家元によるお点前のデモンストレーションなど、地域性も考慮した内容としている。また、NPO論などでのオムニバス講義の担当などを通じて、芸術と他領域の関連性について、他学部の学生を中心に紹介した。

2019年度	造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、デザイン工芸概論、地域実践演習、3学部合同基礎演習
2018年度	造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、デザイン工芸概論、地域実践演習

【研究活動】

「創造的文化芸術活動を通じた基町地域活性化の実践的研究（研究代表）」、「大学と行政の協働による創造的な文化芸術活動や地域交流等を通じた、基町住宅地区の魅力作りや持続的な活性化に関する研究（研究分担）」などの研究を通じて、基町プロジェクトに取り組んでいる。基町プロジェクトでは、創造的な文化芸術活動で基町住宅地区（広島市中区）の魅力づくり・活性化を目指しており、その実践的研究を行なっている。

1. 『比治山公園サイン基本計画』調査計画, 2019年
2. 『基町プロジェクト』基町住宅地区(広島市中区)他, 2014年4月-

【社会活動】

デザインに関する社会活動に取り組んでいる。行政の依頼によるデザイン賞の審査員。障害者の芸術活動を支援するNPOの協力委員など。基町プロジェクトを通じた、地域に創造的な文化芸術拠点を形成することによる地域活性化への貢献。公園サイン基本計画。そのほか。

2019年	広島市ピースアートプログラム アート・ルネッサンス 2019 審査会, 審査委員
2019年	第16回ひろしまグッドデザイン賞選定委員会, 選定委員
2018年	広島市ピースアートプログラム アート・ルネッサンス 2018 審査会, 審査委員
2018年-2019年	障害者芸術文化活動支援事業アートサポートセンター協力委員
2018年	第16回広島市ひろしま街づくりデザイン賞受賞者選考審議会, 広島市ひろしま街づくりデザイン賞受賞者選考審議会委員
2018年	デザインマンホールプロジェクト (西国街道)

氏名	野田 睦美
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	染織造形、現代織物、綴織、タピスリー

日本の染織造形は、高度な染織文化と繊維開発の技術によって世界から注目されています。繊維には、柔軟性や温もりがあるといった特質に加えて、微粒子の染料が繊維に染み込み発色することで現れる豊かな光彩があります。私は日本の伝統的な染めと織りの技術を基に、新素材による繊維と染色について研究し、デザイン、糸の開発、染色、製織、作品設置までを一貫して行った染織造形を制作しています。そして、日本とフランスの美術織物の到達点を吸収し、独自の染織技術による「糸ではないような糸、織物ではないような織物で、見る人・場・光を予測し、現代人に共鳴する作品」という新しい分野の可能性を探求し、創作活動を行っています。

【教育活動】

広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科染織造形では、染織における伝統技術を研究した上で、現代社会においてより重要になっている染織芸術の可能性を、素材、技術、知識といった多角的な視野から考え、独自の研究と創造力を融合させ、染織芸術の未来を切り開くことを目標としています。授業では学生が好奇心を高め、着想だけではなく様々な考察を基にした創作及び各自のテーマを探究できるように指導を行っています。特に発想から完成に至るまで、講義、個別相談、技術指導等を通して、学生が自由に制作できるように配慮しています。そして、広島市立大学が芸術における社会的役割を担うための教育活動に繋がりたいと思います。

2019年度	造形実習ⅠB、描出演習Ⅱ、形体演習Ⅱ、造形実習ⅡA、造形実習ⅡB、造形実習ⅢA、造形実習ⅢB、テーマ研究、造形研究、卒業制作、造形計画研究Ⅰ、造形計画研究Ⅱ、染織造形演習、古美術研究、工芸材料概説、博物館実習
2018年度	造形実習ⅠB、描出演習Ⅱ、形体演習Ⅱ、造形実習ⅡA、造形実習ⅡB、造形実習ⅢA、造形実習ⅢB、テーマ研究、造形研究、卒業制作、造形計画研究Ⅰ、造形計画研究Ⅱ、染織造形演習、創作総合研究Ⅱ、領域横断特別研究、古美術研究、工芸材料概説、博物館実習、領域横断特別研究

【研究活動】

京都府生まれ。京都、広島、フランスにて創作活動を行う。京都市立芸術大学美術学部、大学院美術研究科を修了し、博士(美術)取得。文化庁新進芸術家海外派遣研修員に推挙されフランスに1年間派遣。フランスではÉcole Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris(パリ国立美術高等学校)とParis Ateliers-Tapisserie de hautelice(パリ市立工房髹機タピスリー)において、創作と作品発表を行う。近年は、「京都の染織 1960年代から今日まで」展(京都国立近代美術館)、「第18回 DOMANI・明日」展(国立新美術館/東京)、DIGITAL WORLD FESTIVAL「FUTUR EN

SEINE」(Le CENTQUATRE-PARIS/フランス)等の展覧会で作品が紹介された。受賞、所蔵作品、展覧会、タピスリー等のデザイン及び監修、文献等多数

2019年-2016年展覧会歴

1. 感覚をひらく-新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業(文化庁支援事業)「京都国立近代美術館と京都府立盲学校による連携授業」(京都国立近代美術館), 2019年12月
2. 京都の染織 1960年代から今日まで(京都国立近代美術館), 2019年3月-4月
3. 感覚をひらく-新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業(文化庁支援事業)「手だけが知っている美術館第2回染織」(京都国立近代美術館), 2019年3月
4. 第39回京都工芸美術作家協会展(京都府立文化芸術会館), 2019年3月
5. 第73回新匠工芸会展(東京都美術館, 京都市美術館)稲垣賞受賞, 2018年10月
6. IMAGO MUNDI/Luciano Benetton Collection/Hiroshima/Nagasaki- Contemporary Japanese Artists (イタリア・Gallerie delle Prigion), 2018年4月
7. 第38回京都工芸美術作家協会展(京都府立文化芸術会館), 2018年3月
8. 第72回新匠工芸会展(東京都美術館, 京都市美術館), 2017年10月
9. 第6回国際工芸美術作家協会展(はつかいち美術ギャラリー), 2017年9月-10月
10. 『創造する工芸-その多様性と可能性』『これからの工芸』パネリスト(はつかいち美術ギャラリー), 2017年9月
11. 日韓現代美術交流展(JARUFO 京都画廊), 2016年11月
12. 第71回新匠工芸会展(東京都美術館, 京都市美術館), 2016年10月
13. 京都芸大同窓会アートフェア(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA), 2016年3月-2016年4月
14. 創立70周年記念琳派400年記念 京都工芸美術作家協会展(京都府京都文化博物館), 2016年3月
15. 文化庁新進芸術家海外派遣研修員選抜展 第18回 DOMANI・明日展(国立新美術館), 2015年12月-2016年1月
16. 他、展覧会多数

所蔵

京都国立近代美術館、タキイ種苗株式会社(京都, 福岡)、医療法人恕泉会リハビリテーション病院
すこやかな杜、社会福祉法人向日春秋会特別養護老人ホームサンフラワーガーデン等

文献

野田睦美「まなざしに共鳴する芸術-見る人・場・光を予測して」、京都国立近代美術館「視る」
2019年3-4月号、一般社団法人日本建築協会『建築と社会』2019年7月号等

新聞記事

高知新聞 2019年4月掲載作品「常寂光土」、京都新聞 2019年3月掲載作品「導管」「常寂光土」、
読売新聞 2016年1月、SANKEI EXPRESS, 2015年12月掲載作品「自らを洲とし」等



常寂光土 h.250.0×w.366.0×d.15.0 cm/2018 和紙, 水引, 特殊組紐, 特殊ポリエステル糸, 絹糸, 羊糸, ラミー糸, ポリエステル製ネット

【社会活動】

創作活動及び研究発表と、パリ市主催パリ市立工房堅機タピスリー講義、京都国立近代美術館「感覚をひらく-新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業(文化庁支援事業)」、広島市立大学芸術学部における社会人講座(工芸)、公開講座、サマースクール、アートプロジェクト等を通して、新しい染織造形の魅力を伝える活動を国内外で行っている。

2019年3月-	感覚をひらく-新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業(文化庁支援事業)「手だけが知っている美術館 第2回 染織」京都国立近代美術館と京都府立盲学校による連携授業/京都国立近代美術館
2019年7月-2019年8月	広島市立大学芸術学部公開講座(染織造形)「綴織、輪奈織、浮織等によるタピスリー制作」
2018年7月-2018年11月	Tokyo Midtown Award 2018/指導
2018年5月-2018年10月	広島市立大学オリジナル染織Tシャツ/監修・指導
2018年4月-2019年3月	COC+染織造形アートプロジェクト・加計/監修
2018年8月	芸術学部公開講座「藍染絞りによる夏のストール制作」
2017年7月-	旗呉 FLAGS +染織造形アートプロジェクト/監修
2017年4月-	広島市立大学オリジナルバンダナ/監修
2015年4月-	公益財団法人一宮地場産業ファッションデザインセンター「翔工房」・JAPAN YARN FAIR & 総合展「THE 尾州」/指導
2015年3月-	Paris Ateliers パリ市立工房堅機タピスリー上級技術特別研修客員

2012年4月-	広島市立大学芸術学部社会人講座(工芸)
2012年4月-	民族藝術学会会員
2011年5月-	新匠工芸会運営委員
2009年6月-	京都工芸美術作家協会会員
2009年5月-	新匠工芸会会員

氏名	藤江 竜太郎
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	パブリックファニチャー、ランドアート、アートプロジェクト、環境芸術、ワークショップ

環境を意識した切り口からこれから必要とされる「ものづくり」と「夢のある提案」を基盤とした活動をおこなう。また、目の前の問題に対してポジティブな考えのもとに、アイデアでより良い関係を導き出すことが最大のテーマとして掲げられる。

【教育活動】

実習の指導は、多岐にわたる作品技法や素材加工を学生のレベルに応じて指示をする。また、学生自ら考えることの重要性を伝える為に、必ずプランニングと制作方法、制作スケジュールの提出を求める。

2019年度	造形実習ⅠA、形体演習Ⅰ、造形実習ⅡA、工芸制作B、描出演習Ⅱ、材料技法演習、造形実習ⅠB、造形実習ⅡB
2018年度	造形実習ⅠA、形体演習Ⅰ、造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、工芸制作Ⅱ、造形研究（演習）、造形研究（演習）、描出演習Ⅱ、材料技法演習、造形実習ⅠB、造形実習ⅡB、造形実習ⅢB

【研究活動】

環境芸術を中心に創作活動を行う。空間と人や社会との関係性からテーマを導き出して作品の素材や構造を組み立てる。人間の営みと自然の関係性から、心の拠り所としてのアウトドアレジャーに焦点をおき、一過性の表現としての作品制作とそれに関係するイベント及びワークショップを行う。

1. 藤江竜太郎, BEYON, 広島地下街紙屋町シャレオ, 2017年6月-
2. 藤江竜太郎, LOVE♡BEAM, 広島パークビル/ストリートギャラリー, 2012年4月-

【社会活動】

広島市の街づくりとしての河川環境の活用法に力を入れている。近年ではひろしま SUPクラブと協力して、様々なイベントの企画や運営を行い河川環境の活性化を図る活動を行ってきた。

2019年4月-2019年12月	ひろしまリバーシティーフェスティバル River Do!
2018年5月-2020年3月	柳井市金魚ちょうちんプロジェクト
2018年4月-2018年5月	広島水辺活性プロジェクト フラワーフェスティバル水上パレード

氏名	古堅 太郎
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	現代美術、インスタレーション

教育活動では、主に学部生の実習を担当。現代美術の本質である批判的な思考は、美術やデザインなど、様々な創造的行為の最も基本的な要素と考えている。実習では、学生の身近な出来事や体験を起点とし、そこに潜む問題意識に社会的な視点を与えることを目指している。研究活動では、戦後に形成された平和都市「広島」のアイデンティティを中心にリサーチを行い、作品の制作と発表を行っている。社会活動としては、広島市立大学を中心とした「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の一環として「広島を知る・感じる・問う・挑戦する」というテーマに沿って、尾道市立大学、AIR ONOMICHI と協働し、3年間のアートプロジェクトを実施した。

【教育活動】

造形実習ⅡA、造形実習ⅡB では、それぞれ3週間程度の課題を連続して行うことにより、身近な出来事に潜む問題意識に社会的な視点を与える分析力と理論的な構築力を獲得する。造形実習ⅡA、造形実習ⅡB の延長線上に位置する造形実習ⅢA、造形実習ⅢB では、先述の実習と同じく、テーマを設定した課題を連続して行うことにより、分析力と理論的な構築力に加え、思考やアイデアに沿った造形力や発想力を獲得する。描出演習Ⅱでは、チラシやポスター、ポートフォリオの制作に必要なDTPの基礎的な知識とデザイン力を学ぶ。現代美術論では、19世紀以降の美術史の変遷を導入部分とし、1990年代以降に活躍するアーティストの活動や作品の持つ意味について学ぶ。

2019年度	造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、造形実習ⅢB、現代美術論、描出演習Ⅱ
2018年度	造形実習ⅡA、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、造形実習ⅢB、現代美術論、描出演習Ⅱ

【研究活動】

研究活動では、2015年より戦後に形成された平和都市「広島」のアイデンティティを中心にリサーチを行い、作品の制作と発表を行っている。近年は広島平和記念公園をデザインした建築家の丹下健三に注目し、平和都市「広島」を象徴するデザインの歴史についてリサーチを行い、作品を制作。広島、東京、沖縄などで発表した。

1. 『Red Sun, White Sand』ギャラリーアトス、沖縄、2020年1月
2. 都美セレクション グループ展 2019『星座を想像するように—過去、現在、未来』東京都美術館、2019年6月

3. 『ONLY CONNECT OSAKA』クリエイティブセンター大阪、2019年2月-2019年3月
4. 『aspect／持続』はつかいち美術ギャラリー、2018年9月-2018年10月
5. 『I Say Yesterday, You Hear Tomorrow. Visions from Japan, GALLERIE DELLE PRIGIONI』
トレヴィーゾ、イタリア、2018年7月-2018年11月

【社会活動】

昨年度より、文部科学省による「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の一環として広島市立大学芸術学部の現代表現が中心となり、尾道市立大学、AIR ONOMICHI と協働し、アートプロジェクトを開催した。広島市立大学の学生が実際に尾道を訪れ、現地でのリサーチを経て、企画の立案、作品の制作、展覧会の運営を行った。今年度は、尾道でのプロジェクトに区切りをつけ、広島市内でアートプロジェクトを展開予定。

2019年4月-2020年3月	COC+アートプロジェクト「尾道プロジェクト：MULTIPLAY」
2018年4月-2019年3月	COC+アートプロジェクト「尾道プロジェクト：あんくろにくるニューしてい」

氏名	前川 義春
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻、石彫、造形芸術、環境、環境整備、ランドスケープ、庭園、国際交流、国際間プロジェクト、地域創造、地域貢献

2018年度は教育・研究担当理事・副学長としての大学業務が中心であり、理事会、経営協議会を始め8つの委員を務めた。また委員長を務める全学委員会としては教務委員会、全学共通教育委員会、学生委員会、国際交流委員会があり中期計画に沿った委員会運営を行った。また1997年に本学初となる学術交流協定を締結したハノーバー専科大学（ドイツ）とは、交流20周年を迎えた。5名の教職員とともにハノーバー専科大学を訪問して記念式典に参加し、情報科学部のダブルディグリーなどをはじめとする関係強化を推進するための協議を行った。

2018年度で理事・副学長が任期満了となったため、2019年度は芸術学部の業務が中心となった。彫刻専攻長として専攻内の調整を行うとともに、芸術学部の人事委員、研究科入試試験委員、社会連携委員、教職課程委員などを務めた。

【教育活動】

2018年度は教育・研究担当理事・副学長として、第2期中期計画の重点課題の一つとなっている「3学部合同基礎演習」（1年次前期必修科目）を無事開講し、後期には、次年度に向けた授業内容の見直しを行った。また芸術学部・芸術学研究科彫刻専攻における学部生、大学院生における教育としては下記にあげる授業科目を担当し、学部生には基礎実技を中心とした実習科目の指導、大学院生には現代社会と対峙する創作活動の指導を行った。

2019年度は芸術学部や彫刻専攻での講義、実技指導が主となった。1年次学生やドイツからの交換留学生の石彫の指導を行うとともに、彫刻専攻の造形教育の基礎となる塑造や石膏取りの実技指導を行った。

2019年度	彫刻論（古典研究を含む。）（オムニバス／2コマ）、創作と人間（オムニバス／1コマ）、実材制作基礎演習（工芸制作を含む。）、卒業制作、彫刻研究AI、彫刻研究AII、創作総合研究II
2018年度	ひろしま論（オムニバス／1コマ）、彫刻論（古典研究を含む。）（オムニバス／1コマ）、実材制作基礎演習（工芸制作を含む。）、創作総合研究I、地域課題演習、創作総合研究II、卒業制作、彫刻研究AII、彫刻研究AI

【研究活動】

2010年に本学特定研究として開始され、現在まで継続している「あさみなみ芸術化構想-西風新都中央線（大塚シンボル通り）沿道作品設置」研究では、これまでに自作を含む卒業生、修了生の計6点の野外彫刻作品を設置し、ステンレス製案内板を上り・下り線に各1基ずつ設置した。現在も彫刻作品周辺の整備事業を継続しているが、2021年3月には自身の退職が控えており、これらの業務の継続が困難となるため、広島市・西風新都整備部と協議し、2019年3月に下り線沿

道作品、案内板周辺の舗装工事を行った。2020年度内には上り線沿道作品等周辺の舗装工事を行う予定としている。

また、同じく2010年以来、受託研究として継続している「あさみなみ芸術化構想-安佐南区役所作品展示」研究では、私の退職後も継続できる体制を整えるため、2019年度には受託研究代表者を他の教員に交代し引き継ぎ業務を行った。



写真上：舗装工事後

大塚シンボル通り彫刻周辺舗装工事
2020年3月

西風新都中央線下り線(広島市安佐南区大塚)

写真下：舗装工事前

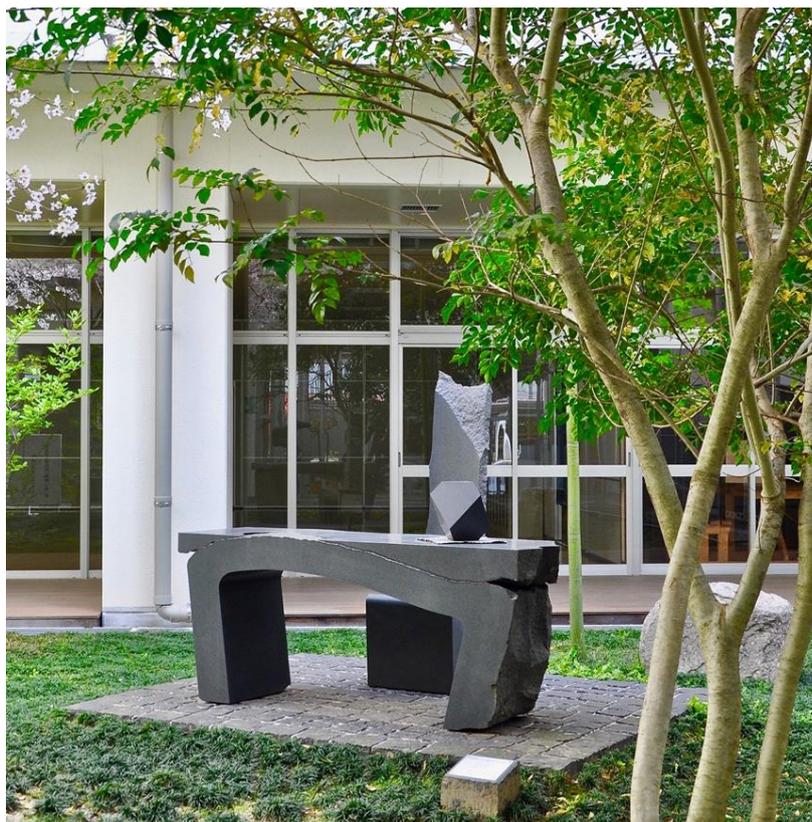
あさみなみ芸術化構想2019

-大塚シンボル通り沿道彫刻作品設置-

1. 「第32回東広島市美術展」招待出品，東広島市立美術館，2020年2月
2. 彫刻の五七五-アジアの美術大学による国際展，沖縄県立大学附属図書・芸術資料館／浦添市美術館，2019年11月
3. 米子彫刻シンポジウム参加作家作品展，米子高島屋，2019年11月
4. 「あさみなみ芸術化構想-西風新都中央線(大塚シンボル通り)沿道作品設置および環境整備」の運営，2019年度，2018年度
5. 「あさみなみ芸術化構想-安佐南区役所作品展示」の企画・運営，2019年度，2018年度
6. 「第46回広島彫刻会」展招待出品，広島県立美術館県民ギャラリー，2018年10月
7. 広島市立大塚中学校 中庭モニュメント制作・設置，広島市立大塚中学校，2018年9月
8. 「彫刻の輪郭」展，広島市立大学芸術資料館，2018年6月

石頭平行六面体のある机

1700×1250×H1450mm 御影石
 2002年作品制作、2018年設置
 広島市立大塚中学校
 (広島市安佐南区大塚西6-3-1)

**【社会活動】**

2018年度は、教育・研究担当理事・副学長として、県内の国公立大学が連携して単位互換、生涯学習、高大連携、教職員研修などを推進する教育ネットワーク中国の委員を務めた。また芸術学部教員として市内、県内外の公的機関の委員を務め、芸術振興と若手芸術家育成に関わる活動を行った。

2019年度は広島県立美術館や東広島市美術館での審査委員や学外での講演、講義の業務を行い、芸術振興のための活動を行った。また広島市立大学芸術学部公開講座（彫刻コース）では、講師として彫刻を愛好する市民に、首像や胸像を中心に塑造による人体表現の指導を行った。

2019年12月	第32回東広島市美術展審査委員（東広島市美術館）
2019年10月	模擬授業（山口県立岩国高等学校）
2019年10月	第7回新県美展審査員（広島県立美術館）
2019年8月	高大連携講座／塑造（首）の講師（広島市教育委員会）
2019年2月	「広島北ロータリークラブ」50周年記念講演
2018年10月	「東京藝術大学生・大学院生による竹原芸術イベント事業」審査員（竹原市教育委員会）
2018年8月、2019年8月	広島市立大学芸術学部公開講座（彫刻コース）
2018年度-2019年度	運営審議委員、収集委員（呉市美術館）
2018年度-2019年度	アートフィールド検討会顧問（香川県小豆郡小豆島町）
2018年度	教育ネットワーク中国大学間・高大連携委員
2018年度	広島県大学連携推進連絡会委員

氏名	前田 力
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作・古典研究・技法材料研究

日本画での絵画制作とそれらを展示・発表することを自己研究の軸とする。自身の根底にある制作のテーマを思索・考察し、それらを絵画として作りあげるまでの過程について研究していく。自身の研究から得た知識、経験を学生に伝えることで指導の幅を広げ、基礎力の底上げを行い、表現力や創造性を養い、卒業後も創作・制作活動を行える力を身に付けさせていきたい。また、広島市や地域住民の方々にも日本画の活動を広く知って頂けるように広報活動にも力を入れていく。日本画ワークショップや特研に於ける「制作の現場」を中心に、大学内の知のトライアスロン事業や芸術資料館の運営にも積極的に関わり、今後も引き続き続けていきたいと考えている。

【教育活動】

学生個々の表現力や想像力を養い、構成演習や材料実習などで具体的な技術指導を行うことで、学生の練度に応じた教育活動をして参りたいと考える。入学した学生の基本的な実技力を身に付け、独自の個性を伸ばし、主体性を持つ学生になる様に指導を行う。通年の日本画実習を通して自らの向上心と問題意識を持ち、その問題点を克服することで自己の作品に磨きをかけ、基礎力を伴った独自性のある作品が描ける学生となる様に指導して参りたい。卒業後も作家活動を行えるような力を身に付けさせ、創作研究に長年取り組んで行けるような教育を目指す。また学生には豊かな感性や表現力をいかに発揮出来る様な制作アトリエの空間作りを考慮し、刺激し合いながら切磋琢磨出来る環境作りも重要だと考える。加えて、新型コロナウイルスの影響によりオンラインの授業にも取り組む。

2019年度	日本画実習ⅠA、材料実習Ⅰ、日本画実習ⅠB、デッサン実習Ⅰ、構成演習1（平面）
2018年度	日本画実習ⅠA、材料実習Ⅰ、日本画実習ⅠB、デッサン実習Ⅰ、構成演習1（平面）

【研究活動】

広島県内の風景や人々の営み、歴史をテーマにして絵画表現（日本画制作）を行う。作品制作を通じて制作にかかわる主題について考察し、構成構図などの創作表現と日本画の技法を研究することで、自身の日本画作品を作り出していくことを目標とする。作品の研究発表は、公募展（日本美術院）の再興院展と春の院展を中心に行い、広島地域に限定せず、全国の自主企画、招待企画による作品発表を積極的に行う。また、広島福屋デパートにて教員、卒業生と共に作品発表「芸美会」に出品し活動する。また隔年で行っているアートプロジェクト「Flag of the West」を通じ広島市立大学日本画専攻の活動を知って貰える様に活動する。

1. 再興第 104 回秋の院展「海港に聳える」170 cm×215 cm 日本美術院大観賞, 2019
2. 再興第 103 回秋の院展「夏の終わりに」170cm×215cm 奨励賞受賞, 2018
3. 第 73 回春の院展「刻む」100cm×100cm 日本美術院春季展賞 受賞, 2018

【社会活動】

社会活動は広島市立大学日本画の教員と学生が、大学内では「公開講座」を通じ、学外では「日本美術院地域連携教育プログラム」として日本画のワークショップを中心に活動する。大学の近隣の方々と広島市民に日本画専攻の活動内容を知って貰い、理解して貰う上で大変重要な機会である。また、日本画になじみの無い方でも、直接画材に手を触れることによって、日本画に興味を持ってくれる貴重な体験になると考えている。過去、ワークショップの終了時にアンケート調査をおこなったが、「楽しんで取り組めた」「貴重な体験が出来た」と答えた方が多数で大変好評を得た。福屋で開催している作品展覧会「芸美会展」ではギャラリートークを行い、作品の鑑賞のポイントや作家の思考、技法の考察などを解りやすく解説している。広島市の文化発展と地域の活性化に繋がれば良いと考えている。

2019 年 9 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 第 3 回 池坊いけばな日本画教室
2019 年 8 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 第 4 回「日本画を描こう！」
2018 年 9 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 第 2 回 池坊いけばな日本画教室
2018 年 8 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 第 3 回「日本画を描こう！」

氏名	丸橋 光生
職位	助教
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻、視覚

私は仏師の家に生まれたこときっかけに美術の道に進みました。高校卒業後本学広島市立大学に進学し、様々な彫刻の素材及びその技法について学びました。大学院進学後以降は度重なる展開を経て（様々な展覧会にも出品し）、現在は人間の「視覚」や「認識」をテーマに、立体作品を始め、平面、映像など、多様な表現方法、素材で作品制作（研究）を行っています。特に「彫刻」という領域においては、ドイツの美術史家ヴィルヘルム・ヴォリングエルが提唱した「立体的な閉鎖性」という概念をキーワードに考察を行い、作品を制作しています。私の主な興味と感心は、発育、発達の課程で習慣化されていく人間の「視覚」や「認識」を、私の作品鑑賞を通しその習慣から逸脱させ、普段とは違う感覚で私自身や鑑賞者が世界を体験することにあります。

【教育活動】

本学彫刻専攻のカリキュラムに沿って、基礎的な彫刻制作の技術（塑像）、様々な素材の取り扱いについて学生に教育を行いたいと思います。また古今東西の様々な芸術作品の紹介もしていきます。これらの技術習得、知識の獲得を土台にしつつ、学生には4年間で、自分の作品制作における「問い」を見つけ、その「問い」を深めていって欲しいと思っています。芸術の場合、客観的なデータによって何かを明らかにするわけではありませんが、各自が見つけた「問い」の答えとして各々の独自の作品（表現）にたどり着いて欲しいです。

また上記の他、世界各国の動向に目を向け、最新の造形素材、技術についてもいち早く情報を取り入れ、学生に紹介していきたいと思っています。

【研究活動】

人間の「視覚」や「認識」をテーマに、立体作品を始め、平面、映像など、多様な表現方法、素材で作品制作（研究）を行っています。特に「彫刻」という領域においては、ドイツの美術史家ヴィルヘルム・ヴォリングエルが提唱した「立体的な閉鎖性」という概念をキーワードに考察を行い、作品を制作しています。国内外で積極的に発表も行うほか、広島市内でアーティストランスペースの運営、長崎県の離島の芸術祭の運営にも関わり、既存の美術施設の外での活動も精力的に行っています。

1. 「I' m seeing, baby.」（個展）7T Gallery、大邱、2019
2. 「ああ わたしは 見ているよ ベイベ」（個展）BnA Alter Museum Kyoto、2019
3. 「ああ わたしは 見ているよ ベイベ」（個展）広島市立大学芸術資料館、2019
4. 「みえない風景」アトリエ onji、東京、2019
5. 「美術館の七燈」広島市現代美術館、広島、2019
6. 「ART BOOK／ART GOODS @BankART Station」BankART Station、横浜、2019

7. 「対馬アートファンタジア 2019」 対馬市厳原町内各所、長崎、2019
8. 「二つの部屋、三つのケース」 京都芸術センター、2019
9. 「彫刻の輪郭」 広島市立大学芸術資料館、広島、2018
10. 「Aspect/持続」 はつかいち美術ギャラリー、広島、2018
11. 「The Window wherein I Dwell」 釜山リサイクルセンター、釜山／韓国、2018

【社会活動】

社会活動においては、広島における芸術・文化の更なる普及と発展を目指し、市民の方に向けた取り組みを行っていきたいと思います。具体的には毎年夏休みに開催される公開講座において、社会人を対象に彫刻制作の技法等について、講義指導を行います。また研究活動でも述べたように、広島市内でアーティストランスペースを運営しており、そこで様々な展覧会を開催し、広く市民の方に公開をしています。また長崎県の離島、対馬で開催されている芸術祭の運営にも関わっており、美術に触れる機会が少ない地域での取り組みにも参加しています。

2019年8月	公開講座
2019年8月	高大連携芸術講座
2018年3月-2020年4月	広島芸術センター 運営メンバー
2018年3月-2020年4月	対馬アートファンタジア 運営メンバー

氏名	南 昌伸
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	工芸、金属工芸、金属造形、鍛金、彫金、鋳金、素材実験

学部長の任期を終え、教育研究に費やす時間が戻ってきたことを実感しているところである。芸術資料館長を務めることで、評議会をはじめ、全学委員会等を通じて大学の運営に関しては多少把握できている。

【教育活動】

学部2年生の「造形実習ⅡA（前期）、ⅡB（後期）」は、金属工芸の基本的な技術を身につける演習課題が複数組まれている。自身が担当する2年生対象の専門基礎科目「工芸材料概説」を受講させ、事前講義として役立つように内容を構成している。3年生、4年生、博士前期課程の指導については、定期的に行う経過発表会で、自身の構想、経過等を言葉、視覚情報を使って考えを伝えられるよう準備を促し、繰り返し行った。創作における自身の考えを的確に他者に伝えられるようにプレゼンテーションを重ねながら、制作の内容を高めていけるように指導した。

2019年度	工芸材料概説、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、造形計画研究Ⅰ、金属造形演習、領域横断特別研究、造形計画研究Ⅱ
2018年度	工芸材料概説、造形実習ⅢA、造形実習ⅡB、造形計画研究Ⅰ、金属造形演習、領域横断特別研究、造形計画研究Ⅱ

【研究活動】

ステンレススチールを使った造形研究として、2作品を制作した。そのうちの1点は、2019年は、6月に廿日市市はつかいち美術ギャラリーでの展覧会に出品。もう一点は4月の展覧会に出品予定であったが、展覧会が中止となり未発表である。現代茶会を想定した茶道具（建水）の製作依頼を受け7割程度が完成している。任意団体「KAZARU展」代表を務め、2016年から工芸の伝統技術継承の活動として、巖島神社所蔵の平安時代の刀・拵えの調査を行なってきたが、2020年7月には復元が完成予定である。自身も金属の一部の復元に取り組んでいるところである。

1. 日展, 2019年11月
2. 現代工芸中国会展, 広島県廿日市市 はつかいち美術館, 2019年5月-2019年6月
3. Metal Works2018, 岡山県天神山文化プラザ, 2018年9月

【社会活動】

日本現代工芸美術家協会に所属。その下で現代工芸中国会にも所属し、常任委員として年間の事業計画、展覧会活動等に携わっている。2019年は、6月に廿日市市はつかいち美術ギャラリーでの展覧会を企画、西日本豪雨災害チャリティー展を実施している。また、9月末、世界平和記念聖堂（広島カトリック教会）の扉の補修を受託研究の形で協力した。2020年の2月、広島市文

化財団との共催で浅野長晟入城 400 年記念事業、子供向けの伝統工芸体験コースを実施した。

2020 年 2 月	広島市文化財団 子供伝統文化教室 銅蟲体験
2019 年 9 月	世界平和記念聖堂の扉の補修
2018 年 6 月-	新県美展審査員
2018 年 6 月-	広島県, 新県美展審査員
2018 年 1 月-2020 年 10 月	広島市, 広島市ヒロシマ賞受賞者先行審議会委員
2018 年 1 月-2020 年 10 月	広島市ヒロシマ賞受賞者審議会委員

氏名	森永 昌司
職位	教授
研究分野	文化財科学
研究キーワード	油彩画、油彩画材料、美術教育、図像学

被爆 60 周年を契機として、被爆者の肖像画を次世代に遺す『光の肖像』というプロジェクトを学生たちと共に、本学油絵専攻の一教員として取り組んできた。被爆体験の継承という意味でヒバクシャの体験を「絵画として描き遺す」という取り組みも、現在は私の母校である広島市内の高校生たちによって引き継がれている。人類史的な視点から『ヒロシマ』をテーマにしたトリエンナーレ（企画展）が、いつか実現できればと考えている。

【教育活動】

芸術を社会で機能させるために美術教育はどうあるべきなのか？

2019 年度より文化庁からの依頼に基づいて、本学芸術学部として教員向けの研修の企画並びに実施に取り組んでいる。学校教育が長年目指している知・徳・体にわたる「生きる力」の育成は、教育課程全体に通じる具現化するべき責務である。「生きる力」の育成は、これまで地道に取り組まれてきた実践教育の蓄積によるところが大きく、特に「見方」を働かせるデッサンによる描画（絵を描くこと）が、学習者の情操の育成を支えて来たことは想像するに容易である。今後、予測困難な社会の変化の中で、美術による教育がこの育成に取り組むとき、今まで以上に「人」の在り方を強く意識しなければならないのかもしれない。「人」を深く見つけ、感じ取ったことを「人」が創造的に表現する、すなわち人が人として他者と対峙し感じたままを個性的に表現する美術教育を「生きる力」の育成につなげたいと考えている。

2019 年度	創作と人間、油絵入門、油絵実習ⅡA、油絵実習ⅣA 絵画論、油絵実習Ⅰ、油絵実習ⅡB、油絵実習ⅣB、油絵研究AⅡ、油絵研究AⅠ、創作総合研究Ⅰ、創作総合研究Ⅱ
2018 年度	デッサン概論、油彩画材料論、油絵実習ⅡA、油絵実習ⅣA、創作と人間、絵画論、油絵実習Ⅰ、油絵入門、油絵実習ⅡB、油絵実習ⅣB、創作総合研究Ⅰ、創作総合研究Ⅱ、油絵研究AⅡ、油絵研究AⅠ

【研究活動】

日本の近代化以降の西洋絵画の受容について考える時、ヨーロッパのルネッサンス期からアカデミズムの成立期までを追体験する事が重要であると考えている。また、その以前の古典絵画の技法・材料の扱い方についても必要とされる科学的な知識や理解が必要であり、絵画形式の構造や文化的な背景についての造詣を深めることを通して、学生たちが創造性を高めて行くことが、私の研究室での教育研究のテーマと考えている。

1. 野呂山芸術村交流展, 呉市 川尻町 野呂山芸術村ギャラリー, 2019年10月
2. 八千代の丘美術館, 第16期入館作家, 2017年4月 - 2018年3月

【社会活動】

2004年度の広島市の公民館の指定管理者制度への移行に伴い、財団事業として「さえきアートキャンパス」の立案・実施に携わって以来、全ての世代に対する草の根的な美術教育を実践してきました。「生涯にわたり美術を愛好する心情」とは、表現や鑑賞を通して日常生活の中に於いて主体的に表現したり鑑賞したり、美術を愛好していく心情のことである。そうした環境が社会から失われないように努力して行きたいと考えている。

2019年度-2020年度	文部科学省、大学設立審議委員
2019年度-2020年度	芸術系教科等担当教員等研修会、中国地区ブロックを担当(文化庁事業)
2018年度-2019年度	広島市立基町高等学校、外部評価委員
2018年度-2019年度	「さえきアートキャンパス」企画・担当(佐伯区民文化センター主催 広島市未来都市創造財団事業)

氏名	吉田 幸弘
職位	教授
研究分野	プロダクトデザイン
研究キーワード	プロダクトデザイン 景観シミュレーション まちづくり 復元

2018年度は広報担当副理事として大学の広報に関する業務を中心に、教育研究評議会、理事・事務連絡会議、自己評価委員会、企画・広報委員会、オープンキャンパス実施WGを務めた。学部では研究科教務副委員長として博士前期課程・後期課程の組織改革を行い専攻、領域、分野の区分名称を解りやすく変更した。

2019年度は芸術学部・芸術学研究科の副学部長・副研究科長として学部・研究科全体の運営・業務を学部長の補佐役として努めた。

【教育活動】

2018年度は前年度から新たに開講した広島市立大学芸術学部・株式会社マツダとの共創ゼミの大学側代表教員として専攻、分野、学年を超えた受講生を対象に授業を行った。

また、芸術学部デザイン工芸学科3年のテーマ研究担当教員として分野学生の創作活動の指導と、ひとまちプラザでの展覧会「キャンディー展」を開催した。

2019年度も引き続きマツダ共創ゼミと前年同様テーマ研究を担当した。他の担当については以下の通り。

2019年度	創作と人間（オムニバス1コマ）、平和と人権A（オムニバス1コマ） コンピューターアート、造形研究、形体演習Ⅱ、立体造形演習、都市論
2018年度	創作と人間（オムニバス1コマ）、コンピューターアート、造形研究、形体演習Ⅱ、立体造形演習、都市論、領域横断特別研究

【研究活動】

広島市アートマルシェのためのブースファニチャーデザインを共同で監修した。

京橋のライトアップ計画において照明の、色、照度等について現地にてアドバイスと確認を行った。

【社会活動】

2018年度は広島市景観審議会・眺望景観検討部会において原爆ドーム及び平和記念公園周辺の眺望景観のあり方を検討し12月12日広島市長に答申した。

2019年度は柳井市文化福社会館にて高校生のための広島市立大学サテライト講座で講演するなどテーマである創造的まちづくりにそって対外的に活動を行った。

2019年6月	第7回新県美展（第71回広島県美術展） 審査委員
2019年5月	第11回広島県高校生技能オリンピック インテリア製図部門 審査委員

2019年4月	第16回ひろしまグッドデザイン賞選定委員会 審査委員長
2019年4月	国土交通省 太田川河川整備懇談会 委員
2019年4月	広島市特産品等ブランド化推進審議会 委員
2019年1月	広島県高等学校 ID コンペ 2019 審査委員
2018年10月	広島市景観審議会車体AD専門部会 部会長
2018年10月	広島市景観審議会 委員
2018年5月	五日市商工会青年部ロゴマークデザインセミナー 講師
2018年5月	ひろしまドリミネーション2018企画検討会議 委員
2018年5月	広島市景観審議会眺望景観検討部会 委員(部会長職務代理者)
2018年4月	広島県アートサポートセンターひゆるる協力委員会 委員長
2018年4月	公益財団法人広島市産業振興センター 理事
2018年4月	広島市障害者施策推進協議会 委員
2018年4月	広島市景観審議会 委員
2018年4月	広島平和記念資料館資料調査研究会 副会長
2018年4月	広島市特産品等ブランド化推進審議会 委員

氏名	藁谷 実
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作・古典研究・技法材料研究

開学以来、在学生の教育と作家志望の卒業生に対する支援を継続的に行ってきた。その結果、日本画専攻の卒業生は画家として活躍する者が増え、評価も定着してきた感がある。院展出品作品の研究会を実施するほか発表の機会創出のために日本画専攻プロジェクト「Flag of the West 2018」、芸美会展（毎年）などを開催している。そのほか個展、グループ展のアドバイス、推薦形式の各種公募展や賞のノミネートを行うなど様々な作家育成支援に尽力している。

学部生に対しては、これまでの高度な専門教育を行う一方で基礎力を充実させるためリメディアル教育の導入やアクティブラーニングも意識的に取り入れた。今後、少子化など時代の変化に伴い学生の実技能力も変化する可能性が予想されることから柔軟に対応してゆくことが必要である。

【教育活動】

(1)学部の教育

- ・実技の授業では担任制をとるが、各学年を日本画専攻教員チームとして個々の課題に即し、きめ細かく段階的に指導を行った。
- ・4年次学生を担当。卒業制作は、抜きん出た作品はなかったものの全体に高いクオリティーを示せた。約半数弱が、作家を目指して進学希望している。
- ・作家志望者向けの特別講師を招聘し、キャリア形成教育を実施した。

(2)博士前期課程の教育

- ・日本画B研究室学生は、極めて優れた修了模写を仕上げるなど高度な専門教育を実現した。

(3)博士後期課程の教育

- ・博士後期課程指導の学生は、院展に入選する他、銀座有名画廊での個展開催など充実した創作研究を行った。

2019年度	日本画入門（全学共通系科目・専門基礎科目）、技法演習（裏打ち技法）、卒業制作、日本画材料技法演習、日本画実習Ⅳ、絵画論演習、日本画研究Ⅰ（含古典研究）、日本画研究Ⅱ（含古典研究）、創作総合研究Ⅰ
2018年度	日本画入門（全学共通系科目・専門基礎科目）、技法実習（裏打ち技法）、卒業制作、日本画材料技法演習、日本画実習Ⅳ、絵画論演習、日本画研究Ⅰ（含古典研究）、日本画研究Ⅱ（含古典研究）、創作総合研究Ⅰ、創作総合研究Ⅱ

【研究活動】

テーマ「自然と人間の関わりから生まれる普遍的な情趣を日本画の技法により表現する。」に沿って創作研究をしており日本美術院の主宰する春の院展、再興院展を中心に企画展にも出品。また、2020

年 10 月に日本橋及び広島三越での個展に向けて作品制作を継続している。

その他の研究として特色研究日本画制作の現場Ⅳ（現在活躍する若手、中堅作家を招聘し、展示及びパネルディスカッション）の実施がある。また、広島の文化財（美術）を学ぶ教育プロジェクト「三原市・佛通寺所蔵「雲谷等顔筆 襖絵」を教材として」など関連領域の研究会に参加した。

研究発表

1. 第 75 回春の院展 日本橋三越・東京 他 2020 年 3 月-2020 年 4 月
2. 気更来会, 岡山天満屋, 2020 年 2 月
3. 秋俊会 銀座スルガ台画廊・東京都 2019 年 9 月
4. 日本画から NIHONGA へ ～安芸の詩～ 日本橋三越本店・東京都 2019 年 9 月
5. 第 104 回院展 東京都美術館・東京都 他 11 ヶ所 2019 年 9 月-2020 年 5 月
6. 第 19 回芸美会展 広島福屋 2019 年 8 月
7. 第 74 回春の院展 日本橋三越本店・東京都 他 15 カ所 2019 年 3 月-2020 年 2 月
8. 再興第 103 回院展 東京都美術館 他 11 会場 2018 年 9 月-2019 年 5 月

他、9 件

【社会活動】

社会貢献としては、創作研究の成果をもとに市民へ還元する形で行った。下の表以外では、展覧会でのギャラリートークや NHK 文化センターとの連携による生涯教育への取り組み、広島護国神社絵馬（破魔矢）の原画制作及び、大絵馬制作の監修なども行った。また、芸術資料館長として収蔵品を活用し、市民に芸術鑑賞の機会創出に努めた。

2020 年 3 月	公益財団法人 日本美術院 第 75 回春の院展審査委員
2019 年 11 月	広島県高等学校美術連盟 第 18 回広島県高等学校 絵画・彫刻コンクールの審査委員
2019 年 9 月	広島市立大学芸術学部公開講座 日本画コース
2019 年 9 月	日本美術院地域連携プログラム「こども絵画教室・日本画を描く」
2019 年 8 月	日本美術院地域連携プログラム「日本画を描こう！」
2019 年 8 月	公益財団法人 日本美術院 第 104 回 院展審査委員
2019 年 5 月	有芽の会, 有芽の会 作品審査委員
2019 年 1 月	広島市民対象「日本画講評会」
2018 年 9 月	日本美術院地域連携プロジェクト「日本美術院&池坊 子供日本画教室と生け花教室」
2018 年 8 月	日本美術院地域連携プログラム「日本画を描こう」

広島平和研究所

氏名	大芝 亮
職位	特任教授
研究分野	政治学、国際関係論（グローバル・ガバナンス論）
研究キーワード	国際政治理論

2019年度に広島平和研究所に着任した。研究所のこれまでの活動について学ぶとともに、いっそうの発展のために改革すべき点について検討した。

平和学研究科については、2019年度は初年度であり、学生確保の問題やカリキュラムなどについて検討した。

学内行政業務の他、教員としての教育活動、研究活動、社会活動について取り組んだ。

【教育活動】

1. 平和学研究科では、グローバル・ガバナンス論および平和構築論を担当した。前者では、履修者は2名であったが、JICAでの経験豊富な社会人と理論に優れた大学新卒生で、刺激を得るところも多かった。
2. 平和構築論は、沖村先生と共同の講義で、大芝はおもに復興支援・開発援助問題を取りあげた。JICA出身の院生1名であったが、具体的な事例をよく知っており、内容の充実した授業を進めることができた。
3. オムニバス形式の平和研究Iでは、カンボジアを事例として平和構築について講義を行った。カンボジアにおけるNGOの活動を写真で紹介しながら、現場の視点と理論的視点の双方をあわせもつことの重要性を伝えた。たとえば全焼した小学校校舎を保護者が修復する活動はまさに参加型発展という概念を想起させる。概念を知っておれば、現場をみて概念の有効性に気づく。現場を訪れないならば概念は単に抽象的なものにとどまる。
4. 「ひろしま論」では、広島の被爆後の復興過程における諸問題を考察した。

2019年度	グローバル・ガバナンス論、平和構築論、平和学特殊演習
--------	----------------------------

【研究活動】

1. 国際組織と平和に関して、研究を進めた。国連、世界銀行、ユネスコ（世界遺産委員会）をとりあげ、それぞれを国家間のパワーポリティクス、事務局主導の機能主義的活動、NGOとの協働の3点から考察するものである。
2. 科研「東アジア歴史認識問題の国際的展開」では、東アジアの歴史認識問題が、多文化主義あるいは国際主義を掲げる場では、どのように展開しているかを明らかにする。
 1. 『パワーから読み解くグローバル・ガバナンス論』，有斐閣，2018，共編著
 2. 「座談会 国際秩序は揺らいでいるのか(揺らぐ国際秩序)」，『国際問題』，No. 668，pp. 1-17，2018

【社会活動】

1. 大学改革支援・学位授与機構において、学位審査会議長、社会科学専門委員会および学芸・教養専門委員会の委員長を務めた。

2. 広島平和文化センター理事を務め（初年度）、広島の活動について学ぶ機会を得た。
3. 韓国総領事館と広島平和研究所の共催による国際ワークショップ（2019年11月）では総括を行った。
4. 2019年度広島平和研究所・連続市民講座「アジアの平和とガバナンス」（2019年10～11月）において、グローバル・ガバナンスに関する講義を行った。
5. チェジュ・フォーラム（2019年5月）では、「強靱な(resilient)平和」に関するパネルにおいて報告を行った。
6. 日本国際政治学会評議員として評議会に出席した。

2017年4月-現在	独立行政法人大学評価・学位授与機構・学位審査会，審査委員長
------------	-------------------------------

氏名	沖村 理史
職位	教授
研究分野	環境政策・環境社会システム、国際関係論
研究キーワード	国際関係論、国際制度研究、環境政策論、国際環境政治学、国際連合研究

2019年度に広島市立大学に着任したので、本レポートの記載事項は、2019年度の一年分となる。私の主たる研究テーマは、地球環境問題の国際制度である。これまでは、気候変動問題の国際制度形成（気候変動枠組条約、京都議定書、パリ協定など）を中心に事例分析を進めてきたが、本学赴任後はより研究関心を広げ、持続可能な発展目標（SDGs）も研究対象としている。平和学研究科の教員として、平和構築や平和創造に資する人材育成に貢献することが教育分野での役割だと認識しており、研究対象の拡大を通じて貢献することができると考えている。

【教育活動】

2019年度に本校に移ったため、平和学研究科で新たに担当する講義の準備を進めた。2019年度は第一期生に講義を行ったが、この経験を踏まえ、今後履修生とともに内容を改善していく。また、国際学部のオムニバス講義（平和研究Ⅰ、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和）の担当回の講義を行った。学部講義においては、平和学習により深い関心を持ってもらうことに重点を置き、可能な限り双方向の授業を行うことに努めた。また、2019年度は前任校の島根県立大学で非常勤講師を務めた。

2019年度	国連論、国際環境論、平和構築論、平和研究Ⅰ、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和
--------	--------------------------------------

【研究活動】

気候変動問題の国際制度に関する研究を引き続き実施した。具体的には、研究代表者である科研費プロジェクトの一環として、気候変動枠組条約交渉を参与観察するとともに、日本国際政治学会で報告した。また、持続可能な発展に関する国際社会の対応を国連の会議に参加し現地調査した。そのほか、2019年度には広島平和研究所が主催した国際ワークショップ（東アジアの危機と日韓関係の行方）で報告を行うとともに、2018年度はそれまで継続していた共同研究で報告を行った。

1. 沖村 理史，環境経済・政策学会編『環境経済・政策学辞典』，丸善出版，2018，分担執筆
2. 沖村 理史，「気候変動から気候緊急事態へ□地球環境対策をめぐる最前線」，『Hiroshima Research News』，Vol.22，No.2，pp.4-5，2020
3. 沖村 理史，「地球環境問題とグローバル・ガバナンス」，『広島平和研究所ブックレット』，No.7，pp.137-160，2020
4. 沖村 理史，「非軍事的安全保障協力の現状と課題」，「国際ワークショップ2019 東アジアの危機と日韓関係の行方 報告要旨」，pp.10-25，2020

5. 沖村 理史, 「国連気候変動枠組条約体制とアメリカ」, 『総合政策論叢』, No. 36, pp. 1-20, 2018
6. 研究発表, 沖村 理史, 「非軍事的安全保障協力の現状と課題」, 広島市立大学広島平和研究所 国際ワークショップ 2019「東アジアの危機と日韓関係の行方」、広島市文化交流会館, 2019年11月
7. 研究発表, 「国連気候変動枠組条約体制の実効性ー京都議定書とパリ協定」, 日本国際政治学会 2019年度研究大会、新潟・朱鷺メッセ, 2019年10月
8. 沖村 理史, 「日本の原発政策と台湾の原発政策」, 国際學術研討會「台湾 環境 文化」、新北・淡江大学, 2018年11月

【社会活動】

広島平和研究所主催の連続市民講座で講師を務めたり、大学院平和学研究科主催の広島平和セミナーで講師を務めた。また、日本国際政治学会の環境分科会幹事およびブロック幹事として、研究大会開催に貢献した。島根県の環境審議会では、部会長として湖沼水質保全計画の策定に関与し、浜田市の環境審議会会長として、環境アセスメント案件の答申策定に関与した。

2019年12月	島根県立大学浜田キャンパス公開講座, 島根県立大学
2019年10月-2019年11月	広島市立大学 広島平和研究所 連続市民講座 (2019年度)「アジアの平和とガバナンス」, 広島市立大学 広島平和研究所
2019年10月	広島市立大学大学院 平和学研究科 ヒロシマ平和セミナー2019, 広島市立大学大学院 平和学研究科
2018年4月-2020年3月	浜田市, 環境審議会会長
2017年11月-2019年10月	日本国際政治学会, 環境分科会責任者
2012年7月-	島根県, 環境審議会委員
2008年9月-2019年3月	島根県, しまね環境アドバイザー

氏名	ガネサン, ナラヤナン
職位	教授
研究分野	東南アジア政治・国際関係
研究キーワード	Southeast Asia, Comparative politics, International relations, Foreign policy, Regionalism

The last two years have witnessed some major changes at HPI. We now have a staff strength that is more focused on teaching, and the new Director also has a very consultative and cooperative management style. With the introduction of the new Graduate School of Peace Studies we also have students now. So in a sense we have undergone some transformation in our structure and core functions.

【教育活動】

The educational activities have continued as usual, especially for the undergraduate peace lectures. There was no take up for the omnibus class where I give two lectures on Hiroshima and the Nuclear Age coordinated by Kurashina sensei. And the graduate course in Conflict and Cooperation in Southeast Asia has been fully assembled. This syllabus will assist students who want to learn more about the region and strengthen the HPI's coverage of the broader regional environment in Asia.

2019年度	Japan and ASEAN and The Three Indochina Wars and ASEAN
2018年度	Japan and ASEAN and The Three Indochina Wars and ASEAN

【研究活動】

The recent research activities have been focused on a number of core themes. The first of these is the Myanmar peace process where I have published at least one article each year in an internationally refereed journal. The second major theme is the evolving regional security environment in Southeast Asia that I have written about as a journal article. And the last theme is democratization and its impact on civil conflicts leading to their transformation into peaceful outcomes. Drawing on a conference held in Lisbon in 2018 and seven case studies spread across three continents, an edited book has been submitted for publication. It will appear later in 2020 with a London-based publisher after a very positive external peer review of the manuscript.

1. International Perspectives on Democratization and Peace, London: Emerald Group, 2020, Single editor and single author of 3 chapters
2. Handbook of Governance in Asia, Chapter single author Berlin: Campus Verlag, 2020
3. China and Southeast Asia in the Xi Jinping Era, Lexington Books, 2018, Co-author

4. Bilateral Issues in Myanmar's Foreign Policy Towards China, Centre for Southeast Asian Studies, University of Freiburg, 2018, Single author
5. Appraising Southeast Asia's Emerging Security Architecture, Hiroshima Peace Research Journal, Vol.7, 2020
6. Update on Myanmar's Ethnic Peace Process, Journal of Peace and Reunification Studies, 2019
7. Singapore in 2018: Global spotlight, regional anxieties and domestic leadership concerns, Asian Survey, 2019
8. Singapore in 2017: Structural Changes and Political Challenges, Asian Survey (University of California, Berkeley), 2018
9. Taking Stock of Myanmar's Ethnic Peace Process and the Third Twenty First Century Panglong Conference, Asian Journal of Peacebuilding, Vol.6, No.2, pp.379-392, 2018
10. Chinese infrastructure investments in Southeast Asia and their implications for the region, Blick Wechsel No. 6, Vol.6, pp.379-392, 2018
11. Presentation, Democratization and its Impact on the Ethnic Peace Process in Myanmar, Conference on Process of Peace and Democratization, 2018年12月
12. Invited talk, "Myanmar's Ethnic Peace Process," 2018年11月
13. The 2018 elections in Malaysia and their impact on domestic politics, Centre for Southeast Asian Studies, 2018年11月

【社会活動】

I have continued in an advisory capacity with the Panna Institute in Yangon that promotes education and training for the private and public sectors. The training of the Myanmar civil service has also continued but with a greater focus on research methodology rather than public administration. And the training of scholars at Yangon and Mandalay Universities have also continued. And the German government that has been very satisfied with the outcome of both projects has gone on to guarantee its support for the programs for the next three years as well.

2016年-	Regional Editor, Heidelberg Conflict Transformation Index (Heidelberg University)
2016年-	Academic advisor, Panna Institute, Yangon, Myanmar
2015年-	Myanmar Expert and Country Coder, Varieties of Democracy Project (Gothenburg University, Sweden)
2015年-	Member, Editorial Committee, Asian Journal of Comparative Politics (London)
2015年-	Coordinator and Trainer, Social Science Summer School, Yangon and Mandalay Universities
2014年-	Coordinator and Trainer, Myanmar Civil Service

2013 年-	Member, Editorial Committee, Asian Journal of Peacebuilding (Seoul National University)
2010 年-	Member, Editorial Committee, Asia-Pacific Social Science Review (De la Salle University, Manila, the Philippines)

氏名	河上 暁弘
職位	准教授
研究分野	公法学、政治学
研究キーワード	憲法学、法学、政治学、行政学、地方自治論、人権論

私の研究テーマは、長期的には、「いかにしたらこの世から戦争をなくすことができるか」という理論モデルを提示することだが、当面の研究の視座は、憲法学の視点から、国家権力の立憲主義的統制、民主化、分権化、そして人権保障の視点から平和創造のあり方を考えることである。これまで、戦争違法化の理論と歴史、日本国憲法制定過程と戦後日本憲法史、市民・地方自治体による平和保障の理論、戦後日本の人権・平和問題と憲法訴訟等に関する研究を行ってきた。こうした研究成果を大学での講義等の教育活動や社会活動においても十分に還元できるように全力を尽くしたい。

【教育活動】

大学では、全学共通科目として、「法学（日本国憲法）」を担当し、憲法の基礎理論を講義している。これは教職科目ということもあり、すべての学部から、学部の違いを超えて多くの学生が受講する科目である。法学・憲法学の学習で求められるのは、条文を丸暗記したり、重要単語を覚えたりすることではない。しかし、この点の誤解が多く、食わず嫌いな学生を全国的に生み出しているように思われる。まずはこの誤解を解き、具体的な論点を取り上げ、関心を深める努力を続けたい。その他の科目は学部科目も大学院科目も、いわば応用科目であるが、毎年、最新の論点や学説を紹介できるようにしたいと考え、工夫をしているところである。その他、国際学部の専門科目として、「現代社会と法Ⅰ・Ⅱ」、「平和研究Ⅰ・Ⅱ」（オムニバス、Ⅱは科目コーディネーター）、大学院平和学研究科では、「日本国憲法と平和主義」（君島東彦立命館大学教授と2人で担当）を担当している。

2019年度	法学（日本国憲法）、現代社会と法Ⅰ・Ⅱ、平和研究Ⅰ・Ⅱ、日本国憲法と平和主義
2018年度	法学（日本国憲法） ※学外長期研修のため、その他の授業は開講なし。

【研究活動】

近年の自身の研究活動を振り返ると、戦後日本の原点となった日本国憲法・地方自治法等に関する歴史的・原理的な考察を行ってきた。また、他方で、近年は、戦後改革・戦後民主主義・戦後「平和」国家のあり方を問い直すような政治状況変化も見られる。あらためて、そうした「構造」変化がいかなる要因によって起きている（起ころうとしている）のか、それにいかなる論点が含まれているのかなどの問題について、歴史的・構造的な分析を試みたいと考えている。2018-2019年度に公刊した論稿は次のとおり。

1. 大津浩編，分権改革下の地方自治法制の国際比較—地方自治法制の新たなパラダイムを求めて，有信堂，2019，分担執筆

2. 日本平和学会編, 平和研究と憲法 (平和研究 第50号), 早稲田大学出版部, 2018, 分担執筆
3. 河上暁弘, 地方自治から見た憲法と平和, 自治研かごしま, No.124, pp.2-19, 2020
4. 河上暁弘, 戦後日本における『平和国家』・『平和憲法』論の形成—戦後直後における知識人の平和論を中心に—, 広島平和研究, No.7, pp.93-116, 2020
5. 河上暁弘, 「戦後の象徴」としての憲法9条—戦後日本の「理念」と「現実」, 『平和への扉を開く』(広島平和研究所ブックレット第6巻), No.6, pp.301-325, 2019
6. 河上暁弘, 市民自治型平和政策と改憲論, ながさき自治研, No.74, pp.12-32, 2019
7. 河上暁弘, 平和と地方自治の視座から憲法を考える—憲法の『改正』ではなく憲法の『実行』を—, 青年法律家, No.573, pp.2-3, 2018
8. 河上暁弘, 地方自治と憲法改正論—全国知事会憲法改正提案を中心に—, 自治総研, Vol.44, No.9, pp.57-118, 2018
9. 河上暁弘, 市民・自治体の平和力と改憲論—「国家安全保障」から「市民自治型平和保障へ」, 月刊自治研 第60巻708号・2018年9月号, Vol.60, No.708, pp.46-47, 2018
10. 河上暁弘, 「改革」の暴走と地方自治の危機—憲法改正と地方制度改革構想をどう見るか—, 自治体労働運動(季刊), No.65, pp.3-20, 2018
11. 河上暁弘, 書評 麻生多聞『憲法9条学説の現代的展開—戦争放棄規程の原意と道徳的読解』(2019 法律文化社), 明治学院大学国際平和研究所『PRIME』、No.43, pp.120-124, 2020

【社会活動】

前述の教育・研究活動のほか、市民等の求めに応じて、学術研究の成果を還元し、研究者としての社会的責任を果たすため、講演や取材等には積極的に応じている。近年は、広島を中心とした中国地方や本学赴任まで在住していた東京圏に加えて、九州、東海、近畿地方などでも、講演等を行っている。近年は憲法問題等への関心の高まりがみられるように思われるが、今後とも積極的な社会貢献活動を行いたいと思う。

2018年9月19日市民政策調査会主催の市民自治憲法講座で「地方自治と憲法改正論」と題して講演(於:東京都新宿区)など講演等多数

2009年6月-	総合人間学会
2008年-	日本公法学会
2008年10月-	日本地方自治学会
2002年-	日本教育法学会
1999年-	全国憲法研究会
1999年-	憲法理論研究会
1998年-	日本平和学会
1995年-	多摩学会 (地方自治)

氏名	吉川 元
職位	特任教授
研究分野	国際関係論、平和研究、国際安全保障論
研究キーワード	平和、国際安全保障

2018年度は広島市立大学大学院平和学研究所の開設準備に追われた。そして19年度は、めでたく大学院平和学研究所が開設の運びとなった。この2年間は希望と不安の錯綜する記念すべき2年となった。大学院の初年度の入学者は2名にとどまったが、実に優秀な学生が入学したので、研究指導にも、また自分自身の研究にも熱が入った。また平和学研究所の広報宣伝にも力を入れ、中国遼寧省の3大学、韓国の釜山と大邱の3大学を訪問し、院生募集のための広報宣伝に努めた。

【教育活動】

2年間にわたって全研究科共通科目である「国際関係と平和」（19年度からは平和学研究所には「平和学」の読み替え）を担当し、また19年度には「予防外交論」と「安全保障論」を開講した。「予防外交論」は全国的にも珍しい科目であり、私にとって初の開講科目であるだけに講義の組み立てと準備は試行錯誤の連続であった。学外教育活動として18年度は前年度に引き続き、東京大学大学院総合文化研究科客員教授を勤めた。

2019年度	平和学（国際関係と平和）、予防外交論、安全保障論
2018年度	国際関係と平和

【研究活動】

当該2年間に、二つの研究テーマに取り組んだ。第一は、20世紀3度の国際平和秩序変動期（第一次世界大戦後、第二次世界大戦後、冷戦終結後）に行われた民族浄化と民族強制移動の研究である。本研究は、蘭信三他編『引揚・追放・残留』（名古屋大学出版会、2019年12月）所収の拙稿「戦争と民族強制移動」において発表した。第二に、アジアの安全保障システムと安全保障共同体創造の研究である。本研究テーマは“Regional Security System in East Asia: The Dilemma of the US-Japan Security Alliance”（『広島平和研究』2020年3月Vol.7）に発表した。口頭発表として、1）2019年7月18-19日 遼寧大学（中国瀋陽）でフォーラム Northeast Asian Politics and Economy under the New Situation で報告（報告題目“Northeast Asia Political Reconciliation and an Avenue to Cooperation in Northeast Asia-Reconsideration of the CSCE”、2）2019年9月6日 遼寧大学日本研究所学術講演「変容する日本の平和主義」と題して講演、3）2019年11月3日 2019年度日本平和学会秋季研究集会において「民族自決主義の100年——国民国家建設と民族国家建設の相克の歴史」と題して報告した。

1. 「戦争と民族強制移動——国際平和の処方としての民族強制移動の歴史」、蘭信三、川喜田敦子、松浦雄介編著『引揚・追放・残留——戦後国際民族移動の比較研究』名古屋大学出版会、2019年、45-73頁

2. 『アジアの平和と核—国際関係の中の核開発とガバナンス』広島平和研究所編、共同通信社、2019年2月（序論「今なぜアジアの核とガバナンスを問うのか」及び第10章「民主主義による平和」を執筆
3. “The Regional Security System in East Asia: The Dilemma of the US-Japan Security Alliance” 『広島平和研究』第7号、Vol.7, 2020年3月、43-60頁

【社会活動】

広島平和研究所主催の連続市民講座及び東京大学・北京大学・ソウル大学共催「キャンパスアジア広島セミナー」で講師を務め、また学会活動として日本国際政治学会評議員及び国際法学会評議委員を務めた。広島の地元の社会活動として、広島地元連絡協議会理事及び広島平和文化センター理事を務めた。

2019年7月23日	キャンパスアジア広島セミナー（東京大学、北京大学、ソウル大学共同セミナー）公私（演題：「東アジアの平和と安全保障」（英語）、場所：広島市立大学サテライトキャンパス）
2018年度-	日本国際政治学会評議員
2018年度-	国際法学会評議委員
2013年度-2019年度	財団法人放射線影響研究所広島地元連絡協議会委員
2013年度-2019年度	広島平和文化センター理事

氏名	佐藤 哲夫
職位	特任教授
研究分野	国際法学
研究キーワード	国際法、国際組織、国際連合、安全保障理事会

国際社会を規律する法秩序である国際法を専門とし、特に現代国際法の構造的特徴である国際社会の組織化を研究している。具体的には、国際連合等の国際組織の活動に関する研究であり、国連安全保障理事会による集団安全保障制度などの研究である。

2018年4月に前任校の一橋大学から着任した。2018年度は前任校での院生指導を継続した他、平和研究所内の幾つかの委員会の業務と若干の教育活動の他は、基本的に研究活動に従事した。

他方で2019年度は、大学院平和学研究科発足に伴って年間（前期と後期）の授業を担当した他、入試委員会委員長としての数回の大学院入試の実施および入試制度の改革の検討、国際シンポジウムの企画と実施、連続市民講座の企画と実施など、学内業務が大幅に集中し、時間的にもストレス的にも極めて大変で、結果として十分な研究時間が取れなかった。

【教育活動】

2018年度は、前任校から本校に移るに際して前任校の後任確保ができなかったために、1年間、前任校の院生（修士課程3名、博士課程4名）の論文執筆指導をスカイプによる演習科目（通年で週に1回の授業）として行った。また、学部における「平和研究Ⅱ」（1回の授業）を担当した。

2019年度は、大学院平和学研究科における「現代国際法と平和」（前期）と「国際組織と国際制度」（後期）で各15回の授業を、および下記の3つの学部科目で各1回の授業を担当した。

2019年度	現代国際法と平和、平和研究Ⅰ、国際組織と国際制度、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和
--------	---

【研究活動】

2018年度は、比較的、研究に専念できた。具体的には、着任直前に前任校において行った最終講義の原稿に対して加筆修正を済ませて刊行した（6）他、着任の段階で既に、捕鯨事件（国際司法裁判所判決）を扱う国際シンポジウムに基づく英文の論文集（400頁強）の書評を引き受けており、この執筆に取り組んだ（5）。また着任早々に、以前より親交のあった大沼東京大学名誉教授の英文体系書（700頁弱）の合評会（第390回東京大学国際法研究会、2018年6月）での報告（10）を引き受けることとなり、その準備と書評（4）執筆にかなりの時間を充てた。

2019年度は、研究の一環として、小和田恒国際司法裁判所裁判官退官記念論文集への依頼原稿執筆に取り組んだが、冒頭記載の理由のために研究時間が大幅に削減され、完成することができなかった。他方で、連続市民講座での講義（3）や国際法学会でのパネル実施（9）などはすべて成功裏に終えた。また、国際シンポジウムの報告書（2）やブックレットの導入（1）もまとめた。

1. 佐藤哲夫, 「はじめに」(国際シンポジウムと連続市民講座の原稿に基づくブックレット『核兵器と反人道罪のない世界へ』の導入部分として), 広島平和研究所ブックレット, No.7, pp.i-vii, 2020 (https://www.hiroshima-cu.ac.jp/peace_j/category0016/2019-vol-7/)
2. 佐藤哲夫, 国際シンポジウム「核兵器と反人道罪のない世界へ」, Hiroshima Research News, Vol.22, No.2, pp.1-3, 2020
3. 佐藤哲夫, 国際連合による集団安全保障制度の理論と実際—アジアの事例を主な素材として, 広島平和研究所ブックレット, Vol.7, pp.211-243, 2020 (上記1のサイト)
4. 佐藤哲夫, ONUMA Yasuaki, *International Law in a Transcivilizational World* (Cambridge University Press, 2017) をどのように読むか, 国際法研究, No.7, pp.159-179, 2019
5. Tetsuo Sato, *Whaling in the Antarctic: Significance and Implications of the ICJ Judgment*, edited by Malgosia Fitzmaurice and Dai Tamada. Leiden/Boston, Brill/Nijhoff, 2016. Pp. ix, 423, *Japanese Yearbook of International Law*, Vol.61, pp.333-339, 2019
6. 佐藤哲夫, 最終講義録 国際法研究の40年と国連安全保障理事会, 一橋法学, Vol.17, No.3, pp.199-235, 2018 (<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/29726>)
7. 佐藤哲夫, わたしの一冊:『外交とは何か』小和田恒著; 山室英男聞き手 日本放送出版協会 1996年, 知恵の樹(広島市立大学附属図書館報), No.76, p.6, 2018年10月
8. パネリスト, 佐藤哲夫, 2019 東アジアの危機と日韓関係の行方 Part 2: 対北朝鮮制裁の現状と課題, 国際ワークショップ「2019 東アジアの危機と日韓関係の行方」, 2019年11月
9. 座長およびパネリスト, 佐藤哲夫, 平和構築過程における個人の権利保護・救済をめぐる国際法上の諸問題, 国際法学会 2019年度(第122年次)研究大会, 2019年9月
10. 研究発表, 佐藤哲夫, ONUMA Yasuaki, *International Law in a Transcivilizational World* (Cambridge University Press, 2017) をどのように読むか, 第390回東大国際法研究会, 2018年6月

【社会活動】

- 学会活動としては、2018年度と2019年度において、以下の4つの学会役員を務めた。
- 広島平和研究所の活動としては、企画した2019年度の国際シンポジウムと連続市民講座の詳細はウェブサイト (https://www.hiroshima-cu.ac.jp/peace_j/) 掲載のブックレット第7巻と『Hiroshima Research News』第22巻2号を参照。ほか、2018年度に1件、2019年度に1件。

2019年12月	2019年度国際シンポジウム「核兵器と反人道罪のない世界へ」
2019年10月-2019年11月	2019年度連続市民講座「アジアの平和とガヴァナンス」
2012年-	① 国際法学会・評議員
2008年-	② 世界法学会・理事
2016年-	③ 日本国際連合学会・理事
2007年-	④ アジア国際法学会日本協会・理事

氏名	ジェイコブズ, ロバート
職位	教授
研究分野	歴史学 (核兵器の文化と戦争史、米国の冷戦史と文化、科学技術の文化史)
研究キーワード	Nuclear weapons, American history and culture, hibakusha studies, nuclear testing, war and peace studies, popular culture studies

During AY2018 and AY2019 I taught the graduate course Hiroshima and the Nuclear Age, which is open to graduate students from all faculties. I provided lectures in three peace studies classes taught in the faculty of International Studies. I presented lectures in Hiroshima & Peace.

【教育活動】

I am supervising two master's students as of the beginning of FY2020 and teaching three classes in the Graduate School of Peace Studies. I've been consulting with potential doctoral students interested in joining the school when the program opens in April 2021.

2019 年度	Hiroshima & the Nuclear Age, Peace Studies 1, Peace Studies 2, Peace and Human Rights
2018 年度	Hiroshima & the Nuclear Age, Peace Studies 1, Peace Studies 2, Peace and Human Rights

【研究活動】

In AY2018 and AY2019 I published one co-edited book, one book chapter, three journal articles (all publications were peer-reviewed). I also presented four invited lectures at international conferences or symposia.

1. War and childhood in the age of the World Wars, Cambridge University Press, 2019, Co-author
2. Jacobs, Robert and N.A.J. Taylor, eds., Reimagining Hiroshima and Nagasaki: Nuclear humanities in the Post-Cold War, Routledge Press, 2018, Co-editor
3. "Born violent: the birth of nuclear power," Asian Journal of Peacebuilding, Vol. 7, No. 1, pp. 9-29, 2019
4. "Transforming violence into peace through education," Asian Journal of Peacebuilding, Vol. 6, No. 1, pp. 9-29, 2018
5. "The Global Hibakusha Project: Nuclear post-colonialism and its intergenerational legacy," Unlikely: Journal for the Creative Arts 5, pp. 9-29, 2018
6. Invited talk, "Seeing the Unseeable," Hanes Visiting Artist Lecture Series, "Nuclear visions: the Atomic Photographers Guild" exhibition, 2019年10月

7. Invited talk, “The problems of long-term storage of spent nuclear fuel worldwide,” The Fourth International Conference on Nuclear Decommissioning and Environmental Recovery, INUDECO 2019, 2019年4月
8. Invited talk, “Colonialism and its impact on democratic peace: the nuclear Pacific,” “Processes of Peace and Democratization” workshop at the Catholic University of Portugal, 2018年12月
9. Invited Seminar Speaker, “The invisible nuclear war hidden inside of the Cold War,” presented to the University of Bradford, 8 March 2018, Bradford, UK

【社会活動】

In AY2018 and AY2019 I organized the HPI Public Lecture Series in English both years, and also provided lectures during each series. I also served as a Board Member and Director of Global Hibakusha issues for the Consequences of Radiation Exposure NPO focused on the history and radiation issues related to Hanford, Washington USA.

2019年1月	The Fourth HPI Public Lecture Series in English, 広島市平和研究所
2018年1月	The Third HPI Public Lecture Series in English, 広島市平和研究所
2018年 - 2019年	Director-Global Hibakusha, Consequences of Radiation Exposure NPO

氏名	徐 顕芬
職位	准教授
研究分野	地域研究、国際関係論
研究キーワード	日中関係史、東アジア国際関係論、国際協力論

私の研究領域は中国政治外交論、東アジア国際関係史、国際協力論である。教育活動、研究活動及び社会活動は、基本的にこれらの領域の問題をめぐって展開している。大学の運営には、全学図書館運営委員会委員および「いちだい知のトライアスロン」実施委員会委員、平和研究所編集委員会委員、平和学研究科教務委員会委員などとして関わっていた。

【教育活動】

学部生向けの授業については、「平和研究Ⅰ」、「平和研究Ⅱ」、「国際化時代の平和」という3つの科目の共同講義に参加し、開講した。

大学院生向けの授業については、「日本の近現代史」（共同集中講義）の開講に参加した。

2019年度	「平和研究Ⅰ」、「平和研究Ⅱ」、「国際化時代の平和」、「日本の近現代史」
2018年度	「平和研究Ⅰ」、「平和研究Ⅱ」、「国際化時代の平和」

【研究活動】

所内プロジェクト共同研究に積極的に参加し、「中国のスポーツ外交」、「東アジア安全保障共同体と中国」などの課題に関する研究に取り組んでいる。下記2冊の共著が刊行された。

1. 菅英輝編『競合する歴史認識と歴史和解』晃洋書房、2020年、分担執筆
2. 広島市立大学広島平和研究所編『アジアの平和と核：国際関係の中の核開発とガバナンス』共同通信社、2019年、共同執筆

【社会活動】

1. 国内外から来学した修学旅行生に対して平和関連の講座を行った。
2. 遼寧大学日本研究所を訪問し、学術・研究交流の促進に尽力した。
3. 広島平和研究所「ヒロシマ平和セミナー2019」において、「日中関係の正常な軌道とは何か」と題して講演を行った。

氏名	孫 賢鎮
職位	准教授
研究分野	国際法学、地域研究
研究キーワード	国際法、核問題、朝鮮半島の国際関係、北東アジア安全保障、北朝鮮の人権問題

広島平和研究所（平和学研究科）では、朝鮮半島の国際関係や北朝鮮の核問題などをテーマとして研究、講義を行った。特に、北東アジア国際関係論の授業を通して学生に北朝鮮や朝鮮半島問題に関して興味を持たせ、朝鮮半島の研究や北朝鮮の研究を続ける契機になったと思う。そして、広島平和研究所と韓国の大学及び関連研究所との研究交流によって、韓国と研究交流だけではなく、学生交流にも貢献することができた。今後、韓国との交流と学生・一般市民の対象とした教育・研究活動を通じて広島で韓国・朝鮮研究を広げたい。

【教育活動】

教育活動として、オムニバス形式の「平和研究Ⅰ」、「平和研究Ⅱ」そして「国際化時代の平和」を担当した。また、非常勤として他大学で「韓国・朝鮮研究」科目の講義を行い、韓国・北朝鮮の政治や社会などを比較・分析することによって、朝鮮半島の実態を含む北朝鮮の諸問題を理解させることに力を入れた。そして、北朝鮮の核開発及びミサイル発射実験の背景や意図が周辺諸国及び国際社会に与える影響を議論し、今後の北朝鮮の非核化に向けた非核化プロセスのあり方について考察した。

2019年度	韓国・北朝鮮外交と核問題
2018年度	北東アジア国際関係論、北東アジア国際関係論

【研究活動】

研究テーマとして、北朝鮮の核問題、朝鮮半島の非核化、北朝鮮の人権問題を中心に研究を行った。特に北朝鮮の国連制裁問題について報告書を出して（韓国語）、また研究セミナーで発表した。

【社会活動】

社会活動としては広島平和研究所の市民講座を始め、広島県主催の「ひろしまジュニアフォーラム」など参加。また韓国大統領直属民主平和統一委員会の諮問委員としての活動（2014年～現在）をしている。学会活動として、韓国国際法学会理事（2012年～現在）、日本国際法学会会員、日本国際政治学会会員、日本平和学会会員などの活動をしている。

2012年5月-	韓国民主平和統一諮問委員会諮問委員
2001年4月-	日本国際法学会
1997年3月-	大韓国際法学会

氏名	竹本 真希子
職位	准教授
研究分野	ドイツ近現代史、平和思想・平和運動史
研究キーワード	平和運動、平和主義、ドイツ史

2018年と2019年は、研究活動で大きな成果を得た年となった。これまでのドイツ平和運動史研究について他分野の研究者に向けて成果を報告する機会を得たほか、研究の視野とテーマをドイツ語圏から広げることとなった。広島研究の成果を翻訳本として出版し、さらにアジアの戦争と平和をめぐる問題の研究にも着手した。また、これまでに引き続き原子力と反核運動の歴史についても研究を行い、ソウル国立大学統一平和研究院の紀要で特別編集を務めた。教育活動では学部・大学院の講義に加え、平和学研究科の入試委員を務めるなど多忙かつ充実した2年間であった。

【教育活動】

学部では「歴史学」(単独)「国際化時代の平和」「平和研究 I」(ともに分担、コーディネーター)を担当した。歴史学は一時期履修者がかなり少なかったものの、2019年度は再び増加した。歴史が単に過ぎ去った事件の羅列でないこと、現在の個々人の生活に深く関わるものであることを今後も伝えていきたい。「国際化時代の平和」は履修者が200人を超え、学生の平和に関する高い関心を伺うものとなった。また、2018・19年度は、大学院国際学研究科の「ヨーロッパ平和論」を担当した。2019年度の平和学研究科開設にともない開講を予定していた「平和思想と平和運動」には履修者がいなかったが、今後の開講に備え準備を進めている。

2019年度	平和研究 I、歴史学、国際化時代の平和
2018年度	平和研究 I、ヨーロッパ平和論 I、歴史学、国際化時代の平和、ヨーロッパ平和論 II

【研究活動】

2019年度歴史学研究会大会の現代史部会で20世紀のドイツ平和運動に関するこれまでの研究成果について報告し、日本史研究者をはじめ、幅広い層の歴史研究者と議論する機会を得た。また、広島の復興や平和運動、ヒロシマ情報の伝播に関する貴重な資料である小倉馨のロベルト・ユンク宛て書簡の翻訳を共同で出版したことで、ヒロシマ研究にひとつの貢献ができたと考えている。さらに世界連邦運動と広島の平和運動の関係についての研究にも着手している。また、研究の視野をドイツから世界の平和運動へと広げるきっかけを得てアジアの事例について研究を始めたほか、引き続き原子力と反核運動をテーマとして扱った。これらの成果の一部は、2020年度中に出版される予定である。

1. 若尾祐司・小倉桂子(編)『戦後ヒロシマの記録と記憶 小倉馨の R・ユンク宛書簡』(上)(下)、名古屋大学出版会、2018、共訳、第3章を担当

2. 竹本真希子, 「国境を越える平和運動」田中ひかる (編著)『社会運動のグローバル・ヒストリー 共鳴する人と思想』, ミネルヴァ書房, 2018, 分担執筆
3. 竹本真希子, 「20 世紀ドイツの平和主義と平和運動—その連続と断絶」, 歴史学研究, No. 989, pp. 161-169, 2019
4. Makiko Takemoto, Legacies and Politics of Nuclear Power, Asian Journal of Peace Building, Vol. 7, No. 1, pp. 1-7, May 2019
5. パネリスト, 竹本真希子, 「20 世紀ドイツの平和主義と平和運動—その連続と断絶」, 2019 年度歴史学研究会大会現代史部会, 2019 年 5 月
6. Presentation, Makiko Takemoto, Democratization, Peace and the Differences between Asian and Western Approaches: The Case of Cambodia, International Workshop “Processes of Peace & Democratization”, 2018 年 12 月

【社会活動】

主要な社会活動はこれまでに引き続き、広島平和研究所の連続市民講座であった。2018 年 11 月には、広島平和研究所プロジェクト研究『戦後』の史的再考(代表・直野章子教授、2017～2018 年度)の研究成果のひとつとして、「戦後ドイツの『戦争』認識」と題して講演を行った。さらにこれに加筆・修正する形で、広島平和研究所ブックレット第 6 号『平和への扉を開く』に同タイトルの論文を掲載した。また 2018 年度と 2019 年度は、青少年国際平和未来会議の実行委員として、会議に参加する学生・生徒に対してドイツやヨーロッパの平和運動に関する講義も行った。

2019 年 4 月-2020 年 3 月	青少年国際平和未来会議 2019 実行委員
2018 年 11 月	戦後ドイツの「戦争」認識, 広島市立大学広島平和研究所連続市民講座
2018 年 4 月-2019 年 3 月	青少年国際平和未来会議 2018 実行委員

氏名	永井 均
職位	教授
研究分野	日本近現代史
研究キーワード	日本・フィリピン関係史、戦犯裁判、残留日本兵

2019年度から広島平和研究所副所長、平和学研究科副研究科長、教育研究評議会委員に就任し、学内行政に携わるとともに、新設まもない大学院「平和学研究科」の運営（特に入試関係）に力を注いだ。2018年度と19年度の2年間は、従来の教育活動を継続するとともに、研究活動では新しい研究テーマ（残留日本兵問題）に本格的に取り組み始めた。社会活動においては、平和首長会議や県内の高校、メディア等のリクエストに応じるなどして、自身の知見を社会還元するように努めた。

【教育活動】

大学院では、通常の講義（「日本の近現代史」や「戦争裁判と国際刑事裁判」など）のほか、主指導教員、副指導教員として博士論文や修士論文執筆の助言を行った。学部では、全学共通科目の「平和と人権A」「国際化時代の平和」のほか、国際学部の専門科目「平和研究Ⅰ・Ⅱ」の講義を分担で担当した。講義内容については、最新の研究動向や最近の国内、世界情勢を踏まえて、新しい視点を取り込みながら、適宜アップデートを図っている。

2019年度	平和研究Ⅰ、戦争裁判と国際刑事裁判、平和と人権A（ヒロシマと国際平和）、日本の近現代史、特別演習Ⅱ、特別講義B、平和学特殊演習Ⅰ、国際化時代の平和、核と歴史Ⅱ、平和研究Ⅱ、特別演習Ⅰ、平和学特殊演習Ⅱ、地域研究演習（日本歴史）
2018年度	平和と人権A（ヒロシマと国際平和）、日本近現代史Ⅰ、平和研究Ⅰ、日本近現代史Ⅱ、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和、特別講義A、地域研究演習（日本歴史）

【研究活動】

従来からの日本軍のフィリピン占領研究や戦犯裁判研究に加え、新規テーマである残留日本兵の研究を推進した。関連論文を数本執筆したほか、いくつかの講演や研究発表を行った。特に、残留日本兵研究については、近い将来における本格的な分析に備えて、その準備段階として資料収集や関係者へのインタビューを実施しながら、小論の執筆を積み重ねた。

1. 「残留日本兵とメディアー小野田寛郎元少尉の帰還をめぐる語り」、『広島平和研究』第7号、61-91頁、2020年
2. 「フィリピンから見た残留日本兵問題ールバング島での搜索活動を中心に」、『HIROSHIMA RESEARCH NEWS』第22巻第1号（通巻57号）、6-7頁、2019年
3. 「日本人は小野田元少尉をどう見たかーフィリピンの残留日本兵をめぐる語り」、『広島

平和研究所ブックレット』第6号，273-299頁，2019年

4. 「フィリピンの日本人戦犯の記録について—横山静雄元中将資料を中心に」，『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』第20号，151-163頁，2019年
5. 「戦争の裁き—東京裁判と日本政府の対応を中心に」，広島市立大学広島平和研究所編『アジアの平和と核—国際関係の中の核開発とガバナンス』，共同通信社，34-46頁，2019年
6. 「カラバオと緑の楽園—小野田元少尉とフィリピン・ルバング島」，『青淵』第833号，13-15頁，2018年
7. 「日本占領下の『日常』と『非日常』—フィリピンのティーンエイジャーが見た戦争」，ヘレン・メンドーサ『戦争の思い出—日本占領下で生き抜いたフィリピン少女の物語』，157-188頁，メディアアイランド，2018年
8. 研究発表，「フィリピンの日本人戦犯の記録について—横山静雄元中将資料を中心に」，立命館大学国際平和ミュージアム 第9回メディア資料研究会，2018年7月

【社会活動】

広島平和研究所主催「2018年度 連続市民講座」で講演したほか、平和首長会議主催の「令和元年度 ヒロシマ平和行政実務者研修」で特別講師を務め、比治山女子高等学校で特別講義を行った。また、当該年度もメディアからの取材に応じた。テレビでは、NHK・ETV特集の監修を務め、NHK名古屋放送局の番組制作に協力した。新聞取材については、中国新聞（共同通信配信）や毎日新聞、フィリピン邦字紙『まにら新聞』に談話やコメントを掲載した。

2020年1月31日	平和首長会議主催「ヒロシマ平和行政実務者研修」で特別講演， 広島国際会議場研修室にて
2019年6月20日	比治山女子高等学校にて特別講義
2018年11月9日	広島市立大学広島平和研究所主催「2018年度 連続市民講座」で 講演，広島市まちづくり市民交流プラザにて
2018年8月24日	広島市立大学主催「ヒロシマ平和セミナー2018」にて講演，広島 市立大学サテライトキャンパスにて

氏名	河 昶珍
職位	准教授
研究分野	社会学、メディア・コミュニケーション
研究キーワード	コミュニケーション・メディアの理論と歴史、パブリック・リレーションズ

2018年10月から広島平和研究所に着任し、それまでの研究を継続しつつも、従来とは異なる視点を取り入れ、教育・研究活動に取り組んでいる。徐々にではあるが、地域のメディア関係者、自治体、NGO、教育機関ともネットワークができ、自分の専門分野や広く平和研究にかかわる様々な社会活動も展開できるようになった。

【教育活動】

平和研究Ⅰ、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和、平和インターンシップなど、学部生を対象とする授業（いずれもオムニバス形式）では、グローバル化、文化、市民社会などをキーワードに平和の創造につながるメディアやコミュニケーションの役割に触れてきた。その上で、学生の理解を深めるために映像や写真を多く使う教材（PPT資料）の作成に力を入れている。大学院授業では、ジャーナリズムやメディア・コミュニケーション研究の古典を取り上げ、受講生がトピックについて深く理解し、批判的にとらえる力を身につけることを目指して討論重視で実施した。ほかに、諸外国の研修団、留学生などを対象とする特別講義も担当した。

2019年度	平和研究Ⅰ、平和インターンシップ、グローバル・コミュニケーション論、ジャーナリズム論、平和研究Ⅱ、国際化時代の平和
--------	---

【研究活動】

着任前に採択された科学研究費助成事業（パブリック・リレーションズの歴史的研究）を継続しつつ、研究対象を、企業をはじめとする営利組織の活動から、市民社会や自治体、大学、政治組織に拡大し、文化外交、パブリック・ディプロマシーなどの観点から研究活動に取り組んでいる。地域社会を対象としては、スポーツや文化を手掛かりに広島の歴史を検討するプロジェクト研究を所内で立ち上げ、外部の専門家・研究者の協力を得て実施中である。

1. 「企業社会からPR社会へ?」, 『アステイオン』, No. 91, pp.113-116, 2019年12月
2. 「戦後イギリスと日本のPR——イギリス国立公文書館を訪ねて」, Hiroshima Research News, No. 57, p.6, 2019年10月
3. 「広島で読む3冊」, Web中公新書「私の好きな中公新書3冊」, 2019年8月
4. 「都市と平和の新発見」, 中国新聞SELECT, 2019年4月
5. 「書評『企業広報誌の世界』」, 『専門図書館』, No. 293, pp.52-53, 2019年1月
6. 「資生堂PR映画における〈企業自我〉の表象」, 『東京大学大学院情報学環紀要・情報学研究』, No. 95, pp.1-28, 2018年10月
7. 特別講演・招待講演, 「PRする映画——電通映画社フィルムアーカイブから」, 記録映画

- アーカイブ・プロジェクト第13回ミニワークショップ，2019年11月
8. Other, Korean View on Hiroshima, Hiroshima and the Nuclear Age (Hiroshima City University) , 2019年7月
 9. パネリスト, 「メディア研究×地域研究の新しい可能性——〈平和都市〉広島を例に」, 日本マス・コミュニケーション学会 2019年度春季研究発表会, 2019年6月
 10. 特別講演・招待講演, 「パブリック・リレーションズの歴史社会学」, 広島メディア関係者研究会「広島から世界を考える会」, 2019年2月
 11. 特別講演・招待講演, 「「新しい過去」から「未来」をまなざす——ポスト2020のPublic Relationsを考える」, PR3.0 Conference, 2018年11月
 12. 特別講演・招待講演, 「戦後の産業映画／PR映画から紐解く、新時代の企業コミュニケーションのあり方」, 東京大学大学院情報学環吉見研究室 × PR Table Community 上映会／トークイベント, 2018年9月
 13. 研究発表, 「1950年代における企業自我の形成——メディアを中心に」, 日本広報学会・広報研究深化交流部会, 2018年7月

ほか2件

【社会活動】

上述した研究活動に関する成果を、シンポジウムやワークショップにおける報告、講演を通じて公開してきた。所属学会の委員会活動をはじめ、マスコミ、出版社、PR業界への対応・協力も行った。広島に関わる研究プロジェクトに関しては、公開セミナーを企画し、市民参加可能な交流の場を設けてきた。ほかに、加計高校や森村学園など、高校生向けの講演、英語による市民講座、駐広島大韓民国総領事館が後援するワークショップなどで報告、司会を行った。

2020年2月	「被爆2.5世「援助屋(JICA職員)」が語る広島東洋カープと連携事業」(HPIプロジェクト研究主催、公開セミナー)
2020年1月	「平和とメディア」(韓国慶北国立大学大学生のための特別講座)
2019年12月	「あなたの街をPRしましょう」(広島県立加計高等学校特別講演)
2019年12月	「日米の比較から見る 広島東洋カープの野球文化的意味」(HPIプロジェクト研究主催、公開セミナー)
2019年11月	国際ワークショップ2019 「東アジアの危機と日韓関係の行方」司会
2019年11月	平和学習(日・中・韓の平和に関する取り組み)(学校法人森村学園高校生向け合同講演)
2019年4月-	日本マス・コミュニケーション学会, 企画委員会
2019年2月	「グローバル・メディア——政治とコミュニケーション」(英語による市民講座)
2018年11月	Atomic Bomb and Electrified Postwar Japan (タイ・プラチャーティボック王立学院訪問団向け特別講座)
2018年6月	スーパーグローバルハイスクール事業による若手女性研究者講演会講師

ほか3件

氏名	水本 和実
職位	教授
研究分野	国際政治・国際関係論（核軍縮、安全保障）
研究キーワード	平和、核兵器、核軍縮、核廃絶、原爆投下、被爆体験、平和貢献

広島平和研究所の使命は、地域とグローバルなレベルとを問わず、「平和」に関連した研究、教育、あるいは実践活動に関し、研究者がチームとして、あるいは個人として、知見を提供することで貢献する事だと理解している。研究テーマは核・原爆・被爆に関する諸問題、日本が過去に行なった戦争や植民地支配、日本と朝鮮半島の関係、そして現代の課題である国際貢献・国際協力など。これまで広島市や広島県の平和行政や、平和記念資料館、平和文化センターなどの活動への支援を行いながら、そこで得た知見を大学や大学院の教育に生かすことをめざしてきた。今後も継続する。

【教育活動】

学部教育のうち、全学共通科目では「広島からの平和学：実践の方法」「平和インターンシップ」のコーディネーターを担当し、プログラムの企画と外部講師の起用に心を配った。またオムニバス形式の「平和と人権 A（ヒロシマと国際平和）」のコーディネーターを務めているほか、オムニバス形式の「国際化時代の平和」の講義も 1 回担当した。国際学部専門科目ではオムニバス形式の「平和研究 I」の講義を 1 回担当した。大学院教育では、研究科共通専門科目「Hiroshima & the Nuclear Age」のコーディネーターを米国人教員と務め、英語で被爆体験を語る伝承者を特別講師に招くなどの企画を行ったほか、平和学研究科の専門科目「核と歴史 I」「核と歴史 II」を担当した。

2019 年度	平和インターンシップ、平和と人権 A（ヒロシマと国際平和）、核と歴史 I、核と歴史 II、ヒロシマと核の時代、平和研究 I、広島からの平和学：実践の方法、国際化時代の平和学、
2018 年度	平和インターンシップ、平和と人権 A（ヒロシマと国際平和）、現代軍縮・平和論 I、平和研究 II、広島からの平和学：実践の方法

【研究活動】

研究テーマとしては、核軍縮を大きなテーマとし、サブのテーマとしては日本の核軍縮政策やアジア地域の核軍縮、特に朝鮮半島の核をめぐる情勢に関心を持ち、研究を行っている。これまで広島平和記念資料館資料調査研究会の研究報告や、広島平和研究所で発行する単行本、ブックレット、紀要などを中心に研究成果を発表してきたが、最近、健康上の問題が生じたため、2019 年度の 1 年間、論文執筆は断念し、平和研のニューズレターへの小論の寄稿や、紀要『広島平和研究』の編集責任者としての任務に当たってきた。

1. 広島市立大学広島平和研究所編『平和への扉を開く』広島平和研究所ブックレット第 6 巻、2019、（第 4 章「核兵器禁止条約と日本の役割」を分担）。

2. 広島市立大学広島平和研究所編『アジアの平和と核——国際関係の中の核開発とガバナンス』共同通信社，2019，（第1章「広島・長崎への原爆投下が持つ今日的意味」を分担）。
3. 日本平和学会編『平和をめぐる 14 の論点——平和研究が問い続けること』法律文化社，2018，（論点11「核軍縮：被爆地の訴えは核軍縮を促進したか」を分担）。
4. 水本和実「核兵器の法的禁止で見た核軍縮の分水嶺——2016年の核をめぐる動向と論調」『広島平和記念資料館資料調査研究会 研究報告』14号，2019年2月、85-104頁。

【社会活動】

広島平和記念資料館の資料調査研究会、広島市の平和行政（「平和宣言」やジャーナリスト研修）、広島県の平和政策（「国際平和拠点ひろしま構想」、カンボジア支援活動）、広島平和文化センターの市民講座をはじめ、JICA 中国やカンボジアひろしまハウスなどの国際貢献・国際協力活動への参加や助言を行っている。また核軍縮問題でメディアからの取材や、記者の事前の準備のための相談・問い合わせ等があれば、できるだけ応じることにしている。こうした活動は引き続き継続する。

2019年度	広島県看護協会 認定看護管理者サードレベル教育課程 講師
2018年度、2019年度	広島市「平和宣言に関する懇談会」
2018年度、2019年度	広島市「国内ジャーナリスト研修『ヒロシマ講座』」講師
2018年度、2019年度	広島県・日本国際問題研究所「ひろしまレポート作成事業」研究委員
2018年度、2019年度	広島県看護協会 認定看護管理者セカンドレベル教育課程 講師
2018年8月	広島県「グローバル未来塾 in ひろしま」(高校生プログラム)講師
2016年10月-	学校法人広島女学院評議員会
2013年7月-2019年3月	広島平和記念資料館 展示説明文執筆会議
2010年5月-2019年3月	広島平和記念資料館 展示検討会議委員（副委員長）
2009年4月-	日本軍縮学会
2009年-	特定非営利活動法人 ひろしま・カンボジア市民交流会 理事
2000年-	日本平和学会
2000年-	日本国際連合学会
1998年-	広島平和記念資料館資料調査研究会 委員
1997年-	日本国際政治学会
1994年-	日本国際安全保障学会

附属施設

氏名	松本 良徳
職位	特任教授
研究分野	(該当なし)
研究キーワード	(該当なし)

国際交流推進センターでは、大学の国際化を推進するため、①海外学術交流協定大学（以下「協定大学」）との交流など国際交流、②協定大学への留学生の派遣や留学生の支援、③協定大学からの留学生の受入れ、生活支援、④海外短期派遣プログラムの実施、⑤海外の学生の短期受入れなどを行っている。

協定大学については、2017年度に慶北国立大学校人文大学（韓国）等の5大学、2018年度には、コンコルディア大学（カナダ）等の4大学と新たに協定を締結し、現在22の協定大学となっている。

【教育活動】

グローバル人材の育成を図るためには、学生にまず国際交流に関心を持ってもらう必要があることから海外に触れることのできる短期派遣プログラムを企画した。このプログラムは、主に海外渡航歴のない学生に対し、海外の学生との交流やホームステイなどを通じて異文化を体験し国際交流に関心を持つと同時に語学力の必要性を実感する機会を提供するもので、2015年度以降毎年、シンガポール、マレーシア、サンフランシスコに派遣してきた。これまで116名の学生が参加し、このうち33名の学生が長期留学や語学留学をするなど海外留学の動機づけとなっている。

また、2019年度は、学内での国際交流プログラムとして短期受入した学生との交流を企画・募集し108人の学生が応募・参加した。（5月シンガポール国立大学、7月国立台中科技大学、8月マレーシア科学大学、12月シンガポール国立大学、1月慶北国立大学校）このプログラムは、海外派遣することなく海外の学生と交流できる学生に提供するもので、短期派遣プログラムとともに、海外留学に繋がっていくよう内容を充実させていきたい。

【研究活動】

(該当なし)

【社会活動】

(該当なし)

氏名	國本 善平
職位	特任教授
研究分野	地域人材の育成
研究キーワード	地域志向教育、地域再生

広島市立大学が「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の採択校として事業を実施するため、2016年度から2019年度までその企画・運営・調整にあたってきた。2020年度からはCOC+の実績を踏まえ、地域志向教育カリキュラム等の推進に関する業務を担当し、地域に貢献する人材の育成に取り組む。

【教育活動】

「地域貢献特定プログラム」の地域志向科目を中心に講義を行っている。

2019年度	地域課題演習、ひろしま論、平和と人権 A
2018年度	地域課題演習、ひろしま論、平和と人権 A

【研究活動】

大学における地域志向教育の推移と今後のあり方について。大学の教育活動としてのアートプロジェクトの運用方法について。大学の学外教育活動の地域での受け皿環境について。若者による地域定着の実態と類型について。

【社会活動】

地域社会の要請に応え、これまでの知見を活かした講師活動を行っている。

2018年度実績 上智大学総合人間科学部学生へのヒロシマ学習講師、修学旅行生への平和学習講師

2019年度実績 修学旅行生への平和学習講師、県大・市大連携公開講座講師、広島県生協連合会ゼミナール講師

氏名	島筒 博章
職位	特任講師
研究分野	(該当なし)
研究キーワード	(該当なし)

社会連携センターの知的財産マネージャーとして、大学知財の創出（研究シーズの知財化）・管理・運用に係る業務を担当している。

情報関連の教職免許取得希望者他への夏季集中講義（知的財産権・15コマ）、新入生への情報活用基礎（知的財産権・3コマ）を担当している。

【教育活動】

夏季集中講義では、特許法、著作権法、意匠法、商標法、種苗法、不正競争防止法等について、その概要、留意事項等について講義している。

情報活用基礎の講義分担では、知的財産権の概要、情報化時代において重要な著作権の内容と侵害行為等への留意事項を中心に講義している。

2019年度	知的財産権、情報活用基礎（知的財産権）
2018年度	知的財産権、情報活用基礎（知的財産権）

【研究活動】

該当項目なし

【社会活動】

該当項目なし

氏名	三上 賢治
職位	特任講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	地域創造、アートプロジェクト

地域教育を軸に、学部間の連携や地域との協働による実践的な教育研究に取り組んでいる。

【教育活動】

地域課題演習をはじめとする地域志向教育を推進し、広島広域都市圏を中心とした「ひろしま」地域の人材育成に取り組んでいる。

2019年度	地域課題演習
2018年度	地域課題演習

【研究活動】

広島市立大学COC+事業の一環として4年間取り組んできた「COC+アートプロジェクト」の企画・運営を通じて、アート活動による地域の魅力作りをテーマに研究。特に、2019年度は特色研究「地域展開型アートプロジェクトの実践研究と教育プログラムの構築」において、広島県呉市豊町御手洗の重要伝統的建造物群保存地区の空き家を活用し、卒業生のアーティストや学生による地域と協働した展覧会及びアーティスト・イン・レジデンス事業の試験的運用を開始。完成した作品群は地域の新たな観光資源として活用するため、恒久的な展示を行っている。

1. COC+アートプロジェクト「広島ニュートラベル」企画・運営，2016年4月-2020年3月

【社会活動】

広島市立大学地域貢献事業発表会2019の事例発表「アート活動による地域の魅力づくり」
広島市中区まちづくり審議会の委員として中区のまちづくりに関わる。

2019年2月-2020年3月	広島市中区まちづくり審議会 委員
2018年8月	北広島町筏津芸術村「野菜染めWS」
2018年8月	三都半島アートプロジェクト地域交流プログラム
2018年7月	県立広島大学×広島市立大学連携公開講座2018ひろしま学を考える，県立広島大学、広島市立大学
2017年4月-2019年8月	広島市基町学区献血推進協議会 会長
2017年4月-2019年8月	広島市基町学区公衆衛生協議会 会長

氏名	山咲 博昭
職位	特任助教
研究分野	人的資源管理論、高等教育
研究キーワード	大学評価、IR、人的資源管理論、高等教育、SD、内部質保証

公立大学法人広島市立大学における内部質保証を推進する取組の一つである IR(Institutional Research) を担当しています。具体的には、2019 年度の着任以降、学事データや学生の学修活動、大学の教育活動、入学試験、キャリア形成、課外活動等の学生生活全般に係るデータを組織的に収集・分析の上、可視化し、エンrollment・マネジメントや内部質保証を推進するための実務担当者としての役割を担っています。

教育活動については、ピア・サポート活動を支援する担当教員の一人として携わっており、研究・社会活動については、大学における教育の質保証や高等教育経営をテーマとした調査研究を実施し、研究成果等を基に高等教育機関を中心に講演、研修等の講師を務めています。

【教育活動】

広島市立大学ピア・サポート活動（通称、「いちピア」）は、広島市立大学で行われている学生が学生を支援する活動（ピア・サポート）です。「学生間の架け橋になる存在に」といった活動目標を掲げ、お悩み相談投稿&掲示板（「りっすんポスト」）の設置、学生交流会の開催やサポーターの資質向上を目的としたピア・サポーター養成合宿等の活動を行っています。2019 年度は担当教員の一人として、ピア・サポーター養成合宿の講師や学生の各種活動の支援を務めました。

【研究活動】

研究活動においては、大学における教育の質保証や高等教育経営をテーマとした調査研究を実施しています。2019 年度は大学の質保証をテーマとして、日本の大学における内部質保証のシステムやそれらのシステムを推進する人材に着目した調査研究を行いました。その研究成果を大学行政管理学会や大学評価コンソーシアム等で研究発表を 4 件実施し、研究論文が 1 件、業界誌への論説が 2 件掲載されています。また、科学研究費補助金（若手研究）を獲得しています（2020 年度から 2 年間）。

この他、高等教育経営の観点から大学職員の人材育成をテーマにした調査研究を行っています。

1. 荒木俊博・山咲博昭，「研究ノート」内部質保証システムにおける外部評価の実態把握の試み—2018 年度大学基準協会受審大学の分析—，大学アドミニストレーション研究，No. 10，pp. 121-133，2020
2. 山咲博昭，「地域」と「市民」に関する指標の考察，文部科学教育通信，No. 477，pp. 28-29，2020
3. 山咲博昭，認証評価における共通データセットの構築の在り方，文部科学教育通信，No. 475，pp. 32-33，2020

4. 荒木俊博・山咲博昭, [事例報告] 第3期認証評価受審時における使用データとIRの役割—大学基準協会受審の2大学の事例から—, 情報誌「大学評価とIR」, No. 10, pp. 29-44, 2019
5. 研究発表, 今江秀和・西正博・山咲博昭・長山哲也, ピア・サポート活動における学生の成長支援—広島市立大学「いちピア」の立ち上げ期を事例に—, 第26回大学教育研究フォーラム, 2020年3月
6. 研究発表, 山咲博昭・荒木俊博, ステークホルダーの視認性を高める大学ホームページ構成の試案—UXの観点から—, 第26回大学教育研究フォーラム, 2020年3月
7. 研究発表, 山咲博昭・浜崎英子, いけばな療法士養成プログラムの検討, 日本いけばな療法学会第1回年次大会, 2020年2月
8. 研究発表, 山咲博昭・荒木俊博, 第3期認証評価受審大学から見る内部質保証システムの類型の試み, 大学行政管理学会第23回大会, 2019年9月
9. 研究発表, 川口理紗・江尻裕一・五木田廣開・堀佑二・松田優一・山咲博昭・涌井智子, 性的マイノリティの学生における支援策の考察—大学職員の理解度と当事者の本音から—, 大学行政管理学会第23回大会, 2019年9月
10. その他, 村山孝道・山咲博昭, 2040年の大学を担う人材育成の在り方—越境的学习によるSDプログラムの事例から—, 大学行政管理学会第23回大会, 2019年9月
11. その他, 村山孝道・山咲博昭, 2040年の大学職員に必要な「C」を考える, 大学行政管理学会第23回大会, 2019年9月
12. 研究発表, 荒木俊博, 山咲博昭, 質保証に資する為の第3期機関別認証評価の現地調査をどう考えるか, 大学評価コンソーシアム, 2019年8月
13. 研究発表, 山咲博昭, 立ち上げ期のIR組織における活動事例—広島市立大学における内部質保証・IRプロジェクトの取り組み—, 大学評価コンソーシアム, 2019年8月

【社会活動】

大学行政管理学会研究・研修委員会委員、日本いけばな療法学会理事として学会、研究会活動の活性化に努めています。また、大学の質保証、大学職員を対象とした人材育成（SD（Staff Development））、IR（Institutional Research）、リーダーシップ等をテーマにした学外の講演・研修等の講師を務めています。なお、2019年度は10件の講演・研修等の講師を務めました。

2019年10月-2019年12月	SDコーディネーターの養成
2019年2月-	日本いけばな療法学会, 理事
2011年12月-	大学行政管理学会, 研究・研修委員会委員
所属学会	大学行政管理学会、大学教育学会、日本教育工学会、経営行動科学学会、人材育成学会、日本ピア・サポート学会、日本いけばな療法学会、日本ソーシャル・イノベーション学会